

八咫鳥は勘違う（旧版）

マスクライダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

与する者には幸をもたらし、仇なす者には災いをもたらす。黒き翼のI Sを駆る少女、藤堂 黒乃は『八咫鳥』の二つ名で恐れられていた。

それは彼女の圧倒的な強さ故か、はたまた情け容赦ない戦い方故か。どちらにせよ彼女の通った道に残されるのは、鳥の啄む無残な骸のみ……。

……と、ここまでではあくまで他人の感想である。当人は八咫鳥なんて呼ばれている事は知らないうえに、争い事は苦手とする。

そもそも彼女の中身は彼で、彼は藤堂 黒乃に憑依転生してしまったのである。そう……彼は、徹底的に周囲から勘違いされ、本人も周囲に対して勘違いをしていた。

平和主義者で事なかれ主義。基本ヘタレで小市民。そして文句のつけようのない変態紳士の彼は、今日もISの世界で生きていく。

※この二次創作は、作者が下手の横好きで書いた勘違い小説です。

拙い表現が多々あると思われませんが、温かい目で見守って頂ければと……。

※こちらは加筆修正以前の旧版です。こちらの更新は停止しますが、新装版との変化を照らし合わせる為に残しておきます。なお、加筆修正の関係から一部新装版と話数のズレが生じていますが、あらかじめご了承ください。

目次

番外篇 サイドストーリー

キミを好きになったワケ | 1

番外篇 IFストーリー

もしも黒乃が喋っていたなら | 16

鷹と鳥は共に羽ばたく | 32

本篇

オリ主&専用機 設定集 | 50

第1話 | 57

第2話 | 73

第3話 | 87

第4話 | 107

第5話 | 124

第6話 | 141

第7話 | 159

第8話 | 173

第9話 | 189

第10話 | 209

第11話 | 231

第12話 | 250

第13話 | 264

第13・5話 | 283

第14話 | 295

第15話 | 313

第16話 | 328

第17話・表 | 344

第27話	第26話	第25話	第24話	第23話	第22話	第21話	第20話・裏	第20話・表	第19話・裏	第19話・表	第18話	第17話・裏
555	538	521	506	491	475	460	443	430	417	399	375	358

第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	第29話	第28話・裏	第28話・表
781	765	749	734	716	701	683	667	650	626	607	594	575

第 4 8 話	第 4 7 話	第 4 6 話 ・ 裏	第 4 6 話 ・ 表	第 4 5 話	第 4 4 話	第 4 3 話	第 4 2 話	第 4 1 話	第 4 0 話
959	943	923	904	889	872	855	837	822	804

番外篇 サイドストーリー

キミを好きになったワケ

俗に言うゴールデンタイムの五反田家リビングでは、赤髪の兄妹がボケーツとした様子でテレビの画面を眺めていた。画面の中では、勢いだけで流行ったようなお笑い芸人が必死に持ちネタを披露している。この兄妹からすればどうでも良いようなネタなのか、微塵も頬がっつり上がりはしない。

「お兄さま。結局いつお姉の事好きになったの？」

「……なんで蘭にんなこと話さないとなんねえんだよ。」

「妹としては兄の恋愛事情が気になるもんなんです。」

「別にいいだろ、いつだってよ。始まる前から終わってる恋なんだから。」

藪から棒に蘭がそう質問すると、弾は少し不機嫌な声色で返した。お互いに見向きもしないでこんな会話を繰り返す辺り、どうにも仲が良いのか悪いのか解からない兄妹である。しかし、どちらにせよ弾に答える気なんてさらさらなかった。だが……やはり蘭の方が一枚上手のようだ。

「ふ〜ん……う〜じや、この間お姉のブラジャー見てたの言いふらそつか？ 鈴さんあたり

に。」

「なっ……てめっ!?汚ねーぞ蘭!」

「身から出た錆でしょ?話してくれたらチャラにしてあげるから。」

「ぐ……ぐぬぬ……!」

本人ではなく鈴音に言うと言ふあたり、蘭は兄の事を良く解っている。黒乃に話したところで……許される事なんて一目瞭然だ。しかし、あの鈴音がそんな事を聞かされて黙っていらられるはずもない……。弾は机を叩いて抗議するが、そう言われては立つ瀬がなかった。

「だあくくっそ……!なんで暇つぶしにんなこつ恥ずかしい話をせにやならんのだ!」

「アハハ、ばれた?」

「良いか!?断つとくがこればかりは誰にも言いふらすなよ!」

「大丈夫だって、妹を信じなさい。」

観念するしかないと思つた弾だが、やはり納得はいかないようだ。男にしては長い赤髪を豪快に掻き筆りながら不満を漏らした。必死の形相で蘭に詰め寄ると、本当に仕方がないから話すという旨を伝える。いまいち信用ならないような返答をされたせいとか、弾は調子の良い奴……なんて呟く。すると少し間を開けて、弾は語りだした。

「あく……ホラ、俺が中一ん時の冬休み前くらいに風邪ひいた時あったろ。」

「そう……だっけ。ん〜……あんまり覚えてないかも。」
「とにかくあつたんだ。まあ……そんな時だな……。」



(だっる……。)

寒さも厳しいとある日の日曜日。弾は日曜日だというのに、体調を崩して寝込んでしまっていた。金曜日あたりに少し違和感を感じていたものの、油断が祟ってこの有様である。冬休みに入り、貴重な連休を潰すのよりかはマシか……なんて思いつつも、気だるさのせいか目が覚めてから一歩もベッドから移動してはいなかった。

『ピーンポーン!』

(はあ……マジかよ……。)

そんな折に、家を訪ねる者が居た。インターホンが鳴ったという事は、食堂の方では無く五反田家に用事があるという事だ。最悪なのが……現在は家に弾の他に誰も居ないという現状。食堂は定休日で、厳はたまの休みを満喫している、恐らくパチンコか麻雀で。両親と蘭は揃って何処かへと出かけてしまった。息子が風邪なのに出かけるかね普通……なんて思いながら弾は立ち上がった。

家が食堂な都合上、大事な客である可能性も捨てきれない。スルーも考えた弾だが、根が真面目なだけにそれを選択させなかった。重い足取りで何とか玄関まで辿り着くと、マスクを装着して戸を開く。するとそこに居たのは、弾からすれば予想外の人物だった。

「どなた様……つて、おう……黒乃か……。」

(あり……弾くん風邪ー？良かったじゃん、馬鹿じゃなかったらしいじゃん……ハッハッハ。)

これが一夏なら即帰れと言っていたであろう弾だったが、身体が辛い状況では黒乃は良い薬となるらしい。一方の黒乃は、誰にも聞こえないのに軽い冗談を飛ばして笑う。馬鹿は風邪を引かないという迷信だが、この馬鹿は本当に風邪を引かなさそうで怖い。「ゲーム……この前貸した奴か。そか、わざわざ返しに来てくれて……ゴホッゴホッ！」(わっ……あんま大丈夫じゃ無さそうだねえ……。お家の人……誰も居ないんだ。よしっ、それならオジサンが看病したげるよ！)

「ちよっ、黒乃……？」

黒乃が手に携えている物を見て、どういう用事で訪ねて来たのか察した。それは弾が数か月前に貸したゲームで、その返却に黒乃はやって来た。どちらにせよ暇で遊ぶついでに返しに来たので、時間は有り余っている。そうと決まればと、黒乃は弾を回れ右

させて優しく部屋まで誘導させた。

「なんか悪いいな……。ほら、風邪移っちまうとだし……。今日は大人しく帰るときな。」
（いや、馬鹿は風邪ひかないから大丈夫。ん〜……。見た限り、昨日は風呂に入ってなさそうだな。だったら……。）

「おい……。黒乃?」

自室に戻して貰った弾は、あくまで黒乃を気遣って帰る事を勧めた。しかしだ……。黒乃は1度決めたらなかなか曲げない。弾が余りの辛さに風呂へ入っていい事を察すると、静かに階段を降り……。しばらくすると戻って来た。その手には、ホカホカのタオルが握られていた。

（お湯に浸して絞ったタオル! んじゃあ身体拭くからね〜。）

「いや黒乃……。お前さっきから何やって……。うあ!？」

黒乃は強引に弾の服を脱がせようとするが、いきなり過ぎて抵抗される。普通にやっても男以上の怪力の持ち主だ……。今の弾の抵抗など可愛い物。上半身を裸にさせると、タオルが冷たくならない内に弾の身体を拭き始める。これでようやく現状を理解した弾だが……?」

（え……。何これ……。?もしかして看病イベント的な!?!、いやいやいや……。黒乃だぞ?）
校内の男の大半を虜にしてる黒乃だぞ……。?こんな美味しい事あって良いのか……。!?!）

(うわあ……結構汗かっちゃってるな……。コレは服を変えた方が良いね。)

至ってマイペースな黒乃に対して、弾の頭は軽くパニックの状態に陥っていた。そう……弾はとてつもなく美味しい。黒乃に看病されるなど、可能性があるとすれば一夏くらいのものだ。それがこうして看病されているのだから、奇跡にも近いと言っている。弾の身体の隅々を拭き終えた黒乃は、乾いたタオルで水滴を拭き取る。そして室内のクローゼットを物色すると、寝巻きらしい服を取り出して弾へと渡した。あまりに至れり尽くせりの始末に、申し訳なさを感じはするが……幸福感の方が勝っているらしい。弾は悟られぬよう取り繕った。

(時間帯的に……そろそろお昼か。じゃあ弾くん、少し寝ててな。)

「お、おう……ありがとう。」

ベッドへ横になるのを手伝えば、黒乃は再度階段を下りていく。弾の身体を拭いたタオルと着ていた服を洗濯機の中へ突っ込むと、五反田家リビングの台所へと立つ。冷蔵庫庫に向かって手を合わせ、スミマセン……勝手に覗きますと謝る。そして、冷蔵庫の扉を開いて中を覗く。

(お粥……が良いよな、多分だけど。でもただ白米を炊くだけじゃクオリティが……。ん……よしっ、それ・じゃ・あ……)

黒乃が選んだ材料は……人参、大根、ネギなど具沢山。長い事一夏と半2人暮らしの

生活をしてきたおかげか、地味に……どころか相当に料理の腕は立つ。食材を見ただけで完成品が思いつくほどだ。黒乃は残り必要そうな調味料を取り出すと、早速料理を開始した。

(野菜は……食べやすいように小さく切ろうか。)

人参は粗みじん切り、大根は揃りおろし、ネギは小さめの輪切りに手早く処理する。それぞれ異なる食感を楽しむ為に変化をつけたのだろう。トントんと、包丁とまな板のかち合う音がしばらく響く。全て切り終えた黒乃は、これまたそこかしこを物色し、1人前用の土鍋を発見した。

(いつまでもアツアツで食べられるだろうし……。)

食べ手に対する気遣いを忘れないあたり、黒乃らしいといえばらしい。そのらしさが多くの男を虜にしているのだが……。土鍋に適量の水を入れ、切った人参も突っ込んで火にかける。沸騰するまで待つ必要があるのだが、随分と黒乃は暇そうだ。小さな欠伸が漏れる頃、ようやく土鍋の水がグツグツと音を立てる。

(ようし、味付けだね。白だしと……そうだ！アクセントに生姜も揃りおろして入れとこ〜と。)

ふとした思いつきが良いアイデアなら即採用、黒乃の料理におけるスタイルだ。始めたばかりの頃はそれで失敗する事もあったが、最近の良い方へ転ぶ傾向が強い。沸騰し

た土鍋の中に調味料を入れると、軽く混ぜてオタマで一掬いして口へ運ぶ。すると黒乃は、心の中でイマイチな顔を浮かべる。

(不味くはない……むしろ美味しいけど、なんか一味足りないな……。……最後に溶き卵と醤油でも入れてみよ。)

再び浮かんだアイデアにウンウンと首を頷かせると、米やら切った野菜やらを入れて一煮立ちさせる。ちょうどいい具合に米がふやけると、先ほど思いついた通りに溶き卵を投入。固まらないうちに醤油を回しかけると、もう一度味見を試みる。今度は納得のいく出来らしい。

(うん、美味しいーフッフ……我ながら完璧。)

なんやかんやで料理を楽しんでいる様子の黒乃は、上機嫌で土鍋を盆にのせた。時計を見てみると、時刻は計算通りに昼時だ。後片付けは弾に料理を振舞ってからにしようとして、スプーンとスポードリンクを片手に階段を登る。そして静かくにドアを開けた。

「……なんかいい匂い。黒乃……もしかして、飯作ってくれたのか!」

(どうえい!?!テンション高いよ、落ち着こう……?身体に毒だし。ほら、とりあえず水分補給。)

「お、おう……サンキュー。」

黒乃が手料理を振舞ってくれると理解した瞬間、弾は歓喜のあまりに声を張り上げ

た。あまりに突然の事だったので、黒乃はビクリと身体を反応させた。スポーツドリ
ンクをズイッと差し出すと、部屋の適当な椅子を引っ張って腰掛ける。弾がペットボトル
のキャップを閉めたのを確認すると、スプーンに粥を掬って口元へと運ぶ。

(はい、あ〜ん。)

「……………」

(え、……………何その反応……………もしかして嫌だった?)

「わーっ!? 違う違う! す、少し驚いただけだから……………その……………た、食べさせてくれると有
難いかな……………って……………」

やはり目の前で発生している奇跡に実感が湧かないようで、弾は呆然と粥を眺める事
しかできないでいた。それをあ〜ん拒否と捉えたらしい黒乃は、しょんぼりしながらス
プーンを下げる。弾が自分から食べさせてくれと頼んできた事から、それなら良いんだ
けどと気を取り直して……………。

(どうかな? 自信作なだけ……………。)

「う、美味い……………! 3種の野菜は違う食感を楽しめ、白だしベースの汁にアクセントに生
姜! 更には全体のバランスを纏めるために卵閉じにしてトドメに醤油ときたか……………!?!」

(……………グルメ番組かな?)

どういふふうに粥を作ったのかを見抜かれたのが意外なのか、黒乃は目をパチクリさ

せながら弾を見た。とにかく、口に合ったのならなんだって良い。黒乃は弾の様子を伺いながら、小気味好く粥を食べさせる。しかし、弾は終始照れっぱなしなようだったが……。

「黒乃、作って貰つていてなんなんだが……もうこれ以上は食えなさそうだ。」

（そう？じゃあ残りは俺がもろうよ。）

「ぶふあ!？く、黒乃……それはか、かかかか間接キ……。」

（大丈夫大丈夫、俺ってホントに頑丈だからさ。）

余った粥をおもむろに食べ進めると、弾は盛大に吹き出した。何故なら、それはさっきまで弾が使っていたスプーンだからだ。黒乃は風邪がうつる指摘したいのだろうと考えていたが、そんな事は弾の頭からはすっぱ抜けている。単に……黒乃と間接キスをしている事で頭がいっぱいなだけだから。

（御馳走さん！じゃ、ちよつと片づけてくるから。）

「あ、ああ……解かった。」

ほんの少し残っていた粥は、速攻で黒乃の腹へと収まる。両手を合わせて会釈をした後、空になった土鍋やらを指差した。食器を片づけるといふ旨が伝わったのか、弾は了承の返事をする。降りたり昇ったり忙しい事だが、してもらっている手前で何も言えない。

(本当……夢なんじゃねえのか……?)

ベッドに倒れ込んだ弾は、額に手を当てながらそんな事を思った。学校の裏マドンナと言っても過言では無い黒乃に、甲斐甲斐しく世話をされている。この事実がどうにも信じがたい。身体を拭いて貰い、手料理を作ってもらい、あまつさえ『あくん』ときた。(これじゃまるで……。)

まるで黒乃が、俺の彼女みたいじゃないか。……思わずそんな考えが浮かんだ弾だったが、すぐさまそれを否定した。多分だが黒乃は、誰にだつてこうする……と。それはある種で正解だが、黒乃と言えど箸にも棒にもかからないような輩にここまでの事はない。もう少し自分に自信を持って良い物だと思うが。

(戻ったよ)。……ありや、てつきり寝てると思つてただけどなあ。弾くん、俺が居るからつて相手しなくたっていいんだよ?)

「おう終わったか? なんもかもやらせちまつて——」
(ほら、そうやって俺に氣い遣う。良いから取りあえず寝よつか。オジサン今日は一緒に居てあげるからさ。)

「……黒乃。」

先ほどまで座っていた椅子に腰かけると、黒乃は片方の手で弾の手を取り、片方の手で優しく弾の頭を撫でた。瞬間、自らの顔が熱くなるのを弾は感じる。もちろん風邪の

それとは違う、どこか甘く、切ないような熱が……心臓の鼓動と共に全身へ走った。
(黒乃の手……あつたけえ……。)

これもまた触覚で温かいと感じているのでなく、弾は心でそう感じていた。ずっと握っていたいような、癖になるような温もりだ。足りない、もつとだ。そう思ってしまった弾は、無意識の内に手に力を籠めてしまう。一瞬だけ強張った黒乃の手だったが、後は……同じように強く握り返す。

(ああ……畜生。なんだよ、こんなの……こんなの……好きになつちまうに決まつてんじゃねえか……。)

決して黒乃を何とも思っていないなかつたわけでは無かつた。しかし、黒乃には一夏が居た。だからこそ、黒乃だけは好きになつてはいけないと……弾はそう心に決めていたのだ。だが、風邪で心身共に弱つてるところへ、こうも男心をくすぐられるような出来事を連発されてはどうしようもない。

黒乃の放つ香り、かすかに聞こえる息遣い、黒乃の柔らかい手……。今の弾にとつては、何もかもが愛おしくて堪らなかつた、独占したくて堪らなかつた、自分だけの黒乃であつてほしいと思つていた。考えれば考えるほど、今まで友人として接してきた黒乃が簡単に崩壊してしまう。

今までだつて、それなりに世話にはなつてきた。それら全てが、一気に特別な意味を

孕んでいるような気さえしてくる。しかし……やはり弾は何処までいつても五反田弾だった。この男、黒乃に恋心を抱いた途端に……黒乃の為に身を退く覚悟をし始めているのだから。

（黒乃には……アイツが居るもんな。だから俺は……。でも黒乃……今だけは、今だけは良い……俺の黒乃で居てくれ……。）

（いたたたた……。ま、まあうん……病気の時つて不安だよ……解かる解かる……。）
弾は今……いや、今だけの幸せを噛み締めるかのように、黒乃の手を更に力強く握った。普通に痛いせいで内心顔をしかめる黒乃だったが、今回ばかりは仕方がないとされるがままでいた。その事が、弾を自分と言う沼に深く絡め取っているという事にも気が付かずに……。



「……とまあこんな感じか。アレだ……簡単に言うとう母性だよ母性。よほど特殊な性癖じゃなけりや黒乃のアレには抗えねえ。」

「お姉にそんなのされたらねえ。私でも好きになっちゃつてるかも。」

弾は髪色と同じくらいに顔を赤くしながら、黒乃の母性に惹かれたのだと語る。最後

の方はヤケクソだったのか、かなりつらつらと思っていたことが口に出てきた。母性……。女尊男卑の世の中である以上は、それを持ち合わせている女性は貴重だろう。もつとも、黒乃の場合はそんな気はさらさらないのだが。

「でも……意外とちゃんとした理由があつたんだ。なんか安心したよ。」

「俺が単に黒乃を容姿やスタイルで評価してるとでも？ 数馬じやあるまいし……。」

「今の数馬さんとかに知れたら……。」

「ああ、間違いなく俺はお陀仏になる。だからこれだけは黙つてろつたんだ。」

今の話かもし御手洗 数馬に知られたとすれば、話はあつという間に黒乃を好きだつた勢に広がり……弾の明日は消え失せるだろう。自分の中で留めておきたい思い出と言うのもあるが、他に知られたくない理由はそこでもあつたりする。思わず弾は深い溜息を吐いた。

「で……もう良いか？ これ以上兄を苛めんな。」

「そもそも妹に苛められる兄つてどうなの。」

「うるせえ……そこは言うな。はあ、何か疲れた……。風呂入ってくる。」

「あ、ねえ……お兄。」

「なんだよ？」

「……ごめん、やっぱり何でもない。」

自身の身の上話をしたせいで疲れたのか、弾は少しゲツソリとした顔つきで風呂に入ると脱衣所へと向かう。そんな兄の背を引き留めた妹は、何か言いかけて……止めた。兄はなんじやそりやとでも言いたげな表情を見せると、今度こそ足を止める事無く扉の向こうへ消えた。

「……お兄が思ってる以上にチャンスってあると思うよ。……なんて言えないよね。」

妹が言おうとしていたのはそれだった。これが数馬ならば100%脈ナシと妹は判断するはず。だが、なんとなく……なんとなくではあるが、黒乃は兄に対して気があるのでは？……と思わせる行動を見かけた気がするのだ。しかし、そんな無責任な事を妹は言えなかった。

兄が……想像以上に黒乃に焦がれていたから。好きな理由なんて、しょうもない物だと思っただけに……振られる覚悟が出来ている兄に何も言えない。今度は妹が深い溜息を吐く。自分の恋は勿論の事……兄の恋もどうにかしてあげたいと悩む……なんだかんだで兄想いな妹であった。

番外篇 I F ストーリー

もしも黒乃が喋っていたなら

日は沈みまた昇る。今日も今日とて、I S 学園に朝がやって来た。人それぞれ個人差はあれど、生徒達はどこか慌ただしい様子でそれぞれのすべきことをこなす。例えば朝食など……。大和撫子な侍ガールこと、篠ノ之 箒もまたその一人である。いざ箒が食堂に向かおうと廊下を歩いていると、その背後に忍び寄る影が……。

「グツモーニン！」

「ひいつ!? こ、この……毎朝のように胸を揉みながら挨拶するのは止せと言っている！」

「え、良いじゃん、減るもんじゃないんだしさあ。」

「だ、だいたい……大きさはお前も同じような物だろうが！」

「自分の揉んだって楽しいはずがないでしょう? と、いうわけで……ここか? ここがええのんか!？」

まるでニンジャの如く箒の背後に接近し、後ろから豊満な胸を鷲掴みにする者が。どこからどう見たって完璧美少女なのに、色々と残念なことに定評がある。そんな少女の名は、藤堂 黒乃。女性に対するセクハラにかけては命を賭けていると言っても過言で

はない。

その要因には、実のところ中身がオッサンという事もあったりするのだが……ここでは割愛しておこう。胸を触られ……と言うよりは割と本気で揉まれてる筈は、妙に手つきがいやらしい為頬を紅くしながら抵抗を見せた。すると一瞬の間に黒乃を振りほどくと、見事な合気で投げ飛ばす。

「ええい……致し方なし。成敗！」

「うええええい!?!」

黒乃はかなり豪快に投げ飛ばされた。廊下に到達したのに勢いは死なず、しばらくズザザーっとスライド移動した。やり過ぎたかと思ってしまう筈だが、そんな考えは次の瞬間に消え失せる。何故ならば、黒乃が恍惚の表情を浮かべて身をくねらせているから。

「おおおふ……キタコレ！背中打つてむせる感覚……堪らん、ナイスブン投げモツピー！」

「そうか、そうだったな……黒乃にとっては褒美にしかならんのだった。それと、その呼び方は止めろと言っている。」

この少女……というよりオッサンは、生粋のマゾヒストである。美少女及び美女から受ける物理的痛み、精神的痛みは総じて悦びへと変える性質をもつ。黒乃と友人関係が

保っている自分を不思議に思いながら、箒は頭が痛そうな仕草を見せる。

「朝っぱらからなにやっつてんだよ……クロ。」

「おう、お早うイッチー！今しがたノルマ達成したとこ。イエーイ。」

「はいはい、イエーイ……。」

痛みと言う名の快感……その余韻に黒乃が浸っていると、覗き込むようにして難しい表情を見せる男子が一人。この学園での唯一の男子、織斑 一夏だ。家族同然である一夏にとっては、妹分ないし姉貴分の奇行が悩みの種らしい。しかし、半ばあきらめかけているのか、倒れっぱなしの黒乃が求めたハイタッチに答えた。

「ってかさイッチー。クロって呼ぶの犬とか猫っぽいから止めてって言ってるじゃん。」

「クロこそ、俺をイッチーって呼ぶのとか箒をモツピーって呼ぶの止めないだろ。だからお互い様だ、なあ？モツピー。」

「お前はケンカを売ってるのか!？」

ハイタッチの後に一夏がさりげなく手を差し出すと、黒乃はその手を取って引き起こしてもらう。立ち上がりながら長年言い続けた抗議を試してみると、お互い様だと言われて反論の余地がない。黒乃がぐぬぬと齒噛みしていると、一夏が箒をモツピーと呼んだ事でクスツと笑ってしまう。

「笑い事ではない！近頃は他クラスまで広まっているんだぞ……どうしてくれる!？」

「良いんじゃないのか、そのくらいで。箒の場合は近寄りた過ぎるんだよ。」

「フフフ、何を隠そう……モツピーに親しみをもってもらう為の作せ——」

「はい、ダウト。」

「てへへ、バレちった!」

箒はズビシと黒乃を指差しながら怒鳴るが、一夏は親近感が沸いて良いと言う。すかさず黒乃が妙に格好をつけながら作戦だと主張しようとするが、言い切る前に嘘だと指摘されてしまった。認めるのも何か負けた気分になるのか、黒乃は舌を出しながらテヘッとおどけてみせる。

「フンツ……付き合つてられん。」

「とは言いつつ最後まで付き合つてくれるモツピーつてばマジツンデレ。」

「クロ、いい加減にしとかないと俺は知らないからな。」

それまで足を止めていた一同だったが、箒がそっぽを向きながら歩き出す。黒乃の態度に機嫌が悪くなったのではなく、一夏と黒乃の息の合ったやり取りを見たせいだろう。そんな事を考えもしない2人は、相も変わらずな様子で箒の後を追いかけた。

途中に一夏にこれ以上は手助けしないとされた黒乃は、至って普通な態度で世間話を始めた。そこでようやく箒の気分も落ち着いたのか、原初の幼馴染組は和やかムードで廊下を歩く。このまま調子よく食堂へ……とはいかなかった。黒乃が何かに反応を

示して歩を止めたのだ。

「これは……セシリーの尻！」

「……なんだって？」

「前方数メートル先にセシリーの尻の反応を感知！尻、撫でまわさずにはいられない！」

「一夏、時々思うのだが……。」

「思っても何も言わないでくれ、頼むから……。」

目視はできない距離だと言うのに、確かに廊下の先にはセシリアの桃尻があった。どういう原理でそれを感知したのかは知らないが、黒乃はダツシユでセシリアの尻へと迫る。そんな残念美少女の幼馴染を前にして、2人はやはり頭が痛そうだ。家族同然の一夏からすればなおの事らしい。

（セシリーの尻、セシリーの尻、セシリーの尻！）

「藤堂おとおお！」

「うおおおつ、ビックリした!?!何さちー姉！」

「何さじゃないこの馬鹿！朝から嫌な予感がするかと思つたらやはりお前か！あと、織

斑先生だ！」

スパアン！

「ありがとうございます！」

猛然とセシリアの尻目がけて走っていると、後方から鬼の形相で千冬がやって来た。驚きから思わず足を止めると、向こうも向こうで黒乃の奇行に対してセンサーが働くようだ。憤りからか思わず出席簿で黒乃の頬をひっぱたくが、感謝をされて自らの過ちに気が付いた。

「はあ……お前と言う奴は、いったいいつから道を違えた……。」

「違えた……？ 違えてなんかいやしない！ 私にとつてセクハラとは……生命維持活動に等しい！」

「最低な事を堂々と言うな馬鹿が……。」

幼いころから黒乃の保護者をしてきた千冬の言葉には、どこで教育の仕方を間違えたのか……と言う意味も込められていた。しかし、黒乃はあくまで必要な事だと言いつ張る。それに対してゴミを見るような目、かつドスの効いた声色だったせいか……黒乃は息を荒げて身を震わす。

「悦ぶな！ この変態めが！」

「アザース！」

「褒めてない！ なんでまた少し照れながら感謝するんだ貴様はあああつ！」

「放つておいて良いのか？」

「放つとけ放つとけ。どうせ朝ご飯食べ損ねたつて半ペソかくのがオチだろうから。」

天然で練り広げられる2人の漫才を余所目に、追いついた一夏と箒は横を通り過ぎていく。俺は黒乃の事を良く解ってます。そんなニュアンスの発言を一夏がするせい、箒は少しだけムツとした様子だ。そして、だんだんと離れていく黒乃の姿を見た一夏は思う。

(どうして俺は、あんなの好きになっただろ……。)



「朝ご飯食べ損ねた……。」

「やっぱりな。」

ほら見る、やっぱり想像通りだ。俺達と少し遅れて教室に入ったとするなら、クロはずっと千冬姉と漫才をしていたんだろう。そしてホームルームが終わるや否や、こうしてメソメソしながら机に突っ伏す。今日は昼までに実戦訓練があるし、何も腹に入っていないのは力が出ないはず。

「やっぱりって……オチが読めてたなら止めてよイチー。」

「クロの自業自得。俺はいつもそう言ってるぞ?クロが反省しないのがわるい。」

「……クロって呼ばんといて。」

「露骨に話をそらすなよ。」

俺に向かつて、クロは可愛らしく頬を膨らませながらブーブーと文句をたれた。残念ながら、暴走特急のストッパー的役割を果たしている俺の方が強い。至極真つ当な正論をぶつけると、反論の余地がないのは自覚があるのか目を逸らしながら話題を変えてきた。もはや何100回と繰り返してきたやりとりだ。

「犬っぽくて嫌って言うてるけど、もう犬だろ。俺の言う事はキチンと聞くし首輪してるし。」

「チョーカーって言いなさい。なんか危ないから。」

「……クロ、お手。」

「ワンワン！」

「……おかわり。」

「ワンワン！」

なんとというか、相変わらずクロはノリの良い事だ。犬であるというのを否定した直後にこれだ。俺がお手と掌を見せれば、瞬時に右手を乗せる。すかさず反対の掌を見せれば、同じようにして反対の手を乗せてきた。あまりの可愛さのせいか、少し硬直してしまふ。可愛い。なんだこの可愛い生物は。

「……自分でやらせという黙らんでよ!？」

「あ、ああ……悪い。」

「つたく、優しい私に感謝しなよ……イッチー？これがモツピーならぶつ飛ばされてるかんね。」

俺が黙つたのが不服なのか、手をバツと退けながらクロはそう言う。これは確かに俺が悪かつたろう。素直に謝ると、クロはよほど恥ずかしいかつたのか頬を紅くしながら呟く。まあ……籌ないしその他もろもろなら確実に怒られているはず。そんな事よりは、やはりクロが俺をイッチーと呼ぶのが気になった。

「何……？そんなにイッチーって呼ばれんの嫌ですかい。」

「……俺は、クロにちゃんと名前と呼ばれたいんだ。ずつと昔からな。」

「そ、そうなん？それならそれで言ってくれば良いのに……その、なんかゴメン。」

意を決して俺がそう告げると、クロはいきなり慌てだした。思いやりのある奴だから、多分だけ俺が昔から嫌がっていたとでも思ったのだろう。普通ならここでフォローを入れるのだろうが、クロがこんなのは珍しい。……俺の中の悪魔が囁く。クロに意地悪してやれつてな。

「俺がお前をなんでクロって呼ぶと思う？」

「え……なんでだろ。見当つかないや。」

「仕返しだよ、仕返し。俺の事をイッチーって呼ぶからだ。」

「マジでそんなに嫌だった!? あく……あの、そのく……。」

俺が割と真剣な顔つきでそう言つてやればあら不思議。クロは更に本気で信じ込む。アホの子可愛いとかポンコツ可愛いとか言う奴なのだろうか。オロオロとして見ていられない感じがとてつもなく可愛い。さて、これ以上は可哀想だからもうそろそろ止めにしておいてやろう。

「冗談だよ、クロ。別に呼びたければ好きに——」

「は? 意味解らん事言うなよ。いきなりそんな嘘ついて。」

「いや、別に俺は本気で——」

「言つてたよね? 本気で。私がキミの嘘を見抜けないと思うかね。何年家族やってると思つてんの。」

……確かに意地悪だけのつもりではなかった。できれば、クロには名前で呼んでほしい。そんな思いが膨れ上がつて一連の流れが出来たわけだが……。クロは卑怯だ。時々そうやって、キッチンと俺がどういうつもりなのかを見透かす。その割に、核心的な部分は変な受け取り方をしやがって。

「もし本当に嘘じゃないつてんなら、私の目を見ながら言つてみな?」

「……………」

「ほら、目えそらした。」

「ち、違う！顔が近いんだよ！」

「あ、マジか……。でも照れなくても良いのに。」

椅子に座ったまま話していたが、クロは腰を浮かせて俺の肩を掴みながら目線を合わせる。クロの瞳は、いつ見ても吸い込まれそうな黒色で……。照れからかふいつと顔を横に向けてしまうと、クロには嘘を見抜かれてバツが悪いからだと思われた。その後には照れるなんて言うが……。無理を言うんじゃないよ。

「と・に・か・く。名前をちゃんと呼ばれたいってのは本心でしょう？」

「……ああ、まあな。」

「じゃ、これからは一夏って呼ぶよ。で、今までゴメン。私は一夏の気持ちなんて考えた事なかった……。」

「謝るなよ。単に……。俺のワガママなんだから。」

黒乃の口から『いちか』と発音されるのは随分と久しぶりだ。ちゃんと呼ばれた試しがないだけに、俺は心躍る気持ちになっている。しかし、すぐさま黒乃に謝られてハツとなってしまう。別に……。黒乃が謝る事じゃないんだ。俺が……。もつと素直でいられば、何の問題もなかったはずだから。

「……何悩んでんのか知らないけどさ、考えるだけ無駄だと思うよ？だってバカじゃん。」

「黒乃だけには言われたくない！」

「あ？ああ……違う違う。バカつつつても貶してるわけじゃ無くてだね、俺の馬鹿とはまたバクトルが違うっていうかなんというか……。」

俺が難しい顔をしていたせいとか、バカなんだから悩むだけ無駄だと言ってきた。確かに俺はバカだ……そこは認めよう。しかし、俺の中では黒乃に言われたくない台詞ナンバーワンである。だけど、どうやら黒乃は単純に俺をバカだから悩むなと元気づけようとしたわけじゃないらしい。

「ほら、欠点だつて裏を返せば美点だと思っし……。一夏のバカさつてのは特にさ。」

「どういう意味だよ？」

「愚直で真つ直ぐでひたむきに前へ……みたいな姿勢かな。それ、私はすげえ事だつて思うけどね。だつて間違いなく私にはそんな生き方出来ないもん。だからなんつーの？突つ走つてる一夏の背中見てるとさあ……なんか安心する。ああ……今日も前に居てくれるんだなつて。」

「……………」

これも……卑怯なんだよ。黒乃は何も考えていないようで、時たまだが賢い発言が飛び出てくる。何が卑怯つて、他人を褒める際には高確率でこんな感じだ。自分の事を良く見てくれているんだなつて、そういう気にさせられてしまう……。何の恥ずかしげも

なく言うからまた卑怯だ。

「そんな一夏を見て、私も頑張らないとなく……なんて思うときだってあるんだよ？だからさ、背中丸めたり後ろ気にしながら突っ走るのは止めよう？下手すると転んじやうから。」

「……俺にだって悩みたいときくらいあるつての。」

「ん〜……それも言えてる。あ、じゃあさ……一夏の背中は私が見張るよ。んでもって、転んじやうしたら助け起こしてあげる。もし立ち止まっちゃやうような事があるんなら……私が背中を押してあげる。」

（……そうか、簡単な事だったな。）

何で俺がこんなの好きになったかって、こういうところがそうなんだ。黒乃はいつでも俺の隣に居てくれて、こうやって欲しい言葉をくれる。こうやって手放しに……愛を与えてくれる。黒乃の場合は深く考えても無く出てくる言葉だろう。でも、だからこそ……そこには表裏なんて無く、純度100%本心からの言葉つて証。

俺にとってそれが、どれだけ救いになってるかも知らないで……。違うんだよ黒乃。もし仮に俺が自分の道突っ走っているのだとして、それは……意識しなくたってお前が居てくれたからなんだ。お前が居るから頑張れる。お前が居るから前に進める。お前が居るから……笑っていられる。

けど、黒乃が自分の口からそう言ったって事は……これからはより一層そうなると思っても良い。それは嬉しい限りだが、このままではダメだ。黒乃がそうしてくれたように、俺も黒乃を支えたい。だから……いずれか一方が引つ張ったり背中を推したりでなく……俺は、黒乃と一緒に歩幅で、黒乃の隣を歩いていきたい。

「じゃあ、悩むの止めるな。」

「おう、そうしなさい。時間の浪費でしかないよ〜っと。」

「悩むの止めるから……言うな。黒乃、好きだぞ。」

「うん……うん、私も一夏の事好きだよ？何当たり前の事言ってるのさ。というか、そんなんで悩んでたんだ。」

……これはアレだ、恐らく家族として受け取られているパターンの奴や。なんだこの……なんだこのあつげらんとした様子は、凄い腹立つ。いや……確かにサラツと言った俺も悪かったかも知れん。だが、もう少し何かあっても良いんじゃないかなろうか。……この後の黒乃の台詞は——

「なんで私が一夏の事嫌いになると思ったかが不思議でならんよ。安心しなつて、これからも私はずっと一夏のお姉ちゃん兼、妹兼、幼馴染だからさ！」

「やっぱりな……。違う……そうじゃないんだよ……。」

「あり、悩まないんじゃないのかな？」

悩みの種はお前だよ、お前。なんか……氣力を削がれた気分だ。何かやる気が出て来ない。はあ……もつと時と場所を選んでから、再度想いを告げる事にしよう。だが、黒乃の場合はそれでも伝わらなさそうで怖い。いや……いつしか必ず黒乃と添い遂げてやる……！

「というか、黒乃つてホントにたまにまともな事を言うよな。なんか同い年な気がしない時がある。」

「ああ、だって私は精神年齢だけで言うとなんと40近いからね。伊達に人生一回やり直してないよ。」

「はいはい。」

「はあくその態度は信じてございませんな？何回か言ったじゃん。私はとある日に神様に殺されちつた哀れな大学生で——」

出たよ、黒乃の自分はオジサン発言。交通事故以来なんだが、やっぱりコレって後遺症の一種なんだろうか。今までは適当に流していたが、なんだか心配になつて来たぞ……。でもなあ……脳に異常がないのは割れているんだし、いったいどういふつもりでこんな発言をしてるんだか。

「一夏、聞いてないっしょ。人の話を聞かない子には制裁です！」

「いたたたた！止めろ馬鹿！頬が千切れるっての！」

「一夏つてば相変わらず大げさなんだから。とりあえず後10秒耐えてみようZ E ☆」
「この……なんで自分の怪力にそんな無自覚で……!」

俺が考えを巡らせていると、いきなり頬へと痛みが走る。何事かと思っていると、黒乃が不満気に俺の頬を抓っているではないか。それを理解した瞬間に、痛みが更に倍増した。このお馬鹿さんつてば、何故だか自分が大した力のない非力な奴だと思ってる。そのおかげで、俺は頬を万力にも挟まれているよう錯覚してしまう。

「イチャつくなら余所でやれバカップル。」

「あだっ!？」

「ありがとうございます!」

頬の痛みを意識が向いていたせいとか、時間が差し迫っている事に気が付かなかった。ふいに現れた千冬姉は、もの凄く余計なお世話な発言をしながら俺と黒乃の頭を出席簿で叩く。黒乃にとっては相変わらずご褒美か……。はあ……。なんで本当。

(こんなの好きになつたんだろ……?)

鷹と鳥は共に羽ばたく

「あの……織斑先生？」

「はい、どうかしましたか山田先生。」

「なんと言いますか、コレをどう解釈して良いのだから解からなくて……。」

IS学園は昼休みに入り、職員室にもゆるりとした空気が流れていた。かくいう千冬ものんびりしていたのだが、困った様子の真耶に話しかけられ眉をひそめる。その手に持っているのは小テストだった。昼休みの間に採点をしようと思っていた真耶だが、どうしたら良い物かと思わされる事でもあったのかも知れない。

「藤堂……さん？というか、黒乃さんのプリントなんですけれど……。」

「藤堂？何か藤堂の回答に不都合でも——」

真耶とて、この件に関して千冬に相談すべきかどうかは迷いに迷ったのだ。だが、紛い成りにもクラスの事でもある。意を決してプリントを渡した真耶だったが、やはり後悔しているようだ。何故なら、千冬が石のように固まっているから。ではどうして固まっているかと言うと——

「……山田先生。これは私の見間違えでしょうか？」

「げ、現実です！だからどうしようかと織斑先生にご相談を——」

「どうして名前欄に……近江 黒乃と書かれているんだあああつ！」

「ひゃああああつ!?ど、どどどど……どうして私に怒るんですかあああつ！」

そう……黒乃の苗字はと質問すれば、当たり前のように藤堂だと返ってくるだろう。しかし、名前の欄には丁寧な字で近江 黒乃と書かれているのだ。混乱の境地にある千冬は、つい目の前に居る真耶へと怒りをぶつける。そしてその怒り冷めやらぬまま、ハウリングを起こさせつつ校内放送で叫んだ。

「藤堂 黒乃と近江 鷹丸の兩名！今すぐ第1生徒指導室に来い！今すぐにだ！」

「あ、あの……織斑先生……。ああ……行っちゃいました。」

とりあえずは落ち着くよう促そうとした真耶だったが、まるで稲妻のような速度で千冬は職員室を去って行った。やはりまずい事をしてしまっただろうかと真耶はオロオロ……。よくよく考えれば、遅かれ早かれ発覚する事だつたらう。真耶が気にする必要はない……と言える余裕がある者は職員室に存在しなかった。

そして件の第1生徒指導室。千冬はまるで修羅のようなオーラを放ちながらパイプ椅子に腰かけていた。昼休みという時分もあつてか、そうすぐ2人はやって来ない。至急だと思っただけになおさら遅く感じられる。それからしばらく、それぞれ無表情とニヤけ面の男女が顔を見せた。

「良く来たなお前達。」

「うわあ良い笑顔ですねえ。声とギャップがあつて2割増しで恐ろしいですよ。」

「ハツハツハ。私が笑っている内に座るんだな。」

(こ、怖つ……!?)

一夏だろうが黒乃だろうが、絶対にお目にかかれなない笑顔で2人を出迎えた。修羅のオーラはそのままだ……。鷹丸はいつも通りに余裕綽々。黒乃は戦々恐々といった感じで同じくパイプ椅子に着席。その数瞬後の事だろうか。千冬は机に小テストをバァン！と叩きつけ、ズイツと顔を黒乃に近づける。

「これはどういう事か説明して貰おうか？書き間違えました……なんて言わせんぞ。」

(……………あ。あく……………書き間違えました。)

「何故首を縦に振つた!?まさか本当に書き間違えましたとでも言うのか!」

(だ、だつて……………本当に近江 黒乃だし。プライベートで最近ずっとそつちしか書いてなかつたから……………)

「嫌だなあ、何も書き間違えてないじゃないですか。だつて僕達——」

「言うなああああつ!何で黒乃が近江と書いたか察しがついてるんだよ私はっ!だからこそ認めてたまるかそんな事おおおお!」

「夫婦ですから。」

「

黒乃が本気で書き間違えた事を肯定し、鷹丸がだつて僕達と言いかけた時点で……千冬はそれまでであつたある考えに確信がついた。解つたからこそこの話を早々に打ち切ろうとしたのだが、あくまで鷹丸は我を通す。そして、いけしやあしやあと自分達は夫婦だと言ひ切つた。

「いやあ、本当は隠しておくつもりだつたんですけどねえ。こうなつちやつたものは仕方ないですよね。」

(ご、ごめんね鷹兄……。私つてばついうつかり……。)

「フフツ、大丈夫だよ。僕らが夫と妻つて事實は誰にも変えられないんだから。」

(鷹兄……。えへへつ、鷹兄大好き！)

「おやおや困つたなあ。甘えん坊な奥さんにはお仕置き——」

「イチヤつくな貴様らあああつ！ええい……。とりあえずソイツの腕から離れるこの馬鹿！」

黒乃は自分のおつちよこちよいで面倒になつてしまつたと、不安な様子で鷹丸の右腕に抱き着いた。それを謝罪と感じた鷹丸は、安心してくれと黒乃の頭を撫でてみせる。すると今度は鷹丸の腕に愛おしそうに身体を擦り付けた。更に鷹丸は撫でていた手を頬に添えるとお仕置きと称してキスを……。する前に千冬に止められる。

脳の処理機能がフリーズしていたらしく、しばらくジツとしていた千冬はようやく動き出した。鷹丸の腕から引つpegがされた黒乃は、それが僅かながらもそれが表情に出るほど不服そうだ。それを見た千冬は、コレはマジな奴だと激しい頭痛に見舞われる。

「確かにこの9月で黒乃も16になった。……法律上結婚できる年齢だ。だが、籍を入れるには未成年の場合は保護者の許可が要る。……まさか権力で通したなどと言うまいな。」

「嫌だなあ、そんな事しませんよ。ただちよつと束さんに——」

「もつと性質が悪いだろうが！あの駄兎があ……！というか、私の許可なしに入れるか普通!？」

「僕らに普通は通じませ——」

「ああそうだろうな！その結果がこれだクソツタレ！」

少しは冷静さを取り戻した千冬だったが、鷹丸と話していると徐々にヒートアップしてしまう。特に束の名が出てきてしまえば無理もない。よほど機嫌が悪いのか、口の悪い方である千冬でも使われないような暴言が出てきた。黒乃は珍しいちー姉を見たなあ……なんて呑気な事を考えている。

「それより、そんな大声で騒いじやって良いんですか？」

「誰のせいだと思っている!?!だいたいな、お前らいつの間にかそんな関係に——」

「外、騒がしいですけど。」

『スクウウウプ！新聞部、号外を作るわよ！見出しは近江夫妻　IS学園に爆誕で！ハリイイイイっ！』

『5時限目に間に合わない？ほっとけそんなもん！』

「……………。待て貴様らあああつ！一人残らず記憶障害にしてやる！」

あんな怒号で黒乃と鷹丸が呼び出された時点で、黛 薫子は絶対に何かあると察していたのだ。密かに新聞部総出で生徒指導室の前に張っていると、聞こえてくるのは鷹丸と黒乃が結婚したと言う確かな事実。とんでもないスクープに思わず騒ぎ出すと、千冬はようやくその存在に気が付いた。

まあ…………鷹丸がそうなるように仕組んだのだが。思惑通りに千冬は散って行った新聞部の撲滅に向かってしまう。これでこの場は有耶無耶になったと思ったのか、鷹丸は黒乃の手を取りながら立ち上がった。そして、こんな事を言い出す。

「まあこの程度は大した事じゃ無いよ。まだまだ僕ら2人の道は長いんだから……………ね。これにめげずに、僕を信じて着いて来てくれたら嬉しいな。」

（…………私の人生はもう鷹兄に捧げたもん。後悔なんてない…………。例え私達の道が地獄に通じてるとしても、鷹兄と一緒に怖くないよ。）

「黒乃ちゃん…………。目、閉じてみようか？」

(……………うん。)

この2人がどういった経緯で好き合ったのかは解からない。だが、この2人は既に止められないところまできているようだ。間違いない伴侶に対してであろう台詞に反応した黒乃は、同じく伴侶に対しての言葉を内心で呟きながら鷹丸に抱き着く。それで鷹丸には何か伝わったらしく、生徒指導室にて2人は静かに唇を重ねた……。

◇

(鷹兄っ！)

「うん……………？おう……………じゃなくて、藤堂さん。僕に何か用事かな？」

(鷹兄の為にお弁当作って来たから、屋上で一緒に食べようよ！)

「おとつと……………。ハハハ、参ったなあ。」

昨日の騒動から1夜明け、時間は同じく昼休み。購買へと向かっている鷹丸の服を撮む者が居た。振り返ってみると、そこには愛しの妻が大きな包みを抱えているではないか。それで弁当だと察した鷹丸だったが、有無も言わず黒乃へ連行されてしまう。参ったと口では言っているが、表情はとてつもなく嬉しそうだ。

それで、結局この2人の処遇はと言うと……………大したことはなかった。とにかく不必要

にくつつかない事と、黒乃を近江と呼ばない事で落ち着いた。2人は前者に關して守る気はさらさららないようだが、鷹丸は一応だが藤堂と呼ぶよう気を付けているらしい。

「此処の屋上は、いつ来ても良いところだよねえ。」

(うんうん、お弁当食べるには丁度良い感じのシチュエーションって言うか。)

ほとんど全力疾走に近かった為か、あつという間に屋上へと辿り着いた。天気は快晴。太陽は天高い位置で2人を出迎える。さて、のんびりお弁当タイム……といきたい所だったが、何やら柵のあたりが騒がしい。何事かと黒乃が注視してみると……。

「身投げなど止めんかこの馬鹿！一度の失恋がなんだと——」

「うるせえええええ！昨日まで好きだった子が、実は結婚してましたなんて事になった俺の気持ち解るかよおおおっ！」

「だからって飛び降り自殺は短絡的過ぎるでしょうが！だいたいね、ア……アンタには私だって——」

「鈴、貴様！どさくさに紛れて抜け駆けをしようとするんじゃない！」

黒乃の目には、屋上から飛び降りようとしている一夏と、その制服を掴んで阻止しようとする筈と鈴音の姿が映った。あ……と、何やら黒乃は一抹の申し訳なさを覚える。まさか一夏が自分を好きだとは思ってもみなかつたのだろう。知つたのは昨晚事の顛末を一夏に問い詰められての事だが……。

「……彼は彼女達に任せようよ。」

(え、いや……でも……。)

「……ごめん、普通に止めるべきだよね。……キミが僕以外の男を心配するのは、その……あまり気分が良くなって……。」

(私を身も心も女にした人が今更何言ってるのさ……。大丈夫、だって私は鷹兄の奥さんなんだから。ね？ちよつと行って来るだけだよ。)

すぐさま一夏の暴走を止めようと近づこうとした黒乃だったが、鷹丸に手を掴まれて阻まれた。どうかしたのか様子を見ると、凄まじくバツの悪そうな鷹丸が……。そんな鷹丸を安心させる為か、背伸びして頭を優しく両手で包むと……。その頬にキスを落す。鷹丸がチュツと鳴った水音を理解するよりも前に、黒乃は騒ぐ幼馴染組に迫っていた。

そして一夏をどう止めたのかと言うと、首を腕でグツと引き込むように持ったかと思つたら……。容赦なく捻つて気絶をさせた。そのまま制服を掴んで安全そうな場所までズルズル引きずると、じゃあ後よろしく……。でも言いたげな敬礼を箒と鈴音に送る。あまりの早業に、2人はポカンとするばかり……。

(ただいま、あ・な・た。……なんてね、フフツ♪)

「……思つたよりも手荒だったけど、もしかして僕が嫉妬したからとかじゃ……。」

(いや、そういう事では無いよ？ただ、鷹兄との貴重な夫婦の時間を潰されるのは嫌か

なつて。」

「そう……？　そういう事じゃないなら良……くはないけど。……まあ、ご飯にする？」

本当に……あまり暴力に頼らない黒乃が一夏をかなり雑に扱ったせいか、鷹丸は自分のせいではないかと思つてしまう。黒乃からすると全然そんな事は関係なく、夫婦の間を少しでも邪魔した時点で運命は決していたらしい。好きだった女子に締め落されるわ嫌かなと言われるわ……一夏もかなり散々だ。

「よいしよつと……。」

（出た……。鷹兄つてば相変わらず爺臭いなあ。）

「……また笑つたね。僕が座るときはいつもそうだ。聞き分けのないキミはこうだよ。」

（わつ、わつ……!?　ハ……アハハハハ！　ごめ……ごめんつてば鷹兄、くすぐりたいよ。）

鷹丸の癖の1つに、立ち座りの際『どっこいせ』とか『よっこいしょ』とか言つてしまふという物がある。それに関して黒乃は凄まじく爺臭く感じており、聞きたびにクスリと少し馬鹿にするような笑みを内心で浮かべていた。だが、鷹丸にはなんとなく馬鹿にされていると言うのが解るらしい。

氣に障りはしているが、互いに軽い冗談のような物だ。証拠に鷹丸は座つたまま後ろから黒乃に抱き着くと、両脇腹に指を滑り込ませてくすぐり攻撃を仕掛ける。黒乃は笑い声は出ないが、下を俯きながらジタバタと小さく暴れてみせた。それが効いている裏

付けであり、天邪鬼な鷹丸を調子に乗らせてしまふ。

「おや、此処が弱いのかい？」

（ちよつ……降参だつて……！フフフツ……！息苦しいから……！）

「だーめ、止めてあげない。くすぐられて困つてるキミをもう少し見てたいかな。」

（そ、そんなあ……。ヒ、ヒーっ！もう無理……！ギブギブ！）

拘束した相手をくすぐる拷問が実在したりするほどだ。それを考慮すると、冗談交じりでも黒乃は結構苦しいのだろう。必死に鷹丸の腕をタツプするが、それも更に調子に乗らせる結果になった。その光景は夫婦と言うよりは恋人同士のそれで……。そんな時、2人の背後からまたしても騒がしい声が聞こえた。

「あま……甘いですわ！なんですのコレ……無糖のストレートティーのはずですわよ！？」

「僕の卵焼きもだよ……。むしろ塩味にしたのに何で!？」

「うええええ……。菓子パンが……。菓子パンがあ……。甘くて食べられた物ではない……！」

そこではヨーロッパ3人娘が阿鼻叫喚の様で喧々としていた。一夏達が既に姿を消し、それぞれ手作り弁当だったり購買のパンを所持しているところを見るに、きつと入れ違いで屋上へと食事に来たのだろう。ラウラなんか酷い物で、胸やけを起こしながら

OTLの状態ですすぐのをこらえる。

「……………あゝ……………キミ達？」

「くつ、こんな場所に居ては糖分過多でやっていられん……………。総員退避……………退避ーっ！」

「ここは仕方ありませんわね……………。戦略的撤退ですわ！」

「ちよつ、ちよつとそのノリは着いて行けないかな……………。あ、そのく2人とも？気持ちは解るけど、TPOはわきまえてね。それじゃ……………僕も行くから。」

「……………。」

その存在に気が付いた鷹丸は、弁明をしようと話しかけようとしたのだが……………する前に逃亡されてしまった。ラウラに釣られたのか、セシリアも早々に軍人っぽいノリで屋上を去る。だが、去り際のシャルロットの言葉に鷹丸ですらバツの悪そうな表情を浮かべた。優しくやんわりと諭すような言い方のせいか、余計に深く突き刺さる。

「……………肝に銘じておこうね。」

（そうだね……………。）

「……………食べようか。」

（そうだね……………。）

シャルロットも屋上から姿を消すと、2人の間にはしばらく静寂が流れた。鷹丸が呟くようにそう言うのと、黒乃も静かに首を頷かせる。この辺りはやはり息の合った夫婦な

のかも知れないが、今回はそれが仇となったのだろう。気を取り直してといった感じで、鷹丸は黒乃の手料理に舌鼓を打った。

「御馳走様。ふう……やっぱり、いつ食べても黒乃ちゃんの手料理は美味しいなあ。」

（本当に？フフ、嬉しいなあ……。鷹兄の為に頑張った甲斐があるよ。）

「それにしても……。僕は幸せだね。だって、そのうち毎日こんな美味しい手料理が食べられるようになるんだから。」

「ティツ……。TPO。」

「さっきのデュノアさんの言葉？だって今はキミと僕の2人きりじゃない。十分守られてると僕は思うけど……。どうかな。」

あつという間に完食し、鷹丸はしっかりと両手を合わせて感謝の意を述べる。そしてすぐさま先の未来にて、黒乃がキッチンと鷹丸の妻として生活している風景を想像しながらそう言った。対して黒乃は、先ほど注意されたばかりだとTPOと言葉に出して呟く。しかし……。鷹丸にそんなのは通じない。

確かに今は完全に2人きりだ。ここはIS学園で、2人は教師と生徒であるという問題は残るが……。確かに他者の目に留まる事はないだろう。残念な事に、黒乃に深く考える脳ミソなんて持ち合わせていない。なら良いか……。と妙に納得した様子だ。

「じゃ……。リクエストして良い？」

(リクエスト……?)

「膝枕してほしいな。お腹が膨れたらなんだか眠くなっちゃって。」

(なんだそんな事か。勿論、私の全部は鷹兄の為にあるんだからね。)

黒乃は鷹丸の背後に回り女の子座りの状態になると、肩を掴んで後方へと引つ張る。鷹丸はゴロンと横になり、頭の着地点はきっかり黒乃の膝の上だ。ふと……視線を感じる。何かと思ったら、黒乃がジッと顔を見つめてくるではないか。目が合ったせいか、黒乃はバツと姿勢を正して誤魔化しにかかる。

「良いよ、気にしないで。僕も黒乃ちゃんを見つめていたいな。」

(鷹兄……)

2人はしばらく、互いを愛おしそうに見つめ合う。無言にも関わらず、2人の周囲には甘い雰囲気漂った。何か空間がピンク色に染まる幻覚すら見えるほどに。黒乃の方は一応満足したらしく、目を閉じ鷹丸のフワフワな髪を弄ぶように頭を撫でる。満腹感や陽気な気候が相まってか、なんだか鷹丸はウトウトとしてしまう。

「黒乃ちゃんの手……温かくて柔らかくて……。ふわあ……。」

(えへへ……。鷹兄にそう言われるのは嬉しいな……)

「……黒乃ちゃん。僕ね……。少し不安になる事があるんだ……。キミがさ……。僕を嫌いになっちゃうんじゃないかって。」

(え…………?)

眠いついでか、ブーツとしてまともな思考がままならないのか……。判断は着きづら
いが、鷹丸はそんな事を言い出した。こんな場合だからこそ、それが紛れも無い本心か
らの言葉である事が伝わる。黒乃は……。しばらく鷹丸の真意を探る事に舌らしい。

「僕…………自分でも思うけど、性格とか良くないからさ……。つい子供じみた意地悪を
しちゃうし…………さつきみたく嫉妬だつて……。キミを妻にしたのだから、僕に縛り付け
ておきたかったからさ…………。」

(……………)

「…………ダメだよ、こんなものじゃ……。キミの夫として…………男として…………。」

(ああ、ダメだね。全然ダメ。)

鷹丸は余裕あり気であるが、それこそが余裕が無い事の表れとも言える。鷹丸は、近
江 鷹丸を演じている節があるのかも知れない……。必死に自分を取り繕つて、崩れ落
ちてしまいうような自分を保っている……。のかも。黒乃はこの告白を妻として受け取り、
とりあえずは膝枕を解除する事に。

「黒乃ちゃん…………?」

「わたし…………鷹…………の無邪気…………好き…………。嫉…………嬉し…………。わたし…………大切だつ
…………。ふさわしい…………ふさわしくない…………重…………要…………違つ…………。いっしょ…………居た

い……………気持ち……………。わたし……………鷹……………の妻でありたい……………。鷹……………は……………?」
「……………ああ、そうだね。黒乃ちゃんの言う通りだ。僕もキミと同じだよ。これからも永遠に、キミの夫であり続けたい。」

黒乃は鷹丸の上にもたがると、息も絶え絶えな様子で必死に言葉を紡ぐ。鷹丸からは、かなり無理をしているのが見て取れた。苦しいのか、目からは涙が流れている。それでも黒乃は、怒っていたから……………言葉にして伝えずにはいられない。黒乃が言いたかった事はこう……………。

私は鷹兄の無邪気な所が好きだよ。嫉妬されるのも純粹に嬉しい。私の事、それだけ大事にしてくれるんだって感じれる。ふさわしいとかふさわしくないとか、そんなのは重要な事とは違う。大事なものは、互いが一緒に居たいって気持ちなんじゃないかな。私は鷹兄の妻でありたいから。鷹兄は……………どう思ってる?」

途切れ途切れの言葉だろうと、鷹丸には黒乃が何を言いたいのか解った。それで思い知らされる。自分がいかほどに、愚かな発言をしたのかを。そして黒乃は嬉しかった。自分が何を言いたいのか、それをしっかりと理解してくれて……………。鷹丸は勢いよく上半身だけ体を起こすと、黒乃を膝立ちの状態にさせた。

「黒乃ちゃん……………。いや、黒乃。愛してるよ。キミは僕だけの物だ。」

(鷹兄……………。んっ……………!鷹兄……………好き……………好きだよ鷹兄っ……………!)

鷹丸には珍しく、相手に対して『ちゃん』だとか『さん』だとかを着けずに黒乃の名を呼ぶ。更には間髪入れず、惜しみない愛の言葉を送った。黒乃をその気にさせるには十分すぎる。両腕をキツく鷹丸の首に回すと、自分から唇を重ねた。それも触れるだけの物ではなく、貪るようなキスだ。

2人の舌は、ただ求めあうかのように絡み合う。クチャクチャという艶めかしい水音と、熱い吐息のような息継ぎだけが屋上に響き渡る。やがて2人は満足したのか、どちらともなく離れていった。その際に2人の舌には、深く愛しあつた証拠である銀色の橋がかかる。

「……なんだか目が覚めちゃったよ。色んな意味で。」

（あ、あはは……それは言えてるのかも。）

「じゃ……せめてもう少し……このままでも良いかな？」

（うん……鷹兄の思いのままに……。だって私は近江 黒乃……。あなたの奥さんなんだから。）

口の周りにべつたりと着いた唾液を拭い取りながら、鷹丸はそう呟いた。確かに……ここから膝枕を仕切り直す気にはならないだろう。そう思った鷹丸は、固く黒乃を抱き寄せる。黒乃もあえて自分の体重をかけながら鷹丸にもたれ掛つた。共に幸せそうな

2人……。

恐らくこの2人を別つ事が出来るのは、死くらいしか存在しないだろう。いや、もしかすると……死した後もまた出会うのかも知れない。この2人には、永遠を感じさせる何かがある。永遠に隣を羽ばたき続ける鷹と鳥。本来は天敵である2種だが、何と……何と……絵になる事だろうか……。

本篇

オリ主&専用機 設定集

『藤堂 黒乃』のプロフィール

名前 藤堂 黒乃

年齢 15歳(前世含めると40近い)

身長 164cm(箒と千冬の間ほど)

体重 47kg

スリーサイズ 90/58/89

外見的特徴 黒のロングヘア(毛先が腰くらい) 整った顔立ち 少し色白

誕生日 9月22日(おとめ座)

血液型 AB型

好きな物 激辛料理 美女または美少女

嫌いな物 食べ物では特になし 怖い物・人・事

趣味 ゲーム アニメ鑑賞 妄想にふける

藤堂 黒乃……この作品においては、原作主人公である織斑 一夏のファースト幼馴染。両親が織斑姉弟の育ての親的存在なので、一夏や千冬とは本当の家族同然に育つ。元来より明るく快活で優しい少女だったが、交通事故に巻き込まれそれは一変する。交通事故により両親は他界し、本人も数日間は生死の境をさまよう重体に陥る。奇跡的に目を覚ましたものの、事故の影響か自身の意思全般を伝えられないという失語症にも似た精神病?を患う。中学へ進学すると共にISに乗り始め、日本の代表候補生に上り詰める。しかし、その圧倒的な強さのせいか、IS乗りからは八咫鳥の二つ名で畏れられる存在。

中身のオツサン……藤堂 黒乃に憑依転生したオツサン。本人が多くを語らないため、本名や詳しい憑依転生したいきさつは不明。前世では大学3年生で、当初はお兄さんを自称していたが……最近では諦めがついたのかオジサンで通す。事なかれ主義で争いは好まない……割に自分の欲望（主にセクハラまがいの）に正直な生粋のDMという良く解らない人。後述で詳しく触れるが、周囲に黒乃が勘違いされているのはだいたいいコイツのせい。思い込みが激しく、人の話を聞かないという性格も大きく影響している。最近の悩みは、魂が身体に引っ張られて女性化の進行が著しい事だとか。

黒乃の無表情……藤堂 黒乃は「喋る」「筆談」「表情」等で他人に意思を伝えられない。これは事故の影響でもなんでもなく、オツサンが憑依する際に神がかけた制限で

ある。そもそも神がオッサンを憑依転生させたのは、その様子を見守って自分達が楽しむため。オッサンが勘違いしやすい性格であった事を踏まえて、そうするとより面白くなるでも思っただのだろう。現にオッサンの突飛な行動を無口無表情からは察する事が出来ず、原作キャラ達は藤堂 黒乃に対して様々な勘違いを引き起こしている。

転生特典・・・本人は、神に「転生特典？ねえよそんなもん」と言われそれを信じ込んでいるが、それは神が放った真つ赤な嘘。唯一真実を伝えたのは、前世の経験を引き継ぐことのみ。つまるところ、実際はバリバリのチート持ち。身体能力の強化、超絶豪運などなど……多岐にわたる。それを神がオッサンに伝えなかつたのは、そっちの方が面白くなりそうだから……との事。オッサンはものの見事に自身のチートに気付きはせず、単に藤堂 黒乃のスペックのおかげ程度にしか考えてはいない。

黒乃の男性関係・・・早い話が異性からはモテる。無表情である事を踏まえても、男であれば思わず鼻の下が伸びる美少女。中身のオッサンが基本的に優しい性格である。この2つの材料が揃うと、女尊男卑の世の中でも男に優しい美少女……という事になる。その他様々な要因で多くの男を虜にしているのだが、いかんせん中身のオッサンが気付く事は無い。中学時代に告白しようとした男子は多いが、それらは全て一夏、鈴音、蘭が鉄壁のガードであるために全て未遂で終わる。御手洗 数馬に至っては話が別で、めげずに告白……どころか求婚してくるせいでオッサンは困り気味。

オリジナル専用機 『刹那』^{せつな}について

名称：刹那^{せつな}

型式：近江重工 壱ノ型

世代：第3世代

国家：日本

分類：超高機動近接格闘型

装備：大太刀型物理ブレード 『神立』^{かんだち}

日本刀型物理ブレード 『叢雨』^{むらさめ}

脇差型物理ブレード 『驟雨』^{しゅうう}

高出力レーザーブレード『疾雷』、『迅雷』

小太刀型物理ブレード『紅雨』、『翠雨』

仕込刀『霹靂』両肘・両膝にそれぞれ一つ搭載

装甲：極軽量耐衝撃合金装甲『鎧羽』

仕様：Q I B O I B
クイック・イグニッションブーストオーバード・イグニッションブースト

近江 鷹丸が設計し、近江重工職員一丸となつて作り上げた第3世代型IS。見た目は人型の鳥といった感じで、脚部は鳥類の足というデザイン。鷹丸の趣味という趣味を盛り込んだおかげか、これまで乗り手が見つからなかった。あまりの飛行速度と操作系統、イメージインターフェースの過敏さのせいで、常人では通常飛行すらまならぬ。武装が7本の刀で構成されているのも、鷹丸の趣味の1つ。全ての武装は拡張領域には仕舞わず、鞘ごと刹那にアタッチメントで取り付けたたり、刹那のふともも部に収納してあったりと、昨今の常識からは逸脱していると言える。コンセプトとしては、刹那の超スピードで翻弄し、7本の刀から繰り出される多彩な攻撃で10割コンボで削り切る……と鷹丸は想定している。

刹那のウイングスラスト『雷火』は、既存のISでは追いつくのも困難なほどの出力を誇る。それに加えて、QIBとOIBという新技術を発動可能。それぞれ「急速か

つ連続で瞬時加速を行う」というものと、「瞬時加速を継続的に発動させ続ける」というもの。それを可能にするスラスタ―こそ、雷火と言えよう。雷火は刹那本体とは別にエネルギーを積んでおり、このエネルギーは常に雷火から放出され続けている。瞬時加速の原理としては、放出したエネルギーをスラスタ―へ取り込み、爆発的な威力で再放出……であるため、余計な手間を省いてスイッチ一つで瞬時加速が行えるような感覚。ちなみにQIB・OIB発動の際には、搭乗者の安全を考慮して身を守るバリアが張られる仕様。こちらは刹那本体のエネルギーを削るため、かなり燃費の悪い仕上がりになっている。

武装解説

神立・：オッサン曰く、「某狩ゲーの太刀に似てる。」黒い鞘に白で雷の紋様が刻まれている。あまりに長いために取り回しが難しい。

叢雨・：これぞ日本刀と言ったような刀。柄が紺色、鞘は黒。長さはISにてありがちな物理ブレードと同等の長さで、黒乃としては神立よりも驟雨の方が使い勝手が良い。

驟雨・：脇差型の物理ブレードで、柄が藍色、鞘は黒。主に叢雨との2刀流での使用を目的としている。黒乃も良く叢雨と同時に使用しているが、あまり脇差として活躍

は出来ていない。

疾雷・・・まるで雷が集約し、刀の形を成したようなレーザーブレード。あくまでプラズマでなくレーザーブレードなのがミソ？柄は緑色。（レーザーブレードなので鞘は無い）

迅雷・・・だいたいは疾雷と同じ……というか、名前と柄の色が違うだけ。ちなみに柄は紫色。

紅雨・・・主に投擲を目的として小太刀型物理ブレード。刹那の右太ももに収納されている。小太刀のような長さだが、見た目はドスに近い。持ちは紅色。

翠雨・・・名前と色と収納場所が違うだけで、だいたい紅雨と同じ物。刹那の左ふともも部に収納されている。持ちは翠色。

霹靂・・・刹那の両肘、両膝に仕込まれている刃。まるで鯨の背びれのように湾曲した形状。鷹丸が緊急用の為に搭載した。例えば、刀を7本全て失った際など。

第1話

おつす、おらオス！でも生物学上ではメス！もつと詳しく言えば、心は男で体は女と
いったところだ。もはや何番煎じか数えるのも冒瀆的で、出涸らし……どころかただの
お湯が急須から注がれるレベルなんじゃないのかな。いやね、でもね……そんなテンプ
レ的な事にね、自分がなつちやったらそれはもう……お湯だろうとなんだだろうと、飲み
干すしかないじゃない。つまり、受け入れるしかないって事。

「お〜い黒乃！早く早く〜」

遠くで俺に向かって手を振るそれはもうイケメンになる未来しか見えないシヨタは、
ライトノベル、インフィニット・ストラトスの主人公である織斑 一夏その人。見よこ
の……テンプレとしか言いようのないこの状況を。俺こと前世では大学生のお兄さん
は、藤堂 黒乃つて女の子に憑依転生している。

う〜む、そうは言いつつも……少しばかりイレギュラーな転生ではあるが。なんだっ
け？ 良くは覚えていないのだけれど、流れとしてはこんな感じ。俺氏死亡↓なんか神
様っぽい人が出現↓暇だから転生して楽しませろやポケエ↓今ここ。このパターンは
二次創作で見かけたことがあるが、いわゆる娯楽系転生つて奴かも。

つまりは日々に退屈した神様が、暇をしないために意図的に殺害され、強制的に転生させられるみたいなの。まあ……役得なんですけどね。インフィニット・ストラトスは、俺が望んで転生した世界だ。だって……男のロマンだろお!? フラグが立つ保証も無ければ、多少は命がけだよ! それでも、それでも女の子に囲まれてウハウハしたいやん! それ……それが、どうしてこうなったああああ!? 何故にホワイ! よりによつて女の子に憑依とかつて、そりゃあんまりだよ神様あああ! ISの世界観つてか、コンセプト潰しちやつたら意味ないよ!? 女の子の身体は、それはそれで役得な時もあったりするけどさあ……。

「黒乃……元氣、無いのか?」

お、おつと……あまり長考が過ぎたらしいな。イツチーが、心配した表情でこちらを見ていてではないか。俺はそれに対して、首を横に振つて応えた。それを見たイツチーは、何処か安心したような表情を見せる。ふむ……喋れたら良いんだけどね、この身体は喋れないのよ。

どうやら神が、俺の行動に制限をかけているらしい。黒乃ちゃんの身体では、意志を伝える行為全般の大半を行えないのだ。つまりは喋る事は出来ないし、表情を作る事も出来ない。ついでに言えば……女性の胸を揉む等のセクハラ行動も行えん! 畜生めええええ! 子供で女の子ならば、いくらでもチャンスはあるのにいいいい!

あの神……退屈しのにぎに転生して来いって言つてなかつたかな。こんな制限をかける方が、よほど面白おかしく引つ掻き回せる自信があるのだけれど。まあ良いや……女風呂というか、ちー姉とは一緒に良く風呂には入ってますし。あつそうそう……ちなみにだが黒乃ちゃん、この世界におけるイツチーのファースト幼馴染にあたる。

いやあ……ビビつたよ、目が覚めたら病院で……目の前にどつかで見た事のあるような美女とシヨタが居る訳で。そしたら黒乃ちゃんの両親は死んじやつたとかで、私が絶対に立派に育てるーとか言われて。そこから美女とシヨタが織斑姉弟だと気付くのは、かなり後の話となる。

「そつか、良かったーじゃあ遊ぼうぜ！」

ふはははは、子供が元気なのはよろしいよろしい。現在の俺達は、小学1年生。まあもう休みが明けたら2年生なんですけども。どうにも喋らなくなつて表情が変わらなくなつた俺は、相当イツチーに拒否られたものだ。そりやまあそうだよねえ……いきなり幼馴染がこうなつちやつたらねえ。

こんなの黒乃じゃない！って言われた時には、けつこうシヨクだった。全面的にイツチーの言葉は、的を射てるけどね。何があつたかは知らないけど、関係は良好になつた。今日もこうして、イツチーに手を引かれて公園へとやつて来たわけだ。頻繁にこうやつて外に連れ回されるが、別に俺も運動は好きだから問題ないや。

「この鉄棒、いつ見ても高いよな。俺もいつか、手が届くようになるかな?」

そう言いながらイッチーが背伸びをしながら手を伸ばすのは、小学校高学年向けほどの鉄棒だ。更にイッチーはジャンプしてみたりするが、手は届かない。でも大丈夫さ。イッチー、君は公式設定で172cmまでは伸びるからよーよー。しかし……こうも一生懸命になられると、なんとか届かせてやりたいものだ。

そう思った俺は、イッチーの背後に回って腰へと抱き着く。そのまま勢いを付けて、力の限りイッチーを持ちあげた。フアイトーツ、いつぱあーっ! イッチーの足は余裕で地面から浮くが、それでも手は届かなさそうだ。うーむ、これでダメなら他に方法は無いだろうな。仕方が無いので、俺はイッチーを降ろす。

「ダメか……。でもありがとな、黒乃。……そうだ! 今度は逆でやってみようぜ!」

フツフツ、マイフレンド・イッチー……残念だが、君の助力は気持ちだけ受け取っておこうじゃないか。前世でのお兄さんはね、オツムはパーだったけど……運動には自信があるのさ! さて、しっかり手に砂を付けて……と。俺は鉄棒の支柱へと向かってジャンプすると、三角跳びの要領で支柱を足場に再度ジャンプ。そのまま鉄棒にガシッと掴まった。

そこから腕をピンと張って、腰を鉄棒より上へ出るようにする。そして後方へと飛び出て勢いを付けると、後は振り子のように重力へと身を任せる。ある程度の位置へ来れ

ば、身体を前へと振り出す！こうして俺の身体は鉄棒の上で逆立ちするような形となり、前へ振り出すのを繰り返せば……大車輪の完成だ。俺は鉄棒を支点に、グルグルと回転を繰り返す。

「黒乃、すっげー！」

フハハハハ！どや、どや？ 凄いやろイッチー！いやあ良いねえ、子供の尊敬の眼差して。それも全て、いわゆる転生特典のおかげだ。チートっぽいのはダメって言われたけど、前世の技能はそのまま引き継いで転生している。つまり俺は強くてニューゲーム状態なのさ。融通が利く神で助かったぜ、思ったよりも良心的だよ。

手も痛くなってきたので、俺は大車輪を中止した。完全に動きが止まったのを見計らって、パツと鉄棒から手を離してスタイリッシュに着地して見せる。フツ……決まっただぜ。くうく！一回こんな台詞を言ってみたかった。

「黒乃、黒乃！ブランコをどっちが大きく漕げるか勝負しようぜ、アレだったら俺も負けないぞー！」

負けず嫌いなイッチーは可愛いのう。おっしや、お兄さんも負けないぞ。つと、ブランコに向かって走るイッチーを追いかけようとしたが、俺はある物が気になった。それは、視線の先にある公園の藪だ。藪に生えている枝の一本に、見た事のない模様の蝶々が止まっているではないか。

外来種かな？それとも単に、俺が見た事が無いだけかも。でも……綺麗だなあ。……捕まえたりしたら、イツチーは喜ぶだろうか。虫とか嫌いだったら、それはそれでイタズラにもなるし……捕まえてみる事にしよう。そう決断した俺は、ゆっくりゆっくり藪の方へと歩みを進める。

「お〜い、何やってんだよ黒乃！早く勝負しようぜー！」

むっ……むくん、イツチーがそう言うなら、急いだが良いのかもしれない。勿体ないかもだけど、コイツはスルー安定だな。バイバイ、蝶々！俺はクルリと反転して、イツチーの待つブランコの方へと向かった。



突然だが、私……いや、私達と言った方が正しい。私達織斑姉弟には、両親が居ない。これも適当な表現では無いな。正しくは、居た。その上で両親は、私達を捨てたのだ。生まれたばかりの一夏と、まだ幼かった私を残して……。恨みを抱いたかと聞かれると、案外そうでも無いのかもしれない。

なぜなら私達は、近所の住民に恵まれていたからだ。大半が可哀想だと視線を送るだけだったが、あの人達は違った……。藤堂夫妻は、私達にとって救いだった。どうしよ

うもなく無力だった私や一夏を、本当の家族同然に育ててくれた。私達には、血の繋がりはなくとも藤堂夫妻こそが本当の両親だった。

そう……だったんだ。その本当の両親である藤堂夫妻は、もうこの世にはいない。今から1年ほど前の事だ。ある日に1人娘を連れて遠出をしていた藤堂家は、事故に巻き込まれてしまった。高速道路を走っている最中にトラックのタイヤがパンクして、藤堂一家の乗っていた乗用車へと突っ込んだのだ。そのまま乗用車は爆発炎上……。藤堂夫妻は死亡しその事故から奇跡的に助かったのは、娘である藤堂 黒乃ただ1人だった。

ただし黒乃も意識不明の重体で、生死の境を長い間さまよう事となる。黒乃が目覚めましたのは、事故から1週間後の夜明け頃だ。その際には、私も一夏も大手を振って喜んだのを今も良く覚えている。しかし、喜んだのも束の間だった。黒乃の様子が、私達の良く知っているものと全く違っていったのだ。表情は能面の様に凝り固まっていて、こちらの呼びかけには何も答えない。ただただ無表情で、こちらを眺めるだけだ。

私はすぐに事故の後遺症を疑った。急いで医師にどうにかするよう頼むと、トントン拍子に精密検査が執り行われた。だが、私の予想に反して黒乃の身体には異常はみられない。ならば、残っている要因はただ1つ。精神的要因から来るものしかない。幸い黒乃の入院していた病院には、精神科医も在中していた。その精神科医に黒乃を診てもら

うと、驚きの診断結果が下される。

なんと精神科医は、精神的にも特に問題はみられないと言うのだ。ならばこの黒乃は、なぜこうなっているのだと問い詰めても……返って来るのは見た事も無い症例だとか、そんな言葉ばかりだ。ただ精神科医は、とある仮説を立てていた。それは、黒乃は自らの意思を自らの意志で伝えられない状態との事。大変にややこしい言い方だが、これはとてつもなく正しい言葉だった。

例えば黒乃へ紙に自分の名前を書いてみると言うと、スラスラとペンは動いて『どうどう くろの』と拙い文字ながらも記す。しかし、今どんな気持ちかと問いかけてみてはどうか。先ほどまでのスムーズさは何処へいってしまったのか、黒乃の手は紙の上でピクリとも動かない。喋る事に関しては、もつての外だった。極稀に首を動かしてくれれば良い方で、酷い時には簡単な呼びかけにすら反応はみられなかった。

精神科医が言うには、これらの症状が事故との関連性があるかどうかと聞かれれば不明と言う事らしい。いったい……黒乃が、黒乃の両親が何をしたと言うのか。善良で大人好しと言う言葉が良く似合う人たちが、何故こうも不幸な目に合わねばならない。いや、こんな考えではダメだ。黒乃は、生きていてくれたのだから。私の両親が愛した子だ。藤堂夫妻が居なくとも、私と一夏があの子の家族である事は変わらない。私の弟も妹も、私がこの手で立派に育てなくては。そうしなければ、天国の2人を心配させてし

まう。

そう誓ってから、もうすぐ1年が経つ頃となる。当初の一夏は、変わってしまった黒乃を受け入れられないでいたようだが、黒乃の中身までは変わっていない事に気が付いたのだろう。そもそも私がどうこうと言う事では無いのだが、弟と妹の仲が良い事に越したことはない。しかし私は、なぜ貴重な休みを使って、公園の藪に隠れながらココソと2人の事を見守らねばならんのだろうか。いや、自問自答せずとも答えは簡単だ。それもこれも全て、私が隣に居る友人に、黒乃の事を相談したのがまずかったのだ。

「へえへえへえ……。あれが、ちーちゃんの言ってた……えつと、なんて名前だったか？」

「……藤堂 黒乃だ。」

「ふくん、そうだったね。まあなかなか可愛いんじゃない？ウチの箒ちゃんには、遠く及ばないけど。」

「なあ……。別に、隠れて見る事は無いんじゃないか。」

「えへ……だつて、興味も無いのにわざわざ見に来てるんだし。自分から接触する必要はないもくん。」

隣で伏せている彼女は、篠ノ之 束と言って私の友人だ。そういえば、彼女との出会いもちょうど1年前だったか。なぜ仲良くなったかは、正直よくは覚えていない。まあ

……なんとなくの流れだろう。それにしても、観察とはなんだ観察とは。私の妹をモルモットのようない方をするのは聞き捨てならんが、いつもの事だと思つて諦めるしかないな……。彼女はあゝの意味で、黒乃よりよほど性質が悪い。

天才を自称し、彼女の眼には興味をもつた対象以外は石ころ同然に見えるのだ。それがたとえ家族だろうと例外では無く、妹以外はどうでも良いようだ。天才と馬鹿は紙一重などと言つたりはするが、どうにも東はそんな枠には当てはまらない何かを感じる。ああ、やはり……。黒乃の事を話したのは間違いだつただろうか。天才を自称するだけあつて、その頭脳は確かに優秀そのものだ。だからこそ私は思つてしまった。東ならもしかすると、黒乃を元に戻せるかも……と。

東は黒乃を見て欲しいと言うと、相当に洩つた。東からすれば、石ころの様子を見てくれと言われているのと同然なのだから、それは洩りもするのも解る。しかし、黒乃を元に戻せる可能性があるのなら、わずかな望みだろうと私はそれに賭けたかつた。頭も下げたりしたのだが、今となつてはとてつもなく無駄な行為だつたな……。何か、藪に隠れているこの状況が急に恥ずかしく思えて来た。

「東。私から頼んでおいてなんだが、もう帰ろう。別にお前が興味を惹かれる事なんて、起きやしない……。」「

「ごめんちゃん……。今さ、東さんの目の前で凄く興味を惹かれる光景が繰り広げ

「られてるんだよね。」

「何……？少し貸せ。」

にやけた顔で束は双眼鏡を覗いていたが、それを多少乱暴に奪い取った。そして双眼鏡で黒乃を捕捉すると、私は絶句するしかなかった。なんとまだ小学1年生であるはずの黒乃が、鉄棒競技の代表選手も顔負けな大車輪を披露しているではないか。確かに黒乃は運動が出来る方だと記憶していたが、果たしてこれは運動神経が良いの一言で片づけて良いものなのだろうか。黒乃を良く知る私からすると、これでは突然に超人的になったようにしか思えない。まさか事故にあつて目覚めると、超人的な力を得たというドラマみたいな話なのだろうか。

「酷いよちーちゃん！知ってれば束さんも飛んで来ちやうのにくー！」

「い、いや……。私も初見だ。いつの間に、あんな……？」

「初見？それはおかしな話だよ。誰に習ったのか、いつ練習したのかとか、色々と面白い疑問が増えるよねえ。」

「……言えている。アレはどうにも、慣れた動きに見えるな。」

だとすれば誰だ、黒乃にあんな危険な技を教えた不屈き物は。これが一夏なら白状するまで問い詰めるのだが、もちろん黒乃は聞いても答えてくれないだろう。答える事が出来ない……が、正しい表現だが。というか一夏、女の子がそんな危険な技を披露して、

感心している場合では無かろう。普通は止めるぞ、普通は。いや、むしろ私が止めるべきだ。これ以上は危なかくして見ていられん。黒乃は良い子だから、話してはくれずとも注意すれば後は止めてくれるはずだ。

「わーっ!?!ちよつと、ちーちゃん!せつかく興味が沸き始めたんだから、大人しくしてて!。」

「なっ!?!離せこの……!黒乃が怪我でもしたら……。」

「ああつ、ホラホラちーちゃん。あの子もう止めてるよ。」

束は私に被さつて、邪魔をさせまいと必死に抵抗を仕掛ける。しかし、黒乃が大車輪をしている間も思ったよりも短かった。それならそれで良いのだが、やはりとてつもなく複雑な気分だ……。今日は帰ったら、遠回しに危ない事をするなど注意しておこう。私はそつと胸を撫で下ろすが、束は残念そうに唸りながら黒乃の監視を続けた。

私は黒乃よりも、束の方へと注意を向ける。黒乃が、こいつのぶつ飛んだ行動に巻き込まれなければ良いが。その要因を作つたとなれば、私はとんでもないミスを犯したとしか言いようがない。どうか余計な事を思い付くなよ。そう念じながら束を眺めると、私の思惑とは逆に愉しそうな様子へと変わっていく。

「ねえ、ちーちゃん。あの子……本当に何者なのかな。」

「なんの話だ。」

「だってあれ、絶対私達に気づいてるもん。」

「何……?」

またしても束から双眼鏡を奪うと、遠くにいる黒乃を眺めた。するとどうだ。黒乃は凝視という言葉すら生易しいほどに、私達の隠れている藪を見ていた。そしてあろう事か、こちらへ歩み寄って来る。馬鹿な……。これでは束の言う通りに、まるでこちらに気づいてるかのようだ。偶然と思いたかったが、私達の他に近づく要因が思い当たらない。

「へえ。誰かいるって解って、そのうえで近づいて来るんだ。」

「……………」

「表情から読み取れないけどさ、恐れてる風には見えないね。うくん……すごいや。」

黒乃は歩みを止めずに、みるみる内にこちらへ近づく。馬鹿な……。本当に、馬鹿なとしか言いようがない。もしも隠れているのが、不審者だったらどうするつもりだ? 黒乃……お前は、隠れている者に手を伸ばして、いったい何がしたい? 黒乃……お前は、どうしてしまったんだ。

「お〜い、何やってんだよ黒乃! 早く勝負しようぜ!」

「……………」

ブランコの近くにいる一夏が、手を振りながら黒乃を呼んだ。着実な歩みだった黒乃

は、ピタリと制止して振り返った。駆け足でブランコへと向かう黒乃を見て、私は安心感が胸に宿る。それは、別に隠れているのがばれなかったとか、そんな理由ではない。私はきつと、私の知らない黒乃に怯えたのだろう。

妹を普通でないとか、そんな言い方は私だつてしたくない。しかしあれでは、私の知っている黒乃とはかけ離れている。まさか、こんな事が待ち受けているとは。不安を拭いきれない私に対して、東のテンションは割り増しになっている。その興奮の仕方は、まるで仲間でも見つけたかのような感じだ。

「むっふっふ……。良いね、あの子！ 凄く気に入っちゃった！」

「……断つておくが、私の妹に余計な事をするなよ。私は、お前に何をするか保証ができません。」

「んっ……。それこそ、保証は出来ないかな。見るだけで解る異常性を、あの年で持つてる子なんて初めて見るもん。」

「私の妹は、異常などでは……！」

「そうかな？ ちーちゃんもさ、本当は解ってるんでしょ。あの子は、確実に普通じゃないよ。」

東の言葉は、凶星である事に違いはなかった。ほんの少しだろうと、黒乃に対して疑念が沸いたのは否定しようがない。私は言い淀む他ないが、その事が悔しくてたまらな

かった。黒乃の事を心から信じてやれない私自身に、どうしようもない苛立ちを感じる。

「ま、普通なんて言葉は、価値観の押し付けでしかないんだけどね。何をもって普通じゃないとするかは、ちーちゃん次第だし。だから、私の言葉は気にしなくて良いよ。」
「……………」

「あ、そうそう。あの子が何を考えているか知りたいしき、例の件はしつかり承るよ。」
そう言うとき東は、隠れながらほく前進でその場を去る。日頃は運動と無縁だろうに、東はそのそれは異様に速度があつた。もしや、家ではあれで移動しているのか……？
そんな事は、気にするほどの事でもないな。私は盛大にため息を吐くと、黒乃へともう一度視線を向ける。

「黒乃……。いずれは、話してもらうからな。」

東は承ると言ったのだから、黒乃が元に戻る可能性が少し増えた。もはや手段など、私にとってはどうでもよく思えた。今は話してもらえなからうと、元に戻った暁には今の出来事に関して事細かに問い詰めてやる。だから黒乃……。お前は、お前の思う通りに生きれば良い。私がいままで、その姿を見守っていよう。

ただ、やはり危険な遊びは感心しない。元気なのはいい事だが、何にでも程度というものがある。無いとは思いたいだが、本当に怪我をする前に対策を取らねば。それなら

ば、帰ってプランでも練る事にしよう。私も見つからんように気を付けないとな……。
黒乃が油断がならん事が解ったので、私は最大限に気配を消して公園を後にした。

第2話

とある休日、時間帯としては昼の12時前ほどか。俺はあまりにも暇過ぎて、自室のベッドの上を意味も無くゴロゴロしていた。暇だ……暇過ぎる。あれだよ、どつぷりネットやら何やらに囲まれた生活の弊害だよ。よく暇じゃ無かったな、小学生の頃の俺よ。携帯もねえ！PCもねえ！漫画もそれほど置いちゃいねえ！オラこんな家え嫌だ……って、止めとけ止めとけ。居候の身が、何をほざいておるか。

黒乃ちゃんのご両親は、俺が憑依した時点で故人だった。特に身寄りという身寄りもなかったみたいで、俺はご近所付き合いの深かった織斑家へ居候中となっている。両親が遺してくれた財産なんかは、ちー姉が管理してくれているようで、俺の生活費はそこから引かれていくのだろう。となれば、あまり贅沢も言っつてられない。と言うよりは、言いたくても言えないんですけど。早く自由に買いたい物が出来る身になりたいものだ。

うーん……暇だなあ。この際だから、もう少し真面目に今の現状を考えてみた方が良いのかも。何気にITCHーの幼馴染、なんて言う特大の巻き込まれフラグが建っているのだから。先の長い話はこの際おいておくとして、まず何から考えるべきか……。俺は気だるいながらも上半身を起こして、背中を壁へと預けた。

まず考えるべきは、俺が憑依しちゃっているこの子……藤堂 黒乃ちゃんの事だ。原作を知っている身からすれば、不可解極まりない。まず原作に、そんなキャラは存在しない。しかも、後に現れるであろう剣道ガールを差し置いてファースト幼馴染とか……どうということなの。まあもしもの数だけ世界はあるって言うけど、それから話を進めたって仕方が無い。

考えられる可能性としては、黒乃ちゃんも同じくオリ主の類だったとか？ うーん……そうした場合TS転生なのか、なんなのか。まず間違いないのは、俺の魂が黒乃ちゃんの肉体を着ぐるみが如く使用してることだよね。事故にあつたらしいけど、もしかして黒乃ちゃんも既にその時……。って言うか、そうでないとだいたい申し訳ないぞ。いや、それはもちろん魂が生きてくれればいいけど。黒乃ちゃんの肉体に黒乃ちゃんの魂が残っていると、俺は肉体を半ば奪い取ったに等しいのだから。

おっと、少し考えがずれてるな。えっと、黒乃ちゃんが転生者かもって話だっけ。そうだとすれば、少しでも痕跡が残っているはずだ。俺はベッドから立ち上がると、黒乃ちゃんの勉強机へと向かう。適当に机を物色すると、漢字の書き取りノートを見つけました。どれどれ……。ノートを開いて内容を見ると、それ相応の筆跡で小学1年生ほどで学ぶ漢字しか書かれていない。他のノートも同じで、どう見ても子供が書いたようにしか見えない。

もし転生者ならば、こういった所にボロが出ると思ったんだけど。まあ……性格にもよるけどね。神童気取りか、はたまた能ある鷹はなんとやらか……。後者かも知れないと考えると、決定的な証拠が欲しいものだ。何か無いか物色を続けると、良い物を見つけた。机の引き出しの奥の方に、隠してあるかのように置いてある。俺が引つ張り出したそれは、黒乃ちゃんが記していた日記帳らしい。

さて、鬼が出るか蛇が出るか。日記帳を頭から目を通してみるが、やはりその字に安定感はない。子供の字そのものだし、何より内容が……。飽き性のこの時期の子供と比べれば、黒乃ちゃんはマメな性格だったらしい。毎日を過ごす中で、大きな事やほんの小さな事でも何かしら記録されていた。

しかしだ……。問題なのはその内容だよ、黒乃ちゃん。これさ、大半がイツチーの事しか書いてないんですけど。『きょうは、いちかくんと』って綴りが、数え切れないほどある。ちー姉ですら、話に出てくるのは稀だ。あつ……。今日は一夏くんが、知らない女の子と話してましたって書いてある。

あれだね、黒乃ちゃん。君はこの年にして、ヤンデレの才能があるよ。実際コワイ。幼女のヤンデレとか、一部の人間からしたらたまらんだらうね。いや、俺も好物ですけど。どっちかっていうとMだし。ふむ……。幼女に折檻される……。か、悪くないな。

いやいやいや、何を性癖の話になつてんだ。うくん……。しかしこれだと、黒乃ちゃん

が転生者つて可能性もほぼ消えたな。二次創作のパターンでしかないけど、転生したうえでイツチーと添い遂げようつてのはそれこそ稀だし。イツチーに落とされるパターンは、割と見かけるほうだけど。

ま、これでもようやく安心できた。俺は日記帳をパタンと閉じると、勉強机にそつと置く。今一度ベッドに座つて、今後はどうするべきかを考えよう。まず第一として挙がるのが、そもそも原作に関わるべきか……だよな。黒乃ちゃんは女の子だから、ISを動かせるのは当たり前のだ。

だから、別に無理してIS学園に行く必要もない。けどな……やつぱり自らこの世界に來た俺としては、原作の登場人物と仲良くなりたいたいという願望はある。だけどなあ……俺は、平和主義者とか事なかれ主義者とかいうか。とにかく、争いの類いは大の苦手だ。

でもIS学園は、それと対極とも言える場所だ。スポーツの一種とは言え、銃で相手を撃つたり剣で斬つたり……。逆もまた然りと思うと、それだけでぞつとしてしまう。そんな俺が、IS学園に入れるかどうかすら謎だ。黒乃ちゃんは、どんな未来を望んでいたのだろうか。

うん……。まだISが誕生してもないのだから、時期尚早かな。だとすれば、もうちよつと目の前の事に集中しよう。俺のすべき事……それは、黒乃ちゃんの分もしつ

かり生きる。それは間違いなく、俺に課せられた使命のようなものだ。ならば、黒乃ちゃんの意志はしつかりと継いでいこう。

手始めに、この日記帳だな。もしかすると、黒乃ちゃんも復活するかもしれないじゃないか。その時に黒乃ちゃんが困らないためにも、毎日の出来事を記していこう。俺はそう思い立って、椅子に腰掛け日記帳と向かい合った。最後の日付は、1年近く前になるのか……。とりあえずは、今日から日記を再開すると書いておけば良いだろう。

俺はランドセルから筆箱を取り出すと、シャープペンシルを手に納める。カチカチとノックして芯をわずかに伸ばすと、さきほど思った通りの文字を書こうとする。しかしどうした事か、ペン先を紙上へ置くまではよかった。そこからいくら力を入れようと、全くもって腕が動かないではないか。

……って、俺は俺の意思を文字にもできませんやーん！本末転倒、企画倒れもいところだよチクショーっ！面倒なこの状況についてムカツときた俺は、日記帳を天井めがけて放り投げた。すると日記帳は綺麗な弧を描いて、自室のゴミ箱にシュウウウーツ！超エキサイティン！

違う違う！このすぐ悪ノリする癖を、どうにかせねばならん。よりによって、その中に入るかね。そういえばだけど、今日は鼻の調子が悪かった。だからゴミ箱の中も、俺が鼻をかんだティッシュすらなかったような……。ウギャアアア!?黒乃ちゃんの日

記帳がああああつ！俺が慌ててゴミ箱へ手を伸ばすと、タイミングが悪く部屋の扉を誰かがノックした。

「黒乃。入るぞ？お昼ご飯ができたから……ってどうかしたか。」

君かイツチー……。喋りさえ出来れば、事情を説明すれば済む話だ。だが、それが不可能だから性質が悪い。つまりこのままゴミ箱へ手を入れると、ゴミ漁りする光景をイツチーに見られる事となる。俺は別にそれでも構わないが、イツチーにホの字な黒乃ちゃんには酷な話である。

ここはいったん放置をして、後から回収しよう。堂々としてればばれないだろう。何と言ったって、相手はあのイツチーだぞ。そうと決まれば、飯にしよう。ピュくヒュルルルく♪今日のお昼はなくなろつと。そうやって心の中で誤魔化しながら、イツチーの隣を通り過ぎた。



「よし……完成つと。」

自宅の台所にて、一夏は昼ご飯の調理を行っていた。今日のメニューは、オムライスだ。多少はいびつな形になっているが、小学1年生の一夏ならば上出来と言っていい。

本来は年長である千冬がすべきことなのかも知れないが、彼女は家事の類がからつきしだ。一夏の方は器用な物で、試しにやってみたらできた……みたいな感じだ。

それ以来、家事は一夏の役割となつてゐる。本人も千冬の負担が減るならばと、率先してしているようだ。一夏はオムライス3つを皿に盛ると、テーブルへと運んだ。後は役者をそろえるだけだ。とりあえずエプロンを外して、リビングから庭へと通じる窓を開く。そこに居たのは、竹刀で素振りをする千冬だ。

「千冬姉、ご飯だよ。」

「ん？ああ……。もうそんな時間か、解つた。」

「風邪ひかないように、しっかりと汗を拭いてね。ところで、黒乃は？」

「黒乃？今日は部屋に籠りっぱなしだろう。」

「そっか……。」

最近の黒乃は、部屋に閉じ籠つてゐる場合が多い。それこそ、一夏が引つ張つて行かねば姿すら見せない日もある。事故にあう前は、そんな事は無かつた。用事も無いのに外へと飛び出して、きつかり食事の時間に帰つて来る。元気という言葉そのものな女の子というのが、一夏の認識だった。それだけに、少し表情を曇らせる。

「一夏、そんな顔はするな。きつと黒乃も、その内に調子を取り戻す。」

「うん……そうだよな。」

「解つたら、黒乃を呼んできてやれ。辛気臭い顔はダメだぞ。」
「うん！」

千冬の言葉に気分を切り替えた一夏は、ドタドタと階段を駆け上がり黒乃の部屋を指した。黒乃の部屋は織斑家の余った一室で、場所としては一夏の部屋の向かいとなる。部屋の扉の前へ立つと、一夏は数回ノックをした。前までは遠慮なしに開けていたが、千冬に目撃されてこつぴどく叱られたのだ。

曰く、女の子の部屋をノックもせずに開けるとは何事か！……との事。一夏にしてみれば相当なトラウマなため、かなり慎重になっている様子だ。しかし、黒乃の部屋から返事は無い。返事が無いのは、当たり前か。一夏はそう思ってしまうが、どうにも心が痛くなるのを感じた。

ただ、いつまでも黒乃から出てくるのを待っていても仕方が無い。眠っているとかの理由で、ノックの音が聞こえていないのかも。そう思った一夏は、ノックはしたから大丈夫だと自分に言い聞かせて黒乃の部屋へと入った。すると黒乃は寝ているなんて事は無く、何か突っ立っている。

「黒乃。入るぞ？ お昼飯できたから……って、どうかしたのか？」
「……………」

突っ立っている黒乃に声をかけても、振り向きすらしない。むしろ一夏には、理由が

あつて振り向けないように見えた。注意深く黒乃を観察するように見ていると、しばらくして何事も無かつたかのように一夏の隣を通り過ぎる。黒乃が立ちふさがつて見えなかつたが、どうやらゴミ箱の前に立っていたらしい。

どうしてゴミ箱だ？一夏は思った。不思議そうに近づいて中を覗いてみると、その中に入っていた物を見て驚愕した。それは、黒乃がとても大切にしていた日記帳だった。母親にプレゼントされた物だと言つて、自慢気に見せられた事を一夏は良く覚えていた。だとすれば、今となつては形見に等しいはずなのに。

「黒乃……。」

黒乃の事情を知っている一夏からすれば、答えなど見えているのと同じだった。黒乃はきつと、書けなくなつてしまつたんだ。自分の言葉や想いを記しておく。その事が出来なくなつた自分には、もはや無用の長物だ。黒乃は、そう言いたいのだろうか……。だからと言つて、そんな悲しい事は無いじゃないか。

そう思つた一夏は、ゴミ箱の中から日記帳を回収した。面と向かつて本人に返す事を第1に思いついたが、そしたらまた捨てられてしまうかもしれない。一夏はズボンの後ろ側を引っ張ると、背中とズボンの間に隠すようにして日記帳を挟んだ。そうして、自然な様子を意識して黒乃を追いかける。

リビングへと戻ると、黒乃は行儀よく椅子に腰掛けて、ジツとオムライスを見つめて

いた。一夏も同じようにして、椅子へと腰かける。それと同時に、千冬もリビングへと現れた。手にはタオルが握られているため、顔でも洗っていたのかも知れない。とにかく、これで全員が揃った。千冬も座つたのを見計らって、一夏がいただきますの音頭を取る。

こうして織斑家の昼ご飯が幕を開けたが、一夏は先ほどにの件のせいかな黒乃が気になつて仕方が無い。様子を窺っていると、目が合つてしまう事が何度もあつた。その度に一夏は、適当な言葉ならべてそれを誤魔化す。黒乃は気付いていないようだが、千冬には様子がおかしいのがバレバレだった。

こうして一夏にとつては、気が気でない昼食が終わった。一夏は、今度はごちそうさまの音頭を取る。黒乃は手を合わせて会釈を見せたとせば、すぐさま階段を上つて行つた。去る背中を引き留める暇も無く、一夏は小さく溜息を吐いた。どうせ黒乃関連だと踏んでいた千冬は、自分から一夏に質問を投げかける。

「一夏。黒乃と何かあつたのか。」

「直接何かがあつたわけじゃないけど……。これ、黒乃の部屋のゴミ箱に捨ててあつて。」

「これは、黒乃の日記帳……。本当にこれが？」

一夏は隠していた日記帳を取り出すと、暗い面持ちでそれを千冬に手渡した。日記帳

に關しては、千冬も一夏と同じく大切な物だという共通認識だ。なぜ捨てたか、それも一夏と同じ考えを浮かべる。千冬は眉間に皺を寄せて、目を細めながら日記帳を眺める。

「……中は覗いてないだろうな。」

「流石にそれくらいマナー違反だつて解るよ……。」

「そうか、なら良いが……。」

千冬は一夏を睨むようにして問うが、どうやら黒乃の秘密は守られているらしい。読んだところで、純粋な一夏は自分の事が多く書かれている……程度にしか思わないはずだ。

しかし、中身を確認してみない事には、黒乃の真意がはかれないのも事実である。本人の了解を得るべきだろうが、千冬はそれを悪手と判断した。その場で黒乃に謝罪を述べる、日記帳をなるべく読まないように最後のページの方から開く。

小気味良くページを捲つていくと、今日の日付を見つけた。しかし、肝心な内容は書かれていない。よく見ると、文章を書く欄の始まりに黒点が確認できる。更に目を凝らして見ると、千冬はそれが何だか理解できた。恐らくだが、必死に自分の想いを書こうとした痕跡だろう。

だが、書けなかった。だから黒乃は……。予想通りに、点と線が繋がってしまった。

悲痛な様子で日記帳を閉じる千冬を、一夏は心配そうに見つめた。そんな視線に気づいているのか、千冬は早急に心を落ち着かせる事に努める。しゃがんで一夏と目線を合わせる、気丈に振る舞いながら告げた。

「黒乃は、苦しんでいる。解るな？」

「うん……もちろん。」

「だから私達は、家族として……黒乃を支えていかねばならん。」

「俺に……何がしてあげられるかな？」

「自分のできる精一杯の事をしてやれ。そうすれば、黒乃に想いは伝わるはずだ。」

「俺にできる精一杯……。ああ、解ったよ千冬姉！」

千冬の言葉に思うところがあるのか、一夏は表情を明るくして元気に答えた。素直な弟の様子に、千冬は安心したように小さな溜め息を吐いた。そして、手元にある日記帳を眺める。どうにもこれを見てみると、少し気が滅入るのを感じた。

「とりあえず……これは私が預かろう。」

「黒乃が元に戻ったら、返してあげないとな。」

「フフツ、そうだな。いつの日か、必ず……。」

今は書けずとも、またいずれ日記帳が必要になる時がくる。千冬と一夏は、そう信じていた。千冬は最後の日付のページに、しおりを挟んでおく。こうしておけば、また黒

乃も書きやすい。ここへ次なる記述が増えたならば、そこから黒乃が再び始まる証だ。

◇

イツチーの作ったオムライスを堪能した俺は、すぐさま部屋へと戻った。本来なら片付けの手伝いをするのだけれど、残念ながら他にすべき事がある。ゴミ箱に放置したままの日記帳を、とつとと回収しなくては。早くしないと、俺の鼻水が染み込んでしまふぞ。

部屋の扉を乱暴に開くと、一直線にゴミ箱の中を覗いた。しかし、さつきまで入っていた日記帳は、跡形もなく消え去っていた。Wow! イツツア・イリユージョン! っておい! おかしいでしょうが! なんてゴミ箱の中身の物が、無くならなきゃならんのです。

はっ!? さては……このゴミ箱は、どこかへと通じるワームホールだな! よっしゃ、そうと決めれば次元の旅に……。……止めよう。誰もツツコミを入れてくれるでもなし、こんなに寂しいボケはない。そう言いつつも、頭はゴミ箱に入りかけてますけれども。うーん、本当にどこへ消えたんだ? 考えられる可能性は、イツチーが持つて行つたしかない。喋る事ができないから、当然イツチーに質問もできないし。まあ……あくま

で可能性で、イッチーがそんな変態的な行動をとるとは思えないけど。と言うか、もしそうなら物語自体が破綻するわ。一気にIS学園がピンク色に染まるぞ。

ま、良いか！なくしてしまったものは、しようがないと割り切れば。どうせ、ただの日記帳じゃないか。なんなら、そのうち新しく買えば問題ないだろう。うんうん、そうしようしよ〜つと。なんだか考え過ぎで疲れた俺は、ベッドへとジャンプして飛び込んだ。腹も一杯だし、眠くなってきた……。とりあえず、寝よう……。お休み〜。

第3話

夕暮れ時の剣道場に、竹刀同士がぶつかり合う音が響く。ここは篠ノ之道場……モツピーのお家である。ちなみにだが、俺は決してモツピーをデイスるつもりでそう呼んでいるつもりはない。箒って、綽名付けるのが難しい名前なんだよねえ。いくつか候補は考えたけど、結局はモツピーに落ち着いたのである。

篠ノ之道場に居る時点でお察しだが、現在の俺達は小学2年生に進級した。原作イベントであるモツピーの苛められている現場には、遭遇しなかったんだよな。知らない内にイツチーとモツピーが仲良くなつて、俺はイツチーの付き添い程度に道場へと足を運んでいた。

どうしても格闘技の類だけは勘弁だ。さっきから、延々2人の打ち合いを眺めてる。いや、訂正しよう。眺めてるって程の事は無くて、ウトウトしながらたまに様子を見るくらいだ。クツソ……眠い。やっぱり体が幼いせいか、深夜アニメを見るのはキツイか……。まず深夜まで起きとかないといけないし、深夜に起きているのがばれないようにしないとだし……。とてつもなく気を遣うよ……。だけど、ちー姉に見つかるよりはかなりマシだろう。

でも……眠い……。あつ、ヤベツ……首が定期的にカクンと動き始めた。このまま行くと、寝落ち確定だろう。喋らんし表情が出ないしで、そのうえ居眠りとか……。いくら付き添いでも……それは流石に失礼……。Z z z……。ハッ!?ね、寝てない……。あたしや寝てないよ!あれだ、目を凝らして2人の打ち合いを見て……。Z z z……。いかん……逆効果だ。竹刀のリズムのいい音が、耳に心地よくって眠気を誘う。

「どうだね黒乃くん。たまには、見ているだけじゃなくてやってみないか。」

(コクン、コクン)

「そうか、解った。箒、支度を手伝ってあげなさい。」

「は、はい。」

へ?何……どうかしたの?モツピーのパパンは、俺にいったい何を問いかけたんだ。そんなもつて、1人で何を納得しているのだろう。そうやってボーツとしたままでいると、モツピーが俺の身体をまさぐり始める。ウへへ……くすぐりたいじゃないか、モツピーよ。俺は触られるよりも、モツピーの身体を触りたい。ISにおける未来の筆頭のおっぱい要因だし、ツルペタ幼女の状態は貴重だ。モツピーのまな板を、俺に洗濯させてはくれまいか。

なんて考えていると、俺はいつの間にか防具を纏っている。……なんで?どうしてこうなった!どうしてこうなった!……あれ?本当に、どうしてこうなったんだっけ。

イツチー……そんな期待の眼差しで見られたって、俺はこういうのはからつきしだぞ。何より眠いし、もう本当に何が何だか解からない。あれだ、剛な拳よりもストロングな柔の拳の使い手曰く、激流に身を任せようかする……ってね。

面を被って竹刀を握って立ち上がった俺は、道場の中ほどで構えを取った。見よう見まねだけど、まあ適当にやるときやなんとかなるって。こういうのは、ノリとテンションが大事だつてじつちやが言つてたら良いな。見るからにやる気はありますよオーラを醸し出していると、俺の目の前に立ったのはイツチーでなくモツピーだ。あくヤツべ、強者オーラ出ちやつたかなくこれ。つべーは、マジつべーは。マジ……ヤバくない？初心者だよ、俺。いきなしモツピー相手とか、鬼の所業であつて……。

「始めー！」

「やあああああつー！」

いや、始めじゃないよパパン!?何も始まらないって、もうすぐ終わっちゃいますよ!?つて言うかモツピーもやあああああつー!じゃなくてだね、もうちよつと気合を落してくれたつて良いんだよ。手加減されてもお兄さん怒らないから、むしろ喜びの舞を踊っちゃうから。ああ!もうダメだ、本当に眠い。こんな時だつて言うのに、足元がふらついて来てしまう。このままでは、手痛い仕打ちを……Z z z……。

「なつ……!?!」

ホワア!? また一瞬だけ寝てしまった。何やらモツピーの驚く声で目が覚めたが、いったい何があつて……ZZZ……。あ、ダメだコレ……。本当に夢か現かつて奴だ。俺の意識は、覚醒と寝落ちを反復横跳びが如く繰り返す。既に俺が解るのは、なんとなく立っているという感覚的な事だけだ。更に言つてしまえば、足元がフラフラしているためその感覚すら怪しく感じられる。

なんというかも……雲の上でも歩いているのではないか、と言つていくくらいには夢心地だ。え〜つと、今は何をやってるんだっけ。あつ、そうそうそう……剣道だ剣道。攻撃しなきゃ、いつまでたつても終わらないよね。適当に前に踏み込みつつ、竹刀を振つてみよう。そうすれば隙だらけだろうし、この変な感覚からも逃れられるハズだ。そう思い立つた俺は、両足へと最大限の力を込めた。

そのまま飛び出るように前に出ると、竹刀を思い切り縦に振る。するとスパァン! という耳に心地よい音と同時に、俺の手には確かに何かを打った感触が残る。竹刀で防がれたのだろうと思つていたが、いつまでたつても反撃はこない。これは流石に変だと感じた俺は、寝ぼけまなこでモツピーを見た。するとモツピーは、尻もちをついているではないか。もしかして、スリッパでもしたのかもしれない。

「柳韻さん。判定しないと。」

「あ、ああ……。面あり、一本!」

はい……?いつの間に、勝負がついていたのだろうか。いくら俺でも、面くらい入れられれば目が覚めると思ったのだけだ。これは、よほど重症だと思つた方がいいな。モツピーは、俺とは真逆で気合いが入り過ぎてしまったのだな。早く助け起こしてあげないと、男たるもの紳士たれ。本当に、いろんな意味で紳士たれ。俺は籠手を外して、モツピーに手を差し伸べた。

「ず、済まない……。ありがとう……。」

モツピーは俺の手を掴むと、立ち上がろうと身体に力を込めた。手を差し伸べたはいいけど、むしろ俺の方に力が入らないや……。なんとかモツピーが立ち上がるまではもつたが、俺は前のめりに倒れそうになる。そのままモツピーに抱きつく形で支えられ……。抱きつく?……。きたああああ!女の子に触れたああああ!なんとという新発見だ。わざとでさえなければ、こうして女の子にも触れるのか!

「ちよつ、こら……。いきなりなんだ!」

モツピーは俺を振りほどこうとするが、そう簡単にはいかんぞ。またとないこのチャンス、しつかりものにしなくては!そうと決まれば、クンカクンカ!面が邪魔でいまいちモツピーの匂いを嗅げないが、俺はとにかく必死で鼻から息を吸う。クンカクンカ!むう……。女の子特有のフローラルな香り!そしてほのかに感じる胴着に染み込んだ汗の香り!たまらん……。病みつきになりそうだ。

「い、一夏！これはいったい……どういふ事なんだ。藤堂は、その……。」

「さ、さあ？俺にもよく解らないけど……。」

「箒と、健闘を讃えあおうとしているのではないか？」

「父さん……。そう……。だと良いですが。」

「そうそう、健闘を讃えてるんです。あれさ、言葉と表情で表せないから仕方がないよね。だからどさくさに紛れてとかじゃなくてね、スーハー！これは合法的なあれだからセーフセーフ。モツピーのパパンは、大変に良いことを仰ってくれた。スーハー……スーハー……フヒヒヒヒ……。」

「黒乃。もう離してやっても良いんじゃないか？」

「そ、そうだ……。藤堂の気持ちは解ったから、いい加減に苦しいぞ。」

「俺は止めろと言われれば止める良い子です！少し名残惜しいけど、俺はモツピーを開放した。俺から離れたモツピーは、何かこちらの様子を伺いつつモジモジしている。ははくん……さては、やつぱり物足りないんじゃないのかい？お兄さんとしてはいつでもウエルカム！さあ、この胸に飛び込んでおいで！」

「良ければ、その……黒乃と、そう呼んでもいいだろうか？」

「あ、なんだ……。そういう話ね。うんうん、それはもちろん構わない。俺は首を傾かせて、モツピーの言葉を肯定する。するとモツピーは、嬉しそうな表情を見せた。ふむ

……イツチーと一緒にの事が多いから敬遠されがちだったが、名前で呼んでくれるなら心配なさそうだな。

それだけでなく、目立った友達はイツチーくらいしかいない。前世も友達は少数だったけど、遠ざけられはしなかったからな。俺が教室に入ると、一瞬だけ静かになるもの。そんな環境で、友達が増えるのはありがたい事だ。まあ……喋られさえすれば、絶対にそんな事はなかったと思うけど。

「黒乃くん。君さえ良ければ、本気で剣道をやって見ないか？君ならきつと、すぐに上達するはずだ。」

パパンはそんな事を言うが、正直なところで乗り気ではない。ただ……イツチーとモツピーの視線が痛いのだ。否定をすれば、肯定するまで説得される未来が見える。常々イツチーは、俺も剣道をやれと言っていた。やはり主人公を中心として、世界は回る仕組みなのかもね。

逃げ場はないと悟った俺は、首を頷かせてパパンに返事する。勧誘したのは向こうなのに、パパンはそうかと短く答えるのみだ。イツチー&モツピーは大喜びしてるし、言うことはないか……。痛い事は総じて苦手だけれど、習うからにはしっかりと頑張ろう。

その日は時間が遅いとかで、本格的に始めるのは次回からという運びとなった。そういえばだけど、ちー姉の許可なしでも平気だろうか？そのあたりは、イツチーが詳しく

話せば大丈夫かな……。着替えてイッチーと共に帰路をいく俺は、そんな事ばかり考えていた。



「父さん、ただいま。」

「こんにちは、柳韻さん！」

「……………」

「ああ、御帰り箒。一夏くんと黒乃くんは、よく来たな。」

長い階段を上ると、境内では父さんが掃き掃除をしていた。快く一夏と藤堂を迎え入れるが、表情は厳格そのものだ。顔に出ないだけだと信じたいが、娘の私ですら父さんのくだけた表情は見た事が無い気がする。そのため怖がられがちな父さんだが、一夏は大して気にした様子は見られない。藤堂は……解からないと言うのが正直なところだ。何やら事情があると一夏から聞いてはいる。

喋る事が不可で、表情をつくる事も不可……。本当に何を考えているか解からないせいか、時折気味悪く感じてしまう。ただ、藤堂は必ず会釈を行う。それだけで、最低限の礼儀は心得ているのだなというのは伝わる。いくら事情があるとはいえ、不遜な態度

を行つていいはずも無い。そこらの藤堂の行いは、かなり好感が持てる。仲良くなれそうかと聞かれれば、微妙なところだが。

「2人とも、すぐに着替えてきなさい。」

「はい！」

「黒乃くんは、いつも通りかな？」

「……………」

私の家は、神社兼剣術道場だ。千冬さんとの縁もあつてか、最近は一夏も通う様になつた。そして、一夏ある所に藤堂あり……。藤堂は手習いを受けている訳ではないが、毎度の如く一夏に付き添つて来る。それが本意なのか不本意のかは、それこそ解るはずも無い。一夏が言うには、黒乃は嫌なら着いて来ない……。とかなんとか。私としては、どうせ来るなら一緒にやればいいと思うが。

だが、私から藤堂に話しかける事はまずない……。それでなくても引つ込み思案な私は、きつと心のどこかで藤堂を敬遠してしまつているのだろう。それはいけない事だと、頭では解つている。しかし、どうしても一歩が踏み出せない。考えたくない事だが、一夏の事も関連しているに違いない。私は多分だが、藤堂に嫉妬している。いつも一夏に手を引かれ、必ず一夏の背後か隣に居る藤堂の事を、羨ましく思つているのだろう。「箒、何やつてんだ？早くいこうぜ。黒乃は、また後でな！」

「ああ、今行く。」

「では、私達も行くのか。」

「……………」

藤堂は父さんに手を引かれて、道場の方へと向かつて行つた。私達が着替えている間に、先に藤堂は道場に向かうのが通例だ。……父さんは、藤堂の事についてどう考えているのだろう。ポーカーフェイス同士で、何か通じる所でも……？いや、藤堂が好きで無表情でいるわけでは無いのを忘れてはならん。そんな事を考えていないで、私も一夏を追いかけなくては。

胴着へと着替え終えた私達は、急ぎ道場へと足を運ぶ。そこには父さんが既に待ち構えていて、いつでも練習が始められる状態が整っていた。私達2人の姿を確認するや否や、すぐさま父さんの指導が始まる。一方の藤堂はと言うと、道場の隅でちよこんと正座で座っている。これも通例で、まるでそこが自分の居場所だと言いたげだ。もう少しは、遠慮をしなくても良いのだが……。一夏も黒乃が気に入っているのならと、あえて何も言わないらしい。

……こう言つては何だが、藤堂ばかりに気を取られてはいけない。心に揺らぎがあつては、剣道なんてものは出来ないものだ。私は気持ちを切り替えると、意識を父さんの言葉へと向ける。そうして本格的に練習が始まるが、とりわけ何も特別な事は無い。基

本的な足の運びや、竹刀の振り方。そういった基本練習をした後に、実戦形式の打ち合いをする流れだ。だが、こういった地味な反復練習こそ強くなる秘訣だろう。

「……一夏くん。黒乃くんは、剣道をする気はないのかね？」

「俺も前に勧めてみたんですけど、首を横に振りましたから。黒乃にしては、珍しい完全否定ですよ。」

「藤堂が、どうかしたのですか？」

「私にはどうも、あの子がただ者には思えんのだ。」

私達の打ち合いがいったん止まると、ふと父さんが一夏にそんな事を聞いた。藤堂はイエスかノーを首で応える時があるらしいが、それは稀な事らしい。藤堂が首を横に振って否定の意味を示したと言う事は、よほど剣道をやりたくはないと、そういう事なのだろうか。しかし、父さんのいう事ももつともだ。もしただ者でないならば、その才能をここで腐らすにはもつたない。

私達3人の視線の先にあるのは、藤堂だ。それなりに距離があるためか、向こうはこちらが何を話しているかは聞こえていないらしい。しばらくの間を置くと、ついに父さんが動きを見せた。父さんは藤堂の方へ、静かな足音で近づいて行く。私達はその様子を、固唾を飲んで見守った。

「どうだね黒乃くん。たまには、見ているだけじゃ無くてやってみないか。」

(コクン、コクン)

「そうか、解った。箒、支度の手伝ってあげなさい。」

「は、はい。」

一夏は断られたらしいが、父さんの勧めには首を大きく2度動かして肯定して見せた。全く話が違うではないか……。服は……私服の上に防具でも構わないだろう。物は試し程度のものでしようし、父さんだつてきつと藤堂にそこまで求めてはいないはずだ。防具をつけると、藤堂はそれなりにやる気なのか自ら面を被つて竹刀を握り立ち上がった。道場の中ほどで竹刀を構えると、私と父さんは驚愕を覚えた。

「父さん……。」

「ああ、相手は箒だ。」

「え?でも……黒乃は初心者じゃ……。」

剣道を始めたばかりの一夏には、解らないかも知れない。しかし、藤堂の見せた構えは一朝一夕で成しえるソレではなかった。それこそ初めて竹刀を握るとは思えない……。姿勢から何から、どれを取つても完璧だ。私は思わず唾を飲みこむと、警戒心を抱きつつ面を被つた。そして私も藤堂の前まで向かうと、剣を構える。その瞬間に、藤堂の姿が巨大に見えた気がした。

これは、プレッシャーという奴なのか? 藤堂……お前はいつたい何者なんだ。いや、

落ち着くんだ。私の気の持ちようが、藤堂を大きく見せるだけに違いない。私が深呼吸を始める時、父さんは始めの合図を待ってくれたようだ。実際に対峙せずとも、父さんにはきつと藤堂の底知れぬ何かを感じているのかもしれない。この状況をいまいち理解していないのは、一夏くらいのもんだ。よしっ……父さん、いつでも始めてください。

「始め！」

「やああああー！」

「……………」

「なっ!？」

父さんが右手を振り上げると同時に、私は藤堂へと攻撃を仕掛けた。先手必勝！藤堂には悪いが、一撃で終わらせてもらおう。私は竹刀を藤堂の頭を目がけて振り下ろすまでは、本当にそう思っていた。しかし、あろうことか藤堂は、私が攻撃の素振りを見せる頃には既に攻撃を避け始めていたのだ。私がしまったと思った頃にはもう遅い。藤堂は少し横にずれただけで、竹刀は空振りに終わってしまった。

まぐれだ……きつとそうに決まっている。私はそう思いたかったが、その希望はすぐさま打ち破られた。私がどれだけ速く動こうとも、どれだけ鋭い太刀筋をみせようと、藤堂は私よりも早く回避を始める。その動きはまるで、私がどこへ攻撃するかが解っているかのようだ。私はまるで亡霊を相手にしているかのような、そんな錯覚をおぼえ

た。

（このままでは……！いったん退いて、体勢を……）

「……………」

「は、速っ……!?!」

竹刀を振り続けていたせいか、私はスタミナが切れてしまう。そもそも一撃必殺を狙っていただけに、焦りも大きかったのかもしれない。私は呼吸を整えようと、攻撃を止めて後方へとさがった。しかし、それこそが悪手……藤堂は、私が退くタイミングを待っていたのだらう。私が攻めを止めると同時に、藤堂は凄まじい速度で1歩を踏んだ。一瞬にして間合いを詰められた私は、対処する手立てなどない。

私の頭部に衝撃が走ると同時に、気持ちのいい竹刀の音が鳴り響く。けっこうな威力を持った藤堂のを喰らった私は、尻餅をついてしまう。私は尻餅をついた状態で、様々な事を考えていた。初心者相手に、何も手が出せなかった……。もちろん藤堂を舐めていたつもりはないが、それでも私にだってそれなりのプライドという物が有る。父さんもそれなりに衝撃を受けているのか、固まったまま判定を出さない。

「柳韻さん。判定しないと。」

「あ、ああ……。面あり、一本！」

道場内の静寂を破ったのは一夏で、何度か私や父さんを見てその言葉を放つ。父さん

の判定の声と同時に、私には負けという事実が重くのしかかってきた。剣道をやっていて、果たしてこれだけ悔しい思いをした事はあつただろうか。この悔しさは、きつと私
がそれだけ驕っていた証だろう。私が唇を噛み締めていると、ふと私の目の前に掌が差
し出された。見上げてみると、藤堂が私を引き起こそうとしてくれていた。

私は、その事が純粹に意外だった。表情が出ないだけに、冷たい人間だと勝手に思い
込んでしまっていたのだろうか。あまりに意外な出来事だったために、私は悔しさなど
どこかへ消えてしまっていた。むしろ何か、悔しさが清々しさに変わったかのような
……そんな感覚だ。私は藤堂の手を取ると、またも意外な事が起きた。藤堂の手は妙に
温かく、握っているとても安心する。

「ちよつ、くら……いきなりなんだ!」

藤堂が手に力を込めたのに合わせて、私も勢いをつけ立ち上がった。するとどうした
事か、藤堂はいきなり私に抱き着いて来たではないか。それでなくてもわけの解からな
い奴なのに、この行動は私からすれば意味不明だった。腕に力を込めても、なかなか藤
堂は離してくれない。私は思わず、一夏に助けを求めた。

「い、一夏!これはいつたい……どういう事なんだ。藤堂は、その……。」

「さ、さあ?俺にもよく解らないけど……。」

「筈と、健闘を讃えあおうとしているのではないか?」

「父さん……。そう……。だと良いですが。」

もし本当に父さんの言う通りならば、とてもに嬉しい事だ。私は何も出来なかったが、それでも剣道を通じて何か感じてくれたのならこれほどの事は無い。私はギュツと抱きしめられているだけだったが、少しばかり藤堂に倣って腕へと力を込めた。これで私も、それなりに藤堂へ健闘を湛えている事が伝わればいいが。なるほど、この感じ……。悪くは無い。

内弁慶の気がある私は、藤堂に負けず劣らず友人は少ない方だろう。そのために、こうしていられる同性の人間など……。いた試しがない。藤堂は確かに、何を考えているかは解からない。しかし、そんな事は関係ないのかもしれない。藤堂を異質と思わせるのは、私達が自分を普通だと思いきんでいるから。だとすれば、藤堂は苦しいのかもしれない。それでもこうして、精一杯の想いを伝えようとしてくれている。それにしても……。少し苦しい。

「黒乃。もう離してやっても良いんじゃないか？」

「そ、そうだ……。藤堂の気持ちは解つたから、いい加減に苦しいぞ。」

一夏も助け舟を出してはくれたが、藤堂は大人しく従ってくれた。この時に、私はようやく一夏の言葉を思い出せた。あれは、私が一夏に藤堂を紹介された時の事だ。少しばかり表情を曇らせる私に、一夏はこう言ったのだ。一夏は表情が出ないだけで、中身

はとても優しい良い子だ……と。私はその言葉に半信半疑だったが、まさにその通りじゃないか。優しくも無い人間が、藤堂の様な行いを出来るはずが無い。

こちらから歩み寄らねば、藤堂はどうしようもないじゃないか。そんな事にも気づかずに、ただ敬遠をしていた私は……なんと恥ずべき行為をしていたのだろう。藤堂は、ずっとこちらへ手を差し伸べてくれていたに違いない。だから私は、今度こそその手を取ろう。だからまず手始めに、名前で呼ばさせてほしいものだ。流石に率直に述べる事は出来ずに、私はしどろもどろながらに藤堂へ告げた。

「良ければ、その……黒乃と、そう呼んでもいいだろうか？」
「……………」

私がそう言えば、藤堂は確かに頷いた。それは明確な肯定の証。ああ……やはり、藤堂は本当に優しいのだな。私が、一夏関連で嫌な顔をした事も解っているだろうに。そんな事も気にしない藤堂は、もはや器が大きいとか……その辺りの次元なのではないだろうか。藤堂の……いや、黒乃のせっかくの厚意だ。甘えさせて貰うと共に、しっかりとその想いに応えられるよう励まなくては。

「黒乃くん。君さえ良ければ、本気で剣道をやって見ないか？ 君ならきつと、すぐに上達するはずだ。」

私達のやり取りが終わる隙を窺っていたのか、父さんが近づき黒乃へ声をかけた。上

達と父さんは言っているが、相当にレベルを落した話をしているに違いない。理由は解からないが、黒乃がそういうレベルでは無いことくらいは百も承知なハズだ。父さんの言葉に、黒乃は何も答えない。これはもしや、明確な答えが出て来ないパターンなのだろうか。

黒乃が剣道をする事に肯定的な一夏は、何か期待の眼差しで眺める。私としても、今となつては黒乃と研鑽を積んで行きたい。だからこそ、一夏に負けず劣らずの視線を黒乃へと送つた。迷つていたかどうかは定かではないが、しばらくして黒乃は首を縦に振ってくれた。つまりは、これからも黒乃と剣道が出来るという事だ。喜びが爆発した私と一夏は、思わず飛び跳ねながらハイタッチを交わす。

「今日は……もう調度良い時間だ。お開きにして、本格的な練習は次回以降としよう。」

「はい、ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「……………」

今日は時間も遅いと言う事で、父さんの言葉でお開きとなつた。元気に挨拶をする私と一夏。黒乃は、会釈でなく深々と頭を下げた。着替えを行わなくてはいけない一夏と若干のタイムラグはあるが、黒乃と一夏は家路へと着いて行つた。道場に残されたのは、私と父さんのみだ。私はそんな父さんの前に、正座で座って見せた。いつも父さん

は、練習の総評などをくれる。しかし今日は、なかなか口を開かない。

「……励め、そして強くなれ。」

「父さん……?」

「見て解つただろうが、黒乃くんは本物だ。剣を握るために、産まれて来たとも言つて良
い。」

「……………」

「才能のある物が努力すれば、それだけ伸びしろはある。だからこそ、励む事を怠るな。
自分を律し、いずれ今日の借りを返して見せろ……以上だ。」

「は、はい！ありがとうございます！」

父さんが目も開けずに放つた言葉は、私に対する激励の言葉だった。基本的に厳しい
父さんにしてみれば、大変に珍しい言葉だ。思わず面喰らつてしまふが、私にはとてつ
もなく力になる言葉だ。自分で言っていて気恥ずかしいのか、父さんはさっさと退場し
てしまった。最終的に1人取り残された私だが、何度も父さんの言葉を噛みしめる。

そうだ……今のうちに黒乃は私などすぐに追い抜いて、はるか先を進んで行くだろ
う。だけれどそれに挫ける事無く、ひたむきに強くなる事を怠るなど父さんはそう言
たいのだ。今日は触れる事すら出来なかった。それはもう人生で最大の借りになる事
すらありうる。返して見せよう……いずれ、私の力で。よしっ！と自分を激励した私

は、
ようやく道場を後にした。

第4話

俺が剣道を始めるようになって、数日が経過した。数日習ってみて解ったが、やはり俺には武道の類は向いていない……。黒乃ちゃんの肉体のスペックが高いのか、下手くそって事はないのだ。むしろパパンや皆には、良く褒められる。しかしなあ……苦手だなあ、相手を攻撃するのって。頭ではスポーツだからしようがない事だって、そのくらの事は理解してるけど……。とにかく、体が受け付けないんだよ。

だから剣道がある日は、総じてブルーな気分だ。放課後の道のりを、心の中で溜息を吐きながら歩いている。しかも……一人だ。イッチーもモツピーも、何やら用事があるらしい。それぞれ違う場所であつたが、先に道場に行つていてくれと言われた。ちえつ、つまんないの……。俺は思わず端に落ちていた小石を蹴り上げた。

物にあたつても仕方ないな。それこそ子供のする事だし、何より今蹴った石が人にでも当たれば問題だ。とにかく、早く道場に向かう事にしよう。今は俺一人だけど、向こうへ行けばパパンやちー姉が居るかも知れない。

……と、思っていた時期が俺にもありました。境内をあちこち見回つても、パパンの姿が見当たらない。仕方が無いので、胴着に着替えて道場へと足を運んでみる。しか

し、やっぱり此処にも人の気配は無い。何だろうかこれは、もしかして新手のイジメだろうか。そんな物は、昔からの経験で慣れてるが……。人を捜して、誰も見当たらないのは寂しい物だ。

だけど、おかしい事にどこもかしこも鍵が開いているな……。パパンが施錠を忘れるとも思えないし、開けっぱなしで出かけた……。つていうのも違うと思う。そう思うと、俺がこうして道場に入っているのも奇跡に等しい気がしてきた。それ以前に、少し不躰だったかも。むむう……。コレは、本気でパパンかママンを捜した方が良いな。2人そろっていないとなると……。お取込み中（意味深）とか？

……。よつしやあ！気合を入れて捜そう！いえいえ、あわよくばその現場に突撃できるかも……。なんて思ってますんから。ただ純粹に、礼儀正しく生きようとしているだけだから。そう思い立った俺は、竹刀やら防具やらを道場に置いてパパン&ママンの搜索を開始……。の前に気付いた。そっちの方が、よほど不躰じゃない？……。自問自答するまでも無いか。こうなったら、イツチーとモツピーの到着を待つしかないな……。

でも、ちよつと待てよ。どこもかしこも施錠されていらないと言う事は、もしかすると『あそこ』も開いているかも。まあ……。ちよつとした暇つぶしにもなるし、少しくらいなら大丈夫だろう。今度こそ俺は、ある場所を目指して歩き出した。俺が向かったのは、道場と隣接する倉庫のような場所だ。ここには様々な備品が点在していて、好奇心の強

い俺からすれば入って見たかった。

倉庫には、道場内からも入れる仕組みになっている。俺は道場の床をペタペタと歩いて、奥の方へと進んで行く。少し進めば、そこには倉庫へと通じる扉が現れた。戸口を観察してみると、やっぱり鍵はかかってない。しめしめ……危ないからとかで入らせて貰えなかったが、まさかこんな形でチャンスが訪れるとは。俺は戸口へと手をかけると、ゆっくり横へとスライドさせて開いた。

道場が長い年月を送ってきたのを示すかのように、ゆっくり動かすと素直には開いてはもらえない。もう少しだけ力を込めると、音を立てながらもなんとか開いてくれた。俺は開いた入り口を眺めてから、右左を確認して倉庫へと足を踏み入れる。どうにも倉庫の中は、埃っぽくてうす暗い。時間帯がもう少し遅ければ、完全に何も見えなかっただろう。

暗い中で目が慣れて来たのか、だんだんと倉庫内の全貌が明らかになって来た。俺は倉庫の中心に位置する場所で周囲を見渡すが、まあ……蓋を開けてみればとかいうやつだ。解っていた事だけど、やっぱり予備の防具とか竹刀がしまつてあるだけのようだ。どっちかって言うと、古くなったからしまわれた感じかな。ここで暇をつぶすのは、少し無理があるかも。うん……？あそこの籠に入っているのは、木刀じゃないか。

おーっ！木刀なんてあったんだ。竹刀よりかは、こつちを持って見たかったんだ。

ゲームとかで良く見るような、洋式の剣ももちろん好きだ。だけど、俺の和風好きは揺るがない。完全に俺の中では木刀。洋式の剣である。少し振るくらいなら、怒られないだろう。事情は話せないけど、説教を受ける覚悟で！それくらいをしても、木刀は振ってみたかったのだ。

俺は籠の中に入っている木刀の内から、適当な一本を拝借する。そして急いで道場へと戻ると、柄をしつかりと握ってその場で構えてみる。うむ……やはり木刀の方がしつくりくるな。これで殴られたらとかは想像したくないけど、たまにはこうやって剣士気分を味わうのも悪くはない。よしっ……そうだな、試しに一振りだけして大人しく元の場所へ返しておこう。心残りが無いように……俺は、全力の力で縦に木刀を振った。

しかし、どうした事か。俺が思い切り振り下ろすと同時に、木刀は日本刀で言う鏢あたりの部分からポッキリと折れてしまうではないか。それはもう強烈な木の押し折れる音が響いて、刀身のほうは道場の床へと叩きつけられる。木と木が打ちつけられて、これまた大きな音を響かせた。………やつちやつたZ E ☆ ど、どういう事だ!? まさかとは思うけど、木が腐ってたんじゃ……。あつ!? そうか、だから倉庫にしまつて……! そんな当たり前の事にも気が付かないなんて、俺つてばお馬鹿さん! テヘツ☆さて………パパンになんて言い訳するか考えないと。………つて、俺は喋れないでしょうよ。………アハハハハ〜どうしてくれようか〜……。い、いやだつてさ、まさか折れるなんて

思わないじゃん。で、でもなあ……こういう時に隠そうとすると、逆に酷いなんて事は解っている。どんな恐ろしい説教も……甘んじて受け入れよう。今回の件に関しては、完全に俺が悪いのだから。

俺がトボトボと折れてしまった刀身の方を拾いに行くと、なにやらドタドタと騒がしい足音が聞こえた。もしかすると、パンパも知れない。ナイスタイミングですね……。俺は覚悟を決めて、足音の聞こえた方を見た。すると同時に、視界が真っ暗になる。そして、このいい匂いと柔らかい感触……俺が間違えるはずも無い！おっぱいだ！うほああああ……た、たまらん！この巨大なくせに俺の頭部をが丸ごと埋まるかのような弾力……相当な大きさだ！

ああああああ……ちくしよおおお！なんで……なんで俺の身体は言う事を聞いてくれないんだ。これなら息が出来ないふりをして、この超巨大なおっぱいを無遠慮に揉みしだいてやるのにいいいい……。あれ……ってかコレ、本当に息が出来ないんですけど？く、苦しい……けど、幸せだあ……デヘヘヘ……。天国と地獄とは、まさにこの事か。いや、もういつその事……これで死ぬるなら本望な気がしてきた。もう……ゴールしても良いよね？

「むふふ……。やつと2人きりになれたね、くろちゃん！」

俺の顔面から柔らかい感触が消えると同時に、そんな事を言うこの人は……。みんな

のアイドルさん、みんなのアイドルさんじゃないか！もとい、モツピーのお姉さんの篠ノ乃 東さんだね。後にISを世に送り出し、文字通りに世界を変えてしまうお方である。しかし……本当に、大変いいおっぱいをお持ちで。揉みたい（直球）。

それにしても、いつの間に気に入られていたのだろう。俺はてつきりモツピー、ちー姉、イツチーと仲が良い俺は、嫌悪されていると思っただけれど。まあ……仲良くしてくれるのなら、細かい事は考えなくていいか。そういうわけで、これからはたば姉と呼ばせてもらおう。たば姉は、俺と2人になれる機会をうかがっていたらしいけど、いったい俺に何の用事なんだろう？

「いや〜君に会おうとするとね、ちーちゃんがうるさくつてさ〜。果報は寝て待てだよね、ブイブイ！」

そう言いながら、たば姉はキャピキャピした様子でエへ顔ダブルピース。可愛い人だなあ……年上には思えない。前世もカウントすれば、俺の方が圧倒的に年上だけど。デレレのたば姉の破壊力たるや、時には悶えてしまうほどだ。今もそれが表に出なくて、すごく助かっている。たぶんだけど、軽く引かれるにやけ顔になった自信がある。「くろちゃんと私はさ、同類だと思わない？君も、相当に力を持てあましてるみたいだし。」

たば姉は、俺の持っている折れた木刀を眺めながらそう言った。いやいや、これは単

に木が腐ってただけですよ。もし俺の素振りで折れてしまったのなら、黒乃ちゃんは化け物と言わざるを得ない。でもなあ……なんだか、ちー姉ならできそうで怖いや。俺の中で人外と認識されているせいだろうけど、いくらなんでもちー姉でも無理か。

「退屈だよねこの世界って、私達みないなはぐれものにはさ。誰もかれもが人の顔色を気にしてさ……やんなっちゃうよね。」

うくん……たば姉には悪いけど、それは少し共感できないなあ。確かに俺もイッチー達以外には、腫れ物を見るような視線を送られる。けれどそれは、俺が解ってもらおう努力をしていないからだろう。俺は俺なりに、この世界を楽しく生きている。だから、この世界を退屈にするのは……。

「自分自身で……。」

「ほえ？」

おろ、珍しい事もあるものだ。俺の口から、ポロつと自分が考えていた事が出てきた。正確に言えば、『この世界を退屈にするかしないかは、自分次第で大きく変わる』と言いたかったのだけれど。そこだけ出てきたって、きつとたば姉は理解不能だろう。現に、とても不思議そうな声をあげていた。

「ふくん……なるほどなるほど、くろちゃんの言う通りかもね。フフフ……やっぱり君は面白いや！」

え？今ので解ったの？たば姉すごいな……。この人に不可能はない気はするけど、察しの良さも天才的だな。もうなんていうか、たば姉のなんでもできる感未来の世界の猫型ロボットに通じるものがある。なんて思っていると、外から何か騒がしい声が聞こえた。この声は……。ちー姉か？

『東ーつー……ここに居るのは解っているぞー！』

「げっ、もう追いついて来た……。お仕置きが怖いから、私は退散するね！あつ、その木刀は東さんが処分しといたげるよ。それじゃ、まったねー！」

たば姉も声の主がちー姉だと解つたらしく、苦い表情を浮かべながら呟いた。しかし、それも一瞬の事だ。俺へ別れの挨拶を述べながら、俺の頭を優しく撫でる。そうしてたば姉は、俺の持っていた木刀を回収しつつ一目散に裏口から逃げていく。それと入れ替わるかのように、ちー姉が道場へと足を踏み入れた。

「東えー！黒乃に余計な……。……チツ！逃がしたか？黒乃、ここへ東……。ウサギ耳の力チューシャを着けた変な女が来なかったか。」

ちー姉は、鬼の形相で道場を見渡した。ふええええ……。怖いよう……。俺に質問するのにも、そんなに睨まなくてもいいじゃないですか。ど、どうする……。……本当の事を言うか、それとも嘘をつくか。はっ!?そうだ……。こんな時だからこそ、表情が出ないのを利用すれば……。そう思った俺は、ピクリとも動かずにいた。

「……………ダメか…………。いや、済まなかった。黒乃は気にしなくても良い。ただ…………ウサギの耳を着けている女には気を付けろ。」

イエスっ！なんとか誤魔化す事に成功したぞ。ちー姉は俺に警告を促してから、急がしそうに道場を出ていった。もしかして、ちー姉はたば姉が俺に何かするつもりで思っているのかな？だとしたら…………恐ろしいな。たば姉の真意は図れないからなあ…………。さっきの接触到、悪い意味が込められていなければいいけど。

しかし、ダブルシスターは嵐みたいに過ぎ去っていったな。でも…………やつぱり大した時間つぶしにはなっていない。はあ…………イッチーとモッピーとパンは、いったいいつになつたら来てくれるのだろう。…………素振りでもしていようしよう。流石に何もしないよりはましだ。そうやって竹刀を手に取る俺の背は、寂しげだったに違いない。



「はくなくしくてくよくよ！ちーちゃん、いい加減にくろちゃんと会わせてってばく！」
「そういう台詞は、その手に持っている怪しげな物をしまつてからにするのだな！」

放課後の時分、学校の校門付近で千冬と東が何やら一悶着していた。千冬は東の服の襟首を掴んで、東は無理矢理にでも前進しようとしている。ギャーギャーと騒ぐこの様

子は、ここ最近でほぼ毎日くり広げられている光景だ。どうやら束は、黒乃との接触を図りたいらしい。理由としては、黒乃が『仲間』であるという確信を得ていたから。

同じく、自身の異常性を隠しきれない者同士だ。束は黒乃の様子を盗み見た時から、あの子との接触は意義あるのもだと考える。しかし、それを千冬が良しとしない。黒乃を元に戻せるかと頼んだのは千冬の方だが、どうにもやり方が信用ならない。今も何か、メスのような手術道具に見える物を握っている。黒乃を大切な家族と思う千冬としては、束を会わせるわけにはいかない。

「あ、これ？やだなくちーちゃん、これは冗談だつてば！ええと、本命は……こつちこつち。」

「なんだそれは、ヘアバンドにしか見えんぞ。」

「ネーミングはしなかったんだけど、実はこれ凄い電流で脳に刺激を……。」

「ふざけるな！ますます会わせられるか、この馬鹿！」

束もすっかり約束そのものは守ろうとしているようで、懐からヘアバンドに似た何かを取り出した。どうにも束はいろいろと試すべきだと、取りあえずは脳に関連する物を開発するらしい。千冬が訝しむ目で見ていると、束は説明を入れた。最初から期待はしていなかった千冬ではあるが、やはりろくな物には聞こえない。束としては不服なのか、なんでー!?と猛抗議している。

「もく……ちーちゃんに分からず屋く。いいもくん、強硬手段に出ちやうもんねく。本気の束さんは、けっこう無茶もしちやうから！」

「お前、何をする気で……って、ちよつと待て……なんだこれは!」

「対象をロックして、絡みついて縛り上げる捕縛用のロボットだよ。じゃ、そういう事で!」

「このまま放置か!?何よりそれがキツイ……おい束!この……覚えていろー!」

今度は束の懐から、ニユツとメタリックな蛇の様なロボが飛び出てきた。それは千冬を簧巻きにするように絡みついて、動きを拘束する。しつかり千冬のパワーにも耐える設計のようで、振りほどこうとしてもピクリとも動かない。一応の解説を入れた束は、すたこらさつさと逃げて行つた。まだ人通りも多いのに、1人で捕縛プレイ状態など確かにキツイものがある。

千冬を捕える事に成功したとはいえ、そう長く時間稼ぎはできない。そう判断した束は、急ぎに急いで帰路に着いた。走りながらノートPCをカバンから出すと、ペチペチとキーボードを叩いた。すると画面には、1人で歩く黒乃の姿が映し出された。この映像を送っているのは、黒乃の頭上を飛ぶ小型のドローンだ。つまるところ、束は黒乃を監視していたりする。

「よおし……。タイミングが良いね、束さんってば……運も味方につけちやつてるよ。」

今日は剣道の練習日だ。その日に黒乃が1人で篠ノ之家に向かっているとなれば、一夏と箒は何かしらの事情で遅れると束は読む。束としては、黒乃との接触はなるべく1対1で行いたかったのだ。そうすると、残る邪魔は自身の両親のみだった。適当に、どこかへ誘い出すか……。

そう考えた束は、携帯電話で自宅へ連絡をかけた。どうせ向こうは、こっちの電話番号を知らない。鼻をつまんで声色を変えると、箒にトラブルがあつたので学校へ来てほしいと伝える。箒を出汗に使った事に関してのみ、束は罪悪感を覚えた。しかし、こんなチャンスは2度とない。束は心を鬼にして、作戦を続行する。

「……おっけーおっけー、誰も居ないね。」

自宅へ戻ると、思惑通りにもぬけのからだ。黒乃の到着にも、もうしばらく時間がかかる。束は残された時間で、自宅のあちこちの施錠を解除した。人と言うのは、1人きりだと油断しやすい。そこにつけこんで、束は他の皆も知らない黒乃を見つけるつもりなのだろう。

「おっ、来た来た……。」

前回は隠れて位置が特定されたため、とりあえず束は自宅へ入っていた。民家に人の気配がしたって、流石の黒乃も気には止めないだろう……という事らしい。実際に黒乃は、特に気にする様子は見せずに更衣室へと向かった。そして黒乃が道場へ向かったの

を見計らつて、束も道場の入口で観察を開始する。

すると黒乃は、道場内を歩き回る。すぐに稽古を始めないところを見るに、何か考えがある様子だ。しばらくすると黒乃は奥へ消えて、その手に木刀を握つて歸つて来た。それを振るつもりという事くらいは解るが、竹刀ではダメなのだろうか。

その答えは、すぐに解つた。黒乃が木刀を構えた途端に、束はピリピリと肌が痛くなるのを感じた。気迫だとか、目に見えない力なんてナンセンスだ。今まではそう思つていた束だが、ここまでハッキリ感じると認めざるを得ない。やはり黒乃が1人の状況を作つて良かった。これはきつと、黒乃が皆へ見せなかつた全てに違いない。

束がそう思いながら見ていると、黒乃が木刀を振つた。木刀の刀身から、まるで空気を裂くような音がした後……何かを叩きつけたかのような音も鳴る。驚いた束は目を閉じてしまう。恐る恐る黒乃を見ると、束のテンションは最高潮となる。

なんと錨付近から先が消えて、刀身が遠くに転がつていてではないか。どうしてかなど、聞かなくても解る。木刀は、黒乃の振つた速度に耐える事ができなかったのだ。木の中でも固い桎製である木刀が、黒乃が縦に振つただけでポツキリと折れてしまったのだ。明らかに人間業ではない事を、たかだか小学2年生がやってのけた。

(すごい……すごいすごい……きつと私とあの子は、出会ふ運命に違いないよ！)

もう少し隠れているつもりだったが、束は耐えられなくなつてしまった。道場の床を

踏み鳴らしながら、黒乃に接近していく。興奮が押さえられない束は、黒乃を抱き締め顔を豊満な胸へと埋めさせる。てつきり抵抗されるところだったが、黒乃は大人しいものだ。

「むふふ……。やつと2人きりになれたね、くろちゃん！」

「……………」

実際に言葉を交わすのは、これが初めてになる。そのせいか、黒乃の無表情が少しだけ困惑した様子に見えた。しかし束は、いろいろと手順をすつ飛ばして話を進める。自己紹介もしないのに、黒乃は大人しく自分の話を聞いてくれている。きっと黒乃は、警戒する必要がどこにもないのだろう。

「くろちゃんと私はさ、同類だと思わない？君も、相当に力を持て余してるみたいだしや。」

「……………」

束は折れた木刀を見ながらそう告げるが、黒乃は否定も肯定もしない。黒乃が初対面だから解らないというのも忘れて、束はとてつもなく嬉しそうに語る。箒でもなく、千冬でもなく、一夏でもなく、真に解り合える人間を見つけたと思っただけに、喜びもひとしおなのだ。

「退屈だよねこの世界って、私達みたいなのはぐれ者にはさ。誰もかれもが人の顔色を

気にしてさ……やんなっちゃうよね。」

「自分自身で……。」

「ほえ？」

「……………」

東は、様々な意味ですつとんきような声を出した。喋らないはずの黒乃が、自分に何かを伝えようとしたのだ。東は黒乃が続きを話す事を期待したが、どうやらそれ以上は無理らしい。仕方がないので、黒乃の言葉の意味を模索する事に。

自分自身でと、確かに黒乃はそう言った。自分の放った言葉の前後から推察するに、黒乃は退屈な世界なら、自分自身で面白くしてしまえば良い……と、そう言いたかったのではないだろうか。それは一理あるし、何より天才である者にとっては、特別に難しい事ではない。

「ふくん……なるほどなるほど、くろちゃんの言う通りかもね。フフフ……やつぱり君は面白いやー！」

「……………」

『東ーっ！ここに居るのは解っているぞ！』

「げっ、もう追いついて来た……。お仕置きが怖いから、私は退散するね！あつ、その木刀は東さんが処分しといたげるよ。それじゃ、まったねー！」

本当はまだ黒乃と話していたかったが、何よりも千冬の方が恐ろしい。いずれは会うようになるが、追われれば逃げるのが人間の心理という物だ。東は黒乃の手から木刀を奪うと、返事も聞かずに裏口の方へ駆けだす。あらかじめ何足かおいてある靴を瞬時に履くと、せつせと篠ノ之家の敷地から離脱した。そして走り回りながら、黒乃の発した言葉を思い出す。

『自分自身で……。』

(自分自身で面白く、かあ……。ねえ、くろちゃん。君は、本当に今の現状を面白く過ごせているのかな？ 私には、とっても退屈そうに見えるよ。)

藤堂 黒乃という存在を表現できずに、自分の内に秘めた全霊の力も発揮できない。黒乃からすれば、かなり抑圧された日常だと感じているに違いない。黒乃の事情をかんがみるに、何も他者と違う……。普通でないと認識されるのが怖いというのは当てはまらないはずだ。だとすれば、やはり感情表現が出来ないから。思い切りを出来ないのは、とても辛い事だ。だからこそ、東は思った。

(……アレ、早く完成させちゃおう。アレが世に出て世界が変われば、東さんは面白いのはとーぜん。きつとくろちゃんも……。アレだったら全力を出せるよね！ 一石二鳥じゃん！)

我ながらいいアイデアだと、東は一人表情を明るくする。世界が自分達を認めないの

ならば、それでも構わない。だが、そんな世界でも自分達が楽しむ権利くらいはあるはずだ。束がつまらぬ世界に一石投じて、つまらなくとも黒乃がせめて全力の出せる世界を。その『一石』を、束は既に形にしかけていたのだ。つまり今回の黒乃のアドバイスは、束の背中を押すナイスなものだった。

（ムフフフフ……そうと決まれば、頑張らないとね！待ってて、くろちゃん。束さんがきつと、君の望む世界を見せてあげるよ！）

束の見せる黒乃への執着は、仲間意識か……それとも。それは本人しか知りえない事だが、絶大な支持を寄せているのは確かだろう。走り回る束は、どこか嬉しそうだ。その様は、まるでウサギがピョンピョンと跳ね回るかのような風に見えるのは、大きなウサ耳カチューシャだけのせいでは無い。この日以来……月に魅せられ狂ったウサギは、着実に世界を変える存在の作成に着手していく事となる。

第5話

俺が黒乃ちゃんに憑依して、既に数年が経過した。現在は、小学4年の終わりが見え
て来た頃になる。となると、そろそろ時期になるんだよなあ。あやふやだけど、小学5
年の進級と同時にモッピーが転校して、入れ替わりに中華娘が転入……だったと思う。
つまりは、もうすぐインフイニット・ストラトス……通称ISを、友達のお姉さんが開
発しちやうつて事だ。

結局なにも考えてないや……。イッチーとモッピーと過ごす日々が、どうにも楽しい
からかな。人はそれを現実逃避と言うのだけど。いやいや……。今まで逃げ続けてき
た人生だ、何を今更。つて、そうか……。モッピーは、居なくなつてしまふんだな。俺が
IS学園に行かない限りは、会うチャンスは限りなく消えてしまう。

それは、随分と寂しい。モッピーはきつと、俺の事をあまり良くは思つてないだろう。
イッチーの事とかあるし、それはまあ許容範囲である。それでも俺にとつては、掛け替
えのない友人だ。俺達の学年は2クラスがあつて、顔見知りが多い。そんな中でも……
結局モッピーしか友達になれてないのだぞ。モッピーが居なくなつてみなよ、またイツ
チーと2人きりだ。中華娘が仲良くしてくれるとは限らんし……。

「え〜つと、音読は誰の番だったかしら？」

「せんせ〜い。藤堂さんだから無理で〜す！」

「コラ、そんな言い方しちゃダメよ！藤堂さん、気にしなくても良いからね。じゃあ次……。」

はあ……コレだよ。国語の授業は、俺にとって地獄でしかない。音読は出来ないし、感想とかも書けないし……ただひたすらノートを写してただけだよ。しかも……出席番号順に、音読したりするじゃん？それも出来ない。すると、1人だけ特別扱いされる感じになる。そういつた『特別』ないし『特殊』な俺を、いじめっ子は見逃さない。

いじめっ子の1人が心底から茶化した口調で、先生に俺の番はパスだと伝えた。それに増長するかのように、周りの面子の大半がクスクスと俺を嘲笑う。言っちゃうと、イツチーとモツピー以外は敵に等しい。だからモツピーが居なくなると、俺は辛い……辛いです。もちろん、単に寂しいってのが勝ってるかんね！ほんとだかんね！

と言うか、イツチーとモツピーや……なんと顔をしてんのさ。怒ってくれるのは大変に嬉しいだけどね、そんな……見てたら小便ちびりそうな表情はせんといて。じゃないと本当に……あつ、ちよつと出たかもしない。も、もも……漏らしてねーし！ただちよつとアレだよ、冷却水が貯水限界だったから少し排水しただけで……。早くトイレ行きたい……大丈夫だよねコレ？

お兄さんを自称してるけど、前世含めたら30過ぎのオッサンだよ？小学生の怒った顔見ただけでお漏らしとか、尊厳とかそんなのがぶっ壊れだよ。ま、まあ良い……。今日はこの国語さえ乗り切れば、放課後になる。ホームルームが終わり次第、トイレに直行しなくてはならん。もたもたしているら、イッチーに『帰ろうぜ！』って引つ張られ強制連行させられるんだよね。

そうして余計な事は考えずに、耐えに耐えてようやくホームルームだ。今日に限って、誰々くんのパンツが無くなりました……。みたいな事になってくれるなよ。なんてのは杞憂で済んで、先生が連絡事項を言い終わると晴れて放課後が訪れる。ヒヤッハー！何とか耐えたぜえーっ！後は、イッチーの帰ろうぜ強制送還も少し強引に振り切れば……。

「黒乃、帰ろうぜ！」

「……………」

「……黒乃？おい、黒乃ってば！」

「ちよつとく、せつかく織斑くんが帰ろうって言うてんのよ？なあに無視してんの？」

「「そうよそうよ！」」

しまったああああつ！このパターンを想定していなかったあああ……。俺の目の前に立ちふさがった女子達……。えつと、確か大迫さん、中野さん、小杉さん……。だった

かな？まあ何事かと聞かれれば、イツチーが黒乃ちゃんばつかりを氣遣うのを、あまりよろしく思っていない人達だ。とんでもない悪循環なんだよねえ。

イツチーは、俺の事を気に掛ける。それを大迫さん達は、面白く思わない。だからちよつかいをかけてくるが、そのせいでイツチーが助けに入る。そしてまた大迫さん達のやつかみに合うと……。この無限ループなわけで、俺が喋らない限りは抜け道は無いかも知れない。だが、今はそんな事はどうだつていいんだ……。重要な事じゃ無い。トイレへの道を開けてくれやがり下さい！

「……なんだよ、お前ら。お前らには、関係ないだろ。」

「関係大ありよ、織斑くん！なんで、こんな子に優しくするの？いまだつて、織斑くんのお事を無視したのよ!？」

「黒乃は、理由もなく無視なんかしない！ほら、黒乃……。こんな奴ら放つて帰ろうぜ。」

いや、イツチー……。キミの言葉は大正解だ。だからその手を、大人しく離してくれませんか。俺はトイレに今すぐ行きたいんです。今からお家まで行くとなると、到底間に合わないんです。俺氏を含めた変態さんが大好きなシチュエーション……。幼女の身体で漏らしちゃうんです！ああつ、でも……。このまま振りほどいたら、イツチーの立場が……。なんて言つてられるかーい！俺は思い切りイツチーの手を振り払つて、トイレまで猛ダツシユ。後方で俺の事を大声で呼ぶイツチーの声が聞こえたが、俺が止まる事は無

かった……。



俺の幼馴染みには、藤堂 黒乃という女の子がいる。とある事情があつて、自分の感情を表に出せなくなつてしまつた。そんな黒乃を、俺は受け入れる事が出来なくて……。けつこう酷い言葉も投げかけたのに、黒乃は今まで通りに優しくかつた。そこで俺は、ようやく黒乃が変わつていないって気がつた。

黒乃は優しい。喋ることができなくなつて、すっかり俺や千冬姉を支えてくれる。俺にとつては、姉のような妹のような……とにかく自慢の家族だ。しかし、学校の奴等は皆して黒乃を除け者にする。だから俺は、あまり学校は好きじゃない。俺と黒乃と箒の3人で勉強ができればと、そう思うほどにだ。

「え〜つと、音読は誰の番だつたかしら？」

「せんせ〜い。藤堂さんだから無理で〜す！」

「コラ、そんな言い方しちやダメよ！藤堂さん、気にしなくても良いからね。じゃあ次……。」

まただ……。馬鹿にしたような笑い声が、教室の中へと静かに響き渡る。俺は黒乃を

馬鹿にされるたびに、腹の中でマグマが沸々と煮えたぎるような感覚を覚える。けど、黒乃は怒らない。だから俺も、怒るわけにはいかない。

それはつまり、黒乃の望みではないからだ。黒乃はきつと、自分が馬鹿にさせたせいで、俺や箒に怒ってほしくないって……そう思っているはずだから。だとすれば、とにかく耐えるのみ。表情には出てしまっているだろうけど、俺は歯を食いしばって必死に怒りを抑えた。授業の内容なんてほぼ頭には入っていないが、そうこうしている間に終わりを告げたみたいだ。

後は帰りの会を過ごせば、学校は終わる。今日は剣道の稽古も無い日だし、帰って黒乃と何をして遊ぶうか。そんな事を考えていると、今から楽しみでさっきまでの怒りなんて吹っ飛んでしまいそうだ。そしてクラス委員の子が号令をかけて、帰りの挨拶を元気よく言った。これで俺達は、自由の身も同然だ。俺は少し離れた所から、黒乃へと声をかける。

「黒乃、帰ろうぜ！」

「……………」

「……………黒乃？おい、黒乃ってば！」

俺が声をかければ、いつもの黒乃は微動だにせず待つてくれる。それなのに今日は、俺の声に見向きもせず歩いて行くではないか。何か理由があったのかも知れないけ

ど、俺は小走りで距離を詰めて黒乃の手を掴んだ。そこで黒乃も一応は足を止めてくれたが、前に進もうとする事は止めない。俺が理由を問おうとしたら、横槍が入ってしまった。

「ちよつとく、せつかく織斑くんが帰ろうつて言つてんのよ？なあに無視してんの？」

「「そうよそうよ！」」

「……………なんだよ、お前ら。お前らには、関係ないだろ。」

まるで責めるような口調で、3人の女子はそう言った。それに対して、俺は眉間の皺を寄せながら返した。本当に、全く関係が無い。こいつらは事あるごとに、黒乃にちよつかいをかけて……………。早い話が、嫌いな連中だ。どちらにせよ、俺が好きな奴なんてのは少ないけれど。だが、この3人は飛び切り嫌いな部類に相当する。

「関係大ありよ、織斑くん！なんで、こんな子に優しくするの？いまだつて、織斑くんのお事を無視したのよ!？」

「黒乃は、理由もなく無視なんかしない！ほら、黒乃……………こんな奴ら放つて帰ろうぜ。」

なんだつて、どいつもこいつもそうなんだ。黒乃が無視したくて無視していると、本気でそう思っているのだろうか。辛いのは、いつだつて黒乃だ。そんな事も解らない……………いや、解ろうともしない奴らに何を言つても無駄だ。そう思つた俺は、黒乃よりも前を歩いて掴んだままの手を引こうとした。すると黒乃は、凄い力で俺の手を振りほど

くと、そのまま教室の外へと走り去って行く。

「黒乃ーっ!」

「織斑くん。藤堂さんは何処か行っちゃったしゅ? 私と一緒に……」

「……けよ。」

「へ?」

「退けよ……退けって言ったんだ!」

俺は大声で黒乃を呼ぶが、それにも反応を示してくれない。代わりに俺の前には、例の女子達が猫なで声を出しつつ立ちふさがった。こんな連中はどうだって良い……。黒乃を追うのに邪魔ならば、タダの壁となんら変わらない。俺は強引に女子達を押しつけて、走り去った黒乃を追いかける。どこへ行ったのかは解からないけど、とにかく俺は足を急がせた。



ふうう……スッキリした。いやあ、イツチーやモツピーの形相とか関係なしに、やはり結構な量が溜まってたみたいだな。我慢したつもりも無いのだけれど、かなり急に行きたくなったものだ。ま、得てしてそんなものかな。とすれば、さっさと帰る

事にしよう。イッチーやモツピーは、教室で待っていてくれたりはしないだろうか。

そう思った俺は、教室へと足を運ぶ。しかし、教室はもぬけの殻だ。そりゃそうか、かなり強引に振り切ったんだもの。もしかして、怒らせてしまっただろうか？ まあ……怒らせても仕方が無いのかも。はあ……やだなあ、帰ったら不機嫌なイッチーのお出迎えとか。拗ねたイッチーって、けっこう面倒なんだよね。

だったら、少し寄り道して帰ろうかな。久々に、アレもやんなきゃな感じだし……。そう思った俺は、踵を返して下駄箱の方へと向かう。そこで一応イッチーとモツピーの靴を確認してみたけど、両方ともに靴は存在しなかった。やっぱり帰っているか……。モツピーはともかくとしてだよ、イッチーと同居つてのがやり辛いよねえ……。良い時間帯を見計らわなければ、それはそれで遅いと怒られそうだ。

用事は済んだので、急いで上履きから靴へと履きかえる。そして俺が向かう先は、家路からは外れた場所だ。それなりの大きさの公園にある……雑木林？なんて例えたらいいのか解からないけど、そんな空間に用事があった。人気も無いし、何より公園と言いつつ立ち入り禁止みたいな場所だけどねえ。とにかくアレばかりは、あまり人に見られるわけにいかない。

人目を気にしつつ、立ち入り禁止の看板が立ててあるだけの入口を通りすぎる。そのままズンズンと奥へと進めば、例の雑木林へと辿り着く。そこらは錆び付くというより

は荒れ果てていて、大きく傷痕のついた巨木が生えている。まあ、主犯は俺ですけど。俺がここまでやって来る理由はただ一つ……ストレス発散だ。

俺は巨木に立て掛けてある木刀を拾う。これはたば姉にプレゼントされた物で、これは折れないから安心だとのこと。俺は巨木の前で木刀を構えると、心の中でしっかりと謝罪を述べる。いつも八つ当たりで申し訳ないが、今日もどうか頼んだぞ。俺は深く息を吐いて、深く吸った。

俺だつてなあ……好きで喋らないわけじゃないんだよおおお！心でそんな事を叫びながら、木刀で巨木を叩いた。こんなので終りではなく、まだまだ言いたい事は沢山ある。お前アレだよ？喋られないのが、どんだけキツいか解つてないだろ。言いたい事を言えないんだから、キツいに決まってるでしょうがああああ！

それをお前……事あるごとに茶化しおつて、鬱陶しいんじゃないやボケええええ！大迫お……お前らもだぞ！イッチーが好きなのは解るけどなあ……いい加減に逆効果だつて気がついていたの！俺に当たれば当たるほど、イッチーの好感度は低下する一方だぞ！ああ……もう、なんかもう……ザッケンナカラー！スツゾオラー！ナンオラー！

日頃の溜まった鬱憤を、魂からのシャウトで発散させる。そのついでに、巨木を殴打し続けた。物と言うか、木に当たるのはどうかと俺も思うよ。けれど、こうでもしないとストレス発散の方法が無いんです！それこそ叫べないし、人を殴るのはもつとまずい

し……。だからこその……巨木パイセンなのである。

数カ月に1回あるかないか程度の周期で、俺のストレスは限界を迎える。その度にパイセンにはお世話になっている。本当に申し訳ない。……でも、木刀を振る手は緩めない。どこかにサンドバッグでも落ちてればなんだけど、流石にそんな都合よくいかないよな。とりあえず今日のところは、このくらいにしておこう。

でりゃーっ！……と、フィニッシュに真横へ木刀を振ったそのときだった。パイセンを殴り続けて手が痺れていたのか、木刀は俺の手からすっぽ抜けてしまう。横回転しながら飛んでいく木刀を、しまったと思いつながら追いかけようとする。その時、不思議な事が起こった！

飛んでいった木刀は、空中で何かにぶつかったかの如く弾かれた。目の前で発生した怪奇現象に全く現実味がわかない俺は、打ち上がった木刀をポカーンと見つめる。やがて木刀は落下を始めるが、それでも俺は茫然としたままだ。そして木刀は、狙いすましたかのように俺の右側頭部へぶつかる。

激突した木刀は、ゴスッ！と痛そうな音をあげた。というか……事実痛い痛い……！うごああああ、呆けてたせいで対応が遅れてしまった……。痛い……。凄く痛い。これ、大丈夫……。？頭、切れてないかな。あまりの痛みに、俺は蹲りながら頭を触る。するとそこには、特大のタンコブが出来上がっているではないか。

あ、あれだ……バチが当たったのだろう。巨木パイセンを殴ってきたバチが、こんな形で返ってきたのだろう。サーセン、巨木パイセン……。2度と八つ当たりは止めようと思うほどに、とてつもない痛みだ。フラフラしながら立ち上がった俺は、ランドセルを拾って外を目指す。

看板の付近まで戻った俺は、そこでようやく涙が流れている事に気がついた。なるほど、痛みに関して泣けるのか。なんて嬉しくない発見だろう。まあ……本当に泣きたくても涙が出なかつたりしたからな。あれって、けっこう辛いんだよね。なんかさ、眼球の奥が痛い感じがして……。

「黒乃！」

俺を呼ぶ声がしたので、顔を上げてみる。すると遠くから、イッチーが走ってくるではないか。もしかして、心配して捜してくれなのかな。それは……ずいぶんと悪い事をしてしまった。どうにか、反省の意を伝えられると良いんだけど。そう考えていたが、そんな余裕はなくなってしまう。

イッチーが俺の頭を抱えるようにして抱き締めるから、先ほど作ったタンコブが圧迫される。ウギヤーっ!? 何この拷問! イッチー、痛い痛い! 軽く死ぬからね! 俺は必死にイッチーを引き剥がそうと服を掴むが、それに反比例するかのようイッチーの腕の力も増していく。

「黒乃……ごめんな！もう絶対に、俺が黒乃を泣かせたりはしない！」

現在進行形で、君に泣かされているんですけど（半ギレ）。く、くそ……イッチーの気が済むまで耐えるしかないか。だが、覚えているイッチー……。この恨み、はらさでおくべきか……！そう心でリベンジを誓いながら、じつとイッチーによるタンコブ圧迫の激痛を耐え続けた。

「……じゃあ、今度こそ一緒に帰ろうぜ！」

俺を開放したイッチーは、イケメンスマイルを浮かべながら俺に手を差し伸べる。まあ……悪気は無いだろうし、多少は勘弁してあげよう。俺はイッチーの手を取ると、並んで歩き出す。今日のイッチーの手には、いつも以上に力が込められていた気がする。



「黒乃……どこだ、黒乃！」

俺は黒乃の向かいそうな場所を走り回るが、一向にその姿は見当たらない。いったい……黒乃は何処へ行ったのだろうか。俺の頭には、嫌なイメージばかりが浮かんでしまう。焦りが焦りを呼んで、不安は増していく。もしかすると、このまま黒乃が見つから

ないのでは……?」

「そんなの……俺には、黒乃が居ないと……!」

俺の隣には、黒乃が居るのが当たり前で……。黒乃が居ないと、たぶん俺はダメになつてしまう。捜さないと、黒乃を……何がなんでも!落ち着いて、他に黒乃が行きそうな場所を思い出すんだ。そう……確か、本当に時々だけ姿が消える時があつたような……。その時は大して気にしなかつたけど、もしかすると!

だとすると、俺の家からは逆方向のはずだ。俺はキュツと踵を返すと、進行方向を真後ろへと切り替えた。形振り構わずに、黒乃の名前を叫びながら走り続ける。やがて俺の行き着いた場所は、ほとんど見覚えのないような地域だ。この辺りに黒乃が居る確証は無いけど、それでもいつかは見つかると思ひつけない。

「僕、少し良い?」

「はい……俺ですか?」

「あなたの言つてる『クロノ』って子……もしかして、凄く長い黒髪で無表情の……。」

「そうです……その子を捜してるんです!どこかで見たんですか!」

「ええ、たまくに見かけるのよ。」

庭先で花を弄っていたおばさんが、俺に声をかけた。話を聞くと、見覚えのない女の子が時折だが顔を見せるらしい。特徴を聞く限りは、黒乃で間違いは無さそうだった。

俺は食いつくように、黒乃がどこへ向かったのか尋ねる。しかし、おばさんもハッキリとは言えないらしい。ただ、いつも人気のない方向へと歩いて行くそうだ。

おばさんは丁寧に、見える範囲の道のりを教えてくれた。まだ見つかるか解からないが、ここ周辺に黒乃が居る事が解つただけで大収穫だ。俺はすっかりおばさんへ礼を述べて、黒乃の搜索を再開する。おばさんに教わった道順を辿れば、残りはまた自力で捜さなければならぬ。

俺はなるべく人通りの少ない道を選んで、黒乃の名を呼びつつ進んで行く。しばらく奥へ奥へと進んで行くと、遠くに立ち入り禁止の看板が見えた。そこはどうやら、もともと公園か何かだったみたいだ。もしやとは思ったが、そこには確かに黒乃の姿があった。俺はすぐに近寄ろうとしたが、思わず足が止まってしまった。

黒乃は、泣いていた……。その表情は相変わらずだが、大粒の涙が流れているのが遠目でも解る。黒乃が時々姿を見せないのは、そういう事だったのか……。黒乃はこうやって、人目につかない場所で泣いていたのだろう。その結論に行きついた俺は、様々な事に苛立ちを覚えた。

黒乃が泣いているのは、クラスメイト達が原因と言うのは明白だ。あれだけ馬鹿にされて、辛いに決まっている……。しかし俺は、黒乃が辛いという事を本当に解つてやれていなかった。その事が、何よりも悔しかった。俺は黒乃を、守れてなんかいなかった

んだ。一人で泣く黒乃の……隣に居てやれなかったんだ。

……今からだって、遅くは無い。黒乃は、いつだって俺の隣に居てくれた。だから俺も、本当の意味で黒乃の隣に居続ける。黒乃の隣が俺の居場所、俺が黒乃の居場所なんだ。決意を新たに、両足へと力を込めた。走り回って疲れもあつたが、俺はこれまでにない速さで黒乃へと接近していく。

「黒乃！」

「……………」

黒乃はそこに居るけど、俺は変わらぬ大声で名前を呼んだ。すると黒乃は、俺の声に反応して俯かせていた顔を上げた。黒乃がそこに居る、黒乃が反応を示してくれる。当たり前前の事なのに、俺はその事が嬉しくて堪らない。黒乃へ駆け寄った俺は、黒乃の頭を抱き込むようにして引き寄せた。

「黒乃……ごめん！もう絶対に、俺が黒乃を泣かせたりはしない！」

「……………」

俺が黒乃をしつかり抱きしめながらそう言うと、黒乃は俺の服を掴んできた。それはまるで、俺にすぎるかのような……そんな印象を俺は受けた。……今まで、やはり辛かったのだろう。大丈夫だ、黒乃。これからは、しつかり俺がお前を守って見せるから。そう伝える為に、俺はよりいっそう腕に力を込めた。

「…………じゃあ、今度こそ一緒に帰ろうぜ！」
「……………」

黒乃を離すと、笑顔で手を差し伸べた。すると黒乃も涙を拭って、俺の手を取ってくれる。…………この手はもう、絶対に離さない。そう思うと、自然と黒乃の手を掴む力が強くなる。家までは遠い場所だけど、黒乃と一緒にならあえてゆっくり歩くのも悪くない。ずいぶん遠回りになってしまったが、俺と黒乃はようやく家路へと着いた。

第6話

「驚いたな、まさか地下がこんなになっているとは……。」

「フフン♪本邦初公開って奴？箒ちゃんにも見せてないんだよ。」

とある休日、千冬は束に呼び出されていた。明朝にいつも通りのハイテンションで電話がかかって来て、千冬はとともじやないが乗り気では無かった。しかし、こうしてすっかり束の元へ来ている。それは千冬が律儀というのもあるが、束を無視した場合は更に面倒な目に会う。そのため、来ざるを得なかった……が正しいかもしれない。

一夏と黒乃を起こさないように配慮して、千冬はこつそりと篠ノ之家へと向かった。そこで束が待ち受けていた訳だが、通されたのはなんと地下だった。まるで映画の世界よろしく、束は篠ノ之神社の真下にラボを作っていたのだ。そこへ通された千冬は、人目につかない時間帯を選んだのにも納得がいった。

「それで、見せたい物とはなんだ？なるべく手短にしてくれ……。」

「やだなあ、ちーちゃん！ココにあからさまなブルーシートをかぶせた何かがあるじゃない！」

「……下らんものならば、本気で許さんからな。」

「だいじよぶだいじよぶ！確実に下らないものでは無いよ。それじゃ、レッツご開帳
す。」

千冬がラボへと呼び出された理由は、何でも見せたい物があるとかだ。快眠を邪魔されたせいとか、千冬は眠たそうな顔で欠伸をしてみせる。普段の束ならば、締まりのない顔のちーちゃんも可愛い……なんて言って跳び付きそうなものだ。だが珍しい事に、束はすぐさま本題へと入った。

そこには束の言う通りに、ブルーシートをかけた何かが置いてあった。束はブルーシートを引つ掴むと、グイッと引つ張って中身を外へと晒す。すると中から出てきたのは、一言で言い表すならば純白のロボットだ。人型でなおかつメカメカしい風貌のソレは、どこか騎士を思わせる。

「なんだこれは……。」

「これはねえ、インフィニット・ストラトス！束さんの最高傑作！長いから、略称はそのまますまISSってところかな？」

「そこはどうでも良い……。単刀直入に聞くぞ、束……お前はこれで、何をするつもりだ？」

「うーん……早い話が、世界でも変えちゃおうかなって。私やくろちゃんが、少しでも自分らしくいられるようにね。」

「……黒乃だと？東、詳しく説明しろ。なぜここで黒乃が話題に挙がる？」

千冬に質問されて、東は順を追って説明を始めた。とりあえず東は、黒乃が普段は本気を抑えているという事から話す。東が初めて黒乃の本気を見てから、2年近くが経過する。その後も黒乃の監視を続けていた東は、何度も黒乃の本気の力を目撃していた。もちろん千冬は、そんな事は全く身に覚えがない。

「聞いてよちーちゃん。あの子ね、普通の木刀なら振っただけでポツキリ折っちゃうんだよ。」

「そんな話をどうやって信じたら良いんだ。」

「折った時のじゃないけど、映像なら撮ってあるから……。よしつと、映し出すね。」

東はノートPCを弄ると、映像を出せる状態にして画面を千冬の方へ向けた。その映像は、東が作成したステルス機能付きのドローンで撮影したものだ。映像に映っている黒乃は、確かに千冬の見た事も無いような様子だ。どうやら黒乃は、木刀で木を叩いているらしい。叩かれている方の木は、なんとも大きな傷跡が残っている。

「ね？映像でも伝わる気迫でしょ。」

「これは、本当に黒乃なのか……？」

「まーねー、普段を知ってるちーちゃんの方がよっぽどびつくらこいちやうよねえ。あつ、ちなみにだけど……くろちゃんの木刀、東さんのプレゼントなんだよ！」

黒乃の握っている木刀は、束手製の物だ。見た目は単なる木刀だが、中身はぎつしりと鉄が詰まっている。そんな代物を、黒乃は難なく振り回しているのだから……千冬の覚える衝撃は増すばかりだ。しかし束としては、驚くべきはもう少し映像が進んだ後だ。すると突然に、黒乃がドローンへ向かって木刀を投げってくるのではないか。

木刀を投げたタイミングと言い方向と言い、確実にドローンを狙った投擲だろう。またしても小学生が投げたとは思えない威力で、簡単にドローンを撃ち落とした。木刀がぶつかった際の衝撃のせいか、映像はそこで途切れてしまう。しかし、一部始終としては十分すぎるほどだ。

「いや……まさか、ステルスしてるドローンに気付かれるなんてね。」

「……………」

「ちーちゃん、これで解つてくれたかな？くろちゃんが、ぜんぜんつぜんつ！本気じゃな
いって事。」

「……解かった。そこは、認める事にしよう。だが束。このISとやらと黒乃に、何の関
連性がある。」

束が言うには、ISは宇宙開発が主目的という『体』らしい。つまりは、安全性はお
墨付きという訳だ。それを用いた競技でも行われるようになれば、黒乃も気兼ねなく本
気を出せるという物だ。そこは解ったが、千冬はまだ合点がいっていない部分がある。

それは束の言った『世界を変える』と言う点についてだ。

「束。確かにコレは、世界を震撼させるだろう。しかし、それだけで世界は……。」

「あくそこ？その意味はねえ。実はこのIS女性限定しか動かせないんだよ。」

「なっ……!!?そんな物を、世に送り出したら……!」

「うん。間違いなく女が偉くて、男はダメって世界になるよね。世界を変えるって、そこも含めての話だもん。」

千冬は驚愕した様子だが、束はあっけらかんとした表情だ。むしろ千冬には、当たり前前の事を言わないでくれ……。とでも言いたそうな表情に見える。束が根本的に抱えている問題を、千冬はこれほどまでに恐ろしいと感じた事は無かった。恐らく束は、その他大勢の事など初めからどうなったって構わないのだ。

「この話は終わりだ。世界のバランスを変えてまで、黒乃が本気を出したいなんて思う訳が……。」

「そんなの、ちーちゃんの思い込みかもよ?今解ったばかりっていうのを、忘れちゃダメだよ。ちーちゃんの知ってるくろちゃんだけが、本当のくろちゃんでは無いんだからさ。」

「しかし……!」

「まあ、すぐに決めるなんて束さんも言わないよ。だからさ、動かす練習だけしてみない

?それで、ちーちゃんが動かせるようになったら……面と向かつてくろちゃんに聞いてあげば良いじゃない。」

自分の知っている黒乃が、黒乃の全てでは無い。その言葉に、千冬は言い返す事が出来なかった。本当のところ千冬は、さつき見た映像も信じたくは無いのだ。黒乃が日頃は力をセーブしていて、ひっそりと持て余した力を発散しているなどと……。それでいて千冬は、黒乃の為ならばと思っている自分にも気が付く。

それで黒乃が、本気を出せる世界が訪れるのかもしれない。しかし男が動かせないとなれば、世の男性はいつたいどうなると言うのか。千冬が葛藤している最中に出てきた束の提案は、揺らいでいた心に深く馴染む。こういう時にそう言えば、練習くらいならと思うのが人間の心理である。

「……良いだろう。ただし、黒乃が拒否した時は。」

「解ってるって!その時は、大人しく引き下がるよ。」

千冬は迷った末に、とにかく練習をしてみる事は了承した。しかし、千冬はあくまで練習で終わると思つての事だ。一方の束は、黒乃が肯定を示す自信があるらしい。ここまですれば、こつちの勝ちだ。そのような事を考えているが、決してそれは表には出さない。

それぞれ正反対の思いだが、それら全て幼い少女一人に関わる。藤堂 黒乃とは、2

人にとっては様々な意味で大きな存在なのだろう。こうして世界が変わる一歩が、本人の知らぬところで、本人のために動き出そうとしていた。そんな事を知るよしもない黒乃は、今日もスヤスヤと寝息をたてる……。



「剣道つて、バランスが大事つて柳韻さん言つてたよな。」

「まあ、基礎的な事だと思うが……。それが、どうかしたのか？」

「これ、なんか束さんが作つてくれたんだ。せつかくだから皆で練習してみようぜ。」

今日は休日で、特に稽古もない。そんな日に、イッチーに引つ張られてモツピーの家までやってきた。遊ぶ約束はしていたらしく、モツピーも防寒対策をきちんとしていた。何をして遊ぶか、そんな相談が始まるかと思いきや、イッチーが唐突にそんな事を言いだす。

更にイッチーは、神社の床下の隙間から竹馬のような物を取り出した。まあ、どこからどう見ても竹馬ですけど。その竹馬は竹製ではなく、鉄製のものだ。懐かしいなあ、俺が小学校にも似たようなのが置いてあった。イッチーの言う通りに、竹馬はバランス感覚を鍛えるにはもってこいかも。

「姉さんが作ったのか……。」

「そんなに心配しなくても大丈夫だって。じゃ、まずは俺からな。」

モツピーの眩き通りに、俺もなかなか心配ではある。レットルって言えばいいのだろうか。とにかくたば姉が作っただけで、警戒に値すると俺は思う。そんなのは気にしないと云わんばかりに、イツチーは竹馬へと乗った。そうするとモツピーは、俺の手を引いて後ろへ下がる。

「念のためだが、巻き込まれないようにな。」

「……………」

「それより一夏、上手じゃないか。乗るのは初めてだろう?」

「ああ、そうだけど……。この竹馬、何か変だぞ。」

初めて乗るのなら、多少はぎこちなさを感じるものだ。しかしイツチーは、危なげなく……。どころか直立不動で竹馬に乗れている。確かに、何かがおかしい。俺はイツチーに近寄って、竹馬を掴んでみる。いきなりの行動に慌てたのか、イツチーは竹馬から降りた。

「な、なにするんだよ黒乃! 危ないだろ……って、なんだこれ?」

「……………」。竹馬が、自力で立っているな。」

やっぱりか、妙にふらつかないかと思つたら。多分だけど、たば姉が俺達が転んで怪

我をしないように配慮してくれたのだろう。どういう原理化は知らんが……重力関係かな?とにかく、ごめんね……たば姉。俺は、とても失礼な事を考えていたよ。しかしこれだと、目的であるバランス感覚を鍛えるのは無理そうだ。

「おつ、よく見たらボタンがたくさんあるぞ。」

「待て待て、無闇に触らない方が良い……。それこそ、何が起きるか解つたものではないぞ。」

「それもそうだな……。じゃあ、東さんを捜そう。この竹馬の機能を、しっかりと説明してもらえばいいんだよ。」

イツチーの言う通りに、グリップから少し下へと位置する場所には、いくつかのボタンがついている。どちらかと言えば、こちらが本命か……。押せば何か起こるのは明白だけど、それには少々リスクを伴う。そこで俺達は、別れてたば姉を捜索する事になった。

モツピー曰く、今日は姿を見ていないが、恐らく家の敷地内には居るんじゃないかとの事。そうなると、イツチーが一番に見つけられた奴が勝ちなどと言う。なるほどね、これもついでに遊びにしておしまおうという魂胆か。まあ……俺はゆつくり捜す事にしておこう。

無難なのは、たば姉の部屋からかな。それを言うと、イツチーとモツピーは何故にそ

こから捜さないのだろう。うくん、気持ちは解らなくもないか。やつぱりたば姉を警戒しておく方が良いもんね。もしや、部屋にトラップが仕掛けてあるとかじやないよな？ それなら、モツピーが何か忠告をくれるか……。

なら、とつとと見ておくだけ見ておこう。居ないとは思うんだけど、ニアミスになるかもしれないし。そんなわけで、俺はモツピー宅へとお邪魔してたば姉の部屋を目指した。実際に入った事はないけど、確か……2階の方だったかな？ ギシギシとなる階段を上ると、数室の入口が見える。

その中の一つは、どこか異様な雰囲気を放っていた。……本能的に、危機でも察知してるのかな？ なんだらうね、あそこがたば姉の部屋だって解る俺が居るよ。とにかく、様子を伺ってみよう。俺はたば姉の部屋の扉を何度か叩くが、反応らしきものはない。悪いとは思いつつも、中に入って確かめてみよう。

ゆっくり扉を開くと……そこには世紀末な光景が広がっていたあ……ち、ちー姉よりひでえ!! まだちー姉は、服とかが散乱している程度だ。しかしたば姉の部屋は、形容しがたい機械のパーツ等で溢れかえっていた。ま、まさか……この中に埋まってるとかじや……? もしそうだとすれば一大事だ!

こんなの埋もれたら、間違いなく圧死してしまう。俺はとにかく必死でパーツの山をかき分けて、たば姉の安否を確認する。最終的に一帯をそのままひっくり返してみた

ら無理にでもここに連れて来よう。居なかったら……もう知らん。

俺は何事も無かったかのように、たば姉の部屋を後にした。最初遊んでいた場所まで戻ってみると、既に2人も戻って来ていた。どうやら、どうしてもたば姉は見つからないみたいだ。今回は仕方がないと言う事で、竹馬は諦める事に。そうして俺達は、イチーを筆頭に遊び場を求めて篠ノ之家から移動を開始した。

◇

「おっけー、今日はこのくらいにしておこうか。」

「了解した。」

千冬がISの訓練を始めて、まだ1ヶ月もたたない。しかし、もはや完璧に動かせるほどにまで達していた。束としては、完全に想定内の範囲内だ。だいたい束の予定通りに事は進み、そろそろ次なる段階へと動き出そうとしていた。束は白騎士の装着を解除した千冬へと、楽しそうな様子で声をかけた。

「ねえねえ、ちーちゃん。そろそろさ、くろちゃんに見せても良いんじゃない?」

「それはつまり、例の質問をするためか?」

「もつちろん!今日は、くろちゃんも遊びに来てるしね。」

例の質問とは、世界の変化を望むか否か。それを黒乃に聞いても良い段階だと、東は千冬へと同意を求める。確かに、I Sの操縦に関して本人も納得の出来映えだ。だがそんな事は関係なしに、やはり千冬は迷いに迷っていた。このI Sというものは、闘争を呼ぶ。

それでなくとも、男女平等を壊す代物だ。それに加えて平和を乱す要因になるとすれば、誰しもが迷って当然だろう。その他に世界を変革させる責任や、様々なものが千冬にブレーキをかけさせていた。しかし、東はいかんせんアクセル全開なうえに、ブレーキはとうに壊れている。

やるならやる、やらないならやらない的な発想故か、どっちつかずの千冬にうむむと唸って困った様子だ。もつとも、真の意味で困っているのは千冬の方だが。どうしようもないジレンマに、千冬の眉間の皺は深くなる一方だ。とにかく、まだ時期は先伸ばしにできる。まだ早いと、千冬はそう告げようとした。

「東。黒乃にはまだ……。」

「………………。ちよつと待って、これは…………。」

「…………。おい、どうかしたのか。」

東は何かに気がついていたらしく、いつになく真剣な表情でPCのキーボードを叩く。しばらくは千冬が話しかけても、返事すらしてもらえない。その事が千冬にもよほどの一

大事だと感じさせた。やがて東は、ブツブツと聞こえるほどの声で呟き始めた。

「まさか……くろちゃん？ いや、でもくろちゃんに限ってそんな……。ああ、でもでも……あの子ならやりかねない可能性だってあるし……。」

「なんだ……何があつた？」

「あ……そのね、怒らないで聞いて欲しいんだけど……。」

東の放つた前フリからして、ロクな話では無い事は確定した。千冬はいつもの事だと早々に諦めて、少し溜息を吐いてから聞く体制に入る。東が言うには、ISを世間に出す際に学会に提出する以外の方法を目論んでいたらしい。その方法とは、ISの有用性を世界に知らしめるのにはうってつけではある。

「遠まわしに言うな。結局、お前は何をするつもりだったんだ。」

「日本を攻撃可能なミサイル基地をハッキングして、それをちーちゃんが叩き落とす……って、いたたた！ち、ちーちゃん……割れる！東さんの天才的脳ミソが詰まった頭が割れちやうよ！」

「そうか、それは良かった。」

「あれれ、話が噛み合っていないんだけど!？」

ぶつ飛んだ方法を言い出した東の頭をガツチリと掴んで、アイアンクローをくらわす。こめかみ辺りからミシミシと音が鳴っているような気もするが、千冬は右手に万力

が如く力を込める。女性らしからぬ握力に掴まれて、束は説明の続きが出来ない。ここからがもつと大事な話なのだ。

「ちーちゃん、タイムタイム！こんな事をしてる場合じゃないんだってば！」

「なんだ？まさか、お前の知らない所でミサイルの発射が開始されたとも言うんじゃないだろうな。」

「そう、ピングー！流星はちーちゃん！」

「何?!それはいつたいどういう事だ!」

「や、だからそれは……うくん……。不確定要素だけどね、くろちゃんが関係してると思うんだよねえ。」

千冬は最も最悪であろう状況を、冗談めかして束に告げた。しかし、それこそが束が焦っている理由そのものだ。しかも黒乃が関わっていると言うのだから、千冬の間心はさらに増した。束が言うには、ハッキングはエンターキーを押せば良い状態にして自室へ放置しておいたらしい。

「な・ん・で……そんな状態で放置する!?!」

「だ、だって……誰も私の部屋に入らないし、大丈夫かなって。」

「それに、黒乃が実行したというのはどういう事だ!」

「あの子の事だから、解ってやってるよね……多分だけど。」

「何……？黒乃が、そんな事できるはず……。」

「それこそ、くろちやんだよ？何があってもおかしくは無いよ。それこそ、あの子はイタズラ半分で人の物を弄ったりするはずないってば。そこは、ちーちゃんの方が良く知ってるでしょ？」

短い会話の中で、千冬には聞きたい事が山ほどあった。1番に出てくるのは、言った通りにワンタッチでハッキング完了の状態になるPCを、なにゆえ自室なんか置きっぱなしにしておいたかだろう。そんな誰でも触れる状態にあるのに、東が黒乃だと断言しているのが千冬は解せなかった。

しかし、思った以上に理由は単純だ。それは、黒乃だから。そう言われてしまえば、なんとなく納得してしまっている千冬が居た。黒乃は、無暗やたらに人の物を触らないだろう。だが現にハッキングが成功しているとすると、それが危険極まりないものだと解ってやっている裏付けとなるのだ。

「うくんでもそれだと、ミサイルを撃ち落とせる要因を知らないとだし……。もしかして、ISのデータも見られたかなあ？」

「そんな事はどうでも良い！ISに乗って、ミサイルは撃ち落とせるのだな？」

「それはちーちゃん次第だけど、まあ問題ないと思うよ。というか、行くの？ちーちゃん。」

「馬鹿を言うな、私が行かねば……日本は終わる。これは既に、黒乃がどうこうの話してはない！」

「ま、当たり前だよ。おっけー、それじゃあちーちゃん……変革を始めよつか？」

この日から世界は、大きな変化をもたらした。2000発超のミサイルを撃ち落とし、1人の犠牲者も出さずに事態を收拾させてみせた『インフイニット・ストラトス』という産物によって。主犯は後に歴史へと名を連ねるであろう篠ノ乃 束。しかしその裏で、1人の少女が関与していた事實は、闇へと葬り去られる。

そして世界が変わるきっかけとなったこの事件は、白騎士事件と名付けられた。この白騎士事件は、本当にちよつとしたきっかけでしかないのだ。1人の少女が織り成していく、八咫鳥伝説のほんの始まりに過ぎない。

第7話

アラスカ条約。ラノベであるインフィニット・ストラトスを讀んだことがある人には、馴染みのある言葉なのではないだろうか。まあ要するに、あんなトンデモ機械の情報独占すんなやジャパン……え？コラあ。こういうんはなあ、各国で平等に共有せんとアカンやろ。解つたらとつとと、耳い揃えて寄越すモン寄越してもらいましょか？

……と、いった具合に日本を含めた21の国と地域で、ISに関する情報開示と共有を条件に成立した条約である。前世でも日本が苛められてるビジョンしか見えなかつたけど、思ったより酷かつたねえ……アレ。現地の様子とかテレビで中継されてたけど、基本的に罵詈雑言だったよ。まあつまるところ、世に出ちやつたんだよねえ……ISが。

モツピーの家に遊びに行った日が、白騎士事件当日とはたまげたなあ……。パパンが慌てて避難とかいうから何かと思つたら、まさか白騎士事件とはねえ。つてかさあ……日本政府及び各国のお偉いさん方さあ……。こういう時に限つてさあ、話し合いをスラスラ進めちやつてコンチクショ。

もつとゆつくりグダグダやつてくれれば良い物を……。おかげで、おかげでえつ……

モッピーとお別れじゃんよおおお……。うええええ……。寂しいよお、辛いよお。いや、解っている。原作通りに事が進むのが前提だとすると、モッピーとの別れは必然だ。でも、解っていても辛い。モッピーの……。汗の匂いを嗅げなくなると思うと……。

本日は、俺の心模様を反映させたかのような土砂降りでごさんす。今は放課後なんだけど、傘忘れちった。天気予報では、日中晴れる。……。みたいな事を言っていたんだけどねえ。そのせいか、貸し出し用の傘は一本たりともなくなつた。ワラワラと勢いよく少年少女が傘へ群がったせいか、俺は確保する事が出来なかつたのだ。

ま、イッチーが確保したから問題ないけど。でもあの子……。帰っちゃつたんだよなあ。なんか、1回家に帰ってから傘持つてくるとか言つてた。そんな面倒な事をしなかつたって、俺を入れてくれればいいと思うんだけど……。ハツツ!?もしかして……。嫌われている!?俺と一緒に傘へは入りたくない!?

楽しかつたぜえ〜wwwお前との家族ごっこお!……。とかイッチーが言い出す前に、どうにかこうにか関係修復できればいいけど。でも中の人的に言わせればハルトって叫ぶ方の人だよハルトオオオオオオッ!……。それにしても、イッチーを待つのも飽きて来たなあ……。図書館で暇つぶししてるけど、学校の図書館って、俺からすれば的外れも良い所なんだよな。難しい文学作品は読む気はないし、かと言って絵本も少しアレだしなあ……。

ラノベを置こうぜ、ラノベを。マンガ、アニメ、ゲームの知識も馬鹿にならないんだぜ？昔テストの問題で、ゲームに出てた用語が出題されて事があつたつけ。昔を懐かしむのも良いけど、今は現状をどうにかしないと。うくん……教室に居ないと、イツチーは俺を捜す事になるかも。暇は承知で、教室に戻ろうか。

そう思つた俺は、半分は挿絵を眺めていただけの小説を元あつた場所に返した。そうして図書室を後にすると、せつせと自分のクラスへと歩いて行く。教室のすぐ近くまで来ると、明かりがついている事に気が付いた。俺と同じく雨で帰れない子が、自主勉強なんかをしているのかな？それなら、邪魔しないようにそつと教室に入らないと。

俺はそろりそろりと、教室の戸をスライドさせる。するとそこには、勤勉な子なんて一人も居ないではないか。代わりに居たのは、物鬱げな表情で雨を眺めるモツピーだった。そんな表情をしているのは、大雨だからでは無いだろう。モツピーは、もうすぐここを去る事になる。残り短い時間を、少しでも思い出に残しておきたい……のかも。

……つてか、モツピーもワンチャン傘とか持つてる可能性があるじゃん。退屈でしようがなかった俺は、自然と傘を求めてモツピーへと接近を図る。ここで問題が生じるが、どうするべきか。俺は無言なうえに影も薄いらしいので、用事があつて肩を叩くと驚かれるんだよ。しかし、他に方法が無いのが辛い所である。仕方が無いので、俺はモツピーの肩を軽く叩いた。

「ひ、ひいつ!? な、なんだ……黒乃か。まったく、毎度の如く驚かせてくれるな。」

まるでお化けでも目の前にしたかのような、可愛らしい小さな悲鳴をモツピーは聞かせてくれた。今のご飯3杯はいけるな……。しかし、モツピーの様子がいつもと違う。いつもだったら、割と怒られる形で驚かせるなど言われるんだけど。今日のモツピーは、鼻に優しい柔らかかティツシユ並にしつとりしている。

「黒乃は、帰らないのか?」

いやいやモツピー、聞いてよ。いつでも帰られる状況だったのに、イツチーに置いて行かれた可哀想な俺氏なんです。あつ、でも……そしたらモツピーも、後からイツチーと合流できるね。ならば、モツピーの為にも引き留めておくことにしないと。モツピーは椅子に座って外を眺めていたので、俺も近場の椅子を拝借した。

ズルズルと引きずって、モツピーの近くへと寄せる。そしてそのまま、背中を預ける様な形で座った。あ、く……モツピーの背中があつたかい……。この温もり、今のうちに堪能しておかなければ。うう……自分で言つてて寂しくなるなあ。大丈夫さ、モツピー。俺は、モツピーの事は絶対に忘れない。

「黒乃……。ありがとう。本当に、ありがとう……。」

背中越しだからよく解からないけど、何故だかモツピーに感謝された。あれかな? テレパシーみたたく、俺の言いたい事が伝わったのかもな。うくむ、ツーカーが取れるって

のは良いね。それは黒乃ちゃんがこの状態だからかもなあ……。もし俺が欲望のままに行動していたら、間違いなく嫌われてるだろうし。

どっちにせよ、今回は傘が目当てな部分もあるし……。複雑な気分ではあるけれど、モツピーが嬉しく思っているのならそれで良いか。そして俺とモツピーは、無言で教室へ居座り続けた。やがてイツチーが俺を迎えに来てくれて、いつもの3人で家路へと着く。

この帰り道を3人で歩けるのは、もはや終わりの見える頃だ。こんな時くらいは、明るい表情でいたいんだけど。せめて俺は、2人から一步引いておかないとだな。モツピーはイツチーと離れるのが最も辛はずだ。ガツデム要人保護プログラム。そんな事を心で呟き、俺は2人の背を見守った。



そうして時間は過ぎて、モツピーが引越してしまいう日となった。織斑姉弟と俺は、全員で見送りに来ている。たば姉はドロンと失踪してしまつたせいで、かなり前から行方知らずだ。そう思うと、最後に交わしたやりとりはどんなだったかな？ 最後にもう一度で良いから、あの巨乳に顔面を埋めたかつたなあ……。

「箒……。向こうに行っても、元気でな！」

「ああ、ありがとう……一夏に黒乃。それに千冬さんも、本当にお世話になりました。」
「こつちこそ、ウチの馬鹿2人が世話になった。特に、黒乃はな……。」

俺の頭をポンポンと叩きながら、ちー姉はそう言った。いやあ……ちー姉の言う通りに、本当にそうだよ。モッピーが居てくれたおかげで、いろいろと助かった事が多い。それはそれとして、イツチーと並んで馬鹿扱いには心外だなあ。イツチーもイツチーで、ちー姉へと向けて抗議の視線を向けている。

「なあ……黒乃。今日も声は出なさそうか？しばらくは、箒と離れ離れになっちゃうんだぞ。」

「いや、大丈夫だ。黒乃、無理をする事はない。見送りに来てくれただけで、私は十分だ。」

そうだよねえ、別れの挨拶くらいはしなきゃだよな。俺も全力で声を出そうとしてるけど、いつもと同じで声帯が機能しない。くそう……困った身体だなあ。俺が必死に声を出そうとし続けていると、そのときにふと一陣の風が吹いた。……と、同時に俺の両目に痛みが走る。

ぐおああああ！風に巻き上げられたゴミか何かが、俺の両目に入りやがった。なにこのミラクル……。両目に同時とか、奇跡としか言いようがないじゃん。いたたたた……

涙が出てきた。それよりも、こんな事をしている暇じゃないんだって。モツピーに、別れの言葉をだね……。

「ずるいぞ、黒乃。私だって、泣か……ない……ように、我慢していた……のに。よりもよつて、お前が……泣くと……。う……う……う……！うわあああああ！」

ぬうん、モツピーよ……抱きついてくれるのは嬉しいが、腕ごとロツクするのは止めておくれ。目を擦りたくても擦れない！拷問だ……。……つて、あれ？前にもこんな事があつたような……？それよりモツピー……そうだけど、そうじゃないんだよ。

確かに俺は、泣きたいくらいに別れは悲しい。だけど、この涙はそういうのじゃなくて……。ま、まあいいか、結果オーライって奴だろ。泣け泣け、モツピー。お兄さんの胸の中で、思いきり泣きなさい。俺はとにかくイツチーとは、今生の別れってわけじゃないけどさ。感情を表に出せるのは、きっと幸せなんだから。

「箒、そろそろ行くぞ。」

「い、嫌です！2人と離れたくありません！」

モツピーは泣いてしまったせいで、気持ちが悪らいでしまったらしい。モツピーにしては珍しく、駄々をこねるようにパパンの言葉を拒否した。そして俺にしがみつくもんだから、パパンがそれをひっぺがしにかかる。篠ノ乃親子の悶着に巻き込まれた俺は、もみくちや状態である。

なんか、アレかもな……俺が涙を流すと、不幸な事態になる。ジnkス的なものになる気がして、すつごく嫌なんですけど。しかしモツピーの抵抗も空しく、俺から引き剥がされ強引に車へと連行された。パパンも俺達に別れの挨拶をすると、付け足すように精進しろと念を押される。そうしている間に、車は走り出してしまった。

「一夏ーっ！黒乃ーっ！」

「箒……。……行こう、黒乃！最後まで、追いかけてよう！」

へ……？ちよつ、ちよつとタイムだイッチー！まだ涙で前も良く見えないのに、そんなに引つ張ったら転ぶ転ぶ！俺は必死で足を動かして、転ぶのだけは避けようと踏ん張る。薄ぼんやりと、車の中から手を振るモツピーが辛うじて見えた。でも……やっぱ走るのでいっぱいいいいだ！スマーン、モツピーいいい！

心の中でそう叫ぶしかない、なんとも微妙な別れになってしまう。車が見えなくなつたのか、イッチーはようやく走るのを止めてくれた。やっと涙を拭う事が出来た俺は、遠慮なしに袖で目元を拭いた。するとイッチーが、俺は黒乃の隣に居る……なんて言うけど、本当に寂しいから出た涙とかじやないんだよ？

まあ……心配してもらえないよね。俺はイッチーの言葉に首を頷かせ、肯定の意思を示した。するとイッチーは、自分でも照れ臭そうにはにかむ。そうして元来た道に戻ると、2人揃ってちー姉に抱き止められる。ちー姉も、モツピーの転校に思うところ

ろがあるんだろう。そう……しみじみと考える俺であった。



ザーザーと雨が降りしきる。今日の天気は、生憎の大雨。曇天から降り注ぐ雨の矢を、箒はただただブーツと眺めていた。天気予報では、日中晴れと言っていた。そのために、傘を持って来ていない生徒が大半だ。しかし箒は、偶然にも以前置きっぱなしにしてしまった傘がある。だから箒は、その気になればいつでも帰れる。

しかし、箒は帰らなかつた。なるべく多くの時間を、この教室で過ごしたかつた。今は家に帰っても、どうせロクな事など無い。束がISを発表してからというものの、箒を取り巻く環境は一変してしまつたのだ。一家の絆は半ば断たれたも同然で、2人の友人との絆も……秒読みで断たれるのを待つのみ。

要人保護プログラムに則り、箒は余所へと引越す事が確定していた。それすなわち、一夏と黒乃との別れを意味していた。時分は、もうすぐ4年生が終わりを告げる頃だ。春休みに入つてしばらくすれば、すぐにこの地を去る事となる。箒は、何よりもその事が辛くてたまらない。

多くの友人なんて、望んではいない。箒は、ただあの2人が居ればそれで幸せだった。

ひたむきで、真っ直ぐな一夏が好きだった。喋らなくても、表情が変わらなくても、優しい黒乃が好きだった。2人は箒にとつて、宝だった……。2人と一緒に居られなくなる。その考えが過るだけで、箒の心模様は今の天気と同じく土砂降りになってしまう。

「……………」

もはや箒は、溜息すら出て来ない。今の箒は、それほどまでに追い詰められているのだろう。心なしか瞳は淀んで、何処でも無い何処かを眺めているような……。そんな感じだ。そんなにポーツとしている最中に、軽くだが箒の肩を掴む者が居た。突然の事に驚いた箒は、少しばかり意識を覚醒させる。

「ひ、ひいつ!? な、なんだ……黒乃か。まったく、毎度の如く驚かせてくれるな。」

「……………」

身体をビクつかせてから振り向いてみると、そこに居たのは黒乃だった。いつもならば少しばかりの抗議をぶつける箒だが、いかんせん覇気のない様子でそう言った。それには、黒乃が遠くから声をかけられないという事情も含まれている。しかし、姿が消えていたのに……黒乃はどうしてここに? そう思った箒は、素朴な疑問を投げかける。

「黒乃は、帰らないのか?」

「……………」

箒も解つてはいたが、返答は無い。ただただ黒乃は、いつもの様子で箒を見据え続け

た。しばらくすると、箒の近場の席にある椅子を、乱暴に引きずりながら箒の座っている場所まで近づける。そして黒乃は、運んだ椅子へと飛び乗って、箒の背中を背もたれにするようにした。

まるで黒乃は、これが返答だと言いたいように思えた。帰らない。箒が帰るまで、私も帰らない。そう黒乃が言いたいように感じた。それは本人にしか定かでない事だが、それでも箒は嬉しかった。こうして、残された時間を共に過ごそうとしてくれるのは、箒は思わず声を震わせながら、感謝の言葉を述べる。

「黒乃……。ありがとう。本当に、ありがとう……。」
「……………」

箒には、これしか伝えるべき言葉が見つからない。だからこそ、心から黒乃の全てにありがとうを伝える。今までは、2人から離れる事は苦痛でしかなかった。しかし箒は、黒乃のおかげか……前向きな考えが浮かび始める。物理的距離なんかに、私達の絆は負けない。遠くに居ても、繋がっているのだ。

そう心を新たに、ようやくしゃんとする事ができた。箒が黒乃を連れて帰ろうとする時、そこへ一夏も現れた。ちょうどよいタイミングだ。また3人で家路につけるのなら、今の箒にとってこれほどに嬉しい事はない。連れ立って帰る3人の姿は、どこかいつもより楽しそうに見える。それは空元気か、それとも……。



「箒……。向こうに行っても、元気だな！」

「……………」

「ああ、ありがとう……。一夏に黒乃。それに千冬さんも、本当にお世話になりました。」
「こつちこそ、ウチの馬鹿2人が世話になった。特に、黒乃はな……。」

そうしてやって来た別れの日に、一夏と黒乃の2人はしつかり見送りに来ていた。それだけでなく、千冬も来ている事が箒としては意外だった。黒乃関連で世話になったと言われるが、とんでもない。どう考えたって、世話になったのは自分の方だ。

この前黒乃が寄り添ってくれた。そのおかげで、自分はどうして明るく去る事ができるのだから。最後の最後まで、世話になりっぱなしだ。箒は、どこか自嘲するかのような表情を浮かべる。そうして別れの挨拶を済まそうとしていると、一夏が黒乃に言った。

「なあ……。黒乃。今日も声は出なさそうか？しばらくは、箒と離れ離れになっちゃうんだぞ。」

「いや、大丈夫だ。黒乃、無理をする事はない。見送りに来てくれただけで、私は十分

だ。」

箒からすれば、言葉などは不要だった。黒乃と接していて、それは何度も思った事だ。無言だろうと何だろうと、黒乃がこの場に居ればそれだけで見送りは成立している。別れの時は、笑顔で。そう心に決めていた箒は、微笑みながら黒乃に視線を送った。

その時、まるで箒達を包み込むかのように……力強い風が吹いた。思わず箒は、一瞬だけ目を閉じた。そして再度目を開くと、目の前にいる黒乃が……涙を流していた。何の涙かなど、聞くまでもないだろう。箒との別れを、悲しんでいるのだ。

「ずるいぞ、黒乃。私だって、泣か……ない……ように、我慢……していたのに。よりにもよって、お前が……泣くと……う……う……うわあああああ！」

決して泣かないという思惑は、脆くも崩れ去ってしまった。無理もない……。自分の感情を表現できない黒乃が、自分との別れを惜しんで泣いてくれるのだから。もらい泣きのような形で泣き出した箒は、思わず黒乃へと抱きつく。そんな2人を、織斑姉弟は押し黙って見守る。

「箒、そろそろ行くぞ。」

「い、嫌です！2人と離れたくありません！」

こうなってしまうえば、箒は思っていた事と真逆の行動をとってしまう。どちらかと言えば、今の言葉が本音であるのに違いはない。しかし、こればかりはどうしようもな

いのだ。箒のワガママを通す訳にはいかず、柳韻は強引に車へと連れ込んだ。車内でも箒はジタバタとして、すぐさま窓を開け放つ。

「二夏ーっ！黒乃ーっ！」

大切な友人2人の名を叫ぶと同時に、車は走り出してしまふ。しかし、遠ざかつていく2人は、最後まで車を追いかけてくれた。それを見る事ができて、箒は少しでも救われた気分になる。だが、やがて2人は見えなくなってしまった。解っていた事だが、とんでもない喪失感が箒を襲う。

箒は柳韻に促されて、窓から引つ込んでしつかりと座り直す。それでも黒乃の涙が脳裏から離れないのか、箒はいつまでもメソメソとしたままだつた。しかし、希望を捨ててはならない。いずれまた再会できることを信じて、箒は唇を噛み締める。それでも、涙は垂れ流しのままだが。

(二夏、黒乃……いつか必ず……)

第8話

春といえ、出会いと別れの季節と言う。実際のところ、俺はモツピーとお別れしたばかりだ。それで春休みが開けて、晴れて進級したのだけれど……。それすなわち、クラス替えを意味する訳で。イッチーは俺の事情を配慮してか、当然の如く俺と同じクラスだ。問題は、俺の隣に居るこの子なんだよ……。

「……………」

「な、何よ……………」

チラリと隣の席を眺めると、そこに座っているのはツンデレチャイナガールこと凰鈴音ちゃんである。俺の視線を感じたらしく、鈴ちゃんは少しばかりカタコトな喋りで返してきた。日本に来たばっかりだからね、しようがないね。っていうか、カタコトの方がちよつと可愛いし。

……って、女の子の話になるとすぐに脱線してしまう。何が言いたいかって、おかしいよね？なんでよりによって、俺の隣に座らせるんでしょうか。転入したばかりで、こんなの隣の席にされるとか……俺だつたら心が折れる。担任の先生が、藤堂の隣が空いてるなうなんて言って……。

違うんです、俺の隣は空いてるんじゃないや無くて、空けさせてもらってるんです。イッチーを除いて、俺としては隣の席には人間が居ない方が楽だ。された方もされた方で、可愛そうだからね……。つまりは、鈴ちゃんは超絶可哀想な事になってるって事だ。うゝ……なんか、色々と計画がだだ崩れだよ。

鈴ちゃんと円滑に仲良くなるためには、始めは極力関わらないでおこうと思っていたのに。原作イベントにて、イッチーが鈴ちゃんをイジメから助けるわけだ。そうすればイッチー経由で、少しはマシな出会いが鈴ちゃんと出来る……ハズだったんだけどなあ。今からどうやって仲良くすればいいか、想像がつかないぞ。

それよりも、俺のせいで鈴ちゃんが目を付けられる気しかない。かといって、喋る事すらままならない俺は力にならないだろう。何気に詰んでる気すらするね。ここから更に、鈴ちゃんはイッチーの事を好きになる訳で。そしたら鈴ちゃんは、イッチーと行動を共にする俺を敵視するだろうし……。

その問題もあるけど、イッチー自体も問題があるんだよなあ。なんというか、俺のせいでイッチーの社交性が息をしていないんです。何かとイッチーは、俺に対して過保護だ。なんかこう……俺やちー姉以外はどうでも良い感が滲み出ている。そりやもちろん、イジメが起きていたら止めに入るだろうけどさあ。

多分イッチーは、黒乃の敵は俺の敵みたいな思考回路になっているはずだ。それで鈴

ちゃんが俺に対して否定的な態度を取るとすれば、大変な事になるのが目に見えている。考えれば考えるほどマズイ……。俺の存在のせいで、軽くメインヒロイン1人が離脱してしまう可能性があるなんて……！」

「じゃ、この問題を……嵐。」

「は、はい！」

「この問題を解いてみてくれ。早く日本語にも慣れないとなく。」

「えっと……。」

とか考えていると、隣の鈴ちゃんが先生にあてられた。現在は算数の時間で、今はいわゆる文章題を解いている最中だ。Aさんは、〇〇円のリングを3個買いました……的な奴。先生の言い分も解るが、日本に来て日が浅い鈴ちゃんには酷な話だろう。え、と、なにになに……。

黒板の問題をきちんと確認した俺は、ノートの端に式と答えを記入する。そしてそのまま、軽く机を指先でトントン叩く。それに気づいた鈴ちゃんは、さつき俺がしたようにチラリと様子を窺う。ばれないようにする為か、こっそりと俺のノートを覗き込む。しばらくして鈴ちゃんは、黒板に向かって歩き出した。

鈴ちゃんはチョークを手にとると、俺がノートに書いた通りの式を黒板にスラスラと書いていく。本当はこういうの、鈴ちゃんの為にはならないんだらうけど……。ま、鈴

ちゃんも日本語に慣れればこの程度の問題は造作も無いだろう。そうこうしている間に、鈴ちゃんは黒板の問題を解け終えた。

「え〜つと、ダイジョウブですか？」

「おつ、よく勉強してるな……偉いぞ〜。風の解いた通り、この問題は……。」

「……ねえ。」

「……………」

「……ありがとう。」

鈴ちゃんは、授業を続ける先生を尻目に俺へと礼を言った。……グッド！その少し不本意ながらみたいな礼の良い方……パーフェクト！欲を言えば……べ、別に教えられなくたって解ったんだからね！……ってな具合に強がってくればなおよろしい。ふむ……それにしても、今のはフラインプレーだったのかもな。

打算的発想は全くなかったけど、結果的に鈴ちゃんに感謝されたわけだし。親切身を滅ぼす、なんて言ったりするけど……やっぱり人の為になる事はやっていった方が良いね。それでなくても、他人に迷惑をかけてしまう身体なのだから。とにかく俺は、授業そつちのけで鈴ちゃんと仲良くなる計画を立てていくのだった。

そして時間は過ぎて、放課後になった。なのに、俺は絶賛放置プレイをくらっている。なんかイッチーが、他の教室に忘れ物したとか。それで、すぐに取ってくるから教室で

待つててくれつてさ。なくんか知らないけど、本当にイツチーから待ちぼうけさせられる事が多いなあ。別に先に帰つても良いんだけど、あの子機嫌悪くなるからね。

もしかしてイツチー、俺の事が好きなの？俺は一応だけど『藤堂 黒乃』としては生きていくけど、イツチーに好かれる事はした覚えはない。ま、多くの時間を互いに過ごしてるから……。多分だけど、ホームシックと同じで俺に帰巢性でも感じているんだろう。いや、それもそれで問題か……。

「おら、笹食えよ笹！」

どこかで聞き覚えのある台詞が、チラツと教室の奥の方から響いた。え……？今のつて、もしかしなくても『アレ』だよな？例のシーンだよな……？な、なんてこつた……？よりによつて今日かよ！思わず俺は立ち上がつて、コソコソと奥の方へ足を進める。すると案の定、鈴ちゃんが数人の男子にからかわれている。

あわわわわ……。ろくに対策すら浮かんでないのに、どうしてくれようか。イ、イツチー！イツチーはまだか！教室の入口の方へ振り返つてみても、イツチーが現れる気配なし……。やつぱり、俺が出ていくしかないのか？でも……。俺もイジメられてみたいなものだ。

そうすると、火に油を注いでしまうよな？ああ……。でも、このまま見過ごすわけにもいけないし。けど、争い事に巻き込まれたくない……。つてのも本音だし。俺が心の中で

ウンウンと唸っている間も、鈴ちゃんは男子にからかわれ放題だ。え、ええい！俺には、見ているだけなんてできない！

「うん……うげつ、藤堂!」

「アンタ……。」

調度良いや。隠れて見てたけど、男子の一人に見つかってしまふ。それを拍子に、俺は物陰から姿を晒す。落ち着け、あくまで俺はイツチーが駆けつけるまでの繋ぎだ。その間は、イジメいくないって視線で男子達を見続けるしかない。……って、あれ？おかしいな。なぜ俺が一步踏む度に、一步下がるんだい？

男子達ならまだ解るよ？けどね、なんか鈴ちゃんも引いてるんですけど。俺、まだ何もしてないですぜ。いや、別に何かするつもりもないけどさ。俺は鈴ちゃんの前まで出ると、そこで足を止めた。すると、男子達も足を止めた。なんなのさ、お兄さん泣いちゃうゾ。

「な、なんだよ……邪魔すんじゃねーよ!」

「そ、そうだ！何のために学校に来てるか解かんねえくせに!」

「つーか、学校来んな！お前気持ち悪いんだよ!」

うおう、最近の子供は辛辣な事を言うねえ。お兄さん軽くシヨックだ。でもね、君達……言つて良い事と、悪い事つてあるんだよ？そうやって悪ぶるのも良いけれど、もう

少しは言葉を選ぼうよ。……と訴えるような視線を送つてみる。すると男子達は、またしてもその場から少し引いた。

「くそっ！痛い目みないと解らないみたいだな！」

「っ?!危ない！」

いや、だからまだ何もしていないじゃん!?そんな事を言いながら拳を握られたつて、俺は困惑するしかないよ。でもつて鈴ちゃん。気持ちはありがたいけど、俺を庇つてくれなくても良いのに！鈴ちゃんは俺を押し退けて、両腕を大きく広げて盾になろうとする。慌てて体制を戻すが、もうすぐ鈴ちゃんが殴られる寸前だ。

しかし、横入りした誰かがパシツと男子の拳を掴んで止めた。そちらの方へ目を向けると、そこに立っていたのはイツチーだった。イツチー……アンタやつぱりイケメンだよ！タイミングがイケメン過ぎだ！流石に主人公は格が違つたつてわけだな。

「お前ら、黒乃に何しようとした……?」

おっふ、やはり鈴ちゃんに目が行つてないご様子！ど、どないするか……。これで、鈴ちゃんにフラグが建つたかどうかが問題なんだけど。そんな事より、イツチーが今にも男子達に殴りかかりそうだ。変に波風立てなくなつたつていいんだよ……イツチー。こんな時に何が大事かつて、騒ぎにしない事です。アイアム・事なかれ主義者！

俺は急いでイツチーと鈴ちゃんの手を掴むと、教室の外へと走り出す。2人ともそれ

それぞれの都合で、ギヤーギヤーと騒いでいるがそれは無視！私には何も聞こえず……。とにかく下駄箱の前まで、必死で足を動かしていく。俺が止まったのを確認すると、2人は一斉に俺へと非難を浴びせた。

「黒乃、階段まで手を離さないのは止めるよ!? 転げ落ちるかと思っただろー!」

「本当よ、どういう神経してんのアンタ?!」

鈴ちゃんが転入して以来は、イッチーと特別会話をしているのは見かけなかった気がするけどな。この2人、異様に息がピッタリじゃないか。本人達もそれが可笑しいように、顔を見合わせて互いに微笑を浮かべた。俺への文句はまだあったみたいだけど、事の経緯を鈴ちゃんがイッチーへと説明してくれた。

「そっか、そんな事があったのか。」

「ええ、でも大丈夫よ。その子が助けてくれたから。」

「ああ、黒乃は頼りになる奴だからな!」

助けたってか、別に俺は何もしてないんだけどねえ。そのせいか、2人から送られる眼差しを素直に受け取れない俺が居る。まあ……鈴ちゃんがそう言ってくれるなら、それはそれで万々歳って事で良いのかな? そう思っていると、鈴ちゃんが俺の目の前で手を差し伸べた。

「アタシ、凰 鈴音。さつきは本当にありがとうね。そっちのアンタも。」

「俺は、織斑 一夏。よろしくな。」

「藤堂 黒乃。」

おお、名乗る事が出来た！地味に嬉しいな、これ。俺も驚いているけど、イツチーはもつと驚いてるらしい。事情を知らない鈴ちゃんは、不思議そうに俺との握手を交わしている。しかし、柔らかい手だなあ……。何だろうか、幼児にも勝るプニプニ感……。素晴らしい！

「えつと、なんかあつたの？」

「そう……。だな。黒乃の事情は、また今度話す。それで、凰だっけ？家つて何処なんだ？一緒に帰ろうぜ。」

「鈴で良いわよ。途中まで同じ道と思うから、3人で帰りましょうか！一夏に、黒乃！」
イツチーも鈴ちゃんも、コミュ力高いよね。俺だったら、会つて間もない人と一緒に帰ろうなんて思いすらしないけど。2人に限つては、一方的な知り合いと言うかなんというか。人となりは嫌でも知ってるから、何の問題もない。それにしても、すんなり仲良くなれて良かった良かった。

これで何の滞りも無く、毎日を過ごす事が出来そうだ。そうしている間にも、2人は靴を履きかえたみたいだ。イツチーに大声で名前を呼ばれたので、俺も急いで2人に続く。何気に原作イベントをこなしたのつて、これが初めてじゃないかな。……。いろいろ

と気を遣う。そんな事を学んで、また一つ賢くなった俺氏である。



親の都合で知らぬ土地である日本に越してきて、凰 鈴音は早々に心が折れそうな状況にあった。なぜかと聞かれれば、大きな要因としては隣の席の人物のせいであろう。鈴音の隣の席は、藤堂 黒乃と言う名の少女だ。彼女の何が問題かと聞かれれば、謎の一言に尽きる。

全く喋らないかと思えば、全く表情を変える事すらない。初めて隣の席に着いた時も、会釈のみで済まされてしまう。鈴音は、黒乃の声を1度たりとも聞いたことが無い。それはクラスの大抵に言えた事なのだが、鈴音にはそれを知る由もないだろう。他の女子に聞いても、塩対応しか返ってこない。

凰さんも無視していいよー。……なんて言われた日には、事情を知らない鈴音もムツときたものだった。とはいえ……海外から転入して来て、ファーストコンタクトが黒乃なのは災難としか言いようがない。鈴音が心の中で溜息を吐いていると、隣から視線を感じた。

「……………」

「な、何よ……。」

チラリと横を見てみると、同じくチラリと黒乃も鈴音を見ていた。驚いた鈴音は、少しキツイ対応をしてしまう。鈴音が何よと返せば、黒乃は視線を黒板へと戻す。コレを見た鈴音は、やってしまったと後悔を露わにする。鈴音は別に、黒乃を毛嫌いしているのではない。むしろ、仲良くなりたいと思っていた。

「じゃ、この問題を……凰。」

「は、はい!」

「この問題を解いてみてくれ。早く日本語にも慣れないとな。」

「えっと……。」

「……………」

先生に当てられて、鈴音は困惑する。質問の内容は、文字式を解いてみてくれとの事。鈴も中国では文句なしで頭は悪くない方だったが、日本語独特の言い回しに問いの解釈が辛い。すると、今度は隣から机をノックするような音が聞こえた。様子を窺って見ると、黒乃がノートの端に式と答えを書いてくれたのだ。

鈴は手早く式と答えを記憶すると、黒板に向かって踏み出す。半ばカンニングも同様の為に、不正がばれないかと鈴は内心でドキドキとしていた。ぎこちない様子で黒板の問いに答えて見せれば、あまり自信なさそうにチョークを置いた。先生の様子を窺うか

のように、鈴オズオズと問いかける。

「え〜つと、ダイジョウブですか？」

「おつ、よく勉強してるな……偉いぞ。風の解いた通り、この問題は……。」

「……ねえ。」

「……………」

「……ありがと。」

鈴音が黒乃と仲良くなりたいたいと思えるのは、こういった点に関してが大きかった。言葉や表情は二の次として、単純に黒乃は優しい。これまで何度も助けられたし、世話を焼くような行動も良く見かける。それだけに、感じの悪いありがとうしか言えず鈴音はまたしても後悔を覚えた。

そうして今日も、特に黒乃との仲は進展しない。放課後になると、いつも一人の男子が黒乃を引つ張つていく。そのせいか、鈴音は放課後にチャンスは無いと思つてゐるのだろう。だからこそ、黒乃よりも先にせつせと帰ろうとした時だった。数人の男子が、鈴音の行く手を阻んだ。

何の用かと聞く間もなく、鈴音は教室の奥へと引き込まれてしまった。男子全員が下卑た笑みを浮かべていた事から、だいたい予想はついていた。いわゆる、ちよつかいという奴だ。次々とからかうような言葉を投げかけられるが、鈴音は黙つたままだ。こう

いう手合いは、相手をするだけ無駄だと解っているから。

ただ、平気かどうか聞かれれば……それはノーだ。気が強い性質の鈴音とはいえ、女の子である。馬鹿らしいとは思っていても、悪気しかない言葉はかなりシヨックだ。でも、こういった連中はムキになると面白がる。だからこそ、解放されるのをジツと待っていた。しかし、男子の1人が何かに気が付いたようだった。

「うん……う？げつ、藤堂!」

「アンタ……。」

苦い顔をしながら、男子は驚いたような声をあげた。鈴音も振り返ってみると、そこには確かに黒乃が立っている。黒乃が見据えているのは、男子達のみ。その瞳はどこか怒気を孕んでいて、男子達はグツと息をのむ。そして黒乃が歩を進め始めた途端に、押し潰されそうな重圧を感じた。

その重圧は黒乃が接近するにつれ、徐々に勢いを増していく。そのせいで男子達は、黒乃が一步踏む度に、一步下がらずにはいられなかった。敵意を向けられていない鈴音ですら、なにか息が苦しくなる感覚になる。巻き込ませまいと思っていた鈴音だったが、その背を見守る事しかできない。

「な、なんだよ……邪魔すんじゃないよ!」

「そ、そうだ!何のために学校に来てるか解かんねえくせに!」

「つーか、学校来んな！お前気持ち悪いんだよ！」

すると男子達は、今度は黒乃に罵声を浴びせた。自分よりもよほど酷い事を言われているのに、黒乃は全く動じない。それどころか、まだ男子達を睨む余裕もあるらしい。背中を見ているので定かでは無いが、鈴音はまたしても威圧感を感じた。

しかし黒乃の背を見ていると、不思議な事に安心する。鈴音には、黒乃の背が大きく見える。きつと黒乃は、守る事に慣れているのだろう。だからこそ鈴音は、守ってられただけではいられない。小学生とは言え、鈴音は小さな体躯に大きな度胸を秘めている。

自分とはにかく、黒乃への暴言だけでも何とかせねば。鈴音が言い返そうと思っていると、あろう事か男子の1人が黒乃を殴ろうとする。それでも黒乃は、動こうとしない。鈴音は自分でも体が勝手に動いて、黒乃を押し退け男子の前へ立ちはだかる。痛みを覚悟し、鈴音は目を閉じた。

「お前ら、黒乃に何しようとした……？」

いつまでも殴られないと思えば、すぐ隣でそんな声が聞こえた。ゆっくり目を開けると、そこにはまた別の男子が居る。その男子は、キツイ表情で拳を受け止めている。鈴音は、この男子に見覚えがあった。いつも黒乃と一緒に居る男子だ。近くで見るとは始めてだが、鈴音にはその横顔が輝いて見えた。

そうやって少しボーツとしていると、黒乃に腕を引っ張られる。とんでもないスピードで黒乃が走るせいか、ろくに抗議する暇すら与えて貰えない。とにかく、余計な事は考えずに走るのみに集中する。それでなくても着いていくだけで大変なのに、気を緩めしだい転倒してしまうのは目に見えていた。

「黒乃、階段まで手を離さないのは止めるよ?! 転げ落ちるかと思っただろ!」

「本当よ、どういう神経してんのアンタ!?!」

黒乃が止まると同時に、鈴音は男子に続いて文句をぶつけた。ほぼ初対面なのに、どこかしつくりくるこの感じ……。鈴音は、男子と顔を見合せ微笑む。それは後にして、この男子にも状況を話さねばならない。鈴音は順を追って、事の顛末を伝える。

「そっか、そんな事があったのか。」

「ええ、でも大丈夫よ。その子が助けてくれたから。」

「ああ、黒乃は頼りになる奴だからな!」

黒乃を褒めているのに、男子はどこか自慢気に胸を張ってみせた。しかし、この男子にも助けてもらったのも事実だ。そう言えば、黒乃ともキチンと挨拶をしていなかった気がしてきた。今ならば、素直に自分の気持ちが出来伝えられそうだ。鈴音は、黒乃へと手を差し伸べる。

「アタシ、嵐 鈴音。さっきは本当にありがとうね。そっちのアンタも。」

「俺は織斑 一夏。よろしくな。」

「藤堂 黒乃。」

ようやく黒乃の声が聞けて、鈴音はパツと表情を明るくした。嬉しそうに黒乃の手を取るが、どうにも一夏の様子が変になる。それはもちろん、黒乃が声を出したからだ。これがどれだけ希少な事か、鈴音は理解ができていない。あまりに不自然な一夏の様子に、自然に口から疑問がこぼれる。

「えっと、なんかあったの？」

「そう……だな。黒乃の事情は、また今度話す。それで、嵐だっけ？家って何処なんだ？一緒に帰ろうぜ。」

「鈴で良いわよ。途中まで同じ道と思うから、3人で帰りましょうか！一夏に、黒乃！」
鈴音は、日本に来て初めて心から笑えた気がした。黒乃と一夏、よく解からない2人ではある。しかし不思議と、この2人とは長い付き合いになる気がしたのだ。なんとなくの勘に自信がある鈴音は、1人首を頷かせる。そうして家へと帰った鈴音は、母親に満面の笑みで告げた。

「お母さん、アタシね……友達が出来たの！」

第9話

「……………」

「黒乃、私に用事か？」

俺は、テレビを見ながらくつろいでいるちー姉の肩を叩いた。なるべく驚かせないように配慮はしているけど、ちー姉相手にはあまり意味がなかったかも。とにかく、俺はちー姉の座っている向かい側へと腰かけた。なにやら真剣な話であると感じ取ってくれたらしく、ちー姉はリモコンを操作してテレビの電源を落とす。

「…………随分とかしこまっているが。」

「……………」

「これは……………」

俺は机の上に、一枚のポスターを置いた。そのポスターには、ISに乗った女性が写されている。なぜこのポスターを差し出したのか、それは…………俺がISに乗りたいう意思表示をする為だ。あれからいろいろと考えて、やはり俺はIS学園を目指す事に決めた。しかし、何も無計画に行く必要はないのではないかと考え付いたのだ。

つまりIS学園へと行く前に、それなりの技術を最低限は身に着けようという事。何

も代表候補生になろうなんて、高望みはしていない。最低でも、自衛の手段くらいは学んでおきたいのだ。イッチーの幼馴染で、IS学園へと行く。これがどれほどに死亡フラグか、ISに関してそれなりの知識があれば嫌でも察してしまうだろう。

現在の俺は小学6年……つてか、つい最近に卒業したけどね。小学を卒業して、中学に入るまでの春休み。この期間に、ちー姉へ俺の意志を伝えようと思っていた。ダメだつて言われれば、まあ……それまでの事かな。でも、望みは薄いと解っている。ちー姉は、イッチーだけじゃ無く俺もISの話に関わらせないから。

「ISに乗りたいたと、そう解釈して良いのだな。」

「……………」

なんとか俺の言いたい事は伝わったらしいが……。怖い……。ちー姉怖いよう……。基本的に厳しいお姉ちゃんだけど、怖いかつて聞かれればまた別の話だ。悪い事さえしなければ、至つて何をされるでもない。しかし今のちー姉は、険しい顔つきで俺とポスターを交互に眺めている。

「……………何を成す。」

「……………」

「ISに乗つて、お前は何を成したい。」

な、何を成すつて言われても。だから俺には、世界を取りたいとか野望的概念は持ち

合わせちゃいけないってば。最初から高望みしてないせいとか、ろくな回答が思いつかないぞ。って言うか、答えられれば良い方だけど。ちー姉だって、返事が来ないとは思っているのだろうし。でも、うくん……強いて言うなら主に自分の身を……。

「守りたいから。」

「……………」

おつ、やつぱり物は試しだね……言葉が口から出たぞ。とにかく乗りたい理由は言つたよ、ちー姉！さあ次はちー姉の番で……って、何かちー姉は片手で顔を隠すような仕事を見せている。何だろうかと考えていると、ある一つの考えが思いついた。もしか……笑つてらっしやるな!?

絶対にそうだもん、小刻みに震えてるもん。そりやそうだよねえ、なんせ……中途半端に言葉が出るから、中二病くさい台詞になつてるもの。別にあれだよ、俺に周りの人間って別に守る必要ねーよ。ちー姉は言わずもがな、イッチーもそれなりに戦えるし、鈴ちゃんも足技系ドラゴンだし……。

「……………良いだろう。数日中に、良い場所と人を紹介してやる。」

それだけ言うと、ちー姉はせっせとどこかへ去つてしまう。あれ？今……良いって言った!?!、意外だな。俺はてつきり、ダメだと思つてたけど。それにしても、場所と人つて……?場所……は、養成所か何かの事かな。候補生の候補生を育てる場所が無い

と、システムの的にコネがある人しか代表候補生になれないもんね。

それ言ったら、ちー姉とかIS界最大のコネだろうけども……。だとすると、人つてのは教官みたいなの？美人な人なら嬉しいけどなく。もしかして、後の山田先生だったりして。あの人も元候補生とか言ってたし、可能性は十分にあり得るぞ。早くあの巨乳を生で見たいもんだ……。

さて、用事も済んだし……。このポスターはしまっておかないとな。このままにしておくと、イツチャーに何か感付かれてしまうかも知れない。原作通りに、なるべくISには関わらせない方が良さだろう。俺も立ち上がってリビングを出ると、足早に自室を目指した。

そして、それから数日後……。ちー姉に連れて来られたのは、想像通りに養成所のようにだった。しかし、何か雰囲気を変だ。人の声や物音が聞こえないし、それはおろか人の気配すら感じられない。本当に、運営しているんだろうね……。でも、ちー姉に限って嘘を吐くはずも無いしなあ。

「行くぞ黒乃。しっかりと私に着いて来い。」

ふむ、何の躊躇いもなく進みますか。それならば、何か事情があつて人が居ないんだろう。そうだとしたら、これ以上は気にするだけ無駄だね。俺はペタペタと靴を鳴らしながら、ちー姉の背中を追いかける。入り組んだ道を進んで行けば、やがて受付のよう

な場所へ辿り着く。そこを見て、何故かちー姉は溜息を吐いた。

「あいつ、この時間には来ると言っておいたろうに……！」

そう呟いたちー姉は、携帯を取り出して『あいつ』と言った人と連絡を取ろうとしているみたいだ。しかし、なかなか通じないらしい。だんだんとちー姉は、イライラし始めてみたいだ。『あいつ』って人、来るなら来てくれないかなあ……。ちー姉のイライラオーラのせいで、だんだん胃が痛く……。

「やゝ悪い悪い。寝坊しちゃった。」

「前にも言ったが、約束した事くらいは守ってくれ。」

「そうは言うけど、千冬だって私生活はポロポロじゃん。」

「……それとこれとは話が別だ。」

「ふくん、そう？ 同じ穴の何とやらだと思うけどね……つと。」

ちー姉の我慢が限界に達しそうな瞬間に、ここから見える仮眠室と書かれた部屋から1人の女性が出てきた。その女性の特徴を上げるとすれば、雑に染められたセミロングの金髪に……ダルンダルンのジャージ上下を着ていて、それに電子タバコを啜えているってところだろうか。言動から察するに、かなりだらしない女性だということが窺える。

良いね、無気力系美女！ 養いたい。それにしても、原作だとこんな人……つて、そん

なの参考になんないか。語られないだけで、ちー姉にだって友人は沢山に決まっている。たば姉と山田先生しか友達が居ないみたいなの、そんな失礼な事は考えていません……ええ、断じて！

「つてか、アタシの方が年上なんだから敬語くらい使つてくれても良いでしょ。」

「尊敬できる点が、何一つ見当たらないのでな。」

「さいですか……。で、その子が例の？」

「ああ、藤堂 黒乃……。私が預かっている子だ。」

「ふうくん。ういっす、お嬢ちゃん。アタシは対馬つしま 昴すばるつての、よろしく。」

昴さんね……。雰囲気からして、姉さんつてよりは姐さんのが合いそうだ。つてなわけ
で、昴姐さんに大決定！昴姐さんは、俺の手を握ると無遠慮に上下に振った。むむっ！
腕が上下するのと連動して、おっぱいも揺れとる！服の上からは解からなかったが、な
かなかのモノをお持ちで……。

俺が昴姐さんのおっぱいを凝視していると、姐さんはほんの一瞬だけ表情を強張らせ
た。い、いかん……。ばれたか？いや、男ならともかく俺は女の子なのだから大丈夫……
だよな？ま、まあ良いや……。気にしなくても。昴姐さんが俺の手を離すと、ちー姉は話
を進める。

「しかし、いつまでこの体制を続けるつもりだ？」

「へ？いつまでもただけど。だってさ、ここで生活してるだけで給料が入るし。」

「人間としてどうなんだ……底辺どころか底辺を突き抜けているぞ。」

「この世の中になつてか、オッサン連中は文句言つてこないし？ 楽な方を選ぶのがアタシの人生よ。」

2人の会話を盗み聞きして、ようやくこの施設の全貌が明らかになった。どうやら昴姐さんは、この養成所の管理運営及び講師の役割らしい。けれどろくに運営をしていないせいで、こうやって人の集まりが悪いのだ。それでも給料が発生してるって、この人……。ま、まあ……言わないでおく事にしよう。

「今回だつて、アタシが重い腰を上げただけで感謝しなさいよ。つてか、黒乃専用みたいなモンよ？」

「まあ……黒乃の事情を考慮すれば、確かに悪い話ではないのかも知れんが。」

「解つたら、早く用事済ませましょう。今日の所は、適性検査だけで終わらせるんでしょ？」

「もはや何も言うまい……。黒乃、昴に案内して貰え。」

適性検査か……。確か、ちー姉で言う『S』だのどうだの……そんな話だったよな？ へく……検査装置が、ここにも存在するのか。ちー姉が俺の背中を軽く押すと、昴姐さんの方へ歩いて行く。面倒くさがりみたいだけど、面倒見は良いらしい。昴姐さん

は、しっかり俺の手を取って歩き出す。

通されたのは、更衣室だ。昴姐さん曰く、この奥に検査機器があるらしい。とにかく着替えて、奥へ来いという事なんだろうね。昴姐さんは、ヒラヒラ手を振って先に奥へと進んで行つた。あらかじめ用意されているISスーツを眺めて、どうにもやりきれない気分になってくる。

精神的に男なせいか、未だにスクール水着とみたいな体に吸い付く衣装は慣れない。それはそれである種興奮するものもあるけど、やはり着るよりは見てる方が良いや。ISスーツも例に漏れずピッチリレオタードタイプ……。はあ……。四の五の言つてる暇は無いか、これからしよつちゆう着るのだし、早く慣れよう。

余計に時間をくつたので、俺は急いで着ている服を脱ぎ捨てる。ISスーツに袖を通すと、すぐさま奥へと向かつた。自動ドアを潜ると、そこにはアニメで見た事があるような機械が点在していた。ちー姉と昴姐さんは、ガラス越しに機械の操作するらしい場所に居た。

『オーケー、来たね。そのこの台座みたいなところに立つてもらえる?』
『なに緊張するな、一瞬で済む。』

え〜つと、台座台座……。あつ、あの出つ張り部分の所だな。しかし……。これで適正が低いとかだと、けっこうショックな気もするな。ちー姉の言葉とは真逆で、なんだか

緊張してきたかも。そこは黒乃ちゃんのスベックを信じるしかないな。俺はゆっくりと指定された場に立つ。

『よし、始めるわよ。じつとしてね。』

仕事はまともにしていないながらも、機械の操作は一通りできるみたいだ。昴姐さんが機械を弄る様子を見せると、俺を囲うように円柱状の薄いガラスのようなものが降りてきた。SFっぽいなあ……なんて思っていると、どうやら機械は俺の身体をスキャンニングしているらしい。

頭の中から足の先まで、光のリングが昇降していく。なんか、メトロ○ドのセーブポイントみたいだ。光の昇降が終わると、囲っていたガラスも元の位置へと戻った。さて、これで結果が出たのだな。2人のリアクションはというと、なんか……ヒソヒソと話し合っているように見える。

『ごめんね、黒乃。スキャナーの調子が悪かったみたい。もう1回やらせて。』

え、ええ……? そんなヒソヒソ話をされた後にもう1回って、嫌な予感しかしませんよ。何? 何? もしかして、女なのにIS適正なしとか!? それなら、隠し事をしていたのも頷ける……。うおおお……。とどうか、本当に調子が悪かったただけであつてくれ……。……。

内心で祈りながら、再度のスキャンニングを受ける。2回目のスキャンニングが終わって

も、2人のリアクションは変わらない。何!? なんなのさ! 何かあるなら、お兄さんハッキリ言ってくれた方が助かるよ! しばらく待つと、ガラスの向こうで昴姐さんが手招きした。心配もあるけど、ひとまず姐さんの元へ歩いた。

「ほら、これ結果ね。可もなく不可もなく……Bで落ち着いたわ。」

「まあ、BだのAだのはあまり気にしなくても良い。」

あれえ……? なんだ、驚いたな。どうやら俺の考え過ぎで、特に何の問題も無かったらしい。だったらあの様子が何だったのかも気になるが、そこはもう言わないでおく事にしよう。ちー姉の言う通りに、ISさえ動かせれば俺としては何の問題も無いのだから。

「んで、あく……どうしようか。……どうしようか?」

「……そうだな。黒乃、少し昴と話がある。久しぶりに会ったのでな。悪いが、時間をくれ。」

久しぶりの再会ならば、つもる話くらいあるだろう。俺は首を縦に振って肯定して、更衣室へと戻っていった。でも……着替えて何しながら待っていいようか。つもる話って言っても、ちー姉だし長話にはならないかな。んじや、少し昼寝でもしながら待つていいよう。俺はベンチに横になると、静かに目を閉じた。



某日、私としては恐れていた事が起きてしまった。それは、黒乃の差し出したポスターが鮮明に語っている。そこに描かれているのは、IS……。意味のある行動だと解釈するのならば、ISに乗りたい。黒乃は、そう言いたい他無いに決まっている。聞くまでも無いが一応の確認を取ると、黒乃はしつかり頷く。

東が言うには、この子こそが白騎士事件の引き金……。もし本当にそうなら、私は黒乃をISに乗せたくは無かった。乗せたら最後、何か……。黒乃が遠くに行ってしまうのではないかと思ってしまう。しかし、この子が何かをしたい。そう意思表示している事を、一概にダメだとも私には言えん。

「……何を成す。」

「……………」

「ISに乗って、お前は何を成したい。」

だからこそ私は、問い掛けずにはいられない。返答が出来ない事など、始めから解っている。私は恐らくだが、単に力を得たいとか……。そう言っただけで欲しかったのだろう。黒乃がそう言ってくれれば、頭ごなしにダメだと否定できる大義名分ができるから。黒乃は少し考える様子を見せると、静かに口を開く。

「守りたいから。」

「……………」

黒乃が喋ってくれたのも衝撃的だったが、私は言葉の内容の方に驚きを覚えた。実に数年ぶりに聞く黒乃の言葉は、なんとも黒乃らしい言葉だ。そうか、守りたいから……か。この子は、守るだけの力が欲しいのだろう。それはきつと、藤堂夫妻の死が大きく影響しているはず。

当然だ。黒乃の両親は、あまりにも突然に居なくなってしまった。残った家族の一夏や私……いや、黒乃の事ならば嵐などの身近な人々も含めて『守りたい』という事に違いない。私は思わず、目頭が熱くなってしまう。片手で顔を隠して誤魔化すが、こんなのでは黒乃にお見通しだろう。

「……………良いだろう。数日中に、良い場所と人を紹介してやる。」

私は、どうやら初歩的なミスを犯していたらしい。黒乃は私の家族だ。それを束の言葉に振り回されて、家族を信じる事を忘れていたなど……姉貴分失格も良い所だ。黒乃がそう言うのならば、背中を押してやるのが私の役目だ。ただ……どうにも落ち着かないので、黒乃の前から逃げ去ってしまう。

「父さん、母さん。2人の黒乃は、立派に育っていますよ……。」

廊下に出た私は、天井を見上げながらそう呟いた。……このあたりにしておこう。ど

うにも私の柄ではない。となれば、とつと『アイツ』と連絡を取っておかなくては。私
が言うのもなんだが、相当にズボラな奴だ。うるさく言っておかないと、黒乃に迷惑を
かけてしまう。私は携帯を手に取ると、対馬 昴の項目から発信を飛ばす。

『千冬く……？何？何の用？アタシの安眠タイム邪魔してくれちゃって……』

「お前に頼みがある。」



数日後、アイツとの約束を取り付けた日となった。私は黒乃を引き連れて、とある施設を訪れていた。簡単に言えば、IS乗りを育成する場所だ。もうすぐ学園が出来ると聞くが、政府もなかなか忙しい物だな。それはさて置いて、奥へと急ごう。私は、黒乃に着いて来るよう言ってから歩き出す。

奥へ行けば受付まで辿り着くが、そこにアイツの姿は無かった。あの女……。私は思わず眉をひそめて、ブツブツと口から文句がこぼれてしまう。無理にでも呼び出さなくては、アイツは約束すら忘れている可能性も大きい。私は何度も何度も、アイツの携帯へと呼び出しをかける。

「やく悪い悪い。寝坊しちゃった。」

「前にも言ったが、約束した事くらいは守ってくれ。」

「そうは言うけど、千冬だって私生活はボロボロじゃん。」

「……それとこれとは話が別だ。」

「ふうん、そう？ 同じ穴の何とやらだと思っただけね……つと。」

なんともだらしがない格好で姿を見せたこの女は、名を対馬 昴という。IS関連の仕事で知り合ったが、私の友人にカウントされる人間はどことなく欠陥のある人間ばかりだ。それは、類は友を呼ぶという奴なのかも知れん。とにかく、昴に関してはズボラすぎる。私生活に関しては言い返せなかったが……。

「つてか、アタシの方が年上なんだから敬語くらい使ってくれたって良いでしょ。」

「尊敬できる点が、何一つ見当たらないのでな。」

「さいですか……。で、その子が例の？」

「ああ、藤堂 黒乃……私が預かっている子だ。」

「ふうん。ういっす、お嬢ちゃん。アタシは対馬 昴つての、よろしく。」

互いに軽口をたたき合うのが、昴と会った時の常だ。私もそれなりに辛辣な言葉を述べたが、昴は気にする様子も無く受け流す。そして、目線の先に黒乃を捕えたようだ。昴は黒乃の目線までしゃがむと、強く黒乃の手を取り上下に振った。一見すれば和やかな光景だが、私はその時得体の知れない何かを感じる。

「しかし、いつまでこの体制を続けるつもりだ？」

「へ？いつまでもだけど。だつてさ、ここで生活してるだけで給料が入るし。」

「人間としてどうなんだ……底辺どころか底辺を突き抜けているぞ。」

「この世の中になつてか、オツサン連中は文句言つてこないし？ 楽な方を選ぶのがアタシの人生よ。」

私は世間話をするフリをしつつ、再度昴と視線を合わせる。どうやら、昴も何かを感じ取つたらしい……。ほんのわずかながらも、私に目で訴えて来ているのが解る。なんだか解からんが、一応は昴と意見交換をしておくのが吉だろう。とはいえ、黒乃が居る前でそんな話をする訳にもいかん。私が黒乃をハケさせろと目で訴えると、昴は更にこう続けた。

「今回だつて、アタシが重い腰を上げただけで感謝しなさいよ。つてか、黒乃専用みたいなモンよ？」

「まあ……黒乃の事情を考慮すれば、確かに悪い話ではないのかも知れんが。」

「解つたら、早く用事済ませましょう。今日の所は、適性検査だけで終わらせるんでしょ？」

「もはや何も言うまい……。黒乃、昴に案内して貰え。」

黒乃の適性検査をする予定なのも確かだったが、こうすれば少しは2人で意見を交わ

す時間も作れるだろう。昴が黒乃を連れて移動を開始したのに合わせて、私も検査室を目指した。機器を操作する側でしばらく待つと、検査機器側の出入り口から昴が姿を見せる。昴もこちら側へ来ると、早速口を開いた。

「あの子をマジでISに乗せる気？アタシ、ろくな事にならないと思うけど。」

「一応はな。聞かせてくれ、あの子に……何を感じたんだ。」

「簡単に言えば、禍々しい何か？まるで、アタシを獲物みたいな目で見てた。ほんの一瞬だけだね。」

獲物……？その表現が適格だとして、黒乃は昴をどうしてそんな目で見たと言うんだ。……強者？まさか、昴が実力者であるからか……？確かに黒乃へ力のある人間を合わせるのは初めてだが、まさかそんな……。私の耳には、嫌に昴のろくな事にならないという言葉が残ってしまう。

『……………』

「オーケー、来たね。その台座みたいところに立つてもらえる？」

「なに緊張するな、一瞬で済む。」

深く考え込んでしまっていたようで、黒乃が検査室に入っていたことに気が付かなかった。昴の声で我に返ったので、それに合わせて自然な様子を取り繕う。そして、適

性検査を行う黒乃を見守った。昴は基本的に適当な奴だが、根は真面目だ。機器の操作は問題ないようで、安心して見ていられる。

「あく……ほら、だから言ったじゃん。」

「何がだ。言いたい事があるなら、ハッキリと言え。」

「ろくな事にならないって話し。これ見なよ。」

検査結果が出たらしいが、昴はぶつくすと呟き始めた。何事かと尋ねれば、自分の眼で確かめると返って来る。昴がチョイチョイと指さした画面には、測定不能の4文字が刻まれていた。それが何を意味するかなど、私にだってすぐに解った。しかし、衝撃が大き過ぎたせいかすぐさま口が開けない。

「ISの適性の最大評価はS。他ならない千冬が出したのが最大つてのは本人が知ってるでしょ。この結果を見るに、あの子は……Sの枠じゃ収まらないって事つてのは解るわよね。」

「……………。機器の調子が悪かったのやも知れん。」

「現実逃避とは珍しいね……何回やっても同じ事だろうけど。」

そう言う昴は、黒乃に声をかけてもう1度検査を始めた。しかし昴の言った通りに、結果は先ほどと変わらない。認めるしかないのだ……黒乃が、規格外な存在であることを。これを聞けば、東は大層喜ぶに違いない。だがこの事実を、丸々黒乃へと伝え

る訳にもいかなかった。昴の提案で、他のデータを流用する運びとなる。

「ほら、これ結果ね。可もなく不可もなく……Bで落ち着いたわ。」

「まあ、BだのAだのは、あまり気にしなくても良い。」

結果をプリントアウトした紙を渡せば、黒乃はマジマジとそれを見つめていた。まさか、結果の隠蔽にも感付いているのではあるまいな。とにかく、もう少し昴と話し合いたい。それは向こうも同じなようで、黒乃を前にしてソワソワと落ち着きのない様子だ。

「んで、あゝ……どうしようか。……どうしようか？」

「……そうだな。黒乃、少し昴と話がある。久方ぶりに会ったのでな。悪いが、時間をくれ。」

私の言葉に、黒乃は首を頷かせた。来た場所から更衣室の方へと戻り、完全に姿は見えなくなる。すると昴は、私と会話を始める前に黒乃のデータの書き換えにかかっていた。一連の作業を見届けると、昴は盛大に頭を搔く。厄介事が舞い込んできたとか、そんな事を考えているに違いない。

「……今の事実、世間には公表しない方が良いわよね。あの子の為に。」

「……ああ。悪い方に転べば、モルモット待たなした。」

「ですよね。ねえ、考え直さない？あの子をISに乗せて、良い事なんて一つも起きな

いと思うよ？むしろ……良くない事が起きるって、アタシはそう思う。今なら千冬が言えば、あの子は止まってくれるはず。」

昴の瞳の奥底に眠るのは、未知なる存在に対する恐怖そのものであった。黒乃は、こんな視線を送られる事が多い……。それは、ISの世界においてもなのか？確かに、黒乃の規格外っぷりはIS界を揺るがす事となるだろう。しかし私は、決めたばかりなんだ。あの子を……黒乃の事を信じ抜くと。

「どうあろうと、私の意志は変わらない。」

「ああ、そう。数年後に、後悔しなけりゃいいけどね。」

「おい……どこへ行く？」

「寝る。頭ん中リセットしないとやってられないっての。悪いけど、今後の予定とかはまた今度にして。」

私の意見が変わらない事に、昴はけっこうな苛立ちを感じているようだ。眉間に皺を寄せ、頭の痛そうな仕草を見せる。そして皮肉たっぷりな言葉を放ち、私の横を通り過ぎて行つた。そもそも粗暴ではあるが、酒の席以外であんなに荒れているのは初めてだ。1人取り残された私は、機器の電源を落して更衣室へ向かった。

「黒乃、待たせ……。」

「スー……スー……。」

そんなに時間は経過していないが、黒乃は静かな寝息をたてながらベンチに寝転がっていた。黒乃の気の抜けた様子を見ると、思わず笑みがこぼれてしまう。そうだな……しつかりしているせいで忘れがちだが、お前もまだまだ子供なものな。私は、黒乃を起さないように横抱きで持ち上げる。

「子供とは言え、大きくなつたものだ。」

問題は全くないが、思いの他黒乃は重くなつていた。成長……か。この子がこれから進む道は、果たしてどんな道なのだろう。正直な話で、例え昴の言つた通りになろうと……私はどうでも良いときさえ思える。それが間違つた道ならば、喜んで正そう。しかし、存分に力を振るう事に何の問題があると言えようか。

いつだったかに、決めたのだ。私は、黒乃の事を見守り続けると。私がするべきは、背を押してやる事のみだ。規格外、大いに結構。むしろ歓迎しよう。この子は、ISに乗るために産まれてきたのだと。黒乃の事を抱きかかえた私は、終始そんな事を考えていた。

第10話

季節はまだ春先だけど、夕暮れ時ともなればまだまだ寒い物で。とりわけ、その要因は今俺の穿いているこれのせいでもあると思うけれど。上から下まで、学校指定用の制服……すなわちセーラー服にスカートで、中学校に入学したことを意味する。

校則でスカートの最低部は膝より下って決められてるけど、俺のはギリギリ届くか届かないかだ。別に俺は、長い方が助かるんだけどねえ……。思いつきりロングスカートで鈴ちゃんとは対面したら、アンタは昭和の女生徒か!?……と、盛大にツツコミを入れられた。

それ以降は、半ば強引にこの状態を保たさせられている。こと俺の身なりに関しては、他人色に染められるからね。髪も短い方が良いのに、切ろうとしたらちー姉とイチーの猛反発を受けたし……。私服とかも、だいたいはちー姉か鈴ちゃんが選んだのだし……。

俺が意思を伝えられないから、しようがないと言えましょうがないけど。それでもいい加減に、俺の好き勝手にさせてほしいもんだよ。なんて考えながら歩いていると、かなり強めの風が吹いた。うい……い……さ、寒いよお。ITCHーが居れば、風よけになる

のだけれど。

中学に入ってからという物、どうにも集まれる機会が少ない気がする。イツチーは帰宅部だけど、なんか家事で忙しいみたいだ。鈴ちゃんの方は、部活に入ってた……かな？ バスケ部とか、そのへんなんじゃないのかね。かくいう俺も、それなりには忙しい身だ。

ISに乗り始めてそれなりになるけど、だいぶスケジュールがキツイ。今日も帰って、昴姐さんから出された課題を終わらせないと……。座学が苦手な俺にとつて、ISに関わる諸々を記憶しておくのは大変な事だ。提出期限、間に合えば良いけど。タイムリミットの事を考えているせいかな、俺の足を送る速度は上がった。

「にゃーん……。」

しかしそれも束の間で、俺はすぐさま足を止める。今のは、猫の鳴き声……？ か細く消え入りそうな声の主は、俺の頭上に居た。声が出たであろう場所を見上げると、そこには太めの木の枝で震える仔猫の姿が。なるほど……木に登ったはいいが、降りられなくなった。パターンの奴か。

どうやら木は、高いフェンスをまたいで公園から生えているらしい。木の伸び方のせいで、敷地内から枝が通路側へはみ出してしまっている形か。うくん……助けないとだよな。仔猫は、まるで助けてと懇願するかのように俺を見ている。これを放っておくと

なると、罪悪感がマツハだ。

そうと決まれば、俺は回り込んで公園内へと侵入した。例の木まで接近すると、軽い調子でよじ登って行く。待つてろよーい、今助けるかんね。あつという間に仔猫と同じ枝まで辿り着くと、取りあえず手招きしてみる。すると仔猫は、ヨチヨチと歩いてこちらへと近づいて来た。

むはーっ?!カワイイ!ちよつと怖がつているっっていうのは解るけど、どうにも可愛いと思ってしまうな……。まあそれももうすぐ終わりだ。後は俺が降りてしまえば任務完了。十分射程圏内まで近づいた仔猫を、俺は慎重に抱え上げた。お、よちよち良い子でちゅねくじやあお兄さんと、一緒に地上へ戻ろうね……。。

……って、アレ?……思ったよりも、高いんですけど。……怖いんですけど。意気揚々と降りようとしたのは良い物の、木の幹から下を見下ろすと思いのほか高かった。ど、どうしよう!?!ミイラ取りが、ミイラになってしまったではないか!ISで空を飛んだりはしますけども、それとこれとは話が別である。

俺がその場で立ち往生していると、ふと仔猫がおれの腕の中で鳴いた。そこはかとなく呆れたように聞こえたその鳴き声のせいで、なんだか情けない気分になってしまおう……。基本的に怖がりの俺が、こんな無茶をするんじゃないかな?でも、言つてて状況が変わるわけでもなし。

飛び降りよう！そう決心した俺は、静かに目を閉じた。着地時のリスクが上がるけれど、こうしていれば変に高さを意識する事も無くなる。よくし……いち、にの、さんで飛ぶぞ。そんな事を考えていると、何やら足元が騒がしくなってきた気がした。もしかして、俺が無茶をするのを止めようとしてくれてるのかも。

地味に嬉しいけど、ここで止まる気はない。やってやる……やってやるぞお！高い木がなんだ、怖くないったら怖くない！それカウントダウン……開始！俺は心の中で、いち・にの・さんと唱える。さんと言いきったタイミングで、思い切り木の枝から通路側へとジャンプした。

「ぐへえっ!？」

それなりの痛みを覚悟してジャンプしたのだが、どういうわけか綺麗に着地が出来た。それにしても、今の呻き声はいつたい……？猫……じゃないよね。そんな不細工に無く猫とか、全然可愛くないし。そう思つて恐る恐る目を開くと、俺の足元には……人が突つ伏していた。

「な、何者だよ……お前！」

「急に上から現れやがつて！」

まるで俺を非難するかのように、目の前の男性2人組はそう言った。服装は高校の物みたいだな。でもどうにも着こなしがチャライのを見るに、いわゆる不良と呼ばれる俺

が最も苦手な人種だろう。だとすれば俺は……2人組の仲間1人を、クツションにする形で踏みつぶしてしまっただって事か？

……………。うわああああ!?!や、やっちまった!ヤバイよヤバイよ……今のは完全に事故だけど、それを弁明する事ができねえよ。も、もしかして……いや、もしかしなくてもボコられる?十分にありうるよね。今のご時世だからさ、女に対しての不満とか高まつてるだろうし……相当ヤバイ状況だコレー!?

「ア、アンタ確か……同じクラスの藤堂?」

あり?その特徴的な赤い髪色のキミは、五反田 弾くんじゃないか。ろくに出番も貰ってないのに、何故だか委員長タイプ先輩のフラグを建てちゃってる弾くんじゃないか!それにしても、どうしてこんなところに?偶然でも何でもいいから、目の前にいるか弱い乙女を助けて頂戴よ。

「この女、いつまでソイツに乗ってんだ!」

「つ!後ろ……危ねえぞ!」

……あつ!良く見たら、靴紐が解けてるじゃん。どうにも靴の履き心地が悪いと思つたら、こういう事だったのね。俺は猫を逃がしつっ不良Aから手早く降りると、靴紐を結ぶために軽くしゃがんだ。それと同時にほどに、頭の上を凄まじい風が通り過ぎた。何事かと思つて顔を上げれば、少し前で不良Bがふらついている。

「なっ!？」

「おお、やるう……。。」

?……………何だか知らんけど、このままでは前のめりに転んでしまう。いくら不良とて、何も見放さなくなつていいよね。そう思った俺は、しゃがんだままの状態で不良Bのベルトを背後から掴んだ。体勢を立て直せるように、引つ張つて支えようと思つたんだ……。思惑は外れ、不良Bは更にバランスを崩して仰向けに倒れた。

「あだっ!?!」、の……………女あー!

い、いやいやいや!今のは違うんです!俺は、貴方を助けようとしてですね……。心の中で弁明をしながら、今度こそちゃんと手を貸そうと不良Bに近づこうとした。その際に、慌てていたのか解けていた靴紐を踏んでしまう。そのせいでつまづいた俺は、前に大きくつんのめる感じで1歩を踏んだ。

「ぐがっ!?!」

俺の足の着地点は、なんの因果か倒れている不良Bの顔面だった。足に変な感触がしたと思つたらもう遅い。俺は天然で発生したストーンピングで、不良Bを思い切り踏んづけてしまったのである。そういうえば、女子供でもストーンピングつてのは威力が出るって誰かが言つてた気がする。

「な、なんだよこの女……………!?!」

現実逃避を試してみたけど、そりゃ通じませんよね……。うん、謝るしかないよ！人間誠心誠意の心構えで謝ったら、なんとかなるさ！俺は振り返って、残された不良Cへと近づく。キビキビとした動きで不良Cの前へと立てば、すんつ……。ませんでしたあああ！と、勢いよく頭を下げた。それと同時に、今度は俺の額にも衝撃が走る。

「がつーあつ……。」

いったー!? な、何が起きたんです？ 額をさすりながら涙目になった俺が目撃したのは、身体を反らしながら後方に倒れた不良Cだった。顔を覗き込んでみると、どうにも何かがぶつかつたような痣が……。あゝ……。これはあれだね、今度は天然のヘッドバットが出ちやつた感じだね……。よしっ、逃げよう！

「ちよつ、ちよつとタイムー！」

ええい、なんだい弾くん！俺にいったい何の用事かね。弾くんは、急いで立ち去ろうとした俺の腕をしっかりと掴んで離さない。アレだよ!? 顔を覚えられたらどうしてくれるつもりだい。黒乃ちゃんは表情は出ないが、とんでもない美少女なんだぞ。もし報復とかになって、エロ同人みたいな事になったらどうしてくれる！

「助けてくれて、ありがとうな。俺は、五反田 弾。アンタは、藤堂 黒乃……。で良いんだっけか？」

助けた……。はて？俺が助けたのは、猫だけですが。もし不良達の事を言っているのな

ら、それは完全にお門違いだ。だって、あれは事故だし……。わざとじゃないし。俺は悪くない。そういう事だから、早く帰らせてちょうだいな。もし今にでも目覚められると、今度こそ俺はR指定な仕打ちを受けてしまう。

「俺の家さ、食堂やってんだ。その……良かったら、飯とか食っていかないか。なんか、礼もしたいしよ。」

飯……。つまりは、奢って貰えるって事なのだろう。タダ飯……。なんて良い響きだろうか。個人的な感想だけど、タダで食う飯ほど美味いものはないと思う。……行きます！でもその前に、イツチーに空メール送っておこう。どうせ文字ってか文章は打てませんし。時間帯と送る数によって、俺の空メールは意味を変える。

イツチーが提案した事だけだね……。この時間帯ならば、今日は晩御飯は要りませんって意味になる。空メールを送信してしばらく、イツチーから了解の返信が届いた。それを確認すると、俺は弾くんの言葉に頷いて答える。俺が肯定的反応を示したのがよほど嬉しいのか、弾くんはガッツポーズを見せつつよっしゃと小さく呟く。

その後は、弾くんに関連られ五反田食堂へ向かう。弾くんのおじいちゃん、厳さんの作った野菜炒めはとにかく絶品だった。ポリポリとキャベツを食う俺の頭からは、すっかり課題の事など抜けてしまう。家に帰って机を見て、絶望したのは……。弾くんのせいという事しておこう。



「わっ、見なよお兄。お兄の今日の恋愛運、最高だつて！」

「ん〜？俺つて、占いとか信じねえから。」

「夢のない事を言わないでよ！お兄も中学生なんだから、彼女さんくらい作りなつて。」

朝っぱらから何かと思えば、妹の蘭がテレビを指差しながらそんな事を言う。対して俺は、下らないと言わんばかりに塩対応。まあ……彼女の1つや2つは欲しいと思うけど、まだ入学したばかりだぞ。そんなに手が早くても仕方が無い。今の内は、様子見と言ったところだろう。

「ラッキーアイテムは……白い布類ねえ。かなり幅広いし、本当にチャンスがあるかも。」

「あのなあ。運命つてのは、自分で切り開くもんだろ。」

「お兄、寒いよ。」

「可愛くねー妹だ事……。」

「なんか言つた？」

「何でも無いです。」

冗談めかして言ったつもりだけど、かなりマジな目で寒いと返された。俺は思わず考えがそのまま口に出てしまうが、ドスの効いた声を出す妹に萎縮してしまう。女尊男卑とか関係なしに、頭が上がりなくなっただけのはいつからだろうか？多分だけど、蘭がませてるだけだと思うけど。

「いつまで喋ってんだバカタレ。準備ができたなら、とつとと学校に行きやがれ。」

「アダツ!?な、殴ることあねえだろ……それも俺だけ!」

「なんか文句あつか?」

「行つてきまゝす!」

ほのぼのと時間を過ごしていたのに、我が家の頑固爺のせいで台無しである。気配も無く背後から頭に拳骨を喰らった俺は、痛みを耐えながら猛抗議をした。しかし、今度蘭の数倍は恐ろしい声色で返され……。俺は逃げるような形で、勢いよく家から飛び出した。

はあ……なんだか、家の中での立場が無くて辛いな。あれ、なんだろ……眼から汗が……。なんて、そんなので気落ちする俺じゃ無いけどな。さて、時間にも余裕があるしゆつくりと歩く事にしよう。いつもの通学路を進んで行くが、どうにも気分が落ち着かない。

何と言うか、視線が変に女子へと向いてしまう。それはきつと、朝に蘭が余計な事を

言つて来るからだろう。俺の今日の恋愛運は最高……それで、ラッキーアイテムは白い布類……。妙にそれを意識してしまうせいか、同じく通学路を歩く女子が白い布製の物を持つていないかが気になってしまう。

俺つて、本当に単純だな……。そう思つて視線を泳がせていると、ふとある女子が目についた。いや……。ないな、様々な事柄で黒が似合うあの子に限つて白は連想できない。俺の目線の先に居るのは、藤堂 黒乃という女子だ。彼女はいろんな意味で、校内では有名人である。

その要因として挙がるのは、まず無表情で何も喋らないという点だろう。なにやら事情があると教師から説明があつたが、誰も彼女の声を聴いたことが無いと言うのだから驚きだ。次に挙がる要因とえば、目玉が飛び出るくらいに美人であるから。

そこらの可愛い女子が、まるでお子様に見えるほどに彼女は完成されている。12、3歳そこらの女子に、綺麗と言う表現を使った方が正しく思えるのは初めてだ。本人が気付いているかどうかは知らないが、鼻の下を伸ばしながら男子に熱い視線を送られるのが常だ。まあ……。俺もその内の1人だったりするが。

「おっつす、弾！ボーツとしてどうした……つて、ははくん……。」

「よう、数馬。で、なんだよその目は。」

「いやあ、解るぞお。良いよなあ、藤堂つて。良いよなあ……。」

元気に俺の肩を叩きながら挨拶して来たのは、御手洗 数馬。中学に入ってから知り合ったが、何かと趣味が合うのですぐに意気投合した。数馬は俺が藤堂を眺めていたのを察したらしく、肩を組みながらニヤニヤとした表情を浮かべる。そして数馬も藤堂を眺めて、何か恍惚としている。

「でもま、こうやって眺めてるしかできんだろうけどね。」

「ああ……織斑な。」

「そうそう……。羨ましいよな、藤堂と一つ屋根の下だぜ!?間違いない間違いない起きるだろ、けしからん！」

「けしからんのは数馬の脳ミソだろ……。」

織斑っていうのは、いつも藤堂と一緒に居る男子の事だ。まるで自分以外の男子を近づかせないかの如く、藤堂にピツタリ張り付いて離れないのだ。最近では、一緒に居ない時間を捜す方が難しい……なんて言われたりもしてるな。しかし、織斑はそれだけに飽き足りず……もう一人夙って女の子も侍らせて……!

「世の中、不公平だつてつくづく思うぜ。」

「織斑見ると特になあ。アレで顔が普通なら、まだ俺らにも救いがあつたかもな。」

俺は口を尖がらせてそう言つて、数馬はケタケタ笑いながら肯定した。織斑つて相だなイケメンだしなあ……数馬の様に、もはや笑うしかないのかも知れない。なんて数馬

とじやれ合っていると、通学路もかなり短く感じてしまう。学校に着いた俺と数馬は、それぞれの教室へと分かれた。

生憎だが、数馬とはクラスが違う。別に自分のクラスに友達が居ないって事ではないが。せっかくなら一緒のクラスでと、そう思うのが正直なところだ。今日も退屈で平凡、そんな言葉がふさわしい学校生活が始める。気合入れ直して、先生にどやされないようにしないとな……。



(結局、出会いという出会いはなしか……。)

当たり前的事かも知れないが、そう考えながら帰宅の途に就く俺。つまるところは、やっぱり占いなんて当てにならないってこった。家に帰ったら、蘭の奴にどうだった？とか聞かれそうだな。何もなかったなんて言うとからかわれそうだし、少しばかり見栄を張っておく事にしよう。

「あ、あの……私、急いでるんですけど……。」

「えくちよつとくらい大丈夫っしょ！」

何事かと思えば、女の子が強引なナンパに捕まってしまったらしい。着ている制服か

らして、ウチの生徒だろう。顔は見覚えが無いから、上級生っぽいな……。いや、それよりも俺が気になったのは……女子が髪を結うのに使っている真つ白なりボンだ。

これはもしや……シチュエーションとしてはバツチリだ。あの女子を俺が助けて、惚れられちゃうみたいなの!? そうとしか思えなかった俺は、自然とダツシユをかけて女子達へと接近を試みていた。女子とナンパ男の間に割って入った俺は、なんとなく強気な発言を試してみる。

「そこまでにしとけよ、その人も困って……。」

「あつ、ありがとう! ゴメンね!」

あるえく? 俺が台詞を言い切る前に、女子はそそくさと逃げてしまった。助けてくれてありがとう、それと逃げるけどゴメンって事らしい。……思ったのと違う! コレジャナイ! 流石に想定外だったためか、魂が抜けたかのようになってしまう。そして忘れてはいけないのが、ナンパをしたお兄さん方である。

「あくあく……俺らのナンパ邪魔してくれちゃって!」

「覚悟は出来てるんだろな?!」

「いや、出来てないんで帰ります!」

「あつ、こら……待ちやがれ!」

畜生! もう占いなんか絶対に信じてたまるか! 俺は一瞬の隙を突いて、ナンパ男達の

横をすり抜けて行つた。そして全力疾走で、自宅である食堂を目指す。食堂に入つたらこつちのもんだ！流石にあんな連中でも、店内で騒ぎ立てようなんて思うまい。

もしそれでダメでもウチの店主は爺ちゃんだ。あんな連中は瞬殺に違いない。もちろん、この場合は俺もまとめて殴られるだろうけど。……アレ？本末転倒つて、この事を言うんじゃないか。どうやら、また1つ賢くなつてしまつたらしい。

(んな馬鹿言つてる暇ねえかもなあ……)

どうにもナンパ男たちはしつこくて、それでいて足も速い。俺は決して遅くは無いいけれど、油断をしていると追いつかれてしまいそうだ。つてか、スタミナが……疲れてきた……。俺のスタミナ不足とは裏腹に、ナンパ男達は元気ハツラツだ。ダメ……ダメだ！もう……走れない……。

「ようやく観念したみたいだな。」

「ちよつ、待つて……話せば解る！」

心底から何事もまず話し合いからだと訴えるが、向こうは当然聞く耳を持つてはくれない。すると3人組のうち1人が、指の骨をバキバキ鳴らしながら近づいて来る。う、う、う、わ……こつちのシチュエーションは、本当にあり得てしまった。はあ……仕方ないか、きつとこれも調子に乗つた罰だ。

「ぐへえっ!？」

俺が殴られる覚悟を決めた途端に、突如近づいてこようとしていた男に何かが降り注いだ。いや……俺は、それがなんだかハッキリと視認していた。上から降って来たのは、女子だ。降下しているにも拘らず、スカートは一切押さえていない。そのせいで、俺には見えてしまったのだ。

(純白の……パンツ！)

なんという事だろうか！安産型ながらもただ大きいだけでなく、キュツと締まって纏まりのある上品なお尻を包んでいるのは、清廉潔白で……穢れの一つも見当たらない純白のパンツ……白い布類！もしや、今度こそビンゴなのではないだろうか！お尻に注視していたせいか、誰だか確認していなかった。

「な、何者だよ……お前！」

「急に上から現れやがって！」

「ア、アンタ確か……同じクラスの藤堂？」

「……………」

俺はナンパ男達とは、違った意味で驚いていた。そう……降って来たのは、間違いない藤堂だった。その手には何故か猫を抱えているが、タイミング的に意図して男にのしかかったのだらう。上を見てみると、そこには高い場所に木の枝が伸びている。もしかして、助けてくれたのか？

「……………」

再び視線を藤堂へと戻すと、向こうも俺の事をジツと見ていた。うおう……近くで見ると、ますます美人だな……。才色兼備とは、彼女の為にある言葉ではないか。そう思えるほどに、目の前にいる藤堂は綺麗な一言に尽きる。でもどうやら、ぼんやりしている場合ではない。

「この女、いつまでソイツに乗ってんだ！」

「つー後ろ……危ねえぞ！」

藤堂にのしかかられた奴は気絶したとして、まだ2人残っている。そのうちの1人は、助走を付けながら藤堂へと殴りかかってくるではないか。俺は慌てて藤堂へ忠告すると、振り向く事すらせずにその場でしゃがんで華麗に回避して見せた。

「なっ!？」

「おお、やるう……………」

「あだっ!?!こ、の……女あ！」

振り向かなくても見えているかのような回避に、俺は思わず賞賛の言葉が飛び出た。しかし、藤堂の行動はそれで終わりでは無かった。腕を伸ばして男のベルトを掴んだかと思えば、バランスを崩しているのを良い事に引き倒す。急いで立ち上がったかと思えば、容赦の欠片も見えないストーンピングで顔面を踏み潰した。

「ぐがっ!？」

「な、なんだよこの女……!？」

そこまでするとは思っていなかったのか、残された一人は藤堂に対して恐怖を覚えて
いるらしい。助けられといて何だけど、実のところは俺だつてそうだ。あんなストンピ
ング、普通の奴ならまず出来ない……。容赦どころか、殺す気でかかっているような印
象を俺は受けた。

顔面を踏まれた男は、当然ながら気絶した。すると藤堂は、バツ!つと振り返つて残
る男へと接近を試みる。男の方はというと、もはや抵抗する気力すらないらしい。だが
藤堂は、そんなのは知らん顔。男の前に悠然と立つと、上体を後ろへと反らした。そし
て、そのまま頭部を振りかぶるかのように、男の顔面へヘッドバットを放つ。

「がっ!あつ……。」

(な、なんてワイルドな……。)

もつとスマートにいくかと思えば、まさかのヘッドバットである。男の方も予想外
だったようで、グラリと後ろへと倒れこむ。これにて男達は全滅……。これを藤堂が
やったとなると、本当に凄まじいものだ。事が片付いたのを確認すると、藤堂は足早に
この場を去ろうとしてしまう。俺は、気がつけば藤堂の腕を掴んでいた。

「ちよつ、ちよつとタイム!」

「……………」

相変わらずの無表情だが、藤堂は確かにこちらへ振り向いた。もし藤堂の穿いていたパンツが、例のラッキーアイテムだったとしよう。さすれば、藤堂とお近づきになるチャンスだ。しかし、俺の脳裏には藤堂のパンツが浮かんでしまつて……。お、落ち着け俺。普通にしていければ良いんだ。

「助けてくれて、ありがとうな。俺は、五反田 弾。アンタは、藤堂黒乃……。でいいんだっけか？」

自分で言っていて、かなり白々しい。藤堂の事なんてバツチり知っているが、どこかうろ覚えな感じで言葉を紡ぐ。足を止めてくれている藤堂だが、手を離せば今にも歩き出してしまいそうだ。どうにかこうにか、藤堂を引き留めなくては。すると俺には、とある名案が過る。

「俺の家さ、食堂やつてんだ。その……良かったら、飯とか食っていかないか？ なんか、礼もしたいしよ。」

こうすれば、引き留めた事もかなり自然だ。下心はありけりだが、礼をしたいというのも本心である。すると藤堂は、携帯をいじるような仕草を見せた。しばらく待つと、藤堂は確かに俺に向かって頷いた。予想外の好感触に、俺はガッツポーズを隠せない。気を取り直して、俺は藤堂を自宅へ案内する。

店は閑古鳥が鳴いていたが、こちらの方が都合がいい。まず第1に、藤堂の事情をじいちゃんに説明しとかないと……。場合によっては、藤堂を礼儀知らずの奴だと受け取りかねない。まあ……。じいちゃんだつて、問答無用つて事はないだろうけど。

俺も詳しく事情は知らないけど、なんとか理解はしてもらえたらしい。自分で注文が出来ないみたいなので、とりあえずオススメを作つて貰う。出された野菜炒めを、藤堂は無表情で食べ進める。何か話しかけようと思つたが、どうにも話題が出てこない。そうこうしてゐるうちに、あつという間に器は全て空だ。

「……………」

「ご馳走さまだつてさ。」

「おう。」

藤堂が手を合わせて会釈をしたのを見て、通訳の役割を果たす為にじいちゃんへ呼び掛ける。しかしじいちゃんは、いつも通りの様子で短く返す。じいちゃんの返事に再度会釈を見せた藤堂は、椅子から立ち上がり鞆を抱える。もう少しゆつくりしてくれば良いんだが、これ以上引き留めるの悪い。

「帰るんなら、送つていくぞ?」

「……………」

「そ、そうか……。解つた、気をつけて帰れよ。」

少し暗くなってきたから、エスコートをしようと思った。だが、藤堂は手を突き出して俺を制する。危ないなんてのは、藤堂には余計なお世話か……。最後に藤堂は、深々と頭を下げて店を後にした。……仲良くなるきっかけとしては、及第点つてところか。残りの問題は、織斑をどうするかだな。

「お兄、店先で綺麗な人とすれ違っただけ……。もしかして、占い当たっちゃった!?」「あ? そうだな、少しは信じてみても悪くねえかも。」

藤堂と入れ替わるかのように、蘭が店の戸を開いた。なにやら興奮気味で俺にそう聞かすが、肯定的な意見を述べるとニヤニヤし始める。実際のところ、占いのおかげかは定かじゃねえけど。ぶっちゃけ、これから藤堂との仲が進展する気はしないぞ。友達止まりでもラツキーと思わないと。

「で、結局ラツキーアイテムは関係あった?」

「んあつ!? あく……。その、なんだ……。なんだ……。」

蘭に白い布類の件を問われると、またしても藤堂のパンツが脳裏に浮かぶ。自宅という油断できる状況のせいか、さっきまでとは違い表情がだらしなくなる。蘭は俺が何を考えているのかだいたい解るようで、眉を潜めると大きな声で俺を批難し始める。

「最っ低! なんてよりよってパンツ!」

「べ、別に故意で覗いてはねえぞ! 事故だ事故!」

「あくやつぱり見たんだ。この……変態お兄！」

「このっ……かまかけやがったな！」

我が妹ながら賢いもので、どうやらまんまと罠にかかってしまったらしい。蘭は俺が藤堂のパンツを見たと確信が取れると同時に、背負っていたランドセルを俺にぶつける。それも、地味に痛い脇腹を的確に狙ってくるではないか。確かに悪いのは俺かもしれないが、事情くらいは聞いてほしい。

「店ん中で騒ぐんじゃねえ。」

「アダッ！だから何で俺だけ!?だあもう……蘭、いい加減しつこいぞー！」

後方から拳骨が襲ってきたかと思えば、それに反論している暇も無い程に蘭がしつこい。もう少し藤堂がこの場に居てくれたら、お転婆な妹を止めてくれたらどうか。つか本当……助けてくれ藤堂。うん……明日から、なんとか話しかけてみる事にしよう。数馬の奴には……黙っておいた方が良い気がする。妹と祖父に責め立てられる俺は、現実逃避気味にそう考えるのであった。

第11話

枕元に置いてある目覚まし時計から、アラーム音が鳴り響く。時刻は6時……相当な早起きである。なんでこんな時間の早起きかと申しますと、昴姐さんから出された課題が終わらなかつたのである。昨晩もかなり徹夜したのに、それでもだ。だから今日は早く起きて他の生徒が居ない間に登校し、学校が始まるまでに出来る限り課題を進めようと言う魂胆だ。

ウチでやれば良いじゃんと思うかもしれないが、都合の悪い事に今日は俺が家事当番の日だ。働かざる者食うべからず。俺もイッチーに頼つてばかりじゃなく、織斑家の一員としてするべきことはしている。家事に関しては、俺とイッチーで分担しつつ交代制で行っているんだ。

で……今日の朝飯は、俺の番という訳。家事も同時にこなさないとだから、こんな時間早起きなきやなんのだよ。本当はまだ寝ていたいのが、無理矢理にでも身体を起こす。ノロノロとスローモーションで動けば、クローゼットを開いて制服を取り出した。手早く着替えた俺は、なるべく静かに行動をとる。それこそ、イッチーを起こしちゃ可哀想だからね。ゆっくり階段を下った俺は、取りあえず洗面所へと向かう。不思議な

物で俺自身は眠くて仕方が無いのに、黒乃ちゃんの表情筋はピクリとも動いていない。見た目だけでは、眠いと察してはもらえないだろう。

それはともかくとして、両手に冷たい水を溜めて顔に浴びせる。幾分か目が覚めた俺は、続けて歯磨きを開始。シヤコシヤコと、俺の歯を研磨する音のみが空間を支配する。近所も生活音はしない時分の為か、余計に際立つて歯磨きの音が聞こえる気がした。

歯磨きを終えた俺は、エプロンを纏いつつ台所へ。さて……何を作った物かな。イチーが後から起きてくるのを考慮すると、1度冷めてもレンジで温めればそれなりに食べれるものが良いかも。とにかく、冷蔵庫を開いてみる事にしよう。冷蔵庫の中を覗いてみると、ありふれた民家の様相だ。

うくん……ベーコンエッグでも作って、焼いたトーストにでも乗せて食べるか。食パンは、テーブルに並べておけばイチーも勝手に焼くだろ。本当に簡単な物だが、俺も忙しいし仕方ない。そう自分に言い聞かせつつ、俺は卵と真空パックに入ったベーコンを取り出した。

それをシンクに並べると、後は……フライパンと油……つと。おつと、先にトースターに食パンを入れとかないと。そんな感じで、慌ただしいながらも朝食作りをこなしていく。自分のベーコンエッグはとつとと食パンに乗せて、イチーのは皿に乗せてラップをしておく。こうしておけば、少しはマシだろう。

そうして、一人で寂しい食事が始まった。喋れるわけでもないが、やはり食卓は大勢で囲む方が良い。時間帯が寂しいってのもあるから、早く食べて早く学校へ向かおう。俺はベーコンエッグの乗った食パンを、少し強引に口へと捻じ込む。手早く後片付けをすると、どこかから脱出するかの如く家を飛び出た。

流石に学校には誰も居ない。けど、これで俺の計画通りだ。鞆の中から参考書を引っ張り出すと、課題が印刷してあるプリントへ手をつける。提出期限が迫っているという緊張感からか、とんでもない速度でペンが進む。それにしても、昨晩は徹夜しておいて良かった。それがなければ、到底終わらせる事はかなわなかつたろう。

数枚あるプリントの最後の一枚、その間がたった今埋まった。やったー！なんとか、朝のうちに終わつたぞ。時間は……げっ、凄い経過してる。早い時間に登校する人達が、姿を現すような時間帯だ。俺は……学校が始まるまで、居眠りでもしておこう。そうやって机に伏せようとすると、特徴的な赤い髪色が見えた。

「ん……とっ、藤堂か。おはよう、お前もテスト勉強か？」

誰も居ないと思っていたようで、俺の姿を確認すると少し驚いた様子だ。しかし……今弾くんは、テスト勉強とか言つただろうか。聞き間違えであつてほしかったが、日程の書かれている教室の後方の黒板を確認してみる。するとそこには、ハッキリともうすぐテスト期間である事が記されていた。

わ……わわわ、わ……忘れてたあああ！ISの勉強にかまけていたせいか、そつちの事が頭からすっぽ抜けていた。課題の提出もしなければだが、成績が悪いとちー姉に殺される！これは、寝ている暇なんてないな……。俺も弾くんを見習って、勉強しなくては。それはそれとして……。

「……………」

「いや、いきなり頭なんか下げてどうし……あつ、もしかして昨日の事か？気にすんなつて、助けて貰ったのはこつちなんだからよ。」

俺が頭を下げた理由を、弾くんは察してくれたらしい。俺が助けたと弾くんは言うけど、あんなの偶然の産物に過ぎない。それなのに俺は飯をご馳走になったのだから、再度こうして礼をしておくのが筋つてもんだ。一瞬困惑した弾くんだったが、後は朗らかに笑ってみせる。

「もし良かったら、今度は客として来てくれよ。ほら、織斑とか凰も一緒に。」

ああ……：そうか、俺のせいでイッチーの社交性が息をしてないんだつた。本来はどういった経緯で仲良くなつたかは解らないけど、どうにか俺が潤滑剤になつて2人と弾くんを接触させなくちゃ……。そうでもしないと、なんか事が上手く運ばない気がする。

「それと、その……頼み？があんだけど。出来れば、下の名前で呼んで良いか？」

「……………」

「いい、良いのか？言ってみるもんだな……。よしつ、んじや……。俺の事も気軽に弾って呼んでくれよな！」

「……………」

「ハ、ハハハ……………」

この問いかけがあるという事は、俺と友人関係を結びたいという解釈で良いのだろう。もちろん、俺としては来る者拒まずの姿勢だ。首を縦に振ると、弾くんは非常に嬉しそうな表情を見せる。しかし、続いて言われた言葉に否定も肯定も出来なかった。そのせいか、弾くんは乾いた笑みを見せる。

「ま、まあ……………無理はしなくて良いからさ。そんじや、また後でな。」

そう言いながら、弾くんは自分の席へと戻っていった。そうだったそうだった……………テスト勉強しないとだった。それでなくても、頭の出来は本当に良くないんだから。運動一本で大学まで行った男だからね、俺は。学ぶのが2回目な分だけ、他の子達より有利ってだけの話さ。

席に座り直した俺は、机の中に置きっぱなしの教科書類を取り出す。そうだな……………手始めに、数学から始める事にしよう。理数系とかは、死ねと思うくらいに苦手だ。歴史みたいに、覚えるだけなら気が楽で良いんだけどなく……………。文句を言っている暇があつ

たら、頑張れって話だよね。よしっ、頑張る！

俺と弾くんが勉強を始めてしばらく、他のクラスメイト達もちらほら教室に顔を見せ始めた。真面目な子達だねえ……。俺が前世の時なんて、自主勉強っていったら提出物の分だけくらいだったけど。昔はそれで済むけど、今はとにかく保護者が怖い……。本当、気合入れようぜ俺……。

それからさらに時間が経過して、教室内はどこか騒がしくなり始めた。時計を見れば、俺がいつも登校する時間帯となっていた。うん、結構集中して勉強できたな。だとすると、後するべき事は……。弾くんの件だな。勉強道具一式を片付けると、席を立てて弾くんに歩み寄る。

「えっと、どうかしたのか……。くっ、くくくく……。黒乃。」

ここまで近づかれれば、嫌でも何か用事と思うだろう。こちらを眺めながら、弾くんはどこか気恥ずかしげに俺の事を黒乃と呼ぶ。その瞬間に、少しでも教室内がザワついた気がした。それはスルーするとして、どうしようか。イッチーが居ないと、全く話が進まないじゃないか。

「黒乃！よかつた……。朝起きていないから心配したんだぞ。」

「だから言ったじゃん……。黒乃も子供じゃないんだから。ね〜黒乃。」

「………………。誰だ、それ？」

こ、怖っ!? イッチーが聞いた事も無いトーンでそれって言ったよ……それって言ったよ! もちろんそれは、俺の後ろに控えてる弾くんの事だ……。イッチーは弾くんを睨んでいて、弾くんはイッチーに凄まれて怯んでいる。でも、俺じや説明してやれんから……ここは心を鬼にしてっつと……。

「どおお!? ちよつ、待て黒乃!」

「黒乃……? お前、なんで黒乃の事を名前で呼んでんだ。」

「な、何でっつて……本人の了承はもらってんぞ!」

「そうなのか、黒乃?」

俺は弾くんの背後に回り込んで、イッチーの前へと押し出した。イッチーにビビっている弾くんにはハードルが高いのか、バタバタと手を振りながら抵抗を見せる。だが観念せい弾くんや、イッチーはキミにロックオンカーソルを合わせてますぜ。とりあえず、イッチーの問いかけにはしつかり肯定を示しておく。

「で、アンタと黒乃はどんな関係な訳? っつてか、アンタ名前なんだっけ。」

「ナチュラルに酷え……。俺は、五反田 弾な。」

辛辣っつてか、物はハッキリ言うタイプだからねえ鈴ちゃん。原作でも、あまり他人に興味が無い風な発言はしてたし。中学が始まってまだそんなに経たないとすると、弾くんの顔と名前を憶えていないのも無理はない……。のか? とにかく、これでようやく弾く

んと2人の接触がはかれたぞ。

「ちよつち不良とトラブつてさ、黒乃が助けてくれたんだ。」

「アンタ……それ、言つてて悲しくなんない？普通は逆でしょ、逆。」

「うっ!?否定できねえ……。」

何度も言うけど、偶然だからね？そんなに過大評価されても困るんだけどなあ。うん、鈴ちゃんと弾くんは大丈夫そうだな。問題は、イツチーだよ……。さつき俺に確認取つてから、一言たりとも喋らないよ……。普段は俺の良く知るイツチーなのに、どうしてこう……。他人が俺に絡むところ……。こう……。なのかなあ？

「……なあ、少し話せるか？」

「お、おう。望むところだ！」

俺達の前だと都合でも悪いのか、イツチーは弾くんを連れて廊下へと出て行つた。それを不思議に思う俺と、呆れたような溜息を吐く鈴ちゃん。取り残された俺達は、自然と顔を見合わせた。それまでジト目だった鈴ちゃんも、俺を見るとパツと表情を明るくする。残念、鈴ちゃんのジト目とか素晴らしいのに。

「大丈夫よ、どうせいつもの心配性だから。それに……弾も悪い奴じゃなさそうだし。」

「……………」

「それより、昨日のテレビ見た？」

心配性……心配性ねえ。イツチーは、俺の事を姉か妹として見ているだろう。つまるところ、公式設定気味のシスコンが発動してるのね。ちよつとイツチー過敏すぎんよ。ま、放っておけばどうにかなるでしょ。シスコンつつたつて、あくまで姉や妹の枠は出ないだろうしね。血の繋がりは無いけど、俺にとつてもイツチーは大切な兄貴分か弟分つて思ってるし。

そうして俺は、鈴ちゃんの世間話へと耳を傾けた。相槌しかしてあげられないけど、鈴ちゃんも俺に過度な返答は求めていないハズだ。ホームルーム開始ギリギリまで、鈴ちゃんのトークは止まらない。担任の教師が入ってくると同時ほどに、イツチーと弾くんも教室へと帰還。それを見届けた俺は、鈴ちゃんともども自分の席へと戻るのだった。



「ふあ……おはよう、黒乃……？」

いつも通りの時間に起床すると、リビングに黒乃の姿は見当たらない。いつもならば、朝食には手をつけずにテーブルに座っているのに……。俺は慌てて玄関まで行くが、そこには黒乃の靴がない。それこそが、黒乃が俺を置いて学校へ行ってしまった証

拠だ。……朝から調子が狂う。

なぜだか解らないけど、胸の奥がモヤモヤした感じになってしまふ。……俺もすぐに黒乃を追いかけよう。今から出たって、もはやいつもの時間に学校へ着くだろうけど。黒乃を一人にするのは、何かと心配だ。どうせ……黒乃の事を理解しようとしないう連中が集る。……とにかく、急いで支度を済ませよう。

リビングに戻って、落ち着きながらテーブルを眺めてみる。そこには、黒乃が作ったらしい朝食が用意されていた。早くに家を出たのなら、黒乃も急いでいたはずだ。それでもきちんと俺の分も用意してくれるあたり……なんとも黒乃らしい。黒乃はきつと、良い嫁さんになるだろう。

そんな事を考えていると、なぜだか頬が緩む。それはさて置いて、メニューはベーコンエッグ……を、トーストに乗せて食べると言いたいらしい。俺は手際よく食パンをトースターに突っ込み、レンジでベーコンエッグを温める。この待ち時間が地味に歯痒い。でもきつと黒乃は、温かいのを食べてほしいと思っっているだろうし。

うん、やつぱり黒乃は良い嫁になるな。さて、トーストも温めも完了した。台所のフライ返しを手を取って、ベーコンエッグをトーストへと乗せる。それを急いで胃に送ると、すぐさま家を出た。走らなくなつて遅刻する時間ではないが、俺の足は自然に走り出していた。

「おはよ、一夏！つて、ちょっと待ちなさいよ……何で走り去ろうとすんの!？」

「ああ、おはよう鈴。悪いけど、説明してる暇じゃ無いんだ！」

「……それつて、黒乃が居ない事と関係してるでしょ。はいストップ。とりあえず落ち着きなさい。」

鈴はそう言いながら、俺の制服の背中辺りを掴んだ。調度飛び出そうとしていたせいで、思いきり転びそうになってしまった。何をするんだと、そんな視線で鈴の方へ振り返る。しかし鈴は、至つてふてぶてしい態度を崩さずに腕組をしながら俺を見て。そして、俺をピツと指差して告げた。

「一夏さあ、黒乃だつて一人じゃなんにも出来ないつてわけじゃないわよ。少し心配し過ぎ。」

「でも黒乃は……!？」

「馬鹿ね、周りを見なさいつて言つてんの。明らかにあの子が困つてるならさ、アタシだつて全力で助けるわ。でもね、四六時中張りついても……逆に黒乃の為になんないつてアタシは思うけど。」

黒乃の為にならない……? そんなのは、考えた事がなかったかもしれない。黒乃は、俺の事を迷惑だと思つていたのだろうか。そうだとすれば、凄く……シヨックだ。それこそ黒乃は優しいから、今まで何もアクションを起こさないでいたのかも知れない。

「……………」

「なんだよ、そんなにジツと俺を見て。」

「一夏つて、黒乃の事好きなの？」

「は？そりゃ好きに決まってるだろ、家族なんだから。」

「アンタつて本当……。そうじゃなくて、女の子として黒乃を見てるのかつて事！」

「…………どこからどう見たつて、黒乃は女の子だと思っぞ？」

「はあ……………」

唐突な鈴の質問に答えていくと、だんだんその表情は何言つてんだこいつみたいな目
に変わっていく。俺は、何か悪い事を言つただろうか。ついには溜息まで吐き始めた
ぞ、鈴の奴。既に呼び止められる雰囲気では無く、歩き出した鈴の背中を追いかける。

「とにかく、アンタが思つてるほど心配しなかつて大丈夫よ……………」

「そ、そうか。ところで鈴、なんか具合でも悪いのかよ。」

「ああ、うん…………平気だから、しばらくそつとしておいて……………」

何をそんなに落ち込んでいるのかは解からないが、本人がそう言うならそうしておい
た方が良く。とりわけ、鈴に対して変に勘ぐるゝと手や足が出てくるから……。いつもは
黒乃が止めてくれるけど、残念ながら今は居てくれない。ここは大人しく黙つて歩くの
が吉だ。

そうして無言のまま連れ立って歩くと、予想通りに通常の時間帯に学校へ着いた。自分のクラスの下駄箱を確認すると、黒乃のスペースには黒乃の外履きが収められている。良かった……学校に居なければ、どうしようかと思つたが、俺が安堵していると、鈴に早くと急かされる。どうやら調子は戻つたみたいだ。

元気になつたのは良いけど、反動で暴走しそうで怖いな。あまり待たせるのは悪いし、俺も急いで上履きに履き替えた。自分達の所属クラスへ辿り着くと、少し乱暴に扉を開け放つ。俺の眼にまず飛び込んで来たのは、そこに確かにある黒乃の後ろ姿だつた。長く綺麗な黒髪は、嫌でも目に入る。

「黒乃！よかつた……。朝起きていないから、心配したんだぞ。」

「だから言つたじゃん……。黒乃も子供じゃないんだから。ね〜黒乃。」
「………………。誰だ、それ？」

黒乃の正面に居るのは、赤髪の男子だつた。距離感的に、黒乃と会話していたことが窺える。それを理解した瞬間に、俺は何故だか冷静でいられない。今朝に感じたような、胸の中がモヤモヤする感じ……をもっと酷くした何かが渦巻く。

「どお!?ちよつ、待て黒乃！」

「黒乃……?お前、なんで黒乃の事を名前で呼んでんだ。」

「な、何でつて……本人の了承はもらつてんぞ！」

「そうなのか、黒乃？」

黒乃は赤髪の男子を、俺の前にグイツと押し出した。どういう意図があるのかは解からないけど、どちらかと言えば赤髪の男子が黒乃を下の名前で呼んでいる事が気になる。俺の問いかけに、黒乃はしっかりと首を頷かせて肯定を示した。それはつまり、黒乃が信じてでも大丈夫な奴って思ったからだろうけど……。

「で、アンタと黒乃はどんな関係な訳？ つか、アンタ名前なんだっけ。」

「ナチュラルに酷え……。俺は、五反田 弾な。ちよつち不良とトラブってき、黒乃が助けてくれたんだ。」

「アンタ……それ、言つて悲しくなんない？ 普通は逆でしょ、逆。」

「うっ!? 否定できねえ……。」

俺とは対照的に、鈴はいつも通りの態度で五反田をからかいにかかる。そこで俺は、鈴の言葉を思い出した。俺のこういつた行動は、必ずしも黒乃の為にならない……。それは、解る。それでも、黒乃は俺が守るって誓ったんだ。だからまずは、人となりを確認くらいはしておきたい。

「……なあ、少し話せるか？」

「お、おう。望むところだ！」

五反田を連れて廊下に出るが、まず何から話すべきか。黒乃が信じていいと思ったの

なら、なるべく事情は包み隠さず話しておいた方が良い。が、それはまた人の少ない時でも構わないな。……モヤモヤしているせいか、上手く考えが纏まらない。とにかく、思った事を言ってみる事にしよう。

「黒乃に、何かしようって気は無いんだよな？」

「いや……もはやする気も起きねえってか、普通に返り討ちになつちまう。でもその聞き方……もしかして、昔に何かあつたのか？」

「……男だと、たまに居るんだよ。黒乃が喋れないのかこつけて、変な事をしようとする奴がな。」

黒乃はああ見えて、警戒心という物が薄い。人気のない場所に誘い出されて、口にするのはばかられる行いをしようとした輩が実際に居た。その時は俺が現場を目撃したから未遂で済んだが、今日のような事があれば対処のしようがない。俺の言葉を聞いた五反田は、どこか胸糞悪そうな顔つきに変わった。

「なんだよそれ……！男の風上にも置けねえ！」

「……………」

「ど、どうした織斑。いや、確かに恥ずかしい事を言った気もするが……。」

「あ、ああ……悪い。なんか、五反田みたいな奴……久しぶりに見た気がするぜ。」

「マジか。男に言われても嬉しい一言かもな、それ。」

「ISが世に出てからという物……男らしい男を見かける事が少ない。今の五反田の発言は、まさに男らしい発言のソレだ。思わずあつけにとられた俺は、少しばかり反応が遅れてしまった。五反田の方はと言うと、自分の発言に照れているみたいだった。」

「黒乃は……さ、喋らないし表情も出ねえ。けど、誰よりも優しい女の子なんだよ。」

「おう。それは昨日にいろいろあつて、俺も十分に理解してるつもりだぜ。」

「ああ……。でもな、五反田みたいに思ってくれない奴がほとんどなんだ。……同じクラスだから、解ると思うけど。」

「……そうだな。何も行動しなかった俺が言う資格はねえのかもだけど、少し……行き過ぎだつて思うぜ。」

中学生になって、黒乃の味方が増えてくれると俺は思っていた。だが思春期つて奴のせいか、状況はあまり芳しくない。男子からは下卑た視線を送られて、女子からは仲間内から外されて……。だから俺は、あまり知らない奴を黒乃に近づけたくは無いんだ。でも……黒乃は、五反田を信じてみるようにしたのだから……俺もそうするべき、だよな。「黒乃は、五反田と仲良くなりたいうって……いや、もう友達だつて思つてるはずなんだ。だからどうか、黒乃の信頼を裏切るような事はしないでやってほしい。」

「……解かった、任せろ！ つつーか、そんな事したら織斑が怖そうだしな……。」

「ついでに鈴もセットだぞ。もっと言えば、アイツの方が100倍怖い。」

「た、確かに……豪い事になったなこりや……。」

俺はあくまで事実を述べたのだが、五反田としちや冗談だどつたらしい。もつとも、鈴の方が怖いってのは本気でそう思っているらしいけど。うん……本当に、鈴だけは怒らせない方がよい。かつて怒らせた事を思い出して、思わず身震いしてしまう。

「ああ、そーいや……さつきは悪かった。」

「気にすんなって、そんな事情があつたんじゃ仕方がねえよ。じゃ、これからは仲良く……つて事で良いよな？」

「もちろん。俺は織斑 一夏。よろしくな、弾。」

「こつちこそよろしく、一夏！」

疑いは晴れたというか、俺が思う以上に弾はとても良い奴だ。とんでもなく失礼な事をしたのに、許してくれるのがその証拠だろう。俺が握手を求めると、弾は痛いくらいに俺の手を握って来た。そのまま上下にブンブンと振れば、まるで放り投げるかのように俺の手を離した。

「……とこでただけだよ。一夏と黒乃って、付き合つてはないんだよな？」

「そうだけど、なんでそんな事を聞くんだよ。」

「廊下と呼ばれたからよ……。俺はてつきり、俺の女に馴れ馴れしくしてんじゃねえ的な事でも言われるんじゃないかと思つたぜ。」

「……………。俺と黒乃は、そんなんじゃない…………。」

俺にとつて黒乃は、姉で妹で…………守るべき家族だ。この考えは昔から変わらないはずなのに、俺の胸がこんなにも痛むのはなぜだ？またしても俺の中で、モヤモヤが顔を出し始めた。もしかして俺は、黒乃に家族や…………幼馴染といったそんな関係よりも…………踏み込んだ間柄になりたいと思っっているのだろうか？

『一夏つて、黒乃の事好きなの？』

そうか、鈴のあの言葉はそういう意味だったんだな。…………黒乃は優しくして気が利くし、中身だけじゃなくて容姿も目を見張るものがある。しかし、それだけの事だろ…………？黒乃をいい女だつて俺が評価するのは、千冬姉を綺麗だと褒めるのと同じニュアンスだ。そのはず…………なんだ。でも考えれば考えるほどに、胸の痛みは増していくばかり。

「一夏？お前、どうかした…………」

「織斑に五反田、なにやってんだ。もうホームルームが始まるぞ、早く教室に入れ。」

「あつ、了解つす！ほら、一夏…………。」

「あ、ああ…………悪い。」

弾がどこか心配したような表情で、俺に声をかけようとしたその時だ。廊下の奥から、俺達のクラスの担任が教室に入れと促す。空気が微妙な感じになってしまったが、弾の肩を叩いて大丈夫だという意思を伝えた。急かされながら教室に入ると、ほとんど

の生徒が席に着いている。例にもれなく、黒乃もだ。

(……………)

鈴や弾が変な事を言うから、妙に黒乃を意識してしまう。……本人の前に立つまでには、なんとかいつもの俺に戻っておかないと。皆に余計な心配はかけたくないしな……。そうと決まれば、先生の話に集中しよう。無理矢理にでもモヤモヤを振り払った俺は、神経を研ぎ澄ませて先生の言葉に耳を傾けた。

第12話

『そうではない……というか、無茶な制動をするなど何度言わせるつもりだ!』

はい。ISを動かし始めたは良いですが、何故かちー姉に指導されてて半泣きな俺氏です。こんなの絶対おかしーよ!ちー姉は既に世界を取ってて時の人だよ?それをお前……初心者の木偶の棒に本気で指導をしてらっしやるのさ。座学はもっぱら昴姐さんだけど、逆に実技はもっぱらちー姉なこの状況をどうにかしてくださあ。

なんで今怒られたかって聞かれますと、まあ……怒られても仕方が無いかなとは思う。現在は主に飛行の訓練を行っているのだけれど、俺の飛び方はどうにも危なっかしーらしいのだ。だってマニュアル操作が難しいんだもん……。どっちかと言わせれば、俺の変な癖が出ているってのが正しいかもだけど。

俺はいわゆるゲーマーという奴で、腕も悪くない方だと自負している。ISをゲーム感覚で操作している気はないが、手で機械を動かすコントローラーを握っているみたいな思考回路になってしまう。そのレベルで毒されているのはヤバイ奴だという自覚はあるけれど、どうにもゲーマー魂が疼いてしまうのだ。

早い話が、魅せプレイと表現すれば解りやすいかも知れない。ISで例えるならば、

急降下から地面スレスレに急上昇する……とか。今さっき怒られたのは、まさにそれをしたからだ。自分でやって自分で怖いんです。早急にこの癖を改善せねば、そのうち俺は見てから回避とかしたくなってしまふぞ……。

やばいね、想像してただけで胃が痛くなってしまう。なら止めておけばいいと思うかもしれないが、でもなあ……ガイアがもつと俺に輝けって言ってるんだよなあ。いやいや、そんな物は幻聴だ。俺は何のためにISを動かしている？ そう！ あくまで自衛の手段を学ぶためだ。ここで怪我したら本末転倒もいい所だよ。

「おい、聞いているのか？」

え……？ やばい、全然聞いてなかったんですけど。と、取りあえず……俺は肯定を示すために、首をコクコクと2度ほど頷かせた。ちー姉の様子を見る限りは、別に疑っている様子は見られない。その点、黒乃ちゃんの場合は便利なもんだ。俺だったら目が泳ぎまくって、確実にバレてしまっていただろう。

「なら構わん……。昴のせいで、打鉄はそれ以外は配備されていないのだからな。大事に扱えよ。」

そうそう。今俺が操作しているのは、量産型訓練機として名高い打鉄である。それは不思議だと思っているんだけど、どうなのだろうか。俺の記憶が正しければ、打鉄は第2世代型のISだ。今俺が中学1年だから、ISが世に出て1年弱だよ？ 少し早くない

?

もしかして、俺&黒乃ちゃんっていう原作にはない要素のせいで……色々とイレギュラーが発生してるからとかかな。どうかそれだけは勘弁してほしい物である。だって、I S学園でイレギュラーが起きても困るし。それでなくてもハードモードなイベントの数々が、エクストリームハードになってしまふ。

それがゲームの話なら俺は燃えるけど、ゲームはゲームでもデスゲームだけはマジ勘弁。俺は、平穩にI S学園で生活できればそれで良いんだよ。陰ながらイツチー達の人やわんやを眺められれば十分なんだよ。まあ……力になれる事があれば、協力くらいはするつもりだけど……。

「では、もう一度最初から始めるぞ。少しでもミスがあれば、出来るまで繰り返す。」
うわあお……鬼教官っぷりを遺憾なく発揮してますなあ。ま、だからこそそのちー姉つてのはあると思うけど。それにしても、もう一回か……ワンモアセツ！よしっ、ちー姉による訓練は千冬ズ・ブートキャンプと名付けよう。……つて、下らない事を考えている場合では無いな。

とにかく俺は、その場から飛びあがって上空へと躍り出た。さつきも言ったが、今は飛行訓練だからね……飛ばないとお話にならない。えーつと、始めはゆっくり飛んでそこから加減速。空中での上昇下降、180度ターンしてまた頭から。それで、宙返りし

つつ急降下から急上昇……でワンセットだな。よしっ、気合入れて行きますか！

まあぶつちやけた話で、ISの操作は普通に出来ている方だと思う。変な癖さえ出なければ、こう……ヒヨイヒヨいと飛んでいられる。うんうん、良い調子だぞ。残るは急降下と急上昇のみだ。空中で綺麗な円を描くように宙返りすれば、俺は地面に向けて一気に高度を下げに行く。

このトップスピードが出てる時は……流石にけっこう怖いな。でも大丈夫、ISに乗っている限りは死にはしない。……っていうくらいには気楽でいれば俺はできる子だ！うっし、そろそろちー姉の指定した上昇のタイミングだぞ……。早すぎてもダメ、遅すぎてもダメだ。

ハイパーセンサーで地面との距離感を確認しつつ、俺はタイミングを見計らう。………っ！今だ！……と、意気込んだままでは良いんだ。俺の中でまだ焦りがあったのか、打鉄を操作するトリガー的な物に乗せていた指が滑ってしまって、思った操作が出来なかった。

慌てて修正しようとするが、時すでに遅し。素早い指捌きで追加入力こそ間に合ったが、打鉄の制動は先ほど怒られたムーヴの完全再現になってしまふ。スピードを落とす地面に着地に成功するが、俺は背筋が寒くなるのを感じる。何故なら、ちー姉がとてつもなく良い笑顔で近づいて来るから……。

「黒乃く。私はさつきなんと言った……うん？賢いお前ならば解るよな？解るだろう？頼むから解ると言ってくれ。」

「……………」

「……の……馬鹿者がっ！」

い、いや……落ち着いてよちー姉。確かにさつきのは、ギリギリを故意で狙ったけど……今のは単なる操作ミスなんですって。つてのが、喋られればなんだけどなあ……。でもどのみち、喋れても言い訳は聞きたくないって一蹴されるだけだろう。でも、どうにかわざとじゃないのは解ってほしいんです。

まあ無理だよ。俺は打鉄を装着したまま正座させられて、ガミガミと長い間説教を喰らう。これが学園の先生になったら、説教だけで済まなくなっちゃうんだから恐ろしい。バリア貫通出席簿アタックなら大歓迎だけどね。罵倒して貰えるうえに叩いて貰える……我々の業界ではご褒美です。

俺の中では、説教とは毛色が違う。もつとシンプルに……言われた通りに出来んのか、このノロ臭い豚が！……とか言われながらちー姉に踏まれたい。いや、割とマジで。ヒールだったらなお良しとも言っておこう。ま、説教もご褒美だと思つて乗り切るしかないね……。

そうして説教を乗り切れば、ちー姉の言ったマニフェスト通りに完璧になるまで反復

練習が続く。午後からの練習だったけど、気付けば夕暮れ時ではないか。昴姐さんの帰れというお言葉が無ければ、もっと続けていたかもな……。前途多難だけど、IS学園に入学できるように頑張らないとね……。



「実技は教えんとは、どういう意味だ？」

「言葉通りの意味ですけど。嫌だよアタシ、あの子とサシでIS動かすとか。」

「……お前は、黒乃を何だと思ってる。」

「得体の知れない何か……かしら。あの子自体が悪い子じゃないってのは、勿論アタシだって理解してるわよ。」

黒乃への指導の諸々の調整を昴と相談すれば、急に実技は教える気が無いなどと言い出す。理由を問う限りは、黒乃から感じた異様な雰囲気のことをまだ引きずっているのだろう。昴としては、黒乃がISを動かすのを快く思っていないのだから考えられない事ではないが……。

「実技、千冬が教えたげな。ここならいつでも好きな時に使って良いから。」

「昴……お前な、少し真面目に——」

「言つとくけど、アタシは大真面目だから。アタシの勤つて良く当たんのよね。あの子と戦うなって、アタシの勤がそう言ってるわ。」

実技を教えるのならば、いずれは模擬戦を行わねばならん時もあるだろう。昴が野性的な勘を備えているとなれば、自ら餌になりに行く事は無い……とでも言いたいのか？ それすなわち、黒乃はあつと言う間に自分よりも強くなると見越しているらしい。

「……解かった。そこまで言うならそれで良い。ただし……。」

「心配しなくても、座学だけならキチンとやるわよ。実技やらない分は、徹底的にね。」
昴は適当な奴だが、筋は通っているし面倒見も良い。きつと子供も好きだろうから、その内に黒乃を心から応援してくれると嬉しいが。それはそれとして、話が固まったのだから私も暇を作らんな。ほとんど昴に丸投げするつもりだったせいか、しばらくは都合が悪い。私の日取りがキチンと解るまでは、昴に座学の方を進めて貰おう。

かなりスケジュールはきついのが、定期的な暇を確保する事ができた。本格的に黒乃へISの始動が始まる。初めは、もちろん歩行から教えたのだが……私は啞然とするしかない。様子を見る為に適当に動いてみると言えば、黒乃はまるで動かすのが初めてではないかのように楽々と操作してみせる。

指定したラインの通りに走ってみると言えば、黒乃は誤算0で線道を走りきる。私は思わず、頭が痛くなってしまう。かなり厳しめにするつもりだったのに、これでは指摘

する部分が見当たらない。どうしたものかと悩んでいると、黒乃の視線が気になった。その目はまるで、早く次にいこうとでも言いたげだ。

……黒乃に限って、つけあがるという事はある得んだろうが。しかし、ひとまずは叱咤をしておく。その代わりと言ってはなんだが、いろいろと手順をすつ飛ばしても良さそう。初心者向けの動作は省いて、私流で行っていく。指示を出せば、どちらにせよ黒乃は完璧にこなすに違いない。

だいたい、私の想像通りだった。飲み込みが早いなんて速度では足りずに、黒乃はドンドンと技術を吸収していく。特に心配は無さそう。そう判断した私は、予定を大幅に前倒しして飛行訓練を行う事にした。しかし……それまでの安心は、儚くも私の中から消え去ってしまう。

「そうではない……というか、無茶な制動をするなど何度言わせるつもりだー！」

今までの黒乃とはうって変わって、空中での動作は最早メチャクチャだ。我流で動かしているのは解るが、まだそういった段階ではないだろうに……。今の急降下からの急上昇なんかは、見ている胆が冷えるぞ。だがまあ、地面に激突しないのは称賛に値する。ほぼ一発だったわけだが、そろそろ何が起きても不思議ではなさそう。

「黒乃……。気持ち解るが、もう少し落ち着きをもて。今は飛ぶだけだが本来は戦闘中だ。そんな飛び方では、しょっちゅう地面にぶつかるとぞ。」

黒乃はこちらを見ながら話を聞いている……のか？どうにも今のは上の空に見える。この子に限って、説教臭いだのは考えていないだろうが……。判断に困った私は、再度黒乃に聞いているかと問いかけた。すると黒乃は、2度ほど大きく頷いてみせる。……杞憂だったか？

「なら構わん……。昴のせいで、打鉄はそれ以外は配備されていないのだからな。大事に使えよ。」

昴の奴め、本当にまともに仕事をしていない……。黒乃に教えるだけならば、別に私も打鉄で構わんのだが。もう1機ないのかと聞けば、それしか配備していないと言われた日には……いい加減に頭痛がしたものだ。昴の事はとにかく、黒乃の指導を続けなくてはな。それならば、もう1度通しで飛んでもらうか。

「では、もう1度最初から始めるぞ。少しでもミスがあれば、出来るまで繰り返す。」脅すような事を言ったが、注意さえすれば難なくこなすだろう。教え甲斐がない気もするが、手がかからないのは黒乃は常だ。そう考えている間に、黒乃は空中へと躍り出た。そうして、教えた通りの飛行を開始する。うむ、やはり美しい。流れるようなその動きは、見るものを魅了する。

黒乃自身の容姿も大いに関係しているだろうが、何かと整っている方が都合は良い。とにかく、問題はここからだ。黒乃が急降下を始めたのを、注視しながら見守る。現時

点では、まだ注意すべき点は見当たらんが、やけに速度が出ている気がした。

この段階で嫌な予感がしたが、今から止めた方がかえって危ない。そのまま静観を決心んでいると、嫌な予感通りに黒乃は先ほどと同じく地面スレスレの急上昇を見せてくれる。続きざまの始末に、私の頭部からピキツと微かな音が出た。私は黒乃にノツシノツシと近づいて、心から言い放つ。

「黒乃。私はさつきなんと言った……うん？ 賢いお前なら、解るよな？ 解るだろう？ 頼むから解ると言ってくれ。」

「……………」

「……の……馬鹿者がっ！」

黒乃の返事がないことなど解っていたが、どういう意図だったのかを考慮できんのは考えものだ。どちらにせよ、叱つてやるべき時にはそうしなければ。私は単に黒乃を責めぬよう言葉を選び、説教を開始した。一応は反省してもらわんとらなので、とりあえずは正座させておく。

長時間叱つたが、いつまでもガミガミ言っているも仕方がない……。反省したのなら、行動で示してもらわねばならん。説教を終えると、訓練を再開した。流石の黒乃も反省したらしく、それ以降は危険な飛行は見られない。その反面で、何処か動きがぎこちなくなってしまうが……。

もしやとは思うが、打鉄の操作に違和感を覚えているのか？……思ってみれば、その可能性は十分にある。なにせ、昴の管轄に置かれていたのだから。整備不良等々……原因は様々だが、挙げていけばキリがない。これは、昴を問い詰めなければならなくなった。するとタイミングの良い事に、昴からの通信が入る。

『ちよつと、そのへんにしときなつて。弟くん、この時間まで家で一人は可哀想でしょうが。』

『……了解した。今日のところは切り上げる。』

こうして時々まともな事を言い出す故に、この対馬 昴という女はよく解らん……。昴の発言は至極正しく、私は大人しく従う。黒乃に打鉄を片付けるよう言えば、その間に私は昴へと接触を図る。昴は何か用事かといった表情だが、こちらとしては聞いておくのは必須だ。

「昴。一つ聞きたいのだが、打鉄は整備されているのだろうか？」

「うん？ 当たり前でしょ。いくらアタシでもそのくらいはするわよ。」

話を聞けば、昴は私がスケジュールの調整をしている期間に、専門の業者へこの打鉄の整備を任せたらしい。なぜそんな事を聞くのかと、逆に質問される。そこで私は、黒乃の飛行に関する出来事を話してみる。昴は興味はあまりなさそうだが、原因を考えている様子だ。

「飛行で無茶な動きを……ねえ。確かに黒乃なら、いつペン注意したら止めてくれると思うけど。」

「私の考え過ぎで、単なる操作ミスかも知れんがな。」

「もしくは、打鉄の方が黒乃に着いていけてないとかね……アハハハ。」

昴は冗談のつもりで言ったかも知れんが、私はその言葉を聞いて思わずハツとなった。私が閃いたような表情を見せたせいかな、昴の笑い声は徐々に小さくなっていく。恐らくだが、自分で言っていて思ったのだろう……。黒乃ならば、そういう事実もあり得てしまうよ。

「ちよつ、ちよつとタイム……。もしそうだとしたら、あの子はいったいどんなスピードで操作入力してんの？」

「昴の予想が正しいのならば、打鉄が処理不全を起こすほどの膨大な入力回数だろうな。」

「地面にぶつからないって事は、正しい操作って証拠よね……。だったら、雑な操作じゃなくて1周廻って超絶繊細な操作って事か……。」

機体の方が着いて来れていないのだとすると、それで平然と飛んでいられる黒乃はとんでもないぞ。2度目の注意の後に黒乃の動きがぎこちなくなっただのは、つまるところ手加減という事か……。束、なかなかお前の第1と定めた目標は難しいらしいぞ。黒乃

が本気を出せるのは、いったいいつになる事やら。

「あく……もく……。あの子が戦闘を始めたらつて、想像するだけで嫌だわ。」

「模擬戦……か。私は、判断を誤ったかもしれない。」

「は？どつたの急に……。」

「私の前に、余所と模擬戦を組んだ。」

「は……？はああああ!?最悪……あく……最悪。絶対にアタシが文句言われるパターンだわこれ……。」

いざ模擬戦を始める前に、どうしても客観的な視点で黒乃の戦闘技量を見ておきたかった。そのため、余所の養成所で黒乃と同世代の操縦者を捜した。何故か解からんが、妙に黒乃と戦いたがっていた者がいたもので……。キャンセルも効くだろうが、先方がやる気な分だけ顔が立たん。

相手の実力は、全く持って私は知らん。だが、何故だろうか……黒乃が圧倒するピジョンしか見えなくなってきた。……黒乃の望みは、相手を殺さない程度に本気を出す事だ。それにうってつけないISの戦闘となると、やり過ぎなければ良いが……。

「1つ聞くけど、千冬は同行するわよね？」

「いや、その日はあいにく忙しい。だから映像の記録も頼んだ。」

「マジ……怒って良い？あの子の面倒とか、アタシみたいなのに勤まる訳ないじゃん。」

「少しはまともに働くと言う事を学べ……。では、確かに頼んだぞ。」

そう言つて昴の元を後にすると、ドアをくぐつた辺りで『アホー!』と聞こえてくる。……あれで私より年上か、世界には様々な人間が居る物だ。さて、黒乃は……。もう更衣室だろうな。もしかすると、待たせてしまっているかもしれん。私も早く着替えて、今日の日所は帰るとしよう。

第13話

「うーし、今日のところはこれまで！気を付けて帰りなよ。」

今日も今日とて、俺はI.Sのお勉強に勤しむ。昴姐さんが終わりの合図を告げると、アザース！みたいな声を心の中で出しつつ会釈をした。ふう……それにしても、何が大変ってこの施設に来るまでが大変なんだよな。明日も半日は勉強だし、もう少し近ければ良かったとつくづく思う。

「あつ、ヤベツ……。ちよつと待って黒乃、言い忘れてた事があるんだけど。」

俺よりも先に教室内から出ようとしていた昴姐さんだったが、ピタリと止まってバツクで戻って来た。昴姐さんは緩いからね……大事な件の伝え忘れはよくある話だ。でも忘れたままスルーのパターンが多いのに、思い出すって事はよほど重要な話しなのだろう。

「明日はさ、駅で待っていてくれたら良いから。アタシが迎えに行つたげる。んで、集合時間は朝8時ね。後は……まあなるようになるでしょ。そんじや、そういう事で。」

いや………どういう事だつてばよ？頭にハテナマークを浮かべている間に、昴姐さんはとつと行つてしまった。なんか、集合時間だけ伝えられたな……。何処かに出かける

事は明白だが、肝心の場所の方を教えて貰えない。昴姐さんの様子を見るに、流石に伝え忘れて感じじやなかったしな……。

うん、解らん。もしかして、俺に話を通ってる前提で話してたのかな。それは大いにあり得るけど、ひとたび逃げられれば俺にはもう確認の手段は無い。昴姐さんの言う通り、なるようになるか。うんうん、そうしようそうしよう。俺は片づけを再開して、養成所を後にした。

そして翌日。俺は指定された時間よりも少し早めに、最寄駅にて昴姐さんを待った。ぶっちゃけ、時間通りに来るのは期待してないけども……。だけど、日本人なら5分前行動だよ。別に昴姐さんを責めるつもりはないけどさ。そんな事を考えていると、駅前駐車場に入る1台の車が目についた。

ほえ……車には詳しくないけど、アレはスポーツタイプの高級外車じゃなかったかな。何処か高級感を臭わすその外装は、どうにもこの場とは不釣り合いだ。ボーツと高級外車を眺めていると、こちらにだんだんと近づいて来るではないか。……もしかして、もしかして……。……。

「おはよう、黒乃。流石に時間通りね、偉い偉い。」

やっぱいい……？外車の窓から顔を出したのは、パンツタイプのレディーススーツに身を包んだ昴姐さんだった。迎えに来るとか言ってたし、もしかしてとは思ったんだけ

ど……。悪目立ちするし早く乗ってしまおう。左ハンドルだから、右側に回り込んで乗車する。俺がシートベルトを締めたのを確認すると、昴姐さんは車を動かし始めた。

スポーツタイプの車って時点で嫌な予感はしてたけど、昴姐さんはもうガンガン速度を上げていく。何処へ向かうかは知らないけど、この調子だと着いた頃には俺はへ口になつてそうだよ……。よし、ここは昴姐さんでも見つけて気を紛らわそう。

「ん、どした？真面目な格好してるアタシがそんなに珍しいかしら。」

「……………」

「ま、アタシだつてほんとは着たかないんだけどね。先方に失礼な事すると千冬にどやされそうだし……………」

横目で昴姐さんを見ていただけなのに、速攻でばれてしまった。女性同士だから咎められる事はないけど、なんだか少しビビッてしまうな。つてか、先方…………？単に何処かへ行くだけでは無くて、誰かと会う約束なのだろうか。俺は…………中学の制服だし、学生の内はこれで大丈夫なはずだ。

身なりを確認しながら、昴姐さんの暴走運転車に乗ることしばらく。車の速度が落ちたのを見るに、どうやら目的地に着いたようだ。目の前には大きな建物があるけど、この感じ…………どつかで見た事ある気がするな。…………あく！そうだ、昴姐さん管轄の養成所に似てるんだ。つまりここは、また別の養成所なのね。

「ほら黒乃、さっさと行くよ。」

昴姐さんから急かされるとは、よほど今回は重要な何かが待っているのだろう。カツカツと靴を鳴らして歩く昴姐さんに急いで着いて行く。受付らしき場所までいくと、昴姐さんはアポがどうのこうのと話してる。敬語の姐さんとか、レアすぎて別人に見えて来るよ。そして施設に館内放送が流れると、しばらくして女の人が現れた。

「お待たせいたしました！私、ここの養成所の管轄をしてる者です……って、対馬 昴さんじゃないですか!？」

「ああ、どうも。一応はアタ……じゃなくて、私も現在は教職をしてる身です。」

「へえ……そうだったんですね。じゃ、そちらの子が……。」

「事情はお伝えした通りですが、その子に決して悪気は有りませんので。黒乃、あいさつ。」

年は……昴姐さんより1つ上か下かって感じだな。そのポワンとした雰囲気は、どちらかと言えば保育士とかが向いてそうだ。昴姐さんも元IS選手らしいけど、この人もそうなのかな。とにかく、昴姐さんに促され深々と頭を下げた。無言で無表情だが、彼女は柔らかい雰囲気崩さない。

「よろしくね、藤堂さん。それじゃ……早速始めましょうか！模擬戦、初めてだったわよね。でも大丈夫、慣れればきつと楽しいから。」

「相手は同じ学校の子とかでしょ？でも遠慮とかしなくて良いからね。」

はい……？俺の耳は、どうかしてしまっただろうか。今絶対に、模擬戦とか言ったよね？モギセン……？模擬戦……もぎせんんんんんん！何、俺って模擬戦する為にここへ連れて来られたの!?おかしい……おかしくない？俺ってば、武器の扱い程度しか教えてもらってないよ？

普通はそう言うのって、徐々に慣らししていくもんじゃない。きつと楽しいから……じゃないよ！楽しい事があるか！あわばばば……聞いてない、こんなの聞いてない……！ハツ!?これはもしやアレか、ちー姉のズボラが発動したパターンか……。昴姐さんは、俺がちー姉から話を聞いてる前提だったんだな。

当然逃げるなんて選択肢は選ばせてもらえずに、俺はあれよあれよという間に更衣室へ連れられる。ご丁寧にISSスーツまで用意してくれちゃって、うふふふ……。いや、何事にも初めてがあるってのは解るよ。けれど、こんないきなりな事無いじゃない……！俺はISSスーツに着替えながら、心の中でメソメソと泣くしかない。

「ふくん……本当にISSに乗ってるんだ。織斑くんが居ないと何もできないくせに、生意気な事よね。」

ほえ？むっ、大迫さんじゃん……久しぶり。更衣室に姿を現したのは、小学時代に嫌な思い出しかない大迫さんであった。あ、そっか……同じ学校の子って、こういう事か。

小学校が同じって事は、よほどの事が無い限りは中学も同じだよ。しばらく同じクラスじゃなかったし、中学でも違うから懐かしい気さえする。

しかし、大迫さんもISに乗ってるとは驚きだな。でも……俺にとつては不都合だよなあ。大迫さんもITCHーの件で俺に不満が溜まっているようだし、ボコボコにされる未来しか見えませんわ。それも経験だよ、早いうちからボコボコにされるのに慣れておいた方が良いや。そこで大迫さんには、今日はよろしくという意味を込めて頭を下げておこう。

「っ!?!アンタのそういうところがムカつくのよ!スカした態度をとってんじゃないわよ!」

いででで!な、なんで髪つかまれて怒られなきゃならないの!?!女の子のこういうドロドロしたの……怖いよ。俺の顔色が変わらないのが気に入らないのか、大迫さんは乱暴に俺の髪を離れた。そしてわざとらしく鼻をフンツと鳴らすと、俺を見すえながら表情を憎々しい物に変える。

「そうしてられるのも今のうちよ。2度と人前に出られないくらいに情けない姿にしてあげる。」

そう言い放つと、クスクスと笑いながら更衣室を出ていった。まったく、なんだってんだ。そんなにITCHーが好きなら、俺に意地悪するのを止めないとお話になりません

ぞ。まあ良いや、人の心配より自分の心配をしなきや。覚悟を決めて……いざ行かん、模擬戦！

意気込んでピットへ向かうと、そこには昴姐さんが待ち構えていた。打鉄かラフアールか選べなんて聞かれるけど、俺にとっては1択も同然だ。俺は打鉄の方を指差した。シューティングゲームとかもするけど、どうにも射撃は苦手だ。つてか、ラフアールは動かし事ないし……。

「黒乃……。本当に頼むから、やり過ぎだけには注意して。」

打鉄へと乗り込む俺に、昴姐さんは神妙な顔つきでそんな事を言う。やり過ぎ……つてのは、一体何が言いたいんだ？どちらかと言えば、やられ過ぎの方が正しい表現だと思うけど。うぐんとりあえず、心配させてるようだから肯定だけはしておこう。俺は首を縦に振ると、昴姐さんはサムズアップで応えた。

『準備ができ次第、出撃をお願いします！』

この声は、さつきのお姉さんだな。打鉄の調子は……うん、問題なさそうだ。俺はその場で打鉄を浮かせると、カタパルトの上まで移動した。するとゲートが解放され、出撃用のナビゲーターが現れる。よし、そんなじゃ……行きましようかねえ、行きたかないけど。

勢いよく競技場まで飛び出ると、向こう側のゲートからは大迫さんが現れる。機体は

ラファールの方か……。嫌だなあ……。弾丸を掻い潜んなきやなんないとか、1撃も当てられないで負けちゃいそうだ。気が重いながらも、ハイパーセンサーに表示された開始位置まで移動する。

『それでは、試合開始!』

「喰らいなさい!」

どひやあああ!? ジャ、ジャツジー! 今のフライングじゃ無かった!? 開始早々に大迫さんはアサルトライフルを乱射しまくってきた。少し大げさに回避行動をとったおかげか、1つも当たりはしなかつたけど……。こ、怖い……。今俺って、銃で撃たれたんだよね。お、落ち着け……。まずは交戦するところからだ。

「は? この距離で葵を出してくるとか……。余裕のつもり!?」

あゝ……。もう、落ち着きなつて大迫さん。そんなんじゃないやなくて、俺は単に射撃が苦手なだけだよ。さて、ここから近づいて打鉄の近接ブレード、葵にて大迫さんを斬り付けないきやなんないわけだが……。この距離が果てしなく思えるな。まあとにかく、やるっきゃないか!

「なつ、速い……。!」

打鉄は防御型の機体だ。思つて見れば、多少は当たつたつて問題ないはず。もちろんの事だけど、回避行動くらいはとりますけども。俺が接近するに伴つて、大迫さんはア

サルトライフルを用いて小規模ながらも弾幕を張ってきた。避けれそうなのはキチンと避けて、無理っぽいのは当たってもいやーやー……。

「強行突破……う？ そう易々とやらせるわけないでしょー！」

そう言いながら大迫さんは、後退しながら射撃を続ける。まあ、そうなるな。だけど甘いぞ、大迫さん！ 俺だって、操作自体にはけっこう自信がある。俺は一気に高度を上げて、大迫さんよりも高い位置に躍り出た。そこから斜め下に飛び込むように、加速しながら大迫さんを目指す。

「キャア!？」

そのまま大迫さんとすれ違うかのように、胴体に葵の一太刀を横一線に浴びせた。やった、クリーンヒットだ！ 絶対防御は当然発動しただろうから、今のだけでかなりのエネルギーを削れたはずだ。だけど、また上手く距離を詰めれるとは限らない。そう思った俺は、追撃の為に旋回して大迫さんへ突っ込む。

「くっ、鬱陶しいわね……！」

そのまま格ゲーのガチャプレイかの如く、葵を振り回す。もちろん剣道のイロハは忘れていないが、そんなの今は後回しだ！ 今はラファールを少しでも削るのが重要だもんね。しかし、完全に懐に潜り込んでいるのに……大迫さんはよく避けるなあ。最初の一撃以降は、生身の部分へは掠らせてすらもらえない。

「調子に乗らない方が良いんじゃない……のっ！」

大迫さんは不敵な笑みを見せると、持っていた武装をショットガンに切り替える。その隙に俺は斬りかかったのだが、これが完全に悪手だった。大迫さんとしては、玉砕覚悟だったらしい。俺の攻撃と同時に、俺の腹部へとショットガンを何発か撃つたのだ。

う、う……撃たれたああああ！バリア貫通したっばい……ちよつと痛いもん！大丈夫か、俺は生きているよねえ!?!と言った具合に取り乱した俺は、思い切り後ろへと後退した。い、生きてる……。やっぱ頭おかしいよ、こんなの楽しいって言える人の神経を疑うよ！

「アハハ、無様ね！アンタなんかが、ISになんて乗るからそうなるのよ！」

今度はスナイパーライフルか……。さては大迫さんめ、遠くからチクチクやるつもりだな。うん、遠く？あ、しまった……。自分から距離を開けちゃってるじゃん。狙撃銃に狙われながら接近なんて俺嫌だよ……。チクシヨウ、こうなれば……。もう知らん、ヤケクソでいく！

「ヒツ……い、なんでさつきから怖がらないのよ……！」

大迫さんがなんか言ってるが、知らん知らん……。俺はもうなくんも知らんぞ！男たるもの、特攻あるのみだ。スナイパーライフル？まあなんか、適当に葵でも振っておけば弾けるんじゃないの。とにかく俺は何も考えずに、打鉄の出せるトップスピードで接近

を試みる。

「くっ……それなら、望みどおりに落としてやるわよ！」

「……………」

「う……………そ……………!?!」

スナイパーライフルの大きな発砲音の後に、適当なタイミングで適当に葵を振つてみる。すると葵に衝撃が走ると共に、チュイン！と跳弾するかのような音が鳴り響く。あれ、もしかして成功か？ 案外何とかなるもんだな……。つて大迫さん、驚いた顔しなくても……。別に狙ってやっつてる訳じゃないですよ。

「あり得ない……………そんなのっ！」

うん、そうだよね……。俺もそう思う。だって、俺が1番驚いてるもん。調子の乗った発言をさせてもらえば、神に愛されてる……。みたいな？ だって、大迫さんが何発撃とうとも……。適当に葵を振つたら弾いちやうんだもん。ヤケクソのつもりだったんだけどなー、まさかこうも上手くいくとは。

それよりも、大迫さんは焦ってるみたいだね。そりや、目の前で奇跡が起きれば焦る気持ちも解るけどさ。さっきみたいにアサルトライフルを連射すればいいのに、大迫さんは武装を変えようとはしない。ムキにでもなってるのかな？ ともあれ大迫さん、もはや俺の射程だぞ！

葵の刃は十分に届く……！俺は、葵を振りかぶり大迫さんの身体を斜めに斬り裂いた。だけどまだ……これじゃ終わらない！俺は斜めに斬った勢いを利用して、そのまま体をかがめて1回転。足を伸ばすと、大迫さんの頭に踵落しを見舞った。威力のついた踵落しは、大迫さんを地面へ向けて吹き飛ばす。

「キヤアアアアっ……あうっ！」

真つ逆さまに地面へと落ちて行つた大迫さんは、ラファールの制御が効かなかつたのかそのまま地面に激突した。本当に申し訳ないけど、俺は既に大迫さんを追撃している。こうなつてみると、地面ギリギリの急降下もあながち無駄な技術じゃなかつたらしい。地面に叩きつけられバウンドし、浮き上がった瞬間をとらえて俺は蹴りを放つ。

「ガハッ!？」

う、うわっ!? そんなつもりじゃ無かつたのに、思い切り腹に打鉄の足が……いい、いや……申し訳ないけど、容赦は必要ない。俺だって、なるべく怖いのは勘弁なんだ。俺なんて所詮こんな人間だよ。俺が怖く無いようにするんなら、他人を怖い目に合せるしかない。俺は急ぎ、地面を転がる大迫さんを追撃した。

「い、嫌……まだ続いて——」

ええ、そうです……まだ続けますとも！今度は大迫さんを、競技場の壁に押し付けるかのように前蹴りを放つた。その際に大迫さんが苦しそうな声を漏らして、俺はやっぱ

り罪悪感に駆られる。それでもまだだ……まだ競技終了の合図もブザーも鳴ってない！俺は葵でもう一太刀浴びせてから大迫さんのISスーツを引っ掴むと、振り返りつつ地面へと放り投げた。

「キヤツ……ぐうっ!? え……? ちよつ、ちよつと待つてよ……嘘……嘘でしよ……もう、私……。」

いやあ……こればかりは、本当に怖がらせてると思うよ。何してるかって、大迫さんを踏みつけて固定し葵を振りかざしているところだ。うんうん、怖いよね……本当にゴメンね。でもここで一太刀を浴びせたら、流石にエネルギー切れで俺の勝ちだろうから……それでももう終わりにするって約束するよ。

「嫌あああつ!!!」

『止まりなさい黒乃! もう絶対防御は発動しない……本気でその子を殺す気!』

うええええつ!?俺が葵で大迫さんを斬りつけようとした寸前に、オーブンチャンネルで昴姐さんの怒号が鳴り響く。そう言われて確認してみると、確かに大迫さんのラファールのシールドエネルギーは切れるギリギリだ。マ、マジで……?俺も焦っていたのか、確認を怠ってしまった……!い、今すぐに足をどけなくちゃ!

「……殺され……殺される……!」

い、いや……殺さない殺さない!うわあ……ど、どうしよう……大迫さんは、身を縮

めてガタガタ震えながら恐怖に引きつった顔で涙を流している。これは完全に俺が悪い。ダーティ気味な怒涛の連続攻撃さえなければ、こうはならなかったかも知れないのに……。危うく人を殺しかけたというこの事実には、俺は動揺が収まらない。と、とにかく……大迫さんを助け起こそう。

「ヒ……ヒッ……、ごめんなさい！今までの事は謝るから、お願いだから許して！」

差し伸べた手は弾かれて、命乞いをしながら大迫さんは地面を這いつくばる。あ……コレは、ダメみたいですね。大迫さんが落ち着かない限りは、俺が何をやって受け入れてはもらえない。そう思った俺は、大迫さんから背いて浮き上がる。そのまま静かに、出てきたゲートを目指した。

ピットに戻ってみると、向こう側の教師やスタッフらしき人達が凄いで俺を見てくる。だ、だから……俺にそんなつもりは無かったんだけど……。弁明が出来れば苦労はしないよね……。この身体。打鉄返して、さっさとこの場から帰ろう……。打鉄を解除して降りると、急に俺の頬へ衝撃が走る。こ、これは……平手打ち！ありがとうございませう！

「……いったいどういうつもりだったか説明してくれない？」

ひいひい……昴姐さん……。昴姐さんがとんでもない表情をしながら、俺の事を見ていた。説明してくれないって、説明出来たら説明しますよ！ってか、試合終了の合

図を出してくれなかったじゃないですかー!……と、一応の抗議はしておく。

「アンタさあ……なんでもかんでも、黙つてりや済むと思つてんのかよ……ああ!?危うくアンタは人を殺しかけたんだぞ、解つてんのか!それとも、ハナっから殺すつもりでしたつてか!」

ごつ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!マジ調子乗つてました……本当にスミマセンでした!マジギレしたであろう昴姐さんは、俺の胸ぐらを掴んで前後へと揺らす。首がガクガクと揺れながらも、俺はとにかく謝罪を続ける。心の中だから無意味だけど、本当に反省してるんです……!

「アンタ、先に車に戻つてな。アンタじゃ必要な事は出来ないからね。」

それは暗に、俺じゃ謝罪の意味が無いつてか……。それもそうだよ、何考えてるか解からないなんて良く言われるし。はあ……鬱い……。やっぱ俺、ISつて向いてないのかなあ……。場合によっては、乗るの止めよう……。ちー姉や昴姐さんに迷惑がかかるくらいなら、止めといたほうが良いに決まつてる。俺はハンパじやないアウエーな視線を感じつつ、いつでも帰られる支度をしに更衣室へと向かった。



「バ、バケモノ……。」

「こ、こらつ……そんな事言っちゃ……！」

黒乃と大迫の試合を見守る誰かが、そんな事を呟いた。それを誰かが咎めるが、アタシへ配慮しての事だろう。だけど安心してくれていい。なんとたつて黒乃は、スナイパーライフルの弾丸を完全に弾いているのだから。そんな事を言いたくなるのは解るし、実際にあれじゃあ……。

ねえ千冬……だからアタシは、あの子にISを動かさせることには反対だったのよ。誰がどう見たつて、あんなの普通の事じゃ無い。あの子がISに乗る事は、恐らくだけどあの子の数少ない居場所を奪う事そのもの。付き合いは短いけど、現にアタシだつて相当引いてる……。

そこから先は、とんでもない戦法で黒乃は攻めに転じた。主兵装の葵ではなく、蹴るという至極単純な行為で大迫を追い込んでいく。しかし単純なようで、的確に人間の弱所を確実に捉えての蹴りだ。大迫が苦悶の声を出すせいか、戦いから視線を外す者まで現れる。

もしかして、意図的に甚振つて……？ いや、流星にそれは言い過ぎ。黒乃は悪い子じゃない。自分にそう言い聞かせて、黒乃の戦いを見守る事に徹する。すると決着は、アタシ達が戦慄している間についた。黒乃が投げて地面へ叩きつけられた衝撃で、ラ

フアールのシールドエネルギーはほぼ尽きた。

もはやいくら頑張ったところで、逆転は不可能に近い。しかし、いつまで待っても担当はブザーを鳴らさない。恐らくは、呆然としてしまっているせいだろう。まあ……黒乃が手を止めさえすれば、いずれ試合が終わった事には気が付くはずだ。しかし、アタシの考えとは裏腹に……黒乃はとんでもない行動を見せた。

あろう事か、まだ大迫の身体に打鉄の足を置いて動けないようにしてしまおう。それだけなら、どれだけ良かった事か。おもむろに黒乃は葵を天高く振り上げる。アタシには嫌でも解ってしまった。振る気だ……なんの躊躇いもなく、大迫の命を刈り取るつもりだ。

「止まりなさい黒乃！もう絶対防御は発動しない……本気でその子を殺す気！」

通信機器の前に居た女性を突き飛ばして、アタシは強引にその座を奪う。焦ったままで呂律が変になるが、とにかく腹から叫んだ。すると黒乃の動きはピタツと止まるけど、本当に……ギリギリだった。葵の刃は大迫の首元に触れるか触れないかくらいの場所まで止まった。もし何かがあと数秒遅かったのならば、大迫は……。

今のは黒乃の事情なんて、一切意味をなさない。千冬う……！アンタのこの子、本当になんなの!?どこからどう見ても、殺すつもりにしかアタシには感じられなかった。……弱者は生きる価値すらないと、そう言いたかったのだろうか。どんな理由があろう

とも、今回の黒乃の行為は……けっして許せるものではない。

アタシはゲートのすぐ近くで、黒乃を待ち構えた。やがて黒乃は姿を表して、所定の位置に打鉄を戻して装着を解除する。打鉄から降りた黒乃に、間髪入れずに平手打ちを見舞った。この子だったら、避けるなり防ぐなりできたはず。だったら……悪いとは思ってる？それなら少しは救いがあるわ。

「……いったいどういうつもりだったか説明してくれないかしら。」

平手打ちからして、アタシが怒っているのなんて明白なはずだ。それでもいつもと変わらない黒乃の態度に、アタシは大きな苛立ちを覚えた。かつてのアタシが顔を出したかのように、気づけば黒乃の胸ぐらを掴んで怒りをぶつける。黒乃にこんな事を言っても無意味だと解っているが、アタシにはこうせざるにいらなかった。

「アタタ、先に車に戻ってな。アタタに必要な事は出来ないからね。」

冷静でないアタシは、突き放した言い方で黒乃に指示を出す。アタシのやる事と言えば、謝罪以外に他ない。先ほどの管理者の女性を探す。恐らくだが、向こう側のピットだろう。早足で歩いていくと、想像通りの場所にいた。今は回収した大迫のメンタルケアをしているらしい。向こうもアタシに気づいたらしく、管理者はアタシに詰め寄る。

「貴女……あの子にどんな指導をしているんですか!?完全なる殺人未遂ですよ!」

「返す言葉もありません。誠に申し訳ありませんでした。」

指導をしてるのは千冬だったの……。まったく、なんでアタシが頭を下げないとなんなのよ。千冬も千冬よ……。黒乃にもっとしつかり言っとくべきでしょう。ほんともう……。なんかアタシ、どうでもよくなつてきちゃったなあ……。あの子がISに乗るのには、未だに応援できない部分はあるけど。

ちなみにその後の事は、数日後にアタシの元へ連絡が入った。どうやら大迫は、軽い症状ながらもPTSDを患つたらしい。ISに乗る度に、黒乃が刃を振り上げる姿がフラッシュバックするそう。これによつて大迫は、ISに乗る事が出来なくなつてしまったらしい。結果的に黒乃は、彼女のIS乗りとしての道を断つたのだ。

またしても謝罪が必要かと頭を抱えたが、2度と自分に関わらなければもうそれで良いと本人が言っているそう。そして千冬にはその件はあえて伝えずに、黒乃の模擬戦の記録映像だけを渡しておいた。知つた所で、既に千冬に出来る事はないしね。さて……。あの子は、これから先何人のIS乗りを潰すのかしら……。

第13.5話

「昴、黒乃は今どうしている？」

「ん……？ああ、ちよつち自主勉強してもらってる。」

黒乃が大迫との模擬戦を終えて、早くも数日が経過した。多くの者にとっては、ごく当たり前に過ぎ去った数日だろう。しかし、対馬 昴にとってはそうもいかなかった。口では説明のし辛いゴチャゴチャとした事情はあるが、大半の要因としては自身の心の問題であると本人は認識している。

「しかし……わざわざミーティングルームで見せる事も無いだろう。これではまるで映画鑑賞だ。」

「あく……それはなんつーか、まあ……うん……。」

千冬が昴の元を訪ねているのは、模擬戦の記録映像を見せてもらう為だ。千冬としては、まずこの場に呼び出された事も解せない。昴の事だろうから、記録映像をデータにして送り付けて終わりだろうと思っていたからだ。それにもっとも不可解なのは、昴がこうも歯切れの悪い態度をとっている部分であろう。

「アタシもさあ、何から言えば良いのか解かんなくて。だから何をしてもまず……コ

レを千冬に見てほしいの。」

「……解かった。」

千冬の認識として、適当、ズボラ、グータラ……そんな言葉を体現したのが昴だ。しかし、千冬は昴が単にそれだけで無い事も理解している。理解しているからこそ、今回の真剣な表情をした昴は余計に思い詰めた様子にみえるのだ。それだけに、千冬は余計な口出しはせずただ短く解つたと答える。

いつもと変わらぬ千冬の様子に、昴は何処か安心感を覚えた。すると、まるで覚悟が決まったかのように記録映像の再生を始めた。空間投影型のディスプレイに現れたのは、打鉄を装着した黒乃とラファールを装着した大迫だ。これを見てほしいと言う時点で、模擬戦時に何かあったのは明白。千冬は、穴が開くほど記録映像を見つめる。

初めの内は特に反応を示さなかった千冬だが、黒乃が葵でスナイパーライフルの弾丸を弾き始めた辺りでピクリと片眉が動いた。そのうちに映像に映る黒乃が大迫を圧倒し始めるが、そこから先は全く動じなかった。いや、内心では思う所があるのかも知れない。特に……最後のシーンなんかは。

録画だけに確認はできないが、黒乃は既にシールドエネルギーの尽きたに等しいラファールに迫撃を仕掛けたのだ。しかも足で踏みつけ逃げられないようにした後、葵を用いて大迫の首へと一太刀を浴びせようとした。ギリギリのところまで昴が呼びかける

と、黒乃はピタリと動きを止めた。しかし、昴が止めなければどうなっていた事か……。

「……………」

「……………」

録画の再生は止まり、既に画面は暗転している。だが、千冬も昴も口を開こうとしなかった。昴は先ほども言ったように、まず何から切り出すべきか定まっていない。だからこそ千冬の発言を待っているのだが……。考え込むような様子を見せ、なかなか声を発さない。ようやくして口を開いた千冬には、まず確認すべき事があった。

「何故……審判は止めなかった？」

「……黒乃が圧倒的過ぎて、あの場の全員は吞まれちゃってた。それで対応が遅れたのよ。私も、もう少し早く止められてたかもね。」

昴の言葉にも頷ける部分が千冬にはあった。録画ですらなかなか逼迫力満点だったにだから。もし自分があの場に居ると想定すれば、取り乱していた可能性が大きいと自己完結させる。なにしろ、黒乃の幼少期に似たような事はあった。忘れもしない大車輪を目撃した現場だ。

「……黒乃は何も悪くない。」

「……………」

「あの子は、責められたらう？……昴、お前もだな。断っておくが、非難するつもりは毛

頭ないぞ。」

「……ええ、そうよ。言い訳にしかなんないけど、混乱した拍子にすつげー酷い事を言つたわ。」

ポツリと呟かれた千冬の言葉に、思わず昴の眉間には深い皺が寄つた。そして、続いて千冬が語つた予測もドンピシャで的中……。千冬としては、昴の様子がおかしかった理由に合点がついた。昴はきつと悔いている。何を言つたかは知らないが、感情に任せて頭ごなしな言葉を送つた事を。

「昴が悪ければ、私も同罪だ。やはり私が先に模擬戦をするべきだった。他のもあるぞ。昴に黒乃の事を丸投げしたのだからそうだ。……なんとも至らん姉貴分な事だ。」

昴と同じく千冬も悔やむべき事が多かつた。表面ではいつものクールな様相だが、内心ではとてつもない悔恨の念が渦巻いている。特に黒乃が責められた場面なんてのを想像すると、悔しくて仕方が無い。それでも千冬が気丈に振る舞うのは、誰よりも辛かつたであろう黒乃の事を想つてだろう。

「……アタシがやんちゃしてたの、千冬は知つてたわよね。」

「……ああ、それがどうかしたか？」

「そんな時の親とか先公とか、アタシの事も解んねえのに頭ごなしな説教ばつかでウゼエウゼエとか思つてたのにさ……。それをよく解かつてるアタシが、頭ごなしに黒乃を否

定とか……笑える話だわ。」

昴はそこらの椅子へと乱暴に腰掛けると、そんな事を語りだした。様子がおかしかったのは、どうやら自己嫌悪も起因していたらしい。周囲の大人に反発していた時期の昴は、やんちゃな青春時代を送った。しかし、今となってはどうだ？ いつの間にか、自分が反発していた大人達と同じ事をしてしまっているではないか。

「最初に会って2年くらいか……。アタシもさ、あの子は好きだよ。始めの内は厄介な子だとか思ってたけど、あの子……見た事無いくらいに良い子だもんね。」

「私の……自慢の妹だ。」

「うん、千冬ほどじゃないだろうけど……妹だつて確かにアタシも思ってたのに……！ それが何で……何で、あんな酷い事を言っちゃまったかなあ……。」

昴は片手で顔を覆い隠しながら、とてつもなく悲痛な表情を浮かべていた。普段の昴を知っているだけに、千冬としては見ていられない程のものだ。いや、今の昴は見るべきでは無い……。そう判断した千冬は、腕を組みながら静かに背を向けた。そして考える……大人として、黒乃にしてやれる事をせねばと。

「自覚があるならまずは謝るところからだろう。黒乃に甘えていると言われればそれまでだが、謝れば……それで無かった事にしてくれるような優しい子だ。」

「だけど、そんなんで……。」

「それに……黒乃もきつと、昴の事は姉だと思っっているはずだ。だからあの子の為にも、姉として振る舞ってやってくれ。あの子も、そんな姿の昴は見たくないだろうからな。」

紛れもない本心から、千冬は昴へと言葉を紡いだ。自分が言ったように、自分も黒乃に甘えている。それだけに、他人だけ責める事なんてできなかつた。それで許されていはずがない。そう思っている昴だったが、千冬の言葉にいくらか救われた気分になった。今までは後ろめたさから面と向かえないでいたが、どうやらもう平気らしい。

「……解ったわ、あの子にはきちんとケジメをつけとく。でも今は、もう少し話さなきゃなんない。」

「あの件は、捨て置けんな……。」

「ええ、黒乃にとつての最良はなんなのか……アタシらがキチンと相談しとかないと。」

千冬がああの件と称したのは、黒乃が大迫を殺害しかけたという部分ではない。そこも勿論重要ではあるが、単に事故である可能性を千冬は配慮したのだ。では、あの件とは……？それは簡単な話である。試合の一部分を切り取った事はせず、黒乃の試合全体を通して相談すべきなのだ。千冬にとつては、不可解な点が多すぎる。

「あ、1つ言わないとなんだけど……。相手の子、黒乃との試合でPTSDを患っちゃつて。多分だけど、もうISには乗れないと思う……。」

「……そうか。」

「黒乃が代表候補生になれば、何処なりと味方してくれる場があるやも知れん。」

昴もIS業界においては、それなりの有名人ではある。が、盾としては弱いのだ。日頃の態度しか知らない人間にとつては、昴は信頼に値しない人物にしか映らないのだ。一方の千冬は、絶対的な地位を確立しているし周囲からの信頼も厚い。ただそれだけに、黒乃の盾になる事が逆に周囲の響ひんしゅくを買かう事態になりかねない。

しかし、千冬の提案ならば全てとはいかなくても問題は解決される。代表候補生ともなれば、専用機を得る事になるだろう。専用機を渡す側からすれば、開発した機体の技術力をアピールしてほしいはず。それならば、黒乃を悪いようには扱わない。そう思つて、千冬はそんな提案をしたのだ。

「確かに、黒乃が自分で地位を築けば早い話よね。」

「これから一番近い選考会はいつだ？」

「ん〜……と、モンド・グロツソでたて込むとかだから……。確か、黒乃が中3に上がる
ときの春休みくらいだと思わうわよ。」

「モンド・グロツソか……。」

「そつか、千冬は今年も日本代表だもんねー。頑張りなよ、応援してつから。」

昴がなんの気なしにモンド・グロツソと言うと、思わず千冬は反応を示してしまった。すると朗らかな様子で、昴は千冬へエールを送った。千冬はそれが照れくさいのか、

そつけない態度で短くああとだけ答える。素直ではない千冬の様子に、昴はニヤニヤとイタズラっぽい笑みを見せた。すると千冬は、咳払いしながら話題を戻した。

「で、この話は終わりで良いだろう。」

「まあね、あの子が通らないって事はないだろうし。」

この絶大な信頼感は、黒乃の確かな実力がそうさせるのだろう。千冬としても、黒乃はいずれ自身の立っている座に着く存在であると認識している。黒乃の本気とは、すぐさま自分の喉元に届くであろうと千冬は考える。だが、まだその時ではない。黒乃が自分と同じ舞台に立ち、黒乃が千冬から奪い取ってこそそのものだ。

「じゃ、後は……黒乃に謝ってくるわ!」

「それは良いが、事は建設的に運べよ。」

いつもの調子を取り戻したであろう昴は、元気な様子でミーティングルームを飛び出した。若干の空回りっぷりを察知した千冬は、やれやれといった風な感じて昴を追いかける。ドタバタと駆けて行く背中を追いかけると、やはり自分の方が年上な気がしてならない。そして昴は、黒乃が自主勉強中の講義室へ騒がしく入室した。

「黒乃お!」

「……………?」

「この間は……本当にスマンかった! アタシはさも黒乃が悪いみたいない方して、そ

のうえに酷い事も言った。都合が良いってこたあ解つてる……けど、アタシは黒乃に許してほしくて……。」

「……………」

「く、黒乃お……………」

講義室に入るや否や、黒乃に土下座して謝罪した。それだけ悪いと思つている証拠だろうが、謝られている本人は困惑した様子だ。そもそも黒乃はそこまで気にしてはいないのだが、それを第三者が知る由もない。とりあえず黒乃は、場を落ち着けさせるためか優しく昴の頭を撫でた。それが許すという意味表示が、昴にはキチンと伝わったようだ。

「アンタもう本当……………いい子だわあ……………。こんない子にあんな事言つたとかアタシは馬鹿だ！アレだ黒乃、この際だからアタシの妹とになりな！ほら、お姉ちゃんつて言つてみ！」

「何故そうなる……………。それに冗談を言うな。事故以来は私ですら呼ばれた事が……………」

「姉さん……………」

「馬鹿な!?ま、待て待て待て！ずるいぞ昴……………貴様だけ！」

「ほおくん？千冬もずるいとか言うんだねえ。嫉妬とかするんだねえ。」

さり気なく姉発言をする昴に、長年姉貴分として黒乃を育ててきた千冬のプライドが

傷ついたらしい。少しばかり口調を恐ろしいものに変えながら、昴を制しようとする……予想外の事が起きた。なんと、黒乃が声を出して昴を姉と呼んだのだ。これには千冬も黙っていられずに、自分も呼んでくれと眼差しで訴える。

しかし黒乃は、黙りこくったまま千冬を見詰めるだけだ。それを見た昴は、何か勝ち誇った様子で黒乃と肩を組んだ。盛大にニヤニヤとした昴の視線が、千冬の何かをプツツンさせた。目にも止まらぬアイアンクローで昴の頭を掴むと、とんでもない握力でこめかみを圧迫する。心なしか、メキメキといった効果音が聞こえてくる気さえする。

「私はからかわれるのが嫌いだ。」

「ぐおおおおー！、この感じも久々……。で、でも今回はアタシの勝ちだから耐えられるしーっ！アツハツハ！ざまーみるー！」

「貴様……いいだろう、その空っぽの頭……握り潰してくれー！」

拷問とすらとれる千冬のアイアンクローにすら、昴は黒乃が姉と呼んでくれたという理由だけで耐える。むしろ高笑いをして見せる昴に、千冬もムキになったのか更に力が腕に入る。それでも勝ち誇るのを止めない昴に、もはや千冬は頭を握る理由を失いかける。

そんな2人の様子を、黒乃は変わらぬ無表情で見守り続けた。内心では、オロオロとし放題なのだが……やはりそれも察して貰えるはずも無い。いい加減に諦めた黒乃は、

謎の光景が繰り広げられる空間でただ無心で居続けた。それからしばらくは、キレ気味でアイアンクローをする千冬と、アイアンクローを喰らって高笑いをする昴が繰り広げるカオス空間を静観し続ける……。

第14話

人を見たら泥棒と思え、なんて言う言葉がある。だが現在の俺は、人を見たら誘拐犯と思えと自分に言い聞かせている。何故かって……来たくも無いのに来ちゃっているからだ。何処って……第2回モンド・グロツソ開催地……ドイツに来ちゃったよおおお！

嫌だあ……今すぐ帰りたい。第2回モンド・グロツソと言えば、織斑 一夏誘拐事件の発生で有名であろう。イツチーがちー姉にとつて大事な存在だから誘拐されちゃったわけじゃん。そして俺も誘拐される可能性大で……って、あれ？それって、俺がちー姉の大事な存在って前提の話だよな。

……もしも露骨なアンチ物みたいに、ちー姉が助けに来なかつたらどうしよう。それはそれで、復讐ルートもやむなしかも知れない。いや……割と本気で。人生に刺激なんて必要はない……草みたいに生きていければ俺はそれで良いのに……。はあ……どうしてくれるようか。

「いやあ……生で見ると迫力が違うな。」

「……………」

「黒乃もいつか、こんな舞台で戦えると良いな。黒乃、俺は応援してるぞー！」

なんて言いながら、イツチーは俺にイケメンスマイルを向けた。俺がISを動かしている事は、既にイツチーも知っている。ばれないようにした方が良いかなって思ったけど、ちー姉が普通に俺の前でISの話題とか振るし。それにしても、こんな笑顔の後に誘拐されるとか……やるせないにも程がある。

時間带的に、もうすぐちー姉の試合の準備段階つてところか。まだしばらく時間はかかりそうだが、もうすぐ事件が発生する可能性のある範囲に入ってしまったっているんだよな。うーん……どう行動するべきか。俺も頭数に入っているのなら、何処へ逃げてでも無駄だろう。逆に入っていないのなら、イツチーと距離を置くのが正解……。

二者択一、2つに1つか……。あく……まずいな、どうも俺は2択で外しやすい性質なんだよ。なるべくなら巻き込まれずにはいたいけど、なんかイツチーを見捨てるように気が引ける。でも……ほっといても死にはしなないとも思うし……。こんな事なら、何か武器になりそうな物でも持って来ておけば良かった。

「千冬姉の試合まで時間かかりそうだし、ちよつとトイレ行って来るけど……黒乃はどうする？」

げっ、そんな事を言っているとイツチーが移動しようとし始めちゃうよ。つてかイツチー、俺だから良いけどさ……女の子にその聞き方はアカンよ。女として意識されてな

い証拠だと思うけど、少しはデリカシーを考えようね。んで、トイレか……。別に行く必要は無さそうだけど……。

「……………」

「そっか、じゃあ一緒に行こうぜ。人が多いから、はぐれないようにしろよ。」

俺は首を縦に振って、イッチーに歩いて行く事に。だって、誘拐されるかもってのが解ってるのに……。1人は心細いんだもの。それに2人だったら、何か対処が出来る事態にも遭遇するかも。イッチーに歩いて行くって事は、それだけリスクも増すけれど……。やっぱり隣にイッチーが居る方が安心感というものが違う。

とにかく俺は、イッチーの忠告通りにはぐれなような心がける。それこそ、はぐれた拍子にお持ち帰り……。なんてのも考えられる。しかし、何の問題も無くトイレまでは辿り着けた。だが、どうにもトイレ前の様子がおかしい。入り口には立ち入り禁止の看板を立ててあって、中には入れないようだ。

「あれ？さつき来た時は何とも無かつたんだけど……。すみません、ちよつと良いですか？」

「はい、何でしょう。」

「トイレ、使えないんですかね。」

「ああ……。申し訳ありません。水道管の方にトラブルがありました、現在は復旧作業中

です。」

近場に居た日本人のスタッフに、イッチーは話しかけた。少し離れて2人の会話を聞くに、どうやら水回りで何かあったらしい。トイレに水は必要不可欠だし、今日中……どころか数日このトイレは使えないかも。復旧作業中との返答をされて、イッチーは困った表情を浮かべる。

「よろしかったら、他のトイレにご案内しましょうか？」

「本当ですか？それなら助かりますけど……。」

「こちらの不手際ですので、ぜひそうさせて下さい。」

「えっと、じゃあそれでお願ひします。」

うくむ、いかにも日本人らしい対応を見た気がする。外国人がこんな時にどうするか知らないけど、日本はサービス精神が素晴らしいと評価されるのも頷けるな。しかし、こんな事なら別のトイレの位置も確認しとくべきだった。そうすれば、スタッフさんも道案内せずに済んだのに。

俺とイッチーは、スタッフさんへ連れられて会場内を練り歩く。やがて連れて来られたのは、当然ながらトイレである。でも、なんか変だな……。1か所が使用不可なのに、こちらの人ばかりがまばらなのはどうしてだろう？……気にするほどの事でもないか、現にこうして人の眼もある訳だし。

そんなわけで、ポーズながらも女子トイレへ足を踏み入れた。未だにだけど、男子トイレに入ろうとしちやうんだよなあ。人間に刷り込まれた記憶つてのは凄いと云うかなんというか……。さて、トイレは……。うむ？ 一つを除いて使用中か。やっぱり俺の考え過ぎみたいだな。

「かかった!」

ほわあ?! トイレの扉に手をかけようとしたその瞬間の事だった。急に扉がバアン! と開いて、中から人が飛び出て来るではないか。その手に握られているのは……。スタンガンである。チ、チクシヨ、騙された! なんて理解した時にはすでに遅く、俺にスタンガンが押し当てられた。あばばば!?! しっ、しびびび……。痺れ……。る……。!

「上手く行ったか!」

「ええ、成功よ。早く運びなさい。」

朦朧とした意識の最中、先ほどトイレ周辺で話していた人間が目に入った。つまり、自然に見せかけるためのエキストラだったって事ね……。この調子ならば、イッチーも同じく痺れてる頃だろう。あくも……。だからヤだったんだよ……。と、しっこく小言を呟いて意識を手放す俺であった。



う、うゝん……ハツ!?ここは何処、私は誰!?……って、ふざけてる場合じゃないんだよなあ……。えゝつと、場所はどうかやら……廃工場か何かからしい。それでイツチーは……無事か、ひとまずず安心だ。縄に縛られたイツチーは、まだ気絶の最中つぽい。………縄?なんでイツチーは縄で、俺は鎖なんでしょうか。縄だと千切られるとでも思われたのかな。

そんなゴリラじゃあるまいし……。まあそれは良いや、もつと状況を確認しないと。身をよじらせて周囲を見渡すと、廃工場の入り口付近に2人の男が居た。うゝん……あの2人だけなら良いけど。だって、この後に予測されるのはただ1つ……。なるべく人数は少ない方が良いよ。

「作戦は成功か?」

「ああ、たつた今……織斑 千冬の棄権が伝えられた。」

「じゃあ後は……好きにして良いんだな?」

「おいおい、お前も好きだな。まあ……俺も人の事は言えんが」

なんて言いながら、男2人は俺を見た。ドイツに来たくなかつた理由としては、薄い本展開になるのが目にみえていたからだ。やめて、私に乱暴する気でしょう!エロ同人みたい……エロ同人みたいに……それが冗談じゃないってんだから、本当にどうし

ようもない。

「よお嬢さん、お目覚めかい。」

「これからどうなるかくらい解るだろ？せいぜい慰みものになってくれよ……なあ!?」
「んうっ……!」

男の片割れが、声を荒げながら俺の胸をわしづかみした。自分でもびつくりだが、変な声が出てしまう。ろくに喋る事が出来ないのに、こういう声はキチンと出るんですね……。ていうか、まずいなあ……。なんか、気分も変になってきた……。このままでは、流されてされるがままになってしま……。う……。

はあ……。無理矢理されるんだったら、まだイツチーや弾くんのがマシだった。今から
ピーッ! ピーッ! ピーッ!
○○○に○○○を○○○されて、挙げ句の果てには○○○や○○○なんていうハードな
事になって、最終的には○○○が○○○になるまで延々と○○○!○○○!○○○!
「貴様ら、ピーピー五月蠅いぞ!何をしているんだ!」

は、はい……。スミマセンでした!って、俺の事じやないか。頭の中で放送禁止用語を
言ったときのピー音が鳴ってただけだし。現れたのは、ラファールを纏っている女だ。
それまで俺にあんな事やこんな事をしようとしていた2人は、渋々離れていく。た……
助かったあ……。

「……恨みはないが、これも命令だ。」

助かってねええええ!! な、なんで……? イッチーは殺さないっばいののに、どうして俺にアサルトライフルの銃口を向けてくるの!! これだったら、強姦された方がまだ……。いや、強姦も嫌だ……けど、引き金を引かれたら一発昇天しかない。こ、殺さんといて! アンタ達の目的は達成したはずでしょうよ。……と、心の中で懇願する。

「……………!!?」

え? え? 何……その銃口がブレブレなのには、どういう意図があるのだろうか。ハッ!? さては……俺の命を弄んでいるな! なんて悪趣味な女性だろう……。亡国機業の連中は、全員こんな冷酷なのか……? いいさ、そうやって時間を喰えば喰うほど、ちー姉が助けに来てくれるまで時間が稼げ——。

「うわああああつ!」

ひぎやああああ!! こ、この……この女、ろくに照準も定まらないのに撃つてきやがったああああ! 当たつ……当たつた! 鎖の部分に当たって跳弾したあ! ぜえ……ぜえ……し、死んだかと思つた……。あれ……? ラツキー、鎖が切れてる! 弾丸が当たったおかげだな。俺は手早く鎖を振りほどくと、一目散に物陰に隠れた。

「しまった……! 隠れるな、出てこい! こいつがどうなつてもいいのか!」

げつ……これはまずい。俺が隠れたのは良いけど、イッチーが人質に取られてしまふ。あの感じは、脅しではないみたいだ。ど、どうする……? ギリギリまで引き延ば

した方がいいのか、それとも……。そんなにまでして、俺を殺したいのかな？ムキになつてただけとかなら万歳だけ……。

とにかく、イツチーだけは殺させない。それは彼が主人公だからとかじゃなく、イツチーは俺にとつて大事な家族だ。助けて死ぬるなら本望……とは言わないけど、見過ごす訳にはいかんでしょ。しかし丸腰なのも心もとないので、そこらに転がっていた鉄パイプを掴む。そして、女の前へ姿を見せた。

「フンっ、何かと思えば……。こちらはISだぞ、無駄な抵抗は止めて大人しく殺されろ。」

解つてるよ、ISに乗っているのだから……。この鉄パイプで殴つたつて意味のない事くらい。だけど、少しでも時間が稼げられればそれで良い。でも……。死ぬ確率が高い。銃で撃たれても死ぬ、殴られても死ぬ、蹴られても死ぬ、死ぬ、死ぬ……。ヤバイ……。ヤバイ！やっぱ怖い……。

あまりにもリアルに感じられる死の予兆に、どうしようもなく心を支配される。なんだか知らないけど、1周回つて笑えてきた。どうやら俺は、そういう性質だったようだ。これに限つても表情は出るらしく、女は訳の解らないような顔つきをし始めた。

「なっ、何故この状況で笑つていられる……!？」

あ、やっぱ顔に出てるみたいだ。いやいや……。違うんですよお姉さん、これは怖がつ

てるんです。でも、なんだかうまい具合に動揺を誘えたかもな。恐怖を振り払え、怖くない……怖くない。そう自分に言い聞かせて、ジリジリと前へ出る。俺の想像通りに、女は行動を起こさない。

「くっ……うっ……。」

もう少し、もう少し……。向こうにも我慢の限界が見えて来た。いつでも退避できるようにして、呼吸を乱さずに前進を続ける。俺だって、相当に我慢しているのだから。本当だったら、機をうかがって逃げ出したい。それでも逃げられないのは目に見えてるから……。だから、せめて……。

「し……ねええええっ！」

来たっ！俺は女がアサルトライフルの発砲を開始する寸前に、女を中心として周囲を回るように全力で走る。するとアクション映画さながらに、俺の背後で弾丸の跳ねる音が聞こえた。ひいいい……！止まったら死ぬう！つか、あの女……やっぱり遊んでるよね、こんなの当てられないはずが無いし。

なんて考えてる暇じゃない！何か、何か策を考えないと……。走り回りながら、廃工場を見渡す。すると俺の眼に入ったのは、もう一本の鉄パイプと、先ほどまで俺の縛られていた鎖だった。俺の頭の中で、パズルのピースが埋まった。……なんてカッコイイ表現してるけど、コレは起死回生の手かもしれない！

俺は息を荒げながらも、なんとかもう一本落ちていた鉄パイプを回収した。止まる事が出来ない状況は悪いが、この一本さえあればどうともなる。俺はそのまま、アサルトライフル目がけて鉄パイプをブン投げる。横回転しながら飛んで行った鉄パイプは、見事にアサルトライフルに命中した。

「馬鹿な!？」

ありや、一瞬でも気を反らせれば御の字だったけど……弾く事にも成功したな。それこそ、結果オーライ!俺は間髪入れずに女の方へと走り込んで、その頭に思い切り鉄パイプを振りかぶる。う、うえ……手に人を殴る感触が伝わって、かなり気持ち悪い。でも、殺すつもりでいかないと……!俺は女がふらついている間に、今度は鎖を拾う。

鎖を拾うと、ラファールや女の身体を蹴りつけて上へ上へと昇る。そして女の肩辺りまで来ると、首に鎖を巻きつけながら肩車の要領で座った。それで……後ろに体重をかけながら、引つ張る!当然ながら女の首は締まってしまふ。IS操縦者だって、呼吸さえ止めてしまえば気絶くらいには持つていけるはずだ!

もともとは地球圏外での活動を目的とした機械だが、ラファールに呼吸うんぬんの機能は備わっていない……はず!でも女のもがくような反応を見るに、効いているに違いない。頼む……早いとこ気絶してくれ!人の首を絞めるなんて、あまり気持ち良い物じゃ……おえつぷ!うええ……やつぱり吐き気がするう……!

「くふう……ふっ！ああ……ああああっ！」

吐き気をもよおしたせい、手が少しだけ緩んでしまったらしい。女は必死の様子で俺を掴むと、そのまま放り投げる。操作をしている暇が無かったのか、俺の身体はフワリと浮く感じで宙を舞った。無論、それなりの高さがあるので着地なんてできないが……。いつつ!? つつ……落ち方が悪かったのか、左腕から変な音がしたような……。

「ぐっ……カハッ……！ぜえ……はあ……き、貴様……！」

「一夏、黒乃！居たら返事をしろ！」

「チイツー……ここまでか……！」

女は盛大にむせ返りながら、俺へアサルトライフルを向ける。今度は余計な事をさせないつもりか、かなりの至近距離だ。これは……ダメだな、詰んでいる。俺が今度こそ死を覚悟していると、遠くからちー姉の声が響く。幻聴かと思ったが、女の焦り具合からして本物だろう。

女はスモークグレネードか何かを投げて、周囲に煙を蔓延させる。それが晴れる頃には、女の姿はもうない。異変を察知したらしいちー姉は、慌てた様子で工場内に足を踏み入れた。そして、俺とITCHーの姿を確認すると、心底から安堵したような表情を見せる。

「お前達……！良かった……無事でいてくれて、良かった……！」

な、成し遂げたああああ……狙い通りに、ちー姉が来るまで時間を稼げたよおおお……。ほんつともう……強姦されそうになるわ、殺されそうになるわ……散々だよ、もう……ドイツ嫌い！ちー姉が目の前に居る安心感からか、なんだか緊張の糸が切れてしまった。このタイミングでの気絶は心配されそうだけど、もはや……限……界……。

◇

(藤堂 黒乃は殺せ……か。上は、いったい何を考えているのやら……。)

作戦内容は、織斑 一夏及び藤堂 黒乃の誘拐……そして、それに伴って織斑 千冬に決勝戦を棄権させる事だったはずだ。今になって命令が出されたが、何を思っ上は……?……いや、たかだか末端の構成員である私に、そんな事を考える必要はない。一応だが、念には念を……ISは持って来ておいて正解だった。

確か誘拐の実行部隊が、この廃工場に放置しておいたと言っていたな。私はラフアールを装着すると、工場の奥へと侵入していく。するとまず目に入ったのは、藤堂 黒乃に群れる監視役の男2人……。ハイパーセンサーでズームすれば、片方の男の手は藤堂 黒乃の胸を掴んでいる。

「貴様ら、ピーピー五月蠅いぞ！何をしているんだ！」

私がそう怒鳴つてやれば、男2人は文句を言いながら撤収作業へ移る。まったく、最近の男共は……油断も隙もあつた物では無い。我々の組織は、女だけで構成する訳にはいかんのだろうか。それは今度上に進言するとしてだ。私の目的は、この小娘の殺害……それのみだ。

「……恨みはないが、これも命令だ。」

哀れな物だ……。だが、強姦を防いだのは感謝してほしい所だな。せめてもの情けという奴だ。それ以外には、特に情も浮かばない。私はラファールのアサルトライフルの引き金へ手をかけた。するとその時、突然えも知れぬ威圧感が私に襲い掛かる。もしや、もう織斑 千冬が……!?

「……………!?!」

そう思った私だったが、よくよく感じ取つてみると……その威圧感を放っているのは、目の前にいる小娘だった。この殺気は、馬鹿な……私の手が、勝手に震えだす……!?!まさかとは思うが、この小娘に私が怯えている。そんなのはあり得ないと思いつつ小娘を見れば、その姿が修羅か何かに見えてしまう。完全に、私が臆している証拠だ。

「うわああああっ!」

ガタガタと手を震わせながらも、私は発砲せざるを得なかつた。その恐怖を打ち破るためか、自然と雄叫びを上げて引き金を引く。しかし、そんなものでは当然狙いも定まら

ない。放たれた弾丸は、まるで吸い込まれるかのように小娘を拘束している鎖へと命中した。

「しまった……！隠れるな、出てこい！こいつがどうなってもいいのか！」

まるで始めからこれが狙いでした。そう言わんばかりに、小娘は拘束されている状況を脱した。隠れ場所のいくらでもある廃工場だ……何をされるか解ったものではない。そこで私は、織斑 一夏を餌に炙り出す事に。存外小娘は大人しく姿を見せたが、その手には粗末な鉄パイプが握られている。

「フンツ、何かと思えば……。こちらはISだぞ、無駄な抵抗は止めて大人しく殺されろ。」

ISへの対抗手段は、IS以外にはあり得ない。そうだ、生身の小娘に何を恐れる必要がある。寸前まで確かに私はそう考えていた。しかし……あろう事か、小娘は私に向けて笑みを見せる。それもただの笑顔ではなく、何処かこの状況を楽しんでいるような……狂った笑みだ。

「な、何故この状況で笑っていられる……!？」

絶対におかしい……この小娘は、どうかしている。力の差は歴然なのに、もうすぐ殺されるかも知れんのに。いや、むしろ……死を身近に感じている事自体に、歓喜を覚えるようなこの笑みはなんなんだ!？そして小娘は、1歩……また1歩と間合いを詰めてく

る。それに対して私は、何も出来ないでいた。

「くっ……うっ……。」

物怖じしない方だと自負していたが、こうも私が呑まれるなどと……。落ち着け、落ち着くん。近寄られたところで、小娘に利があるわけでもない。私が乗っているのはISだ、恐れる事など何もない。そうだ……そうだろう。後は、殺せ……この小娘を殺すのだ！

「し……ねええええっ！」

忌々しい事に、私がたじろいている隙を突かれた。私が発砲を始める前に、小娘は横へと逸れて走り出した。連射しながら照準を合わせるが、どういう事かまったく当たらない。これではまるで、弾丸の方が奴を避けているような錯覚を覚えてしまう。

「……………！」

「馬鹿な!？」

小娘がもう一本鉄パイプを拾ったかと思えば、即こちらへと投げてきた。もちろん私も対処しようとしたさ……だが、それはかなわない。とんでもない速度で飛んできた鉄パイプに、反応すらできやしない。鉄パイプはアサルトライフルに命中し、私の手元から弾くほどの威力がある。

思わずアサルトライフルの方へ気を取られてしまったのが、運の尽きというやつだろ

う。氣づけば小娘は私の目の前……。そのまま飛び上がると、私の頭へ鉄パイプを振りかぶる。もちろん痛くもかゆくもない……。それでも、更に小娘に隙を与えてしまった事にはかわらん。

「くふう……ふつ！ ああ……ああああ！」

私を鉄パイプで殴った隙に、先ほどまで自身の縛られていた鎖を拾っていたらしい。私の身体を駆け上げれば、何の躊躇いも見せずに私の首へ巻き付ける。想定もしないこの状況のうえに首を絞められ、私は軽いパニックを起こしてしまう。なんとかもがいて小娘を掴めば、とにかく急いで遠くへと放り投げる。

「ぐっ……カハッ！ ぜえ……はあ……き、貴様……！」

「一夏、黒乃！ 居たら返事をしろ！」

「チイツ……ここまでか……！」

私は呼吸を乱しながら、小娘を睨んだ。しかし、小娘は未だに薄くだが笑みを浮かべていた。小娘が次にどう出てくるかを考えている間に、織斑 千冬の声が私の耳に届いた。それすなわち、藤堂 黒乃の殺害失敗を意味していた。私は手早く煙幕を張ると、あらかじめ用意してあった退路から脱出を試みる。

脱出こそ上手くいったものの……私の気はなかなか安まらない。あの小娘の浮かべた笑みを思い出す度に、手の震えが止まらなくなってしまう。上が何故小娘の殺害を命

令したか、私はようやく理解できた。あの小娘は、近い将来に我々の大きな障害となるだろう。撤退する私は、そう考えながら回収場所へと向かうのだった。

第15話

「黒乃……。」

ドイツの病院の一室で、俺はただただ黒乃の様子を見守り続けた。医師が言うには、ただの過労ですぐに目を覚ますだろうとの事。しかし、長い間黒乃が眠るのを見ていると……とても不安になる。それはまだ幼い頃に、黒乃が一週間も目を覚まさなかった前例があるからだろう。

「なんだってこんな……。」

俺は思わずそう呟かずにはいられない。なんたって、誘拐事件にあったのだから。それも目的は、どうやら千冬姉を棄権させるためらしい。ふざけんな……そんな言葉しか出て来ない。それに対しても腹が立つが、俺は何より……自分の不甲斐なさが許せなかった。

どうやら黒乃は、生身でISに立ち向かったそうだ。それもこれも全て、俺を守るため……。だからこうやって、黒乃は病院に寝かされているんだ。考えれば考えるほどに、自分に対する苛立ちが増していく。結局俺は口ばかりだ。黒乃を守るなんて言うておいて、守られてるのは……いつも俺の方じゃないか。

黒乃はI Sにも乗り始めて、ドンドンと前に進んでいる。それに比べて俺はどうだ……？千冬姉に迷惑かけたくないって、剣道もすっぱり辞めて……そんなのただ自分に言い訳してただけだ。そうすると、黒乃の存在があまりにも大きくあまりにも遠く感じられた。

「……………」

俺はいつの間にか黒乃の手を握り締めていた。こうしていると、黒乃が近くにある事を実感できる。黒乃の手はとても温かい。家事の影響か、少し荒れて女の子らしくはない。女の子らしくはないが、女性的ではある。だからこそ黒乃の手は美しいって、心からそう思う。

「い……………ち……………か……………」

「黒乃!」

俺は驚きのあまりに、座っていた椅子を倒しながら立ち上がった。確かに今黒乃が、俺の名前を呼んでくれた。いったい……いつ以来の事だ？もはや黒乃が事故にあっていなくなった気がする。黒乃が『いちか』の3文字を発音してくれた事こそ嬉しいが、今はそんな喜んでいる場合じゃない。

俺は黒乃の手をさらに強く握りしめて、黒乃の名前を優しく呼び続けた。しばらくすると、俺の手を黒乃の方から握り返してくれる。そこから先はトントン拍子で、黒乃は

ゆつくりとだが目を開いた。昨日の夕時ほどにここへ寝かされたから、軽く10時間以上といったところだろうか。

「黒乃、俺が解るか？」

「……………つ！」

「あ、ゆつくり起きろよ。左腕、少し痛めてるらしいから。」

目を開いた黒乃は、凄いい勢いで飛び起きようとして……止まった。それは恐らくだが、左腕に痛みが走ったからだろう。それを察した俺は、黒乃の背中を支えゆつくり起き上がらせた。これに関しても数日見ればよくなると言っていたが、黒乃が腕を抑えて痛がるとなるとよほどの事だろう。

「……………」

それ以降は無言の時間が続く。いや、きつと黙ってるのは俺の方だけだ。黒乃が喋れたとするならば、俺に大丈夫だったかとか、千冬姉の試合はどうなったかとか……人の心配ばかりをしているはずだ。それなのに俺は、全く言葉が出て来ない。黒乃に、何を伝えれば良いのかが解からないんだ。

ありがとうと言えば良いのか、それともごめんと言えば良いのか。どちらも……違う気がする。黒乃が俺の為に無茶を、いや……命を賭けてくれた事くらいは解っている。だけど、黒乃が望んでいるのはそんな事じゃないハズなんだ。やっぱりダメだ……そう

いう考えを巡らせると、つい後悔が口に出てしまう。

「黒乃、俺は……ダメな奴だな。黒乃が命を張ってる間に、気付きもしないで寝てたなんてよ。黒乃が、死んじまつてたかも知れないのに……俺はっ……!」

「……………」

こうなつてしまえば俺は止まる事が出来ずに、誰に對してか何に對してかも解からない懺悔を口にした。俯き加減でそう言っていると、病室内にパンツと乾いた音が鳴り響く。何事かと思つたが、俺の頬がジンジンと疼いている事に気が付いた。ああ、そうか……俺は、黒乃に頬を叩かれたのか。

それは理解できたが、俺がすべきは黒乃が何故いきなり叩いて来たかを考える事だ。そんなの……最初から解り切つた話ではある。黒乃はきつと、こう言いたいには違いない。そうやってウジウジしたつて、何かが変わるのか?後悔する暇があるんだつたら、これから何をすべきか考えろ……つてな。

ああ、そうだ……そうだよな、黒乃の言う通りだ。自分をダメな奴つて思うくらいだつたら、少しくらいは変わろうとしろよ。黒乃が命を張ってくれたんなら、俺も黒乃の為に命を張れ。今までは見て見ぬフリをしていた。今の世の中は、仕方が無い事なんだつて。

仕方が無いで済ましていいはずもない。変わろうともしない奴の言い訳が通じるほ

ど、この世の中は上手くできちゃいない。変わりたいのなら……足掻け、苦しめ、這いつくばってでも前に進め。俺に足りなかったのは、きつとそういう意志。足りなかった意志は、黒乃の平手打ち一発で満たされた。

「……ありがとうな、黒乃。」

本当に、黒乃にはこの言葉を何度言ったって足りやしない。けどどいつしか、黒乃にそう言っただけで済ませようにな……黒乃を堂々と守ってやれる男に俺はなりたい。いや、なる。絶対になつてみせるんだ。黒乃にはもう2度と、こんな経験をさせてはならない。黒乃は俺が守るんだ……俺が必ず。

「一夏、少し良いか？」

「千冬姉、ちょうど良かった！黒乃が目を覚ましたんだ！」

「何っ!?黒乃……!」

千冬姉は俺に用事だったみたいだが、身体を起こしている黒乃を見て俺への興味は薄れてしまう。驚きと喜びが入り交じったような表情で、千冬姉は黒乃へと歩み寄った。しかし、それも短い時間の事だ。次第に千冬姉は、表情を険しいものへと変貌させてゆく。病院内という事に配慮してか、声を潜めて千冬姉は言う。

「馬鹿者が、生身でISと対峙するなど。無茶をしなければならなかったとは言え、もう少し命を大切にしろ。」

どちらかと言えば、論すような叱り方だった。きつと千冬姉も、黒乃の迫られた二択を配慮しての事だろう。戦うか、そのまま殺されるか。きつと黒乃には、その2つに1つしか選べなかった。黒乃の事だ……迷いもなく、前者を選んだんだろう。それは、俺が居たから……。

「だが、とにかく黒乃は生きていた。今は……それだけで良い。」

「……………」

俺も先ほど、千冬姉に似たような事を言われた。取り乱していたし、ろくな返事は出来なかったが……俺はとにかく嬉しかった。きつと黒乃も、俺と同じ気持ちだろう。千冬姉の棄権の事は、知っているのかどうかは解らない。知れば黒乃は責任を感じる。そこに關しても、俺と同じなはずだ……。

「千冬姉、俺に用事じゃなかったのか？」

「ああ、そうだったな。黒乃、お前は何も心配するなよ。今日の内は、とにかく安静にしている。」

命令口調の千冬姉の言葉は、何処か反論を許させない何かがある。黒乃は大人しく首を縦に振ると、さっそくベッドに寝直した。そして俺と千冬姉は、2人して病室から出る。黒乃の前では話し辛い内容だと、俺はなんとなくそう思った。そして病室の目の前で、千冬姉が静かに口を開く。

「恐らくだが……一夏、お前も取調べを受ける事になるだろう。その時は、余計な事を口走るなよ。」

「余計な事……つて、もしかして……。」

「……お前の考えているように、黒乃の事だ。」

誘拐事件に際して、俺と黒乃は被害者にあたる。しかし、何故無事にいられたかが説明がつかない部分がある。それこそが、黒乃が誘拐犯の一人を撃退したから。それも……生身で。俺としては凄いとしか思えないが、取り調べをする側からすれば……異常な事と取られかねない。

それで黒乃に、不利な事態が起きてしまうかも知れない。だからこそ千冬姉は、俺に釘を刺したのだろう。確かに指摘されなければ、黒乃に助けられましたなんて言いかねない。俺も、もう少し考えないとダメだな。そうすると、ずつと気絶していました……とだけ言っておけば良いだろう。それに、何処も嘘をついてない。

「解った、気を付けるよ。」

「発言には細心の注意を払え。では、私は行くぞ。まだ取り調べが残っているのぞな。」

「なあ、千冬姉。」

「……何だ？」

「俺、千冬姉の弟で本当に——」

「その言葉は、そこで止めておけ……照れるだろうが。」

動き出した千冬姉にそう告げれば、振り向きもせずにもう返された。半ば玉碎覚悟だったが、今日の千冬姉はやけに素直だ。……千冬姉がそれを望むなら、皆までは言わない。だけど千冬姉……覚えておいてほしいのは、それだけじゃない。黒乃もきつと、そう思ってるって……それを忘れないでくれ。

「……剣道、また始めてみるかな。」

千冬姉の背が見えなくなると、俺はポツリとそう呟いた。黒乃に追いつくのなら、I Sを動かしてみたいもんだけど……男の俺には無理だ。だから、出来る事から始める事に決めた。俺はもう逃げたくないから。逃げたくないから、戦うんだ。己の無力さや、どうしようもなさ……。そう俺は心に強く誓った。



うくん……うくん……ハッ?!おはようございます!……つて、あり?家じゃない……。そうか、当たり前の事だ。今俺はドイツに居て、勇敢にも誘拐犯に立ち向かったではないか。んで、どうなったんだっけ?えーと、そうそう……ずっと死ぬ死ぬって思ってたから、無事になった途端に気絶しちゃったんだった。

そしたら今まさに目が覚めた訳で……ここは何処よ？俺の目の前には、でつかい川意外には何も無い。………解った、これはきつと夢だ。時々だけどあるよね、自分で夢だつて認識できる夢。だとしたら、そんなに騒ぐような事でもないか……。それにしても、我が夢の中とはいえ……随分とデカイ川だこと。

見た限りの川幅は広く、流れも速い。激流と言つても差し支えなさそうなソレは、入ろうものなら一瞬で溺れてしまふそうだ。んゝ右を見ても左を見ても、川の全貌が解らないくらいに長い。本当になんなんだろう？これじゃあまるで、こつちと向こう岸を隔てるみたいだ。

この速さじゃ……なかなか生き物も住み着きそうもないなあ。なんて思いながら、川へ近づこうとしたその時だ。俺の手が何者かに掴まれて、制止させられる。びつ、びつくりしたあ……！心臓が飛び出るところじゃないか。まったく、どなただよ……。

そう思つて振り返つてみると、これまたビックリ。なんと俺の手を掴んでいるのは、体は子供で頭脳は大人な名探偵が活躍する作品……に出てくる犯人役の黒い人的な感じだ。正確に言えば、目も口も真つ暗でシルエツトと表現した方が正しそう。きつと、俺が夢で特定の人物をイメージしきれなかつたんだろう。

だとすると、俺の手を掴んでいるのは……実際はとびきり美少女に違いない。いや、もしかすると美女かな。そうやって思い当たる美少女、美女をイメージしてみるも……

特に黒いシルエツトに変化はみられない。なんだよ、つまらない。俺は辟易とした感じ
で、離してもらうために言葉を紡いだ。

(いや、ちがうんですよ……かわに入つて入水自殺的なやつじゃなくてね、単に川の様子
を見守ろうつて……。)

そう言つても、黒い人はウンともスンとも言わない。……なんなんだこれは！どうす
れば良い！俺の妄想力よ、そんなもんじゃないだろう……そうやつてムムムとうなつて
いると、黒い人は俺をしつかりと抱きとめた。そうそうそうそう……そういうや
つ、そういうやつ。後は……姿だけだな。

『……………の、黒……………』

だつしやおらあい！何処の誰さ、俺の妄想を阻むのは！今良い所なんだから、邪魔せ
んといて！つて、ああ……なんだか周囲が明るくなつてきた。これはアレか、目が覚め
てしまう前兆か……。ちくせう、結局はなにがなんだか解らないままじゃん。あの川が
何の暗示だったかとかさ。そこまで考えて、俺にはある答えが浮かんだ。

(解つたああああ！アレ、三途の川でしょ!?)

なんでさ、なんで気絶しただけで……そんな夢を見んといかんのや！俺の発想力は、
ある意味で天才的だったみたいだ。さて、今度こそ目が覚めらいしな。見渡して見る
と、ここは病室以外の何物でもない。そこらに書かれている文字を見るに、恐らくはま

だドイツだ。ドイツ語か……もつと簡単そうなら勉強するんだけどなく俺もなく。

「黒乃、俺が解るか？」

「……………つー」

「あ、ゆつくり起きろよ。左腕、少し痛めてるらしいから。」

イツチー……無事だったか！思わず飛び起きようとした俺だが、左腕に走る痛みに阻まれた。イツチーが痛めてるらしいなんて言うって事は、やっぱり投げられた時に地面への着き方が悪かったのね。イツチーは、優しく俺を起こすのを手伝ってくれた。すまないねえ……なんて、年寄り臭いか。

「……………」

起こしてくれたは良いものの、イツチーは何も話そうとしない。き、気まずい……。ブーブー、イツチー……大丈夫だったかとか、なんか一言くれたって良いじゃん。イツチーがグースカしてる間に、俺はいつたい何度死ぬかと思ったか……。もう2度とあんなのは勘弁したい。せめてISに乗っていれば話しは別かな。

「黒乃、俺は……ダメな奴だな。黒乃が命を張ってる間に、気づきもしないで寝てたなんてよ。黒乃が、死んじまってたかも知れないのに……俺はっ……………」

イツチーが喋り出してくれたのは全然良いんだ……。だけど何か、タイミングが悪すぎやしないかい？何事かって、小さいハエ的な虫が、ブンブンと飛び回っているからだ。

ドイツにも似たようなのはいるんだな……って、鬱陶しい！ イッチーの言葉がまつたく頭に入つて来ないじゃない。

なんか、良いこと言ってるっぽいんだけどな……。あつ、イッチーの顔に止まった……。そのまましておけば気づくと思つていたけど、イッチーはいっこうに虫を追い払わない。……そういうところも鈍感？ 頬の神経死んでんの？ ダメだ……今度は面白くて、話しが耳を通り抜ける。

そうなると、俺がどうにかした方が良いよね。ドイツも先進国だから問題ないとは思うけど、変な病気を持つていたら大変だ。それが病院に侵入してる時点でどうかとは思うけど……とにかく、大事をとつて仕留める！ イッチー、そのまま固まつて動かないでな……。

いきなりで怒らすだらうなあ。でも、これはイッチーの為でもある。ここは心を鬼にして、掌を開きつつ指をピンと張つて力を込める。そしてイッチーの頬に狙いを定めて……思いつきり振り切る！ イッチーの頬を打った音が、病室内に木魂した。自分の掌を確認すると、そこに潰れた虫の姿はない。

げっ……仕留め損ねた？ マズいな、イッチーがくつてかかつてきたら死骸を見せる予定だったのに。喋れない俺にとつて、言い訳ほど難しい事はない。しかし、いつまでたつてもイッチーは騒ぎ出さない。不思議に思つてイッチーの様子を窺うと、頬を真つ

赤に染め茫然としていた。

つ、強く打ち過ぎたかな。なんか俺に話しかけてたし、流石に驚きの方が勝っているのかも。そうなると、怒り出したらそのぶん怖い気もする。イツチーに本気で怒られた経験はないけど、メンタルの弱い俺からするとトラウマになつてしまいかもだぞ。やがてイツチーは、俺に向かって口を開く。

「……ありがとうな、黒乃。」

お前ドMかよお！（同族嫌悪）。ば、馬鹿な……叩いておいて感謝されるなんて、俺と同じ性癖な持ち主って事じゃないか。いったい……いつの間に覚醒していたというんだ……。そんなまさか、このタイミングでイツチーの性癖を知る事になるなんて……。いや、どんなタイミングでも聞きたくはなかったけどさ。

もしかして、俺のせいだったりする？原作のイツチーは、そんな事なかったと思うし。自ら失言して殴られにいくとか、まさに俺が喋ればやろうとしてた奴だよ。これで何か、大きな影響にならないといいけど……。それにしても……弟ないし兄貴分がドMかあ。お姉ちゃん（妹でも可）そんな育て方した覚えはありませんよ。

「二夏、少し良いか？」

「千冬姉、ちょうど良かった！黒乃が目を覚ましたんだ！」

「何っ!?!黒乃……!」

まるで謀ったかのようなタイミングで、もんまもんのお姉ちゃんが姿を見せた。ちー姉……責任の一端は、ちー姉にもあるとおもうよ？ シスコン気味なイツチーが、ちー姉にバンバン叩かれるから……そこから快樂を見出だしてしまったのではないかと私は推測します。まあ……その話は後だ。なんたって、ちー姉が安心した表情をしてるから。

「馬鹿者が、生身で I S と対峙するなど。無茶をしなければならなかったとは言え、もう少し命を大切にしろ。」

いやいやちー姉……それは誤解だよ。俺の命は、俺にとって何よりも大切なものだ。本当だったら、俺だってあんな無茶はしたくなかったし……。 D E A T H or D E A D の選択肢なら、斜め上の選択肢を選んで F I G H T しかあるめーよ。戦わなければ、生き残れない！……って感じさ。

「だが、とにかく黒乃は生きていた。今は……それだけで良い。」

はうあ！ 出た……ちー姉必殺の天然飴と鞭！ あゝ調教されてる感覚が堪らんのじゃ。個人的には、鞭が少し足りないくらいだけだね。物理的でも精神的でも良いので、もつとちー姉にいじめられたい。まあ I S 学園に通えられれば、その機会は嫌でも増える。今は純粹に、ちー姉が心配してくれるのを嬉しく思っておこう。

「千冬姉、俺に用事じゃなかったのか？」

「ああ、そうだったな。黒乃、お前は何も心配するなよ。今日の内は、とにかく安静にしている。」

俺が目覚めたばかりなのを考慮してくれたのか、イツチーは話題を変えてくれた。ぶつちやけ、今日中に日本へ飛んでも大丈夫くらいだけ……。変な夢を見てたのもあるし、ちー姉の言う通りに今日のところは休んでおこう。俺は首で肯定を示すと、2人がまだ居るにも関わらず毛布を頭から被った。

しばらくして、扉が静かに開く音がしたし……。気にするほどの事でもないか……。うん、左腕の痛みが気になるけど、眠る事ができるだろうか。余所様のベッドって、なんか落ち着かないし。ええい、細かい事を気にするでない。眠る事に集中集中！なんて思ってる間に、俺はうつらうつら……。の○太並みに神速で眠る俺氏であった。

第16話

「アタシ、中国に帰る事になったから。」

「は……？はあ!？」

季節はもうすぐ春を迎えようとするこの頃、学校帰りの五反田食堂にて鈴ちゃんが唐突にそう切り出した。驚いた弾くんは大きな声を出して立ち上がるけど、そのせいで厳じっちゃんのフライングオタマの餌食となる。弾くんは頭を押さえながら、イッチーに話を進めるように促す。

「あ〜つと……ほ、本当なのか？」

「こんな事で嘘ついてどうすんのよ。アタシだって、嘘だったら良かったっての……。」

「い、いったい何時だ？つてか、どうしてなんだよ!？」

「春休みには向こうに帰ると思う。原因は、まあ……いろいろ……。」

最近はず々と忘れていた事が多いけど、中二から中三に進級する間に鈴ちゃんは日本を去るんだったよな。帰る原因を弾くんに聞かれた鈴ちゃんは、少しばかり言い淀んでしまう。確か、ご両親のいざこざとかだったはず。そりゃあなかなか言い辛いでしょう……。

「いろいろつてお前……。……そっか、寂しくなっちゃうよ。」

「なんか俺達、常に4人組だったしな。」

「アンタ達、気持ちは嬉しいけどしんみりし過ぎよ。ホラ、黒乃を見習って。」

鈴ちゃんがそうやって俺に視線を集めさせると、思わず食事の手が止まってしまふ。いや、別に何も思わないから食事を続けてたとかじゃなくて、喋れないから話して混ざれないと思つたからで……。だ、だめだよな。混ざれるか否かは別として、真剣な話しなんだから手を休めるべきだった。

妙に感心させられたような視線をイッチーと弾くんに送られて、そこで俺はようやく箸を休めた。するとどうした事か、いやいやいやと2人はどうぞ食事を続けてくれと言つてくれる。なんだその……。そんな視線の最中に食事するつて、ちよつとした苦行ですよ? まあ……。食べるけど。

「そうだよな、黒乃を見習おうぜ……。弾。」

「おう。なんつーか……。いつも通りに過ごして、いつも通りに鈴を送り出してやるよ。」

「は? なんでもちよつと上から目線なのよ。」

「いや待て、そんなつもりじゃねーよ!」

そうそう、この感じこの感じ……。先ほどまでの空気感は消え失せて、鈴ちゃんと弾くんが漫才を繰り広げる。でも……。痛々しい気もするけど。なんだか、鈴ちゃんが無理

して笑っているように見えてしまう。……そんな事は、考えない方が良いか。気にするだけ、俺の心にもダメージが入ってしまう。

そうして残された時間の大半を、俺達はよりいつそう共に過ごした。俺はISの勉強とかで、休みの日とかは遊べなかつたけど……。それでも、短い時間の最中に思い出を沢山刻んでおく事ができた。このまま、鈴ちゃんが笑顔で向こうに帰られたら良いけど。

気温も次第に温かくなり、草木も徐々に芽吹き始める。今日も今日とてポカポカ日和、風も強くは無いし絶好のフライトコンディションだろう。俺、イチー、弾くんの3人は、鈴ちゃんを送り出すために空港の国際線ターミナルまで足を運んでいた。ボストンバッグを肩に抱えた鈴ちゃんは、俺達の少し先を歩いている。

「アンタ達暇よねえ、わざわざ来てくれなくなつたつて良かったのに。」

「嘘つけ、絶対嬉しいだろ。特にいち……アダッ！」

「蹴るわよ?。」

「蹴つてから言うな!。」

「2人とも落ち着けて、他の人に迷惑だぞ。」

それまで無言で歩いていた俺達だったが、鈴ちゃんがキュツと振り向きながらそう言った。それに対して弾くんが、一夏が来て嬉い癖にといい趣旨の台詞を言おうと

する。しかしそれは鈴ちゃんの軽い蹴りでキャンセルされて、相も変わらずなやり取りを見せてくれる。

しかし、イツチーが随分とまともな事を言うな。なんか、ドイツから帰って雰囲気が変わった気がする。基本的には、俺の良く知っているイツチーだけど……なんだか纏っているオーラが違うと言うか。でもなんか、原作とは違ってイツチーが剣道を再開したんだよね。そのあたりが関係してるのかも。

そう思いながらイツチーを見ていると、鈴ちゃんは俺の事を見ていた。……なんだこれ？えつと、鈴ちゃんや……何か御用かね。と、そんな感じの視線で鈴ちゃんと目を合わせてみる。すると鈴ちゃんは、ビクツと身体を跳ねさせた。えく……？今になって、実はずつと怖かったんだよねとか言われんでしょね。

「ねえ黒乃、少し2人で話せない？」

「そういう事なら、俺達は少し離れてるよ。行くぞ、弾。」

「いや、盗み聞きとかはしねーからな……？」

ぬう!?!ちよつ、ちよつとタイム2人共……置いて行かんといて!くつ……まさか、想像していた通りの展開になるパターンじゃあるまいな……。俺としては鈴ちゃんは大事な友人だし、怖かったなんて言われたら引きこもりになるよ。俺が身構えていると、鈴ちゃんは聞きづらそうに口を開く。

「黒乃つて、一夏の事……好き？」

ほえ？……あつ、なるほどね……そういつた話題か。そりや心配か、イツチーと家族レベルの幼馴染を放置して、自分は故郷に帰らなくてはならないのは。どうだろうねえ……まあ、ぶつちやけた話でドキッとさせられる事は普通にあるよ。なんか、魂は肉体に影響させられるとか言うじゃない……多分だけどそれがモロに出てる。

時々だけど、アイデンティティーを見失いそうになる。俺はもはやただのオレっ娘なんじゃないかと思う時だつ

てあるし……。でもねえ、女性に対して欲望が働くのもまた事実なんだよねえ。なんだろ、結局のところで俺は百合っ娘なのかね。まあ……今回は、そういう難しいのは差し引いて話を進めようではないか。

そうだな……ドキッとさせられる事はあつても、俺はイツチーに対して恋愛感情は抱いていない。うん……正直、油断してたらコロツと落とされちゃうかもだけど。でも现阶段での話となると、毛ほども無いって奴だ。俺が静かに首を横に振ると、鈴ちゃんは難しそうな表情を浮かべた。

「……そう。黒乃がそう言うんだつたら、それで良いわよ。ごめんね、最後なのに……変な事を聞いちゃつて。」

気にせんでも良いつて、鈴ちゃんは恋する乙女つて奴なんだから。俺なんて、見た目

はJ.C中身はオッサンだもの。……なんか、言つて悲しくなつてくるな。そ、そんな事は後回しだ！鈴ちゃんのサポートをするために、一役買おうじゃない。俺は身振り手振りで、鈴ちゃんにそこへ居てくれと伝える。

「ん？黒乃、もう用事は済んで……って、な、何で引つ張つて……!？」

「あく……なるほどな、男前だよ……黒乃って。」

「黒乃……アンタ……。」

俺は離れた場所に居るイッチーに近づくと、少し強引に鈴ちゃんの前まで連行した。イッチーは訳の解から無さそうな様子だったが、鈴ちゃんと弾くんは事情を察したらしい。そして鈴ちゃんの目の前でイッチーを解放すると、鈴ちゃんの背中を少し押して2人の距離を縮める。

「なんだ鈴。今度は俺に何か話か？」

「え、その……くつ、黒乃……って、逃げんじやないわよーっ!」

弾くんが俺を男前と称したついでに、俺は振り返らずにサムズアップを見せてクールに立ち去つた。フライト時間までもう少し……最後の最後は、イッチーと2人きりが理想だろう。イッチーと交代するように弾くんに近い近づけば、俺をハイタッチて出迎える。俺達の手がぶつかり合う音が、パチンと空港内に響く。

それからしばらく、2人の様子を見守つた。タイミング的に、私の酢豚を毎日食べて

くれるって質問をイッチーに……あれ？もしかして、後にケンカの火種になる事をしちゃってないかな。……絶対そうだ！ああ、どうしよう……いやでも、鈴ちゃんのプロポーズ級の告白だし……邪魔するのは……。

『皆様、大変長らくお待たせしました。国際線中国行の飛行機にお乗りの方は、搭乗ゲートまで——』

「おつ、時間だな……。最後になんか言つとかないと。行こうぜ、黒乃。」

タイミングが良いのか悪いのか、鈴ちゃんが乗る飛行機の搭乗案内がアナウンスされた。それを機に、弾くんと2人して鈴ちゃん達の元へ近づく。近づいてみて解つたけど、鈴ちゃんの顔は真っ赤に染まっていた。……ダメみたいですね。やつちやつたものはしようがない……イッチー、すまんけど未来で鈴ちゃんにぶたれてくれい。

「お別れね……。アタシ、皆に会えて本当に良かった。」

「なくに言つてんだ。もう2度と会えないんじゃないやねえんだからよ。でもま、楽しかったぜ……鈴！」

「鈴、弾の言う通りだ。絶対にまた会おう。それで、またこの4人で遊ぶ……だろ？」

「……………」

「アンタ達……。うん、そうね！また会いましょう！」

鈴ちゃんは涙腺にきたのか、目元を擦るような仕草を見せた。しかし、次の瞬間には

満面の笑みを見せてくれる。それは無理してとかじゃなく、心からの笑顔だと自然に伝わってくる。良かった良かった……雨降れば地固まるって奴かな。1人で安心していると、鈴ちゃんは元気に搭乗ゲートまで向かう。

「それじゃ、またね！あ、そうだ……黒乃、アタシ……負けないからね！」

本当の最後に、鈴ちゃんはそんな言葉を残してゲートをくぐって行つた。負けないって、何の事だろうか。うくん……あつ、もしかするとISに関する事かも。アタシも中国でISに乗るから、黒乃には負けない……つて意味かな。困つたな、そんな事を言われましても……ガンガンいこうぜな甲龍とはなるべく戦いたくないんだけど……。

「黒乃、鈴と何か勝負してたのか？」

「お前死ねよ。」

「いきなりなんだ!？」

「帰ろうぜ、黒乃。あつ、俺んちで飯食つてくか？」

「おい、待てよ弾！」

イッチーが俺にそう問いかけてきたのに対して、弾くんは簡潔に死ねと述べる。……？今の質問で、弾くんはなんでイッチーに死ねって言ったんだろう。それは良いか、とにかく……弾くんの誘いに乗るとしよう。俺は首を縦に振ると、弾くんの背中を追いかける。少し遅れて、イッチーは騒ぎながら歩き始めた。



「アタシ、中国に帰る事になったから。」

「は……？はあ!？」

かなり突然だけれど、アタシは3人に対してそう告げた。こうやっていきなりじゃないと、本当はもつと前に解っていた事なのに……言えなかつたから。でも、この3人だけに知っておいてほしかつた。だって3人は、アタシの大切な友達だから。驚かせたのは悪いと思うけど、その後弾におたまが飛んできたのはアタシのせいじゃない。

「あくつと、ほ……本当なのか？」

「こんな事で嘘ついてどうすんのよ。アタシだって、嘘だつたら良かつたつての……。」

「い、いったい何時だ？つてか、どうしてなんだよ!？」

「春休みに、向こうに帰ると思う。原因は、まあ……いろいろ……。」

帰らないといけない理由なんて、人様に言えた事じゃないもん。アタシは思わず、意味ありげに呟いてしまう。アタシの様子からして、聞くべきじゃないって思ってくれたみたい。それまで動揺していた弾は、少しだけ大人しくなつた。アタシとしては嬉しいけれど……。

「いろいろつてお前……。……そっか、寂しくなっちゃうよ。」

「なんか俺達、常に4人組だったしな。」

「アンタ達、気持ちは嬉しいけどしんみりし過ぎよ。ホラ、黒乃を見習つて。」

アタシの事で、あんまり気落ちしてほしくはないものね……。それに、そんな事を言われると……。アタシの方がもつと気落ちしちゃう。アタシは、皆の前では明るく元気な凰。鈴音でいたいから……。だからこそアタシは、黒乃へと話題を逸らした。だって、全然食事の手が止まる気配がないし。

黒乃だって、悲しく思つてくれてる……。わよね？……。勝手にそう解釈しておくとして、それでも黒乃の調子はいつとも変わつてない。それはきつと、アタシへの最大限の配慮のはずだから。一夏や弾も、黒乃に感心したみたいなの台詞を呟く。

「そうだよな、黒乃を見習おうぜ……。弾。」

「おう。なんつーか……。いつも通りに過ごして、いつも通りに鈴を送り出してやるよ。」

「は？なんでもちよつと上から目線なのよ。」

「いや待て、そんなつもりじゃねーよ！」

弾の発言に、アタシはすぐさま反応してみせた。もちろんアタシの言葉は冗談。こうやって、無理にでもいつもの感じにもつていかないとね……。皆と一緒にこうやってると、余計な事とか考えないで済むし。皆もきつと、そう思つてるはずだもん……。

一緒に行動する事の多いアタシ達だったけど、この日以来はますますその機会は増えた。そんなに優しくされると、逆に帰りたくなくなるんだけどなあ。だけど、皆の厚意だしね……受け取っておかないと。そうして気がつけば、アタシが帰国する日が来てしまう。

「アンタ達暇よねえ、わざわざ来てくれなくなっちゃって良かったのに。」

「嘘つけ、絶対嬉しいだろ。特にいち……アダツ！」

「蹴るわよ？」

「蹴ってから言うな！」

「2人とも落ち着けて、他の人に迷惑だぞ。」

見送りに来てくれるとは思っていたけど、いざ来られたらアタシの口から出るのは憎まれ口だった。確かにその言葉は弾の言った通りに嘘。だけど余計な事を口走ろうとしていた弾は、お尻を蹴っておいた……軽くだけどね。ま、これもいつも通りのやり取りだし……結果オーライなんじゃないかしら。

そう思いながら皆で笑い合っていると、アタシの眼には黒乃が映った。黒乃は……じいっと一夏の事を見ている。……こうやってふとした時、黒乃は一夏を見ている事が多い。それが何を意味するか、アタシには当然解る。だって、一夏の事が好きだから……。「ねえ黒乃、少し2人で話せない？」

「そういう事なら、俺達は少し離れてるよ。行くぞ、弾。」

「いや、盗み聞きとかはしねーからな……?」

最後かも知れないから、アタシはしつかり聞いておきたかった。多分だけど、黒乃はアタシに遠慮してるんだと思う。黒乃の事だから、こんな自分は一夏にふさわしくないと考えているかも。アタシとしては、遠慮なんかしてほしくは無い。一夏が好きなら好きだって言つてほしかった。

「黒乃つて、一夏の事……好き?」

一夏と弾が離れたところで、アタシはストレートに黒乃へと質問をぶつけた。すると黒乃は、ピタリと……まるで時間が止まったかのように固まってしまふ。いつもだったら、簡単な質問ならすぐに首を振つて応えてくれる。すぐに行動を示さないと言う事は、アタシにとつてはそれが答えであるのは明白だった。

黒乃もきつと、一夏の事が好き。沢山の時間を重ねて、一夏と黒乃は互いに支え合う関係だつてアタシは思う。それが今は、家族としてつてだけの話で……。正直なところ、黒乃がその気になつちやえば……勝てる気なんて微塵もない。それでも、もし一夏を奪い合うのならあくまで同じステージに立っていたい。

「……………」

「……………そう。黒乃がそう言うんだつたら、それで良いわよ。ごめんね、最後なのに……変

な事を聞いちやつて。」

かなり長い間考え込んでから、黒乃は首を横に振った。それでも、認めてくれないのね……。黒乃もかなり頑固だもんね。もつと前から言っていれば、認めさせることができたかな。後悔先に立たずって言うか、まさか帰国する事になるとは思つて無かつたものね……。しようがないけど、諦めるしかないか……。

「ん？黒乃、もう用事は済んで……って、な、何で引つ張つて……!？」

「あゝ……なるほどな、男前だよ……黒乃つて。」

「黒乃……アンタ……。」

黒乃が掌を見せて、ここに居てくれとアタシにジエスチャーを見せた。すると黒乃は振り返つて2人の元へと近づく。そしてそのまま一夏を引つ張つて、アタシの元まで連れて来ようとしちやつてる。自分の感情を押し殺してでも、アタシにチャンスをくれようとするなんて……馬鹿よ、アンタ……。

「なんだ鈴。今度は俺に何か話か？」

「え、その……くつ、黒乃……って、逃げんじやないわよーっ！」

気が付けば、一夏はアタシの目の前だ。あろう事か黒乃は、妙にアタシたちの距離を物理的にも近づける。そして黒乃の去り際には、親指を立てて行くもんだから……アタシはウガーツと叫ぶしかない。お、落ち着きなさい……アタシ。せつかく黒乃がくれた

チャンスなんだから、しつかりやらないと申し訳が立たないわ。

「鈴、なんか言い辛い事なら別に無理して——」

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ！アタシだつて予想外なんだから！」

こいつ、雰囲気からして察しなさいよ……！何も解つてないみたいな顔して、ほんつと腹立つ！……けど、その何倍も……好きなんだろうなあ。……つて、アタシは何を恥ずかしい事を言つてんのよ！で、でも……ハッキリ言わないと、この唐変木には伝わらないわよね……。

「あ、あのね、そう……す、酢豚！アタシが料理上手になつたら……い、一夏に毎日アタシの酢豚を食べて欲しいの！」

「本当か？それは嬉しいな。約束だけ、鈴。」

解つてない……絶対に解つてない！で、でもまあ……こんなモンでいいわよね、うん……。ちゃんと好きつて言えなかつたアタシも悪いし。でも、単なる告白より恥ずかしい事を言つた気がするわ……。冷静になつたら、日本で言う毎日味噌汁を……つて奴になつちやつてるじゃない……！

『皆様、大変長らくお待たせしました。国際線中国行の飛行機にお乗りの方は、搭乗ゲートまで——』

アタシが一人で悶絶していると、搭乗のアナウンスが鳴り響いた。我に返ると、黒乃

と弾がこつちに歩み寄つて来る。流石に飛行機に乗る寸前なら、そうなるわよね……。アタシも、皆に見送られる方が嬉しいもの。だけど、すぐに調子を取り戻さないと……。こんな顔してたら、弾にからかわれちゃうわ。

「お別れね……。アタシ、皆に会えて本当に良かった。」

「なぐに言つてんだ。もう2度と会えないんじゃないからよ。でもま、楽しかったぜ……。鈴！」

「鈴、弾の言う通りだ。絶対にまた会おう。それで、またこの4人で遊ぶ……。だろ？」

「……。……。」

「アンタ達……。うん、そうね！また会いましょう！」

弾のクセに、たまにはいい事を言うわね。確かにアタシは、どこか自分でもう会えないって思つちやっていたかも。日本や中国が滅ぶわけでも無いんだし、休みとか見つけてこつちに来ればいいわよね。まあ……。アタシの財布が寂しくならない程度にしないと。

それは良いけれど、早くゲートに向かつてしまおう。いつまでもこうしてたら……。本当に行けなくなっちゃいそうだわ。アタシは走ってゲートまで振り返らずに行こう……。……と思つたけど、黒乃に1つ言つておかないとならない事がある。アタシは振り返ると、遠くにいる黒乃に呼びかけた。

「それじゃ、またねーあ、そうだ……黒乃、アタシ……負けなからー」

イタズラっぽくそう言えば、黒乃が少し表情を変えた気がした。アンタも少しは危機感を覚えないと、本当にアタシが勝ちちゃうわよ。どうせ一夏を取られるんなら、アンタなら安心して任せられるもん。アタシはニコツと黒乃に微笑みかけると、今度こそゲートをくぐった。

日本に住んだのは3年くらいかなあ……？長いようで短い時間だったけど、一夏、黒乃、そして弾……他にも多くの人達に出会えて、本当に良かった。中国に帰ったら、アタシも黒乃みたいにISの勉強をして見ようかしら。そしていつか日本のIS学園に通って、黒乃のライバルになる……。

うん、良いわね……それ。また日本に居られるし、IS選手になればアタシの年でもお金を稼げるだろうし……一石二鳥じゃん。そうと決まれば、お母さんに頼んでみないと。フフフ……黒乃、待ってなさいよ……。色んな意味で、本当にアンタのライバルになってやるんだから！

第17話・表

「おい、丹波ちゃん。」

「あ、先輩……御用ですか？」

「今年度の選考会の参加者データ、もう纏めちゃってる？」

「それなら今とりかかっているところです。」

とあるIS乗り訓練施設に事務所にて、丹波たんば陽はるはパソコンへ向かってデスクワーク

をこなしていた。仕事内容としては、本人が言っているように選考会へと出場する者のデータを入力していたところだ。では選考会とは何か。それは、年に1回行われる代表候補生を選考する会である。

参加資格としては、とにかくISにおいて優秀な成績を修めているか否か。仮に成績優秀者だとしても、参加者全員が不合格になるような狭き門だ。丹波とその先輩にあたる三國みくに深夜子みよこは、今年の試験官でもあったりする。試験内容は毎年変わらず、制限時間内にどれだけ実力を示せるか……だ。

「今年の参加者、緊急で1人増えちゃったんだけど……。」

「そうですか、入力し終わる前で良かったです。それなら……今年は全部で8人ですか

?豊作ですnee。」

「そうね。それで、これ……資料。」

「ありがとうございます。え〜つと、藤堂 黒乃さん……?公式戦出場経験なし……公式大会出場経験なし……つて、これ……せ、先輩!」

前述したとおりに、参加資格としては何かしら成績を修めてる者だ。藤堂 黒乃を除いた7人は、入賞経験が当たり前のようにある。それなのに公式戦に出た事すらない少女が選考会へ出るとなると、丹波はすぐさまにコネを疑った。真面目な性格である彼女は、思わず立ち上がって三國へと抗議を始めようとするが……。

「言いたい事は解るけど、とりあえず落ち着いてね。」

「だって、不正ですよ……不正!どなたの推薦か知りませんが、私は納得——」

「ああ、もう……他言無用でお願いよ?誰の推薦かって言うのと、あの織斑 千冬なの。」

「え……?ええええええ!あ、あのブリュ……むごっ!」

「お約束か!?他言無用つて言ったでしょ……!」

驚きのあまりに、丹波は大声で叫びそうになつてしまった。すかさず三國が丹波の口元押さえて、なんとか叫び声だけで済ませた……が。事務所は2人以外にも多くの女性が入座している。丹波は視線が集中しているのに気付いて、咳払いをしながら座つた。そして三國と同じように声を潜めると、話を続けた。

「そ、それ本当ですか？」

「ええ、間違いないわ。……本人から電話あったし。」

「うわ、先輩羨まし……じゃ無くて、だ……誰だろうと不正は不正です。」

「う、でもさあ……それこそあのブリュンヒルデよ？いくら弟子が可愛いからって、単純に参加なんかさせるかしら。」

三國の言葉に、丹波はなんとなく納得してしまう。もちろんだがこの2人は、千冬と特に繋がりがあられるわけでもない。だが、人となりは把握できてしまうのが千冬の凄い所だろう。インタビュー等の様子だけでも、正々堂々とした人間であると伝わるのは素晴らしい事だ。

「でしたら、いわゆる秘蔵っ子って奴なんですかね？」

「あく……それありそう。満を持って、いきなり選考会……って事かしら。」

「……参加資格は、十分にあるって認識で良いのでしょうか。」

「多分ね……。もしかすると、他の7人をぶっちぎる実力かもね。」

丹波が不正と表現したのは、参加資格が無いのに権力で資格を得させる事にある。もし黒乃がそれ相応の実力者ならば、またそれは話が変わってくる。胸中ではモヤモヤしているものの、取りあえず妥協する事にしたい。声の音量を元に戻すと、小さな溜息を吐きながら言う。

「そういう事なら、彼女も参加と言う事で。」

「うん、よろしくね。あ、そうそう……その子、失語症らしいのよ。だから、いろいろ気遣ってあげてね。」

「はい……はい？あの、先輩……。私って、既に対戦相手は決まってるんですけど。」
「飛び入り参加だからさ、今から試験官捜してると間に合わないのよ。余所含めて丹波ちゃんが一番下っ端なんだから、まあ頑張つて。」

「は、はあ……解かりました……。」

試験官は、様々なIS乗り教育施設から1〜2人選出される。その年によつてまちまちだが、参加者1人に対して試験官が1人割り当てられるシステムだ。丹波も三國も対戦相手は決まっている……が、サプライズゲストの登場により調整が間に合わなかったのだ。そのため、丹波が2人相手をする運びになったらしい。

なんとなく理不尽だと思いつつも、ブリュンヒルデの弟子とまみえるのは貴重な体験だと自分に喝を入れた。とにかく、三國の用事はそれで済んだらしい。丹波は再びパソコンと向かい合つて、三國も他に用事があるのか事務所を去つて行つた。



「丹波ちゃん、調子どう？」

「すこぶる良いですよ、先輩！」

「元氣だね。2戦目だけど、それなら問題なさそうね。」

「ええ、1戦目の子は……まあ、単純にまだまだでしたから。」

そうしてやって来た選考会当日。試合前のピットには、出撃準備を始めている丹波とその調子を見に来た三國が居た。既に1人目との模擬戦を終えていた丹波だったが、相手にした少女の実力は不足していたようだ。そのおかげか、余力は十分といったところだろう。

「次はブリュンヒルデの弟子だし、出し惜しみはしない方が良いかも。」

「私はいつだって本氣ですよ。それじゃ先輩、行つてきますね。」

「うん、氣を付けて。」

黒乃の準備はまだだが、試験官としては先に出ておく義務がある。打鉄へと乗った丹波は、カタパルトから勢いよくアリーナへと飛び出た。それから数秒後といったところだろうか。向こう側のピットから、同じく打鉄を装着した黒乃が現れる。

その表情は凝り固まっているが、同性である丹波ですら見惚れてしまいそうなほど美しい。その凝り固まった表情こそが、また黒乃の美しさを際立たせている部分もあるのかも知れない。丹波はまるで、精巧に作られた人形のような印象を受けた。

「それでは、ルールの説明をします。試合開始から制限時間5分で、私と模擬戦をしても
らいます。勝敗は特に関係ありません、5分間どれだけ戦えるかを見ますので。……よ
ろしいですか?」

「……………」

「じゃっ、所定の位置にお願います。」

ハツと我に返った丹波は、この選考会における特殊なルールについて説明を始めた。
それはとてもシンプルな物で、要は短い時間でどれだけの実力を披露できるかに尽き
る。たった5分という制限時間を宣告されても、黒乃は眉一つ動かさずに首を縦へと
振った。それを了解の合図とした丹波は、所定の位置へと着くよう指示をする。

黒乃はとても大人しい物で、速やかに移動して指示通りの場所へと浮く。もちろん誰
しもが黙って行動するだろうが、やはり黒乃の醸し出す雰囲気は何処か他とは違う。そ
れこそ何か……王たる風格とでも言えばいいのだろうか?丹波は、そんな感覚を黒乃か
ら察知した。

『試合開始!』

2人が開始位置へと着くや否や、即試合開始のブザーが鳴った。不意打ち気味である
と参加者は思う事だろう。それもそのはず、即ブザーは意図的なものなのだから。代表
候補生たるもの、気に緩みなどは一切許されない。不測の事態でも対処できるような冷

静さを判断するためのものだ。

丹波は試験官である。フライング気味のブザーの件については、知っていて当然の事だ。つまり丹波は、大きなアドバンテージを得ている。すぐさま丹波は打鉄の近接ブレードである葵を抜刀。本人としては先制攻撃を与えるくらいのつもりでいたが、黒乃も同じく既に葵を抜刀していた。

「……………っ！」

「これは、やりますね……………」

丹波は思わず、たった一言で様々な意味合いのこもった賞賛の言葉を送った。やはり何と言っても、動揺の1欠片も見せないその冷静さだ。現に丹波が1人目に模擬戦をした少女は、突然のブザーに慌てふためいていた。だが黒乃は、バツチリと丹波の葵に葵をぶつける事で攻撃を防いでいる。

そして丹波は、刃を合わせただけで黒乃が剣に精通しているであろう事を察した。それまでの一連の動作が、綺麗過ぎるくらいだ。抜刀、構え、振り……その1つ1つが、黒乃の剣に対する経験則を知らしめる。しかし、これはあくまでIS同士での戦いだ。理は丹波に傾いている。

「動きが遅いですよー！」

これは剣道でなく、IS同士の戦いだ……とでも言いたげに、丹波は葵を前に押し出

して黒乃とのわずかな間を作った。そこを逃さずに、丹波は葵の柄で思い切り黒乃の顔を殴る。絶対防御があるとはいえ条件反射的に凄む者は多い。丹波は黒乃もそうだろうと、続けて突きを放った。

「そっ！」

「……………」

「なるほど、これは躲されましたか……。」

しかし、丹波の予想に反して黒乃はビクともしていない。ギリギリではあったが、突きは見事としか言いようがない反応で横へと回避された。すると、黒乃は一気に攻勢へと転じる。これまた綺麗な連続斬りが、無防備な状態の丹波を襲う。そこは不恰好ながらも葵で防ぐが、いずれボロが露呈してしまった。

「キヤアツ!?接近戦では、こちらが不利ですか……ならー!」

黒乃は見解通りに、剣の扱いに長けている。丹波の防御も並のIS乗り、とりわけ黒乃と同世代ならば切り崩せなかつたかもしれない。丹波は単純な近接戦闘ならば、黒乃の方が上であるとすぐさま認めた。するとすぐさま葵の攻撃範囲から大きく離脱して、所持武装を焔備へと切り替える。

「これでっ……………」

丹波は落ち着いて狙いを定めると、黒乃へと向けて射撃を開始した。すると意外な事

に、黒乃は棒立ちのままだ。焰備の放った弾丸は、全弾命中といっても過言では無い。近接戦闘が素晴らしかっただけに、丹波は何処か変な感覚が胸を過る。失望……というのは言い過ぎだが、ニュアンスとしてはそれに近いのかも知れない。

「足を止めるようではまだまだですね！」

その言葉は挑発などではなく、喝を入れると言った方が正しい。黒乃を含めて、まだまだ発揮できる実力は大いにある。黒乃は丹波の言葉に触発されたのか、次なる行動を開始した。しかし……特に考えらしい考えは見えなかった。なぜなら、黒乃は打鉄の盾に隠れてただただ真っ直ぐ突っ込んでくるだけだからだ。

「玉碎覚悟ですか……？それも評価には値しませんよ！」

丹波は、かまわず黒乃へと射撃を継続した。射線上にいる黒乃の打鉄は、まるで射的にでもなっているかのようだ。それでも黒乃は、気持ち悪いくらいに接近を試みてくる。ただ、ISの操作技術は上手であった。丹波はゆっくりと退き撃ちをしていたが、既に相当な距離を詰められてしまっていたのがその証拠だろう。

（流石に近すぎますね。ですがここは、回り込んで身体に弾丸を……。）

ここで背を向けて距離を取るのとは、とてつもなく簡単な事だ。しかし、当てられる内に当てておけ……というのが丹波の基本戦術であった。そこでゆっくりとした後退から、旋回運動へと移行した……その瞬間の事だ。黒乃は無茶苦茶な制動で反転し、丹波

を正面へと捉えてしまうのではないか。黒乃が真正面に見えた時にはもう遅い、丹波はこの瞬間に始めから今の状況を作る事こそが目的であると理解した。

「しまつ……くつ！」

「……………」

「キヤアアア!?!」

勢いそのままに打鉄の盾を利用したタツクルを喰らったかと思えば、怒涛の連続斬りが丹波の身体に入つてゆく。開いた間を一瞬にして詰め、更には的確に絶対防御を発動させる部位を狙う余裕まである。丹波は黒乃の攻撃を喰らっている最中に、驚きを隠せないでいた。

「お返しです……つて、ええ?!

そこで、落ち着いて反撃を。そう思つて黒乃への射撃を再開すると、またしても丹波は驚かされる。なんと黒乃は、盾すら構えずに弾丸を受けつつ突っ込んでくるのではないか。一見無謀とも取れるこの行動は、丹波の手が数瞬だけ止まる事で成功を意味していると言えよう。

「……………」

「なつ、このタイミングで投擲……!?!」

この先の黒乃の攻撃としては、動揺の隙を突いて接近、そして連続斬りで削り切る

……と丹波は予想していた。しかし斜め上の選択肢というか、きつとこんなのは誰も予想できないはずだ。黒乃は丹波との距離が詰まり切らない内に、全力で葵を投げ飛ばしてきた。葵はブンブンと空を裂きながら、縦回転で丹波に迫る。

(なんのつもりかは知りませんが……！)

「……………」

「……………へ!?!」

単純な横移動で、難なく葵は回避した。……と、丹波は葵が自身の真横に来る辺りまでそう思っていた。突如発砲音が響いたかと思えば、葵が上へと弾き飛ばされたのだ。思わず丹波が上昇する葵を眺めると、それと同時に視界へは焰備を投げ捨て葵を引っ掴む黒乃の姿が映った。

(最初の無謀な行動から……ここまで計算して!?)

丹波の脳内には、戦闘そつちのけでそんな考えが過る。最初の行動から数えて、丹波は黒乃に3回連続で驚かされたのだから無理もない。さらに言えば、どれもがそれ相応な技術がなければやってのけられない芸当だ。更に言えば、それを即実行へと移す決断力や度胸……。

驚きと共に、数々の賞賛の言葉が思わず口からこぼれ出てしまいそうなのをグツとこらえる。そうこうしている間に、黒乃は丹波めがけて急降下斬りを繰り出している。も

はや回避は不可能に近い。シールドエネルギーも残るか残らないかの瀬戸際だ。そうなるど丹波は、この一撃は甘んじて受け入れる覚悟を決めた。

『制限時間5分が経過しました。模擬戦を終了して下さい。』

シールドエネルギーが残れば反撃する気が満々だった丹波だが、良い所で試合終了の合図が鳴った。葵の刃は……丹波の頭上でピタリと止まっていった。何の容赦もなく人体最大の急所を狙ってくるあたり……。丹波はわずかながらも戦慄を覚えた。しかし、気を取り直して試験官としての務めを果たす。

「お、お疲れ様でした……。結果は後日に通達されるので、楽しみにしておいて下さいね。」

そう言いながら丹波が右手を差し出すと、少し遅れながらも黒乃はそれに応えた。手を離し次第に、黒乃は深々と礼をしてピットの方へと戻っていった。それを確認した丹波は、小さな溜息を吐いてから同じく自軍ピットへと戻った。そこにはまだ三國が居る事から、試合の様子を見ていた事が窺える。

「お疲れい。いやはや、末恐ろしい子だったわね。」

「はい……そうですね、私、思わず試験そつちのけで熱くなっちゃいました。」

丹波が打鉄の装着を解除すると同時に、三國は飄々とした感じで声をかけた。末恐ろしいというのは、これ以上無いほどに黒乃の事を的確に表現した言葉だろう。三國と向

き合つた丹波は、静かな様子でそれを肯定した。それこそ、制限時間が設けられているのが勿体なく思えるほどに。

「操縦は完璧だし、判断力も良いし、発想も面白い……それに肝も座つてる。客観的視点で見てもたからかな？ 私は途中からブリュンヒルデに見えたもの。」

「あ、言われてみればそうかもですね……物怖じしない部分は特に。ですが……。」

「ええ、あの子は単なる模倣はしてない。うくん、良い弟子を育ててるわあ……。」

2人は自らの仕事もそっちのけで、黒乃に対する意見交換で大いに盛り上がった。試験官が1人の参加者の事でこんなにも話題が弾むのは、異例の事態とも言えるのかも知れない。やがて話題は、黒乃の合否に関してまで及んでしまう。そこに関しては、2人の意見は完璧に一致していた。

「ま、なにはともあれ。あの子は間違いなく——」

「合格、ですよね。」

「あれで通すなつて方が可笑しいわよ。だけどそれなら、丹波ちゃんの言つた通りに豊作なこと。」

「と、言いますと？」

「うん、私が模擬戦した更識つて子なんだけどね……あの子もなかなかだったわよ。」

「そうですか。それは、切磋琢磨し合える仲になつてほしいですね。」

そうあれば日本のIS業界は明るい、丹波はにこやかな笑みで両手を合わせながら言う。子供の未来ある可能性を見出す事に喜びを感じる丹波は、まるで自分の事のように嬉しそうだ。三國としては、純粋な心を持った後輩が可愛くて仕方が無いらしい。

「よっし、丹波ちゃん……飲みに行こうか！私の奢り！」

「ええ……？まだ夕方ですし、それに御馳走になるのは悪いですよ……。」

「固い事言わないの。それじゃ、片付けが終わり次第集合ね。」

「ああ……先輩！」

三國は無も言わずに、一方的に約束を取り決め去って行った。そんな三國に、仕方が無いなあ……と言いつつ付き合っただけなのが丹波 陽という女性である。今度大きな溜息を吐くと、それと同じほどの音量でよっしと気合を入れ直す。なんやかんやで、この後にお酒が飲める事を糧に仕事へ励む丹波であった……。

第17話・裏

『黒乃、選考会に出てみる気はないか。』

遙か遠くのドイツの地から日本へいる俺へ、ちー姉からのテレビ電話が届いた。誘拐事件に際して、俺とイツチーの居場所を提供する見返りとしてドイツでの教官を果たしているのである。ドイツと日本の時差は8時間……向こうは深夜だろうに、こつちの都合に合わせてくれたのかな。

『強制はしないが、出るつもりがあるなら私から推薦しよう。私が言えば通じるはずだ。』

おお、凄まじい程の自信だな。まあ……この世界におけるちー姉の地位と云ったら、それはもう絶対的とも表現できる。だとすると、せつかくだから出るだけ出てみようかなあ。選考会となると、何かしらISで戦う事になるのだろうけど……。

いわゆる先行投資って奴だ。出るだけ出ておけば、何かしら今後有利に働いてくれるかも知れない。例えば、IS学園の受験とかね。いくら試験が模擬戦のみとはいえ、履歴書にそういうのが載れば印象も違うはず。俺は、ちー姉の言葉に強く領いた。

『そうか、解った。細かい事は私と昴に任せろ。黒乃は何の心配もなくなっている。』

「……………」

『それではな。一夏の世話は頼んだぞ。』

そう言うのと、ちー姉は携帯の通話を切った。イツチーの世話ねえ……心配する事はな
いと思うけど。だって、イツチーってばもはや主夫だもん。至れり尽くせりって言う
か、大概の事はできてしまう中学生男子ってハイスペックですわ。

ところで話は変わるけど……センコウカイってなんの選考会……？いや、ISに關係
あるつてのは解るが……。いったい何を考えて選ぶ会なかが、皆目見当がつかない。
ちー姉の口ぶりからするに、知っていて当たり前みたいな感じだったけど……俺には常
識は通じんぞ！……威張って言う事じゃあないね。真剣に考えてみるとすれば、そうだ
な……国同士の対抗戦に出るメンバーを決めるとか？

サッカーとかでもあるよね、アンダー18とか23とか……。実際のところ、ISの
団体戦とかも普通にテレビで放映される世界観ですし。じゃああれかな、候補生未満の
IS乗りが対象か。そうすると、まさに俺はビンゴなわけじゃん。……嫌だなあ……メ
ンバーにはされたくないものだ。

まあ、そんなに心配しなくても大丈夫か。どうせ俺が全力でやったって合格の札が上
がるはずも無し。そもそも選考会自体に出るのも本当は乗り気じゃないけど、せつかく
ちー姉が誘ってくれたつてもある。やっぱり出るだけ出て、とつとと不合格の通知を

もらうでしょう。

そうして数日後、選考会当日がやってきた。送迎に關しては、今回も昴姐さんがしてくれた。そして昴姐さんに連れて来られたのは、単なる訓練施設って感じでは無く……それこそ試験用みたいな作りの建物だ。もしかして、ここが後のIS学園の試験会場だったりして。

「係員に事情は通してあるから、安心して良いわよ。んじゃ、頑張りな。アタシは連れの席で応援してるから。」

そう言いながら姐さんは、俺の背中を少し強めに叩いた。姐さんのお言葉は有難いが、頑張る気がさらさらないせいかな罪悪感が……。はあ……。一応は真剣にやってみよう。さて、係員の人に参加願いを渡せばいいんだっけ。昴姐さんが書いておいてくれたのか、中身をろくに確認しちやいないけどね。

「……………」

「あら、藤堂さん……貴女がそうなんですわね。とりあえず、あちらの更衣室へどうぞ。順番が来ましたらアナウンスイたしますので、それまで待機して下さい。」

え〜つと、更衣室更衣室……。矢印の書いてある看板に従って、更衣室の方まで歩いてゆく。しばらく入り組んだ場所を進むと、更衣室とハッキリ書かれた部屋の扉を見つけた。ゆっくり静かに足を踏み入れると、既に中に居た数人がこちらを見てくる。……

この時点で、もの凄く帰りたい。

だがそれも一瞬の事で、各々イメージトレーニング等をして自分の世界へと入り込む。真剣であればあるほど、緊張も増していくよね……解かる解かる。解るけど、やっぱり俺はそうなれないなあ。とつとつとISスーツに着替えて、俺の番までブーツとしておくか……。

着替え終わって、ベンチに座って待つているんだが……視線を感じるな。もしかして、余裕ぶつてるとか思われてるかも。今から誰かと戦うって意味なら、余裕なんて全くないですぜい。不合格でもいいやつて思ってるのは、余裕があるのとは違いますからね。ま、気にしない気にしない……。

『藤堂 黒乃さん、藤堂 黒乃さん。準備が整いましたので、第1ピットまでお越しください。』

……ハツ!?何、俺の番……?いやあ、待たされた待たされた。つて言うかも……最後の1人じゃん。ほんのわずかだけど、転寝する間があつたじゃないか。俺は背伸びをして体をほぐすと、立ち上がって指示された場所を目指した。迷子にならないように注意してつと……。

第1ピットとやらに辿り着いてみれば、数人のスタッフが忙しそうに動いていた。打鉄とラファールを選べと聞かれるが、当然ながら打鉄を選択。その後は機体の調整とか

を大急ぎでさせられて、そのまま出撃させられる。最後の1人なのに、何でこんなに急かされんとアカンのや……。

若干心の中で文句を言いつつ、カタパルトから飛び出た。すると相手は……大人？え、マジ……？俺はてつきり、同じく選考会の参加者との模擬戦かと思つたのに……。打鉄を装着した女性の年齢は、見た限りでは完全に20代だ。つまり、それだけ経験豊富なわけで……。マジかあ……ヤだなあ……。

「それでは、ルールの説明をします。試合開始から制限時間5分で、私と模擬戦をしてもらいます。勝敗は特に関係ありません、5分間どれだけ戦えるかを見ますので。……よろしいですか？」

「……………」

「それでは、所定の位置にお願ひします。」

よろしいも何も、やらなきゃならないならしようがないじゃないですか（半ギレ）。とりあえず領いて応答してから、開始位置へと移動を開始した。憂鬱な気分が増しているせいか、反比例するかのようによくやる気が削がれてゆく。それじゃ、開始の合図を待ちましようか……。

『試合開始！』

待ちましようかつつてんでしょ！（全ギレ）。心の準備も出来ていないのに、開始位

置に着いた時点で即ブザーとか……何の嫌がらせだよ。お姉さんも葵を構えて向かって来てるし……でえい！ やつてやるぜ！ 俺も葵を構えようと、お姉さんに向けて真っ直ぐ向かう。そして、葵と葵の刃が触れ合った。

「……………っ！」

「これは、やりますね……………」

ひ、ひいいいい……………刀の刃が、こんな目の前にい……………い、いや……………生身で銃を乱射されたよりは怖くない。ドイツでの経験は、ちよつぴり俺を強くしてくれた……………気がする！ とにかく、いつまでも鏢迫り合いをしていたって仕方が無い。剣道経験者である利点を生かして、反撃に転じ……………。

「動きが遅いですよー！」

——— ようと思っていたら、お姉さんの方が先出しだった。腕を前に押し出すようにして、少し後ろへ後退させられる。その間を逃さずに、お姉さんは柄の底で俺の顔面を殴ってきた。痛い！……………いや、落ち着け！ 痛くは無いでしょうが。顔面を背けてる間にも、お姉さんの追撃が……………。

「そっ！！」

「……………っ！」

「なるほど、これは躲されましたか……………」

あ、危なかった……。お姉さんが更に突きを放ってくるもんだから、慌てて真横にスラストを吹かして緊急離脱を図る。おかげで、葵の刃は腕の装甲を削る程度で終わった。まあ……。当たっちゃってはいるけれど、細かい事を気にしてたら長生きしない。となれば……。反撃じゃコラア！

「くっ！」

我が奥義・とにかく滅多切りを味わうが良い！だが太刀筋は綺麗ゆえ、一概に適当な攻撃とは言い難いな。事実お姉さんは、防戦一方なのか反撃してこない。よしっ、このまま押し切って……。その胴体をバツサリ斬らせていただく！重い一振りをお姉さんの葵目がけて喰らわせ、完全に無防備な状態に出来た。そこを狙って……。斬る！

「キヤアッ!?接近戦では、こちらが不利ですか……。ならー！」

お姉さんの身体に葵を深く斬り入れられたのは良い。けれどお姉さんは、不利と判断するや否や猛スピードで後退していった。うわーっ!?遠距離は……。銃撃は勘弁してえ！なんていう俺の思惑とは裏腹に、お姉さんはとつくの昔にロングレンジ以外の何物でもない場所に居る。

「これでっ……。っ！」

遠くからでも五月蠅いくらいの発砲音が、お姉さんの持つてる打鉄のアサルトライフル……。ええと、焔備から放たれる。同時に弾丸も迫ってくる訳ですが、そんなのハイ

パーセンサーがあつたつて視認できんよ！距離が開いているだけ威力は落ちるものの、バンバン絶対防御が発動する場所に当たる。

「足を止めるようではまだまだですぬ！」

だつて怖いんだもの！でも、そう言われたら流石の俺でも悔しいぞ。銃が使えないんだから、とにかく無理やりにも接近するしかない。俺はシールドータックルを繰り出すような体勢をとつて、打鉄の防御シールドを前面に出す。そのまま……突っ込む！

「玉碎覚悟ですか……？それも評価には値しませんよ！」

もちろんだが、お姉さんは俺に銃撃を続ける。くうっ……シールドに弾がガンガン当たる音が怖い！だけれど運がいいぞ……お姉さんは比較的にゆつくりと移動しながら射撃を続けている。この分だったら、いつか追いつける。まあそれも、近づけば離れられるんだろう……けど。

おお……ここまで狙い通りに行動してもらえると、なんだか怖くなつてくるな……。けれど、コレを逃しちや本末転倒だ。俺の正面から横へ回り込むタイミングを見計らつて、俺は急激に方向転換をした。そう……今までは距離を取られる逃げ方をされたけど、回り込む動きはそう距離は変わらない！

「しまっ……くっっ！」

（まだまだあー！）

「キヤアアアア!？」

そのままシールドを使ってチャージタックルを喰らわせると、お姉さんは派手に吹き飛んだ。お姉さんの体勢が整わない内を狙って、絶対防御の発動する箇所へと連続斬りを浴びせる。そこは経験豊富なお姉さんだけあって、体勢が整い次第に離脱を開始した。その際に射撃を行う所を見るに、このまま止めを刺すつもりですな……。

「お返しです……つて、ええ!？」

もうそんな関係ないもんねーっ! だつて、SE残量的に俺の方が優勢だし! そつちが止めのつもりなら、こつちだつてそうですよお姉さん! 弾丸が生身に当たりまくつて、小便秘りぶりそうだけど……。驚いている今がチャンス! トップスピードで接近して葵を……は……ふあ……ハアツクシヨイ!

うえい……思いきりクシヤミが出た……気を取り直して。このまま接近して、葵で斬りかか……あり? さつきまでしつかり握っていたのに、葵が俺の手元から消え失せている。うくと、何処に……つてどああああ!? ブンブンと空を斬り裂きながら……お姉さんに飛んで行つてるうううう! アレか、クシヤミか!? クシヤミの勢いで変な操作をしちやつたか!?

「なつ、このタイミングで投擲……!？」

そりゃ驚くよね、俺が驚いてるんだからお姉さんは数倍ビックリだよ! だ、だが……

なんとか意表を突く事には成功した。い、いや……むしろ最初からこれが目的だったのだ！アツハツハ！……さて、銃は苦手だけど……焔備に頼るしかない。俺はパススロットから焔備を呼び出すと、お姉さんを狙って乱射した。

「……………へ!？」

ば、馬鹿なああああ!?!? っただけ射撃下手くそだよ……俺！俺が放った弾丸は、吸い込まれるように飛んで行った葵に命中した。当然お姉さんにはダメージがゼロで、葵が天高く舞い上がったただけだ。い、いや……まだだ！予想外な事が連続して、更にお姉さんは困惑している。

俺は怒りと共に焔備を投げ捨てる、進路を葵の方へと切り替えた。舞い上がっている葵を引っ掴むと、そのまま高度を下げてお姉さんに振り下ろす！最高な事に、お姉さんは困惑の影響で対処が遅れているのが見て取れる。よっしやあ！その首……もろたで工藤！

『制限時間5分が経過しました。模擬戦を終了して下さい。』

な、何い!?!とてつもなく良い所で試合終了の合図が鳴って、俺はギリギリのところまで刃を止める。葵の切っ先は、お姉さんの頭に触れるか触れないかの所だ。絶対防御があるから平気とは言え、人の頭を斬りかけて……うおえ！お姉さん斬ったのを思い出して、吐き気が……うっぷ！喉の奥が酸っぱい……。

「お、お疲れ様でした……。結果は後日に通達されるので、楽しみにしておいて下さいね。」

あ……ど、どもつす……。お姉さんが握手を求めて来たので、それにはしつかり答えておいた。結果は……負けみたいなものだな。突っ込み始めた時は優勢だったけど、避けずに当たりまくったのが祟って逆転されてしまっている。でも、全力を出したうえに負けるって理想的じゃん。うんうん、悔しがる必要はありません！

そうと決まればとつと帰ろう。俺はお姉さんに一礼してから、第1ピットを目指してゆつくりと飛ぶ。打鉄を解除して着替えを済ますと、待ち受けていたのは昴姐さんだ。姐さんは無言で俺の頭をガシガシ撫でるけど、別に悔しくないですよ？まあ……姐さんに撫でられるとか貴重だから、大人しく受け取っておこう。



「おつす、来たね黒乃。ホラ、これは選考会の結果だよ。まあ見るまでも無いけど、アンタが自分の眼で確かめなさい。」

選考会から数日後、養成所へと向かうと昴姐さんに茶封筒を渡された。そこには確かに、藤堂 黒乃様と俺宛てである事を主張する文字が書かれている。しかし、とんでも

ない皮肉を昴姐さんに言われたな……。見るまでも無いって、そりや確かに落ちる氣満々だったけどさあ……。

まあ良いか、昴姐さんの言葉も間違つてないんだから。俺は茶封筒を丁寧に開けて、中から3つ折りにしてある紙を取り出す。え〜つと、なになに……拝啓、時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます……つて、別にこの辺りは読まなくても良いか……。飛ばして飛ばして……この辺かな？

えつと、貴女は大変に素晴らしい戦いを見せていただきました。審査の結果、合格と相成りました事をここに記します。つきましては、貴女に専用機を与えると共に日本国代表候補生とする事が決定いたしましたあ!? 選考会つて……代表候補生の選考会いいいい!?

そ、そんな馬鹿な……!?! どうして……俺、負けたじゃん! あ、そうか……だから勝ち負けの関係じゃなくて、あくまで力量を計るタイプの試験内容で……。俺が1人で戦慄していると、昴姐さんが俺の読んでる通知を奪い取った。すると昴姐さんは、何故だか納得の表情を見せる。

「やっぱりこうなったか……。いやあ、なんだかアタシも嬉しくなるな! この話、もちろん受けるでしょ?」

「……………」

「ハハッ、ごめん……聞くまでもなかったわよね。返事はアタシがしておくから、安心しな。あつ、それと千冬にも知らせといたげる。」

なんだってんだ！こんな時に限って、否定も肯定もできやしねえ！違うから昴姐さん、言葉は不要か……的な事ではないですから。そんな嬉々としなくて！俺の良心○がガリガリとすり減ってゆくううう……！ど、どうやら俺は……代表候補生になってしまふ運命から、逃れられないみたいだ……。



「……………」

「社長、少しよろしいですか……って、またその映像を……仕事中は控えてくださいと何度言わせるつもりです。」

「そつちこそ、僕はあくまで代理だって何度言わせるのさ。」

某日、とあるビルの一室でそんなやり取りが行われていた。社長と呼ばれたのは男で、社長を注意したのは女性だ。関係性を見るに、社長とその秘書といったところだろう。男は言葉こそ反論的な内容を呟いたが、その表情はニコニコ……というよりニヤニヤしていて、何を考えているのかが読み取り辛い。

「良く飽きない事ですぬ。」

「飽きないよお。だって、こんな面白い戦い方をする子を始めて見たし。」

男がそうやってパソコンを秘書の方へ向けると、そこには数日前に行われた選考会の記録映像が映し出されていた。面白い戦いと評価しているのは、時間ギリギリの攻防だろう。防衛を捨て突っ込んで来たかと思えば、予想外の近接武器を投擲。更にはそれを狙って射撃を試みせ、連続で意表を突いてきたのだから……。

「彼女、欲しいなあ……。」

「……藤堂氏ですが、どうやら代表候補生に選出されたようです。」

「本当かい？というか、情報を得るのが早いねえ。」

「そう何度も彼女が欲しいと聞かされれば、嫌でもそうなります。」

「ごもつともだね。それじゃ、彼女に与える専用機は僕らのアレになるよう根回しもお願いするよ。」

「……お言葉ですが、それは貴方のすべき事です。」

「だから僕は代理だつて言つたら？お飾りみたいなものだったのは、君が良く知ってるじゃない。」

男の口ぶりからして、どうやらISを所持しているらしい。そして一秘書にかなり無茶なお願いをするが、悪びれる様子もなく反論が帰って来る。秘書は、藪を突いて蛇を

出してしまったらしい。盛大な溜息をわざとらしくついて見せれば、黒縁眼鏡の端をクイツと押し上げた。

「かしくまりました。」

「いやあ、いつもごめんね。でもこれで、ようやく彼女を手に入れる算段が付いたよ。」

「……はい？ し、失礼ですが、彼女が欲しいというお言葉……まさかそういった意味ではありませんよね？」

「うん？ 彼女はウチの物じゃ無くて、僕の物にしようって意味だけど。」

男の言うウチの物……と言うのは、企業に所属させると言う意味。だとすると後者は、男として黒乃が欲しいと言う意味である事は明白だった。男はまるで、何か問題でも……とでも言いたそうな視線を秘書にぶつけた。盛大に困惑した様子を見せた秘書は、ここぞと言わんばかりに声を荒げる。

「貴方は……馬鹿ですか!？」

「いや、だつて僕まだ今年で21だし……5歳差くらいなら問題ないよね？」

「そういう問題じゃ……。とうか、何故よりによつて藤堂氏で……。」

「言い方が悪いなあ。うくん……何か彼女からは運命的な物を感じるんだよねえ。」

「ですから……そういう事を聞いているんじゃないやなくて……。」

そもそも手の中にしたいたいと言う目的で、専用機を与えようとしている事が問題なのであ

る。秘書は男にそう指摘するが、もちろんそんな事は最初から解っていた。先ほど述べた言葉にも偽りはないが、それとはまた別に目的もあるみたいだ。男は表情を崩さずに、秘書に向かって語りかける。

「あくまでついでだけど、あの子ならなんとなくアレも乗りこなせると思ってるんだ。」

「……根拠は？」

「そうだね、なんとなく……かな。早い話が勘だね。」

「……解りました。今は納得しておきましょう。ですが、彼女がアレに乗れないようであれば……。」

「うん。その時は、気のせいだったと思つて諦める事にするよ。」

ニヤニヤしながらそう言う男に、絶対諦める気はないなコイツ……と秘書は思う。それでも自分のプロ意識が働くのか、男にかしこまりましたと了承の言葉を伝えた。それはそれとして、自分の要件をさっさと済ます事にしたらしい。秘書は男に資料を渡して退出していった。

「……さて、会えるのが楽しみだよ……黒乃ちゃん♪」

（おお、なんか寒気が……風邪かな？）

モニターの黒乃に男がそう告げると同時に、黒乃……の中身のオツサンは、とんでもない寒気を背中に感じた。寒気の正体など知る由もなく、とにかく厚着をしておこ

うなどと無駄な努力をし始める。どちらにせよ黒乃の中身のオッサンは、自分が狙われている事など露にも思わないだろう……。

第18話

俺が代表候補生になる事が決定してから、とにかく忙しいの言葉に尽きる。国の認可やら選手登録やら……何が大変だったかって、代表候補生としての振る舞いを延々説明されたのはきつかった。丸一日使ってやるもんじゃないでしょ……。まあ、それももうすぐ終わりを告げる。

最後に残されたのは、専用機の譲渡だ。聞いた話によると、俺に専用機を渡したいところろが1件しかなかったとか……。とんでもなく寂しいってか、選択肢が1つしかないってふざけんなど。オーソドックスな性能の機体だと良いんだけど。

「しっかし、アンタもついてるわよねえ。あの近江重工から声がかかるなんてさ。」

車を運転する昴姐さんは、そんな事を呟いた。近江重工……戦後から日本の機械部品や電子部品……工業をひっくりくるめた諸々を支えてきたとされるエラ〜イ企業である。最近は勿論のことI S産業にも乗り出して、特に基盤といったような内部部品におけるシエアは凄まじい。

全てを近江グループが担っている訳でも無いが、それでもシエアは世界的に見ても軽く7割は超える……ってワイ〇ペディアに書いてあった。そこらを評して、昴姐さんは

ついていると言ったのだろう。内部部品を作る会社がISを組んだって、それはいわゆる宣伝効果を狙ったの事だろう。

だとすれば、それを渡される俺は期待されていると思つていい。だから嫌なんだよ……。人から期待されるとか、苦手とする分野の1つだ。くれるなら有難く貰つておけど、負け続きで剥奪とか言われたらどうしよ。今はその近江重工の総本山に向かつてるんだが、もう今から胃が痛くて仕方が無いよ……。

「お………でっけーでっけー。アタシも近づくのは初めてだけど、見上げるのに首が疲れちまう。」

俺が自分に大丈夫だと言いついて聞かせている間に、車は目的地へと辿り着いてしまふ。昴姐さんは、どこか無邪気な様子で巨大なビルを見上げた。俺は現実逃避したいので、直視はしませんよ……。そうやって昴姐さんを見ていると、催促されていると思つたらしく咳払いをして歩き出した。

「え〜つと、確か案内役がだね……つと、居た居た。ゴホン！お待たせ致しました。わたくし、この子の指導をさせて頂いている者で、対馬 昴と申します。本日はお招きいただいて、大変ありがとうございます。」

「ご丁寧にも。私は社長秘書を務めています。名は常盤ときわ 頼つくみです。以後、お見知りおきを。」

入り口付近で俺と昴姐さんを待ち受けていたのは、いかにも仕事のできる女といった風体の……20代後半から30代前半ほどの女性だ。適度の長さの黒髪を、ローポジションのポニーテールにしている。他は……黒縁眼鏡に胸は……無いけど、腰つきがセクシー……エロいっ！

後は、どうやら既婚者……チツ！左手には輝くりングがはめられていますよ……チツ！……この誰だ、こんな綺麗な人を貰ったド幸せな野郎は……。沢山の親戚一同に囲まれながら末永く爆発しろ。それはそれとして、鶴さん……なあ。……止めとこ、綽名とかつけないでシンプルに鶴さんでいいや。

「早速ですが、社長がお待ちです。藤堂様、対馬様、こちらへどうぞ。」

仕事モードに切り替わっている昴姐さんでも、様呼びはむず痒いらしい。背後に立っているから解るけど、ばれないように背中をバリバリ搔いてるもの……。まあ……プロだよね、鶴さん。所作って言うか雰囲気って言うか……何を取っても秘書そのものだ。

そんな事を考えながら長いエレベーターに乗ると、どうやら最上階に辿り着いたみたいだ。社長室って、どうして高い所にあるんだろうね……素朴な疑問。それは良いとして、鶴さんに先導されて社長室の前に行く。鶴さんが丁寧な様子でノックして見せれば、いよいよ社長とご対面だ。

「失礼します。社長、お2人をご案内……って、人と会う時は白衣は止めてくださいと何

度……。」

「くどいってば、鶴さん。僕はこれが正しい服装だよ。後、僕は代理……。」

「代理でも何でもいいですから、とにかく挨拶をお願いします。」

「ん、了解。よく来てくれたね、黒乃ちゃん。対馬さんも、わざわざ足を運んでいただいて。僕は近江おうみ 鷹丸たかまる。まあ、とある事情で社長の代理をやってるんだ。」

社長の豪華な仕事机に座っているのは、予想に反して若い男だった。その男は何故か白衣を着ていて、自らをあくまで代理だと称する。男は立って俺に近づいて来ると、右手を差し伸べながら自己紹介を始めた。黒乃ちゃんねえ……馴れ馴れしいなコイツ。

特徴を上げるとすれば、癖毛のように巻いた茶色の短髪……色は染めたんじゃないかと、天然でその色みたいだ。それと、目が細いな。アニメ的表現がされるとすれば、一本線で描かれること間違いなしだ。それで、目が細いな。アニメ的表現がされるとすれば、総合的に見て、爽やか好青年ってところだろう。

鷹丸さん……ね。あれ、そう思っただけなら年上の男の人と仲良くなるのって初めてだっけ。いや、そりゃもちろん前世抜きにしての話だけだよ……。ならば、俺にとって兄貴分の称号を与えよう。ありがたく思え、今日から貴方は鷹兄たかにいだ！

「ん……近くで見ると、ますます綺麗だね。」

「社長……。」

「あ、ごめんごめん。それじゃ、本題に入ろうか。色々と面倒な事が多いからねえ……。資料とかは、どうです？対馬さんがやりますか？」

「……そうですね。この子の資料の記入等はいつも私が。」

……何だコイツ。いきなり綺麗とか言われたけど、中身は男だから響かないからね？まあ……いいか、スルーしとけば。そうしてソファーに座るように勧められる。昴姐さんには申し訳ないが、いつもそうだったのはお任せだ。俺の仕事は自分の名前を記入する程度のことだ。

「はい、以上で結構ですよ。」

「それじゃ、お待ちかねの専用機とご対面タイムといこうか。……鷗さん、僕は先に行くから引き続きお2人の案内を。」

「かしこまりました。道が幾分か複雑ですので、はぐれないようご注意ください。」

すると先に出て行ったのは鷹兄だった。随分楽しそうな様子だったけど、何かあったのだろうか。それとは別に、鷗さんの案内で専用機のある場所まで連れて行ってもらえるらしい。鷗さんに棘は無いけれど、余計な事をしない人だな……。無言が堪らなかつたのか、昴姐さんが口を開いた。

「あの……近江社長は、なぜ白衣を？」

「ああ、あれですか。あの方は、そもそもここの研究員みたいなものです。彼は子供の頃

から我が社の機械、部品製造に携わっています……それ以来、飛躍的に我が社の技術力は上がりました。」

「近江社長は、先代のご子息ですよね？」

「そうですね。ですが、先代……と言うより、鷹丸様のお父様はご存命です。」

「ここでようやく、鷹兄が代理を名乗るかが解った。どうやら鷹兄のお父さんは、放浪癖があるらしい。ある日ちよつと出掛けてくるつて書き置きがあつて、軽く数年間は音信不通みたいだ。それで、仕事を鷹兄が肩代わりしているそう。別に珍しい事でないそう……。自由すぎやしないかね？」

「それは、なんとというか……。」

「まあ、心配はありませんけど。鷹丸様は、いわゆる天才という奴ですから。」

天才……か。ありとあらゆる物事において、天才的な手腕を發揮しているんだろう。だから、その……どこか変わり者なのは、天才と馬鹿は紙一重つて感じか。そして蛙の子は蛙……。親が変わり者なら、子もそうという事らしいな。

鷹兄が言つてた通りに、かなり歩かされた。やがて社内の雰囲気は、オフィスから工場へと様変わりしていく。先ほど鷹兄が着ていたのと同じ白衣を身に着けた人達を多く見かける。そして最終的には、ピットによく似た場所へとたどり着いた。そこにはブルーシートが被せてある物が鎮座している。これが俺の専用機かな……。

「社長、お2人をお連れしました。」

「やあ、待つてたよ。それじゃ黒乃ちゃん、君の手でこれを退けてくれないかな。」

ブルーシートの端を掴んでいる鷹兄は、俺に引つ張るように促す。俺はしつかりそれを掴むと、思い切り引つ張った。ブルーシートは、バサリと大きな音を鳴らしと宙へと舞う。そこに佇んでいた機体は、なんだろうね……。一言で表現するなら……。鳥天狗といった様相だ。

目を引くのは、背中の大きなウイングスラスターだろう。どちらかと言えば巨大な翼の骨格みたいな印象を受ける。どちらにせよ、この機体が高機動型である事を示している。脚部も鳥類の足みたいになっているし、それがますます鳥っぽさを際立てている。他にも細かなディテールは禍々しいつつか、ダークヒーロー的なスタイリッシュな出で立ちだ。

「この機体の名前は、刹那せつなって言うてね。見た通りに高機動の第3世代機だよ。その代わりに装甲は薄っぺらいから当たり過ぎは禁物だよ。」

刹那かあ……。かっけえ名前だな。日本製の機体は、名前が2文字がシンプルでいいよね。だけど、やっぱり高機動の機体みたいだな。俺って、絶叫マシンとか苦手なんだよね。こいつをしつかり乗りこなしてやれるかどうか、今からとても心配だ。

「まあとにかく、乗ってもらったら話が早いよ。鵜さん、アレを渡してあげて。」

「はい。藤堂様、こちらをどうぞ……。」

俺に手渡されたのは、これまた黒一色のISスーツだった。なるほど、特注の専用ISスーツですな。まあ黒いデザインだし、見た目だけだと汎用の奴とあまり変わらないだろうね。つてか専用機持ちのISスーツに、固有の性能があるかどうかも知らんし。

「更衣室は隣接してるから、着替えたら試運転を始めよう。」

「それでは、対馬様はこちらへ。」

「解りました。頑張つてね、黒乃。」

昴姐さんの激励をもらつて、俺は更衣室へと向かう。手早くISスーツへと着替えるのと、早速刹那へと初搭乗だ。ううむ……そういえば、イメージインターフェースを使った機体を動かすのは初めてか。素直に俺の言う事を聞いてくれる機体なら良いが。

「初期化やら最適化やらはまあ……飛びながらやろうね。その方が君も慣らしやすいと思うけど……どうかな？」

い、いきなりだね鷹兄……。けどその意見には全面的に肯定かな。え〜つと、イメージイメージ……浮いている感覚を意識してイメージするが、これを自然に出来ないようにしないと。浮いた状態からカタパルトまで移動すると、脚部を固定して発進準備はオーケー。カタパルトもオルグリン……よっしゃ、行くぜ！

……つて、のわあああ!?少しスラスターを吹かしたつもりなのに、何この超加速!?

こ、こんなの……飛んでいられる訳が無いじゃん！俺はカタパルトから飛び出したと同時に、機体の安定を保ってられない。そのまま紙飛行機が墜落するかのよう、地面へと真つ逆さまに落ちてしまった。

『……………』

「……………」

『ごめんね、黒乃ちゃん。刹那の調整が不十分だったみたいだ。悪いんだけど、もう一回戻ってもらえるかな？』

う、うう……鷹兄にとてつもなく気を遣わせた。多分俺が下手くそだっただけなのに、鷹兄は刹那の方が悪かったと言ってくれる。見直したよ、鷹兄……これでさつき慣れ慣れしかったのはチャラにしておいてあげよう。ピット内に戻れば、少し待機していてくれと言われた。

遠くで作業を見守るけど、距離の開きで何を言っているのかは聞き取れないな。……悪口、言われてないと良いけどな……。なんなのあの子、本当に代表候補生なんですか？……とか、代表候補生（笑）……とか。知るかそんなの……俺だって、なりたくてなってる訳じゃないですよーっ！

「待たせたね、黒乃ちゃん。今度こそ大丈夫だと思っから、行こうか？」

しばらく待つと、鷹兄が準備が出来たと俺を呼ぶ。はあ……鬱だ。これで飛べなかつ

たら、本当に俺の責任だよ。でもやるしかないし、頑張るか……。俺は渋々ながらも立ち上がって、刹那に乗った。そして先ほどのように、カタパルトへと足を付ける。うん……。でもなんだろ、確かにさつきよりは動かしやすいような……。

……これは、本当に期待しても良いのかもしれない。俺は刹那のスラスタを吹かして、カタパルトの出撃を開始する。おお、なんかさつきと違ってしつくりくる！そのままカタパルトから飛び出るが、何の問題も無く飛行ができた。これは、打鉄なんかとは比べ物にならないくらい速度だぞ……。

『うん、大丈夫みたいだね。ようやく刹那の性能を詳しく説明できるよ。』

「……………」

『その機体は高機動って言うのは、もう話したよね。それを飛んでみて実感してるとは思うけど、刹那はまだ本気を出してはいないんだ。』

「……………」

『刹那には、とある新技術を積んである。その名も、クイック・イグニッションブーストって言うんだけどね。』

話を聞くに、俺が前世でプレイしたロボゲーの回避行動に良く似ていた。本来は放出したエネルギーを充填して、それを爆発的に放出するのが瞬時加速だ。しかしこのクイック・イグニッションブースト

Q I Bは、刹那のウイングスラスタ……雷火^{らいか}って名前らしいんだけど……雷

火に刹那本体とは別にしたエネルギーを積んでいるような。

この雷火は、常にクイック・イクニッションブースト Q I B 用の微量なエネルギーがダダ漏れらしい。だから

こそ、この刹那は……急速的かつ連続して瞬時加速が出来てしまうんだってさ。ちなみにだが、発動の際に操縦者の安全面を考慮して、身を守るバリアが自動で張られる。そのバリアにもエネルギーを割く事になるから、とてつもなく燃費の悪い仕上がりになつてるな……。

『じゃ、試しにやってみようか。やり方は……君に任せるよ。』

操作感覚は、第3世代は乗り手の感覚に委ねられるだろうからね。んゝ……一応はちー姉に習ってるからそれで行こうか。とりあえずPICをチェックしてゝつと、うん……大丈夫そうだ。そんじや、右方向にドーン！と瞬時加速してみる。

うおつ、とつとつと……ふらついたけど、真横に急な移動が出来た。これならすぐに調整が効きそうだ。そんじや、右、右、前、左……と言った風に、適当な方向へ連続して行う。うん、このくらい出来たら十分だろう。まんまどこぞのクイックブーストだなあ……。

『………………。おつと、ゴメンよ。大丈夫そうかい？問題ないなら、次に行こうか。』

「……………」

『じゃあ次だね。黒乃ちゃん、刹那は本気を出していないって言ったけど……』

Q I Bはまだ半分の力だよ。さっきのは連続かつ急速だったけど、今度のは継続的に瞬時加速を行えるんだよ。まあ、その時点で瞬時加速じゃなくなってるんだけどね。』

つまるところ鷹兄が言いたいのは、瞬時加速の爆発的加速並の速度を継続させ飛び続ける事が出来るって話かな。名称としては、オーバード・イグニッションブーストだとか。実に単純！それにしても、大変な変態機体じゃありませんか……刹那ちゃんつてば。

『イメージ的には、1回爆発させたエネルギーを途切れさす事無く……爆破の余韻が背中を押し続ける感じ？ハハハ、ごめんね……僕が何言ってるのかわかんなくなってるっちゃったよ。』

オーケーオーケー、ヒントは大事よ鷹兄。えーつと、瞬時加速まではやる事は同じ……後は、鷹兄の言葉通り……。そうやってイメージを固めると、雷火から黒い炎が噴き出はじめた。その黒い炎は、雷火の骨組みには収まり切らず……まるで大きな翼を形成しているかのようだ。なんて考えている暇もなく、俺は凄まじいスピードで前へと押し出される。

うおおお!?刹那のトップスピードは、さっきまでトップスピードでは無かったって事ね！だけど鷹兄達が調整してくれたおかげか、飛べない事も無さそうだ……。つて言

うか、だんだん慣れて来たぞ……。なるほど、
クイック・イグニッションブースト Q I Bは鋭い軌道が描けて、
オーバー・イグニッションブースト O

I Bはある程度旋回も三次元飛行もできる訳ね……。どちらにせよ、刹那の名にはふさわしい仕様か。

『あつ、ちなみにだけど……。O オーバー・イグニッションブースト I B中でもQ クイック・イグニッションブースト I Bは可能だから、無理じゃなければ試してみてね。』

やれつてか……。やれつて言いたいのか!? こんにやろう……。やつてやるよ! やればいいんでしょ、やれば! 俺は半ギレになりつつ、
オーバー・イグニッションブースト O I Bを維持しながら右、真ん中、左と反復横跳びのように連続してQ クイック・イグニッションブースト I Bを行う。どうだ、これで文句はないでしょ! 俺はそう示すために、黒い翼を収めてその場に止まった。

『……。うん、それだけ見せて貰えれば十分だよ。後はゆっくり飛んで、一次移行すれば理想かな。』

オーライ、鷹兄……。それからしばらく、思うがままに刹那で飛びまわってみる。しかしなんとというか、やはり目に見えてエネルギーの減りが早い。でもなんとか一次移行まで進んでくれて、これで本格的に刹那は俺の専用機になったって感じだろう。俺は一次移行終了後に、すぐさまピットへと戻った。

「おや、待機形態はチャョーカーかい。ふくん、チャョーカーねえ……。」

「良からぬ事を考えているようなら蹴りますよ。」

「嫌だなあ鶴さん。僕はいつも良からぬ事しか考えてないですよ、普通の観点しか持つて無い人からするとね。」

「そうですか。藤堂様、お疲れ様でした。」

鷹兄の言う通りに、待機形態は黒色のラバーチョーカーだった。首元には、鳥の羽らしき装飾品がぶら下がっている。それを見て何を思ったのかは解からないど、鷹兄が鶴さんに注意されていた。鷹兄の返しを見事にスルーした鶴さんは、俺に有難い声をかけてくれる。

「明日は模擬戦を想定していますが、予定のほどは？」

「……随分といきなりですな。」

「遅かれ早かれやらないとだめですし、何より相手は既に来日していますからねえ。向こうの都合もありますし、申し訳ないんですけど……。」

「……どう黒乃、いけそう？」

アツハイ。チクシヨウ……チクシヨオオオオ！今日は疲れたな……なんて思っていたら、突然の死刑宣告じゃないか。くっ、ただど……俺はノーと言えない日本人の典型みたいなもんだ。悲しいかな、気が付いた瞬間には首を縦に振っていた。

「ありがとう、本当にいきなりでゴメンね？このお詫びは今度させてもらうから。対馬さんも申し訳ないです。」

「ああ、いえいえ……私は車運転してるだけなんで。」

「では、お2人とも……玄関まで——」

「いや、大丈夫ですよ。社長と常盤さんも忙しいでしょうし……。ほれ黒乃、着替え着替え。」

ニヤけ顔だから解りづらいけど、鷹兄の口調が本気で悪いと思ってる事を物語っていた。ま、まあ……そこまで悪いと思ってるなら、許してやらん事もないかな……。それで、流れとしてはこのまま解散らしい。鶴さんの丁寧なお辞儀と、鷹兄の気楽なバイバイに見送られ俺と昴姐さんは更衣室へと入った。

「しかしまた……とんでもない機体を貰ったもんよ……乗りこなすこの子もこの子だけど……。」

「……………」

「ああ、いや……何でも無いわよ？うん……何とも無いから。」

何か妙に歯切れが悪いな、珍しい昴姐さんを見た気がする。どうせ俺は詮索できないし、そんなに誤魔化さなくても大丈夫ですよ。しかし……今日はなんだか疲れた。イツチーの手料理が食べたい……でも、今日の夕飯の当番は俺だった。ならば、昴姐さんの車に乗っている間に……メニューを考えるとかないとだね。



ドガシャアン！と、そんな効果音と共に黒乃ちゃんは地面へと激突した。僕の周りの研究員さんや作業員さんは、やっぱりかと言いたげな表情を見せる。と言うのも、刹那はこれまで何人かに譲渡する予定ではあった。しかし、誰一人として乗りこなす事が出来なかったのだ。あまりの高機動型のため、飛ぶことしかまもらない。

「あの……社長？」

「鷹丸で良いですよ。言いたい事は解ります。けれど、彼女は僕の個人的理由で諦める訳にはいかないんです。」

研究員さんの1人が、僕に言い辛そうだけど声をかけた。本当……諦める訳にはいかないんだよね。彼女は僕の物にする……この想いは揺るがない。そのためには、取りあえず刹那を乗りこなして貰わないとならないんだ。僕は黒乃ちゃんに呼びかけて、一旦ピットへ戻って貰う。さて……僕の力で、彼女がすっかり羽ばたけるようにしないと。「スラストーの出力や、PICに異常は？」

「見られませんね。ついでに言えば、全てにおいて問題は見当たりません。」

「………………。スミマセン、黒乃ちゃんが飛び出してから落ちるまでのデータ……取れます？」

「あ、はい。一応ですけど、しっかりと記録してありますよ。」

「どうも、ありがとうございます。」

ウチの職員さんは、こうやって気が利くんだよねえ。僕はデータの記録されたタブレット端末を受け取ると、とんでもない事実を目の当たりにした。なるほどね、僕の予想は間違ってたなかったみたいだ……。あれだけ短い時間なのに、マニュアル操作、イメージインターフェース操作と共に……。とんでもない数の入力回数が記録されていた。

「皆さん、少しこれを見てください。」

「こつ、これは……。何でこんなに複雑な操作をする必要が？」

「多分ですけど、こうでもしないと機体の方が着いて来てくれないからですよ。」

「つまり反応速度が遅いから、大量の操作で補うしかない……。と？」

僕の見解は、最後に研究員さんが言ったのとほぼ同等だった。仮に普通のIS乗りが、マニュアル操作とイメージ操作で50%ずつ、合わせて100%の力でISを動かすとするば……。彼女はどちらも100%だ。マニュアル操作100%のイメージ操作100%で、合わせて200%の操作能力。彼女は普通にISを動かしているつもりでも、単純計算で倍の性能を引き出す事が可能って話。

「イメージインターフェースと操作系統の反応速度を限界まで引き上げて下さい。それで彼女は飛んでくれるはずですよ。」

「ええ!?今でも刹那は……。」

「解つてますよ、僕が設計したんですから。それでも……僕を信じてくれませんか?」

「……そう言われたら、我々には何も言えませんが……鷹丸くん。」

刹那の操作系統は、考えられないくらいに過敏だ。恐らく既存の第3世代……いや、これから仮に第4、第5と世代が上がったとしても……刹那に勝る反応速度は出せないと自負している。自負しているからこそ、刹那を組み立てた。いつか刹那を乗りこなせる人が現れるって、そう信じて……。

誰でも簡単に動かしてしまう汎用機なんてつまらない。IS操縦者がISを選ぶんじゃない。ISがIS操縦者を選ぶような……。そんな機体が飛んで戦う事は僕の夢だ。だから僕は、ずっと探していた。刹那を、この傍から見れば馬鹿みたいな機体を乗りこなせる女性を。僕の夢を実現してくれる女性を。

「待たせたね、黒乃ちゃん。今度こそ大丈夫だと思っから、行こうか?」

「……………」

僕の夢を実現してくれるのは、君だっってなんと思っんだ……黒乃ちゃん。あの選考会の映像を見た時に、僕が運命的な物を感じたのはそれだ。僕には解る。君が僕の運命の人だ。だから僕は君に拘る。僕の夢を叶えてくれる君は、僕の傍に置いておきたい……っつてね。

再度ピットから、カタパルトに向かう黒乃ちゃんを黙って見守る。やがて黒乃ちゃんは、刹那のスラスト……雷火を全開にしてカタパルトから飛び出た。そして黒乃ちゃんは……落ちる事無く飛行を安定させる。試運転用の練習場を縦横無尽に飛び回る黒乃ちゃんは、なんて……美しい事だろうか。

「流石だね、鷹丸くん。君はやっぱり神童だよ。」

「気持ち嬉しいですけど、その呼ばれ方は好きじゃないですよねえ。それに、多分凄いの僕じゃなくて黒乃ちゃんだ。」

「確かに。でも問題は……。」

「ええ、僕達の刹那は……まだまだあんなものじゃないですからね。」

神童……ねえ。僕だって才能だけじゃなくて、人の数倍は努力してるつもりなんだけどなあ。そういう言葉だけで片づけられるのは、少し寂しい所があるのだけれど……。ま、それは後でも良いか。研究員さんが言った通りに、ここからが本題だ。まだまだ刹那は、本来の性能を發揮してはいない。

これを使いこなせなくても、ぶっちゃけ刹那は戦えるけどね……。それこそ、打鉄なんかは攻撃を掠らせる事すら出来ないくらいには設計したつもりだし。それでも、今から黒乃ちゃんに伝える技術があれば……各国の第3世代も相手じゃ無くなっちゃうかも。

「刹那には、とある新技術を積んである。その名も、クイツク・イグニッションブーストって言うんだだけどね。」

まあ我ながら、連続して瞬時加速をしちやおうなんてぶっ飛んでると思うけれど……君なら解るだろう？ 黒乃ちゃん。お互いにぶっ飛んでる者同士だからね。そして一通りの説明を終えると、黒乃ちゃんはクイツク・イグニッションブースト Q I B の練習を開始した。結果は、驚くべきものとしか表現できなかった。

僕だって、すぐにやってみせろなんて思っていない。数年かかってでも、いつかは使えるようになってくれれば良いな……くらいに思っていたのに。黒乃ちゃんは、1回口で説明しただけで簡単にこなしてしまった。僕は胸の奥で湧き上がるワクワク感を、必死に抑えて次の工程へ移る。

「じゃあ次だね。黒乃ちゃん、刹那は本気を出していないって言ったけど……クイツク・イグニッションブースト Q I B はまだ半分の力だよ。さっきのは連続かつ急速だったけど、今度のは継続的に瞬時加速を行えるんだよ。まあ、その時点で瞬時加速じゃなくなってるんだだけどね。」

瞬時加速と言うか、もはや別の名称を付けた方が良いような気もするけどねえ。ま、先人が着けた名前だし……一応原理としては瞬時加速と同じだし……ありがたく使わせてもらう事にしようかな。それはさておき、黒乃ちゃんにもう1つの技術に関して伝

えないと。

「イメージ的には、1回爆発させたエネルギーを途切れさせず事無く……爆破の余韻が背中を押し続ける感じ？ハハハ、ごめんね……僕が何言ってるのかわかんなくなってきたよ。」

オーバーボード・イグニッションブースト

O I Bの説明に関しては、本当にややこしい物だ。だからこそ、別の名前を

付けた方が良くもって話なんだけど。僕の言葉が参考になったかどうかは解からないけど、黒乃ちゃんはオーバーボード・イグニッションブースト O I Bを試す準備が整ったようだ。刹那の雷火から黒い炎が噴き出し、巨大な翼を形成する。

もしかするとまた制御が効かないかと思ったりしたけど、いらない心配だったみたいだ。危なげなど全く感じさせずに、黒き翼を翻し……黒乃ちゃんは華麗に舞う。すると、僕の中に好奇心が渦巻いてしまった。黒乃ちゃん、君は僕をどれだけ夢中にさせてくれる？

オーバーボード・イグニッションブースト

「あつ、ちなみにだけど……」 O I B 中でも Q I Bは可能だから、無理

クイック・イグニッションブースト

じゃなければ試してみてね。」

かなり無茶をお願いだ。システム上は可能な事になっているけど、そんなの想定はしていない。僕の言葉に反応した研究員さん及び作業員さんは、一斉に騒ぎ出した。何を考えているんだと思っっているんだろうけど……そのざわつきは、一瞬にして静まり返

る。

「な、なんてこった……。」

「私は、夢でも見ているんでしょつか……?」

そう言いたくなるのも無理はない。何と言ったって、黒乃ちゃんは：
オーバード・イグニッションブーストクイック・イグニッションブースト

O I BでQ I Bを用いつつ……反復横跳びのように刹那を動かして

見せたんだから。決まりだよ、黒乃ちゃん……やっぱ君は、僕が求めて捜し続けた女性だ。君は誰にも渡さない……君は僕の物なのだから。

「……………。うん、それだけ見せて貰えれば十分だよ。後はゆっくり飛んで、一次移行すれば理想かな。」

なんて考えていたら、黒乃ちゃんが黒い翼を収めてその場に止まった。流石に十分すぎる物を見せて貰ったよ。僕の言葉に黒乃ちゃんは頷くと、普通で飛行を開始。とは言っても、やっぱ高機動なのは高機動だけどねえ。しばらく黒乃ちゃんを見守ると、思惑通りに一次移行は済んでくれた。それと同時に、ピットへ黒乃ちゃんが戻ってくる。鵜さんに対馬さんも集まって来た。

「おや、待機形態はチョーカーかい。ふうん、チョーカーねえ……。」

「良からぬ事を考えているようなら、蹴りますよ。」

「嫌だなあ鵜さん。僕はいつも良からぬ事しか考えてないですよ、普通の観点しか持つ

て無い人からするとね。」

「そうですか。藤堂様、お疲れ様でした。」

チョーカーと言うのは、早い話が首輪だ。刹那そのものが、黒乃ちゃんを繋ぎとめておく首輪だと思うと……顔がニヤけるのを止められない。その考えは、まるまる鶴さんにばれちゃつてるみたいだけど。ま、これが僕つて人間だつて事くらい鶴さんは良く知っている。と言うか僕は、何を言われたところで落ち込む事は無いだろうけどね。

「明日は模擬戦を想定していますが、予定のほどは？」

「……随分といきなりですね。」

「遅かれ早かれやらないとだめですし、何より相手は既に来日していますからねえ。向こうの都合もありますし、申し訳ないんですけど……。」

「……どう黒乃、いけそう？」

鶴さんが黒乃ちゃんに明日の予定を伝えると、対馬さんが訝しむような表情を見せた。まあ、当たり前だよな。普通は本人と相談して決める事だし。だけど、断られかねないなら先手を打つておくのが僕のやりかただ。それでも断られるのなら、流石に僕も引き下がるけれど……。でも黒乃ちゃんは、有難い事に首を領かせてくれた。

「ありがたい、本当にいきなりでゴメンね？このお詫びは今度させてもらうから。対馬さんも申し訳ないです。」

「ああ、いえいえ……私は車運転してるだけなんで。」

「では、お2人とも……玄関まで——」

「いや、大丈夫ですよ。社長と常盤さんも忙しいでしょうし……。ほれ黒乃、着替え着替え。」

黒乃ちゃんは勿論だけど、保護者役である対馬さんにも申し訳ないよ。でも多分だけど、本人が望んでやってる事だろうから……迎えを出すとか無粋な事を言うのは止めておこう。対馬さんは鶴さんが苦手みたいで、愛想笑いを浮かべながらそそくさと移動を開始しようとする。僕はそれを手を振りながら見送った。

「じゃ、僕らも仕事へ戻ろうか。」

「それは良いですが、貴方が向かうべきはそちらではありません。」

「えく……刹那の稼働データを検証したいんだけど……。」

「貴方ならいつでも出来るでしょう。今は社長業に専念してください。」

僕がそのまま研究室の方の仕事場へ向かおうとすると、白衣の襟を掴まれて捕獲されてしまった。どさくさに紛れて逃げようとしたけど、鶴さん相手にそれは無謀だったかあ……。僕は渋々ながらも、鶴さんと共に社長室へと戻る事になった。うくん、そうだなあ……ばれないよう片手間にチェックする事にしよう。

第19話・表

「あれ……千冬じゃん!？」

「ああ、昴か……。いつも悪いな、黒乃が世話になる。」

「いや、それは構わないけど……。アンタ、例の件でドイツじゃなかったっけ？」

「黒乃が模擬戦をやると小耳に挟んでな、急いで飛んで来た。」

黒乃が刹那を貰った翌日に、再度近江重工を尋ねると昴にとつては意外な人物がそこに居た。昴の目に飛び込んで来たのは、ドイツに居るはずの千冬だった。ここに居る理由を問えば、眠たそうな目で飛んで来たなんて言う。わざわざその為だけに足を運ぶあたり、黒乃に対する溺愛ぶりがうかがえる。

待合室に通されている千冬は、現在の黒乃の様子を昴に尋ねた。黒乃は現在、ピットで刹那の武装全般の説明を受けていると話す。そもそも刹那がどんな機体か知らない千冬は、それだけ聞いたって想像がつかない部分はある。そうなると、模擬戦開始の間まで談笑になる……。かと思いきや。

「2人とも、元気かしら？」

「アンタ……。アンジー!?! うっわ、懐かし……。アンタの方こそ、元気してた?！」

「私はまだたまに会う方だが、久しぶりだな……アンジー。」

待合室に、ISスーツを纏った外国人の女性が入室した。金髪青目でまさに英国人といった様相の彼女は、アンジェラ・ジョーンズと言う。IS選手で、イギリスの元国家代表であった。選手であっただけに、同じく立場だった千冬や昴とは親交があるのだ。昴は早期に引退し、彼女も一身上の都合で引退したために3人揃うのは久々だ。

「昴、貴女……似合わないわね。」

「あ、これ？アハハ、何の因果か……アタシはアンジーと同じ職業よ。」

「信じられるか？コイツが教職だぞ。」

「Amazinger……って感じかしら。」

昴のパンツスーツ姿を似合わないと呼びかけたアンジェラは、何故そんな恰好をしているのかと問いかけても同然であった。すると昴は、我ながら似合わないといった様子で自分は今ISの指導をしていると伝えた。千冬が捕捉を入れると、アンジェラは外国人らしいオーバーリアクションで反応を示す。

というのも、アンジェラは引退後後進の育成に力を入れているのだ。もちろん昴のようには適当では無く、キッチンと真面目に仕事をこなしている。彼女の実力は、モンド・グロツソで部門賞を取るほどだ。もつとも、実を言うと昴もそのクラスのIS操縦者なのだ……。

「で、何で近江重工に来てんの？何か仕事？」

「ええ、最近代表候補生になった子と模擬戦をしにね。」

「!? もしや、黒乃とか？」

「ああ、確かそんな名前だったわね。もしかして、昴の教え子？それとも……千冬の弟子かしら。」

話題を一周させて、何故アンジエラは日本に居るのかと昴は問い掛ける。予想できなかった事ではないが、アンジエラはどうやら黒乃との模擬戦をしに来日したらしい。すると思わず、千冬と昴の顔色が変わった。それを感じ取ったアンジエラは、急な雰囲気の変わりように不思議そうな表情を浮かべる。

「な、何……？急にどうしたのよ……。」

「アンジー、悪い事は言わない……黒乃と模擬戦すんのは止めときな。」

「ちよつと、意味が解らないわ。悪い冗談なら止めて……笑えないわよ。」

昴はアンジーに詰め寄って、肩を掴みながらそう忠告した。その必死さが仇となったのか、アンジーは少しばかり機嫌を損ねながら昴を睨む。その様はまさに、オオカミ少年の状態そのままだった。昴としては、自身の日頃の態度を盛大に恨む。頭を掻きむしりながら、千冬に助けを求める。

「……聞け、アンジー。黒乃は——」

「失礼いたします。ジョーンズ様、そろそろこちらの準備が整います。」

「OK、今行くわ。ま、心配してくれるのは嬉しいけど……私は大丈夫よ。それじゃ、2人の教え子に会いに行きましょう。」

千冬がアンジーへ説明をしようとする、そこには鷹丸の秘書である鵜が現れた。まるで狙ったようなタイミングの入室だが、鵜としてはそんな気は全くない。手短かに用件を伝えると、アンジーを連れて黒乃の待つ第1ピットへと移動を開始した。千冬と昴は、すぐにその背を追えないでいた。

「千冬……。」

「……余計な事にならんと、そう願うしかあるまい。あの様子だと、聞く耳は持つてくれそうもない……。」

「……………」

まるで自分にそう言い聞かせるかのような言葉に、昴は納得しかねる部分もあった。しかし、千冬という事だってもっともではある。何故ならば、余計な事になった時の為に……自分達が居るのだから。千冬と昴は、微妙な雰囲気をもとに隠しながらアンジー達の背中を追いかける。

第1ピットに向かう途中で、千冬達の背後からアンジーが現れる。どうやら、真つ直ぐ第1ピットへ向かったわけではなさそうだ。合流し直した4人は、気を取り直して第

「ピットへと歩を進める。するとそこには、千冬にとつて懐かしい姿が見えた。

「久しぶりだな、黒乃。一夏と2人で元気にやってるか?」

「アンタが模擬戦するって聞いて、緊急帰国したんだってさ。ホントこのシスコ……ぐはっ!」

「黙れ適当人間。黒乃、この人は……紹介しなくても解るだろう。」

「ハイ、ミス・黒乃。私はアンジエラ・ジョーンズよ、今日はよろしく。」

黒乃へ余計な事を言った昂に、千冬は容赦のない腹パンを撃った。その光景を見たアンジエラは、なんだか懐かしい気分になって静かにクスクスと笑う。まだ笑みが消えてはいないが、アンジエラは少し前に出て黒乃にしっかりと挨拶をする。もちろん、黒乃の事情は事前に説明を受けている。

「ま、今日はお手柔らかにお願いね。」

「良く言うよ……。黒乃、アンジーは手加減とかしないからね。まるでどつかのシスコ……グフウツ!」

「黙れダメ人間。」

「ちよつ、適当は認めるけどダメ人間はナシでしょ!アンタらのせいで、最近は普通に仕事してるでしょうが!」

またしても千冬を引き合いに出した昂は、更に痛そうな腹パンをもらう。最初の発言

はまあ許せた昴だが、ダメ人間発言は気に障ったらしい。ギャーギャーと騒いで千冬に對して抗議している間に、黒乃はせつせと競技場へ出るためカタパルトへと向かった。昴は気が付かなかつたが、アンジェラも既に姿が見えない。

『それでは、発進をお願いします。』

第1ピット内にそんなアナウンスが響くと、黒乃は雷火をフルブーストでカタパルトから飛び出た。刹那の速度を見るのが初見である千冬は、驚きを隠せない。安全圏に居ると言うのに、凄まじい風圧が千冬へと吹き込んで長い黒髪がバサツと揺れた。

「とんでもないな……。」

「まだまだあんなもんじゃないけどね。」

『試合開始。』

千冬が驚き、昴がボソツと呟く。そんな事をしている間に、更に試合開始のアナウンスされる。まず動いたのは、アンジェラの方だった。ラファールのアサルトライフルを乱射するが、刹那はこれまたとんでもない飛行軌道で一発も弾丸を装甲に掠らせず避けきった。

「うゝし、操作技量はやつぱピカイチね。」

「あれを問題なく乗りこなすか……。いい加減、感覚が麻痺してきたな。」

機体自体には驚いたが、黒乃が簡単に刹那を乗りこなしている事には驚きが薄れてい

る千冬がいた。そのまま黒乃はノンストップで迫り、刹那の左腰へと装着してある超大型物理ブレードの神立かんだちでアンジエラを斬り裂いた。まず初撃を与えたのは黒乃だ。

「ヒュウ♪アンジーからファーストアタックを奪っちゃうか……けど。」

「ああ、アンジーは……一筋縄ではいかん。」

鼻は口笛を鳴らしながら黒乃を評価する。だが……けどと言った途端に表情は険しい物になる。千冬は……元からそういう顔つきだが、やはりアンジエラがそう簡単にはいかないという旨の言葉を呟いた。やはり2人は、アンジエラの事を良く知っている。モニターに映る映像は、実際にアンジエラが反撃へと出たからだ。

アンジエラはグレネードシューターから弾頭を発射すると、瞬時に武装を切り替えてスナイパーライフルを取り出した。そして驚異的な射撃精度で自ら発射したグレネードの弾頭を撃ち落とした。大きな爆発音で弾頭が爆ぜると、黒乃とアンジエラを取り囲むように爆煙が舞う。

すぐさま

Q クイック・イグニッションブースト

I Bで煙の中から離脱する黒乃だが、それこそがアンジエラの狙

いだつたのだ。逃げた方向には、既にアンジエラが回り込んでいる。アンジエラと黒乃の距離はゼロ。そのゼロ距離のまま、アンジエラは黒乃の腹部にショットガンを押し当ててそれを乱発した。

「うっわ、えげつな……アンジーの奴、ダミーモジュール使つてやんの。」

「アンジーの真骨頂というか、基本のプレイスタイルはそうだからな。」

アンジエラ・ジョーンズは、多彩なトリックプレーを得意とする。それだけでなくとも高い射撃技術に、トリックプレーが相まって、とんでもなくやり辛い相手である。アンジエラは得意げな様子でショットガンを肩へと乗せるが、次の瞬間……その表情は強張った。

「? アンジーどうしたんだろ。……………!? 黒乃……?!」

「これは……!? モニター! 黒乃をズームで映してくれ!」

「はっ、はい!」

アンジエラの様子がおかしくなった理由は、昴がすぐに気が付いた。同じく千冬もそれに気が付き、モニタリングをしている研究員に慌てて黒乃をズームアップして映すように指示する。そしてカメラが寄って映し出された黒乃は、笑っていたのだ……。それもただの笑みでは無く、例えるならば……狂ったような笑みである印象を受ける。

「おい昴……何だアレは! アレが、例の件でも起きたのか!」

「し、知らない……アタシも初見……。黒乃……アンタ……!」

黒乃は優しい少女である。2人を含め黒乃と親交の深い人間は、きつと口をそろえてそう言うだろう。だからこそ、2人は盛大に混乱しているのだ。無表情を崩さない黒乃があんな表情を浮かべる事など、全く想定していない。いわゆるギャップという奴で、

2人は混乱してしまっているのだろう。

いや……初見であっても、同じフィールドに立っているアンジェラの衝撃は大きい。感じているのは、とんでもない殺気……。その場に居るだけで、黒乃を見ているだけで……その意識が遠のいてしまいそうな気さえした。アンジェラは、黒乃から感じた殺気のせいとか全く動けなくなってしまう。

そんな事もお構いなしに、黒乃は行動を開始する。雷火から黒い翼が現れたところを見るに、オーバーロード・イグニッションブレード O I B をやるつもりなのだろう。想像通り、黒乃はまさに目にも止まらぬ速度でアンジェラへ迫る。しかもその途中に、太もも部分から2つの小太刀を取り出す。それは投擲を主目的とする物理ブレード、紅雨と翠雨である。

紅雨と翠雨は、真つ直ぐアンジェラへと向かう。とんでもない速度で刹那自身が前進しているにも関わらず、紅雨も翠雨も全く軸をぶれる事無くラファールの肩装甲へ突き刺さる。2本の小太刀が命中したのと同時ほど、黒乃は既にアンジェラの目の前に潜り込んでいた。さらに言えば、その手には長さの異なる2本の物理ブレードを握っている。

長い刀が叢雨、短めの刀が驟雨という。黒乃は叢雨でアンジェラの頭から股まで振り抜き、驟雨で腹部辺りを水平に斬り裂く。そして更に、もはや叢雨と驟雨は用済みと言わんばかりにその2本をラファールの腕部に突き刺す。だが、それではまだ終わらな

い。

黒乃は刹那の肩部分に小さく飛び出ている柄を掴むと、引き抜きながら斜めに交差させながらアンジェラの胴体を斬りつける。その刃は先ほどまでの物理ブレードでは無く、まるで雷のようなレーザーブレードだ。2本とも見た目に大差はないが、右手の刀が疾雷^{しつらい}、左手の刀が迅雷^{じんらい}である。

ここまで来ると、もはやデジャヴに等しい。黒乃は疾雷と迅雷も先ほどまでのブレードと同じようにラファールの装甲へ突き刺す。今度は脚部だ。さて、残った剣は神立一本……黒乃は、それもしつかり使うつもりだ。アタッチメントから神立の鞘を取り外すと、神速と評するにふさわしい居合抜きですれ違いざまにアンジェラの腹部を斬り裂いた。

『し、試合終了……。勝者、藤堂 黒乃……。』

黒乃の全ての剣を用いたコンビネーション攻撃は、確かに素晴らしかった。しかし、あの狂気を孕んだ笑みで台無しなのだ。たじろいた様子で試合終了のアナウンスが響くと、黒乃はアンジェラのラファールに突き刺さっている剣をすべて回収。その後、深々とした礼をアンジェラに送ると、ゆっくりピットへ戻って行く。

「黒乃……。」

ピットへ戻ってきた黒乃へと、千冬は慌てて近づいて行く。黒乃の表情は、既にいつ

もの人形のようなものだ。しかし、先ほどの笑顔が頭にこびりついて次の言葉が紡げない。そんな千冬の横を、なんと黒乃は素通りしようとしたのだ。その行動も、千冬にはいつもの黒乃とは違うように感じられる。

「待て、黒乃……！今のほ——」

言いたい事があるだけに、話がまとまらないながらも千冬は黒乃の肩を掴む。そこで黒乃の歩は、何とか止まってくれた。昴の前例もあるだけに、千冬は何とかやんわりとした言葉で先ほどの表情に関して問い詰めようとした。……が、振り向いた黒乃は衝撃の言葉を放つ。

「また……死に損ねた……。」

「っ!？」

死に損ねた。確かに黒乃は、そう呟いたので。両親が故人となり、人の死に關してはかなり敏感なはず黒乃が……確かにそう言った。しかも千冬には、どこか落胆したかのように言っているよう感じられた。黒乃はいつたい、あの模擬戦の最中に何を思ったのだろうか……。



「また……死に損ねた……。」

「っ!？」

先の模擬戦……黒乃の見た事も無い様子に、私は自然と問い詰めようとしてしまった。そして去り際に聞こえた黒乃の呟き……恐らく、ただの独り言だ。だが何故、そんな言葉が出て来なくてはならない!? 私は歩き去ろうとする黒乃を更に止めようとしたが、今度は私が何者かに止められる。

「……何のつもりでしょうか？」

「ああ、別に敬語はいりませんよ? 僕の方が年下ですし。」

「貴様……!？」

私の肩を掴んで止めていたのは、近江 鷹丸だった。近江の放った言葉は、明らかな時間稼ぎでしかない。黒乃の元に行かせようとしなのなら、それなりに理由があるはずだ。しかしこの男……気に入らん。ヘラヘラとして、私が睨んでいるのにビクともしていない様子だ。

「まあ説明は難しいんですけど、彼女は僕の夢を叶えてくれました。だから僕は、彼女の夢を応援しようと思ってます。」

「夢……? 貴様、訳の解からん事を……! 要領を得ん事を言うのなら、すぐさま貴様を張り倒すぞ。」

「それは順を追って説明しますよ。まあ早い話が、僕があの子に死に場所を提供してあげようかなって。」

「……私が今すぐに、貴様の死に場所を与えてやろう！」

「落ち着いて下さい織斑様。それは、貴女の立場を悪くするだけの行為です。」

私は耐えきれずに近江へと殴りかかったが、秘書の方へ止められる。私の拳を受け止めるとは、この女……ただ者では無いな。しかし、秘書の言葉もつともだった。私が腕から力を抜くと、秘書の方も拳を離す。さて、近江……今の言葉、どういう意味か説明して貰おうか。

「彼女、どうして戦闘中にあんな顔をしたのだと思いますか？」

「……戦いを楽しんでるから。」

「まあ、普通はそう思いますよね……僕もそこは同意です。ですけど、ただ楽しいからの笑顔じゃないと思います。」

「何……？それはどういう意味だ。」

「彼女は、自分に迫る死の感覚を楽しんでるんじゃないでしょうか？」

黒乃の笑顔は、歓喜からくるそれとしか見えなかった。認めたくはないが、私は近江の質問に大人しく答える。すると近江は、私とは少し違う視点で自分の考えを述べた。それはつまり、強者と戦える喜び……ではなく、強者に追い詰められ死を身近に感じる

事を……黒乃は悦んでいるとしても言いたいのか。

「そんな馬鹿な事が……!」

「彼女は、自分が強い事を知っている。だからこそ、全力の自分を斃たおしてくれるような……そんな相手を求めているんだと僕は思います。だからその可能性の見えたジョーンズさんに、あんな笑みを見せた……。」

「それで黒乃が死に場所を求めているだと……!? ふざけるのも大概にしろ!」

「嫌だなあ、僕は大真面目ですよ? 彼女の為に、僕は最適な死に場所……黒乃ちゃんを斃せる相手を探そうと思ってます。だから織斑さん、義妹さんを僕に下さい!」

「は!? き、貴様……何を言ってる……。」

自分でも珍しい事だと解っているが、変な声を出して驚いてしまう。突然過ぎるが、どうにもこの男の言っている事は本気らしい。近江は黒乃が自分の夢を叶えてくれたと言ったが、それが関係していそうだ。しかしだ……死に場所を与えるなどと言う男に、黒乃を安心して預けられるはずも無い。

「……貴様なんぞに黒乃はやらん!」

「うゝん、僕に渡すのが得策だと思えますけどね。黒乃ちゃんの今後の人生……僕ほど彼女を愛してあげられる男は現れないと思えますよ? だって僕は、彼女の豹変を見ても何も思いませんし……。姉代わりの人が動揺してるのに……ね。」

「貴様―」

「ちよい待ち。千冬、その馬鹿は放つておいて……アンジーの様子を確かめた方が良くと思うけど。」

近江に凶星を突かれた私は、思わず声を荒げてしまう。そう……姉である私が、こんなにも動揺してしまっているのにこの男ときたら……一切そんな様子は見せない。私よりよほど、黒乃を受け入れる体勢が出来ている。だからこそ私は、自分に感じた憤りを……近江へとぶつけようとしてしまったのだ。

昴としては、私を落ち着けさせる為にそんな提案をしたのだろう。だが、その言葉ももつともだ。私は盛大に舌を打つと、秘書に向こう側のピットへと案内させる。私と昴、そして何故か近江も同行しバタバタと慌ただしく移動を開始した。そして向こう側のピットに居たのは、見た事も無い様子のアンジーだった……。

「おい、アンジー……。」

「ヒツ……ち、千冬……う……。ご、ごめんなさい……身体の震えが、止まらないの……。」

私の知っているアンジーは、常に冷静沈着で強かな女だ。それがこんな、呆然自失の状態で小刻みに震えているなどと……。昴は険しい表情を見せて、近江は相変わらずニヤけた面でアンジーを眺める。とにかく、アンジーに事情を聞く事が……黒乃の事を理

解する近道だ。

「何があつたか、聞かせてもらえるか？」

「あの子……あの子が笑つた途端に、とんでもない……殺気が……！きつと、あの場に立たないと解らないわ……。それも……あんな楽しそうに笑つて、まるで甚振るみたい……！怖くて、動けなかつた……。」

……確かに、黒乃は全ての刃を用いてアンジーを攻撃した。しかし、最初の投げた2本……あれをしっかりと胴体に当てていれば、もつと早くに勝負はついたはずだ。黒乃の技術を考慮すれば、外したのは……やはりあえてなのか？だかコレだけは言えるぞ、黒乃に限つて甚振るなんてことは絶対にない。

「鳥……。」

「何？！」

「昔日本の資料で見た……そう、八咫鳥……。黒い翼を羽ばたかせて、災いを運ぶ八咫鳥……！」

日本では忌み嫌われる場合の多い鳥だが、場合によっては神の使いとして扱われる。それこそが3本足の鳥……。そう、八咫鳥……。八咫鳥はそんな二面性を持っており、アンジーの言つた通りに災いの前兆であるのも確かだ。鳥がモチーフである刹那には、ふさわしい表現なのかも知れない……。だが。

「でも、やっぱりこうなっちゃったわね……。」

「認めざるを得んのか……！」

「ええ、アタシ達の決めた黒乃を守るって道は……多くの者を傷つけなきゃなんない。」

黒乃が代表候補生になった事で、私達の目的の1つは達成されたと言つて良い。しかし、肝心な我々に覚悟が足りていなかった。旧友がこうして妹分に怯えてしまつていたとしても、黒乃を応援し続けるという覚悟が。それも昴は同じなようで、アンジーを眺めて歯噛みしていた。

「ですけど、もう引き返せませんよね？織斑さん、貴女は言えますか。代表候補生になつて専用機も得た黒乃ちゃんに、ISには乗るなつて。」

「近江……！」

「千冬、アタシ達は決めたはずでしょ。どんな時でも……黒乃の味方でいるつて。」

「……………」

毎回こうなるとは限らないが、黒乃は公の前で戦う度に味方を失う事になるだろう。だからせめて、最後まで自分達は味方でいようと昴は言う。……もつともな言葉だ。姉貴分である私よりも、よほど素晴らしい姿勢と言える。私は黙つて、頷く事しか出来なかった。

「鵜さん、この会社に精神科医って居たっけ？」

「いえ、流石に外科と内科しか居ませんが。」

「そう？なら急いで手配してあげて。お義姉さんか対馬さんは、ジョーンズさんに着いて居てあげた方が……。」

「貴様に姉呼ばわりされる筋合いは……！」

「はいはい……どうどう。アンジーがビビつちやつてるから。アタシは、黒乃の様子を見てくる。アンタ、まだ気持ちの整理が着いてないでしょ。」

「……頼めるか。」

「任せな。前にも言ったけど、アタシにとつてもあの子は妹だからね。」

そう言いながら昴は、懐から電子タバコを取り出して口にくわえながら第1ピットへと戻って行った。本人が聞けばきつと喜ぶ言葉だろうが、昴に限ってそれはすま……。とにかく精神科医の到着まで、私はアンジーに落ち着くように促した。

医師が言うには、この場で解決できる精神状態では無かつたらしい。同行を提案したが、アンジー自身がそれを断りその後の事は聞かされなかった。しかし、ほどなくしてとある引退会見が世間を騒がす事となる。アンジェラ・ジョーンズ、IS業界からの完全引退を表明。その新聞の見出しが、私の心の奥底に深く突き刺さった……。

第19話・裏

「お早う、黒乃ちゃん。今日の調子はどうかかな？」

「……………」

「そうかい、それは良かった。」

刹那を受け取った翌日、昨日のピットに顔を出せと言われたのでやって来た。昴姐さんは、別の所で待機している。今日はどんな用事か知らないけど、鷹兄達作業チームが出迎えてくれた。とりあえず調子を聞かれたので、首を縦に振って大丈夫だという事を伝える。

「今日はまず武装の確認から始めよう。と言うか、まだ武装は取り付けてないからまずそこからだね。」

「鷹丸くん、準備できましたよ。」

「はい、ありがとうございます。それじゃ、刹那の展開をよろしく頼むよ。」

俺は言われた通りに刹那を展開するけれど、何か妙に引つかかる言われ方をした気がする。取り付けてないって、いったいどういう意味だろうか。とにかく、準備が出来たらしいのでハンガーに立った。すると、ヘルメットを着けた男性達の威勢のいい声が響

く。

「オーライ！オーライ！」

「黒乃ちゃん、少しだけジツとしててね。」

鷹兄の言う通りにジツとしてみると、刀が左腰に一本、背腰部分に2本、肩部分に刀の柄みたいなのが2本付いた装飾みたいなのが取り付けられる。え〜つと、鷹兄……今のところ、剣しか取り付けてないんですけど？嫌な予感が全開な中で、鷹兄は1本ずつ丁寧に説明を始める。

「まず左腰の物理ブレードは、かんだち神立って名前かんだちの刀だよ。主にそれが主兵装っていう想定かな。」

え、ええ〜……？主兵装って、これですか!?天井クレーンに吊り下げられてやって来たのは、某狩ゲーに登場する太刀○を思わせる大型の日本刀だった。鞘に雷の装飾を施してあるそれは、刹那の腰に存在するベルトのような部分と接続されている。

「けっこう取り回しが難しいと思うけど、僕らの見解として黒乃ちゃんなら問題ない……って認識さ。」

俺のこれまでの戦闘データからするに、高機動近接機体である刹那はうってつけであるという見解らしい。刹那は神立含めて、7本のブレードしか装備されていないらしい。……なんでや！刹那だけにガン○ム○クシア!?なんてツツコミを入れてみると、剣

の構成もエクシ〇にそっくりであった。

「じゃあ、他も順番に説明するね。その背腰部分に仲違いに装着されているのが、それぞれむらさめ叢雨としゅうう驟雨だよ。片方は大型物理ブレードで、片方は中型物理ブレードつてところかな。」

なるほどね……この腰のベルトみたいなデザインは、神立含めて刀を直接刹那に取り付けられるようにするためか。叢雨と驟雨……長さを統一していない所を見ると、2刀流で使えつて事かも。適度な大きさなため、神立よりも取り回しがよさそうだな。

「で、次の2本は刹那自体に収納されてるんだ。名前はこうう紅雨とすいう翠雨。イメージインターフェースでアクティブにできるようにしてあるから。」

鷹兄の言われた通りに見ると、刹那の太もも部分がガシャン！と開いて、中から短めの刀が左右の太ももから飛び出た。俺はそれを抜き取ると、鞘も鏢も存在しない事に気が付く。なんていうか、いわゆるドスつて奴に似ているな。長さ的には、某オニワバンスタイルの人が使っていた小太刀ほどか。

「ISの戦闘に使うには、少しリーチが短すぎるでしょう？だからそれは、主に投擲用と思ってくれていいよ。」

なるほど、投擲用か……ナイフとかを投擲するのは、一応近接武器にカウントしたい……つて前世の友達が言ってたな。でも、上手くできるかどうか心配だ。投げナイフと

かつて、結構な技量が必要だろ？こと運動に関しては器用な俺だけど、上手くいくかな……。

「じゃあ、次。肩の部分に柄みたいなのがあるの解るかな？それ、引き抜いて……も良いけど、あまり乱暴にしないでくれると嬉しいな。」

さつき肩に取りつけたのは、やっぱり刀だったのね。でも気になるのが、鞘が無くて柄だけつてところかな。それもだけど、鷹兄の気を付けて引き抜けて台詞も気になる。よ、よし……念には念を入れて、ゆっくりと抜いてみる事にしよう。ゆっくり……ゆっくり……。

「それはレーザーブレードの疾雷しつらいと迅雷じんらいだよ。エネルギー兵器だから、パワーダウンには気を付けてね。」

た、確かに……レーザーブレードなら気を付けた方が良いね。右手が疾雷で、左手が迅雷みたいだ。それぞれレーザーブレードと言うよりは、バリバリと青紫色の電撃が集約したような見た目をしていた。さて、これで7本全部だな。そう思つて俺が疾雷と迅雷を仕舞っていると、鷹兄は続けて喋る。

「後ね、武装つて言つていいか微妙なんだけど……。両肘と両膝に、霹靂へきれきつて名前の仕込刀が着いているんだ。これもイメージインターフェースの操作だけど、肘や膝を曲げるのが飛び出す合図だよ。」

うくん……それは、刀7本のコンセプトからは外れるな。だからきつと、意表を突いて使う用途なのだろう。とりあえず右肘だけ霹靂とやらを出してみると、刹那の肘から鯨の背びれのように湾曲した刃が飛び出た。続けざまに左肘、右膝、左膝と出してみるが、何処にも問題は無さそうさ。

「大丈夫？どれも問題は無さそうかい？」

「……………」

「そうかい。だったら僕も満足だよ。」

「でも鷹丸さん、なんで拡張領域パススロットに仕舞わないんですか？」

「え、そっちの方がカツコイイからだけど……………」

「あ、ああ……………はい……………そうですか……………」

なんでこの機体が、全ての武装を常時装備なのかが解った。完全に鷹兄の趣味みたいだ。素朴な疑問をぶつけるかのように女性職員が質問すれば、さも当たり前のように返され黙るしかないらしい。でも確かに、鞘から抜いたほうがカツコイイってのは解ってしまうなあ……………。

「じゃあ、模擬戦しよつか。鶴さん、ご案内してあげて。」

ちよつ、ちよつと待つてよ鷹兄！いきなり過ぎて心の準備が……………。お、落ち着け俺……………心の準備は、昨日の内に出来ていたはずだ。いったん刹那をチャージャーに戻すと、

前から歩いてくる女性が。……って、ちー姉？今ごろドイツなハズなのに、なんでここに居るのだろう。

「久しぶりだな、黒乃。一夏と2人で元気にやってるか？」

「アンタが模擬戦するって聞いて、緊急帰国したんだってさ。ホントこのシスコ……ぐはっ!？」

「黙れ適当人間。黒乃、この人は……紹介しなくても解るだろう。」

「ハイ、ミス・黒乃。私はアンジェラ・ジョーンズよ、今日はよろしく。」

あつ、テレビで見た事ある人だ！確か、イギリスの元国家代表……アンジェラ・ジョーンズさん。引退して現在では後進の育成に尽力してるとかで、表舞台に立つ事は少なくなっただけ……まさかこんな所で出会えるなんて！……って、あれ？今から……元国家代表と模擬戦すんの!？」

「ま、今日はお手柔らかにお願いね。」

「良く言うよ……。黒乃、アンジーは手加減とかしないからね。まるでどつかのシスコ……グフウツ!？」

「黙れダメ人間。」

「ちよつ、適当は認めるけどダメ人間はナシでしょ！アンタらのせいで、最近は普通に仕事してるでしょうが！」

そう言いながら向こうのピットに行ったであろうアンジェラさんの姿が見えなくなると、昴姐さんが俺にそつと耳打ちした。しかし、シスコンとちー姉を称しようとしたのが2度目もばれてしまったようで……昴姐さんは勢いの良い腹パンを喰らう。さつきもそうだったのに、姐さんには反省の2文字は無いのだろうか。

でも、漫才を見せてもらったおかげか……少し緊張が解れてきた。狙ってやったって事は無いだろうけど、それでも感謝せずにはいられない。俺は2人に一礼してから、カタパルトへと移動した。そして再度刹那を纏い出撃良しの合図が出るまで、とにかく心を落ち着かせる。

『それでは、発進をお願いします。』

合図と同時に、一気に雷火をフルブースト。相も変わらずとんでもない速度の出る刹那だが、今回は全ての武装を着けているので重量感が違う気がする。重量感⇨安定感……で良いのか？まあいいや、頭は良くないから考えるだけで無駄だ。

「とんでもない機体ね……。でも、私も負けないわよ。」

ラファールを纏ったアンジェラさんは、刹那の速度に驚いている様子だ。それでも強気で不敵な笑みを見せながら、俺にそう宣言して見せた。こつちこそ負けませんという意味を込めて、俺は大きく頷いてアンジェラさんを見据えた。そして静かな時間がしばらく続くくと、その時は訪れた。

『試合開始。』

「まずは小手調べ！」

甘い、栗きんとんよりも甘いぞアンジェラさん！こちらは専用機……小手なんて調べる必要は何処にも無い！アンジェラさんは、正確な狙いでアサルトライフルを撃つてくるが、刹那の速度で難なく掻い潜っていく。あつという間にアンジェラさんに接近できた俺は、途中で抜いておいた神立で斬りかかる。

「っ!?流石に速いわね……。」

刹那は一撃離脱が旨で、恐らく止まったら負けって奴だろう。すれ違うようにアンジェラさんを斬ったが、攻められる内はとにかく強気に行かなくちゃな……。俺は急速旋回して、再びアンジェラさんを正面で捉えた。武装は……しまっている暇も無いし、このまま神立で！

「じゃあ……こんなのはどうかしら。」

グレネードシューター……？どういうつもりか知らないけど、そんなのますます当たりはしないぞ。爆風で巻き込む算段かな？それでもこの刹那には、

ある。アンジェラさんがグレネードを撃つて爆発の瞬間に、安全圏へ

……。

「それっ！……そこっ！」

クイック・イグニッションブースト
Q I Bが
クイック・イグニッションブースト
I Bを

それは一瞬の出来事だった。グレネードシューターから弾頭が飛んで来たかと思えば、すぐさま武装を変更してスナイパーライフルを取り出した。そしてなんとアンジェラさんは、自らが放ったグレネードの弾頭を見事に撃ち抜いて見せる。さ、最初から爆煙を煙幕として使うつもりだったのか！

くつ、文字通り煙に巻かれてしまった……。だけど落ち着け、アンジェラさんの位置はハイパーセンサーで補足している。これがある限り煙幕なんて意味が無いのだから、やるべき事とはとにかく急いで煙の中から脱出する事だ。そう思った俺は、アンジェラさんとは逆方向……右側にクイック・イグニッションブースト Q I Bをした。

「Welcome♪」

「……………!?!」

は？なんで!?飛び出した方向に合わせて、何故だかアンジェラさんが待ち構えている。本当はここでもう1回クイック・イグニッションブースト Q I Bを使って回避するのがこの刹那のコンセプト何だろうけど……間に合いまへーん！英国出身らしく妙に発音の良いウエルカムと同時に、アンジェラさんは俺の腹部にショットガンを押し当てた。

……ショットガンんんんんんん!?いや、タイムタイム……ぎやああああ！腹部にショットガンを連射されたああああ！それもリロードが必要になるまで連射されたおかげか、とんでもなくエネルギーを削られる。おまけと言わんばかりに、アンジェラさんは俺を蹴

り飛ばして距離を取った。

しかし、何でハイパーセンサーが変だったのだろうか？そう思つて良く見てみると、何かフワフワと球体みたいなのが浮いていて、それにラファールの反応がある。もしかして……ダミーモジュールか何か？……ずつちー！そんなんアリかよ、元国家代表のする事かよ！

「わ、笑つて……!？」

はい……？あつ、これドイツの時と同じ現象が起きてるな……。どうやら心的ストレス……と言うか、死に目に会おうと笑顔が出てしまうらしい。いやあ……スミマセン、怖くなつたら笑えてくる性質でして……。アンジェラさんの顔付を見るに、相当ドン引きされてるみたいだ。

いや……しかし、どう攻めたもんな。ゲームの分析をするに、アンジェラさんは後手に回るタイプの敵だ。こちらの動きを的確に潰して、確実にダメージを入れてくる。後出しの強みとなると、ゲーム的に例えるならパライカ。後出しをさせない方法があるとするば……。

……後出しも出来ないくらいの速度で、こちらが先手をとつてしまえば良い。刹那ならばそれが出来る。エネルギーがごっそり減るからアレだけど、やるしかないな……。

俺は神立を鞘に納めて、

オーバーロード・ブレイクニッシュンブリスト

O

I

Bを発動させる。雷火から黒い炎の放出される

轟音と共に、俺は心の中でこう呟く。

（セブンスソード……○ンダム！）

「なっ……は、速っ……!?!」

俺は真つ直ぐ突き進むと同時に、両太ももから紅雨と翠雨を引き抜いて、アンジエラさんへと投げつけた。胴体を狙ったつもりだったけど、空中で逸れて肩装甲に突き刺さる。……つてか、当たった！人間やつてみるもんだな……。アンジエラさんは離脱を始めようとするが……遅いんだな、これが！

オーバー・イグニッションブースト

O I B してから、本当に一瞬でアンジエラさんの目の前まで迫り着く。そして続けざまに腰背部から叢雨と驟雨を引き抜き……。アンジエラさんの胴体を十字に斬り裂く！更に更に！叢雨と驟雨もラファールに突き刺す。これも焦ってしまったせいだ、刺さったのは腕部か……。それでも構わん！次行くぞ、次！

俺は更に両肩から交差させるように、迅雷と疾雷を抜く……。同時にX字に切り伏せる！よしっ、続けてアンジエラさんの胴体を斬りつける事に成功した。おまけに取っついてよ、アンジエラさん！俺は振り抜いた迅雷、疾雷をラファールの脚部に突き刺しておいた。そしてコイツで……。止め！

神立の鞘をアタツチメントから取り外して、居合のようにしてアンジエラさんの胴体をもういつぱん斬り裂く！その一撃が決め手になったのか、ラファールのエネルギーは

空となった。決まった……セブンスソードコンペーション！ぶっちゃけ悪ふざけ半分でやってみようと思っただけど、まさかこんなに上手くいくとは……。

『し、試合終了……。勝者、藤堂 黒乃……。』

試合終了のアナウンスは、何処か戸惑った様子でそう告げた。そうか、あの笑顔を人前で晒すのは初めてだからか……。そりやそうだ、誰だつて引くよあんなもん。今は落ち着いたおかげで、元の無表情に戻つてるけど……。普段がこうやって無表情な分だけ、反動も大きいのかもなあ。

あ、すみませんアンジエラさん……。刺さつた6本の刀返して貰いますね。それを言葉に出来ないから、黙って急いで叢雨、驟雨、紅雨、翠雨、疾雷、迅雷を引き抜いてそれぞれの鞘に仕舞つた。そしてペコリと深々と頭を下げると、ピットへ向かつて飛んで行つた。

「黒乃……。」

ピットに戻つてまず俺を待ち受けていたのは、ちー姉だった。何か言いたげなその顔は、まるで俺に対して遠慮しているように見えた。あく……。悪いけど、ちー姉……。少し疲れたからさ、今言えないなら後にしてくれれば嬉しいな。俺はそれが伝えられないから、俺はちー姉の横を刹那を解除しながら素通りしようとした。

「待て、黒乃……。今のは——」

まあ当然ながら肩を掴まれて制止させられる訳で。今のは……ねえ。どうやったって説明がつくはずが無いので、俺はとにかくさっきの模擬戦の感想を述べようと努めた。そうだなあ……こういう時には、少しばかり格好をつけてやるのも良いでしょう。

「また……死に損ねた……。」

「っ!？」

ちー姉の制止を振り切りながら、俺はそう呟きながら更衣室へと歩いて行く。フツ……今はのかなりクールに決まったんじゃないだろうか。セブンスソードも上手く入るっていう奇跡が起きたし、今日は怖くなければ言う事なしだな。さて、着替えは……しない方が良いかも、まだ刹那を動かす可能性もある。だったら、少し携帯を弄りながら待っていいよかな。

第20話・表

「お疲れ様。今日も良く頑張ったね、黒乃ちゃん。」

模擬戦を終え、刹那を待機形態に戻した黒乃ちゃんへと近づく。今日も今日とて黒乃ちゃんの快勝……。まったく君って女性ひと性は、僕の想像の遥か上を往くんだから。ま、だからこそ僕が惚れ込んでるってのはあるけどね。黒乃ちゃんは、少し間を開けてから首を頷かせた。

「ところで黒乃ちゃん。今日はこの後……時間はあるかな？」

「……………」

「君が良ければ、ぜひ食事にもど思つてね。ほら、この間のお詫びもまだだしさ。」

僕は唐突にそう問いかけたが、いつ切り出しても同じ事だしこだわる必要はないだろう。つらつらと食事に誘う理由を並べたけど、僕にとってはそんな物ただの口実には過ぎない。今の所は……だけどね。こうやって、徐々に僕と食事に行くつてのを黒乃ちゃんにとつて当たり前の事にしていかなくちや。

だから今は理由はなんだっていい。そのうちに、君と特別な夜を……とでも言えるようになれば。だけどそれはまだ早い。もっとじっくり周りから固めていかないと。ど

うやったって逃げ場がないくらいに、ジワリジワリと……。断られるのも覚悟したが、黒乃ちゃんは肯定の意志表示をしてくれた。

「そうかい、それは嬉しいな。」

「……………」

「時間にはまだ余裕があるから、黒乃ちゃんはシャワーでも浴びてくると良いよ。僕は少し用事があつてさ、少し外すね。あ、時間になったら鶴さんが迎えに来てくれるから。」

黒乃ちゃんが誘いに乗ってくれたおかげか、僕は用事を片付けようと足早に第1ピットを去った。そしてそのまま向かうのは、向こう側の第2ピットになる。何の用事かって、模擬戦相手の監督官みたいな人を言いくるめる事かな。なんとって、今回の子もダメそうだしねえ。

僕としては大歓迎なんだけど。良い調子に黒乃ちゃんの2つ名は浸透し始めている。八咫鳥とは、ジョーンズさんも良い名をくれたものだよ。どういう訳か、皆似たような物を黒乃ちゃんから連想するみたいだし。黒乃ちゃんの悪評は、広まれば広まるほどいい。黒乃ちゃんの良さに気付けるのは、僕さえいれば良いんだ。

おっと、少し話が脱線しちやっただかな。ちゃんと今回はどう流すか考えておかないとねーつと。僕は相手サイドのピットへと向かうが、いつもの調子を崩さない。すると向

こうも、やがて話にならないって諦めてくれるし。僕の代理って肩書は、本当に便利な物だ。

「やあ、どうもどうも。今日はお疲れ様です。」

「近江社長……お疲れ様じゃないですよ!?!何なんですか、あの藤堂 黒乃とかいう子は!?!」

「何かって、ん〜……日本の代表候補生ですけど?」

「ふざけないで下さい!あの子の怯えよう……これはもはや国際問題ですよ!」

おやおや、やつぱりダメみたいだね。今日戦ったのは、確か中国の子だったっけ? 件の中国の子は、ベンチに座って自分の身を抱きしめる様にガタガタと震えている。黒乃ちゃんの笑顔はインパクト大だしねえ……。僕は可愛いと思うんだけど。それにしても、国際問題かあ……それで本当に脅しのつもりなのかな。

「そうですか?どのように解釈してもらっても構いませんけど、それで困るのは貴女達……というか貴女の祖国だと思えますけど。」

「ど、どういう意味です?」

「国際問題に発展させたいのであれば、御勝手にどうぞ。こちらとしても、他国家への部品の納入が捗ります。」

「なっ……!?!ちゅっ、中国とは今後取引をしないと……?」

「まあ、それはそちらの動き次第ですけどね。僕らは全然困りませんし。」

いわゆる大企業つてのを舐めないでほしい。僕のご先祖様が脈々と大きくしたこの会社は、世界規模で大きな影響を及ぼすんだから。もちろん、監督官さんもそれは解つてるだろうけど。正直なところ、中国と取引しなくなつて痛くも痒くもない。

「……せめて、この子の心のケアはお願いします。」

「ええ、それは勿論のこと全力を持つて対処しますよ。必要な物はこちらが全て保証しますから。」

まあ……自分一人の判断で、近江重工とのパイプラインを断つわけにはいかないだろう。監督官さんが冷静な人で助かったよ。うくん、しかし……もつとやり方は考えないとねえ。こういう手口つて、黒乃ちゃんはどう思うんだろう？ 軽蔑されるのは嫌だなあ。でも、使える物は使う主義なんだよねえ。

「じゃつ、僕はこれで。後は部下が来ると思いますがから。」

余計な時間を取られちゃったな……。僕は一つ扉をくぐると同時に、かなりの速度で社内にある居住スペースへと急いだ。どちらかと言えば、実家よりもここに居る時間の方が圧倒的に長いけど。僕は部屋に入ると同時に、お気に入りの白衣を脱ぎ捨てる。そして、外出用の服が入っているクローゼットを開いた。

そうだなあ……着てた服は全部着替え直そうか。高いスーツとかいらなないと思つて

たけど、まさか女性と食事って理由で必要になるとは思わなかったな。僕は1、2回しか着た事のない新品同然のフォーマルスーツ一式へと身を包んだ。よしっ、こんな感じで大丈夫かな。

時間はまだ余裕があるけれど、レディを待つのが男の甲斐性つてもんでしよう。着替えを終えた僕は集合場所へと向かうと、やっぱりそこには黒乃ちゃんの姿は無い。あるのは、いかにも老紳士と言った風体の男性1人だ。この人は近江家専属の運転手さんで、名前は相模^{さがみ}さんという。

「馬子にも衣装ですな、坊ちやま。」

「うん？ハハ、そうだね……こんなのはなるべく着たく無いからさ。」

「普段からそうであれば、奥様もさぞ……。」

「ああ、タイム……母さんの話は止めてよ。」

相模さんは、てつきり僕をからかいにきたんだろうと思った。しかし、母さんの話題を振るところを見ると……小言だったんだらう。本当、産んでもらってただけ……母さんとは反りが合わない。きつと黒乃ちゃん存在を知ったら、何が何でも僕から引き剥がしにかかるはずだ。鷹くんにはもつとふさわしい子が……なんて言っさ。

「社長、お待たせしました。さ、藤堂様……。」

「うーん、見違えるね……もちろんいい意味で。まるでお姫様みたいだ。」

嫌な考えで頭がいっぱいになっていた僕だが、黒乃ちゃんを見た瞬間にそれは吹き飛んでしまった。軽い調子で取り繕っている僕だけど、とても動揺している。黒いドレスに身を包み、上品なナチュラルメイクが施された黒乃ちゃんは、美しく……そして輝いて見えた。流石は鵜さん……良い仕事をするねえ。

「それでは社長、藤堂様に失礼の無きよう。」

「解ってるよ、鵜さんに仕込まれたんだから。そういう訳で、お手を拝借……お姫様♪」
鵜さんは、僕の社交的マナーの指導もしてくれた。随分昔の事だけど、すっかり身体に染みついてしまっている。どちらにせよ、黒乃ちゃんのエスコートは完璧にこなさないと……。僕はなんとなく戯けるようにして、黒乃ちゃんへ手を差し出す。そのまま車へと導いていった。

車に乗り込むと、移動時間に相模さんの事を紹介しておく。きつと、これから黒乃ちゃんもお世話になる機会があるはずだからね。だけど、少し恥ずかしかったな。なんとなく、相模さんが僕の昔話をし始めるんだもの。やんちゃしてたっていうか、子供だっただけにけっこう色々やっちゃってたから……。可愛らしい思い出だと思ってくれば何よりかな……。

「坊ちゃま、目的地にございます。」

「うん、ありがとう相模さん。」

そうこうしている内に、どうやら目的地へと着いたらしい。相模さんが車を停めると同時に、僕はせつせと降車した。黒乃ちゃんが座っている側に回ると、ドアを開けて黒乃ちゃんの手を取る。そして黒乃ちゃんを降車させると、周囲の男性達が少しざわついた。フフ、男だったら反応しちゃうよねえ。今日の黒乃ちゃんは、本当に美しいもの。

黒乃ちゃんは車から降りると、すぐ目の前に立ちはだかるビルを見上げた。またウチとは違った印象を受けるのだろう。首を元の位置へと戻した黒乃ちゃんは、今度はキョロキョロと周りを見渡す。……もしかして、周りの女性達に見劣りしてるとか思ってるのかな。そうだとすれば的外れもいいとこだけど、僕は黒乃ちゃんに耳打ちする。

「大丈夫、ここに居る誰よりも君は綺麗だよ。」

「……………」

僕がそう言えば、黒乃ちゃんは控えめなお辞儀を見せる。こういう謙虚なところも、最近の時勢からすれば珍しい。鼻真目に見ても黒乃ちゃん以上の女性は世の中に居ないのであると思えてしまう。だとすると、せめてそれに相応しい男であろう。一応は僕の方が5つ年上なんだしね……。

「それじゃ、行こうか。」

「……………」

出発を促すと、黒乃ちゃんがそつと僕の腕に手を添えた。確かに、正しいのかも知れ

ないけど……黒乃ちゃん、君はもう少し警戒心を持った方がいいと思うよ。何かって、黒乃ちゃんの豊満な胸が僕の腕にグイグイと押し当てられているのだ。わざと……なわけないよねー。それは少し自惚れ過ぎか……。だったら平常心で乗り切るしかない。特に気にする様子を見せないよう心がけ、最上階のレストランを目指す。辿り着いてみれば、わざわざマネージャーさんが待っていた。父さんがここのお得意様だしね……。僕にはそんなに気を遣わなくても良いんだけど、その父さんの息子なんだから仕方ないかな。

僕らを通されたのは、VIP待遇の個室だ。もつとも個室にしても2人には広すぎるくらいだけど。かなり前から予約しておいたけど、キャンセル待ちとかじゃ無くて本当に良かった。最後に来たのはいつ頃だったかな……。確かISが世に出るのよりも前、家族3人で来たきりだったかも。

「黒乃ちゃん、こっちにおいでよ。」

「……………」

「ここからの夜景、凄く綺麗でしょう？僕には少し眩しすぎるくらいだけど。」

この個室は扉から見て正面に位置する壁が全面ガラス張りになっている。時分は既に夜のせいかな、都会は見事な光のアートを作り出す。うん……この景色は変わらない。強いて言うなら、開発が進んだのか眩しさが上がっているくらいだろう。またいつ

か、家族3人で来られればいいけれど……。

「……………」

「黒乃ちゃん……？」

視線を感じて黒乃ちゃんの方を見てみると、ジツと僕の事を見ていた。……それには、どんな意味が込められているのかな？君と過ごした時間はまだ短い……だからこそもっと後からだと思っていたのに、これじゃあこのくらいなら大丈夫って思ってしまうじゃないか。

気が付けば僕は、黒乃ちゃんの腰に片腕を回してしまっていた。……ここまで来たら引き下がるのもなかなかアレだね。僕は少しばかりの力を腕に込めると、そつと黒乃ちゃんを抱き寄せる。うくん、恋しちやつてるねえ……僕。そうかそうか、人は焦がれている異性と密着すると本当に胸が高鳴るんだねえ。

「……そろそろ席に着こうか。ずつと景色ばっかり見てたつてお腹は膨らまないし。」
「……………」

そのまましばらく夜景を眺めていたけど、僕だつて男だしいろいろと限界つてものがある。僕がそう促すと、黒乃ちゃんも首を頷かせて同意した。とか言つてると、なんかお腹が空いてきた気がする。僕は問題ないけど、黒乃ちゃんは好き嫌いが無いと良いけれど……。



「さあ着いたよ、お姫様。」

黒乃ちゃんとの楽しい時間はあつという間に過ぎて、現在は黒乃ちゃんの家にはど近い駅だ。少し失敗だったのが、黒乃ちゃんの着替えをウチに置きっぱなしだった事かな。おかげで2度手間になってしまつて、夜遅くまで連れ回す結果になってしまった。

本当は家まで送るつもりだったんだけど、それは本人から断りの意志が伝えられた。まあ、何かあれば刹那もあるしねえ……。だから今の時代は男の僕らが頼りないって事なんだろう。男性が女性のみを案じるのなんて、今からすれば少し時代遅れなのかな。

「今日は無理を言つてごめんね。お姫様は楽しめたかな。」

「……………」

なんやかんやでお姫様呼びを気に入った僕は、引き続きそう称しながら今日の感想を聞いてみた。すると黒乃ちゃんは、間髪入れずに首を頷かせる。ふと気づいたのだけけれど、黒乃ちゃんはどうか首を動かすタイミングで肯定や否定の度合いを示しているらしい。

今のは食い気味に縦に振ってくれたし、本当に楽しかったと思つてくれているみたい

だね。だとすると、連れて行った甲斐があった。でも残念なことに、そうしょっちゅうは連れて行ってあげられないけどね……。僕もそれなりに稼ぐとは言え、定期的にあのグレードのレストランとなると……財布の中身が消し飛んじやうよ。

「あ、そうだ……。君がお酒が飲めるようになったら、また食事に誘っても良いかな？」
「……………」

すぐすぐとはいかないけど、遠い未来の約束はしてしまっても構わないだろう。僕は今日お酒を飲んだけど、ぜひ黒乃ちゃんと一緒に飲んでみたいものだ。この問いかけにも黒乃ちゃんは肯定してくれる。これは良い調子と思つていいのかな。いかんせん、女の子を口説くのなんて初めてだからなあ……。後で鶴さんに相談してみよつと。

それにしても……黒乃ちゃんがIS学園に行つちやうと、会う機会は格段に減つてしまふ。その問題に関してもどうかしなないとねえ。思いつきで周囲を巻き込む僕だけど、これは流石に一人で解決すべきか。できる事があるとすれば、今から根回しかな？ 幸い学園に千冬さん以外の知り合いも居るし……。

「名残惜しいけど、今日はこの辺りで……。」

お開きにしようとする、遠くに人影が見えた。注視してみると、あれはどうやら……千冬さんの弟の一夏くん？ どうしてこんな所にとは思つたけど、理由はとても簡単に予想がつく。彼はきつと、帰りの遅い黒乃ちゃんが心配で来たのだろう。とりあえず

最寄駅に行つて、様子を見にきたつてところかな。

健気な事だねえ……いつ現れるかなんて解つたものじゃないのに。僕がそうやって一夏くんの方を見ていると、彼もこっちの事に気がついたみたいだ。それと同時に一夏くんは凄まじい形相を見せて、歩く速度を上げこちらへ歩み寄つて来る。さて、どうすべきかな……。僕からすれば、君は嫉妬の対象でしかないんだよねえ……。

黒乃ちゃんと共に幼少期を過ごし、黒乃ちゃんと同じ屋根の下で10年近くも共に生活していたなんて。間違いなく、黒乃ちゃんにとつて彼は大切な人だ。問題は、黒乃ちゃんがどういふ認識で大切に思っているか……。だけど。君は……。そんな顔を見せているんだから、少なからず黒乃ちゃんに対して思う所があるんだね。

「気をつけて帰つてね。おやすみ……。お姫様♪」
「……………」

一夏くんに、少しばかり意地悪をしておこう。そう思い立った僕は、去り際に黒乃ちゃんの前髪を手の甲で押し上げ額にキスを落とした。すると一夏くんの足は、ピタリと止まってしまふ。黒乃ちゃんの方は、顔を俯かせてモジモジしていた。おや、意外だな……。案外僕が思っているよりも男として意識してくれてるのかも。

フフ……。これは嬉しい誤算かな。さて、一夏くん……。君とはまたゆつくり話そうね。そういう意味を込めて、遠くの一夏くんに微笑みかけておいた。僕の挑発的行動がよほ

ど気に障ったのか、一夏くんは我に返ったかのようになまた歩き始めた。ま、どうやって追いつける距離じゃないけど……。僕は余裕な態度を崩さずに、車へと乗り込んだ。

「……坊っちゃま。」

「うん？ どうしたの。」

「あまり感心はしませんな。」

「ハハッ、そうだろうね。でも僕だって人の子って事だよ。それなりに対抗意識くらいはあるさ。」

「左様で……。」

車が走り出すと同時に、相模さんに窘められてしまたしなう。確かにやり過ぎも否めないかもだけど、僕には数少ないチャンスだ。しっかり生かさないと、一夏くんの動き方次第では……僕に勝ち目はないに等しいのだから。まあ、ライバルの1人や2人居ないとつまらないって事さ。でも何人いようと、僕は負ける気なんてさらさらないけれど。

どんな手を使つてでも……僕は黒乃ちゃんを手に入れる。それこそ一夏くん、君は大いに役立たせてもらうよ。君が黒乃ちゃんを女の子として見ていないうちは……ね。車の窓ガラスに映る僕の表情は、とてもじゃないけどいいものとは言えない。簡単に言えば、悪戯を思いついた悪ガキのような有様だ。

第20話・裏

「お疲れ様。今日も良く頑張ったね、黒乃ちゃん。」

ほ、本当だよ……。くたびれた様子の俺は、刹那を待機形態に戻す。そして俺の事を待ち構えていた鷹兄に、ペコリと小さな会釈をして答えた。なんでこんなに疲れているかと言えば、今日も今日とて模擬戦だったからだ。そう……。今日も今日とて！

俺が中3になってからおかしいもん……。いつもといっても差支えがないくらい何処から相手を連れて来て……。模擬戦！模擬戦！模擬戦の嵐！しかも勝ち方が気分が悪いにも程がある。毎度の如く例の笑顔が出てしまつて……。相手が引いてる間に攻勢に出て勝つちやうんだよ。そんなん、正々堂々とは程遠い。

「ところで黒乃ちゃん。今日はこの後……。時間はあるかな？」

「……………」

「君が良ければ、ぜひ食事にもどってね。ほら、この間のお詫びもまだだしさ。」

お詫び……。というと、刹那を貰ったばかりの頃の事かな。確かあの時は、急な模擬戦が入つちやつたんだっけ。あまりにも突然すぎたから、お詫びを今度する……。つて話しだつたと記憶している。とはいえ、半ば忘れかけちゃつてたけど……。俺の返答は、勿

論イエスだ。

今日はイツチーが食事当番ゆえ、遅くなくても平気だ。とりあえず鷹兄の言葉には首を頷かせて、肯定の意志を示した。後は……早めにイツチーに連絡を入れておかないと。今日は飯いらずで、少し遅くなる……だから空メールは2本送つとかないと。

「そうかい、それは嬉しいな。」

「……………」

「時間にはまだ余裕があるから、黒乃ちゃんはシャワーでも浴びてくると良いよ。僕は少し用事があつてき、少し外すね。あ、時間になったら鶴さんが迎えに来てくれるから。」

用事……つてのは、今日の模擬戦相手と今日はお疲れでした的なやり取りでもしに行かぬかな。それはいいか、焦らないで良いにせよ……女の子としちゃシャワーくらいは浴びとかないと。俺は更衣室に向かうと、ロッカールームの更に奥まで進む。そこは何とシャワールームになっているのだ！

……別に珍しくもなんともないか。そんじや、ISスーツを脱いで……つと。うゝむ……裸になる度に思うが、黒乃ちゃんの身体は発育が良いなあ……。もう……ボンツ！ キュッ！ボン！を体現したかのような体型なんじやないだろうか。スレンダー巨乳の典型？個人的には小さい方が良かったけれど……。

こんな事を言うのと鈴ちゃんにぶつ飛ばされそうだけど……マジで重い。俺としても女性の裸なんて見慣れてきてしまったし……それこそ、自分の身体って思ってるせいかな本当に重くて邪魔程度にしか思えないんだよなあ。何センチあったつけ？確か……ちー姉とほぼ同じ体系だったと思うけど。

時々だけど、普通に姉妹と間違えられる時もあるんだよね……見た目似てるし。その時のちー姉は、否定するけど凄く嬉しそうに否定するから可愛い。……って、考え事しながらシャワーを浴びてるが、臭いとか大丈夫かな……？ん、まあこんなんでも良いだろ。ノズルを捻って水の放出を止めると、しつかり身体を吹いてシャワールームを後にする。

あ、ヤツベ……着替え持つてくんの忘れちった。まあ大丈夫か、自宅じゃないし。自宅だと、イッチーとバツタリコースまつしぐらなんだよね。ラッキースケベ？普通にされてますけど何か？裸でバツタリ、おっぱい揉まれる……本当、俺が中学に入ってから多発している気もするな。

まあ全部イッチーに悪気はないって解ってますし。イッチーはMだからご褒美目当てかも知れんけど……。そんなのは良いから、とつと次に行くか。シャワーだけだから時間はそんなに経ってないし、仕事現場でも見学してみようかな。……と想っている、更衣室の出入り口前では鶴さんが待ち構えていた。

「藤堂様、お待ちしておりました。さ、こちらへどうぞ。」

え……？こちらにどうぞって、ちよつと早くないか。でも調度いい時間になったら鶴さんが来ると鷹兄がそう言うっていたのもある。ええい、良いから鶴さんに着いて行ってみよう。俺が通されたのは、大きな化粧室ってか……衣装室？そこには沢山のドレスが並べられていた。

「社長がお連れになるレストランでは正装が必要なので、どれがお好みの物があればおっしゃって下さい。」

へえ、考えてみれば……それが必要だったか。いわゆるドレスコードって奴だな。それは良いんだけど鷹兄、いったいどこまで高級な場所へ連れて行くつもりだい……？ま、まあ……それは考えない事にして、ドレスを選んでみる事にするか。えくつと、どんなのが良いかな……。

「……お困りでしたら、僭越ながらわたくしめを選んででも？」

「……………」

「かしこまりました。ではやはり、藤堂様には黒がお似合いかと……。」

迷いつつドレスをとつかえひつかえしていると、鶴さんが声をかけてくれた。大人の女性に任せられた方が良いと判断した俺は、首を傾かせて鶴さんにお任せする。すると鶴さんが手に取ったのは、黒単色でセクシーなドレスだ。肩やら背中やらがバックリと見え

ているが、確かに黒乃ちゃんならこれは似合う。

「……………」

「恐れ入ります。お着替えの方はあちらで、終わり次第化粧台の方へお越しく下さい。」

ドレスを受け取り首を頷かせると、鶴さんはそう言った。化粧台ねえ……メイクも必要か。まあ、こんな豪華な服装をするのに、すっぴんなままでは味気ないものな。だったら、なるべく鶴さんを待たせないようにしないと。そう思っていたが、ドレスを着るのに悪戦苦闘してしまう。

なんとか着終わって鶴さんの元へ向かえば、配慮が足りませんでしたと頭を下げられる。恐らくは俺が手間取った事に因してだと思うけど、そう言われると恐縮してしまう。そしてその後は、鶴さんの手によつて着々とメイクアップされてゆく。それが終わる頃には、かなりの時間が経過していた。

女性の支度には時間がかかると言うが、それをまさか実体験する事になるとは思わなんだ。しかし時間をかけたかいたが、とんでもない変貌を遂げている。鏡に映る自分が、まるで自分では無いほどに綺麗だ。黒乃ちゃんの身体だし、自分じゃないと言えば自分じゃないけども……。

黒乃ちゃんの素材を生かすかのように、メイクはナチュラル。そして食事の席という事もあってか、髪は結い上げられている。コレは……有能過ぎるでしょうよ、鶴さん。

思わずメイク術とかを習いたくなってしまうような気さえする。俺は立ち上がって、鶴さんに深々と頭を下げた。

「良いんですよ、藤堂様。わたくしも楽しみながらさせていただきますから。」

「……………」

「それでは、行きましょう。そろそろ社長もお待ちになつていましてしょうし。」

鶴さんに連れられて近江重工本社ビルの入り口まで向かえば、確かに鷹兄は俺の事を待つていたようだ。鷹兄に至つては、別に待たせて怒るとかそんなはなさそうだけどね……。何と言うか、常にふわふわとした人だし。むしろ待ち時間ですら楽しんでいたかもしれない。

「社長、お待たせしました。さ、藤堂様……………」

「うくん、見違えるね……………もちろんいい意味で。まるでお姫様みたいだ。」

そう言う鷹兄も今日はビシツと決まっている。俺がお姫様ならば、鷹兄は王子とかの表現が良く似合いそうだ。でも……………その頭はセットしないんですね。まあ天然でおしゃれパーマみたいな髪型だし……………問題は無さそうか。逆にストレートパーマにしたらどんな感じになるんだろう……………?

「それでは社長、藤堂様に失礼の無きよう。」

「解つてるよ、鶴さんに仕込まれたんだから。そういう訳で、お手を拝借……………お姫様♪」

お、おお……この滲み出る鷹兄の紳士&爽やかオーラ……。慣れた振る舞いで俺に手を差し出す鷹兄。そのせいか、本当に鷹兄が王子様みたたく見えた。思わず反応が遅れてしまうが、俺は鷹兄の手を取ってエスコートされる体勢に。なるべく優雅に振る舞うように心掛け、いかにも高級そうな黒塗りの車へ乗り込んだ。

出発と同時に無言が続く心配をしたけど、鷹兄が運転手さんの紹介をしてくれた。どこからどう見てもジェントルマンなお爺さんは、専属運転手の相模さんと言うらしい。相模さんも俺に気を遣ってくれたのか、鷹兄が小さな頃の話しを聞かせてくれた。

鷹兄は天才少年の名をほしいままにしていたみたいだけど、どうやら少しばかり悪戯も過ぎる物を開発しては周囲を困らせていたとか。鷹兄としても黒歴史らしく、困ったような照れたような表情を浮かべていた。これから付き合いの長くなる人だし、いろいろな一面を知れるのは嬉しく思う。

「坊ちやま、目的地にございます。」

「うん、ありがとう相模さん。」

車が乗り付けたのは、これまたとんでもない高さのビル……。つてかヒルズ？つて奴かな。鷹兄のエスコートに導かれ車を降りれば、周囲には……。ドレス姿の綺麗な女の人が沢山！ムフフ、やはりセレブは美人が多いなあ。そうやって女性達を営め回すように見ていると、鷹兄が俺の耳元で囁いた。

「大丈夫、ここに居る誰よりも君は綺麗だよ。」

「……………」

あつ、いやそんな……見劣りしてるとか思ってるんじゃないかと……でも理由はどうあれ褒めてもらったんだし礼をしておくのが義理だろう。ここじや深々とした礼は浮くと思つて、会釈するように小さく身体を曲げた。……つて、あんまり前のめりになると胸がポロリしそうだよこのドレス……。

「それじゃ、行こうか。」

「……………」

お、おうよ鷹兄……。あゝ……えゝつと、女の人は男性の腕にそつと寄り添わないといけないんだつたかな。失礼しまゝすと言つた感じで、恐る恐る鷹兄の腕を取つた。でもこの体勢……嫌でも鷹兄の腕におつぱいが当たつちやうな。いや、別に俺が嫌とかじゃないけど……。なんかこう、鷹兄の身体が少し強張つたのが解つたから。

鷹兄、ほんと申し訳。あててんのよ、じやなくてあたつちやつてんのよな状態なわけであ。ほら、俺のおつぱい大きいから。……何を自慢げに言つてるんでしよう。とにかく、男としていろいろキツイ所はあると思うけれど……人の目があるうちは我慢してつかーさい。

ちなみに、レストランは最上階なんだそう。エレベーター内の無言が滅茶苦茶痛々

しかつた……。なんでだろうね、俺が無言なのなんていつもの事なのに。しつかりせいと自分に言い聞かすと、鷹兄の横をピツタリと歩いて行く。そして辿り着いたレストランでは、マネージャーさんが俺達を待ち受けていた。

詳しく知らないけど、マネージャーさんってなんか偉いポジションの人じゃなかったかな？ 鷹兄の来店でわざわざ顔を見せに来るなんて、近江という名の重さを思い知った気がする。その考えは、通された場所が更に物語っていた。そこは個室と呼ぶにはあまりにも広い。庶民には到底踏み込めない領域だ……。絶対。

「黒乃ちゃん、こつちにおいでよ。」

「……………」

「ここからの夜景、凄く綺麗でしょう？ 僕には少し眩しすぎるくらいだけど。」

萎縮して足が止まってしまったが、鷹兄が俺を呼ぶ声で目が覚めた。手招きする鷹兄の横に立つてみると、とんでもないパノラマが目の前に広がっている。一面ガラス張りの壁から都会の夜景が一望できるじゃないか。鷹兄の眩しすぎるって感想……。なんだからよく解かるなあ。

……あ、鷹兄の目え開いてる!? その顔つきも真剣そのものなところを見ると、予想通りに真面目な事を考えたと開眼するんだな。つへ〜……。糸目だったから解りづらかったけど、ちゃんと開いたら切れ長で鋭い目つきなんだ。日ごろのゆるふわな雰囲気は鳴

りを潜めて、鷹の名に相応しい猛禽類のような雄々しさを鷹兄から感じた。

「……………」

「黒乃ちゃん…………？」

ヤベツ、ずっと見てたせいでバツチリ目が合つてしまう。そこで目を逸らすと、何か誤魔化したと言っているような物だ。だからこそ俺は、負けじと鷹兄の目を見続ける。すると鷹兄は、どういう事か俺の腰に腕を回して自身へと密着させる。……………どういふ事なの？まあ別にいいか、なんとなくムーディな雰囲気にしたのは俺だろうし。そのくらいなら全然許す！

「……………そろそろ席に着こうか。ずっと景色ばかり見て立つてお腹は膨らまないし。」

「……………」

それは鷹兄の言う通りだ。でも、おかげで心は満腹だよ……………なんつって！ー人心の中で恥ずかしい台詞を呟くと、鷹兄が椅子を引いてこちらへどうぞお姫様なんて言う。……………紳士、金持ち、イケメン、頭良いとか……………貴方は何処の乙女ゲーから出てきたんです。そんな人に連れられてるんだから、はしたない真似はできないぞ……………。



「さあ着いたよ、お姫様。」

……ハッ!? 鷹兄にそう呼びかけられ意識を覚醒させると、俺の視界に広がるのは織斑家邸宅からもほど近い最寄駅だ。少しばかりブーツとしてたみたいだど、食事に関して は夢じゃないよね……。いや、だってさ……。本当に夢のような時間だったんだもの。

いわゆるコース料理つてのが出てきたわけだが、テレビで見た事しかないような高級食材がふんだんに使われていた。あゝ……。あのオマール海老は美味かったな。……。シンプルにA5ランクのフィレステーキも捨てがたい……。俺決めた、鷹兄に一生着いて行くわ。

「今日は無理を言っでごめんね。お姫様は楽しめたかな。」

「……………」

それは愚問という奴ですぞ鷹兄。俺はすぐさま首を縦に振って肯定を示した。この間のお詫びも兼ねてるとか言ってたけど、俺からすればお釣りがくるくらいだ。つつましい庶民的な生活を送ってますからね……。まあ今のところ食いつばぐれる事も無いかから問題は無いけど。

「あ、そうだ……。君がお酒が飲めるようになったら、また食事に誘っても良いかな?」

「……………」

行く行く行く! 絶対行きます! 前世じゃ酒とか得意な方では無かったけど、とにかく

鷹兄と食事つてのなら何処へだつて着いて行かせてもらいます。……どうやら俺は、完全に餌付けされてしまったみたいだ。それはとにかく、再度の問いにもしつかり首を縦に振る。

「名残惜しいけど、今日はこの辺りで……。」

鷹兄は解散の音頭を取ろうとして……止めた。表情はいつものゆるふわモードに戻っているため、何を考えているかは読み取ることはできない。でも、何かに気が付いたみたいないな印象を……も、もしかして……ばれているのか？俺が……実はずっとトイレを我慢しているという事を！

例え喋る事が出来たとしても……スミマセン、トイレつて何処ですか？……なんて聞ける雰囲気じゃ無かったんだもん……あのお店！そんで喋られないから最悪だよ。結果、模擬戦が終わつてからずくつと我慢しているのである。た、鷹兄……もし気が付いたのなら立ち去つてくれるとありがたいんだけど……。

「気をつけて帰つてね。おやすみ……お姫様♪」
「……………」

鷹兄はそう言う俺の前髪を手の甲でどけて、額にチュツとキスを落した。あ……これはアレか、酔っぱらつてるか……もしくは妹扱いされてるかだな。キスはする場所によつて、意味合いが変わつてくる……とかだった気がする。つてか、そんな事よりも

……ずっと我慢してたトイレの限界が……。

なんかはしたくないけれど、身体を動かしていないと気が散らせない。鷹兄はそんな俺の様子をニコツと笑うと、足早に車へと乗りこんでしまう。あ、今のは解る……今のは絶対に意地悪な微笑みでしたわ。つまりトイレに行きたいのバレテラ。鷹兄……俺にもそれなりの恥じらいってもんは——

「……よう。」

はあああん!?び、ビックリしたあ……勢い余って、おしっこを漏らすところだった……。あつ、ヤバツ……この安堵感もヤバイ……。ぼ、膀胱が……安心感からか緩む……。もー……イッチー!驚かすなよ、おかげでこんな場所で漏らし……。イッチー?なんでイッチーが、ここに居るのだろう。

「遅いから心配して様子を見に来たけど、今の……誰だ?なんで男とこんな時間まで外をほつつき歩いてんだよ。もしかして、何かされたのか?どうなんだよ……?」

ひうつ……!?ど、どうしたのさイッチー……。そんな捲し立てるみたいに言われたって、俺が答えられないのなんてイッチーが一番良く解ってるはずじゃん。ってか、何でキレてんの……カルシウム不足?いかんよー最近の若い子はさあ……小魚食べな、小魚。

「……悪い、大きな声出して。帰ろうぜ……。」

いや帰ろうぜってアンタ……俺ってば、駅のトイレを借りようと思ってたんだけど。な、なんか……小学生の時にも似たような事があつた気が……。あの時はイッチーの手を振り払ったが、今日のは無理そう……。イッチーは、痛いくらいに俺の手を握って引つ張っているから。何とか家まで耐えろ、そう唱えながら連行される俺だった。



(遅い……あまりにも遅すぎる……。)

夕暮れ時に黒乃からメールの回数からして、夕飯はいらないうって事も遅くなるってのも理解が出来る。それにしたって、遅すぎやしないだろうか。だってもう……10時を回ってしまいそうなんだぞ。黒乃がそこの男よりも強いなんて知ってるけど、流石にこれは心配だ……。

『アンタ、心配し過ぎ。』

「……………」

その時ふと、祖国に帰ってしまった友人の声が頭でリピートされる。黒乃だつて子供じゃない。そんなの、俺だつてよく解かっている。だけど、俺の気持ちは誰にも解からない……。実の両親に捨てられて、親代わりになってくれた黒乃の父さんと母さんも死

んじやって。箒が居なくなつて、束さんが居なくなつて、鈴が居なくなつて。

皆……俺の前を去つて行つてしまふ。こんな希少な体験をしたせいか、いつも隣に居てくれる黒乃の事だけはと思つてしまふ……。そうだ、誰にも解かる物か……。気付けば必ずそこに居てくれる人を異様に心配してしまふ気持ちなんて。俺は厚手の上着を引つ掴むと、乱暴に外へと飛び出た。

しつかりと鍵は締めておいて、俺は駅の方に向かつて歩き出す。いつ電車が来るなんてこんな遅い時間のはいちいち覚えてやしないけど、最寄りの駅で待つていれば確実にさう。そのうちに黒乃が顔を見せると、自分に言い聞かせて夜道を歩いた。

早歩きでもそれなりに距離はあるが、遠目に最寄駅が見えてきた。夜遅くても人が集まる地域ならまだしも、住宅街とも少し距離のあるこの駅に人の姿はまばらだ。そんな寂しい駅の出入り口付近に、とてつもなく目立つ高級車が止まっていた。そこから降りて来たのは1組の男女……。一方は、どこから見ても黒乃だった。

……あの男が誰か知らないけど、こんな時間まで黒乃を拘束しやがつて。文句の1つも言いたいが、今は黒乃を回収する方が先決だ。そう思つて俺が更に歩く速度を上げた途端の事だ。確実に……。男は俺にニヤリと目配せをした。そして次の瞬間に、信じられない行動に出る。

あの野郎、黒乃のデコにキスしやがつた……。それを理解した俺は、何か……。頭に血

が一気に登るかのような感覚を味わう。……黒乃に、俺の家族に……！俺の黒乃！俺から黒乃を奪うのか……？俺の隣に居てくれる黒乃を、俺から取るつもりなのか……！？俺の中に芽生えているのは、明確な殺意……。

……は？いや、待てよ……落ち着け、俺は何を……？俺の黒乃つて、黒乃は誰の物でも無い……。黒乃は黒乃だ。そう……黒乃は黒乃。俺の隣が定位置の、心優しい家族。なんだつて俺は、黒乃を物扱いしたみたいない方を……。冷静になろうとしても、自己嫌悪でまともな態度が取れない俺は……。

「……よう。」

黒乃に幾分か苛立ちをぶつけるかのような態度をとつてしまう。……最悪だ。黒乃は何も悪くないのに、あのクソ野郎の事を思い出すと……イライラしてしょうがなくなってしまう。その事にまた俺はイライラして……。最悪な悪循環が、俺の頭の中で渦を巻く。

「遅いから心配して様子を見に来たけど、今の……誰だ？なんで男とこんな時間まで外をほつつき歩いてんだよ。もしかして、何かされたのか？どうなんだよ……？」

クソクソクソクソクソ！俺は、何をやってんだよ……！黒乃が返事をできない事なんて、当たり前前の事だ。それなのに俺は、こんなにも声を荒げて……いったい何がしたいんだ！俺には解る……。黒乃は今、俺に怯えている。多分他の奴には解からない些細な変化

だけど、珍しいだけに俺にはハッキリと解ってしまふ。

「……悪い、大きな声出して。帰ろうぜ……。」

とりあえず謝ったが、黒乃の顔なんて見てはいられない。俺は黒乃の手を強引に掴むと、背を向けて黒乃を引つ張る形で家の方へと歩く。この繋いでいる手は、俺だけの特権だったはずなのに……。遠くに行かないでくれ、俺を一人にしないでくれと……。そんな想いで、俺は黒乃の手を強く握った。

第21話

模擬戦漬けの日々を送る中、ついにこの日がやって来た……。受験シーズン真っ只中、俺氏もI S学園の入試が今日のこの日に行われる。今はイツチーの淹れたコーヒーを飲みながら一服しているけど、もうすぐ戦いに赴くと思うと気が重い。なんたってI S学園の入試は、受験は戦い（物理）だもんな。

まあ……座学が無いだけいいのかも知れない。専用機も使って良いって言われてるし、合格する確率が高いけれど。っていうか、代表候補生は試験とかパスでいいじゃん。もしこれで落ちてもしたら……赤っ恥もいいところだ。恐らくだけど、即代表候補生から除名だろう。

そうなると、刹那も返さないとならなくなるな……。最初こそはなんだこの機体はつて思ったけど、なかなか愛着がわいてきたころだ。拡張領域に武装を仕舞わないのも渋いし、全ての武装がブレードつても痺れるじやないか。速すぎるから乗っついていて疲れるけれど、それでももはや俺の相棒である事には変わらない。

「黒乃、コーヒーのお替りは？」

「……………」

「そうか、解った。しかし、落ち着いてるよな。IS学園の受験って、試験官と模擬戦だろ?」

首元のチョーカーを弄っていると、イッチーが俺に声をかけてきた。落ち着いてる……なんて言うけど、違うからね。いつも通りに顔に出ないだけだからね。仮に表情が出るとして、とんでもなく目が泳いでガタガタと震えていたに違いない。コーヒーは断ったけど、やっぱりもう一杯貰おうかな……?

「全寮制……か、この家もついに俺一人になっちゃうな。」

あ、いや、その心配はないから、キミもIS学園行きなんで。そこを言う……微妙だ。俺が努力をすれば、イッチーがIS学園に来る事は無いかも知れない。イッチーにとっては、それが最良の事なんだろう。だけどイッチーは、この世界の主軸と言って良い人間だ。

イッチーがIS学園に居ないってだけで、もしかすると世界が崩壊しかねない事態だってあるかも。それを天秤かけると、とても微妙な事だって話だ。でも個人的な俺の感情で、見ず知らずの人達が不幸になるとなれば……やっぱりイッチーは、IS学園に来てもらうしかないか……。

「黒乃……。」

ごめんよ、イッチー。そんな想いをこめて、俺はイッチーの手を取った。剣道をやつ

ているからか、手はゴツゴツとしてとても男らしい。うくん、イツチーも……大きくなったもんだ。精神的に30過ぎなせいか、どうにもイツチーは子供のように思えて仕方がない。

「時間……大丈夫か？」

ん、本当だ……そろそろ出ないとまずいな。イツチーの手を離すと、残ったコーヒーを一気に飲み干す。少し温くなったコーヒーは、大変に飲みやすかった。そして鞆を掴むと、イツチーとアイコンタクトしながら立ち上がる。するとイツチーは、わざわざ玄関まで見送りに来てくれた。

「じゃあ黒乃、頑張れよ！」

「……………」

「ん、ああ……ありがとうな。俺も頑張るぜ！」

イツチーの有難い言葉を受け取ると、俺はしっかりと頷いた。そして、イツチーに向かってちよこんと拳を突き出す。イツチーは少しばかり反応が遅れたけど、これが俺の激励だと解ると笑顔で拳をぶつけてきた。まあ……今までのテスト勉強は全部水の泡ですが……。

だっ、だめだ……考えれば考えるほどに、悲しくなってきた……！もう本当に可哀想という言葉しか出てこなくて、イツチーの顔を見ていられない。勢いよくバツと振り

返った俺は、哀れな……って言い方をすると悪いけど、イッチーの方には振り返らずに家を出た。

ポジティブに行くか……。イッチーがIS学園に来るって事は、また3年間は同じ学校に通うって事だもの。モツピーにも会えるし、鈴ちゃんだつて戻ってくる。そしたらまた皆で、ワイワイ馬鹿騒ぎをすればいい。そうやって考えれば、少しは気が紛れる。自分で自分に納得させると、駅に向かつて歩き出した……。

で、結局のところだけ……俺が選考会に出た場所は、やっぱりIS学園の入試にも使われる場所だったみたいだ。あの時は昴姐さんの車で連れて行ってもらったけど、今回は甘える訳にもいかない。だからこそ、降りる駅とかを間違えないようにしないと……。いつその事、学園で開催すればいいのと思うが。

電車で揺られてしばらく、始めは通勤の用事で電車に乗っていたような人物も多かったが、徐々に俺と同年代の女子の乗車率が増えて行く。普通の車両に入ったのに、まるで女性専用車両みたいだ。居心地が悪くなったのか、男性がこの車両から自ら出て行ったのも大いに関係している。

今のご時世……痴漢なんてやったら社会的に死ぬどころか、物理的に死んだ方がましな目に合うとか聞いたことがある。痴漢は比較的に冤罪率も高いし、余計なトラブルに巻き込まれたくないのだろう。その点俺は、鴨がネギを背負ってきたみたいなんです

けどね……。もし痴漢されたら、痴女だと思われるんじゃないかなろうか。

そういう考えている間に、もう戦場……違う違う。いや、あながち間違いでも無いけれど……受験会場の最寄駅へと電車は停まった。女子達が一斉に立ち上がったのを見るに、やっぱりＩＳ学園の受験か。倍率何倍とかだっけ？俺が代表候補生って事もあつてか、担任からはお墨付きを貰えたが。

とにかく、最悪この子たちの流れに着いて行きさえすれば、迷子になる事は無さそうだ。もしもの事があれば携帯の地図アプリとかを使えば良いし、とにかく行くか。ゾロゾロと歩き始めてしばらく、なんだか女子達が振り向いて俺の事を見ていた。

向こうが見てたって事は、自然に目が合う訳で……。すると女子達は、慌てて視線を逸らして俺を見ていたことを誤魔化し始めた。俺は、それなりに有名人だったりするのかな。エゴサーチとかとは話が違うってのは解ってるけど、どうにも自分の名前とかを検索するのが恥ずかしい。

かといって、取材の仕事が来た事も無いし……。うくん、単なる俺の自惚れかな。そう考えてみると、まだ公式試合にも出た事すらないじゃないか。うんうん、そうだ……ちよつと調子に乗つちやつてたかな。人間謙虚が1番だし、少し考えを改めない。

気持ち新たに歩き出すと、遠い場所に懐かしの会場が見える。思えば俺の苦労も、全てはここから始まったんだよなあ……。因縁の場所……って程でもないけど、あまり

良い思い出は無いかも知れない。なんて言っていないで、早い所会場入りしないとな。

会場に入ると、人の気配があまりしない。よく周囲を観察してみると、皆自分の受験票を受け付けに提出だけして、後は各々で更衣室へと向かっているようだ。確か受験の手引きに、そんな事書いていた気がするな。さて、それなら俺も受験票を……。

そう思つて、鞆の口を開いたが……それらしいものが全く見当たらない。……あれ？あれえ!?おかしい……おかしいぞ!?存在そのものはうる覚えだったけど、ずつと入れとけば忘れないだろつてかなり長い間は淹れっぱなしだったはずなのに……。その後カバンの中身をひっくり返してみても、やはり受験票は見当たらない。

ヤバイ……どうしよう、どうすれば……！くそう……普通に喋られさえすれば、受験の順番を後回しにしてくれませんかとか頼めるのに。と、とにかく……受付の人の前に立つてみよう。そうすれば、受験票の提示を求められるはず……。それでも無言であれば、何か事情があると察して貰えるかも……。

俺は一縷の希望を胸に、ズンズンと受付の方へと向かつてゆく。俺が慌てている間にも、他の女子達は全員居なくなつてしまつていた。ならば覚悟をしている暇も無い……。受付に座っている教師の前へ立つと、なんだか向こうはマジマジと俺の事を見た。

「……もしかして、藤堂 黒乃さんじゃありませんか……?」

「……………」

あれ、受験票の事を聞かれる前に名前の方を尋ねられたぞ。もしかすると、家でイチーが俺の受験票をたまたま見つけたとかかな。それで、ここに連絡を入れておいてくれたのかも知れない。だとすると、イチーのフラインプレーとしか言いようがないけど……何か様子がおかしいな。

「そ、その……少しこのまま待つていて下さい。」

別にそれは構わないけど、一体何がどうしたつて言うんだ。受付の教師は、バタバタと奥の方へと駆けて行ってしまった。代わりの教師らしき人が来たが、俺には何も言わずにただただ愛想笑いを浮かべるだけ……。全く状況がつかめないな、これは。俺が待つている間に、またしても女子の波が入り口から押し寄せる。

比較的の小規模つて事は、これが最終組つてところかな……。とにかく邪魔になつてはいけないし、端の方へ避けておこう。邪魔にならない場所で女子の動きを見守つていと、やっぱり彼女達も俺の事が気になるらしい。まあ今は、なんでこんな所に居るんだろう？……つて感じだろうけどね。

「あ、あの……藤堂さん。乗車駅の名前は、こちらで大丈夫でしょうか……？」

またしてもバタバタと慌ただしい様子で、さきほどの教師が俺の元に駆けてきた。そして手渡されたのは、小さなメモ帳だ。そこには確かに、イチー宅の最寄駅の名前が

書かれていた。教師の問いかけに肯定を示すと、今度は茶封筒を取り出した。それを俺に手渡すと、教師はさらに続ける。

「これ、交通費です。わざわざ来てもらって申し訳ないですが、今日のところはお帰り下さい。後日説明の文書をお送りしますので。では、私はまだ仕事がありますから……。」
 は？（威圧）。いやいやいやいや、何の説明にもなってませんから。何だこれは、比較的温厚な俺でも流石にこれは怒りますよ。せめてもの抗議に引き留めようとしたが、そそくさと逃げるかのように仕事へと戻っていく。天下のIS学園が、こんな対応で良いのだろうか。

……帰るしか、ないのかな……？意味が解らないよ、受験すらさせてくれないとか……。はあ……滑り止めの高校、受験しておいてよかった。そっちの方は合格だろうか、とりあえず高校までは行けるな……。主にネガティブな事を考えながら、トボトボと俺は帰宅の途に就く。



「こちらは、何も問題はありませんか？」

「あつ、織斑先生……お疲れ様です。強いて言うなら、人数が多いのも問題ですね……ハ

ハハ。」

「そこは同感です。来年からは、少し人数を絞らないといけませんね。」

今日はＩＳ学園の受験日という事で、私は現場に駆り出されていた。一度は世界も取った身だ……嫌でも周囲の期待が高まるのは解るが、現場を監督するのは私じゃ無くても良い気がするがな……。休む暇が無いと言うか、気が休まらん。こうして見回りを定期的に行わなくては、本当に人数が多すぎる。

好奇心でＩＳ学園を目指されるのだけは勘弁したいものだが……。私達の住んでいる世界は、小娘共が思うほど甘くは無い。まあ……そんな気構えで合格する事は無いだろう。とにかくこの体制を変えないと、いくらなんでも教師陣の負担が大きすぎる。とりわけ、私の様な立場の者がな……。

『おつ、織斑先生織斑先生織斑先生〜!』

「山田先生……何かトラブルでも?」

『ト、トラブルと言いますかなんと言いますか……。とにかく、こちらへ来てもらえませんか!』

「何か大事みたいですね……。織斑先生、こちらは大丈夫ですので急いで様子を。」

世間話がてらに滞りが無いか確認していると、インカム越しに慌ただしい女性の声が聞こえた。声の主の名は山田 真耶。元候補生という縁もあつてか、割と昔からの友人

である。教師になつても先輩後輩の間柄だが、相変わらずだな……山田くんも。

しかし、トラブルか……。正直な話し……山田くんが呼ぶという時点でしょうもない事だと思つたりしたが、事は一刻を争うらしい。私は先ほどの教師の後押しもあつてか、山田先生の言うトラブルの原因を確認しに行くことに。そこでは試験官を任されていた教師達が、何やら言い争いをしている。

「冗談じゃない……。あの八咫鳥となんて、戦えるわけがないでしょうが!」

「無責任な事を言わないで下さいよ! 受験番号的に、貴女の担当じゃないですか!」

「ハッ、アンタも戦いたくは無いですか?」

「そ、それは……。その……。は、話のすり替えをしないで下さい!」

「お、お2人とも……。落ち着いて下さい!」

何が原因か理解すると同時に、とんでもない頭痛を私が襲つた。八咫鳥……。それすなわち、私の妹分である黒乃の事を指し示していた。近江の自演か、それとも勝手に広まったのかは知らんが……。IS業界においては、八咫鳥⇨黒乃で十分に通じてしまう。

この2人が黒乃との模擬戦を擦り付け合っているのは、黒乃が八咫鳥と呼ばれるようになった所以が関わっている。与する者には幸を運び、仇なす者には災いもたらす……。笑みを浮かべて仇を屠るその姿、まさに黒い翼の八咫鳥。……誰が考えたのか知らんが、良く出来た詩な事だ……。

認めたくはないが、それは大いに事実だ。黒乃と戦った者は、2度とISに乗れなくなるという事実が明るみになってしまったのだから。実際のところは全員が全員そうではないと近江は言っていたが、20近い人数を黒乃がダメにしているのは本当の事だ。

しかし、噂と言うのは尾ひれがつくのがお約束だ。黒乃と試合をして、死人が出たなど……半ば都市伝説に近いものまで1人歩きしていた。だからこそ世のIS乗り達は、おそ恐れ戦き……黒乃を八咫鳥と呼ぶのだろう。しかし、どうした物だろうか……。

黒乃の担当を説得してでも戦って貰うか……。それとも、なすりつけられそうになっている教師に妥協して貰うか……。とりあえずは山田先生の効果が無い仲裁で時間を稼いでもらって、その間に私は何か策を練るとしよう。……私が黒乃と戦えば良いかも知れんが、こういう事があるからこそ私が監督を任されていると言うのもある。

だとすると、何が最適なのやら……。誰か物好きでも捜して、そいつに黒乃と戦って貰おうか。いや、そんな物好きが居ないからこそ、こんな状況になるのだろうな……。はあ……仕方が無い。誰か代わりに監督を出来そうな者を捜して、私が出るとしよう。そう私が提案しようとする、耳に着けているインカムから声が響いた。

『良いじゃないですか、彼女は合格と言う事で。』

「っ!?……学園長、それは……黒乃を何もさせずに通すと言うのですか。」

私の耳に響いたのは、本物の方の学園長の声だった。彼の名は轡木くつわぎ 十蔵じゅうぞう……学園では用務員なんかをやっているが、彼が本物の学園長だ。その正体を知っている私は、騒動の輪から外れて小声で学園長と連絡を取る。学園長の出した提案は、教育者とは思えない言葉だった。

『彼女の実力は、積み立てた骸が物語っているでしょう。』

『ですが、それでは公平を期すのでは……。』

『公平も何も言っていられないのでは？ハッキリ言つて、ウチの教師で太刀打ちできるとなると貴女くらいでしょう。無闇に彼女へ餌を与える事も無いと思えますし。』

詩的な表現をしているだけで、学園長に悪気はないのだろう。しかしその言葉に、私は嫌悪感を拭えない。だが、学園長の言っている事も間違ひでは無い。黒乃は、死に場所を求めている……。もし本当にそうなら、あの子に戦いの場を与えるのは最小限にしなければならん。

「……………解りました。それでは、対応はいかほどに？」

『そうですね、顔を見せて貰ったらお帰りいただきましょう。そして後日に、適当な理由をつけて合格通知を送付してあげてください。』

「了解しました。それでは……。」

インカムの通信は途絶えて、私の耳には口論と山田先生の慌てふためく声が耳に入

る。そして先ほど学園長と取り決めた事を、騒ぎの原因となつてゐる2人へと伝える。戦わなくて良いと解つた途端に、2人は少しばかり安堵したような表情を見せそれぞれ持ち場に戻つて行つた。

「お、お疲れ様でした……織斑先生。すみません、私がしつかりしないばかりに……。」
「いえ、それは構いません。山田先生も試験官でしょうか？持ち場へ戻つていただけると助かります。」

「はわわわわ……いい、今すぐ戻ります！」

別に責めたつもりでは無いのだが、私の口調や態度がそうさせたのかも知れない。そんなに慌てると転ぶぞと言おうとしたが、手遅れだつたらしく山田先生は盛大にすつ転ぶ。はあ……困つたものだ。私は……そうだな、黒乃が来たら知らせるように受付担当の教師に言つておかねば。

再びインカムをオンにすると、回線を受付へと繋ぐ。手短に何が起きたかと、どう対処すれば良いかを伝える。とにかく、私の元へ来てもらえば良い。そう伝えると、向こうは黒乃の見た目の情報を要求してきた。かなり長い黒髪の美少女と言つておけば、嫌でも伝わるはずだ。

私としては解りやすい情報を伝えたつもりだが、向こうはどうにも歯切れが悪い。おおかた、情報不足とも思つてゐるのだろうが……見れば解るのだ、そう表現する他な

いと。しかし、こちらに來いと言った手前……変に移動する訳にも行かなくなつてしまつた。何か緊急の事があるまでは、ここに待機しておくか。

「織斑先生！藤堂さん、お見えになりました。」

「そうですか、ありがとうございます。こちら、黒乃が乗つた駅の名前です。それと、交通費は……。」

「それなら、私が立て替えておきますよ。ついでに茶封筒か何かも探してきます。」

「……申し訳ありません。面倒な事を押し付けてしまつて。」

「いえいえ、私は座りっぱなしですから。それにしても、本当に綺麗な子でしたねえ……。まだ伸びしろがあると云いますか、とにかく美人さんでびっくりしましたよ。」

黒乃に事情も説明せずに帰れと言うのは、最も心的ストレスのかかる行いだらう。しかし受付担当の教師は、温和な雰囲気を纏つて気にしていない様子だ。最寄駅の駅名が書かれたメモを受け取ると、黒乃に対しての感想を述べながら去つて行つた。彼女は、今度何か奢るとしよう。

それから先は大したトラブルも無く、スムーズに受験は進行していく。私が行つたり来たりするのも、時間が経つにつれて少なくなつていった。そしていよいよ受験も終わりに差し掛かつた頃に、爆弾が投下されるかのような驚きが会場内を駆け巡つた。

『織斑先生、織斑先生、織斑先生！』

「今度は何です……山田先生。」

『お、おおつ。おと、おとととと、おととつと……!』

「いや、落ち着いて下さい。」

『男の人が、ISを動かしてますう!』

「……何ですつて!?!」

何故だか解からないが、私はこの時点で嫌な予感が止められなかった。しかし、嫌な予感ほどの中するものだという事を痛感させられる。なぜなら詳しく話を聞くと、ISを動かした男と言うのは……一夏の事だったからだ。とにかく私のすべきことは、パニックに陥っている現場を鎮める事だろう……。

第22話

IS学園の受験日から数日……。受けさせてすらもらえなくて、しばらくふさぎ込んでいたが……。どういふ訳か、合格通知が家に送付された。あれにはハテナマークが浮かびまくったものだが、受かっていたら何でも良いやといった具合に、俺は深く考えない様にしていた。そして……。

「はあ……。」

隣で溜息を吐くイチーは、まだ何も始まってもないのに疲れ切った顔をしている。つまり、見事に俺と黒乃ちゃんと言う名のイレギュラーを加えて、原作がスタートした訳だ。ここはIS学園1年1組の教室……。タイミング的には、ロリ巨乳先生……。じやなくて、山田先生が現れるまでの待ち時間といったところか。

溜息ついてる場合じゃないですぜ、アンタちゃんとしないとちー姉に頭をぶつ叩かれるコースが待ち受けてるんだからな。……って、言っただけなら伝えているんだけども。せめて山田先生が現れたら、ポーツとしてたのを正気に戻すくらいはしてあげよう。

「皆さん揃ってますか？ ホームルームを始めますよ。」

はいギターッ！これぞロリ巨乳つてのを体現したおっぱい先生キタコレ！単純なデカさだけならば、俺やちー姉では太刀打ちできんぞ……。あつ、ちなみに俺のはちー姉のより大きいです（誰得情報）。そんでまたこの先生は、気弱属性つて言えば良いのか、そこもまた子犬みたいで可愛らしいというか……。デユフフ……。

「そ、それじゃあまずは、自己紹介から始めましょうか。」

そうそう、これこれ……。自分は名乗ったのに、皆イッチーに注目してて早くも挫けだす山田先生ぐうかわ。大丈夫ですよ、山田先生！俺は聞いてますから……。つて、アレ？山田先生が、俺と全く目を合わせてくれないような……。いやいやそんな事は無い、教師の鑑である山田先生がそんな……。

そんな感じで自己紹介は進むが、一向に山田先生とは目が合わない。ぐ、偶然だ……。偶然に決まっている。確かに黒乃ちやんの身体は、目つきは切れ長で怖い印象を与えるかもだ。だが、俺は山田先生を信じているぜ！……。そんな事よりも、イッチーを正気に戻してあげよう。俺は隣の席に居るイッチーの肩を、トントンと叩いた。

「ん……。？黒乃、何か用事——。」

「はいそれじゃあ……。織斑 一夏くん。よろしくお願いしますね。」

「あ、なるほどな……。サンキュー、助かった。はい！」

イッチーは小声で俺に礼を言うと、元気に返事をして立ち上がった。さて、ここから

はキミ次第だぞイチー。自己紹介の手伝いなんて、むしろ俺がして欲しいくらいなんだから。まあどうせ、原作のイチー通りに素っ頓狂な事を言つてちー姉に叩かれるパターンだろう。

「えつと、織斑 一夏です。よろしくお願いします。特技はまあ多分……家事？あ、あと剣道やつてます。それなりに強い方だとは思うんで、経験者が居たら手合せお願いします。」

「はい。そのくらいで結構ですよ。」

誰だお前は!?なんかイチーがすっかりしてる!?!い、いや……落ち着け。イ、イチーがまともにも自己紹介をしたくらいで取り乱し過ぎだよな、うん……。しかし、問題なく切り抜けたらば……それはそれで女子達がワーキヤー騒いじゃつてもう……知らないって。

「煩いぞ、何を騒いでいる!」

この怒号を聞くと、ようやく1年1組に来たなって気がするね。ちー姉が入るなりそう叱るせいとか、教室内は一瞬にして静まり返った。だが残念な事に、ちー姉のご登場にイチーは驚いてしまう。そこは基本的に原作と同じ流れになった。ま、驚いてしまつたら仕方が無いか。

で、ちー姉が自己紹介して黄色い声パート2と……。気持ちは解るけど、あまり盛り

上げないで欲しいんだけどな。だって俺の自己紹介の時に、シーン……となるのは必至だ。そうなると、少しでも振り幅が小さい方が俺の精神的なダメージは抑えられるんだけど……。

「自己紹介の順番だが、少し入れ替えさせてもらおうぞ。藤堂、前に来い。」

「……………」

く、やはり俺が立った途端に空気が凍りついてしまった……。ちー姉の隣まで歩いて教室全体を見渡すが、なんかもう敵意すら感じる視線しか……。あつ、やつほーモツピー……おっひさく。うむ、やはり俺の味方はイツチーとモツピーしか居ないらしい！誰か助けてください！

「こいつの名前は藤堂 黒乃。とある事情によつて、喋る等の方法で他者に意思を伝える事が出来ん。が、クラスメイトである以上は仲良くしろ、以上。」

ちー姉……なんだが、少し言い方がドライじゃないかい？多分だけど、今の立場がそうさせるんだろうねえ。身内みたいなものだからって、ちー姉が容赦してくれるはずもない。とりあえず俺は深々と頭を下げたから自分の席へと速攻で戻った。さて、これでようやく落ち着いたかな。

「自己紹介に戻る前に……もう一人紹介せねばならん者がいる。」

「先生、それって生徒ですか？教師ですか？」

「今に解る。入れ。」

ほう……?こんなイベントは知らないが、やつぱり色々変わってるもんだ。ちー姉の合図で教室に入って来たのは、茶色の癖毛に白衣がトレードマークの……なんだ鷹兄か。……鷹兄!?な、何でここに……。俺が不思議そうに眺めていると、向こうも俺に向かって微笑みかけてくる。

「っ!?!お前は!」

「座つてろ馬鹿が。」

「あだっ!」

「近江、続けろ。」

「はい。皆さん初めまして、近江 鷹丸と言います。織斑くんがIS学園に入学したという事で、試験的にここで教師をする事になりました。ちなみに、1年1組の副担任です。担当科目は、主にISの内外部に関わるアレコレ……早い話が、整備関連の授業を教えさせてもらいます。あ、あと全学年の理数系も担当ですね。」

鷹兄がにこやかな様子で挨拶すると、またしても黄色い声援が。そんな中で唯一の男子であるイツチーは、大変に面白くなさそうな表情を……ええ?な、何?まさかとは思うけど、俺のハーレム空間をよくもか思ってるのかな……。でもイツチーがそんなだったら、ホモ呼ばわりされるはずも無いし。

「あ、あの……本当に、近江 鷹丸さん……ですか？」

「確か、会社社長とかじゃ……。」

「まあそうだけど、僕はお飾りみたいなものだから。それにどうしても来たい理由があつたし……ね？」

いや、そんな……『ね』の部分を強調させて同意を求められても困るよ鷹兄。それと同時に、イツチーのイライラオーラが膨れ上がった。どつたのさいツチー……。あれか、俺が遅くまで連れ回されたのを怒ってるのかね。アレは一概に鷹兄が悪いとは言えんから、勘弁したってーな。

「お前達、許可なく質問を……。ええい、時間が足りん。残りの自己紹介は後日とする。次の時限からは授業だから、各々遅刻せぬように過ごせ。」

それだけ言うと、ちー姉は手早く教室を去って行った。それにオドオドと山田先生が続いて、最後に鷹兄が俺に向かって手を振りながら教室を出た。ふう……今度こそ、落ち着いたかな……。さて、そうと決まれば……居眠りをぶっこきますかね……。ZZZ
……。

なんかイツチーが俺に話しかけてる気もするけど、適当にあいづちだけうっておけばどうとでもなるさ……。というか、眠気で自然と首がコクコクと動いてるし。これで、なんとか誤魔化す事ができているんじゃないだろうか……。ZZZ……。

「一夏、黒乃。」

「おつ、箒……久しぶりだな。」

「ああ、一夏はな。……2人共、少し話せるか?」

「おう、もちろん。」

「何をしている。黒乃、お前も来なければ話しにならないだろう。」

ほえ?何……何……?ああ、アレか……イッチーとモツピーの感動の再会だよな。それがあから、寝て時間を過ごそうと思つてただけど。このパターンはなんだか珍しい気がする。女子だとイッチーに誘われて、モツピーに邪魔するなつて思われるのが多いのに。

とにかく、モツピーに誘われたのなら遠慮する必要はない。俺は寝ぼけ眼を擦つて立ち上がり、廊下へと出ていく2人を追いかけた。何処へ行つても女子の波だが、ある程度人が少なくなると2人は足を止めた。するとモツピーがおもむろに振り返つて、俺にヒシツと抱き着いた。

「ああ……黒乃……本当に黒乃だ……。会いたかつたぞ、黒乃!」

「そうだよな、箒は5年ぶりくらい会つてないもんな。」

あ、そうか……イッチーが剣道を再開してるから、この2人は1度会ってるんだつた。何気にイッチーは、男子の部で全国制覇してるので、むしろ会つてない方がおかしい。

俺も俺で I S 漬けの毎日だったから、応援には行けなんだ。むふふ……育つてますなモツピー、もつときつく抱き着いてもええんやで？

「しかし、何故黒乃は大会に出なかつた？ 黒乃を倒さずに取つた優勝など、あつてないよ
うなものだ。」

「箒、黒乃はずつと I S に乗つてたんだ。その首のチョーカー、専用機つて奴なんだぜ。」
「なんで一夏が得意げなんだ……。それにしても、つまりは代表候補生か……。すごい
じゃないか。」

イツチーは、まるで自分の事のように誇らしげに、俺が代表候補生であると伝えた。
I S に乗つて剣道をおろそかにしてたから……。あまり歓迎されないと思つていた。
モツピーも、本当に嬉しそうに俺を褒め称えてくれた。2人の言葉が、すごく身にしみ
る。

「ん、ああ……そうだな。あまり時間もないし、そろそろ戻ろう。」
「話は尽きんが、なにより千冬さんが怖いしな。またゆつくりと話そう。」

身にしてみたからこそ、2人を叩かせるわけにもいかん。俺が親指で来た方向を指す
と、もう戻ろうという事が伝わつた。うくん、それにしても……。モツピーには悪かつた
な。少し先を歩いて、チャンスメイクをしておこう。そうして歩く速度を上げると、2
人はヒソヒソと会話を始めた。

うんうん、モッピーや……キミだけを鼻厘してあげられるのは今のうちだけだからね。そのうちに、7人とか集まるから覚悟しといた方がいいよ……。人数が増えてきたら、なるべく巻き込まれない事だけ意識して過ごす事にしようかな。

◇

「黒乃、さつきはありがとうな。」

(コクリ)

休み時間になると同時に、俺は黒乃に再度の礼をしておいた。すると黒乃は、腕と足を組んだまま目を閉じて、コクリと首を頷かせる。その全体図を見ると、どうにも黒乃の服装が気になった。この学園が改造制服はありだと知っているが、それは改造の範囲か？

変化があるのは主にボトムの方で、他の女子のと違ってスカートと一体型でない。かなりのロングスカートで深めのスリットが左足の方へ入っている。そんなスカートで左足を上にして足を組むものだから、綺麗なおみ足が見事なまでのチラリズムを生み出す。

「それより……あいつが教師なのって、黒乃は知ってたのか？」

(コクリ)

思わず黒乃の左足を注視してしまい、苦し紛れに話題を逸らす。あの野郎に関して聞きたかったのも嘘ではないが……。そうか、黒乃は知っていたのか。後から千冬姉に聞いたが、アレはどうやら黒乃の専用機を造った会社の社長らしい。

自分の専用機を貰った相手の事くらい知っていて当然か。だが、厄介な事になってしまった。ハッキリ言って、俺はあいつが嫌いだ。ニヤニヤ、ヘラヘラして……どうにもあの面が気に食わない。あんな奴、黒乃の側に置いておくわけには……。

「ねえ、あれ……。」

「うん、絶対そうだよ……。」

ふと気づいたが、視線が俺達に集中していた。そう、俺でも黒乃でもなく……俺達に……。……もはや気にする事でもない。俺は黒乃の味方が多ければ多いほど良いとは思っているが、もはや期待はしていない。何処に行っても、皆同じだって事を悟ってしまつたから。

「つてか、織斑くんが話しかけてくれてるのにガン無視とか……調子乗んなって感じじゃない?」

「ちよつ、馬鹿……!聞こえたらどうすんの!あの子はホラ、八咫鳥の……。」

「え……マジ?それ最悪じゃん。せつかく合格したのに八咫鳥と一緒にクラスとか

……。」

「あの2人がどういう関係かは、詮索しない方が身の為だと思うわよ。八咫鳥の災いを避けたかったらね。」

八咫……鳥……？俺達を観察している女子達は、ほとんどがその八咫鳥という言葉の口にしていた。俺は当然呼ばれた覚えがないとなると、黒乃の事なのだろうか。どういう意味を込めてそう呼ばれているかは解からないが、とりあえず侮蔑する言葉である事は理解できた。

……千冬姉あたりに聞けば、どういう意味か教えてもらえるだろうか。黒乃が代表候補生になって以来は、なかなかISに関わる物事を話してはくれない。それも、黒乃が関係していた可能性が出てきた。何が何でも……とは言わないが、真相は気になるところでもある。

「一夏、黒乃。」

「おつ、箒……久しぶりだな。」

「ああ、一夏はな。……2人共、少し話せるか？」

「おう、もちろん。」

「何をしている。黒乃、お前も来なければ話しにならないだろう。」

女子達の視線も気にせず話しかけてきたのは、幼馴染である篠ノ之 箒だった。俺は

剣道の大会を通じて再会できたが、黒乃に至っては5年ぶりほどとなる。それなのに、箒も黒乃もいかんせんクールなものだ。黒乃がもし喋れたら、テンションが上がったりするのかわ?

いや、もしかすると少しは感激しているのかも知れない。黒乃の反応が遅かったのは、その感動に起因する……のかも。とにかく俺達3人は、教室を出て落ち着ける場所を捜した。そこまで遠くに行ける余裕も無いせいか、人だかりの少ない廊下で落ち着く。

「ああ……黒乃……本当に黒乃だ……。会いたかったぞ、黒乃!」

「そうだよな、箒は5年ぶりくらい会ってないもんな。」

俺達が立ち止まるや否や、箒はきつく黒乃へと抱き着いた。その光景が時の流れを感じさせて、俺は自然にしみじみとした口調でそう言ってしまう。特に箒は同門として黒乃を信頼していたようだし、積年の想いが爆発してしまったのだろう。美しきかな友情……つてか。

「しかし、何故黒乃は大会に出なかった? 黒乃を倒さずに取った優勝など、あつてないよなものだ。」

「箒、黒乃はずっとI Sに乗ってたんだ。その首のチョーカー、専用機つて奴なんだぜ。」
「なんで一夏が得意げなんだ……。それにしても、つまりは代表候補生か……。すごい

じゃないか。」

黒乃から離れた箒は、いの1番にそう問いかけた。全国大会の会場で箒と再会した時に、まず言われたのが……黒乃はなぜエントリーしていない!?……だったくらいだ。あまりの迫力に押されて、黒乃は今剣道をやってないなんていう大失言をしてしまったし……。

今はISの事に専念しているんだと続けて言おうとしても、ショックが大きかったのかまともには聞いては貰えなかった。そしていざ大会が始まった時の様子は凄まじく、まさに鬼神のような試合っぷりで……。きつとやり場のない怒りとかが箒を駆り立てたのであろう。

そして今は落ち着いているおかげか、普通に話を聞いてもらえた。箒も黒乃の躍進が嬉しいようで、綺麗な笑みを浮かべながら賞賛の言葉を送った。俺が得意げだったのは、今お前が嬉しく思ってるのと同じ原理だぞ……箒。しばらく行動を起こさなかった黒乃だが、ピツと親指で教室の方向を差す。

「ん、ああ……そうだな。あまり時間もないし、そろそろ戻ろう。」

「話は尽きんが、なにより千冬さんが怖いしな。またゆつくりと話そう。」

それが何を意味するか理解した俺は、黒乃の考えに同意した。ついでに、箒の考えにも同意だ……。教師と生徒の立場となっても、家とあまり変わらない……って言うより

は酷くなった印象を受ける。千冬姉としては、俺を特別扱いする訳にはって事なんだろうけど、少し加減を間違えている気がしなくもない。

そうして来た道を戻り始めると、黒乃が妙に前へと出て歩いている事に気が付いた。……黒乃も千冬姉が怖いのか？10年近く一緒に住んで、初めて解ったかも知れない。しかし、これはいいタイミングだ。距離的に何か話しているとは思われるだろうが、俺は隣を歩く筈に問いかけた。

「なあ筈、黒乃の事で少し聞きたい事があるんだが。」

「私に……か？一夏が知らないような事ならば、私にはよほど縁のない話な気もするぞ。」

「いや、俺も今日知ったばかりなんだ。黒乃が八咫鳥って呼ばれている理由……心当たりはないか？」

「クラスの子が、鳥がどの言っていたが……あれは黒乃の事だったのか？……いや、私にもよく……。」

そうか……。ISに関わるのなら、絶対に耳に入る。それほどのニュアンスで、黒乃の事を一様にして八咫鳥と呼んでいた。それならもしかして筈も思っただけで、ダメだったか。筈はしばらくうむむ……と考え込む様子を見せた。そうして、何かを思い出したかのように言う。

「そう言えば、鳥のような専用機持ちの話を噂で聞いたぞ。その時は興味が無かったから追及はしなかったが、それと黒乃が関係あるのでは？」

「鳥みたいなの……。それも有り得るけど、なんかアイツらの様子……。なんだか黒乃を怖がってたぜ。」

人によつては鳥を怖い物だと感じる人もいるかも知れないが、それが八咫鳥と呼ばれる理由としては弱い気がした。俺の返事を聞くと、箒は更に考え込む様子を見せたが……途中で止めた。何もなかったのかよと、そんな視線を送ると箒は力強い言葉を放つ。

「そもそも黒乃がどう呼ばれ、黒乃がどう恐れられていようと……。私には関係のない話だ。」

「え……………」

「どうであろうと、私は黒乃の味方だ。今も昔もそれは変わらない。私は、一生を通してこの考えを貫き通す。」

「……………」

なるほど、確かに箒の言う通りかも知れない。周囲の女子が何人恐れようとも、黒乃には俺や箒が着いている。黒乃からすれば心許ないかも知れないが、俺自身が箒のような考えを忘れてはならない。それにしても、随分と男前な発言だ。箒はきつと、同性からモテるタイプだろう。

「だ、黙って何を見ているんだ……。」

「いや、カツコイイなって思ってる。」

「カ、カツコイイ……？そ、それは……褒めているのか？」

「ああ、もちろん。なんでだ？」

「な、なら良い……。その……ありがとう……。」

「おう、どういたしまして。」

箒の奴、そんな真っ赤になるまで照れなくても良いのにな。恥ずかしがりなのは相変わらずか……。ま、久しぶりに会った幼馴染だし……。大きな変化が無いのは喜ばしい事だろう。そうして俺達は無言で教室へと戻った。授業開始にはギリギリ間に合ったよ。うで、何故か千冬姉に意外そうな顔をされる俺がいる……。信頼してくれ。

第23話

「はあ……。入学したばかりなのに授業つてのは疲れるな。黒乃は大丈夫か？」

「……………」

「ハハ……。流石の黒乃もこればかりはな。」

1時限目の授業が終わり次第に、隣の席のイッチーが話しかけてきた。俺はイッチーの質問に対して、静かに首を横に振って応える。学生って身分の人で授業が疲れないってのは、よっぽどの特殊体質としか思えない。愚問という奴だよ、イッチー……。流石って何を持って流石なの。

ちなみにイッチーが余裕そうな態度であるのには、それなりに理由という物がある。イッチーは原作にて参考書と電話帳を間違えて捨てた……。なんて言ってたが、それは俺が未然に防いでいる。イッチーがISを動かせると発覚してから注意深く不要な雑誌類を溜めてる所を見ると、普通に週刊誌と一緒に縛られてるから驚いたよ。

ま……。しようもない事でちー姉に叩かれるのもなんだしね。それに、後から教えてくれなんて言われても困る。俺の為でもあるし、イッチーの為でもある言わばWIN-WINって事さ。あ……。しっかし、今の授業は基本中の基本だったな……。昴姐さんに

教わった事をリピートするのは、正直……苦痛かな。

そう考えていると、眠気の方が勝つて来たかも……。タイミング的にあのイベントも起こるのだろうし、争い事には巻き込まれたくないからスルー安定だ。俺はホームルーム後の休憩時間と同様に、腕と脚を組んで居眠りの体勢に入った。するとどうだ……だんだん……意識が……遠のいZZZ……。

「ちよつとよろしくて？」

「おい、黒乃。なんかお前に用事みたいだぞ。」

ZZZZ……ZZZZ……。そう言えば、俺って寝言とかつてどうなのかな……ZZZZ……。寝言もやっぱり、全く出て来ないんだろうか……ZZZZ……。ハハハ……。日頃喋る事が出来ない反動で、とんでもない事を口走っていたりして……ZZZZ……。例えば？例えば……セクハラ発言とかセクハラ発言とかセクハラ発言とか……ZZZZ……。

「ちよつと、聞いていますの!？」

「なあ……少し落ち着けて、黒乃も今に……。」

「貴方は黙っていて下さいます？わたくしは、彼女に用があるのです。」

「……お前にはあつても、黒乃には無いかもしれないけどな。」

「貴方、さつきからなんのですか……。」

ん、ん？少しばかり眠っていたけど、やはり彼女が来ちやつているみたいだ。セシ

リア・オルコット……いや、むしろセ尻ア！ほんつとにあれだぞ、セシリーのケツはアレだぞ……単純にエロくて最高。いや、ケツもさることながら、全体のプロポーシオンで言うるとISヒロイン勢で彼女が最もバランスが良いと思う。異論は認める。

いやホント、アニメ2期のバニー姿なんか素晴らしいの一言に尽きる。後ろから思い切りケツを撫でまわしたい。って、セシリーが来てからケツの話しかしてないな。でも、どんなに素晴らしいケツの持ち主でも……初期のセシリーは争いの種でしかないわけ……。イッチーには申し訳ないけど、やっぱり無視させていたただきたく方向で……。

「とにかくく！ミス・藤堂……いい加減に反応を示しなさいな！」

な、何い!?俺に用事だと……。は、はい……。今すぐ立ちます！てつきりイッチーに用事だと思っていたもので、俺は慌てて椅子から立ち上がった。少し立ち上がる勢いが強すぎたせいか、セシリーがビクツとなった気が……。いや、それも含めて大変に申し訳ない。して、オイラにいったい何のご用かしら？

「オホン！同じく代表候補生として、挨拶をと思い参上つかまつ 仕りました。わたくし、セシリア・オルコットと申します。以後お見知りおきを、ミス・藤堂。」

なんだろうか、今とんでもなく皮肉を言われた気がする。裏を返すと、俺が挨拶も出来ない礼儀知らずとでも言いたいんじゃない？い、いや……いくらなんでも、セシリー

だってそこまで酷くないはず。握手も求められているし、それに応えて……って痛たたた……セシリー、力みすぎ力みすぎ!

「……それにしても、正直期待外れですわね。入試の際に試験官に勝ったのは、わたくしだけのようで……。」

「……おい。黒乃に嫌味言いに来ただけなら、今すぐ帰れよ。それに、試験官になら俺も勝ってるぜ。もしかして、女子だけではってオチじやないのか?」

「フンツ、そんな品の無い男性を飼っているのがまず程度の低……は?あ、貴方……今何と仰いました!」

「は?だから試験官には俺も勝ってるって言ったんだよ。」

期待外れって言われましたも、試験を基準にするなら的外れだよ。だって俺、試験を受けてすらないのに合格してるんだもの。本当にそれが不思議で不思議で……。つて、あり?いつの間にか、原作と似た流れになって来たな。話の入り方は違うが、これが運命力って奴なんだろうかね。

「フ、フフフ……フンツ、男性なんかに後れを取るとは、まだまだですわねミス・藤堂。」

「さつきから……!俺の事を馬鹿にするのは良い……けど、これ以上黒乃を……。」

「……………」

「黒乃……。……解かった。」

はいはい……どうどう……。怒ってくれるのは嬉しいけどね、喧嘩腰なのはいかんよ イッチー。争いつてのは、何も生み出さんもんです。今にもセシリーに飛びかかりそう なイッチーを手で制すと、大人しくそれに従ってくれた。よしよし、聞き分けの良い子は好きだぞ〜と♪……ヴォエっ！自分で言つてて気持ち悪くなった……。

「良い判断ですわね。その調子で、しつかり飼いならしていただきますと。」

「このっ……!!？」

「……ところでミス・藤堂。アンジェラ・ジョーンズと言う名に、心当たりはありませんか？」

うーん、何か知らんけど……セシリーには嫌われてるっぽいなあ。大人しくしたイッチーを見るや否や、またしても挑発みたいな行動を取ったし。まあそれは置いておくとして、唐突な質問だ。もちろん、専用機を貰つてすぐの模擬戦相手だし……アンジェラさんとの模擬戦は、俺の海馬にしかと焼き付いている。それを肯定する為に、俺は首を縦に振った。

「そうですか……。それならば、ご覚悟願います。アンジー姉様の敵は、わたくしが取らせていただきます。」

か、敵……？確かに結果的には俺の勝ちだったけど、そもそも専用機VS量産機だったしフェアな戦いでは無い。それに加えて、仇敵みたいな言われ方をするのが納得でき

ないけど……?あくまで模擬戦だよ?なんたって、あんなにも敵意むき出しで嘯み付いて来たんだろ。

「クソツツ!言いたい事ばかり言いやがって……。黒乃、お前は悔しくないのかよ!」

いや、全然悔しくないから反応に困るな……。俺はきつと、産まれてくる際に敵対心や下剋上精神を親の腹に落として来てしまったに違いない。そうだねえ、イツチーをどうやって落ち着かせよう……。飼う……。イツチーを飼うかあ……。まあどつちかと言え、犬だな。俺はイツチーを椅子に座らせると、頭を抱き寄せてワシヤワシヤしてみる。

「なっ……!?!」

それはもう、動物大好きのお紳士なみにワシヤワシヤワシヤ……。おくよしよし、大丈夫大丈夫。イツチーが怒る事はなくにもないんだからね……。つか、正直なところもつと落ち着きを持ちやがり下さい。イツチーがいつ暴れ出すかってね、お姉ちゃん心配だから。

「くっ、黒乃……。もう大丈夫だ、落ち着いたから。その……。離してくれ……。」

おろろ、イツチーにしては随分と新鮮な反応を見せてくれた。イツチーは俺の腕から強引に抜けると、顔を真っ赤にして俺から目を逸らす。まあ……。そりやおっぱいが顔に当たり放題だもんね。でも別になあ……。イツチーに触られたくらいでどうって事ない

し。それこそ、ペットに触られて騒がないのと同じ……なのは、イツチーに失礼か……。とにかく、イツチーになら例え揉まれようが見られようがどうって事はない。あ、あ」と弾くんとか鷹兄とかも。数馬^{カズ}くんは……がつつき過ぎで怖いからNG。本当に、彼は前世の俺を見ているようだ。なんというか、思わず世の女性に謝罪してしまったぞ。

「黒乃、何かあつたらすぐ相談しろよ?」

「……………」

こうやって俺の事を心配してくれての行動だから、イツチーは憎めないというか……。俺としては、この後に大人しくしてくれれば言うことなしなんだよねえ。それこそ俺の事を引き合いに出されると、イツチーはセシリーに噛み付く可能性は大きい。今から気が重いけれど、ま……なるようにしかならないよな……。



『日本に……ですか?』

『ええ、少し模擬戦をしてほしいって依頼されたの。なんでも将来の有望株らしいわ。』

『なるほど……。では、わたくしの未来のライバルですわね!』

『フフツ、そうね。私が身体を張って偵察に行つてあげるわ。私が居ない間も、サボつ

ちやダメよ……セシル?』

『はいっ、アンジー姉様!』

今から丁度一年前のあの日、アンジー姉様は日本で仕事があるとイギリスを発ちました。もちろんわたくしは、快く姉様を送り出しましたが……あんな事になるのなら行かないで……と言いたかったですわ。きつと、本人も予想だにしなかつたでしょう。まさか、2度とI Sに乗れなくなつてしまわれるなんて……。

アンジエラ・ジョーンズ……アンジー姉様は、わたくしにとつて師であり姉であるお方でした。わたくしがI Sに乗り始めて以来、ずっとお世話になつて……。立派な国家代表となつた姿を見せる事こそ、最高の恩返しだとわたくしは思つておりましたのに……今になつては、叶わぬ夢ですわ。

アンジー姉様が日本へ向かつて数日間は、別の方に指導をしていただいでいました。いつお帰りになるか心待ちにしていると、わたくしの耳に入ったのは……姉様の完全引退の報道でした。あまりに突然の事で、わたくしはしばらく呆然とするしかありません。日本で何かあつたに違いないと、自然に察するわたくしがいました。

『どういふ事か、説明して 下さいますわよね?!』

『……すみません、アンジエラさんに口止めされてまして。』

『口止め……? 詳しく聞かせて下さい! わたくしには、知る権利がありますわ!』

『そこに関しても申し訳ないですが、私も詳しく知らないんです……。アンジェラさんが、何も話してくれなくて。』

報道を聞いたその日に、わたくしは現在の担当者を問い詰めました。残念な事に、大した情報は得られず終い……。歯痒くて仕方がなかったわたくしは、気がつけばその場から走り出していました。本人に話を聞くべく、しばらく奔走した結果……。ついにわたくしは、アンジー姉様を見つucker事に成功しました。

『アンジー姉様!』

『セシル……。』

『……。どちらへおいでですか?』

『……………。』

アンジー姉様の手に抱えていたのは、大量の荷物。それは恐らく、職場に置いていたものだどわたくしには解ります。アンジー姉様は、わたくしの質問に答える事はなく、ただ目を伏せるばかり。あまつさえ、その場から立ち去ろうとするではありませんか。

『お待ち下さい姉様! いったい……。日本で何があつたのです!』

『…………ごめんね、セシル。私はもう無理なのよ。』

『答えになっていませんわ……。わたくしは、まだ姉様に教えていただきたい事が山ほど…………。』

わたくしの懇願するような言葉も、アンジー姉様には全く響かないご様子。背を向けたまま、黙り込んでしまわれました。わたくしは、なんとか姉様に留まっただけで、紡ぐべき言葉を模索し続けた。ですが、姉様の方が先に口を開き……わたくしにこう告げたのです。

『クロノ・トウドウ……。』

『え……?』

『この名前、覚えておきなさい。そしてもし出会ったら……間違っても戦ったりしてはダメ。……私みたいになりたくなかったらね。』

『姉様……? アンジー姉様!』

アンジー姉様は、そう言い残して振り返る事なくわたくしの前から消えてしまいました。クロノ・トウドウ……その方が、姉様の完全引退に関係しているのですね。わたくしは、この時に誓ったのです。クロノ・トウドウを倒し、姉様の無念を必ずや晴らすと。そうして月日は流れ、ようやく……ようやくですわ。

「ちよつとよろしいかしら?」

「おい、黒乃。なんか、お前に用事みたいだぞ。」

IS学園へ来れば、必ず会えると思いましたが……ミス・藤堂。いいえ、『八咫鳥の黒乃』とお呼びした方が良いのかしら? それはこの際……どちらでも構いませんわ。わた

くしが話しかけたのは、とりあえずミス・藤堂を見極める為……。今はまだ、当たり障りのない呼び方で問題ないはずです。

しかし、ミス・藤堂はわたくしの言葉に反応すら示さない始末。声が出ない等の症状は存じていますが、今のは明らかに無視ですわ！くつ……。わたくし程度は、相手をする価値もないと仰るつもりですね。いいでしょう、それならわたくしとしても考えというものがありませんよ。

「ちよつと、聞いていますの!？」

「なあ……。落ち着けて、黒乃も今に……。」

「貴方は黙っていて下さいます？わたくしは、彼女に用があるのです。」

「……お前にはあつても、黒乃には無いかも知れないけどな。」

「貴方、さつきからなんなのですか……。」

わざとらしく声を荒げて見せても、ミス・藤堂は反応を見せません。すると、関係のない男性の方がわたくしに喧嘩腰で話しかけてくるではありませんか。彼は織斑 一夏……。織斑先生の弟さんであるのは、周知の事実ですが……。ミス・藤堂との関連性が見えませんか。

ああ、そう言えば……。ミス・藤堂の数ある二つ名に『ブリュンヒルデの愛弟子』……。というのもありましたわね。もしかすると、その繋がりがしら。それにしてもこの方、

男性の癖して度胸はピカイチですわね。そこは評価に値しますが、今はただ邪魔なだけですわ。ここは、押し通すのが良いでしょう。

「とにかく！ミス・藤堂……いい加減に反応を示さないな！」

わたくしが最大限に声を大にしてそう言うと、ミス・藤堂はようやく立ち上がつてくれました。勢いがよすぎて少々驚きましたが、これでようやくまともな会話ができますわね。……こちらを見据えるミス・藤堂は、何処か不機嫌な様子み見えますわ。もしかして、彼を馬鹿にするような事を言つたからかしら。それならば……。

「オホン！同じく代表候補生として、挨拶をと思い参上しました。わたくし、セシリア・オルコットと申します。以後お見知りおきを、ミス・藤堂。」

まあ……何をするにも、まず挨拶からですわね。八咫鳥様は、わたくしの事など存じないようですし。わたくしが右手を差し出すと、ミス・藤堂は力強く手を取つてくるではありませんか。しよ、少々……力強過ぎやありませんこと？さ、先ほどの仕返しのもりですわね。

そう思うと、わたくしの手にも力が入つてしまいます。くつ、生身では非力なわたくしですが、流石に眉一つ動かさずに對抗されるのはショックですわ！負けじとわたくしも、余裕の表情をキープしないと……。で、ですが……このくらいにしておいてあげましょう。

「……それにしても、正直期待外れですわね。入試の際に試験官に勝ったのは、わたくしだけのようで……。」

「……おい。黒乃に嫌味言いに来ただけなら、今すぐ帰れよ。それに、試験官になら俺も勝ってるぜ。もしかして、女子だけではってオチじやないのか?」

「フンツ、そんな品の無い男性を飼っているのがまず程度の低……は?あ、貴方……今何と仰いました!」

「は?だから試験官には俺も勝ってるって言ったんだよ。」

な、なんとという事でしょう……直接ミス・藤堂を挑発するのではなく、彼の方をわたくしに嘯みつかせる作戦が台無しですわ!?!織斑先生の弟さんとは言え、そこまでやれるような方ではないと思っていましたのに……。取り乱してしまいました。まだまだやりようはあります。

「フ、フフフ……フンツ、男性なんかに後れを取るとは、まだまだですわねミス・藤堂。」
「さつきから……!俺の事を馬鹿にするのは良い……けど、これ以上黒乃を……。」

「……………」

「黒乃……。……解かった。」

見た目通りに冷静ですわねミス・藤堂……。ですが、安心しました。この程度で頭を血を登らせてしまうような方なら、それこそ本気で失望してしまいます。だけれど、こ

これはこれでアンジー姉様がああなつてしまったヒントが全く見えてきませんわ。もう少しばかり、探りを入れてみましょう。

「良い判断ですわね。その調子で、しっかり飼いならしていただきますと。」

「っ……………!!?」

「……………とところでミス・藤堂。アンジエラ・ジョーンズと言う名に、心当たりはありませんか?」

ストレートにアンジー姉様の事を問いかけると、ミス・黒乃は首を縦に振って答えました。……………ひとまず安心しましたわ。もし覚えていないと反応しようものならば、わたくしは本気でミス・藤堂を軽蔑せざるを得ませんもの。この人にとって姉様は、どう映っていたのでしょうか。

「そうですか……………。それならば、ご覚悟願います。アンジー姉様の敵は、わたくしが取らせていただきます。」

結局ミス・藤堂の本質は見えませんでしたでしたが、宣戦布告だけは済ませる事が出来ましたわ。後は、彼女と戦える場を待つのみ……………。用事の済んだわたくしは、大人しく席へ戻る事に。席からミス・藤堂の様子を再度確認しようとして視線を送ると……………随分お熱いお2人が目に入りました。

た、大衆の面前であんな……………抱擁して頭を撫でるなんて……………!……………よく解らないお2

人ですが、とにかく仲がよろしい事だけは十分に伝わってきましたわ……。わたくしにとつてのアンジー姉様のように、織斑さんを奪われたら……。貴女はどんな反応を見せるのでしょうか？ミス・藤堂……。

……わたくしとした事が、物騒な考えが浮かんでしまいました。わたくしにとつて重要なのは、ミス・藤堂に勝つ事だけですわ。勝つて、証明するのです。アンジー姉様の引退が、決して無意味ではなかったという事を……。そのためには、日々精進……。ですわね。わたくしは、静かに次の授業の準備に取り掛かりました。

第24話

「はいはい皆、席に座ってね。」

「あれ……？近江せんせい、先生の授業はもつと後からじゃないんですか？」

セシリーとのゴタゴタ劇場第一幕が終わると、教室に現れたのはちー姉ではなく鷹兄だった。鷹兄はいわゆるイケメンの部類だから、女子達はキャツキャとはしやぎながら己の席へと着く。するとその内の一人が、手を挙げながら質問を投げかけた。すると鷹兄は、頭をボリボリと掻きながら答える。

「少し織斑先生から頼まれ事をね。どうしても遅れるから、先にしておいてほしい事があるんだって。」

「じゃあ、授業をするって事ではないんですね？」

「うん。なんでも、クラス代表を決めなくちゃならないらしくて。」

はいキタ……きましたよお。ゴタゴタ劇場第二幕の引き金が。このクラス代表の座を巡って、イッチーとセシリーが火花を散らすわけなんだけど……。あつたらあつたで嫌なのに、なかつたらなかつたで困るのも事実だ。だってこれが上手く運ばないと、イッチーがセシリーにフラグを建てられない。

事細かな内容は別として、大きな流れはなるべく原作通りに進めたいもの。平穩無事に生きるにはね、臆病なくらいが調度いいんです。もしイツチーがフラグを建てるという行為そのものが、この世界における大きな分岐点とすれば……？俺としては、そう考えるだけで身震いしてしまう。

詳しくは、バタフライ効果で検索だ！……俺は誰に言っているんだろう。そんな間に、鷹兄はクラス代表について説明している。まあ……言葉通りの意味だけだね。クラス代表、つまりこのクラスの委員長的な役割を成す。普通の学校と違うのは、代表は対抗戦等の催しに駆り出されるってところくらいかな。

「織斑先生が言うには、自薦他薦は問わないそうだよ。それじゃ、やってみたい……または、この人が良いんじゃないかって人は拳手してね。」

「はい。織斑くんが良いと思いますー！」

わく……原作や二次創作で見た事ある……なんて言ってられないな。うくむ、やっぱりこうなつちやうかあ。言いたかないけど、これはイツチーが不満に思うのも仕方が無いと。俺は……言いたい事とか言えない人なんで、黙りっぱなしでしょうね。ってかイツチー、アンタまたブーツとして……。

「うくんと、推薦多数って事で……織斑くんで決定かな？」

「ちよつ、ちよつと待て！俺はそんなのやらないぞ！」

「そうだねえ、僕も無理矢理とかよくないと思うけど……織斑先生の言葉をそのまま伝えるよ。」

鷹兄はちー姉の言葉を代弁し、イッチーを絶望の淵に叩き落とした。他薦されたからには、責任を持って役割を果たせ……つてところか。イッチーが苦し紛れにオリ主を推薦するパターンなんてのもあるけど、俺には喋れないという鉄壁が存在する。喋れない奴に委員長が務まるはずもない！アーツハツハツハ！

「くっ……ろのは無理だよな……そうだよな……。」

「じゃ、これで決まりかな？一組の代表は、織斑 一夏くんつて事で——」

「ちよつとお待ちください。そんな選出は認められませんわ！」

親の顔より見た展開……と思わず言いたくなるかも知れない。イッチーが一組の代表に決定するか否かの絶妙なタイミングで、セシリーはヒステリックな声をあげながら立ち上がった。それを鷹兄は、どうかしたのかな？とでも言いたげな顔でセシリーを見る。とは言っても、相変わらずニヤけっぱなしだけだね。

「男性がクラス代表などと、良い恥さらしですわ！実力からして、わたくしかミス・藤堂が代表になるのが自然ではありませんこと？」

「クソやろ……じゃなくて、近江先生は自薦他薦は問わないって言ったろ。そんなにやりたいなら、アンタがやってくれ。」

いや、セシリー……そこで俺を巻き込まんといってくれ。確かに俺は代表候補生のポジションに就かせてもらつてるけど、8割ほど運で辿り着いただけだからね？そんな事より、イツチーが本当にまともな返答を見せてくれる。でも……日本大好きっ子なイツチーが、果たしてセシリーのあの発言に耐えられるかどうか……。

「ハッ！ 虎……いいえ、鳥の威を駆る狐といったところかしら？ 貴方、先ほどからわたくしに対して強気な発言が目立ちますが、それは全て……ミス・藤堂あつての事ですわよね。」

「……何が言いたいんだ。」

「それは先ほど申しました。やはり貴方のような男性を連れているという事は、ミス・藤堂は程度が低いという事で——」

「何度目だ……？ 俺もさっき言った……黒乃の事を、馬鹿にするなつて！」

イツチーいいいい！ 話の流れが全然違う！ なんで？ どうして？ イツチーは、セシリーの俺を馬鹿にしたような発言が気に食わなかつたらしく、激しく怒りを露わにしながら負けじと立ち上がった。なんでこうなるのかな……。俺の事で怒らなくて良いって言うて……はないけど、言うてるのに……。

「あら、それではどうするおつもりで？」

「ブツ飛ばす。それで、黒乃に謝って貰う。それだけだ！」

「それは、I Sで……ととって良いのですね。」

「当たり前だろ。女相手に素手なんて言わねえよ。」

「そういや、こつちの事を忘れてた……。イツチーがセシリー相手に戦うと宣言すると、教室の中に笑い声が響いた。いや、これは……。もつと酷くて、馬鹿にするような……。嘲笑と表現した方が良いのかも知れない。これが女尊男卑の現状か……。精神的に男だからか、やつぱ……。受け入れられない俺が居る。」

「織斑くん、本気で言ってるの？男が強かったのなんて、もうかなり昔の話だよ。」

「今の内に謝るときなつて、頼めばハンデとかも貰えるかもよ？」

「そんなのは関係ないんだよ……。男には、譲れない誇りつて奴がある。オルコットは、それを何度も傷つけた。だから俺は、戦わないといけないんだ！男が弱いだとか、女が偉いだとか、女尊男卑だとか……。そんなのはどうだつて良い……。俺の誇りを……。黒乃を傷つけたアンタは、アンタの土俵で倒さないと意味は無い！」

「こ、声を大にして俺が誇りだとか言わなくて良いから……。でも……。なんだ、力……。カツコイイじゃん……。だあっ！コレだから女の子の身体は……。集中しろ、集中……。イツチーにときめきはしても落とされる事はあつてはならん。なんて言うか、俺に残された最後の意地みたいなもんさ。」

「良いでしょう……。相手になつて差し上げますわ。ただし、貴方が負けたらわたくしの

奴隸にでもなっていたらどうかしら？」

ど……れい……？ 奴隸！ おお、なんと良い響だろうか！ 俺としたことが、この発言を見落としていたなんて……。 はいはいはい！ 俺、セシリーの奴隸になりたいです……。 ぜひ椅子にしてください！ 感情が高ぶった俺は、思わず椅子から立ち上がってしまった。あまりに突然の事のせいか、クラス内が少しざわつく。

「フ、フン……。 ようやく、重い腰をあげましたね。 大切な方を罵倒されて、頭にきましたか？ 良いでしょう……。 貴女もお相手して差し上げますわ。」

「黒乃、どうして……？」

「気持ちは同じ。」

俺が立ちあがった訳は全然違うけど、負けて奴隸にしてもらえるんなら模擬戦なんて安い安い！ そしてイツチーの問いかけには、久々に声での返答が出来た。 そう……。 気持ちは同じだぞ、イツチー。 だって同じドM仲間だもん！ 俺の為だこう言うってたけど、それは口実に過ぎないだろう。

「黒乃……！」

「よろしいですわ。 お2人共返り討ちにして——」

「随分と盛り上がっているな、貴様ら……。」

「あ、織斑先生。 お帰りなさい。」

「近江先生……。しつかりと教師としての勤めを果たしてもらわねば困ります。」

「いやあ、展開的に放っておいた方が面白そうかなと思ひまして♪」

俺の言葉に、イツチーはパツと明るい笑みを浮かべた。うんうん、同士が居るのは嬉しい事だよな。多少のリスクは付きまとうが、俺&イツチーによるセシリーの奴隷計画が始まるうとしたとき……。ちー姉の凍えるようなトーンの声が入った。鷹兄……。アンタすごいよ、ちー姉の前でヘラヘラしてられるとか。

「……。それで、これはどういう状況です。」

「えーつとですね、簡単に言えばクラス代表の座をかけて模擬戦をする流れかと。」

「誰と誰が？」

「俺とー！」

「わたくしー！そして——」

「……………」

鷹兄が本当に要約して状況を伝えると、更に詳しい情報を要求した。するとイツチーとセシリーは、どこか息の合った調子で自分達が対戦すると宣言する。そこは俺もノリを忘れずに、セシリーの言葉に続いて自分を親指で指差す。するとちー姉は、どこか頭の痛そうな表情を見せた。

「はあ……。よしつ、良いだろう。織斑とオルコットの両名は、1週間後の放課後に第3ア

リーナで模擬戦だ。そこで雌雄を決すればいい。」

「織斑先生、わたくしとミス・藤堂の試合は……。」

「却下だ。オルコットと藤堂では勝負にならない。」

「なっ……!?!」

え、ええ……?ちー姉……流石にそこまで言われると、俺でもシヨックだよ。勝負にならなくて……確かにそうかも知れないけど、むしろ俺としてはそっちの方が都合なんだけどなあ。ちー姉の勝負にならない発言に、セシリーは驚きを禁じ得ないようだ。きつとだけど、俺がちー姉に擁護されてると思つたのだろう。

「聞き捨てならない発言ですわ!」

「……私の言っている意味は解るな?」

「当然です。それでも……私は彼女と戦います!」

「そうか……。ならば、織斑との模擬戦の翌日、場所と時刻は同じだ。藤堂、お前もそれで構わないな?」

「……………」

まあ天下のブリュンヒルデから鼻頂されれば、セシリーが怒るのも無理はない……。怒りを煽るような結果になってしまったけど、これでなんとかセシリーと戦う算段がついたぞ!後は……適当に負けてやれば晴れてセシリーの奴隷に……フヒヒ……!俺は

ちー姉の問いかけに、無言で頷いておく。

「話はまとまったな。では、これより授業を開始する。」

「僕はお役御免ですか？」

「……いえ、先生の知恵がタメになる場面もあるかもしれませんが。」

「解りました。それなら、織斑先生の指示で補足を入れますね。」

立ちっぱなしの俺達をスルーして、ちー姉と鷹兄はそんな相談をしていた。鷹兄が教壇から退いた時点で、早く座った方が良いよーというありがたいお言葉をいただく。それで我に返った俺達は、慌てて自分の席へと着いた。さて、鷹兄のアドバイス通りに頭を切り替えないとな……集中集中。



「おい、オルコット。」

「……あら、織斑先生。御機嫌よう、何かご用事ででしょうか？」

ようやくお昼休憩の時間となり、わたくしは学年食堂に足を運……ぼうとしていたのですが、背後から織斑先生に呼び止められてしまいました。気配もなく話しかけられる

と、かなり心臓に悪いですわね。わたくしは、何のご用事かと聞きながら振り返りましたが、織斑先生がこれからわたくしに語る事など容易に想像がついてしまいます。

「……先ほどの件だが、事の顛末を詳しく近江から聞いた。オルコット、お前は……わざとこうなるように事を運んだな？」

「……………」

なるほど、流石にブリュンヒルデを前に隠し事は通用しないようですわね。織斑先生の言う通り、わたくしが織斑 一夏を挑発するような言葉を並べたのは全てわざとです。ま、男性の方がクラス代表になるのは恥……というのはほぼ本音に近いですけれど。

とにかくわたくしは、織斑 一夏に対してミス・藤堂を馬鹿にするような発言をわざとしました。そうすれば、織斑 一夏は簡単に釣れてくれましたもの。そして織斑 一夏がわたくしと模擬戦を行うとなれば、ミス・藤堂も黙ってはいられないと思いましたが……予想通りでした。

彼女らは、互いに互いの事を大切にしていらっしゃる……。わたくしが仕掛けたファーストコンタクト後の様子を見れば、それは明白な事ですわ。だからこそわたくしは、ミス・藤堂を直接挑発するよりも……もっと効率的な手を使わせていただいたままでです。

「もしそうだとして、先生はわたくしに何を仰りたいのです。」

「……さつきと変わらん。」

「わたくしに、彼女とは戦うなど……。」

織斑先生は、それを言う為にわざわざわたくしを呼び止めたのですわね。全く……片腹痛いですわ。クラス代表の座や、織斑一夏との模擬戦などはわたくしにとってはどうでも良い話ですわ。わたくしがこの学園に来たのも、全てはミス・藤堂と戦うためだけ……。

「……フフツ。」

「何が可笑しい。」

「あら、失礼……他意はありませんのよ？ただ、どうやら噂通りの御人のようで。」

「言いたい事があるならハツキリと言え。」

「そうですか？でしたら。織斑先生は根っからの小鳥党とお聞きしております、まさにその通りだなと。」

「……………」

小鳥党とは、簡単に言えば八咫鳥の黒乃を支持する派閥の事ですわ。彼女、どうやら男性……特に日本の男性の方達にとって、半ば人格化された存在らしいので。それは恐らくですが、彼女が数多くのIS操縦者を再起不能にしてきたから……。少しでも多く

のIS操縦者が減る事は、男性の方にとっては救いであるご様子。

まあ……単に彼女の美貌に魅了されたファンも小鳥党とされるようですが。問題は、他でも無いブリュンヒルデが完全なる小鳥党であるという事ですわ。ブリュンヒルデの愛弟子と呼ばれるほどならば、何ら不思議な事でも無いような気がしますけれど。

「私がお前に忠告しているのは、別に藤堂の心配をしての事では無い。」
「ならば、何の為だと仰りたいのです。」

「お前の為に決まっている。……アイツの二の舞になりたいのか?」

「……失礼ですが、貴女が気安く姉様の事を語らないで下さる?」

わたくしとしては、この不毛なやり取りに区切りをつけたかったです……思わず反応してしまいましたわ。わたくしに対して、織斑先生がアイツと仰ったのだとすれば……それはアンジー姉様の他ありません。確かに織斑先生のご友人だったようですが、わたくしほど密接な関係ではありません。

それも小鳥党の織斑先生では、その言葉に何の重みも感じられませんわ。ですが、単純にわたくしを氣遣つての言葉という事は判断できませんでした。あえて言葉を選ばずストリートに表現したのかもしれませんが……。取り繕われたって、なにも嬉しくはありませんもの。

「わたくしは。ただただ八咫鳥と戦う事だけを夢見て日本へ来ました。」

「……………」

「まさかこんな早くにチャンスがくるとは思っていませんでしたが……。とにかく！一矢報いる事が出来るのなら、わたくしはこの身朽ち果てようとも構いませんわ！」

八咫鳥の実力と、多くのIS操縦者を潰してきた実績はもちろん承知の上ですわ。もしかするとわたくしのIS操縦者としての人生は、ここで幕を閉じてしまうかも知れません……。ですが、理屈などは抜きにしての話しですわ。そう、彼と同じように……。「……………解った。そこまで言うのなら、もう私も止めはしない。」

「ええ、覚悟はどうにできています。」

それは先ほどもわたくしは言いましたが……。今回こそ織斑先生は、わたくしの言葉に納得してくれたようですわ。そうなると、これ以上ここに居るのは無意味ですわね。わたくしは、織斑先生に優雅なお辞儀を見せると、食堂を目指して歩を進めようと思しました。

「……………少し待て。」

「まだ何か？」

わたくしが完全に織斑先生から離れようとする、またしてもわたくしは呼び止められました。これ以上わたくしに何のご用事なのかしら。そう思いながら、髪の毛を翻し振り向くと……織斑先生はわたくしに背中を見せたままですわ。しばらくその背を眺

めていると、織斑先生が静かに口を開きました。

「これから言う私の言葉は、どう取ろうとオルコツトの勝手だ。それこそ、小鳥党の戯言だと思つても構わん。」

「その前提で、わたくしに何を申しても無駄ですわ。」

「藤堂は、確かに八咫鳥と呼ばれるような一面もある。ただ……それだけではない事を、解つてやれとは言わん。……だが、頭の片隅には置いておいてほしい。」

「……………」

その言葉に織斑先生は時間を取らせたと付け加え、一切振り向く事なくわたくしの前から去つて行きました。それだけではない……。ええ、言われなくとも……解つております。八咫鳥の黒乃は、わたくしの想像とは違つた人物であつたのは確かですわ。

わたくしの想像した通りの人物であつたならば、それなりに気も楽になつたでしょう。ミス・藤堂の気持ちを利用するような真似をして、戦いの場へと引きずり出した……。ですが、だからこそ戦えるというのもまた事実ではあります。エレガントではありませんがね。

「ですが、やはりわたくしは……貴女を許せません。」

誰も居ない廊下で、わたくしは一人そう呟きました。ミス・藤堂……例え普段の貴女が善き人であろうと、八咫鳥としての顔もまた本物ですわ。どちらも本物の貴女……。

だからこそわたくしは、貴女へと挑ませていただきます。そう……この身朽ち果てようとも。

「……お昼にしましょう。」

織斑先生と話したせい、当初の目的を見失うところでしたわ。そうです、わたくしはお昼を食べようとしていたのです。時間は……まだ余裕がありますわね。どちらにせよ、急ぐのはあまり好ましくありませんし……。さて、今日は何を食べましょうか……。

第25話

(ん……もうこんな時間か……。)

放課後の1年1組教室では、寂しい事に俺しか残っていない。居残りで勉強をしていたが、よほど集中していたのか夕日も沈みかけている。俺が手を付けていたのは、ISに関するあれこれの知識が載せられた参考書だ。代表候補生と模擬戦をする事になった今、詰められるだけの知識は詰めておかないとならない。

しかし、この参考書を捨てかけた俺は……随分とマヌケだったな。黒乃が拾っておいてくれたから良かったものの、1人暮らしだったら今ごろはリサイクルされているところだろう。……その黒乃の為にも負けられない。気持ちは同じだって、黒乃はそう言うてくれたんだ。

……俺は、その言葉が嬉しくて堪らない。黒乃と俺は、やっぱり通じ合っているんだなって……そう思えるから。さて、今日の所はこのくらいにしておこう。何事も適度にこなすのが大事だ。そう思って勉強道具を片付けていると、軽い調子の声が俺の耳に届いた。

「おや、まだ教室に居たのかい。居残り勉強とは感心だね。」

「……そりやどうも。何か俺に用事ですか？」

「う〜ん……僕と言えば僕もだけど、一緒に君を探してほしいって頼まれてさ。おい、山田先生〜！」

「あつ、ここに居たんですね織斑くん。スミマセン近江先生……わざわざ一緒に探してください。」

俺の前に現れたのは、いつも通りのニヤけた顔の近江だった。単に嫌いという事もあるせいかな、つつけんどんな態度がモロに表へと出てしまう。しかし……近江がペースを乱す事は全くない。……こういう所も嫌いだ。近江が廊下の方へ呼びかけると、教室の扉からヒョコツと顔を出したのは山田先生だった。

自分も用事はある……と言っていたが、大半は山田先生の方らしい。1年1組副担任コンビは、いったい俺に何の用事なのだろうか。山田先生がペコペコと近江に頭を下げている内は話が進む事も無さそうだ……。しばらく待つと、山田先生はハツとなったように俺へと向き直った。

「お、織斑くんもスミマセン……。」

「いや、大丈夫ですよ。それより、俺に用事って……。」

「それがですね、寮の部屋が決まりました。」

「はい、これが部屋番号とその部屋のキーだよ。」

用事を尋ねると、副担任コンビは畳み掛けるように事を進行してゆく。近江にキーやらを渡されるわけだが、俺からすると不可解な事態だった。I S学園が全寮制なのは知っている。だが、部屋の調整諸々が原因で、1週間は自宅通学だと知らされていた。俺は率直にその質問を副担任コンビへぶつけてみる。

「事情が事情ですので、部屋割りを無理矢理にでも変更したらいいんです。」

「上はさらつと命令するだけだからねえ。あ、それは僕にも言えた事か……ハハハ。とにかく、日本政府のご要望って事だよ。」

なるほど……。I S学園が全寮制なのは、そもそも有望な人材を保護するという名目だ。そうなると未だかつて前例のない男性I S操縦者である俺は、何が何でも危険に晒すわけにはいかないって事か。それこそ、俺がI Sを動かせることが発覚してから凄まじい物だったしな……。家に研究者を名乗る人が押しかけてきたりして。

「あ、しばらくすれば個室も用意出来るらしいけど、それまでは女子と相部屋だけど我慢してね。」

「……近江先生は何処に寝泊まりするんです。」

「僕かい？ 教師と生徒じゃ圧倒的に数が違うからね、僕は普通に個室……。なんなら、僕と相部屋がいいかい？」

「いや、遠慮します。」

「おやおや、それは残念。」

同じく男性である近江に、素朴な疑問が浮かんだので聞いてみた。どうやら近江は、教師用の寮室が用意されているらしい。その後が続けざまに出てきた言葉は、即答で拒否しておく。今のニヤけ方……完全にからかってやがるな。……つて、山田先生……顔を紅くして、よからぬ想像でもしてるんじゃないでしょうね。

「んじゃ、荷物纏めないとならないんで帰ります。」

「だつ、大丈夫ですよ織斑くん。荷物の手配は、織斑先生がしておいてくれたので！」

やっぱりよからぬ想像をしていたのか、山田先生は声をうわずらせながら俺にそう告げた。千冬姉……気が利くな……と思ったのも束の間だった。発送された品の内容が書かれた紙を渡されたが、数枚の着替えと携帯電話の充電器のみ。……千冬姉、少しは娯楽の事も考えてくれると弟は大変喜びます。

「それと、夕食は6時から7時までの間……寮に1年生用の食堂がありますからそこで！そ、それでは！」

「山田先生……うーんと、各部屋にシャワーがあるけど、大浴場もあるよ。時間割は学年ごとに区切られてるみたいだけど、僕らにはあまり関係ない話だね。」

「へ？なんでですか。」

「考えてもみなよ。僕らはこの学園の0コンマ数%の男でしょう？しかも突発的にこの

学園に来たんだし……時間が割り当てられている方が不自然だよ。」

山田先生は早口で喋ると、まるで逃げるように教室を去って行った。話はそれで終わりかと思ったら、どうやらまだだったみたいだ……。近江が山田先生に着いて来たのは、たぶんだけど補足を入れる為であろう。最後は風呂の話だった訳だが、随分と残念な情報を仕入れてしまったものだ。風呂、好きなんだけどなあ……。

「ん……伝えるべきはそのくらいかな。忘れてたらまた伝えるし、解らない事があつたら気軽に聞いてね。それじゃ、この後会議らしいから僕はもう行くよ。」

「……………」

「うん、明日も遅刻しないようにね。」

近江はそういうと、手をヒラヒラと振りながら山田先生を追いかけはじめた。……いい機会だから奴の黒乃に対する真意を聞こうとしたのだが、俺の様子を見ている女子達が居る。そんなに大勢の前で話す事でも無い……。そう思った俺は、今度こそ勉強道具を片付けた。

(え〜つと、1025室……は、ここか。)

教室を出た俺は、自室となる1025号を目指して彷徨っていた。というか、たかだか学生寮で4桁になるってどういう事だよ。そんなことを考えながらも、特に問題もなく辿り着けた。なんだか、扉から高級感が漂っているな。さて、とつと入って1日の

疲れを癒すとするか……。

扉を開いて中へと入ってみると、とてもじゃないが寮室と呼べるものではない。それはもちろんいい意味で。自宅の俺の部屋なんかよりは、よほど綺麗な内装だ。落ち着かないが、そこは徐々に慣らしていくしかないな。ん、あの段ボールに入っているのが俺の荷物か。

「同室の者か？ 私は篠ノ乃 箒という。これからよろしく頼……。」

「箒か……？」

さっそく荷解きをしようと思ったら、何か聞き覚えのある声があった。振り返ってみるとそこには、バスタオル姿の幼馴染がいる。箒もきつと油断していたに違いない。そして俺がこの場に居る事実……。同室だと察してくれなければ、単に覗きを働いたように解釈されかねないぞ。

「なっ、なななな……。。」

「なっ？」

「何故ここに居る!？」

「何故って、俺もこの部屋に住むからだが」

「なん……。だと……。!?と、というか……。見るな!」

やっぱり混乱もするよな。というか、むしろ箒で助かったとも言える。これでもし顔

見知りですらなかつたとすれば、俺は間違ひなく生徒指導室にでもぶち込まれているはずだ。持つべきものは幼馴染だな、うんうん。それより、混乱している筈にフオローを入れよう。

「筈。」

「な、何だ……。」

「服の上からでも解つたけど、お前やつぱりきよにゆ——」

「出て行けーっ!」

場を和ませようとしたら追い出された。何故だ、一応は冗談っぽくする為に笑い飛ばすように言ったのに。しかし、この状況はあまりよろしくないな。騒ぎを聞きつけてか、女子達が集まり始めている。筈もそうだが、女子達の格好は総じてギリギリだ。何がとは言わないけど。

そうだ、挨拶がてらにお隣さんへ助けを求めてみよう。そうだな、それじゃ……:1026号室を訪ねようじゃないか。あくまで自然な様子を意識して、初めから挨拶目的ですよみたいな空気で1026室の扉を叩いた。……返事がないな。扉の鍵は……。

出かけているのかも知れないと思って、鍵がかけてあるかどうかだけ確認しようとはドアノブに手を伸ばした。するとどうだ、掴もうとしたドアノブが急に奥へと引かれてしまう。既に体重を扉にかけようとしていたせいか、俺は倒れこむように1026室

に入室する形になった。

「うわっ！……なんか柔らかか……。」

「……………」

「い……………？いいいい！？く、くくく……………黒乃？！」

倒れてしばらく目を閉じていたが、刮目してみるとバスタオル姿の幼馴染がそこにはいた。箒の時と一字一句同じじゃないか。いや、厳密に言えば同じではない……。俺は倒れた勢い余ってか、黒乃を押し倒してしまっている。ついでに言えば、胸に手を……胸？

「わ、悪い……………今どこからな！」

『い、一夏……………。着替え終わったぞ。その……………さつきはすまなかつた。私も落ち着いたから、ゆっくり……………。』

「ま、待ってくれ箒！今それどころじゃ……………」

『む……………？もしや、何かトラブルか!?待っている、助太刀……………』

「いや、違つ……………部屋に入ってくるなって言いたいだけで……………」

「一夏、無事か!?……………って、何をやっとなるか貴様ああああ！」

扉越しに話しかけてきた箒の様子からするに、焦る俺に何やら危機が迫っているとも思ったのだろう。助太刀……………あたりからドタバタと音が聞こえたから、竹刀でも取り

に戻ったのだと考えていると……その通りだった。黒乃にまたがったまま顔だけ振り返えらせると、怒り心頭で竹刀を振り上げる筈が俺の目に映る……。

◇

(ふい……初日は何とか乗り切った……のかな?)

IS学園学生寮の1室にて、黒乃はシャワーを浴びながらそんな事を考えていた。彼女……というか、中身のオッサンは基本的に小心者の為にボッチで大浴場に行く勇氣は全くと言って良いほどない。本人も体が女性なだけに義務的な意味合いで風呂等に入っている。前世では出かける予定がなければ入らない事もしばしば……。

(でもやっぱり、運命力って奴が働いてるっぽい。テンプレであつてテンプレじゃないっていうか……)

現在は1人脳内でもくもくと反省会である。理由は多少違うものの……やはり流れとしては自分も一夏もセシリアと戦う事になってしまった。それは彼女の望む平穩無事とは程遠い。今回の場合は、マゾヒストっぷりが勝つて仕方が無い事だという認識らしいが……。

(ま、それは追々で良いか……。それよりも……個室、なんていい響きだろうか!)

内心では花が咲くような喜びっぷりだが、藤堂 黒乃の肉体はやはり全くそれが表に出ない。黒乃にとつて、最も危惧していたのはそこだった。喋る事も筆談も出来ない身で、誰かと同室など気まずいに決まっている。最悪は一夏か筈ならばと思っていたが、誰かが訪れる気配も無い。

(つまりここは俺の城！フハハ、どう改造してやろうか。とりあえず持ってきたノートPCをネットに繋いでくつと……。)

黒乃が持つて来ておいた荷物には、PCやゲーム機など自堕落な生活を送る気が満々な物が詰め込まれている。それをどう配置すればなるべくベッドから動かずに済むかを想像するだけでルンルン気分らしい。黒乃は大きめのバスタオルで身体を拭き、脱衣所を出ようとした時……。

(……?扉を叩く音かな。……ハッ!?もしや、やっぱり同室の人が!?)

黒乃が聞いたのは、確かに扉を叩く音だった。その音が鳴る〓同室の者がやはり居て、それが今になって現れたと結論付ける。扉の鍵はかけてないが、すぐに顔を出さないと何かとまずいのではと黒乃は少し慌て始めた。着替えなんて持つて脱衣所に入っていないため、とりあえず身体と頭にバスタオルを巻いて自室の扉を目指す。

(はいはい、今出ますよ〜と。)

「うわっ!」

(どわああああ!?)

ドアノブに手をかけて引いてみると、どういいうわけか雪崩込むように一夏が現れた。心底驚いた黒乃は、思わず後方へとバランスを崩す。更に悪かったのが、一夏が前方に転倒しかけているという事。その相乗効果で、結果的に黒乃は一夏に押し倒されてしまう。

「……なんか柔らかか……。」

(ちよつ、バツ……。だ、ダメだつてイッチー……黒乃ちゃんの身体はその……敏感で……んっ……!)

押し倒された時点で、一夏のラッキースケベスキルが発動したと黒乃は理解していた。その証拠に、ガツチリと胸を掴まれているのだから。しかし、何故そこで感触を確かめにかかるかが不思議でならない。そうなつてくると、掴むから揉むに昇華する。

ムニムニムニ……。そんな効果音でも聞こえてきそうな感じで、ゆっくりねつとりと一夏の手が閉じたり開いたりする。その間に黒乃は、何かに耐えるように静かながらも熱い吐息を漏らした。もし黒乃に表情が出るとすれば、それはとてつもなく官能的だった事だろう。

「い……? い……? く……く……黒乃!」

(うん、イッチー……気が付いたならばよどいてちょうだい……。)

ようやく一夏は、自分か下敷きにした黒乃の事に気が付いたらしい。それと同時に自分が揉んだのは黒乃の胸だと理解したのだが、手は外したものの完全に黒乃の上からはどいていない。そんな一夏に対して、黒乃はどこか諦め加減でそう思った。

「わ、悪い……今どくからな！」

『い、一夏……。着替え終わったぞ。その……さつきはすまなかった。私も落ち着いたから、ゆっくり……。』

「ま、待つてくれ箒！今それどころじゃ……。」

『む……？もしや、何かトラブルか!?待つていろ、助太刀……。』

「いや、違つ……。部屋に入つてくるなつて言いたいだけで……。」

「一夏、無事か!?……つて、何をやつとるか貴様あああ！」

（あ、そつか忘れてた……。モツピーの風呂上りバツタリイベントだっけ……。?）

目の前で行われた一夏と箒のやり取りにて、ようやく黒乃は原作にて一番最初のラツキースケイイベントの事を思い出す。その際に黒乃が思う事と言えば、モツピーのバスタオル姿を見逃した……。とかなのだが、怒っている箒を目の前にはそうも言つてられなさそうだ。

（モツピーよ、暴力はいかんよ……こは俺が1つ……。）

黒乃は一夏を押しわけ、竹刀を振り上げた箒の前へと出た。その思惑としては、真剣

白刃取り!……と見せかけて、思い切り頭を叩かれてやろうというものだ。失敗するかよ!というツツコミを入れてもらおう事により完成するボケである。つまり、笑いとつて場を和ます気が満々なのだが……。

「つ!?さ、流石だな……黒乃。」

「レ、レベルが高すぎる攻防を見た……。」

(あるえ?なんか成功しちった。)

とんでもない強運の持ち主であるだけに、何かと上手くいつてしまうのだ。しゃがんだ状態で手を合わせると、その間にドンピシャで箒の竹刀が挟まった。狙いと違うとはいえ、とにかく箒の一夏に対する攻撃は防げたので結果オーライ。……と、思っている。

(あ、ヤベ……バスタオルの巻き方が甘かったみたい。)

「く、黒乃!?バスタオルが……。一夏!何をマジマジと見ている!」

「み、見てない!見たとしても背中だけだ!」

真剣白刃取りに成功した数瞬後、黒乃が巻いていたバスタオルがストーンと落ちた。正面から見ると、完全に豊満なバスタオルの全てが露わになっている。逆に、背後を見れば背中が丸見えだ。当の本人は大して気にしてはいないのだが、一夏と箒の慌てようといえれば凄まじい。

「つていうか黒乃、いつまでその体勢で……。なんでもいいから早く隠せて！」
「一夏、貴様見ているな!? 離せ黒乃、この不屈き者を成敗せねば……!」

(モ、モツピー! 暴力は……自分から好感度を下げる行為をしたらアカン!)

とりわけ黒乃は、箒自身の為を思つて一夏を攻撃するのを止めている。ここからどうするか考えると、てつとり早いのは竹刀を奪う事だという結論に辿り着く。黒乃は合わせた両手を、腕ごとクイツと捻るようにして横へと傾ける。すると、思ったより簡単に竹刀は箒の手元から離れた。

(だっしや、大成功!)

「グハツ!」

(……あり?)

思わぬ成功に、黒乃はジャンプしながら立ち上がった。黒乃の悪癖として、格好をつけたがるというのがある。箒から奪取した竹刀の柄を持つと、後ろを向きながら振りかぶり鞘に収めるようなモーションをとろうとした……その時だ。振り向くと同時に、竹刀へ何かを殴った感覚が残る。

(し、しまった! イッチー!)

黒乃が喜んでいる内に、一夏も同じく立ち上がっていたのだ。そのせいで、一夏は竹刀で叩かれる結果になった。当たりどころが悪かったのか、はたまた黒乃の怪力故か

……。一夏は、頬を真っ赤に染めて気絶してしまっている。不可抗力とはいえ、黒乃は申し訳なさそうに一夏の顔を覗き込んだ。

「な、なるほど……。私から竹刀を取ったのはそういう事か。気持ちは良く解るぞ、黒乃。いくらお前とて、あれは怒って当然だ。」

（いや、モツピー……。自分の手で制裁をとかじやなくてさ。）

あまりに清々しい振り抜きっぷりに、箒には怒っていると解釈されてしまった。驚きはしたものの、黒乃はこれっぽっちも怒ってはいない。どちらにせよ、自分が一夏を怪我させた事だけは間違いない。黒乃は冷蔵庫から湿布を取り出すと、一夏の赤くなった頬へと貼り付けた。

「うむ、腫れると大変だからな。まあ……。それよりもなんだ。いい加減に何か着たらどうだ……。黒乃？」

（……。あ、ほんとだ……。俺全裸じゃん。）

一夏を叩く前あたりまでは、申し訳程度ながらも前だけは隠していたのだが……。バスタオルは存在すら忘れられている。同性だというのに、箒は少し赤面しながらそう指摘した。黒乃は荷解きの済んでいないバッグから、下着や寝間着を荒っぽく引っ張り出す。とにかく急いでそれを着ると、残る問題は一夏のみだ。

「……………」

「一夏を……運ぶ？　そうか、取りあえずはベッドに、だな。」

このまま床に放置も申し訳ないが、かといつて1025室まで運ぶのは面倒だと黒乃は思った。そうになると、考え付くのは自分の足で帰ってもらう事だ。黒乃は箒に対して、一夏とベッドを指差す仕草を見せた。それで何が言いたいかは伝わったようで、2人は力を合わせて一夏をベッドへと乗せる。

「ふう……。2人で抱えてもなかなか重いものだな。それは一夏が遅くなった証拠か……。」

（おおう、モツピーが女の顔をしてら……。）

一夏が起きるまで付き合うつもりなのか、箒はベッドに腰掛ける。座ったまま一夏へと顔を向けているため、黒乃の目に映っているのは箒の横顔だ。しかし、横顔でもハッキリと解る。箒の表情は、一夏を愛おしく思っているのが見て取れた。黒乃は内心でニヤリニヤリと笑みを浮かべている。

（今の内に堪能しときなよ、モツピー。そのうちキミだけ応援する訳にはいなくなっちゃうし。）

「あ、いや……。濟まない。そ、そうだな……。私が居ない間は、全く剣道には触れなかったのか？」

ジツと黒乃に見つめられていた箒は、何故か取り繕いながら謝った。そして、話題を

強引に別の物に進路変更。黒乃も追及するという行為が行えないせいか、早々に箒の話題へ乗った。とは言っても、いつも通りにYESかNOで応えるような……会話とは表現し辛い状況になるが。

それでも箒からすれば、このようなやり取りは懐かしく感じられた。そうこうしている間に一夏も目をさまし、これでようやく落ち着いた……かと思われたのだが。一夏は目が覚めるなり、とにかく黒乃に謝り倒した。黒乃としては全くもって怒ってはいないのだが、それを察して貰えず……不毛なやり取りが延々と続く事となる。

第26話

「なあ2人とも、いい加減に機嫌直せって。」

「馬鹿を言うな、すぐ許せる方がどうかしている。なあ？黒乃。」

「……………」

「ほら、黒乃は許してくれてるぞ。」

「肯定も否定もしていないではないか。自分に都合良い解釈をするんじゃないっ。」

原作最初のラツキースケベイベントが発生した翌日の朝、俺達原初の幼馴染3人組は揃って朝食をとっていた。目の前で繰り広げられる問答を長い事見届けてるけど、長年連れ添ったオシドリ・フーフめいたアトモスフィアを感じる。顔を合わせてから何回か同じような会話をループさせてるからね、オジサンお腹いっぱいです。

ってか、それこそ別に俺は怒ってないんだけど。こんな時に限って、モツピーの言った通りに反応を示せない。ずっと黙ってるからか、些細な事で怒ってるのか？つてイッチーや弾くんにはよく聞かれたもんだよ。まあ、良いけどね……時間が解決してくれるって。

そうと決まれば、2人の会話をほぼスルーして朝ご飯に集中しよう。鷹兄と一緒に

行ったレストランのも美味の一言に尽きるけど、IS学園の食堂も落ち着く美味しさが
あるなあ……。でもなんだろ、厳じつちゃん料理の方が美味しく感じるや。あ……
そういや、最近顔出してなかったな。元気かな、弾くん達。

「ね〜ね〜、少しい〜い?」

「ん……俺達に用事か?」

「えつとね〜、この席座つてもだいいじよぶかな〜?」

その時ふいに間延びした声が響いた。……はっ!?俺としたことが、この子の存在が頭
から抜けてしまっていた。のほほんさんこと、布仏 本音ちゃんじゃないか!?俺が前世
で聞いた都市伝説によれば、かつては単なるモブだった……が!あまりの可愛さに名前
と特徴が着いて完璧なサブキャラになったとかなんとか……。

いや、だって可愛いもん。その可愛さは、単なる可愛さじゃなくてマスコットの要
素も含んでいる。もうほら……のほほんちゃんの萌え袖とか卑怯だわ。天然で醸し出
すあざとさとか大量虐殺兵器に等しいよ。そんなのほほんちゃんの問いかけに、イツ
チーとモツピーはこう答えた。

「……黒乃が構わないなら構わないぜ。」

「同〜く〜。」

「……………」

「わくありがと。2人ともくだいじよぶだつて。」

そんな俺に委ねるみたいない方しないでよ……。もちろんオツケーだけどさ、もし否定したら完全に俺が悪者じゃん。首は……よしつ縦に振れた。俺が首を頷かせたのを見てか、のほほんちゃんは少し離れた場所に呼びかけた。すると遠くに見えたのは、どこかオズオズとした様子の2人組……。

あつ、これはアレだ……。俺がいるから遠慮してたパターンだ。で、のほほんちゃんに頼んで大丈夫かどうか聞いてもらった的な。うくん……。やつぱり何処へ行つても敬遠されるか……。敬遠され過ぎて、もはや全打席フォアボールで出塁するレベルじゃないだろうか。

「うわ、織斑くん朝なのにたくさん食べるねー。」

「お、男の子だね。」

……。どうやら、俺は居ない物として扱っているみたいだ。解るよそれくらい……。だつてもう友達とかマジで片手で数えられる人数しか居ないもの。はあ……。なんか、流石にやるせないってか、悲しいってか……。こう露骨にそういう態度をとられると……。シヨック……。かな。

「……………」

「じつ……………」

「……………」

「じゅっ……………」

俺が無言で食事を進めていると、のほほんちゃんの方から凄い視線を感じる。つてか、この子口でじゅっって言ってるからね、あざと過ぎるよね。あんまり可愛いことしてるとお菓子を餌にお持ち帰りしちゃうゾ☆…………いや、したくても出来ないんだっか。

「くろつちつてさ……………」

「……………」

「おっぱい大きいね〜。」

「ゴフツ!!」

あつ、じつと見てたの俺のおっぱいつすか。何かと思つたけど、のほほんちゃんらしいと言えばらしいのかも。のほほんちゃんの言葉が嫌でも耳に入ったのか、イツチーは味噌汁を吹きかけた。そうすると、少し不機嫌そうな様子でモツピーがイツチーを小突く。

「ちよつ、のほほんさん…………いきなり何を!」

「そ、そうだよ、八咫がら…………じゃなくて、藤堂さんになんて事を…………!」

「えくだつて〜。私もおつきい方なんだよ〜?でも〜絶対私よりおつきいも〜ん。ポインボイ〜ん。」

「い、いや……ちよつと待て、朝つぱらからそんな……。」

おつふ、タイムタイム……！いきなり何をしでかすかと思えば、のほほんちゃんはおつぱいを弄び始めた。だ、だから……胸はダメなんだつて……！あつ……！う……心の中では言え、変な声が出るのが恥ずかしい……。つてかイッチー、見てはいけないみたいないな顔してないで助けてよ！

「……一夏、私は先に行くぞ。」

「待てつて、こんな状況に俺一人を置いて行こうとするな！」

そうだぞモツピー、同じ日本人離れした巨乳の持ち主じゃないか！君と俺は解りあえる……だからこそ俺の救い主はモツピーだけなんだ。でももうダメかなあ……？モツピー立ち上がつちやつてるし。……あ、左手の親指に焼魚の油が着いてる。でもこの状況じゃハンカチも取り出せないし……。

そう思つて困つてしていると、ふと立ち上がつてゐるモツピーのスカートが見えた。……バレへんバレへん。悪く思わないでよモツピー……俺を助けてくれないのなら、ここは御相子つて事で……。俺は立ち去ろうとしてゐるモツピーのスカートの端を、バレないようにそつと撮む。そして親指を擦るようになして、魚の油を拭きと——

「黒乃……。」

ほわあああああ!?お、思いつきりばれてやがる！俺がこんな行動に出たのが予想外な

のか、モツピーは驚いたような表情で俺を見ている。お、怒られる……こつてり絞られる……が、ご褒美寄りなら大歓迎です！……とかこんな状況で考えちゃう俺がときどき嫌になるね。

「……解かった、黒乃がそう言うのであればそうしよう。」

「なんだよ箒、行くんじやなかったのか？」

「お、置いて行くなと言ったのは一夏だ。」

あれ……？怒られない。なんでだろ、むしろ表情は穏やかそのものに変わった。座り直したモツピーを見て、イツチーは悪戯っぽい笑みを浮かべた。それに対してモツピーは、顔を赤らめながら反論してみせる。そのついで……かは解からないけど、のほほんちゃんの魔の手（物理）からも助けてくれた。

「……3人って、仲がいいんだね。」

「ああ、そりやま幼馴染だからな。黒乃に限っては家族みたいなもんだし。」

「え、それって——」

「お前達、いつまで食事をしているつもりだ！手を休めずにとつとと食え！遅刻者はグラウンド10週だ！」

俺達のやり取りを見てか、原作で聞いたことあるような質問が投げかけられる。それに対してイツチーは、幼馴染だから当たり前だと答える。……が、俺の事はベラベラ喋

らんといてよ。イツチーつてば、放つておいたら俺と10年近く同居だつて言つていたに違いない。そしたらまた俺が嫉妬の対象にされてハブを喰らうよ……。

ま、ちー姉の怒号のおかげで未遂で済んだから良いけどね……。この怒号を聞いてか、俺達含む食堂に居る全員が慌てて食事を再開させた。俺はほぼなくなりかけだけど。それ言うと、モツピーは食べるのが早いのだろうか？今度は注目してみる事にしよう。



その日の放課後、一夏と箒の部屋を訪ねる者が居た。その長い黒髪からするに、藤堂黒乃に他ない。その手には1冊のノートを携えていて、それを2人の内どちらかに渡すつもりなのかも知れない。黒乃が1025室の扉を叩くと、顔を出したのは一夏だった。

「よう、黒乃。何か用事か？」

「……………」

「中に入りたい？そっか、解つた。」

黒乃は少し開いた扉の隙間から、室内を指差す。すると一夏には、とりあえず室内に

入れてくれという意思表示に見える。それは一夏の大正解で、黒乃はすぐに伝わって安堵していた。部屋の主たる一夏に招き入れられ、黒乃は1025室に侵入。入った途端に、キョロキョロと周囲を見渡すような仕草を見せた。

「あ、もしかして箒に用事だったか。入れ違いだな、箒もさつき出かけたばかりだ。」
（マジか。コレ、モツピーにやらせようと思っただけ……。）

黒乃は箒に用事がある。これもまた一夏の正解。単純に仕草だけを言わせれば、理解力が最も高いのは一夏なのかも知れない。会いたかった人物が不在なだけに、黒乃は部屋で立ち往生。急ぐ用事でもあるし、かといって緊急なほどでもない。しかも、別に箒が絶対に必要という事もなかった。

（うくん……しようがないか。モツピーには悪いけど、コレは俺がやっておく事にしよう。）

「黒乃、箒が帰って来たら俺が知らせ……。っと、どうかしたのか？」

「……………」

「ベッド……座れ？あ、ああ……解った。」

黒乃を出直させようとした一夏だったが、それは本人の意思によつて遮られた。ベッドに座らされたのを見るに、一夏は箒が来るまで相手をしてくれ……という事かと考える。しかし、黒乃はベッドへと座った一夏に、持っていたノートを見せつけた。ノート

の表紙には、IS基本操作図解と書かれている。

「IS……?もしかして、貸してくれるのか?」

「……………」

「ち、違うのか……。じゃ、それをどうする気なんだよ。」

一夏は、ISの勉強に苦戦している。そのため、代表候補生である黒乃が使っているノートを貸してくれるのかも。そう問いかけたが、黒乃は首をゆっくりと横へ振った。次に何の為に持ってきたのかと聞けば、黒乃はノートを開いて一夏の膝へと置く。すると黒乃は、ノートにある図をピツと指差した。

「丁寧に書かれてるな。」

黒乃は自分の考えは書けないが、模写ならしつかりできる。一夏の言う通りに、操縦桿を動かせばISがどういう動作をするかが解りやすく書かれていた。一夏が図を理解していると確認が取れた黒乃は、自分もベッドへと座り一夏の後ろ側へ回り込んだ。すると……。

（ちよつち失礼な、イッチー。）

「く、黒乃……?」

一夏の肩に顔を乗せるようにして、両腕はピツタリ重なる。手の平がいまいち届かないのか、一夏の背中には黒乃の胸がグイグイと押し当てられる。一夏が少しばかり混乱

している間に、黒乃は指先へと力を入れた。注意深くその動きを観察すると、一夏はあ
る事に気がつく。

「ん？もしかして、この図の通りに動かしてる……のか？」

(そうそう、察しが早くて助かるよ……。)

そう、黒乃の指の動きは、ノートに書かれている図になぞらえたものだ。これは黒乃
がISの事を学ぶにあたり、初めて昴に指導された方法である。なんにせよ、まずは何
をどうすればISがどう動くか。それを学ぶ為に、文字通り手取り足取り教えるのであ
る。それが解った一夏は、意識を集中させようと務める……が。

(……落ち着かない。)

それもそのはず……。いくら一夏が朴念仁とは言え、この状態で落ち着くはずもな
かった。耳元では黒乃の息づかいが聞こえ、鼻には黒乃の醸し出す芳香が漂ってくる。
とどめと言わんばかりに、そのワガママなバストが思い切り背中押し付けられている
のだから。

何か一夏は、黒乃に包まれている気分になっていた。一方の黒乃は、全くと言ってい
いほどに気にしてはいない。そもそもこれは、できれば箒にやらせようと思っていたく
らいなのだから。何故なら、それが箒にとって役得であろうから。しかし、この場に都
合悪く箒が不在だったのだ。

そうなると、一夏の事情を考慮して黒乃は自分がやる事を選んだ。黒乃は、それなりに長い時間ISに触れてきた。だからこそ解るのだ……一夏がこれからやろうとしている事が、どれほどに無謀に等しいかを。代表候補生と、たった1週間だけISの勉強だけして戦えなんてのは馬鹿げている。

別に代表候補生になりたかつたわけではない黒乃だが、それでも中学に入学してからというもの血の滲むような努力をしてきた。指導者が千冬と昂ゆえ、時には心が折れそうな事だつて。きつと今自分と同じ肩書きである面子は、同じよう……もしくは、それ以上の努力をしてきたと黒乃は考える。

原作の展開としては勝ち寸前までいくわけだが、そんなのは現実である現在では役に立つとは限らない。だから黒乃は、自分が一夏にしてやれる事をやろうと今に至る。やらないよりはマシ、程度の事しかしてあげられない。だが黒乃は、家族として一夏を助けてやりたい一心なのだ。

(それこそ、イチチーはいつも俺の事で必死になってくれた……。だから、IS学園で少しずつ返していきたいわけよ。)

若干の空回りはあるものの、それでも兄兼、弟兼、親友が自分の為に一生懸命になってくれているのは痛いほど伝わる。ISに関しては、圧倒的に自分の方が経験豊富だ。恩に報いるのならば、きつとここであろう。IS学園に入学すると共に、黒乃はそんな

事を考えるようになっていた。

(だからほうれ、君も集中シタマエ！)

「いつ!? いたたたた……! く、黒乃! 手の甲の皮を引っ張るのは痛いって……!」

(美少女に抱き着かれて嬉しいのは解るけどさ……顔に出過ぎ。)

先ほどから黒乃の手も止まってはいたが、それに輪をかけて一夏は集中できていない。自分がせつかく教えているのにとすると、なんだか黒乃としては面白くない。軽めながらも手の甲の皮を抓ると、強制的に一夏の意識は覚醒した。すると一夏は、大きく数回深呼吸してみせる。

「わ、悪い……。えっと、もう一回最初から頼む。」

(そうかい? ほいじゃ……あらよつと。)

「速いっ……! なんだよ、今どこからどこまで操作したんだ!」

(おっと、いけね……。刹那を動かしてる感覚で指動かしてたや。)

一夏も気を取り直し、さてこれからと意気込む。気合を入れて最初からと頼むと、一夏の手に重なっている黒乃の手が超速で動いた。あまりの速さに、一夏はツツコミを入られずにはいられない。複雑な操作を要する刹那に長い事乗り続けた弊害だろう……。

「……………」

「あく……そうだな、そのくらいスピードで頼む。それじゃよろしくな、黒乃先生。」
（おうよ、任せとき。んじやまずは……つと。）

黒乃は一夏にこれは失敬と会釈してから、初心に帰ってゆっくりと指を動かしている。すると一夏もご満悦なのか、納得したような表情で何度も頷いてみせる。相互の意思疎通が図れたところで、本格的に基本操作の勉強が開始した。一方その頃、1025室の扉の前では……。



（剣道場の使用許可、思ったよりも簡単に出たな……。こちらとしては都合がいいが。）
放課後、私とはある用事で少し剣道部まで顔を出した。それは、ほんの少しで良いから剣道場を使わせてほしいというもの。私も無論剣道部へ入部するつもりだが、入部もしていない内に勝手に使う訳にもいかんだろう。では何故剣道場が必要か。それは、一夏にI Sの事を教えてくれと頼まれたからだ。

正直なところ、私も他の女子に比べればI Sに関する知識は乏しい。しかも千冬さんが言うには、訓練機の用意もできんときた。そうなれば、私にしてやれる事とすれば勘という奴を忘れん為にも剣道をする……くらいしか思いつかん。座学の方は……あま

りボサツとしていると、一夏に追いつかれてしまいそうだ。

あいつは、黒乃の事となれば途端に人が変わるからな。オルコツトとか言うのが黒乃を馬鹿にしたとなると、あいつは死ぬ物狂いで努力するはずだ。……そう……黒乃の事となれば、死ぬ物狂いで……。そこまで考えると、私の歩みは止まってしまふ。

やはり、何と言うか……羨ましい限りだ。子供の時はさほど感じなかつたが、私と黒乃の間にハッキリと差というものがあるのを思い知らされる。それはきつと、子供の私の子供だつたから。一夏に近い位置に居る黒乃に対して、素直に嫉妬をさらけ出していたから感じない差なのだろう。

……一夏は、友と思う者の為に必死になれる男だ。しかし、それが黒乃だつた場合の一夏は……少し毛色が違う。何か、狂気すら垣間見えるような……そんな印象を受ける。それが恋慕からくるものなのか、そうでないのか……私には解からん。だが、それでも……あんなに必死になられるのは、やはり羨ましい。

(解からんと言えば……。)

そう、もう一つ解からない事がある。あいつは……黒乃は、一夏をどんな存在だと認識しているのだろうか。普通に考えれば、好きなのだろうが……。だとすれば、どうして黒乃は度々私をフォローしてくれるのだ。私はお世辞にも冷静な女ではない。特に一夏の事になると、頭に血を登らせてしまう傾向にある。

しかし、子供の頃からそうだ……。黒乃は、私にとってマイナスであろう行動をほとんど防いでくれている。今朝がいい例だ。女子に囲まれる一夏を見てはいられずに、急いで立ち去ろうとしてしまった。だが、黒乃は少しばかりスカートの手端を掴んで引き留めてくれて……。

(あのまま立ち去っていれば、随分と印象は悪かっただろう。)

反省はしているのだが、やはりどうも一夏が絡むとな……。昔からそうなのだから、私はそういう女だと黒乃に見放されても文句は言えん程なのに……。それでも私をフオローしてくれるとなれば、黒乃は一夏の事をどうとも思っていない……。解からん。

いや、違うか……。重要なのはそこじゃない。それこそが、黒乃が優しいという証拠ではないか。こんな私でも見放さないで、友だと思ってくれて……。いるのだろうか？ いやいや、きっと大丈夫だ……。うん。とにかく、一夏が必死になる理由だけは解る。

何気に私も、オルコツトが黒乃の事をギャーギャーと喚き始めた時は……。なかなか腸が煮えくり返ったものだ。あそこで私も輪に入るのは得策でないと黙ってはいたが、次黒乃と一緒に居る時にでも同じような事があれば……。その時は容赦せんぞ。

……つと、物騒な事を考えていないで自室に戻ろう。私の足は再び動き出し、1025室へと向かっていく。目と鼻の先だったわけだが、考え事なら帰ってからすれば良

かったな。……? 部屋の中から、一夏の声はするが……まるで1人事のように聞こえる。つまり、黒乃が居るのか……?」

「……………」

悪い事であるとは思いながらも、私は扉を中の様子がうかがえるギリギリ程度に開く。すると私の目には、一夏の背中に密着して抱き着く黒乃の姿が飛び込んできた。お、落ち着け……何処の誰とも知らん馬の骨では無いのだ。ここで激昂したところで、黒乃の想いを無駄にするだけだろう……!

「ち、違う? あ、本当だな……さつきと順番が1つだけ入れ替わってんのか。」

「……………」

「うん……オツケー、次は間違えないと思う。黒乃、今のところをもう1回頼めるか?」
……此処からだとはよく解からんが、何やら私が思っている事とは違うらしいな。一夏の言葉の端々からISに関わる用語が出るのならば、何やら勉強中なのかも知れない。やはり突入しなくて正解か……私も多少は我慢強くなっている証拠かもな。うむ、やはり黒乃に感謝しなくてはならん。

(さて……………)

私は少しばかり開かれている扉をそつと閉じた。黒乃が私にそうしてくれたように、私も場の空気くらいは読むさ。紛れもない……あの空間は、完全に2人の世界だ。だが

これで、お前の腹も読めたぞ……黒乃。お前もやはり、一夏の事が好きなのだな。

いくら一夏と黒乃の間柄が家族同然とは言え、何とも思っていない男に対してあそこまで密着する事は出来んだろう。私は絶対に無理だ、一夏ならともかくだが……。いや、一夏だからこそ無理というのもあるが。そ、想像していると恥ずかしくなってきたしまった……。

と、とにかくだ！今は……そつとしておくのが吉。それでなくとも黒乃は、私のような者にチャンスを譲ってくれているのだから……。黒乃が行動を起こしたのならば、私に邪魔をする権利も資格も無い。だがそうなると、暇になってしまったな。……少し校内をふらつしてみる事にしよう。

第27話

「来ないな……。」

「ああ、来ない。」

「……………」

「……………」

長かったようで短い1週間が過ぎて、今日は月曜日……。イツチーとセシリーが模擬戦をする日である。イツチーが中学の途中から剣道を再開したおかげか、モツピーは原々作みたく鍛え直す！……なんて言い出さなかった。それでも勘を忘れないようにと、剣道はやつてみたいだけ……。

その他にも、キチンと座学でISの勉強もしていた……。というか、そこは俺が勉強してきたノートが役に立ったと言うか。とにかく実際にISは動かさなかったが、イツチーにとっては充実した数日間だったみたい。原作ではモツピーに対して文句ありありだったけど、特にいざこざといういざこざも無くて何より。

……なんだけど、ここはやつぱり原作通りか。イツチーの専用機の搬入、ホントに遅かったんだなあ。最初の内は2人共その内来るだろーハハハ、なんて言ってたのに……

もはや話す事も無くなったのか無言が続く。俺が喋られれば場を賑わす事くらい出来たろうに……残念無念。

「お、織斑くん、織斑くん、織斑くん！」

「落ち着いて下さい山田先生。走ると危ないですよ？」

「で、ですが……織斑くんをだいぶ待たせ……キャツ!?」

「おっと……。ほら、言わんこつちやない。大丈夫ですか？」

ピットの奥の方から山田先生の騒々しい声と、鷹兄のいつも通り余裕のある声が聞こえてきた。2人の姿が見えた事により、イッチーはやつとか……みたいな、モツピーはどこか安堵したような溜息をそれぞれ吐く。それで俺達が近づこうとしたら、山田先生が転びそうになるわけだ。

しかしそこは、隣に居た鷹兄がしっかりと支えた。ほほう……?この2人、何やらお似合いの2人なのでは? 副担任同士なせいとかよく一緒に行動しているみたいだし。何より、支えて貰った山田先生は解りやすいほどに頬を赤く染めている。ま、俺が干渉すべき事ではないんだろうけどね。

「えっと、山田先生？」

「はっ!? す、すすすす……すみません! あのですね、織斑くんの専用機の搬入の準備の完了を……。」

「のが多いですよー山田先生。つまるところ織斑くん、準備が整ったって事さ。」

「そういう事だ。急げ、織斑。アリーナをさせる時間は限られている。」

結局のところ用事の全貌が見えなかったためか、イツチーは山田先生に問いかけをした。……のだけれど、どうやらまだまだテンパった状態だったみたいだ。代わりに鷹兄が簡潔過ぎる説明をしたかと思えば、ちー姉が煽るように急かす。皆さん、イツチーのキャパシティはオーバーフローしかけております故。

「え？いや、あの……えつと……。」

「ん〜……まあとにかく、搬入口を御開帳〜。」

イツチーも若干テンパリ始めたのを察してか、鷹兄は隔壁のコンソールを操作して搬入口を開いた。まあ……イツチーには口で説明するよか、実際に見せた方が圧倒的に早いらね。事実、搬入口がスライドしながら開いて行くにつれて、イツチーの顔にも締まりという物が見られるようになってゆく。

「これが織斑くんの専用機、白式です！」

「白式……。」

「えつと、解説を入れさせてもらおうと……。」

「近江先生、時間がないのでそれはまた今度お願いします。」

搬入口が開くと、そこには白が居た……みたいな事をイツチーは考えてたんじなかつ

たかな。どこかブーツと、それでいて光のこもった目でイツチーは白式を見つめる。そんな中で鷹兄が白式について解説をしようとするが、ちー姉に制されて少し残念そう
だ。

どちらにせよ、鷹兄の解説はきつと専門用語のオンパレードなはず。イツチーは勿論のこと、俺も理解できないと思う。とにかくイツチーは、更にちー姉に急かされて白式へと搭乗した。最初こそ困惑した様子だったけど、なにやら白式がしつくりくるのか
イツチーの目は自信ありげに変貌している。

「問題はなさそうか？」

「大丈夫、千冬姉。いける。」

「そうか。さつき言った通りに時間が無い。」

フォーマット
ファイティング

初期化と最適化は戦闘中にやれ。」

なんとというか、イツチーと白式はシンクロ率が高いのかもな。俺は刹那の初搭乗の時にそんな自信满满ではいられなかった。とにかくして、もう残すはイツチーが飛び立つ
だけなんだけど……。モッピーや、恋する男の子に一言申してやりなさい。俺はモツ
ピーの背後に回ってグイグイと背中を押す。

「く、黒乃!?わ、解った……。ちゃんとするから背中を押すのは止めてくれ。あゝ……。一
夏。」

「箒……。？」

「が、頑張つてこい……。その、お前の勝利を信じている。」

「……ああ、ありがとな！黒乃、箒……勝つてくる！」

「織斑くん、いつでもいいよ！」

モツピーは顔を真っ赤にしながらだが、割と心からの応援を口にする事が出来たみたいだ。それに続いて、俺はいつも通りに黙つてサムズアップ。イツチーは、きつと絆の力つて奴を感じているに違いない。鷹兄がカタパルトのゲートを解放するのと同時に、元氣よく飛び出していった。

「一夏……。」

「……。」

「黒乃……。ああ、そうだな。一夏を信じよう。」

口では激励の言葉を送りはしたけど、やっぱりモツピーは心配の方が勝っているらしい。大丈夫だって、イツチーはやるべきややる奴じゃん。そんな意味を込めながら、そつとモツピーの肩に手を乗せる。それで俺の考えも伝わつたらしく、少しは安心したような表情を見せてくれた。

（ま、それも後は本人次第だけどね……。頑張りなよ、イツチー。）



「……随分と時間がかかりましたわね。」

「ああ、そこは素直に悪かった。」

カタパルトから競技場内に飛び込むと、一夏を待ち受けていたのは超満員になっているアリーナだった。そんな観客達を前にしても、セシリアは動じることなく悠然と佇んでいる。会話が可能な範囲まで一夏が近づくと、解っていた事だがセシリアの口から飛び出たのは嫌味だ。

本来は搬入に手間取った学園側の不備なのだが、必ずしも自分は関係ないと言えない。そのために一夏は、ペコペコとするわけでは無いにしてもしっかりと謝罪の言葉を述べる。セシリアとしては言い返して来るであろうと思っていただけに、少し調子を狂わせながらブロンドの髪を靡かせた。

「まあ良いでしょう、わたくしは寛大です。そんな寛大なわたくしは、貴方にチャンス差し上げますわ。」

「チャンスだと?」

「貴方はいわば前菜……」

オードブル

メインディッシュ

主 菜と戦うのにあまり手の内を見せるのもいただけませ

ん。そこで、大人しくお引き取りいただけるのであれば……甚振るのだけは勘弁してあげますわ。」

自分が前菜だとすれば、主菜とは間違ひなく黒乃の事だ。この問いかけに対して、一夏は特に怒りは覚ええない。何故なら、セシリアの言っている事は決して間違つてはいないのだから。ただ……黙つて引き下がるわけにもいかない。一夏の目の前に居るセシリアは、自分の誇りを穢した……。

「だとすれば、なおさら引き下がるわけにもいかないな。」

「なんですつて?」

「アンタ、黒乃に手の内見せるのが嫌なんだろう? だったら、俺が黒乃に楽させてやらないとな。」

勿論一夏とて、最初から弱腰でこんな事を言っているのではない。むしろ……勝つ気が満々といったところだ。それも全て、己の傷つけられた誇りを取り戻すため。自分に協力してくれた幼馴染のためにも負けは許されない。一夏はニヒルな笑みを浮かべながら、セシリアの言葉を完全否定した。

「そうですか、残念ですわ。でしたら——」

『試合開始。』

「お別れですわね!」

「くっ!」

セシリアは、試合開始と同時にその手に持っている射撃武装で一夏を急襲した。セシ

リアの専用機、ブルー・ティアーズが誇る高火力レーザーライフル『スターライト Mk-III』は、轟音を放ち砲口からエネルギーを射出する。セシリアが攻撃体勢に入っている事は、試合開始前から白式が知らせてくれていた。

しかしだ、それでも操作が多少遅れてしまう。なんとか白式の肩を掠るか掠らないかに被害を抑える事が出来た。実際にISは動かせ終いだったが、やはり黒乃と行った疑似操作訓練が役に立っているらしい。一夏は頭の中でサンキューと呟くと、急いで白式の姿勢を立て直す。

「あら？ 思ったよりもやりますわね。」

「そりやどうもー！」

「ですが、そう長くは続かなくてよ？ さあ、踊りなさい！ わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

セシリアのキメ台詞を皮切りに、凄まじいレーザーの雨が一夏と白式を襲う。その様は一見すれば美しいが、正面に立たされている一夏からすればたまった物ではない。いくら一夏の操縦技量が初心者にしては優れているとはいえ、言葉通りに初心者域を出る事は無い。

なんとか絶対防御の発動は避けようと躍起になっているせいか、その代わりにとでも言ったようにガンガンと白式へとレーザーが命中する。このまま何も出来ずに終わっ

でもおかしくない一夏だが、とにかく反撃をと武装の展開を試みた。しかし……白式の装備一覧を見て、一夏はある意味戦慄するしかない。

「近接ブレード……これだけ!? ええい、ないよりマシか!」

そう、恐ろしい事に近接ブレード一本しか積まれていなかった。名称が未設定のままのブレードを手元に呼び出すと、甲高い高周波音とともに白式の右腕から粒子が放出される。それは形を成して、一夏の手にスッポリと収まる。それは片刃のブレードで、メカメカしいながらも造形は洗練されていて美しい。

「近接ブレード……? そんな物で、射撃型機体であるブルー・ティアーズに挑むなど……笑止千万ですわ!」

「笑いたきや勝手にそうしてろよ、足元掬ってやるぜ!」



「すごいですねえ……織斑くん。」

「ですねえ。彼もやっぱり、織斑の名に相応しいって証拠かもですねえ。」

モニターで2人の試合の様子を眺める鷹兄と山田先生。確かにそれは言う通り。モニターに映るイッチーは、短時間でセシリーの弱点を把握して、今もブルー・ティアー

ズのブルー・ティアーズを3基撃墜してみせたのだから。……ややこしいから今後はB
Tと略そう。

ま、俺からすればここまでは知っている展開なわけで……。強いて言えば、イツチーの動きは随分と良い方なんじゃないだろうか。IS搭乗歴3年強の視点から言わせる
と、やはり何も訓練しなかつたよりは雲泥の差があつたに違いない。ただねえ……2人
が言うほど、のんびりもしてられないのよ。俺は思わず、左手をグツパグツパと閉じた
り開いたりしてみろ。

「……お前も気付いたか、藤堂。」

「どうかしましたか、織斑先生？」

「見ろ、アイツが左手を閉じたり開いたりしているだろう。アレは、アイツが調子に乗っ
ている証拠だ。」

「なるほど、本人が無自覚なタイプの癖ですね。」

別にちー姉に知らせる気は無かつたけど、問い掛けられたので頷いて肯定しておく。
すると俺達のやり取りが気になつたのか、山田先生が不思議そうにちー姉を見詰める。
後は、ちー姉が解説したとおりかな。あれねえ……マジでイツチーがあ癖を見せると
口クな事にはならないからね。

イツチーが料理を始めたばかりの頃だろうか？何を調子に乗つたのか、子供には不相

応な大ききのフライパンをプロの料理人よろしく振って……。その時に作ってたのは確かチャーハンだったと思う。見事にイツチーはフライパンをひっくり返して、その場に居た俺もちー姉に飯抜きをくらうと言うね。

その時にしつかりと観察してみたんだけど、フライパンを振り始める前に例の癖は確認できた。よって、ちー姉の言っている悪癖は大正解であつたことが実証されたのだ。別にイツチー一人が被害を蒙る（まうむ）のは良いんだけど、高確率で俺も巻き込まれるのは何故だ？

「それにしても、流石はご姉弟ですね。弟さんのことをよく解かっていらつしやる。」

「ま、まあな……。あれでも私の弟だ。」

「おやあ、照れてるんですか？これはレアな姿を見れました。」

「……近江、お前からかかっているだろう。」

「ええ、からかっていますね……。って、あいたたたた！」

いつも以上にニヤニヤしながら言うと思つたら、意図してからかかっていたらしい。あつけらかんとした様子でからかっている事を肯定するせいとか、鷹兄はちー姉のアイコンクローを喰らう。この人は……。頭良いんだか悪いんだか解からない時があるな。ちー姉の万力のような手で頭を握られてもアツハツハ……。って高笑いしてるし。

「コレは凄い……。人知を超越した力ですね！」

「お、近江先生!? 言ってる場合じゃ……。お、織斑せんせいも落ち着いて下さい〜!」
「私はからかわれるのが嫌いなのでな。」

……もう良いや、この大人達は放っておこう。モッピーは……言葉通りに信じてイッチーを待つてるっばい。そんじゃ、何を言っても無粋だよな。じゃあ残るは……イッチーか。ん〜……4基目のBTに回し蹴り……吹き飛ばして間合いを作ったつもりだろうけど、それは悪手だよイッチー。

いわゆる誘い……蹴りを喰らわせ、これで本体は隙だらけ……と思わせといて、実はBTは6基ありましたと。実を言うとBT 2つ目と3つ目を墮とさせたのも伏線だったのかも。刃が届きうる距離まで詰めただけに、ここからの回避はほぼ不可能。待ち受けている2基のBTは、レーザーでなくミサイルBT……。

「一夏!」

「ほ、ほらほら織斑先生、織斑くんピンチですよ! 近江先生なんかには構ってないで!」

「なんかって山田先生……酷いなあ。それにしても……なかなか神がかりなタイミングですね。」

「ああ、機体に救われた。」

ミサイルは見事にイッチーへ直撃……。これを見たモッピーは、悲壮感漂う声でイッチーの名を叫ぶ。それで大人達は慌てどころか、むしろ事態は収束へと向かっていっ

た。本当、鷹兄の言った通りに神がかつているとしか言いようがない。ミサイルの爆煙が晴れてイッチーの姿が見えると、白式の色は真白に変わっていた。

「な、何が起きたと言うのだ……？」

「……………」

「むっ、コレを見る？」ファーストシフト「一次移行……あれが、そうなのか……。」

携帯してるISに関する資料が記録してある空間投影型ディスプレイを起動させ、一次移行の項目をモッピーに見せた。一次移行で装甲が再形成されたと同時だったから、実態ダメージも全て無効……だったかな？やっぱ世界はイッチーを中心に回ってるのかね。

『まさか……一次移行!? 貴方! 今まで初期化と最適化をせず^{フォーマーケット}にわたくしと戦っていたと^{ファイティング}言いますの!』

『俺は世界で最高の姉さんを持ったよ。』

『はあ!』

モニターに映る2人は、そんなやり取りを繰り返した。まあ……そうだよ、質問の答えになつて無いもん。会話のドッジボールつて奴?しかしこの流れ……やっぱリダメみたいですね、どう足掻いても原作通りか。イッチーは零落白夜を発動……そのエネルギー消費で敗北と……。良いや、見ないでおこう。人が失敗する所つて、見てると

か苦手なんだよね……。

「黒乃……？待て、最後まで見ないで帰るのか。」

「結果は見えた。」

何か悟ったような……フツと笑みを浮かべてから、俺はその場で振り返った。もちろん、それが顔に出ているかどうかは俺には解からない。それを抜きにしても、当然ながらモツピーは俺を引き留めた。久方ぶりに声も出たので、思った事をそのまま述べてピットを立ち去る。……後でイツチーの残念会でも開いてあげよう。



「俺も家族を守る……なんて大それたことはまだ言えないか。とりあえず俺は立った。それだけは間違いない。」

「貴方、先ほどから何を仰って——。」

「ようやくスタートライン……。2人の背中は遠いだろうけど、絶対に追いつくさ……。黒乃、千冬姉。で、必ず追い抜く……。だからその時は言わせてくれ。俺が……。絶対守って見せるからって！」

「だからさつきから何を……。ええい、お話になりませんわ！」

白式が本当の意味で一夏専用最適化されると、その手に握られていた名もなきブレードにも銘が入る。雪片式型……それが真なる名だ。雪片とは、一夏の姉である千冬が唯一用いた武装。それと同じ名の刀を持っている事は、何か託されたような……そんな感覚だった。

しかし、まだ雪片は自分にふさわしくないと一夏は考える。だからこそ、一夏はようやくスタートラインだと言ったのだ。ようやく……ようやく、背中を見ている事しか出来なかつた大事な姉と姉貴分の背中を追える。その事が、一夏には嬉しくて仕方が無かつたのだ。

だからこそ、こんな所で躓いてはいられない！……とても言いたげに、一夏は行動を起こす。基本を思い出せ、俺の根幹は剣道にある。そう自分に言い聞かせた一夏は、セシリアのヒステリックな声に命じられて攻撃行動を開始し迫つて来ていたBTを、雪片にて切り伏せる。

「よしっ……！」

「そんな！」

（けど、エネルギーもあとわずか……もつてくれよ、白式！）

一夏に余力を残している暇なんてなかつた。しかし、黒乃の教えはここに来て勝負の明暗を分ける。刹那の操縦が癖に着いていた黒乃は、無自覚に一夏へある事を伝えてい

たのだ。それは、極力エネルギーを無駄にしない操作を心がける事。燃費の悪い刹那だ……一挙一動に気を遣う。

一夏の受けたダメージは、黒乃の知っている展開とほぼ変わらない。だが、一夏自身が白式を操作して削ったエネルギーは……白式の特異能力を発動させても問題無いほどへと抑えられている。一夏は雄叫びをあげながらセシリアの懐へと潜り込み、逆袈裟斬りを喰らわせた。

「おおおっ！」

「キヤアアアア!？」

『試合終了。勝者、織斑 一夏。』

その一撃が決定打となり、試合終了の合図がアリーナ内に響く。織斑 一夏が、男が……代表候補生に勝つたのだ。それは会場の誰もが予想していない結果で、むしろ一夏も必死だったのか何が何だか解っていない様子に見える。そしてようやく自分の勝ちを理解した一夏は、ゆっくりとセシリアに近づいた。

「なんですか？ 惨めなわたくしを笑いにでも——」

「するかよ、そんな事。もしそんな事をする奴が居るんなら俺が許さない。」

「では、わたくしに何の用事ですか……。」

「ん、握手。正直、アンタの事はまだ許せない……けど、試合にそんなん持ち込むのは無

しだ！だから握手。」

一夏は呆然としているセシリアに右手を差し伸べる。この試合に勝つても負けても、一夏はきつとこうした事だろう。黒乃を侮辱した事に關しては言葉通りだが、それでもセシリアと健闘を湛えあるのは当然の事であると一夏はそう言いたいらしい。セシリアは、ようやくこの男がどういう男か理解したらしい。

「……わたくしは、貴方程度勝つて当然だと思つていましたが……それこそが、敗因のようですね。次は負けません。」

「ああ、次も互いに全力で闘おうな！」

セシリアが一夏の手を取ると、会場内は2人を温かい拍手で包む。するとセシリアは一夏の手を離し、まるでランウェイを歩くモデルかのように去つて行つた。一夏はなんだかな……といった様子でその背を見守ると、自分も出てきたピットへと戻つて行く。

「一夏、凄いいじゃないか！」

「本当です！最後の一撃までの流れは感心しました！」

「いやはや、魅せてくれるねえ。完璧なエンターテイメントだったよ。」

「お前達、あまりその馬鹿を甘やかすな。」

興奮した様子で一夏に詰め寄る箒と真耶、素直に一夏を褒め称える鷹丸。いずれも、出席簿アタックの餌食となる。順序良く頭を叩かれるその様は、まさにもぐら叩きその

ままであった。女性陣は頭を押さえて涙目になり、鷹丸は相変わらずアハハと笑い飛ばして見せる。

「お前も、あまり調子に乗るなよ。今回は本人の言っていた通り、油断によるところが大きい。次はそうはいかんだろうから覚悟しておけ。」

「ああ、勿論解つて——」

「敬語を使え馬鹿者が。」

ギロリと千冬に睨まれて、矛先が自分を捕えたのだと一夏は解っていた。しかしなかなかプライベートの癖が抜けないのか、タメ口を千冬に使ってしまう。それを逃さないのが織斑。千冬である。一夏の言葉を遮り、その頭に出席簿アタックを叩きこむ。これでこの場に居る全員が被害を受けた事となる。

それからしばらく、IS起動におけるルールブックを渡されたり……申し訳程度の労いを千冬からされたりで、あれよあれよと言う間に状況は進む。千冬が移動を始めると同時に、副担任コンビもそれについて行く形となった。そうして、ピットに残されたのは一夏と箒のみ。一夏は、ここに来てようやく違和感に気が付いた。

「なあ箒、黒乃は何処だ？」

「黒乃か？ 白式がファーストシフト一次移行してしばらくすると何処かに行ってしまったな。」

「そうか……。」

「フフツ、そう気落ちするな。去り際に黒乃が何と言ったと思う？結果は見えたと言ったのだぞ。」

黒乃が、勝利の喜びを分かち合いたい相手が1人足りていない。ピットを途中退室したと言うと、一夏は露骨にしよんぼりした様子になった。そこで、すかさず箒がフロアを入れた。少し箒が笑ったのは、コレを聞けば一夏は必ず喜ぶと思っただからだろう。

「それって、俺が思ってる意味で良いんだな？」

「それ以外考えられるか。黒乃は解っていたのさ、一夏がファーストシフト一次移行すると同時に……一夏の勝利をな。」

「そうか……！」

結果は見えた、一夏が勝つのが見えた、だからこそもうこの場に居る意味も無い。そういつた意味で、黒乃はこの場を去ったのだと2人は結論付けた。それが解った途端に、一夏はやはり嬉しそうな様子を見せた。すると箒は、去る寸前の黒乃の事を思い出し……涙を流す。

「箒……？おい、どうかしたのか!？」

「い、いや……濟まない。……あの時の黒乃は、笑顔だった。本当に、薄い薄い笑みだ……。だが、黒乃の笑顔を見れたのだと思うと……つい……。」

自分でも知らず知らずの内に泣いてしまったのか、箒は心配させまいと慌てて涙を拭う。いきなり泣き出したわけを一夏に話すと、どうにも黒乃の笑顔がフラツシユバツクしてしまう。そのせいか途中からは、少し声を震わせながらの説明となった。

「そっかー……そいつは損した。……何年も見てないしな。」

「おいおい、お前がそんなのでどうする?」

「……ああ、そうだな。いつかきつと、皆でまた笑い合えるよな!」

「その意気だ。では……食事にもするか。無論、黒乃も誘つてな。」

「おう、そうするか。……の前に、俺は汗を流したいかもだ。」

どうすれば黒乃が元に戻るか。医学的知識のない一夏に方法は見えないが、誰よりも黒乃の回復を願っているのは一夏だろう。信じていけば、きつと。少し揺らいでしまつた一夏だったが、箒の言葉のおかげで気を取り直せた。そうしていつもの調子を取り戻した一夏は、箒にニカツと歯を見せながら笑顔を見せる。

しかし、この2人はまだ知らない。こう話した翌日に、黒乃の笑顔を目撃する事。そしてそれが、自分達の思い描くそれとは……正反対とも言える笑顔だと言う事を。黒乃の笑顔を目撃した2人は、果たして自らの中に居る黒乃を……律していられるのだろうか……?」

第28話・表

「オルコット、準備は良いか？」

「ええ、わたくしはいつでも。……それより、何故ISスーツを着ているのか聞いてもよろしくて？」

「もしもの時の為だ。……これだけ言えば解るだろう。」

今日は黒乃とセシリアの模擬戦が行われる日……にも関わらず、第3アリーナは昨日と打って変わって静まり返っていた。それもそのはず、千冬が入場制限をかけたからである。妹分の試合ながら、どう転ぶかなんて事は千冬にも予想がつかない。それ故に、黒乃へと最大限の配慮を施しているのだ。

そしてこれまた静かな第2ピットにて、千冬はセシリアに準備の状態を問いかけた。セシリアの言う通り、千冬はその身をISスーツで包んでいる。セシリアからすれば聞くまでも無かったが、どうしてもその質問を口にせざるを得なかったのだ。すると千冬は、皆まで言わずに簡潔な返答をくれてやる。

「そうですか。わたくしは、てつきりこの期に及んで止めにかかると思っていましたわ。」

「……止めんさ。藤堂と闘う事でしか、お前のケジメがつかんと言うならな。」
「ありがとうございます……。」

「感謝はするな。これでも、複雑な気分なんだよ……。」

顔には出ていないが、千冬の心中は複雑そのものだろう。セシリアが行おうとしているアンジェラの仇討……その手助けをしているに等しい。仇討の対象が妹分なのが、教師である立場がセシリアを止めるといふ行為を邪魔する。それだけに、セシリアの感謝の言葉なんて到底受け取れない。

「余計な口を叩いていないで、準備が出来たのならば迅速に行動せよ。」

「了解しました。」

教師としての務めを果たす千冬を前に、セシリアはある意味で尊敬の念を覚えた。口で感謝がダメなのならば、言われた通りにするのが今は千冬に報いる事だ。そう考えたセシリアは、すぐさまブルー・ティアーズを展開。カタパルトへ足を着けると、いつでも出撃可能な体制を取る。

それと同時に、出撃用の隔壁が開いた。ナビゲーターもオールグリーン、最後にゲートにGO!という表示が現れる。合図が出てからコンマ数秒。そう言っても差支えが無いほどの反応速度でセシリアはブルー・ティアーズと共に飛び出していった。

ハイパーセンサーでは、既に向こう側のカタパルトに居る黒乃と刹那を捕えていた。

そして、思わず驚愕してしまう。刹那は超が着くほどの高機動機体。そんな事は黒乃を打ち倒さんとするセシリアからすれば周知の事実。しかし……やはり映像と生で観るのは迫力という物が違った。

(くっ……そもそも、何故あんな機体で飛ぶことが出来るのです……)

カタパルトから出撃し始めたのはほぼ同タイミングだったと言うのに、刹那とブルー・ティーズでは競技場内まで迫り着くまでにかかった時間は数秒単位で違う。そんなとんでもない速度の機体を平然と扱うあたり、セシリアは単純に黒乃の操作技量を悟った。

「ようやくこの時が来ましたわ。ミス・藤堂……わたくしは、貴女に勝ちます。そして、姉様の無念をわたくしが……!」

「……………」

開始位置へと着くや否や、セシリアは高らかに黒乃へと向かってそう告げる。念願叶ってようやく成就したこの闘い……。セシリアにとつては、この1戦の為にIS学園へ来たと言っても過言ではないのだから。対する黒乃は、いつもの通り無に等しい。

いや……実際のところは、何か考えてはいるのだろう。興味が無いなんて事はあり得ない……セシリアは、自分にそう言い聞かせた。黒乃が余りにも無表情が過ぎる為、それこそ興味が無いと言いたいように見えてしまうから。彼女が無表情なのは、彼女が望

んでいる事では無い。セシリアは更にそう心の中で呟くと、しつかりその相貌で黒乃を見据えた。

『試合開始。』

「くっ、いきなりですわね……!」

試合開始の合図が聞こえると、機械的な開閉音もしつかりとセシリアの耳に届いた。黒乃の両手に握られているのは、紅雨と翠雨だった。それが高確率で投擲の用途で使用されている事も把握しているが、セシリアにとつては痛い所を突かれる形となる。

「背に腹は代えられせんわ!」

黒乃はセシリアの自身の動きとBTの動きを同時に行えないという部分をしつかり把握……と言うよりは、一夏に大声で喋られたせいで知っていて当然というものもある。とにかく黒乃は、紅雨をBTの内1機に、翠雨をセシリア自身へ投げつけてきたのだ。

そこでセシリアが取った選択は、自分自身に発生するダメージを最小限に抑える事だった。単純な横移動のみで翠雨の回避は成功するが、その代わりとも言うかのように紅雨はサクツとBTへと突き刺さる。しかし、セシリアの予想に反してBTは完全に機能停止していない。

(……そうですね、これを布石とさせていただきましょう。)

だがセシリアは、あえてBTの操作を一時的に中断し、さも機能不全の影響で地に落

ちたかのように見せかけた。果たしてこれが何を意味するのか、それはまだ解からない。そしてその一連の作業を行っていると……爆音が鳴り響く。何事かと意識を集中させると、セシリアの目の前には既に黒乃の姿があった。

「っ!? キヤアアアア!」

どう考えても物理的に一瞬では不可能な距離を詰めてくる……これぞ刹那の誇る強みだ。黒乃が仕掛けたのは、余力を十分に残したO オーバー・イクニッションブースト I Bである。ブルー・テイアーズにとつて、懐に潜り込まれることほどバッドなシチュエーションはない。そのまま抵抗も出来ずに、刹那の疾雷と迅雷に斬り裂かれてしまう。

「そう簡単にいきません事よ。」

「……………!?」

タダで転んでいて、黒乃を倒せるはずが無い。そう判断したセシリアは、おもむろにスカート部のBTにミサイルを装填。この距離で撃つては自分も巻き込まれると承知の上で、黒乃に向けてミサイル2発を放つ。セシリアとしては直撃させるつもりだったが、寸前のところで黒乃は横にステップするように クイック・イクニッションブースト Q I Bを発動させる。

だが、完全に外したわけでも無い。ミサイルは片方が刹那の翼である雷火へと激突し爆発、もう片方はそれに誘爆する形で爆ぜた。予想通りに自身も爆風に巻き込まれたセシリアだったが、同じく黒乃もそうなら御の字だと気持ちを切り替える。そして爆煙の

最中で刹那の位置を確認すると、グングンと後退していくのが解った。

自分の土俵に入ってくれるのならば好都合だが、どうにも釈然としない。前進あるのみ、後退の2字などない。……といった戦闘スタイルだと記憶していた黒乃が、こうもアツサリと下がるのだから。何かあると考えるのが普通だが、とにかく自分がするべきは攻勢に出る事だ。

(攻撃……開始！)

精密な射撃は一切意識せずに、とにかく手数を優先して3基のBTをフル活動させる。BTから射出されるレーザーは爆煙を貫き、黒乃の居る方向まで真っ直ぐに飛んできていく。しかし、黒乃も雷火をフル活動させてきた。右へ左へとにかく連続して

クイック・イグニッションブースト

Q I B を発動させ、レーザーの弾幕は掠りともしない。

「ちよこまかと……。ですが、これには気付けなかったようですね！」

「……………!?!」

「喰らいなさい！」

「……………っ！」

セシリアの目的は、弾幕を張ってまぐれ当たりを狙ったものでは無かったのだ。試合開始直後に投じた布石……その布石を用いた大ダメージこそが真の目的である。さも機能不全に見せかけたBTを、こつそりと操作して黒乃の背後へと移動させた。どうい

う事か、黒乃はそれに全く気が付かない様子だ。

それもそのはず。BTによる攻撃の手数が多いせいで、刹那のハイパーセンサーは警告音が鳴りっぱなしだ。いちいち確認している暇も無いほどで、背後に居るBTの警告も黒乃は無視してしまった。流石に至近距離から突然に攻撃されては黒乃もキツイらしい。紅雨が刺さったままのBTのレーザーは、完璧に黒乃の背にクリーンヒットした。

「……………」

セシリアと同じく、黒乃もタダでは転ばない。瞬時に背後へ振り向くと、刹那独特の鳥類と同構造の脚部でBTを掴まえる。そしてそのままの状態で紅雨へ手を伸ばすと、手前に引つ張るようにして手元に収めた。それに伴って、BTはまるで紙切れのように裂けてしまう。誰がどう見ても、今度こそ機能停止だろう。

「そちらばかりに気を取られてもよろしいのかしら？」

黒乃が背後のBTを破壊するのを優先したのは、単に張り付かれる事を恐れたからだろう。そんな事は解っているが、セシリアはあえて挑発的な言葉を述べて見せる。再反転した黒乃がセシリアを真正面に捕えた頃には、さきほどよりも遠方にて構えていた。

背後のBTを破壊していた隙で、数発は必ず当たる！セシリアはそう確信して、BT 3基で射撃を再開。しかも今度の狙いは鋭く、精密と表現するにふさわしい。だが、本

人が思っているよりも上手くはいかなかった。黒乃はとにかくクイック・イグニッションブーリストQ I Bを連発し、一目散へ安全圏へと入っていく。いざ蓋を開けてみると、本当に1, 2発程度しか当たってはいない。

(ですが、確実にダメージを与えられています!)

セシリアの心中は、あの八咫鳥相手にしてやつたり。それに満ち溢れていたのだ。そう、この瞬間までは……。まだまだこれから、そうやって攻撃を再開しようとする……。とんでもない殺気を感じた。身体が重く感じ、まるで押しつぶされしまいそうな……。そんな気さえする。この殺気はいつたい……。?

「っ!? あ、貴女……。何が可笑しいと言うのです?!」

セシリアは、気付いてしまった。相對している黒乃は、まだ八咫鳥の片鱗すら見せていない事に。何故なら、黒乃の今の表情が物語っているからだ。俯かせていた顔を上げた黒乃の表情は……。口元が三日月に見えるほど歪んでいた。この狂気に満ちた笑顔を見せてこそ、真の八咫鳥だと……。セシリアはこの瞬間に悟ったのだ。



「なん……。なんだよ……。」

「くろ……の……?」

「いったいどうしたつてんだよ……黒乃!」

千冬が入場制限をかけた第3アリーナだったが、この2人に関しては何特別に許可されていた。ピットで黒乃の試合を観戦していた一夏と篤は、目の前で起きている現実を受け入れられない。千冬が2人を通したのは、知る権利くらいはあるから、遅かれ早かれ知る事になるという理由からだが……。

当初は候補生同士の戦いに、ただただ舌を巻くだけだった。それがどうだ? 黒乃が狂気に満ちた笑顔を見せるなどと、誰が想像できたものか。一夏は思わず、モニター越しの黒乃に問いかけるように叫ぶ。そうやって一夏が叫んでいる最中に、ただ一人……同じくピットに居る近江 鷹丸は、いつも以上のニヤけた表情を見せていた。

「お……前が……! お前が! 黒乃に何かしたのか!」

「嫌だなあ、人聞きの悪い事を言わないでよ。彼女は昔からあんな感じさ。後で君のお姉さんにも聞いてみると良いんじゃない?」

「ふざけんな! 昔だと……お前なんか、黒乃の何が——」

「止める一夏! 言ったはずだ……お前がそんなのでどうする!」

鷹丸は完全に白なのだが、一夏本人が鷹丸を嫌っている事と、必要以上のニヤけ顔が黒だと思わせたのだろう。一夏は鷹丸に詰め寄ると、その胸ぐらを掴んで捻りあげた。

しかし鷹丸は、あくまでいつものペースを崩さない。それが火に油を注いだが、箒が割って入ってそれを止める。

とはいえ、箒とて冷静な状態では無い。日ごろから怪しい奴であるという認識の鷹丸が、完全に危険思想の持ち主に変わり始めている。一夏を止めるのに必死だったせいで荒げていた息を、ゆっくり落ち着けさせ……箒は自身の聞くべきであろう質問を投げかけた。

「近江先生……聞かせてください。黒乃の身に、何が起きたと言っています。」

「あれ、君達ホントに知らなかったんだ？ うくん……何処から話すべきかなあ。それじゃ……七宝剣^{しちほうけん}。」

「は……？」

「ザ・カタストロフに黒の女帝とか……。他には、エル・ノワールとかもあつたかな。」
「もったいつけんよ、それがなんだってんだ！」

「これ、全部藤堂さんに着いた2つ名だよ。これでもまだほんの1部さ。」

七宝剣……コレは恐らく、刹那の剣が7本であるから。ザ・カタストロフは、悲劇的結末を意味する言葉。黒の女帝となると、黒乃の名前とかけたいわゆるダブルミーニング。エル・ノワールはフランス語で、直訳すると黒翼……。これら全てが、黒乃1人の呼び名であるのだから驚きだ。しかし、肝心な物が1つ抜けている。

「でも、世界共通……最も藤堂さんが呼ばれる代表的と言つて良い2つ名があつてね。それが——」

「八咫鳥……ですか？」

「そう、その通り。どうやら、そう呼ばれてる事しか知らなかつたんだね。」

鷹丸は、随分ともつたいつけるようにそう語る。それに耐えきれなくなつたのか、箒が鷹丸の言葉を遮り思い当たる節のある名詞を呟いた。すると鷹丸は、まるで良くできましたと褒めるかのような声色でその通りと返す。更に鷹丸は、合点がいつた様子でなるほどなるほど……と、大きく頷いて見せた。

「じゃあこつちは知つてるかな。与する者には幸を運び、仇なす者には災いもたらす。笑みを浮かべて仇を屠るその姿、まさに黒い翼の八咫鳥……つてね♪」

「与する……者。それが、俺や箒みたいに黒乃に友好的な奴で……。」

「仇なす者はその逆……黒乃に敵対する人物？」

「正確に言えば、自分含む周囲の人間に敵対する……だろうね。今回の件がいい例なんじゃないかな？」

顔は笑っているが、どうやら調子が出てきたらしく……鷹丸の目は糸のような目から猛禽を思わす鋭い物に変貌した。そして詠うは、八咫鳥の畏怖故に広まつた詩……。それを聞いた2人には、前者に関して大いに心当たりがある。何故なら、黒乃がそこに居

るだけで幸福を感じる事さえあるのだから。

となれば、仇なす者は半自動的にその逆。つまるところ、箒が言った通りに敵対する人物という事になる。しかし疑問なのが、そもそも鷹丸が語っている八咫鳥に関する物事が、本当に黒乃の狂気じみた笑顔と繋がった話なのかどうかだ。一夏は逸る気持ちをグツと抑え、鷹丸の言葉の続きを待った。

「それでね、なんで藤堂さんがそんなに怖がられてるかって事だけど。さっき言った通りに、彼女はいつもああなんだ。」

「ああって……まさか!？」

「まさかもまさか……大抵はああやって笑うんだよね。相手が強ければ強いほどその確率も上がるかな。」

「黒乃が、そんな……!？」

「あの笑顔が出るとね、藤堂さんはけつこうえげつなくなるんだ。そのせいか知らないけど、藤堂さんは……累計で20ちよつとのIS操縦者をダメにしちゃってるのさ。」

鷹丸の言う累計とは、黒乃が八咫鳥とよばれるようになる以前の人数も含んでいる。それでもだ、20数人のIS操縦者を精神的に追い詰め……2度とISに乗れないようにしてしまった。2人……特に一夏は、その事実が受け入れられない。だが……モニター越しでも伝わるプレッシャーのせいかな、信憑性は感じざるを得ない。

「おっと、翼も出しちゃうんだ……。2人とも、此処からは瞬き禁止だよ。」

そう言う鷹丸の言葉で我に返った2人は、モニターへと注目した。するとそこには、雷火から黒い炎が噴き出し……。まるで本当に鳥の翼を生やしたかのような黒乃が映し出されている。そして身体を少し丸めてタメのような動作を見せると、一気に黒乃は動き出す。

試合開始からずっと刹那の速度に驚いていた一夏と箒だが、これこそが本気を出した最高速度だ……。と語る鷹丸の言葉に絶句するしかない。更に驚くべきはまだまだこれからであった。セシリアは反撃の為にスターライトMk-IIIを撃つが、まるで当たりはしない。

何故なら、最高速度で突っ込んでいるにも関わらず……。まるで反復横跳びのように鋭く進路を変えているからだ。それもその都度攻撃を回避する為では無く、縦横無尽の言葉がふさわしい様相で黒乃は常に動き回っていると云って良い。完全に近距離戦闘のリーチまで入り込んだ黒乃のとった次の一手は……。

「か、刀で攻撃しない……。？」

「ああ、なるほど……。今回は飛び切り上げつないかもねえ。」

「!? どういう意味だ!」

「見てれば解るよ。けど……。キミらにはあまりオススメはできないかな。」

黒乃はセシリアに密着したかと思ったら、足を背中に回すかのようにしてホールド……捕縛した状態へと移行した。そして肱を曲げつつ腕を振りあげた時点で、鷹丸は次に黒乃がどう出るか理解した。見てれば解ると言われた一夏は、穴が開くほどにモニターを凝視する。……と、刹那の肘から刃が飛び出てきた。

それは隠し種と言つて良い物で、霹靂と名のついた仕込刀だ。使用用途が非常に限定されているため、刀を7本全て落としたとか、緊急用の為に鷹丸はつけたつもりだった。しかし……予想に反して、黒乃は主兵装のように霹靂を使つて見せる。刃の飛び出た鋭い肘を、ガツンと力強く打ちつけた。

「ヒッ………キヤア!?!」

「……………!」

「このっ………このお!」

「……………っ!」

「キヤツ!?!ね、狙いが………定まらな………」

相手を捕縛し、身動きのできない状態から霹靂の刃を絶対防御発動圏内に叩きつける。とてつもなく有効な戦術だ。しかし、セシリアも負けじとBTによる射撃で、黒乃の頭上にレーザーの雨を降らせた。だが、黒乃は次の瞬間には

O オーバー・イクニッションブースト I Bを地面
へ向けて発動させる。

ズドン！と大きな音が鳴ると共に、土煙が2人を中心とした周囲に舞った。おかげでセシリアは、ほんの少しの反撃しか許して貰えない。そして待っているのは、連続で振り下ろされる刃付きの肘打ちだ。黒乃は容赦の欠片も見せず、次々と霹靂をセシリアの胴体へと喰らわせる。

「……………！……………！……………！」

「あ、ああ……………」

「……………！……………！……………！」

「あああああああああつ！」

マウントポジションを取られ、刃を身体に叩きつけられる……………それも笑顔で。セシリアの顔面に映し出されているのは、恐怖以外の何物でもない。恐怖のあまりにセシリアは絶叫を上げるが、それでも黒乃が手を緩める様子は見られなかった。それを見た一夏は、フラフラとした足取りでモニターに歩み寄る。

「止めろよ……………黒乃……………」

「一夏……………」

「おかしいだろ、そんなの……………。そんなの……………俺の知ってる黒乃なんかじゃ……………」

音を立てて崩れていく。一夏が積み立ててきたこれまでの黒乃が。一夏は黒乃という存在に寄り添う事で、自分という存在を保つてきた節がある。それだけに、目の前で

繰り広げられる光景を見てみると……まるで自分が自分でなくなってしまうような気さえた。だからこそ、一夏の心に宿る思いは……。

「止めてくれ……。これ以上……黒乃を……黒乃を壊さないでくれ！」

「一夏、少し落ち着け……黒乃は——」

一夏は黒乃に向かつて、黒乃を壊すなど懇願した。混乱しているのはあるだろうが、一夏としてはアレが黒乃だとは到底受け入れられないらしい。一夏は目の前の黒乃を、別人と認識してしまっているのだ。酷く混乱している一夏をなんとか落ち着かせようとする筈だが、その声はろくに届いていないらしい。

「あれは、千冬さん……？」

「ん……試合続行不可能と判断……かな。」

セシリアサイドのピットから、打鉄を纏った千冬が猛スピードで飛び出してきた。ブルー・ティアーズのシールドエネルギーはまだ残っているが、これ以上は危険と判断して止めにかかったのだろう。鷹丸が2人へ、こういう時の為に織斑先生が待機していたんだよと伝えると、筈は何処か安堵したような表情を見せた。

そして猛スピードのまま突っ込んだ千冬は、加速を十分に利用した蹴りで黒乃をセシリアの上からどかせた。黒乃はゴロゴロと転がりながら体勢を立て直し、セシリアの居る地点から数メートルで片手を地に着けつつしゃがんだ状態になる。その表情は……

少しずついつもの無表情へと戻りつつあるようだ。

「近江先生、オルコットは……。」

「気絶してゐるみたいだけど、命に別状は無さそうだね。ただ問題は……彼女がこれからISに乗れるかどうかだね。」

黒乃もちろんだが、箒はセシリアの安否も気になったようだ。近江は手元に空間投影のモニターを呼び出すと、セシリアのバイタルパターンらしき物をチェックした。医学の専門知識があるわけではないが、まあみれば解るといふ奴だろう。

そんな中、競技場では千冬が黒乃を落ち着けさせようと必死だ。黒乃は千冬に蹴り飛ばされてもなお、セシリアへと向かおうとしたのだから無理もない。しかし、それでも千冬を押し退ける……が、既に問題ないと判断したのか千冬は何もしなかった。その判断は正しかったらしく、黒乃はセシリアを姫抱きで持ち上げピットへ戻ってくる。

「黒乃、お前は……!」

「……軽蔑してくれていい。」

「!」

戻つて来しだい問い詰めようと歩み寄つた一夏だったが、黒乃の一言でその気は失せてしまった。黒乃も黒乃で、それだけ言うとし刹那を待機形態に戻して何処ぞへと歩いて行つた。恐らくは保健室だろうが、残された一夏と箒はやはりそんな事より黒乃が気に

なつて仕方が無い。

「……クソツ！」

「……私達の知っている黒乃だけが、本当の黒乃ではない……という事なのだろうか。」

「なんだと……!? それじゃ、認めろつてのか! あんなことをしたのが黒乃だつて!」

「つ!? 私とて信じたくはない……アレを見たつて、黒乃の味方という言葉は嘘では無い

!だが、実際に私達の目の前で起こつてしまった!」

「はいはい、2人とも落ち着いて。君達がケンカする事は無いんだよ? リラックスして、

はい……深呼吸〜。」

箒の眩きが、冷静で無い一夏には癩に障つたらしい。そして返した言葉が、今度は箒の癩に障つた。このままでは売り言葉に買い言葉のケンカに発展……する前に、鷹丸が持ち前のゆるふわオーラで2人の仲裁をする。あくまでいつも通りの鷹丸を前にして、一夏も箒も毒気を抜かれてしまったようだ。

「……悪かった。」

「いや、私の方こそ。」

「まあとにかく、藤堂さんの事でケンカするのだけは無しにした方が良いんじゃないかな。藤堂さんがそれを望むと思うかい?」

「そんなわけないだろ……。」

「そう、解ってるならいいけどさ。とにかく2人とも、今日は早く帰って冷静になろうね。それじゃ、僕は少しここで用事があるから。」

一応は鷹丸に敬語で対応していた一夏だが、モロにタメ口……しかも殺意のこもった眼で返した。それでもやはり鷹丸には効果が薄いようで、やんわりと解散を告げてさつさとピットを後にする。残された2人は、しばらく無言で微動だにしない。やがて動き始めたのは、一夏の方だった。

「………これからどうするのだ？」

「……………。オルコットの様子を見てくる。もしかしたら、話が聞けるかもしれないかな。」

「そうか。私は……部屋に戻っているぞ。」

先に動き出したのは一夏の方だったが、箒は横を通り過ぎるように抜き去って1025室を目指し歩いて行った。一夏は箒の背が完全に見えなくなると、駆け足で保健室へと向かう。自分に今すべきことは何か、しきりにそれを考え、一夏はひたすらに走り続けた。

第28話・裏

「イツチーとセシリーが模擬戦をした翌日、同じ時間と場所……つまり放課後の第3アリーナに俺は居た。現在はピットにて、精神統一をしているところだ。刹那に乗るには、相当な集中力が必要になる。繊細な操作をしなければ、墜落してしまうリスクが高いからね。」

「黒乃？こんなところで仁王立ちしてどうし——」

「ああ、今話しかけない方が良いよ。彼女、試合前はいつもそうだから。」

「近江先生。つまり……ルーティーンという奴ですか？」

「うん、多分だけどね。声をかけるのは、藤堂さんの準備が整ってからにしてあげて。」

「そうそう、イツチー……悪いけど今は話しかけんという。応援に来てくれたのは素直に嬉しいけどね、せつちゃんはデリケートな子だからさ。……というか、イツチーが昨日はセシリーに勝ったら嬉しいんだから驚きだよ。それに関しては失礼な事をしたな……。結果は見えたらなんて言っさ、最後まで試合を見ないままとか。」

「……あれ？そう言えば、奴隷化計画はどうなったんだよイツチー。あれか、勢い余って勝っちゃいました的な？考えられるとすればそれしかない。うくん……無いとは思

うけど、俺もそうならないように注意しておかないと。そう……俺はセシリーに勝つために此処に居るのではない……奴隷にしてもらう為だ！

「もう良いかな……。2人共、何かあるなら今だよ。」

「黒乃、頑張れよ。黒乃ならきつと勝てるさ！」

「日本人の力、オルコットに見せつけてやれ。」

有難い事に2人から激励の言葉をいただいた。全力でやるつもりはあるけど、勝つ気があまりないからなんか申し訳ないな……。いや、それで2人には俺の全力はそんなもんだと解つて貰おう。とりあえず首を領かせて肯定はしておく、誰も勝つとは言つてないかね。

「じゃ、刹那を展開してね。」

「……………」

「これが黒乃の専用機……なのか。」

「やはり鳥か……。」

いやモツピー、やはり天才か……みたいな言い方してどうしたのさ？ まあ仰る通りに鳥ですけど……。気にするほどの事でも無い……か？ とにかく、刹那を展開した俺はカタパルトまで移動を開始する。そして出撃準備をしてきている鷹兄を見て思ったが、ちー姉と山田先生は何処に居るんだろ。

流石にこの場を鷹兄だけには任せないだろうから、セシリー側のピットに居るのかな。どうせなら、こつちで応援してくれたら嬉しかったけど。しようがないか、ちー姉は教師なんだもん。そんじゃ、ゲートも開いた事ですし……行きますか。雷火を通常飛行能力でフルブースト……飛行開始！

相変わらずトンデモな速度に背中を押されて、一気に競技場へと躍り出た。こればかりは一生慣れる事も無さそうだ……。ま、最近は何分かはマシって感じかな……。さて、向こう側からセシリーも出てきたな。大概の人は刹那の速度に面喰うけど、セシリーは冷静なもんだ。……むしろ睨まれてるくらいだよ。

いったい俺が何したって言うんですか……。アンジェラさんの敵とか言ったけど、やっぱりそれは納得できない。この静寂が痛いよ……。どういわけか観客人つ子一人居やしないし。あれですか、俺ごときの試合は見る価値が無いと、そういう事なんでしょうか？

「ようやくこの時が来ましたわ。ミス・藤堂……わたくしは、貴女に勝ちます。そして、姉様の無念をわたくしが……！」

「……………」

だからさ、俺が何したって言うの。その説明してくれないと、いい加減に俺も怒るときは怒るよ？まあ……あくまで心の中で止めるけど……。喋れたとしても、喧嘩だの

なんだの火種になるような事は避けるのが俺の人生である。だって、労力の無駄だよ……怖いし気分悪いし……。……今は試合に集中しないとね。

『試合開始。』

さて、始めますか。とりあえず2択だよセシリー……自分が喰らうか、BTを犠牲にするか決めちゃって。俺は試合開始と同時に、刹那の太もも部に収納してある短刀、紅雨と翠雨を取り出す。そして、紅雨は浮いているBTの1つへ投げつけ、翠雨はセシリーへと投げつけた。

「くっ、いきなりですわね……!」

セシリーが自分の行動とBTの行動を両立できないのは有名な話だ。こうやって同時に本体とBTを攻撃してしまえば、セシリーは本体かBTのいずれかを犠牲にしなくちゃならないって事になる。まあ……本体に当たっても一撃必殺なんてありえないし、俺の場合は刀の投擲だから回数に制限があるけど。

「背に腹は代えられませんわ!」

どうやらセシリーは、自身がダメージを避ける事を選んだらしい。翠雨は余裕で回避されたが、そのおかげで紅雨はサククリと刺さって爆発炎上……とまではいかないけど、機能不全を起こしたらしく重力に従って地に落ちて行く。俺はセシリーが回避行動を取った一瞬の隙を狙いつて

オーバード・イグニッションフースト

I

Bで距離を詰める。

「っ!? キャアアアア!」

この刹那の前には、隙が一瞬だけあれば距離なんかあつて無いも同然だ。お次は疾雷、迅雷……君らの出番だ。この2本は、肩に装着してあるためか引き抜くと同時に攻撃しやすい。ちよつと体勢的に無理があつたから、疾雷と迅雷をそれぞれ1本ずつ引き抜きながらセシリーの身体へ攻撃した。

「そう簡単にいきません事よ。」

「……………!?!」

そう言うのとセシリーは、ミサイルBTに弾頭を装填、即発射してきた。ヤ、ヤバツ……! 零距离でミサイル発射して、俺へ確実に当てる気だな……。この距離だと自分ごと巻き込まれるのは請け合いなのに、大した奴だ……。なんて言ってる暇は無い! 多分この距離で完全回避はもう無理、クイック・イグニッションブースト Q だけだ。クイック・イグニッションブースト I I B で直撃は避けられるはずだ。

とにかく俺は急いで右へとクイック・イグニッションブースト Q I B を発動させた。しかし、俺が想像した通りに刹那の大きなウイングスタターへとミサイルが激突する。その衝撃のせいか、ミサイルは喧しい轟音と共に大爆発。俺とセシリーを巻き込んで、周囲に煙をまき散らした。

ふおおおおお……あつぶないなあもう。こ、怖くない……怖くないから落ち着こうか俺よ。しかし……この状況……なんだかアンジェラさんの時に似ているな。だとす

ると……大事を取って離脱しようかな。刹那の弱点……かどうかは微妙だけど、後方に移動するにはクイック・イグニッションブーストオーバーボード・イグニッションブースト Q I Bも O I Bも使えないし。

(むっ、来たか……?)

刹那のハイパーセンサーが、数多の警告音を発した。それと同時に、煙を突き破るかのようにレーザーが俺に向かって飛んで来る。警告音の数からして、3基のBTによる弾幕攻撃かな? 弾幕と言ったって、連射力はさほど高くないから問題は無い……と思う!

!とにかく俺は、クイック・イグニッションブースト Q I Bを使ってレーザー弾幕を回避。

「ちよこまかと……。ですが、これには気付かなかったようですね!」

「喰らいなさい!」

「……………っ!」

セシリーの意識が、俺の背後に向いている事に気が付いた。ハイパーセンサーで注視してみると、そこには……紅雨が刺さったままのBTが浮遊していた。マジか!?!と思つた時にはもう遅い。至近距離から放たれたレーザーは、俺の背中へとクリーンヒットしてしまふ。

クソツ、警告音だらけでどれがどれだか解からなかった……!もつと言うなれば、紅雨が刺さったBTは機能不全で墜落したんじゃないか。自ら制御しない事でき

も再起不能に見せかけ、こうやって俺の後ろへ回させた……。ガムシヤラに弾幕を張ったのは、警告を少しでも誤魔化す為だったか！

(「なくそ……よくもやってくれたな！」)

このままBTを至近距離で纏わりつかせる訳にもいかない。俺はグルリと振り返り、鳥類の足のようになっている刹那の脚部でBTを捕える。そのまま体を折り曲げ紅雨を引つ掴むと、逆手に持ち力を込めて手前側へ引つ張った。するとBTは火花を上げながら中ほどから裂け、今度こそ再起不能としか言いようのない状態だと確信させる。

「そちらばかりに気を取られてもよろしいのかしら？」

そりゃ追撃を狙うくらい解ってるって……！セシリーは俺が背を向けているのをいいことに、続けてBT3基による射撃攻撃を見舞ってくる。いい……タイミング的に、何発か避けられないのがある……ってのが理解できちやう経験則がヤダ！俺は数発レーザーを喰らいながら、とにかく安全圏へ向けてQ クイック・イグニッションブリスト I Bを連発する。

諦めたのか、これ以上の追撃は無意味と判断したのかは解からないけど……セシリーの攻撃の手はいったん止まった。ふう……ようやく落ち着く——わけねえだろうがこんなのーっ！もうヤダあ……セシリー怖いよお……。代表候補生ってやつぱり強い……。アンジェラさんは除いてだけど、このレベルの相手も初めて戦うし……。

「っ!? あ、貴女……何が可笑しいと言うのです?!」

へあ？……ああ、いつものパターンね……。まあ怖くなって例の笑顔が出ちゃってるか。うくん……セシリーは目に見えて動揺してるな。俺の笑顔を見て動揺してる相手を攻撃するのは気が退けるんだけど。かと言って、落ち着くまで待つとセシリーに舐めてるのか、なんて言われちゃいそうだな……。

……攻撃、しようか……怖いけどね。方法は、どうするかな……。ボスと戦う時は周囲の雑魚散らしからするのが定石だけど、そうこうしてる間にスターライトMkⅢを撃たれるのは一番嫌だ。だとすると、一気に詰め寄って接近戦に持ち込もうか。ブルー・ティアーズは懐に潜り込んだもん勝ちだからね。

「……………」

「……これは……鳥の翼……？」

最大のO

オーバーボード・イクニツシヨンブースト
I

Bをするには多少の予備動作が必要だ。その際に黒い炎が雷

火から溢れ出すんだけど……この翼、長い事出していると自爆する事になるらしい。つてな訳でして……セシリーへ向かって特攻！勿論多少の反撃はあるだろうけど、問題は無いはずだ……何故なら——

「……ないで……来ないで下さい！」

速さが足りているから！俺はO

オーバーボード・イクニツシヨンブースト
I

Bを維持しながら、時折

Q

I

B

を混ぜて進路を細かく変更しながらセシリーに迫る。セシリーは俺を射抜こうと必死

な様子でスターライトMk-IIIを撃つが……それは刹那に掠りすらしない。なーんて考えている間にも、セシリーは既に手の届く場所に居る。このまま適当に7本の内いづれかの刀を使って攻撃を……。

「なっ……!?は、離さない!」

し、しまったああああ!勢いつきすぎてるうううう!

オーバード・イクニッションプーリスト

O I Bを止めるタイ

ミングを外した俺は、セシリーに抱き着くかのようにして突っ込む形となった。ダ、ダメだ……此処まで近づくと、もはや刀なんて振れたものではない!え、ええい……作戦変更!俺はセシリーの胴体へと、いわゆるだいしゆきホールドの形で足を絡ませる。

ここまでくれば、ほぼ勝ち確定だ。刹那を操作してしっかり脚部のロックを確かめると、俺はイメージインターフェースで霹靂の作動をオンへと切り替えた。そしてそのまま右ひじを折り曲げると、刹那の肘からシャコン!と仕込刀が飛び出てきた。俺は霹靂の刃を、肱打ちの要領で……叩き込む……つつつても、ずっと押し付けるつもりだけど。

「ヒッ……!キヤア!」

「……………」

「(っのっ……(っのお!」

「……………っ!」

そりゃ当然……反撃はしてくるよねえ。セシリーは俺に組みつかれた状態のまま、巧みに3基のBTを操作する。BT達は俺の頭上で留まり、容赦のないレーザーの雨が降らせた。くうう……！こ、怖い……けど、ココでセシリーを離れたら……もつと怖い事が起きるに違いない！

「キャツ!?ね、狙いが……定まらな……。」

そう思った俺は、地上へ向かってまたしてもOオーバード・イクニツシオンブリーストI Bを使う。当然ながら、刹那は地面へと向かっていくわけだ。真っ直ぐ落ちて行くけど、この速度ではBTの狙いをつけている暇も無いだろう。そう読んだけど、どうやら正解だったらしい。特に追撃らしい追撃は受けずに、セシリーは地面へと叩きつけられた。

「うぐう……！」

よっし!後は、このままブルー・テイアーズのエネルギー切れまで、霹靂の刃を押し付けるのみ……へ……はあ……ハツクシヨイ!あ、あれ……やばくね!?地面に叩きつけた際に舞いあがった土煙で、鼻がムズムズ……ダアツクシヨイ!く、クシャミが……止まん……バエーツクシヨイ!

「……！」

「あ、ああ……！」

「……！」

「あああああああつー！」

う、うわああああ!? クシヤミで体が動くのに合わせて、霹靂をセシリーの胴体に叩きつけちやつてるう!? もしかして俺、鼻炎持ちで……ハクシヨン! ヒクシヨン! ウエークシツ! ええ……そ、そんなつもりじゃないのにい! だ、誰か俺を止めてくれー! ……ツクシヨン!

「もういい……黒乃!」

ほわあ!? ち、ちー姉……つてどわあ! クシヤミに夢中で気が付かなかったのか……? 打鉄を纏ったちー姉が乱入して来て、トップスピードに乗せた蹴りで俺を吹き飛ばした。そのままズザザツツと地面を転がって、ようやくちー姉の蹴りの威力が無になる。

「ブルー・ティアーズのエネルギーはまだ残っている……が、もうお前の勝ちだ……黒乃。」

「……………」

そう言われてセシリーに再度目線を合わせてみる。それと同時にどだったろうか、セシリーが気を失った影響らしく、ブルー・ティアーズは強制解除……つて、気絶……? ……マジで!? 失神するくらい怖かった!? ああ、ええと……た、担架! ……は違う……ああと、ええと……。

い、いかん……いろんな事が一気に起きすぎて、少し腰が抜けてしまった……。刹那

を纏っているから良いが、気を抜いたらこけるな……。これは……。と、とりあえず……。セシリーを保健室に運ぼうか。俺も動揺が大きくて、操作が上手くいかない。フラフラとした足取りになりながら、セシリーへ近づくと……。

「いい……。もう良い……。落ち着くんだ黒乃……！」

あ、あざっすちー姉……。俺を抱き留めてあやしてくれるのはもう死ぬほど嬉しいけど、俺よりもまずセシリーだよ。クシャミのせいとは言え、何度も霹靂を叩きつけたのは俺の責任だよ。だから今すぐ、セシリーを保健室へ搬送しなくちゃ。気絶させたのが俺なら、それが俺の役目だろうから。

「黒乃……。」

ちー姉を多少強引にひっぺがすと、セシリーを横抱きに持ち上げて飛行を開始した。慎重に飛ばないと、マジでエネルギーが尽きるな……。慎重に慎重にセシリーを運ぶと、何とか自陣ピットまで戻る事が出来た。ごめん、本当にごめんなセシリー……。今あつたかいお布団が待つてるよ……。

「黒乃……。」

「……軽蔑してくれていい。」

「!？」

はいはいイッチー……。正義感の強いキミは、俺のやらかした事に言いたい事は多いで

しようよ。説教、文句、誹謗中傷……後からいくらでも聞くんで、今は俺を通しておくれ。最近は何調子がいいせいかわかりませんが、取りあえず簡潔に俺の考えを伝えられた。それでイチーは水をかけたように大人しくなり、俺は急ぎつつ保健室を目指す。

うむ……この運び方って、セシリーに負担が大きいか……。やっぱり大人しく担架とか捜した方が良かったかも……。って、それだと相方が必要になるでしょうよ。イチーは無理だけど、手伝ってくれそうな人は居なかったし……。良いや……。迷ってる暇があるなら急いだ方が良くない！俺はセシリーに最大限の気遣いをしつつ、迅速に保健室までの道のりを急いだ。

第29話

(あゝあ……なんでこうなるのかなあ……)

保健室のベッドへ寝かしたセシリーを、看病つて程ではないけど……近場の椅子に座つて眺めていた。悪気があつたわけじゃないんだが、やっぱり笑顔が出るのがいけないのかなあ……。それは気味が悪い事だっただろう。笑顔で攻撃してくるとか、サイコパスだと思われても仕方が無い。

……つてか、結果的に俺も勝っちゃつてるじゃん。はあ……奴隷化計画は共倒れか。……いや、何もこんな時に考える事ではないよな。すっかりセシリーの様子を見とかないと、気絶させたのは間違いなく俺の責任なんだから。しかし、保険医の先生がたまたま居なかつたのはバッドだ。

セシリーの頭には濡らしたタオルを置いてあるけど、これが必要な処置かはさつぱどわがanne。……余計な事ではないよね？セシリーも寝苦しそうには見えないし、むしろスヤスヤと眠っている。ならばその間に、セシリーにどう悪かつたという意味を伝えるか考えておかないと……。

口頭での謝罪は言わずもがな不可能……。となると、後はジェスチャーくらいしか思

いつかない。土下座……？は、無理だろうな……。多分だけど、行動制限の方に引つかかるはず。じゃあ残されてるのは頭を普通に下げるくらいか……。うーん、弱いなあ……。それこそ土下座するくらいに悪いと思ってるのだけど。

まあそれはそれとして……。セシリーってば、やつぱり綺麗だよなー。きめ細かな白い肌、まるで金糸かのように輝くブロンドの髪、今は閉じているが……。彼女の目はまるでサファイアを思わせる。そして、磨き抜かれたであろうスタイル……。セシリーが自分に自信を持てる理由がなんとなく解る。

俺はどうかって？そりゃ人並にスキンケアとかキューティクルには気を遣ってるけど、イツチーやちー姉が五月蠅いから仕方なくだしねえ……。後は特にカロリーとか気にした事ない。それ故、俺のはただの駄肉ないし贅肉さ。栄養が全部おっぱいにいつてるんじゃない？（適当）

（ゴクリ……）

セシリーを眺めていると、俺は思わず生唾を飲みこんだ。い、いかんぞ……。婦女子にセクハラしたい衝動が……。！勿体ない……。身体が動けば、これ以上チャンスのあるシチュエーションはなかったろう。仮にばれたとして、まだ看病のためだと認識してもらえる可能性も高い。

が……。駄目っ……。！全く体が動きやがらない……。！いや、正確に言えば小刻みにプル

プル震えている。この震えは、体に力を込め過ぎて起きるそれに似ていた。あ、アカン……いろいろな妄想が膨らんで涎が垂れて……。だが、そんなの拭つてる暇はないよ！もしかすると、力技でどうにかなるかも知れんのだ！

ぐぬおおお……かつとビングだぜ俺えーっ！俺は少し背を丸めて、更に身体へ込める力を上げた。腕よ動け、今こそ溜まり溜まった欲望を解消するとき！……と念じてみる物の、結果は俺の身体の震えが増すばかりだ。それよりも、涎が……あつ、ベッドの布団に滴り落ちちゃったよ……。

「身体のコントロールが……できない……！」

悔しさのあまりに、俺の口からそんな言葉が漏れた。ああ……よほど悔しいんだな。この身体になってから、こんな悔しい出来事は初めてかも。諦めきれんな……涎を拭いたくもあるが、もう少しトライしてみよう。どうせ、セシリーもまだまだ目を覚まさない——

「貴女……。」

フラグの回収早過ぎイ！どうせ目を覚まさないであろうと考え切る前に、セシリーはゆつくりと上半身を起き上がらせた。その表情は、とても複雑そうな感じに見える。ハッ……?!い、いかん……早急に涎をどうにかせねば！俺は慌てて、両の掌で顔をゴシゴシ擦る。オ、オーケー……涎は大丈夫そうだ。

「……………」

……涎の問題は解決できたが、とてもじゃないが無言が辛い。え、ええい……とにかく申し訳ないと思っている事だけは伝えなくては。ど、どうしようか……膝まづくのなから出来るかも。そう思った俺は、座っていた椅子を蹴散らしながら立ち上がる。そしてその場で、畏まるように片膝を地面に着けた。

「ミス・藤堂……………」

オツケエイ！膝まづくは出来る……良く覚えておこう。さて、これで許して貰えるなんて都合の良い事は思っちゃいけないけど、どうにか気持ちだけは伝わってほしい。喋れば、おまけに『お詫びに貴女の奴隷になります』くらい言うのにな。……つてかそう、そうだよ！コレはそういう意味の膝まづきだと思つて貰つていいんやで。

「なるほど、貴女は……………。……………。ミス・藤堂。」

「……………」

「わたくしの失神は、真剣勝負の最中に起きた事ですわ。確かに貴女のアザに驚きはしましたが、何もそこまでして頂かなくても結構です。」

……………？よ、よく解からないな……。セシリーの態度が丸くなったような気もするし、まだ言葉の端々に棘があるようにも聞こえる。とにかく……気にしてないって解釈でいいのかな。それはそれで、俺の気が済まない部分はあるけど……セシリーがそう言

うなら、素直にその言葉を受け取るのが礼儀だ。

とはいえ、この罪は必ず償うよ……セシリー。学園生活で、セシリーが困っているのを見かけたら積極的に助ける事にしよう。とりあえずこの場は、もうこれ以上する必要はないかな……。俺は膝まづくのを止めて、スツと立ち上がる。倒した椅子を元に戻すと、視線をセシリーへとやった。

「今回はわたくしの負けですが、次はこうはいきませんわよ？……黒乃さん。」

おお、セシリーが俺の事を名前で呼んでくれた！なんか、あえてわざわざミスをつけて呼んでたみたいだけど、あれかな……。戦いが終わったらもう友達的なやつ。理由はどうあれ、気絶させたのは俺なのに……。なんて寛大な事だろうか。そうと決まれば、これからもよろしく頼むよセシリー。

「わたくしは、もう少しここで休まさせていただきます。わたくしは平気ですから、貴女もお帰りになって下さいな。」

ん、そうだな……。俺も刹那を動かしたから疲れていたところだ。セシリーのお言葉に甘えて、今日は部屋で休む事にしよう。セシリーに深々と頭を下げてから、俺は保健室を後にした。んく……。後イッチーの問題も残ってるけど、それはまた今度にしよう。今は温かいベッドが恋しいよ……。



「はい。というわけでした、1組クラス代表は織斑　一夏くんと言う事で。」

「1つながらで良い感じですね。」

「近江先生、下らない発言は慎んでいただきたい。」

「そうだ……そもそもはクラス代表を決めるための模擬戦だった……！」

翌日が開けてのホームルーム。1組は、イッチーがクラス代表に就任した祝いの拍手で包まれる。どうやらイッチーはそんなの忘れてたみたいで、俺の隣で盛大に頭を抱えていた。原作ではセシリーが辞退したのだけど、勝っちゃってるから言い逃れはできない。

「そうだ……。お、織斑先生！俺と黒乃が戦ってませんけど、勝率は同じですよね!」

「藤堂とオルコット戦は、エキシビジョンマッチみたいなものだ。藤堂に代表は根本的に無理と言ったろうが、馬鹿。」

俺もイッチーもセシリーには勝った。そのため、勝率は1勝で並んでいる。イッチーが言いたいのは、なんで1勝ずつなのに自分がクラス代表に決まったのか………って事らしい。けどねイッチー、ちー姉の言った通りにどうやって俺がクラス代表の仕事をこなせてのさ。………って意味を込めて、イッチーをガン見して訴える。

「く、くそ……逃げ場なしかよ……。」

「このわたくしに勝っておいて、逃げ場など捜す権利などありませんわよ……一夏さん！」

お、一夏呼びに変わってる……。どのタイミングかは解からないけど、セシリーもすっかりイッチーに惚れたか。計画通り……なんだけど、モッピーには申し訳ない気もするな。いやいや、人が人を好きになるのに理由なんか重要じゃない。なるべく平等に2人を応援してあげないと。

「そうは言われてもなあ……。勝つたには勝ったけど、男がクラス代表になるのは良い恥さらしじゃなかったのか？」

「確かに、今のままではそうなってしまうかも知れせんわ。ですがご安心を！一夏さんの事は、わたくしがしっかりとサポートして差し上げます。」

「……具体的には？」

「そうですね……。手取り足取り、なんでも教えて差し上げますわよ！」

エ、エ……エロい！表情から台詞まで、何から何までエロい！つーかどうしたよセシリー……。確か原作では、照れながら言っていた気がするんだけどな。何と言うか、あんな妖艶な感じだったっけ？まあ……確かにセシリーは、そういう感じなのが似合ってるかもね。

「手取り足取りなら、別に黒乃のアレで間に合つて——」

「一夏の言う通りだ。一夏の教官は、私と黒乃で足りている。私達は、お前と違つて直接頼まれたのでな。」

セシリアの発言に、机を叩きつつモツピーが立ち上がった。厳密に言えば、俺も頼まれては無いけどね……。つてかイツチーの奴、俺の指導方法をサラツと言うところだつたな……。？そんな事してみ？またしてもヘイトが俺に溜まる。アレが知れたら、きつとモツピーだつて黙つてないぞ……。破廉恥な！つてさ。

「あら、貴女はISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしにご用事かしら。」

「ラ、ランクは今関係ない！それに、ランクの差が指導に必ずしも直結するとは——」
「座れ馬鹿共。お前らなど、私にとつては等しく……。等しくひよつこだ。」

まあこの場合は、モツピーの言い分に全面的に同意かな。昴姐さんはAらしいから何とも言えんけど……。とにかく、ランクが低いなら低いでやりようはあるさ。……。つて、仲裁してあげたかつた。言い争いをする2人に、ちー姉は出席簿アタックを喰らわす。パン！と痛そうな音が鳴つた後に、2人は大人しく席に着く。

それにしても、ちー姉が言葉を詰まらせた時……。目が合つたのは気のせいかな？ランクの話をしてるのに、どうしてBの俺に視線が向いたのだろうか。Sのちー姉からすると、等しくひよつこつて事だろうに。そしたら俺は、真ん中も真ん中……。昴姐さん曰く、

可も無く不可もなく……なのに。

「……とにかく、クラス代表は織斑 一夏だ。異論はないな?」

ちー姉の言葉に、女子達は元気に返事をした。……気のせいだったかな?ま、とにかく……なんとか丸く収まったみたいで良かった。雨降って地固まる……って奴かな。まあ……イッチーの足元はぬかるんだ地面その物かも知れないけど……。……今度、何かお菓子でも作ってあげよう。密かにそう思う俺氏であった。



「……のコントローラが……できない……。」

(ん……?)

わたくしのすぐ側で、そんな声が聞こえてきました。聞き覚えのない声……。わたくしは、薄く目を開け声の主を探しました。そこに居たのは、我が宿敵の藤堂 黒乃。ここようやく、わたくしは先ほどまでの事を思い出す。そうでした、わたくし……気絶してしまつたのね。

そうすると、ここは保健室。窓から見える景色を見るに、さほど時間は経っていないようです。わたくしの額には、冷たいタオルが乗せられて……。保険医の方がいらつ

しやらないという事は、ミス・藤堂がわたくしを看病してくださいましたのでしょ……。
(どういう……事なのでしょう……。)

解りませんわ……。あのような恐ろしい笑みを浮かべて、あのような戦法をとる方のする行為には思えません。そして、ミス・藤堂が呟いたあの言葉……。冒頭の部分は聞き逃しましたが、何か……。コントロールできないと……。それより違和感をかんじるのが……。

(貴女は何故……。泣いているのですか……。)

ミス・黒乃は、何かに怯えるかのように震え、涙を見せていました。いえ、正確に言えば完璧にそれが見えたわけではありません。俯いていらつしやるし、長い髪が邪魔をして顔はほぼ隠れてしまっています。ただ……。わたくしに被さっている布団に、数滴の水が滴った跡がハッキリと残っていました。

コントロール……。泣きながら機械の話をするわけはありませんわよね。だとすると、力……。？自分……。？それらの制御が、己の意思で出来ないと言いたいのかしら。だから怯えて、悔やんで、泣いていらつしやるの……。？わたくしは、いつの間にか身体を起き上がらせていました。

「貴女……。」

わたくしが目を覚ました事に気がつく、ミス・藤堂は自身の掌でゴシゴシと顔を擦

る仕草を見せました。それで誤魔化しているつもりなら、些か無理がありましたよ。だけれど、取り繕ったのなら……それこそが彼女が泣いていた裏付けですわ。

「……………」

それはそれとして、長い無言が続いてしまいますわ……。ミス・藤堂は失語症なので仕方ありませんが、わたくしの方も彼女へかける言葉が思いつきません。ただ虚しく時間だけが過ぎていると、ミス・藤堂が唐突に立ち上がりました。すると、ミス・藤堂は……わたくしに対して膝まづいて見せるではありませんか。

(解りま……せんわ……。)

その姿勢は凄く綺麗で、そう……まるで騎士のよう。わたくしに対しての贖罪のため、わたくしを守る……と言いたいように思えました。意味が解りませんわ。これではまるで、わたくしと戦ったミス・藤堂とは別人ではありませんか。別人……？

わたくしの頭には、ある仮説が浮かびました。もしかすると、本当に……ミス・藤堂であつて、ミス・藤堂ではなかったのかも知れません。わたくしの仮説が正しいのだとすると、先ほどの発言にも合点がいきますわ。だから、コントロールがと……。

「なるほど、貴女は……。………………。ミス・藤堂。」

「……………?」

「わたくしの失神は、真劍勝負の最中に起きた事ですわ。確かに貴女の笑顔に驚きはしましたが、何もそこまでして頂かなくても結構です。」

アンジー姉様の事は、まだ許したわけではありません。ですが、貴女を恨むのはお門違いだと解りました。貴女ではなく、貴方が姉様を再起不能にしたのなら……貴女には何の非もありません。むしろそういう事情があつたのだとすれば、貴女は好感が持てますわよ……ミス・藤堂。

「今回はわたくしの負けですが、次はこうはいきませんわよ？……黒乃さん。」

織斑先生の仰っていた事は、ある意味正解だったという事ですわね。こちらのミス・藤堂……いえ、黒乃さんであれば仲良くできるはずです。わたくしの非礼に関しては……後日に謝罪させていただくとして、今日のはわたくしも黒乃さんも休むべきですわ。

「わたくしは、もう少しここで休まさせていただきます。わたくしは平気ですから、貴女もお帰りになって下さいな。」

そう提案すると、ミス・藤堂は立ち上がりわたくしに頭を下げてから立ち去りました。……本気でわたくしの騎士になるおつもりではないでしょうね。頼もしい限りですが、それは少々ご遠慮したいものです。では、宣言通りにわたくしも休憩いたしましょう。

ベッドへと横になってしばらく仮眠をとる体勢へと移行しましたが、先ほどまで気絶

していたせいか中々寝付けませんね……。はあ……。結局、自室のベッドの方が落ち着くかしら。いつまでも保険医の方はお見えになりませんし、わたくしも部屋に戻りましょう。

「よお……。今、大丈夫か？」

「貴方は……。わたくしに何かご用でして？」

「ああ、少し話したい事がある。またにしろつてんなら、大人しく帰るぞ。」

「いえ、わたくしも貴方にお話があつたところです。」

わたくしが帰ろうとしていると、訪問者が現れました。その方は、声を聞くだけですぐに解ります。織斑 一夏……。だいたいは、わたくしに何の話があるか想像がつきます。向こうはそうでも無いようで、少し不思議そうにわたくしの寝ているベッドの側へ立ちました。

「えっと、話つて？」

「先にそちらからどうぞ。」

「そうか、なら……。単刀直入にいくが、黒乃の事で話がある。」

思つた通りに、織斑さんはわたくしに黒乃さんの事を聞きに来たようです。どうやら織斑さんは、彼女の八咫鳥としての姿を見るのは初めてだったようです。だからこそ混乱も大きく、わたくしに真偽を問いにいらつしやつたと……。そうポツリポツリと語る

織斑さんの表情には、複雑な心境が現れていました。

「それを知っても知らなくても、俺はオルコツトに挑戦したとは思う。思うけど……黒乃があんな表情を見せるのも、IS操縦者を沢山潰したつてのも……そう簡単に信じられないんだ。」

「……………。酷な事を申さなければなりません、わたくしの師もその一人ですわ。」

「!? そう……………か…………。」

それは勿論そうでしょう。織斑さんが優しい面を多く知っているのなら、わたくしを始めとした大半の女生徒は、八咫鳥としての面しか知りません。わたくし達と織斑さんや篠ノ之さんは、きつと対極にあるのでしょうか。しかし……………だからと言って隠し事はできません。包み隠さずアンジー姉様の事を話すと、織斑さんは悔しそうな表情を見せました。

「……………ですが、彼女がそれだけの人間ではないと十分に理解できました。織斑さん、今度はこちらが質問する番です。黒乃さんは、精神科のお医者には掛かっていますか?」

「は……………う……………いや、失語症になってからはしばらく通院してた。そうだな……………ISに乗り始めた頃には、忙しいのかまけるみたいに医者には通ってなかったと思う。」

わたくしの内容に、織斑さんは若干困惑しながらも回答しました。ISに乗り始めた頃……………その時期に芽生えたとすると、露見するのを恐れたかもしくは……………自分が

ソレを認めたくなかったから……？どちらにせよ、わたくしの仮説はビンゴである可能性が大きくなりましたわ。

「でも、それとこれと何が関係してるんだよ。」

「あくまでコレは仮説の域を出ませんが、彼女……黒乃さんは、解離性同一性障害の可能性がありますわ。」

「そ、それって……いわゆる多重人格って奴か!？」

「普段の黒乃さんと、八咫鳥としての黒乃さん……。双方はあまりにも差があり過ぎますわ。それこそ別人の域に感じられます。」

おかしいですよ、もし仮に黒乃さんが望んであのような戦法をとったのだとすれば……コントロールが効かないなど眩くはずもありません。恐らくあの言葉は、わたくしが寝ている物だと油断してこぼれたのでしょね。結論としては、藤堂 黒乃という女性の中には……もう1人違う人格がいるに違いありません。

「でもなんで、黒乃はそれでもISに……。」

「自身の周囲の人物を、大切に想うからでしょう。彼女も本来ならば、守るためだけに力を振りたいはずですから……。彼女は、自分自身と闘っている……と、わたくしは考えます。」

黒乃さんは恐怖している……自分の中に居るもう1人の自分に……。あの表情は戦

闘時のみのようですから、気分が高揚すると出てきてしまうのでしょうか。わたくしは、織斑さんにそう告げました。すると織斑さんは、深く長い溜息を吐いて見せます。

「そうか……そうか……！黒乃が好きでやつてる事ではないんだな……！」

「ええ、もう一人の方の黒乃さんが……どうしようもなく好戦的なのでしょう。」

「ありがとうオルコット！早速黒乃に病院を勧め——」

「お待ちなさい、それは一番やつてはならない事ですわ！」

彼女が最も恐れているのは、周囲の人間にもう一人の自分が居るのを悟られる事でしょう。本人が自分の意志でどうにかしたいと行動しなくては、より黒乃さんへダメージを与えてしまうはずですわ。だって、本人も認めたくないのに……貴女の中にもう一人の貴女が居る、だから病院へ行きましようなんて……とんでもないですわ。

それと、もし周囲に話す場合は最小限に留める事も同じくです。織斑先生や篠ノ之さんに至っては、むしろ知るべきであるはず。ですが、大勢の方達八咫鳥にその事情を説明したところで……到底受け入れてもらえるはずありません。もう一人の黒乃さんは、それだけの事をしてきたのですから。

「……解った。くれぐれも、黒乃には悟られないように……だな。」

「ええ、彼女を傷つけないのなら。」

「とにかく、相談に乗ってくれてありがとな。なんかスッキリした。俺もう行くからさ、

ゆっくり休んでくれ。」

そう言いながら、織斑さんはわたくしの前を立ち去ろうとします。……それにしても、わたくしと極普通に会話を交わしていましたわね。男性とは、情けない存在である。父がそうであつたように、わたくしは男性そのものを毛嫌いしていたというのに。

「貴方は何か、他の方とは違って……不思議な方ですね。」

「は？ いきなり何の話だよ。」

「男性の方はいつもオドオドとわたくし達の様子を伺つて、ゴマを擦る……そういうものだと思っていました。」

背を向けていた織斑さんは、わたくしの言葉に反応して再度こちらを向きました。何か考え込むような表情で、ガシガシと頭を掻くような仕草を見せると……次の瞬間には、顔つきは真剣そのものに。思わずわたくしも、気を引き締め織斑さんの言葉に耳を傾けます。

「やっぱり……そうやって女に媚びて生きてる奴つて多いと思うよ。けどさ、それは多分悪い事じゃない。威張ってる女も悪くない……だってそれは、世界がそうさせてる事だろうからな。」

「世界が……。」

それは……そうかも知れませんわね……。I Sの登場を期に、世界は大きく変わった

と言えます。女性の立場が強くなり、男性は弱いものだ……世界がそういう方向に動いてしまった。だからこそ、織斑さんは悪い事ではないと前置きしたのでしようか。

「仕方ないかも知れない……けど、少なくとも俺は諦めたくない。諦めたくないから、情けない男じゃられないんだ。」

「……………」

「きつと俺だけじゃなくて、そうやって抗ってる奴も必ずいる。だから、男全部が情けないって思うのは少し考えてみてくれないか？」

強制ではなくあくまでお願いだと、織斑さんは付け足して言いました。……織斑さんを見る限りでは、確かにわたくしが見てきた方とは違います。わたくしは少し……いいえ、かなり愚かな考えをもっていたのかも知れませんが……。

「もし俺の言葉に説得力がないって思うんならさ、しつかり俺の事を見てくれよ。俺だけでも、オルコットの思うカツコイ男でいるからさ。」

「なっ!? ななな……なんですいきなり!」

「何って……オルコットは、俺に他とは違う何かを感じたんだろ? 多分それが男らしさって奴だ。だからオルコットが男に幻滅しないよう手本になるから見ててくれって話だが。」

織斑さんが突然そんな事を言うものですから、わたくしは思わず声を裏返しながら聞

き返してしまいました。ああ……もう、耳まで赤くなっているのが自分で解ります。男性には山ほど言い寄られました。全てはオルコツト家の財を目当てにしての事……。織斑さんにそのつもりがない発言にしても……初めてわたくしの心に響いた言葉かもしれませんわ。

「ん……う？　なんか顔赤いな。やつぱ寝てた方が良いんじゃないか？　悪かったな、なんか長居しちゃって。」

「い、いえ……お構いなく。」

「ああ、体は大切にな。んじゃ、また明日。」

そう言うのと、今度こそ織斑さんは保健室を後にしました。本当に、不思議な方……。だからこそかしら？　わたくしは、あの方の事をもっと知りたいと思ってしまうている……。その心に、触れてみたいと思っている……。織斑 一夏……。心の中で彼の名を呟くと、胸が高鳴るのを感じました。

困りましたわね……。黒乃さんの邪魔をしてしまう事になりそうですわ。まあ……彼女は2つの意味でライバルという事にしましょう。フツツ、これはこれで面白くなってきましたわね。さて……一夏さんのせいで惚けてしまいました。わたくしもそろそろ帰る事にしましょう。

第30話

「では、これよりISにおける実践的な飛行訓練を行う。織斑、オルコット、藤堂、試しに飛んでみる。」

クラス代表決定戦の騒動から数日が経過し、春という季節感もあつてか平和そのものを感じられる。まあ……IS学園に居るって時点で穏やかじゃないんですけど、そこはご愛嬌という事で。さて……飛行訓練か、これもテンプレっちゃテンプレだよ。とにかく、急いで刹那を展開……つと。

俺とセシリーは、それぞれ専用機をスムーズに展開する。だが、イツチーは原作通りに手間取ってるみたい。ポーズを取れば安定して即時展開ができるらしく、俺達とは数秒遅れで白式を身に纏った。その際に熟練したIS乗りは1秒かかんないって言うけど、俺はどうなんだろう……？コンマ切ってるかは自分じゃ解らないな。

「よし、飛べ」

オーケー、ちー姉。だけど、見学してる生徒が近いからスタートはゆるりと始めないとね……。俺がそうこうしている間に、オーバー・イクニッションブースト2人はもうスピードを上げ始めてる。あく……ヤバイかな？ちよびつとO I B を使つとこ。追いつかないとまずいと思った

俺は、50%もない出力でオーバード・イグニッションブースト O I Bを発動し追いつけをかける。

「ん……うおっ!? な、なんだよその滅茶苦茶な速度は……。」

「あ、あの距離から追いついて来ますの!？」

『何をやっている。刹那は別として……スペック上は白式の方がブルー・ティアーズよりも速度は上だぞ。』

ほんの軽くのもりだったんだけど、違う意味で軽く2人を抜き去ってしまった。2人の横を通り過ぎた時に発生した風に煽られ、特にイッチーはバランスを崩してしまつたみたいだ。調子良く飛んでいたのに、そのせいでちー姉にお叱りを受けたっぽい。済まぬ……済まぬイッチー……。

「刹那と比べられないだけマシか……。はあ……できれば、黒乃にイメージに関してのレクチャーをして欲しかったぜ。」

「二夏さん、イメージは各々で異なりますわ。貴方のやり易いイメージを模索するのが、最適です事よ?」

「そもそも、ISってどういう原理で飛んで……。いや、なんでもない。考えるだけ無駄だな、そもそも……得意な方では無いし。」

頭は悪い方だと遠まわしに言うイッチーに接近し、俺も同じようなもんだから気にしないでと肩を叩く。しかし、どうやら憐れんでいる思われたみたいで……。イッチーは

悲しくなるから止めてくれ、なんて言つて……項垂れる。そんなイツチーを見て、セシリーは優雅な笑みをこぼした。あれ、何々？和やかな雰囲気じゃね？俺様もしかしてファインプレー？

『織斑、オルコット、藤堂、急降下と完全停止をやってみろ。目標は地表から10cmで、藤堂……くれぐれも解っているな？』

「な、何やら解りませんが……とりあえずわたくしから。ではお2人とも、御機嫌よう。」急降下と完全停止という課題を出すと同時に、ちー姉は俺に釘を刺すように言った。や………ISに乗り始めた頃のが尾を引いてるね、うん。セシリーは何か不憫そうな表情を俺に送つた後、地表へ向かつて降りて行く。そして、地面寸前で身体を反転させて完全停止。パーフェクト！ファンタスティック！

「……………」

「おつ、やる気満々だな黒乃。解つた、先に行つてこいよ。」

なくんて言っている場合でも無く、さっさと次行かないとね。俺は自分を親指で指差すと、次は俺に行かせてとイツチーに意思表示して見せる。イツチーは快く承諾してくれたが、まあ……その方が君も困らないと思うよ。んじゃ、得意分野だし……華麗に魅せますか。

俺は地面に向けて飛ぶのに合わせて、先ほどと同様に50%に満たない

オーバード・イグニッションブースト

O I Bを発動させる。重力に従っているのもあってか、上昇よりも更に速度が凄まじい。で、セシリーと同じく地面に激突する前に身体を反転。……に合わせて、今度はO I Bをほぼ100%で地面に向けて噴出させた。

「……記録、0cm。」

オーバード・イグニッションブースト

うっし、我ながら完璧……。50%下回っているO I Bなら、100%近い

オーバード・イグニッションブースト

O I Bで完全に勢いを殺せるからね。ただし、地面に対してスッゲー風が巻き起こるけど。おかげで、俺の付近には凄まじい砂埃が舞う。で、俺の頭にはちー姉のお約束が……。

(ありがとうございます！)

オーバード・イグニッションブースト

「藤堂、念を押しただろうが。はあ……今後、授業では許可なしにO I Bは使うな。良いか、これは命令だ。」

「み、皆さくん……大丈夫ですか？？」

声があるので後ろを向いてみれば、ちー姉が出席簿を構えていた。もちろんこんな距離からは避けられないわけで、俺の頭には衝撃が走る。……嬉しいけど、まあそれは良いでしょう。O I Bに制限をかけられちゃったか……魅せにはピツタリなんだけど。現にこうして、砂埃で周囲の女子達が被害を蒙こうむってるしね……あまり紳士的ではなかったかな。

皆さん、ほんと申し訳なかった。……さて、イツチーは……。ハイパーセンサーで白式をロツクして様子を見てみると、俺は瞬時に悟った。あく……。アレだ、アレは長年の経験からするに……。地面に激突だな。やっぱ最初は上手くいかんか、原作通りになるなら仕方がない。

「藤堂…あの馬鹿……。」

再度空中へ躍り出た俺は、イツチーの墜落してくる一直線上に位置どつた。んく……。さつき使用が制限されたわけだが、どうやらオーバー・イクニッションブースト O I B を使わないと勢いが殺せないな。つてか、それよりもまずイツチーが避けようとしなければいいが……。

「くつ、黒乃!? お前何やって……。クソツッ!」

まあそりや避けようとしてはすよね。イツチーは進路を横へとずらそうとするが、そこは刹那の性能の見せ所つてもんだよ。俺はイツチーのずれた方向に合わせてクイック・イクニッションブースト Q I B で横移動。そのタイミングでイツチーは俺へ接触する。ほくれ……。おいでイツチー、おっぱいクッションを堪能させてやろう。

「んむう!!」

イツチーの頭を胸で抱え込むようにすると、早めに全力のオーバー・イクニッションブースト O I B を発動させる。これなら、さつきと違って他の生徒に迷惑はかかんないだろ。最初こそイツチーと接触した衝撃が凄まじかったが、その勢いは徐々に収まっていき……。イツチーは無事

に地面へと着地した。

「ぶはあーち、窒息するかと思った……。」

「……の割には、随分とだらしない顔つきだな。なあ？一夏。」

「見損ないましたわ。」

俺のおっぱいを堪能したせいか、イツチーの顔はかなり赤い。そのせいでモツピーとセシリーの総攻撃をうけるが、不思議と俺に矛先が向かないじゃないか。むう……もつと俺を責めてもええんやで？ま、どちらにせよちー姉に……なんて考えていると、俺とイツチーの頭を出席簿が襲う。

「この馬鹿共が！」

「いだっ!？」

（ありがとうございます！）

「織斑……藤堂のおかげで未遂だが、あのままではグラウンドに大穴が開くところだつたぞ。そして藤堂……私は許可なく使うなど言つたばかりだが？」

うひい……叩いてもらえたのは良いけど、この威圧感満載の視線は怖いなあ。どうしようか考えていると、俺を助ける為にやった事だからとイツチーが庇ってくれた。いいぞイツチー、俺は面倒が嫌いなんだ……罰で労働を強いられるのは勘弁だぜい。

「はあ……もう良い。だが藤堂、今後はその馬鹿を甘やかさないように。よしっ、では次

にいくぞ。」

「黒乃、さつきはありがとな。後……悪かった。」

こうして授業は進んでいくが、小声で感謝と謝罪をされた。謝つたのは……おっぱいの事だろうね。気にせんといてよ、俺が好きでやったんだから。いや、別にイツチーに触らせたかつたって意味ではないからね？まあいいや、集中せんと……ちー姉にマジギレされそうだ。



「というわけで、織斑くん……クラス代表就任おめでと〜！」

「「おめでと〜！」」

「人気者だな、一夏。」

「箒、本当にそう思うか？」

現在は夕食後の自由時間で、場所は食堂に居る。1組の生徒プラスアルファで、イツチーの就任パーティーが盛大？慎ましく？……ちようどその中間くらいの規模で執り行われた。それに対してイツチーは不服そうで、口を尖らせなら皮肉を言うモツピーに抗議してみせる。

「まあまあ、一夏さんをお祝いしたいという気持ちは本物ですわ。」

「そうだよ、織斑くん。こういう時には他人事と思うのが楽しむコツさ。」

「……なんでアンタが此処に居るんだよ。」

「何故って、幹事してる子に誘われたから。まあ断るのもなんでしょ?」

セシリーが窘めるような台詞を言っていると、突然背後から鷹兄の声が響く。ビ……ビツクリするから止めてよ鷹兄……。絶対わざとなんだろうけど、気配を消して近づいて来るから余計に性質が悪い。しかし、鷹兄も誘われるよねえ……。そりゃ。存在を感じされた鷹兄は、瞬間に女子達に引つ張られ輪の中心へと入って行った。

「……本格的に、誰が主役か解からんな。」

「やっぱ俺を祝う気なんて無さそうだけど。」

「ま、まあまあ……。近江先生の言葉にも、一理あると思いますわ。」

まあ、楽しんでものの勝ちだよな。郷に入らば郷に従えって奴?……。なんか少し違う気がする。頭悪いのに、無理にことわざをしようとするからこうなるんだ。結果、鷹兄の言葉にもセシリーの言葉にも同意って事だよ。そうと決まれば、何とかイツチー達を盛り上げる方法を考えないと。

「はいはい、新聞部でーっす!何かと話題の織斑 一夏くんにインタビューに来ました!」

ゲ、ゲゲエ!? まずったな、このイベントを忘れてた……。え〜つと、黛 薫子さん……で合ってるよな。黛先輩のインタビュは、確か代表候補生にも及んだはず。そうなつてみなよ、何も答えられないから盛り下がるの必至じゃん。仕方が無い……。こつそり退散するか。それにこの時間帯なら、まだ間に合うかもだし……。

「……………」

「黒乃? どうかし……。つておい、ちよつと待て! 黒乃ー!?」

その前にモツピーの肩を叩いて、手提げの袋を渡しておいた。中に入っているのは、時間を見つけて焼いておいたクッキーだ。このパーティーがあるのは解つてたし、せめても思つて……。いや〜……。いろいろ大変だった。何が大変だったつて、まず調理実習室を借りるのが俺には難度が高く……。

まあそれはいいや、後はスタコラサツサ〜つと。クラス分より余計に焼いておいたし……。人数枚は食べれるだろ。さて、俺はするべき事をしないと。え〜つと、正面ゲート付近をウロウロしてたはずだから……。こつちか。俺はジョギングくらいの速度で走つて、とりあえず正面ゲートを目指してみる。

ん〜……。着いたはいいいけど、目立った人影は無しか。えつと、あの後彼女がとつた行動を良く思い出せ……。確か描写されてたはず。描写……。されて……。つて! 違うううう! タイミング……。間違えた! 良く思い出そうとしたら、俺が根本的な間違いを犯してい

る事に気が付く。

彼女はイチチーとモツピーの仲睦まじい姿を目撃してるんだから、タイミングとしてはパーティーが開かれるよりも前だ。はあく……無駄足か。なんとか、彼女を出迎えて……いや、せめて迷子にならないようにしてあげたかったんだけど。記憶力が弱い自分に嫌気がさして、体育座りでゲートの支柱にもたれかかる。

「……こんな所に居たんだ。」

あり、鷹兄……？こんな所について言うけど、それは俺も同じ感想だよ。もしかして、変な抜け方したから心配させちゃったかな。鷹兄は俺のどんよりとしたオーラを察してか、ゲートを挟んで反対側の支柱に腰掛けた。あく……うん、良いね鷹兄……すぐ口を開かないのはナイスだね。

「星……。」

「……………？」

「星、綺麗だと思わない？太陽なんかよりずっとちつぽけな輝きなのにさ、こうして集まって寄り添って……太陽じゃ出せない景色を描く。」

「……………。」

そう言えば、I S 学園の空は澄んでる気がするな……。首都圏に点在してるのは変わらないのに、鷹兄の言う通りに星が綺麗だ。春の星座と言えば……アルクトウルス、ス

ピカ、デネボラから形成される春の大三角形が有名……なのか？ 勉強苦手だけど神話とか好きだから、星座は特に密接な関わりがあるし……自然に詳しくなっちゃった。

「人だつて同じさ、例えちつぽけでもその人にしか出せない輝きがある。僕は……キミの輝きを見ていたいな……僕も君の近くで輝きながらね。だから……自分を見失わないで。君の輝きは……どんな暗闇でも見つけ出してみせるから。」

た、鷹兄いいいい！ 後半何言ってるか良くわかんないけど、とにかく俺を励まそうって気持ちには伝わった！ マジでありがとう！ いや……しかし凄いな。俺だったら、ドンマイドンマイ！ 誰でも間違いはあるって……みたいな励まし方しか出来ないけどな。遠まわしな励ましはこうやってやるのか……勉強になるね。

「あり……がと……。」

「……さあ？ 今のはただの独り言だよ……つと！ じゃ、僕はこれで。気を付けて帰つてね。」

どうしても感謝の言葉が伝えたくてふんばっていると、なんとか声を絞り出す事に成功した。本当は、ありがとうございますって敬語のつもりだったんだけど……。俺が感謝を伝えると、鷹兄は立ち上がり次第にこの場を去って行く。うむ……去り際までオサレな言葉で締めくくったな……余裕のある大人ってカッコケー。

（んじゃ、俺も帰ろうかな……。）



(やはり凄いいものだな……黒乃は。)

ISを用いた実践的訓練が開始され、その手本として一夏、黒乃、オルコットの3名が飛んでいる。背にあるスラスターから黒い炎を吹き出して、刹那はグングンと上昇していく。仮に私が刹那を渡されたとして、ああ上手くは使いこなせないだろう。

しかし……黒乃に解離性同一性障害の可能性あり……か。あの日帰って来た一夏が真剣な話があるとかで聞いてみれば、私としては信じられないような、確かに納得せざるを得ん部分もあるというか。確実な事があるとすれば、あれは黒乃の戦い方ではなかった……。

「ねー、藤堂さん……意識して後から速度出したよね？」

「はっ、舐めプって奴なんじゃないの。八咫鳥様の事だしね。」

……仮に黒乃にもう1人の人格があるとしよう。だとすれば、私は黒乃であって黒乃でないソイツを許さない。現にこうして陰口を叩かれるのも、ソイツのせい以外何物でもないはずだ。原因はソイツであろうが、私の後ろで声を潜めている連中の意識の問題でもあるがな。

それにしても、黒乃はもちろんだが……一夏も随分と遠い存在に感じてしまふな。白式を纏っている一夏は、黒乃やオルコットと何やら楽しそうにしている。……あの2人に置いて行かれるのは嫌だ。私の家族は、家族と言えない。2人に置いて行かれたら、私は本当に独りになってしまいそうだ……。

「あのく篠ノ之さん？」

「はい？」

「その、ポーツとしてますけど……体調でも悪いんですか？」

「あ、ああ……いえ、スミマセン。少し考え事を……。」

いかんいかん、私とした事が……。山田先生だからよかつただけで、千冬さんなら既に出席簿を喰らっているところだろう。うん……考え過ぎはいかん。置いて行かれなくては、私が精進すればいい話だ。いつまでも待つてもらおうわけにはいかんからな。

山田先生に大丈夫だと返している間に、一夏達は急降下と完全停止を披露する事になったようだ。まず動き始めたのはオルコット。悔しいが、やはり代表候補生だけはある。オルコットは見事な操作を見せて、千冬さんにもお墨付きをもらったようだ。

「あら、何かご用事でして？」

「いや、見事だと感心してただけだ。」

「そ、そう手放しに言われますと……返って困惑しますわね。」

何処か得意げ……というか自慢げに話しかけてきたオルコットに、私は思っていた事を簡潔に伝えた。向こうとしては、私が噛み付いてくるとでも思ったに違いない。フンツ……一夏が関わりさえしなければ、私もそこまで熱くはならんさ。うむ、一夏が関わらなければ……。

「ですが、彼女に比べればわたくしもまだまだ……。」

「……あの速度で迫られると、なかなか迫力がある物だ。」

オルコットが上空を見上げるのに合わせて、私も首を上方へと傾けた。そしてその目に映るのは、背から小さい炎の翼を噴出させている刹那だった。翼の大きさが異なると言う事は、まだまだ余力は十分か……。黒乃はまるでその証拠かのように、地表が近くなると同時に雷火の出力を上昇させた。

「近江先生も、随分と特化型のI Sを設計なされたものですわ……ねっ!」

「まるで砂嵐だな……。」

地表に近い位置で……あく……何だったか、お、おーばーどいぐにつしよんぶーすと?……横文字は苦手だ。とにかく、とんでもない出力で炎を吐きながら地表へ近づくものだから、当然ながらグラウンドの砂は巻き上がる。見学している私達は遠い場所に居るのだが、ほとんど意味をなしていない……。

むっ、黒乃に千冬さんが近づいて……。あれは出席簿直撃コース……。流石の黒乃もアレは避けれんか。なんだか解からんが、千冬さんが叩いたと言う事はお叱りと思つて間違いない。わざわざ千冬さんが、人を褒めるために近づく訳が……。なんだろうか、千冬さんと目が合った気がする。

「残るは一夏さんですが、ああ……。アレは……。」

「どうかしたか？」

「簡潔に言いますと、墜落しますわ。」

そうか……。いや、そうかで済ませてはいかんだろう!? ISを纏っている以上は死にはせんだろうが、死なないから落ちても構わんだろう……。とは私は言えんぞ。なんて心配しながら急降下してくる一夏を眺めていると、再び黒乃が動き出した。

驚いている暇もなく、黒乃はその胸を緩衝剤にするかのようにして一夏を受け止める。く、黒乃……。お前という奴は、時々思うが少しは恥じらいというものを……。いや、もしかしてわざとか……。？私とて、そういうのが女の武器である事は理解しているが……。黒乃のように有効的に扱う自信はないな。

「ぶはあーち、窒息するかと思つた……。」

「……の割には、随分とだらしない顔つきだな。なあ？一夏。」

「見損ないましたわ。」

まあ一夏が無事で何より……と思ったのは束の間だ。黒乃の胸から頭を離れた一夏の顔は、こう……何かした堪能したとでも言いたいようにだらしがない。流石にこういう時は気が合うな、オルコット……。私はオルコットと2人して、黒乃の胸にしてやられた一夏を責める。

だが今は授業中だ。あまりやり過ぎると、それこそ私の身が危ない。実際のところ、一夏と黒乃は出席簿による制裁を喰らう。……今回は、それで許してやる事にしよう。さて、見る事もまた戦いだ。残りは集中して、専用機持ち達の手本を見守った。



「というわけで、織斑くん……クラス代表就任おめでと〜！」

「「おめでと〜！」」

「人気者だな、一夏。」

「箒、本当にそう思うか？」

自由時間に食堂集合という物だから来てみれば、まさか一夏の就任を祝う会だとは。見たところ1組以外の者も居るようだし……何でもアリかここの連中。私も私だな

……落ち着け、一夏が女子に祝われているからなんだ。一夏に皮肉を送った事を反省しつつ、何とか心を静める。

……私や一夏はともかくとして、黒乃は大丈夫だろうか。黒乃は私達が楽しんでいる様子を見て、それでパーティーなどは楽しんでいるようだが……。今回は規模が大きいうえに、周囲は敵だらけ。……ここから黒乃を連れ出すのが得策か？黒乃の場合は、判別に困る。

「まあまあ、一夏さんをお祝いしたいという気持ちは本物ですわ。」

「そうだよ、織斑くん。こういう時には他人事と思うのが楽しむコツさ。」
「……なんでアンタが此処に居るんだよ。」

「何故って、幹事してる子に誘われたから。まあ断るのもなんでしょ？」

オルコットが一夏のフォローをしていると、いつの間にか近江先生が私達の背後に居た。時々思うが、やはりこの人もただ者では無いな……。足音、気配、双方微塵も感じられなかった。飄々としているせいで解り辛くはあるが、いつかこの人の本気も見せて貰いたいものだ。

自ら気配遮断を断ったせいとか、近江先生はあつという間に女子に見つかる。……なるほど、近江先生が呼ばれた理由はそれか。と言うよりは、一夏の就任パーティーと言うのも大義名分。これは連中が一夏や近江先生と距離を縮める為にあるようなものだ。

フンツ……近江先生はともかく、私と黒乃が居る限りは思い通りにさせんぞ。

「……本格的に、誰が主役か解からんな。」

「やっぱ俺を祝う気なんて無さそうだけど。」

「ま、まあまあ……。近江先生の言葉にも、一理あると思いますわ。」

近江先生は、女子達に引つ張られ盛り上がり最たる場所まで連行されてしまう。やはり私達が居るせいか、表だつて一夏にアプローチはかけづららしい。しかし、近江先生の登場でますます場が盛り上がりつつあったな。それに比例するかのよう、黒乃の存在感が薄れていく。……よしっここはやはり、黒乃は退出させよう。

オルコツトと一夏を2人にするのはなんだが、こう人の目が多くては大胆な行動には出れんだろう。それに、私もこのパーティーに興味は無い。黒乃という方がよほど有意義な時間を過ごせるというもの。私が黒乃に意思確認を取ろうとすると、思わぬ邪魔がそれを遮った。

「はいはい、新聞部でーっす！何かと話題の織斑 一夏くんにインタビューに来ました！」

何処からかこのパーティーの事を聞きつけたのか、新聞部を名乗る者が現れた。一夏にインタビュか……残念だが、一夏はさほど面白い事を言えた男では無いぞ。私と同じでマスコミの類は苦手だろうしな。そうすると、私の肩を叩く者が。黒乃……そう

か、やはりこの場には居辛いのだな。

「……………」

「黒乃？どうかし……っておい、ちよつと待て！黒乃ーっ!」

すぐさま黒乃と此処を去ろうとすると、私に手提げ袋を渡して1人で去ってしまった。くつ……！もつと早くに行動を起こすべきだったか……。黒乃が私まで去る必要はないと考える事は見えていたのに。追いかけるべきだろうが、コレを私に預けたのなら何か意味があるはずだ。私が手提げ袋を漁っていると、随分と懐かしい物が出てきた。

「コレは……!?!」

「箒、どうかしたのか?」

「黒乃が、コレを私に渡して去って行った。」

インタビューとやらは終わったのか、1人で驚いている私に話しかけてきた。黒乃がコレを渡したと言うと、一夏も昔を懐かしむような表情を見せる。中に入っていたのは、フレージャーごとに袋詰めされた大量のクッキーだ。何の変哲もないが、私と一夏にとつては特別なもの……。

「懐かしいな、俺達が落ち込んだりケンカしたら……必ず黒乃が焼いてくれたっけ。」

「今回は、一夏がクラス代表の件で消沈していたからだろう。」

「これでも食べて元気出せって?……うん、元気出る。」

そう……私達にとって黒乃のクッキーと言えば、何か……絆の証と言い換えても遜色ない。最初こそは失敗も失敗で焦げたクッキーだったが、それはそれで笑いの種になったのを良く覚えている。一夏はそんな事を呟きながら、プレーン味のクッキーを一つ撮んで頬張った。

「ところで箒、黒乃は何処に——」

「あーっ、篠ノ之さんってお菓子作れるんだ! 凄くいい!」

「その量……クラスの皆に焼いてくれたの!」

「ち、違う……コレは。」

一夏が私に黒乃の事を尋ねようとする、連中のうち一人がクッキーに気が付いた。それを皮切りに、クツキーへと女子が群れ……許可も無しに次々と奪っていく。確かにこの量となると、クラス分よりも余計な程だろう。しかし聞いて欲しい……これは、私で無くて黒乃が焼いたものだ。

「わっ、美味しい! やるね篠ノ之さん……。」

「フ、フフフ……フンツ! こんな物で一夏さんの気を引こうとしても無駄ですわよ?

まあ……美味しい事は認めますが。」

「……違う! それは、私でなく黒乃が焼いたクツキーだ!」

「え……う？」

それまでワイワイと盛り上がっていた連中は、黒乃の名を出しただけで水をかけたように大人しくなった。ああ……本当に、こいつらを見てみると……つくづく人間というもののが嫌になる……！黒乃の手前で我慢してきた……黒乃が望まぬ事だと耐えてきた……。だが、私にはもう限界だ……！

「……なんだ……なんだお前達は！黒乃がいったい……どういう想いでそれを焼いたと思ってる!？」

「箒……。」

「このパーティーに華を添えようと思つての事だろうが！それをお前達は……黒乃が焼いたものだとするや否やその態度か！黒乃が……黒乃がいったいお前達に何をした！そのクツキーに毒でも入つていたか!？」

「箒、落ち着け。それはお前じや無くて俺の役目——」

「黒乃は黒乃なりに理解してもらおうと努めているのに、どうしてお前達は欠片も黒乃の事を理解しようと思わない！さも黒乃を酷い奴かのように言つて……お前達の方が、よほど黒乃に酷い事をしていないか!？」

「箒——」

私は怒鳴り散らしながら、前々から思つていた事と今回の事を絡めて怒鳴り散らす。

一夏が私の事を想って止めに入ろうとしてくれるが、残念な事に気が収まらなかった……。まだまだ言いたい事はあったが、一夏が大きな声で私を呼ぶ。それでようやく私には我に返った……が、私は何も間違った事を言ったと思つて止めたわけでは無いぞ。

「はいはい、皆とりあえず落ち着こうか？ つていうか、お開きにした方が良くないと思うけど。」

「近江先生……。」

「ちなみに、僕は全面的に篠ノ之さんの意見に賛成だね。キミら……もうちよつと藤堂さんの事も考えた方が良くない。」

しばらくシンとした時間が食堂を支配したが、近江先生が手を叩きながら解散を促す。そう言われた女子達の表情は……バツが悪そうだ。私からだけでなく、近江先生からもそう言われて相乗効果が出たのだろう。近江先生が動き始めると、それに合わせて女子達も解散を始める。

「大丈夫？ 篠ノ之さん。」

「はい……。近江先生、私は……。」

「君は、自分で間違つた事をしたって思うかい？ それなら、やらない方がマシだ。」

「いえ、私は後悔はありません。」

「今となつては、わたくしは篠ノ之さんを支持しますわ。」

「あんまり気にすんなよ、かっこよかつたぜ。」

どちらかと言えば、近江先生が援護射撃をしてくれたものだと思っていたから謝ろうとしたのだが……。この人は、どうやら本気で私の意見に賛同すると言ってくれたらしい。一夏やオルコットの言葉も……。嬉しかった。私はほんの小さな声で、ありがとうと呟く。

「さて、このクツキーは……。3人で分けなよ。僕は藤堂さんを追いかけるから。」

「ちよつと待て、それはアンタじゃ無くて俺が！」

「織斑くん。」

「な、なんだよ……。。」

「残念だけど、今の君にその資格はないよ。僕の言っている意味も解らないなら……。それはもう論外だ。」

近江先生は目をカツと見開きながら、少し冷たい口調で一夏にそう告げる。資格……。一夏には無くて、近江先生にはある……。……。もしや近江先生、黒乃の事を好いているのではあるまいな。いや、誰が誰を好きになろうとそこに口出ししようという事ではないが、教師と生徒と言う立場でそれはどうなんだ？

「一夏さん、ここは近江先生にお任せするべきですわ。」

「なんでだよ！」

「大人の余裕……ですわ。」

「確かに、近江先生の方が上手くやるだろうな。」

「ぐっ……解かった。ただし、黒乃に変なこととしてみる……タダじゃおかないからな！」

「うん、そこに関しては約束するから。それじゃ、気を付けて帰ってね。」

そう言うと、近江先生は白衣を翻しながら黒乃の搜索を開始した。というか、近江先生なら刹那のありどころから特定するのだろう。私達3人は、アイコンタクトと同時にクッキーの分配作業に移る。プレーン、ココア、抹茶のフレーバーをバランスよく分配すると、私達は大人しく帰路へと着いた。

第31話

「黒乃、おはようー！」

「……………」

就任パーティーから1日開け、今日も今日とて教室へ登校……？なんだこの微妙な表現は。ま、とにかく1組を屈指していたらイツチーに話しかけられた。朝は一緒にやなかったのかって？いやいや、普通に別行動なときもあります。とりあえず挨拶には、会釈する事で応えておく。

「昨日のクツキー、ありがとうな。いつも通りに美味かった。」

そっか、なら良かったんだけど。正直ちよつち砂糖入れすぎたかなとか思ってたんだけど、気にならないレベルなら御の字だ。……男でもお菓子作りとかはするんだろうけど、黒乃ちゃんの身体を使っているところ……乙女化が進行してる気がしちゃう。

本当、イツチーだけは変に意識しないようにしないと。皆の邪魔はしたくないし、何より俺の気持ちの整理が着いてない……というか、見て見ぬフリをしてるだけなんだけどな。……止め止め、らしくもない。馬鹿が考え過ぎた所で無意味さ。そんじゃ、今日も元気に1組へゴー！

「箒、セシリア、おはよう。」

「ああ、一夏に黒乃……おはよう。黒乃、昨日のクッキーは美味かったぞ。」

「……おはようございます、お2人とも。」

メインキャラ……って言い方はダメなんだろうけど、イツチーとしてはモツピーとセシリーが近い存在だと認識しているようだ。教室に入ると、イツチー達は挨拶を交わした。モツピーの感謝の言葉にも頷いておくとして、なんだかセシリーの様子が変わった。気になったのはイツチーも同じみたいで、小声でモツピーに問い掛けた。

「なあ、箒。セシリア……なんかあったのか？」

「あ、ああ……私のせいだと思う……。」

「……………」

「いやな、どうにも中国から代表候補生が来るらしいんだ。それでセシリアが自分の存在を危ぶんでの事か……なんて言うものだから……。」

「……バツサリ斬り捨てたのか。」

「ぐっ！い、いや……悪気は無かったんだが。というか、私も冗談だろうと……。」

あく……なるほどね、そういう事だったのか。モツピーの事だから、もし仮にそうなら最初から入学させているだろうな……とか言っただろう。本気で自信満々に言っていただけに、モツピーの言葉が冗談めかしてても突き刺さったんだね……。

「それにしても、中国かあ……。」

「……お前に他の女を気にしている余裕はないだろう。」

「そうですね、一夏さんには必ず勝っていたきませんと！」

あ、復活した……。イッチーは、やっぱり中国って固有名詞に思い当たる所があるみたい。それに反応してか、モッピーとセシリーは騒ぎ立てて詰め寄る。……あれ？おかしいな……。本来ならここで、聞き耳を立ててた女子達の話しに入ってきて……。クラス代表戦は1組と4組しか専用機が無いから余裕……。みたいな発言をすと思うんだけど。そう思つて周囲を見渡すと……。

「……………」

「……………」

……居るよ、見覚えのあるツインテール中華娘が仲間になりたそうな目でこちらを見てるよ！話に入るタイミング計りかねてるよ！ああ、でもこの絵はなかなか可愛いかもしれない。教室のドアからちよこんと顔出して、今か今かと待ち受けるこの感じ。でも、気付いたからには教えたくないね。俺はイッチーの肩を叩いて、扉の方を指差した。

「黒乃、悪いけど今忙し……つて鈴!?お前……鈴か！」

「やっとなつて……もう、黒乃が居なかつたら完璧スルーだったわけ!？」

「いや、だってお前……相変わらずちっこいし。」

「なあ!? アンタねえ、久々に再会した幼馴染にそれは無いでしょ!」

鈴ちゃんの見た目を見つけたイツチーは、目を見開いて驚いてる様子だ。でも、次の瞬間にはいつもの調子に戻っていた。アレだね、イツチーって少しドライなところあるよね。鈴ちゃんの言う通り、もつと何かあると思うけど。でも……この感じは懐かしい。

「黒乃は相変わらず……ああ……ああああ!」

「……………!?!」

「アンタ……アタシが帰ったの1年前よ!? どんだけおつきくなってるの! 昔から大きかった癖に!」

「んんっ……!? あっ……!」

ふおおおおお!? さ、最近はどうなってるんだ……数日に1回は胸を揉まれるぞ。つてか、鈴ちゃんの場合は掴むだから痛さも交じって……いい、いかん……M気質なうえに敏感な俺にこれはマジでいろいろまずい! よ、よし……ここは他の事を考えてだね……。

そ、そうなんだよ……昔から大きい方だったけど、何故だか鈴ちゃんが帰ってから途端にグングン成長しちゃってさ。おかげでブラのサイズをすぐとつかえなきやなんなく、あの時期は大変だった。まあ、うん……鈴ちゃんの言いたい事も解るよ……解かるさ。

「ちよつ、貴様……黒乃に何を！つて……一夏！何をマジマジと見ている！」

「前は助けてくれなかつたのに何言つてんだ！」

「お2人とも、それより黒乃さんですね……。」

ちよつ、もー！助けるんなら助けてよー！なんか、鈴ちゃんが胸揉みながら呪詛を念じてて怖いんだつて……。ダ、ダメだ……立つてられなくなつてきて……。ヤ、ヤダー！こんなんで、気持ちも完全に女の子になつちやうのはヤダー！うおおお……イメー
ジ、鈴ちゃんの洗濯板（意味深）に頬ずりしてる所をイメージしろお……。

「おい。」

「何よー！」

「学園で堂々と淫行に走るな馬鹿者が。」

「いったーい！ち、千冬さん……。」

おお、メシアよ！貴女の到着を心待ちにしておりましたぞ！ちー姉の登場により、鈴ちゃんはなんとか大人しくなつてくれた。ようやく解放された俺は、腰を抜かしてその場にへたり込む。無表情でも頬は紅くなるし、息もなんだか自然に色つぽくなつちやつて……は、恥ずかしい……。

「……エロい。」

「一夏！」

「な、何も言つてねえつて！大丈夫か黒乃？」

「あつ、黒乃……ゴ、ゴメンやり過ぎ——」

「お前は今すぐ教室へ帰れ。」

「は、はい！失礼しました！」

え、何……？頭がボーツとして良く解からないんだけど……。……あつ、イツチーが助け起こそうとしてくれてるのか。イツチーの手を借りて立ち上がった頃には、鈴ちやんの姿はもうなかった。その代わりに、頭を押さえたモツピーとセシリーが居る。そっか、鈴ちやんの事をイツチーに聞こうとして叩かれたか。

なんか知らんけど、お前は容赦してやろうとか言われた。まあ……。同性？なんだし、胸揉まれる感覚は理解……。あれ？ちー姉にそういう相手って居た経験があるのかな？……。いや、邪推は止しておこう。妄想するだけなら自由だけど、デリカシーつてもんもあるし……。後は大人しく席に着かなくちや。



「と、いう訳で……。部屋変わって。」

「どういう訳だ!?お前、開口一番ではないか!？」

鈴音の転入により、幾分か騒がしかった日常は……やはり終日騒がしい物になるようだ。一夏と箒が同室である事を知った鈴音は、大胆な事に部屋の変更を申し出にやつて来たらしい。という訳でと話し始めたにも関わらず、前置きらしい前置きを箒は一切聞いていない。

「ほら？ 篠ノ之さんも男と一緒に嫌でしょ。だから変わってあげようかと思って。」

「べ、別に嫌ではない。嫌ではないと言うか……そう！ 平気なのだ。私は幼馴染だからな。」

「その前提だったらアタシも同じ条件なの忘れてない？」

一夏の前だけに、肯定するにも否定するにも照れ屋な箒にしては難易度が高かった。だからこそ、当たり障りのない言葉を選んだのだが……深く関わりのない人間に淡泊な傾向である鈴音は、即反論して箒の逃げ道を断つ。ぐぬぬと箒が嫌に歯噛みするには、昼の出来事も起因していた。

「くっ、嵐……。お前は黒乃の親友を名乗るわ部屋も奪おうとするわ……。」

「はあ？ 当たり前でしょ、黒乃の1番の親友はアタシに決まってるの。」

（多分……黒乃は1番も2番も無いと思うぞ。）

この2人、一夏を取り合うだけでは飽き足らず……黒乃の親友ポジションでも争っているのだ。一夏が鈴音を皆に自分との関係を説明した際、自己紹介にて自らを黒乃の親

友と称した。それに意義を唱えたのが、他でもない箒である。箒としては、聞き捨てならない言葉だったのだろう。

箒の小学時代の経験上、黒乃に接近は図る女子は一夏に取り入ろうとしているのがほとんど。人となりがまだよく解からない鈴を、それと同じ手合いだと思ひ込んでいるようだ。そこまで警戒するのは、箒も自分を通して姉を見るような連中に囲まれた経験からくるものだろう。

2人のそんなやり取りを、一夏はとにかく無の状態で見届ける。我関せずならば、興味が無いのかと怒られ……口を挟めば、余計な事を言うなと怒られる……。そんな理不尽な未来が容易に想像できるだけに、とにかく話はしっかり聞きつつ矛先が自分に向くまでは黙っておくつもりなのだろう。

「馬鹿を言え、黒乃と同じく剣の道を生きる私こそが親友だ。」

「アタシと知り合った頃には剣道のひと欠片も見かけなかったわよ。」

「な、何っ……?!それは初耳だぞ、一夏!」

「お、俺……?あゝ……そうだな、素振りくらいはしてたかな……ハハハ……。」

「ちいっ……!なるべく人には言いたくなかったが、とっておきだ……。私は、別れの際に黒乃に泣いて貰った!」

「は、は……?なにそれ羨まし……ちよっ、マジ!?このっ……それならアタシは……。」

黒乃の1番の親友でありたい2人は、両者一步も譲らない。同門である事を前面に押し出した箒だが、そもそも黒乃は好きで剣道をやっていたわけでは無いのである。それを箒が知ったら卒倒も必至だろう。とにかく、一夏に真偽を問いかけてコレは不発だと箒は判断した。

次いで出た言葉は、秘密兵器と表現して差し支えない。本来ならば、自分の中で留めておきたい最高の思い出なのだが……負けず嫌いが祟つてか、自信ありげに胸を張りながら黒乃との別れのエピソードを暴露した。これには鈴音も動揺を禁じ得ないようで、対抗手段になるであろう黒乃との思い出を語っていく。

一方その頃、話題に挙がっている黒乃といえば……某動画サイトで無料配信されるアニメを視聴中であつた。右から左へと流れる秀逸なコメントを、内心でニヤリニヤリと眺めながらノートPCを操作していた。ただし、その様子は何処か不満そうにも見える。

(……今季、ハズレが多いなあ。)

黒乃はそんな事を考えながら、耳を覆っているヘッドホンをおもむろに取り外す。黒乃は目が肥えてしまっているだけに、アニメなどに関しては極端に評価が厳しい。今もどちらかと言えばコメントの方を楽しんでいたようで、エンディングに入るや否やサイトのユーザーページへとブラウザバックさせた。

（おまけの2分アニメの方が面白く感じるとか……どうかしてるだろ。じゃあ本編は何か、苦行か？）

日ごろの物腰の低さやチキンハートは何処へやら……。不満と言うか、完全なる文句が頭に浮かぶのは、黒乃……の中身のオッサンにしては珍しい。すると今度は、おまけが本編でタグ検索を開始する。すると案の定と言うか、例の2分アニメとやらのまとめ動画を見つけた。

黒乃はまるで仕方が無いとでも言いたげな息を吐いて、そのまとめ動画をクリックした。そうして再びヘッドホンを装着……。しようとしたときに、どうも隣の部屋が騒がしい事に気が付いた。動画の再生を一時停止させると、はて……。何だったかと思いを巡らせる。

（……あ、そっか……。鈴ちゃんもモッピーに部屋変われって言いに来るんだっけ。）
勉強はろくに出来ないくせに、趣味に関わる記憶力は異様に高い。黒乃の想像通りに、お隣の1025室は箒と鈴音が口論の真っ最中である。まあ……。現在に限っては、本人が知っているのとは違う理由で口論中だが、それを思い出した黒乃は、ベッドの上で腕を組み胡坐をかいて座り……。むむむと唸ってみせる。

（仲裁に向かうべきか、ここはスルー安定か……。どっちだ……。？）

本音を言ってしまうえば、黒乃は真っ先に後者を選んでしまいたいのだ。争い事が苦手

というのもあるが、単に激昂する筈と鈴音の相手をするのは勘弁したいらしい。それに、自分が行ったらますますややこしい事になるような気もした。

かといって、持ち前のお人好し気質から無視するのも気が退ける。悩みに悩んで黒乃が出した結論は、もう少し様子を見る……だ。最悪は後に起こる事件で鈴音をフオローできればよいと割り切り、取りあえずはさほど長くは無いまとめ動画を視聴してから行動に移す事にしたらしい。さて、それでは再度1025室の様子を見てみよう。

「ら、埒が明かんな……。」

「そ、そうね……そこは同感だわ……。」

(じゃあその埒が明かないやり取りを見せられてる俺っていったい……?)

反論に反論を重ねるも、互いに折れる事は全くなかった。そろそろネタが尽きて来た頃になると、ネタよりも先に2人の疲労感が凄まじい。大声で騒ぐものだから、ぜえぜえと肩で息をするほどだ。そして互いに、そこはかとなく中止に動くように空気を換える。

「じゃあこうしましょう。少し一夏に確認したい事があるから、それは邪魔しないでもらえる?」

「……良いだろう。」

「そ、ありがと。……一夏。」

「お、おう。」

「アタシと篠ノ之さん、一緒の部屋ならどっちがいい？」

箒に部屋を変われと言うよりも、こっちの方が画期的だと鈴音は思いついた。急に話を自分に振られて、ついに矛先が向いたかと真剣に考えてみる事に。箒はその手があったかと思いつつ、一夏は自分を選んでくれると信じて待つ事にしたらしい。そして、一夏の出した答えは……。

「それ、箒か鈴じゃないとダメか？」

「どういう意味よ……。」

「いや、誰が同室が良いかって聞かれたら……そりゃ黒乃だろ。」

「……………」

瞬間、空気が凍った。いや、この場合は確かに一夏の言葉にだって一理ある。10年近く同居したとなると、一夏としては最も同室で気が楽なのは黒乃に違いない。だが……普通はそんなに堂々と黒乃が良いなどと言えるノリではなかった。安定の一夏クオリティに、2人はしばし言葉を失う。

「じゃ、じゃあアレは？約束、覚えてる？」

「約束？約束ってアレか、鈴が料理が出来るようになったら——」

「そう、それぞれ！」

「酢豚を奢ってくれるって奴か？」

急な話の切り替えだが、一夏が黒乃が良いと言ったのならこれ以上の追及は無意味だと思つたのだろう。鈴音は約束の話を振って、一夏がすっかり覚えて……いても無く……。途中まで良い調子だっただけに、鈴音は盛大にズッコケる。さつきまでいがみ合つていたわけだが、これには思わず箒も同情するしかない。

「まあ別にそんな無理する事ないんだぞ。酢豚だったら黒乃に頼めば作ってもらえるし。」

「つ……！アタシが……いつ黒乃の話したの！」

「鈴……？」

「ほんつと変わつてない……。二言目には黒乃、黒乃、黒乃……！ちよつとくらい、ちやんとアタシを見てくれたっていいじゃん！」

忘れていたと言うか、そもそも認識の違いがある事は薄々だが鈴音も気付いていた。しかし、次いで出た一夏の言葉は流石に気に障つたらしい。一夏が黒乃の身を案じることと自体は、鈴音だつて何の文句も無いのだ。だけれど、自分の必死のアプローチが何でもかんでも黒乃に結び付けられてしまうのが耐えられない。

「……自分は黒乃の親友じゃなかったのか。」

「ええ、それは勿論。だけど今それは別！」

「別……？全然鈴が何言いたいか解からねえよ。」

女性が織り成す複雑な感情を、一夏の頭で理解できるはずもなく……。心底から難しい表情を見せる一夏に、鈴音の苛立ちは更に増した。とはいえ、黒乃に対する物では全くないのは救いだらう。鈴音は目の前の一夏へと、ただただ怒りをぶつける。

「とにかく、今アンタが黒乃の話題を出すのはなし！」

「なんでだよ、それは俺の勝手だろ。」

箒と鈴音の言い争いが終わったと思つたら、今度は一夏と鈴音である。そんな2人の様子を、黒乃は扉の隙間から覗いて大変に困惑していた。動画を見観終わってどんな具合か伺いに来たら、2人が自分の話題で口喧嘩をしているのだから無理もない。

（なんでや……。っーかイツチー……。いい加減に俺姉離れしてくれい。）

一夏の発言には、他ならぬ本人がドン引きだ。とにかく喧嘩の原因が自分であるだけに、黒乃としては引き下がれなくなってしまう。観念して1025室に入ると、黒乃に気がついたのは箒のみだった。箒は、騒がしいからやって来たのだろうと解釈したらしい。

「ああ、黒乃か……。見ての通りだ、私には手に終えん。」

（そうは言うけどねえモツピー、俺も同じようなもんだよ。）

箒が仲裁に入らないのは、ちよつとした拍子で自分も喧嘩に混ざってしまう気がして

いたからだ。だからこそ、遠回しだが黒乃になんとかしてほしい旨を伝える。あまり乗り気ではないながらも、そう言われては断れないのが黒乃である。心の中で溜息を吐きつつ2人へ近づいた……そのときだった。

「うるさい貧乳。」

（ぬうん、よりによつてこのタイミングか！）

鈴音にとつて、最も気に触る言葉を一夏が放った。この言葉が、ビンタへ繋がる事を黒乃は記憶している。どうするべきか一瞬だけ迷った黒乃だが、ここは身を呈して鈴音のビンタを受ける事を選ぶ。これは決して一夏を守ろうという事ではなく、あくまで鈴音が一夏に暴力を振るわずに済ます為である。

黒乃が2人の間に滑り込むと同時に、バチンと痛烈な音が1025室に響く。狙ったのと違う相手、それも黒乃の頬を叩いたとあらば、鈴音も自ずと我に帰った。すぐさま謝罪をしようとするわけだが、それは思い切り一夏に阻まれてしまう。

「ゴ、ゴめん黒——」

「黒乃!? 平気か、大丈夫か!? ああ……こんな赤くなつて……。」

（いや、違つ……俺の事はいいから、とりあえず落ち着いてほしいだけなんだつてー！）

一夏は、黒乃の赤く染まった頬を慈しむかのように撫でた。黒乃は別に自分の心配はいらないので、軽い力で抵抗しつつ一夏の手を取り払おうとする。しかしだ、周囲から

見れば一夏の手を握り締めているようにしか感じられない。その様は、まさに恋人同士のそれである。

これには思わず、鈴音だけでなく箒も敗北感に似た物を感じた。いや、それだけならまだ救いがあつたのかも知れない……。黒乃がビンタを喰らつた事で、自分への興味が全て薄れてしまった事に、鈴音は啞然茫然とするしかないようだ。しばらくそのままだったが、徐々に肩をワナワナと震わせる。

「なによーっ！もう良い……そんなに黒乃が好きならとつとと嫁にでもなんでもしちやええば!?その代わり、クラス対抗戦は覚悟しときなさいよ！」

「あ、待て鈴！帰るなら黒乃に謝って……行っちゃった……。」

(ああああ……なんてこつた、原作よりもややこしい事にい……。)

半ばヤケクソ気味になった鈴音は、元も子もない事を言いながら去って行つた。昔からそう思つていても口には出さなかつたが、ここに来て爆発してしまつたのだろう……。黒乃に関しては、自分絡みでややこしい方向にもつれてしまい悔いているようだ。それもこれも一夏の鈍感故と思うと、暴力を良しとしない性格の黒乃もつい手が出てしまう。

「黒乃、ほつぺたは本当に平気か？なんなら、氷とかで冷やし……つて!!」

(もー……ホントに勘弁してよITCHー！シスコンも大概にしなさい！はあ……帰る

……そんで寝る……。」

「………………。箒、鈴はともかく……何で俺は黒乃に叩かれたんだ？」

「……………さあな、自分で考えろ。」

凄まじくスナツプの効いたビンタを一夏の頬へ叩き込んだ黒乃は、少し肩を落としながら1026室へと帰る。取り残された一夏は、何が何やら解からない様子。箒に黒乃がビンタしてきた理由を問うが、どうにも冷たい反応しか返ってこない。箒としては、妥当なところで鈴音の扱いに対して、大穴で照れ隠しといったところだ。

だが残念、いつも通りに不正解である。皆が黒乃に抱くイメージが、単に苛立ちを覚えるのビンタだと予想させない。特に一夏は、結論へと辿り着く事は無いだろう。それでもしばらく、難しい顔をしながらわけを考えているようだったが……。その頃には、既に鈴音の事は忘れかけているバカヤロウであった……。

第32話

一夏と鈴音のケンカ騒動から数日が経過し、2人は仲を戻せないままクラス対抗戦の当日を迎えてしまった。その数日間を過ごすうえで、黒乃は胃が痛くて仕方が無かつたとか。必ずしも自分が無関係ではないというだけで、この小心者は気まずさに負けてしまふのだ。

とはいえ、鈴音は自分に対して怒っていない事は割れている。翌日になり頭が冷えたのか、真つ先にビンタの事を謝られたものだ。しかし、その場に一夏が混ざるとその限りではなくなる。一夏が現れるや否や、表情を曇らせる鈴音に黒乃は心底から怯えていたとか……。

「一夏、今謝るなら少しくらい手加減してあげても良いわよ?」

「手加減されんなら、ボロボロになる方がマシだ。と言うか、鈴が黒乃に謝るのが先だろ。」

「謝ったわよ、アンタが居ないところで! そもそも、アンタが禁句を言わなきゃアタシも黒乃を叩かないで済んだの!」

「その前に、黒乃の話題を出すなとか言うからだ。」

第2アリーナの真つただ中、各々の専用機を展開している2人は、相も変わらず売り言葉に買い言葉だ。お互いがお互いに頑固で主義主張を通そうとする性格ゆえ、このような事態も珍しい事ではなかったりする。だが……今回はっかりは、本当にどちらも譲る気がないらしい。

「オーケー……：良いわ。アタシら向けの手っ取り早い方法があるじゃない。」

「負けた方が先に謝る……：か？」

「解つてんじゃない！でも言つとくけど、この方法なら——」

『試合開始！』

「真つ先にアンタが謝る事になるけどね！」

鈴音が台詞を言おうとしている最中に、まるで謀つたかのように試合開始の合図が鳴り響く。それと同時に、一夏と鈴音は互いの距離を全速力で詰める。そして、一夏は瞬時に雪片式型展開……した途端に弾かれてしまう。その衝撃は、まるで腕ごと持つて行くかのような感覚だ。あえて一夏は弾かれた勢いを利用して、すぐさま離脱し鈴音を正面で捉える。

「へえ、初撃防がれるのは意外かも。黒乃かセシリアつて子のおかげかしら？」

雪片が受けた衝撃は、何が原因かなど一目瞭然だった。凰 鈴音が専用機、甲龍……得意な間合いとしては、中・近距離である。猪突猛進な鈴音にはふさわしく、その手に

は巨大な青龍刀が握られている。武装名は双天牙月。あまりの巨大さなため、もはや牙や斧の方が表現としては近いかも知れない。

日本刀型でシャープな造りの雪片とでは、単純に出るパワーという物が違う。両者が相性という物を認識すると、その表情を対照的なものへと変貌してゆく。特に鈴音は余裕があるのか、双天牙月を肩に担ぐようにしながら皮肉たつぷりにそう言ってみせる。

「ああ、それだけじゃ無くて箒のおかげでもあるぜ。」

「そ、だったら……特訓の成果を見せてあげないとね!」

鈴音が余裕な分だけ、一夏は余裕が無いと言つて良い。だが、あくまで強気な姿勢は崩さないで鈴音に返した。すると鈴音は、やせ我慢すらさせない気ようだ。双天牙月をもう一本呼び出すと、仲違いになるように連結させ……まるでバトンさながらに回転させてみせるではないか。

そのまま鈴音は一夏へと接近し、トリツキーかつハイパワーというところでもないラツシユを仕掛ける。鈴音の意志によってフェイントはかけ放題、おかげで刃の攻め手は読み辛い。しかし、仮に防御を合わせにくくしてもだ……パワーに押し負けてしまつて全く意味を成さない。

(くっ、この状態は不利だ!ここは、距離を開けて体勢を——)

「甘い!」

とりあえず退く事。悔しいが、今の一夏にはそれしか選べなかった。そのまま素早くバックステップのように僅かな間を開けた……瞬間の事だ。甲龍の肩付近に浮いている非固定武装、その球体がスライドし開いたと同時に一夏は見えない何かに襲われた。その衝撃たるや、たった一撃で一夏を暗転に誘うほどだ。

「言つとくけど、今の軽くジャブだから。」

「ぐあつ!」

何が起こったか解らない。初見ならば、まず誰しもがそう考えてしまうはず。しかし、現状でその思考こそがバッド。鈴音の宣言通りに、先ほどよりも強い衝撃が一夏を吹き飛ばす。その威力たるや、白式を地表へと叩きつけるほどだ。しかも……やはり全く視認できない。

(これは少し……いや、かなりマズイかもな……。)



「あれは、何が起こきた……?」

「衝撃砲、ですわね。」

「……………」

ピットのモニターで一夏の様子を見守る3人娘は、三者三様といった風だ。対戦者もさることながら、専用機に関して知識のない箒は困惑している。セシリアは代表候補生なため知識は深い。実際に目の当たりにするのは初だが、問題なく解説も出来るレベルだ。

黒乃はと言うと、前世の知識で知っている……には知っているのだが、実は説明を読んでも衝撃砲のメカニズムを良く理解できていないのだ。衝撃砲に関してペラペラと解説するセシリアを見て、内心で俺は代表候補生として大丈夫なのかおい……?なんて考えている。

衝撃砲とは、早い話が空気砲と同等の兵器だ。空間自体に圧力をかけ砲身を生成、その際の余剰で発生した衝撃を砲弾化させて発射させる代物だ。つまり、厄介な事に鈴音がどのあたりに砲弾を撃ち込んでくるのかも見えないという事になる。更に言わせれば、砲身斜角はほぼ無制限……。

「……………」

「ん……………あ、ああ……………済まない黒乃……………私なら大丈夫だ。」

「箒さん、お気持ちちは解ります。ですが、今は我慢の時ですわ。」

「ああ……………」

セシリアの解説を右から左へと受け流した黒乃は、そんな事よりとでも言わんばかり

に箒の肩をツンツンと突く。当然ながら、箒の顔付が一夏の心配具合を表していたから。それに数瞬遅れて返答した箒の顔は、やはり大丈夫には見えない。セシリアの言葉にも何処か生返事で応えた。

（イツチーも良く躲してる方だし、一撃で逆転できるから我慢は必要だよねえ。）

自分の事で無くなると、他人事になる黒乃だが……その言葉に誤りはない。一夏には、白式には、雪片には……どんな状況からでも一発王手を狙える諸刃の剣が存在する。その名も零落白夜。バリア無効化攻撃を発動させ、相手のバリア残量に関わらずそれを斬り裂いて本体に直接ダメージを与える事が出来る。

一夏が理解していないままではあったが、セシリア戦で一気にシールドエネルギーを削り切ったのがそれだ。ただし、発動には白式のシールドエネルギーを消費するという大きな欠点がある。一歩でもタイミミングを誤れば、一夏の生命を脅かしかねない……。千冬曰く、白式は欠陥機だとか。

（狙ってるのは解るけど……少しじれったいな。）

映し出されている一夏と白式を見るに、黒乃は妙に落ち着かない。それはきつと、刹那ならチャチャツと接近して一気にズバッ！……なのになあとか考えているからだ。確かに、刹那に零落白夜が加わればとんでもない事になる光景しか思い浮かばない。

『鈴。』

『な、何よ……。』

『本気で行くからな。』

内心でソワソワしていた黒乃だが、何処かで聞いた事のある台詞だと意識を集中させた。何故ならば、この台詞が聞けたという事は……もうすぐアレが襲来する合図だからだ。急に真剣な顔つきでそう告げる一夏に、鈴音は不覚にもときめいてしまったように……双天牙月を構え直すという隙が生じてしまった。

「ええ、一夏さん……ベストタイミングですわ!」

「あれは、瞬時加速!」

「しつかりバリア無効化攻撃も発動させているようですし、これは——」

「獲ったか!」

(ところがギツチョン!)

衝撃砲が射撃を開始するよりも前に、距離を詰め切つて零落白夜を当てる。果てしなく感じるその距離を縮めるには、瞬時加速はもつてこいの代物だろう。一夏が仕掛けるタイミングを悟つたセシリアは、白式が加速を始めるのと同時ほどに惜しみない賞賛を送る。

セシリアの言葉を聞いてか、箒はどこか安心の入り混じつた声色で叫ぶ。それは何処か、一夏の勝利を確信したかのようだ。そう……それこそ、セシリアだつて一夏が勝つ

たと思った事だろう。真逆の考えを持った人物が1人、藤堂 黒乃である。黒乃が心の中でそう言ったのと同時ほどに、とてつもない振動がアリーナ全体を揺らした。

「な、何事です!?!……あら、黒乃さん……ごめんあそばせ。」

「ありがとう黒乃、助かったぞ……。」

「……………」

2人の間に立っていた黒乃は、力強くその腕を握った。バランスを崩しかけた箒とセシリアだったが、黒乃のおかげで転倒は免れる。振動が収まり次第に、セシリアはさまざまモニターへ注目した。するとセシリアの目に映ったのは、よく解からない何かとしか表現しようのない異形のIS……。

「なん……なのだ……?あの、ISは……。」

「……解かりません。ただ1つ言えるのは……あのIS、アリーナのシールドを貫通させる火力を持っている事実ですわ。」

腕がつま先よりも長く、首が存在せず頭部と肩が連結している……そんな異形は、零落白夜のような特殊能力も無しにアリーナのシールドを貫通させたという事だ。これがどういう事か、よほどの馬鹿では無い限りは理解できるだろう。それすなわち、その攻撃を一撃喰らえば即アウトと……そういう事になる。

「一夏を助けねば!」

「それよりも、まずは現状を把握するべきですわ。織斑先生の元へ向かいましょう。黒乃さん、一夏さんはきつと大丈夫ですわ!」

(あく……やっぱ俺も行かなきゃダメなパターン?……草も生えない。)

非常事態だからこそ、まず現状を把握すべき。そう提案したセシリアの言葉に、箒は思ったよりもすんなり従う。対して、黒乃は2人が先を急ごうとしてもしばらくその場を離れようとはしなかった。セシリアは、箒以上に一夏の事が心配だからと解釈したようだが……コイツは単純に行きたくないだけである。

そもそも黒乃が代表候補生になりたくなかったのは、こういった非常時に駆り出されてしまうから。自分は大した戦力じゃないのに……なんてふざけた事を考えつつも、黒乃は渋々2人の後を追った。一口にピット内と言っても広し、とはいえ存在感のある千冬はすぐに捕まった。

「先生、わたくしと黒乃さんにISの使用許可を!事は一刻を争いますわ!」

「ああ、お前らか……。残念ながらそれは不可能だ。コレを見る。」

千冬に話しかけるなりセシリアはそう言うが、むしろ向こうもそうくるだろうと反論の用意はしてあったようだ。千冬が手元の端末を弄ると、現在のアリーナ内のセキユリテイが映し出される。そこには、遮断シールドレベル4設定、全ての扉にロックという表示がなされていた。

「そ、そんな……これでは！」

「今は避難も援護も出来んな。」

『あく……織斑先生。避難に関してですけど、御相談があります。』

「近江……先生か？どうした。」

『今非常口のクラッキングをやってるんですけどね、これ……作りが厄介です。常に誰かがプロテクトを実行してないと閉じちゃう仕様みたいです。』

避難に関して千冬が言及すると、通信機器から鷹丸の声が響いた。日ごろの癖か、不特定多数を前にして呼び捨てしそうになるのを何とかこらえ反応を示した。鷹丸の声色は、余裕はありそうだがヘラヘラはしていない。緊急事態を前に、真剣そのもので事にあたっているようだ。

「つまり、何が言いたい。」

『僕が常時クラッキングしてる非常口は開きます。裏を返せばここしか開けられないって事です。つまり——』

「その入り口に、人が殺到する危険性がある……か？」

『御明察。将棋倒しとか怖いですからね。どなたか避難誘導をお願いします……山田先生以外で。』

それだけでなくマンモス級に生徒の多いIS学園だ。その生徒達がパニック状態、な

おかつ非常口が1つしか開かないとなると……鷹丸の言う通りに事故が発生してしま
うかも知れない。それだけは避ける為に、鷹丸は救援を要請したのだ……真耶以外で。

「よしつ、了解した……私が向かう。」

『それは心強いです。スママセンけど、これ以降は集中させて下さい。』

「お前達、今のは聞いていたな？私が居ないからと言って、勝手な行動は慎むように。山
田先生、この場は任せる。」

「は、ははは……はいっ！喜んで！」

鷹丸に悪気はないわけだが、山田先生以外と言われて少ししよんぼりしていた。のだ
が、千冬に指令を出されて緊張感を取り戻す。ただし、若干テンパっているのか言葉の
使いどころを間違えているが……。そうして千冬が鷹丸の元へと向かおうと背を向け
たときだった。

(んく……このまま出撃する流れかなあ……やだなあ……。)

「あうっ!? く、黒乃……お前……！」

(……ええ!? ご、ごめんモツピー!)

黒乃は一連の流れを見て、やっぱりだいたいは原作通りの流れである事に辟易とす
る。出撃したくないだけに、ちえくつ……つと、まるで拗ねた子供かのように左足を小
さくを振り上げた。その際に、何かを引つ掛けた感触が足に残り違和感を感じる。

その数瞬後には、かなり痛そうな音を立て盛大に箒が転ぶ。何事かはすぐに黒乃は理解した。たまたまだが、何処かへ向かおうとしていた箒を転倒させてしまったのだ。逆に箒からすれば、故意に転ばされたようにしか思えず……恨めしい目で黒乃を見る。

(いや、マジでゴメン!だ、大丈夫……?)

「黒乃……。いや、お前の言う通りだ……。私が愚かだったらしい。」

(はい?……あつ、もしかしてだけど……)

転んだままの箒に慌てて駆け寄ると、しゃがんで視線を箒と合わせる。それは黒乃にとって、申し訳ないという意味表示のつもりだったのだが……何故か畏まられた。これを黒乃は、無茶をしようとしたのを防いだのだと察する。

というのも、原作での箒は危うく死にかけてと言つて良い。通信室へ無理矢理にでも侵入し、音声放送で一夏を激励したのだ。それが異形のISに注目される要因となり、主砲で攻撃されかける。で、隙を見て管制室へ向かおうとしたのを、偶然にも黒乃が防いだという事。

「黒乃……。私の代わりに、一夏を助けてやってくれ!頼む……。頼む……。!」

(え、ええ……。?正直首を横に振りたい……。けど、女の子にこんな頼まれ方した日には……NOと言えない自分が嫌だああああ!)

「ちよつ、黒乃さん!?何処へ連れて行く気ですの!」

未だ倒れたままの状態で、箒は黒乃の服の胸元を掴む。そうして声を震わせながら、まるですがるかのように懇願する。あまりの必死さに、黒乃は断る事ができず……。箒の手をそつと退かすと、力強く頷いてセシリアと共に何処かへと消えていく。

◇

(私はなんと……無力なんだ……。)

今この場に立っていると、本当にそれを思い知らされる。近江先生は、取り残された生徒達の為に動き、黒乃やセシリアは順当に事が進めば一夏と凰の援護に向かうのだろう。千冬さんは周囲の教師に指示を出し、山田先生はそれに従って……。

私だけだ……私だけが、誰の為に何の為に動いていない。そうしている間にも、一夏は……！……応援……そうだ！激励の言葉くらいなら……私にだって。ならば私に向かうべきは通信室……丁度いい事に千冬さんもこの場を離脱するらしい。

千冬さんが私達に背を向けたタイミングで、瞬時に踵を返し通信室へ。そう振り返った時の事だ。私の足は、文字通り何者かに掬われた。倒れる私の視界に入ったのは、鋭い足払いをしている黒乃……。気配を察知する事ができずに、私は簡単に転ばされる。

「あうっ!?! く、黒乃……お前……!」

割と派手に転んだせいで、黒乃の足払いの意図を考えるのよりも前にまず睨む事から入ってしまった。黒乃も私に意図を伝えたいのか、すぐさま駆け寄り視線を倒れたままの私に合わせる。黒乃はいつもの無表情だが……その目は何処か、悲しそうな目をしていった。

どうして黒乃がそんな目をするのか。そんなのは簡単だ……。黒乃は、私のやろうとしている事などお見通しなのだろう。そのうえで、どうしてそんな無茶を……と、私に問いかけたいに違いない。そうすると、私の頭がスツと冴えていくのが解る。

……もし通信室に辿り着けたとしてだ。音声放送を放つとあらば、あのISは私に攻撃するかも知れない。その事で、一夏と凰が窮地に立たされてしまうかも知れない。私を取り返しのつかない事をするところだった……。だが、やはり……私には何もできないのか……!?!

「黒乃……。いや、お前の言う通りだ……。私が愚かだったらしい。」

「……………」

「黒乃……私の代わりに、一夏を助けてやってくれ!頼む……頼む……!」

「……………」

黒乃ならば、絶対に一夏の力になってくれる。妙に確信めいた感覚が宿る私は、情け

ないながらも……こうして黒乃に頼む事しかできない。しかし、黒乃は確と首を縦に振ってくれた。それだけで、私は少し救われた気分になる。

セシリアを強制連行して、黒乃は何処かへと向かう。何か考えがあるのだろうか。それを見た千冬さんは、何やら頭の痛そうな様子だ。勝手な行動を慎めと言ったばかりで、私も黒乃も我が道を行くからかも……。そうになると、私の身は危ういのかも知れん。

「はあ……まったくどいつもこいつも……。おい、篠ノ之。」

「は、はい……。」

「いつまでそうしているつもりだ?」

……そう言われてみれば、いつまでも伏せたままだった。私は埃を払いながら立ち上がると、不意に膝へと痛みが走った事に気がつく。私の膝は、青紫に変色しているじゃないか。黒乃め、もう少し優しく止めてくれれば良いものを……。い、いや……私を想ってしてくれた事だ、文句は言うまい……。

「篠ノ之……悔しいか?」

「っ?!……はい。」

「そうか……。ならばその悔しき、決して忘れるな。今度はお前が足元を掬ってやれ……意外と藤堂は脇が甘い。」

「はいっ……!」

千冬さんの問いかけに肯定を示すと、一気に悔しさが込み上げてきた。それに耐え切れなかった私は、涙ながらに返事をかえす。だが、何もできないと決めつけるのはまだ早い。きっと黒乃は、私にも他にできる事があると……そう思つて止めてくれたのだから。私にも……できる事……。

「織斑先生、避難誘導……私にやらせて下さい！織斑先生は、ここで教師陣の指揮を！」
「フツ……。ああ、それで頼む。篠ノ之の声は良く通る……。何、多少は高圧的に指示を出して構わんからな。」

「はいっ！」

避難誘導で近江先生が手を借りたいと言つていたのを思い出した。私も一生徒だが、皆の安全を確保するのも立派な仕事だ。そんな私の申し出を、千冬さんは快諾してくれた。その表情は、何処か……私を褒めてくれてるようにも見える。

千冬さんに一礼した私は、近江先生の待つ非常口へと猛ダツシュで向かう。その際には、膝の怪我など気にならないほど私は生き生きとしていたのだろう。黒乃……いつもいつも、私の目付役として苦勞をかける。いつしかお前の隣で戦える時がくれば、その時は……今まで貰つたものを返させてくれ……。

第33話

「クソツッ!」

「またハズレ!? アンタ、これで何回目よ!」

異形のISと足止めの意味を込めて戦闘継続中の織斑 一夏と風 鈴音は、とてもではないが善戦しているよ言い難い。いや、厳密に言うなればチャンスはしつかりあったのだ。白式に備わっている零落白夜さえあれば、いくらだってチャンスはあると考えても良いかも知れない。

しかしだ、単純に一夏自身の技量と、異形のISの性能とで問題が生じている。一夏はこれまで4度ほど一撃必殺のチャンス逃している訳だが、単にヘタクソという理由で外したのではない。普通だったらず回避は不可能。そんな角度と速度で攻撃を仕掛けているのだが、異形のISのスラスター出力が尋常ではない。

(……そう言えば、刹那に似てるのかもな。)

全身にある大型スラスターを吹かして回避を取る姿は、どうにも刹那を思わせる。刹那の場合は翼で、連続して何度も瞬時加速しているわけだが……どちらがより変態かと聞かれれば甲乙つけがたい。とにかく、戦法が大型スラスターでの回避優先なために、

鈴音の攪乱があまり意味を成さないのだ。

「ほら、外したならさっさと離脱！」

「わ、解ってる……！」

これも厄介と言えば厄介で、異形の I S は攻撃を回避した後は必ず反撃に転じる。しかも一撃もらえばアウトなところを、グルグルと回転しながらビーム砲を放つという凶悪極まりない攻撃をしてくるのだ。若干逃げ遅れた一夏だったが、鈴音の龍砲による支援もあつてか事なきを得た。

ぶっちゃけてしまえば、さっきからコレの繰り返し巻き返しが続く。そのおかげか、白式も甲龍もジリ貧状態。ここで最悪なのが、白式のエネルギーが尽きかけているという点だろう。白式は、長く戦えば戦うほどに戦況が不利になる。せつかくの零落白夜も、良くて残り一発使えるかどうかだ。

このギリギリの瀬戸際で、一夏はある事が引つかかって仕方が無い。集中力を欠いているというほどではないが、こう……胸の奥で違和感のような物が渦巻いているのだ。その違和感の主は、もちろん異形の I S。一夏はまるで、独り言のようにポツリと呟いた。

「なんか、機械的……な気がする？」

「は？何かあるならハッキリ言つてよ。」

「いや、なんだろうな……。アイツの動きが、妙に機械的な気がしてならないんだ。」

そんな一夏の言葉に鈴音は、ISは機械だと返す。そんな事は一夏も解っているが、言いたいのはそのいうニュアンスではない。回避を優先して行動、回避に成功すれば反撃。それら全てが、淡々と……。まるでパターンとして組まれているような。人が動かししているのならば、ああは単調にならないはず……。つまり――。

「あのIS、もしかして無人機なんじゃないか？」

「……そんなのあり得ないって事くらい解るわよね。」

「人をカワイソーな目で見るな。それくらいは解つてる……。けど。」

一夏も、ISに関する基本中の基本くらいは抑えた。それだけに、自分の言っている事がありえないというのは理解が及ぶ。しかし、こうして2人で会話をしていると攻撃が来ない。まるで自分達の会話に興味があるかのように、黙々とこちらを眺めるのみ。一夏……。だけでなく、鈴音もその点に関しては思い当たる節があるようだ。

「じゃ、何よ。仮にアレが無人機だったら――」

「手加減しなくて良い。それだけでかなり気分が違う。」

そう言いながら、一夏はギュツと雪片式型を握り締めた。零落白夜の威力を最大限まで引き上げたとして、人間相手に喰らわせるわけにもいかないのだ。絶対防御を発動させるまでなら良いが、それを通り越して生身に影響を与えかねない。そんな考えが頭の

片隅にあつた一夏は、知らぬうちに力をセーブしてしまつていたのだろう。

「手加減つて……あのね、そもそも当たらないんだから別問題でしょ。」

「大丈夫、少し考えがあるんだ。」

顔つきは真剣そのものだが、まず一夏の考えという時点でなかなか乗る気が起きない。かといつて、自分にはなにも策が浮かんでいない訳で……。鈴音は、頭は弱い方である己をとことん呪つた。それと同時に、一夏に賭けてみたくなつてしまつている自分の単純さも。

「はあ……解かつたわよ。で、アタシは何をすれば良い？」

「サンキュー、鈴。威力を最大限まで高めた衝撃砲をアイツに撃つてくれ。」

「良いけど、それこそ当たらないと思うわよ。」

「ああ、それで良い。アイツには当たらなくて良いんだ。」

乗つた以上は、時間稼ぎやら囿やら、何でもやる覚悟だつたのだが……拍子抜けな頼みだつた。一夏が妙に意味深な言い回しをしたのも氣になつたが、とりあえずは考えない事にしたらしい。それに、あまり考えている暇は無さそうだ。しばらく黙つてくれた無人機は、ついに行動を開始する。

「じゃ、任せたぞ鈴！」

「ええ、そのくらいならお安い御用！」

無人機は特に狙いを定めている様子もなく、2人へ向かって突っ込んでくる。本来ならば、迎え撃つか距離を取るかの2択だろう。しかし鈴は、頼まれたからには動かない。いつ発射されるかも解からないビーム砲すら恐れずに、衝撃砲を本当の本当に最大出力で撃つため、龍砲を前に押し出しドツシリと構える。

「よし……発つつつつ射……あ!?!ちよつ馬鹿!アンタ何やって……!?!」
「ぐうつ!?!」

龍が雄叫びを上げる予備動作かのように、鈴音は衝撃砲を溜めて、溜めて、溜めて、溜めて……いざ発射。……したと同時に、射線上へと一夏が割り込んできた。慌てて発射を中止しようとした鈴音だったが、既に発射シークエンスは完了している。いや、むしろ……一夏が絶対に中止できないタイミングを狙って割り込んだのだ。

しかし、一夏の狙いはそこにこそあった。普通にやって避けられてしまうのなら、瞬時加速ならばどうだと一夏はそう考える。だが、単純に白式のエネルギーが足りない。さすれば、外部からエネルギーを取り入れてしまえば良いと。瞬時加速は、放出したエネルギーを取り込んで再放出するという原理だ。だからこそ一夏は、その背で思い切り衝撃砲を受けた。

「おおおっ!」

最大出力の衝撃砲は、想像を絶する威力だ。ミシミシと身体が悲鳴を上げているのが

よく解かる。しかし……裏を返せばそれだけ凄まじいエネルギーであるという事。一夏は考えるというよりは、感覚的に瞬時加速を行う。そして白式に残っていたエネルギーを全て零落白夜に回す。

「でやああああつー！」

雪片式型へと集まったエネルギーは、オーバーフローして巨大な刃を形成した。この時の一夏は、初めてISに乗った際の……一体感を感じる。その感覚に身を委ね、一夏は雪片を振るつた。瞬時加速も相まってか、無人機は今度こそ避けられない。一夏の斬撃は、無人機の右腕を斬り落とすに至る……が。

「ちよつと、まだ動いてるわよ！」

「考えがあるって言ったろ！なあ……黒乃、セシリア！」

「……………」

「仰る通りですわ！」

一夏が急加速した時点で、鈴音はようやく狙いを悟った。そしてこれで決まり……かと思いきや、無人機の反応は死んでいない。焦った声で油断するなど告げるが、一夏にはもう心配の欠片もなかった。鈴音と作戦会議をしている最中、一夏はキチンと見ていたのだ……シールドをガンガンと叩く黒乃を。

『これを壊せ。』

黒乃の行動から、一夏はだいたい何が言いたいか予想がつく。もちろん無人機を倒すつもりでの零落白夜だったが、アリーナの遮断シールドを破壊するという目的も含んでいたのだ。そうしてシールドが掻き消えたと同時に、セシリアはBT4基の同時射撃で無人機を射抜く。

「……………」

無人機がたまらずよろけている間に、更に黒乃が続いた。その両手に握られているのは、日本刀型の叢雨と脇差型の驟雨。黒乃は前方に短くQクイック・イクニッションブースト I Bして無人機へと急接近……と同時に身体を丸めて縦回転。そのまま無人機の頭を飛び越すようにして、頭部を切りつける。

飛び越えたと思ったら、今度は振り返って上昇しながら交互に叢雨と驟雨を振り上げる。それを連続して何度も繰り出すと、もはや無人機の背はズタズタだ。そして後ろ回し蹴りで無人機を蹴り飛ばしてフィニッシュ……かと思いきや、今度は身体をピンと張ってロケットのように無人機へ突っ込む。

そこから単に叢雨と驟雨を突き刺すのではなく、器用にスラスタを用いてドリルのように錐揉み回転。叢雨と驟雨の切っ先は無人機へと触れ、火花を上げながら鉄の擦れる嫌な音を放つ。やがて錐揉み回転攻撃に耐えられなくなった無人機の装甲には……巨大な風穴が出来た。これにより無人機は完全停止し、力なく地面へ墜落する。

「……………」

「すげえ……なんかワチャワチャして良く解んないけど、とにかくすげえ！」

「ど、どうやったらISであんな動きが出来んのよ……。」

「まあ……黒乃さんですし？」

無人機に風穴を開けた黒乃は、そのまま飛び出すように数メートル真つ直ぐ飛行する。そして動きを完全に制止させると、ゆつくりと叢雨と驟雨を腰の鞆へと仕舞う。何か必殺技っぽい一連の動作に、一夏は目を輝かす。それに対して鈴音は頬を引きつらせ、セシリアは黒乃だから仕方が無いと言いつ出す。

「ま、何はともあれ……どうにかなつたわね！」

「そうですね、皆さんご無事なようで何よりです。」

「ああ、本当にな。んじゃ、戻ろうぜ。黒乃、そいつはほつといたら先生が何とかするだろ。」

そう、鈴音が言う通り過程がどうあれ事態は収束したのだ。完全に安心して良い状況に、アリーナ内の誰しもが笑みを浮かべる。そんな中……ただ一人、まるで浮かぬかのような無表情でいる人物が居た。こう言えば解るだろうが、それは間違いなく黒乃だ。黒乃は地面に降りて、様子を窺うかのように無人機を眺め……そして――

「……………」

「く、黒乃……？ねえ……もう完全に止まつてる……わよ……？」

「……………黒乃さん。」

「黒乃、お前は……………」

瞬時に左腰に下げている神立を抜刀、何を思ったのか無人機の左腕へと振り下ろした。さつきまで動き回っていた無人機だが、止めを刺したのは黒乃本人だ。何をそこまでする必要があるので、そう言いたくなるように何度も……………何度も……………神立の刃を左腕の関節へ叩きつける。

セシリアと鈴音が困惑する最中、一夏にはこれがどういう状況か見当が着いていた。表情はいつも通りの無そのものだが、これは……………もう一人の方の黒乃だと。つまらない、もっと戦おう、もっと私と遊ぼうと……………駄々をこねているのだと一夏は感じた。

（もう一人の黒乃って事は、これも……………間違いなく黒乃なんだ。だから——）

否定して、押さえつけて、抑止して……………果たしてそれで良いのかと、一夏は自分へ問い掛ける。一夏の出した答えは、断じて否。一夏は黒乃の背後へゆくり近づくと、神立を雪片で止める。そしてすかさず黒乃を抱きしめ、まるで子供をあやすかのように語りかけた。

「黒乃、今回はもう終わったんだ。黒乃がそこまでする事は無い……………。だから、皆で一緒に戻ろう。……………な？」

「……………」

一夏が抱き着いた途端に、黒乃は少し体が強張った。だがその力も、一夏が優しく語りかけるにつれて収まっていく。そしてスルリと一夏の腕から抜け出すと、数歩の距離を置いて神立を鞘へ戻す。カチンと神立が仕舞われる音を最後に、アリーナ内はしばらく静寂へと包まれた。

「……………」

「黒乃……………」

「ねえ一夏、アレって……………」

「……………鈴も、代表候補生なら知ってるよな？でも、それは鈴が思ってるようなのは違うんだ。」

「アタシは別に、八咫鳥がどうの言ってる奴らのつもりじゃないけど……………解かったわ。また今度話してよね。」

しばらくの間を置くと、まず動き出したのは黒乃だった。いつもの通りに、まるで何事もなかったかのようにアリーナを後にする。それに続こうとした一夏だったが、何か言いたそうな鈴音に阻まれた。鈴音が必死に言葉を選んでる様子だったため、先に一夏が言いたい事を言うておく。

すると鈴音は、その言い方で何か事情があるのだと理解した。その事に、鈴は大きな

安心感を覚える。それならば、もうここには用は無いと思つたのだろう。鈴音もヒラヒラと手を振つてから、自身の戻るべき方向へ飛んで行つた。一夏はそれを見送ると、セシリアに促されようやく動き出す。黒乃の暴走は抑えられた……が、やはり一夏の表情は晴れないままだった……。



(ん〜……この辺りで大丈夫かな?)

「はあはあ……く、黒乃さん……ここは観客席ですよ?」

セシリアの手を引いた俺が辿り着いたのは、彼女の言つた通りに観客席だ。現状は、アリーナ外への道が断たれているわけで……。逆を言えば、アリーナ内の移動はそれに可能みたい。まあ俺がここに来たには、一応の理由つてもんはある。

「安全に配慮して迅速な行動を頼む!……こらそこっ!無駄口を叩いている暇はないんだぞ!」

「あれは篠ノ之さん。なるほど、織斑先生並みに適任ですね。」

喋れないなりに、ここへと連れてきた理由を説明しようとした。すると、反対側の客席でモツピーが避難誘導をしているのが見える。だとしたら、モツピーが攻撃されかけ

るフラグは潰した……のかなあ？良いや、モッピーが頑張ってたから……俺も覚悟を決めよう。

「黒乃さん？おもむろに刹那を展開なされて……。」

「……………」

「遮断シールド……一夏さん……。……なるほど、ようやく理解が及びました。」

俺は刹那を展開してみせると、ドアをノックするみたいに遮断シールドを叩いた。そして、すかさずイッチーを指差す。どうやら俺の考えは伝わったみたいだな。別に原作に従って行動しているんだけど、作戦としてはこうだ。

零落白夜にて、イッチーが無人機ごと……。もしくは単品で遮断シールドを破壊。そうすれば、俺達の援護を阻む物は無くなる。俺もセシリーも、好きなように攻撃が可能って事さ。さて、イッチー達の様子は……。あれが無人機か否かを話し合ってる最中かな。

今を逃すと、他にタイミングはないかも知れない。そう思った俺は、イッチーに視線を送りつつ、遮断シールドを今度はガンガンと殴るくらいのもりで叩いた。すると、チラツとイッチーがこちらを見た。オッケー……。通じたね。モッピー達には悪いけど、イッチーと一番ツーカーが取れるのは俺だろう。

「黒乃さん、状況にもよりますが……。わたくしが隙を作ります。とどめは貴女が。」

「……………」

射撃型の機体であるブルー・ティアーズと、格闘型の刹那は相性がいい。セシリーの射撃が当たろうと当たらないと、牽制さえできればそれでダメージ確定だ。何故なら、刹那は一瞬の隙さえあれば俺の距離へもっていける。寄らば斬ります、寄らなくてもこつちが寄って斬ります……な機体だからね。

セシリーの返事へ頷くと、俺はいつでも競技場へと飛び込めるよう雷火を吹かす。セシリーもセシリーで、ブルー・ティアーズ及びBT4基を展開して、無人機に対して照準を合わせる。俺らとイッチー達の準備が整ったのを見計らったように、無人機も行動を開始した。

「でやああああつー！」

イッチーは、鈴ちやんの放つ衝激砲の射線上へ割り込む。無論衝撃砲は白式の背へと命中……。だが、単にそれだけでは終わらない。外部からのエネルギー……つまり衝撃砲をスラスタへ取り込んで、イッチーは瞬時加速を繰り出す。

グンつとイッチーの身体が飛び出たと思った頃には、無人機の右腕が切断されていた。……やつぱり、イッチーで止めてわけにはいかないか。ただ、予定通りに遮断シールドも取り払ってくれた。さあて、いっちょ出番ですかねえ。

「ちよつと、まだ動いてるわよ！」

「考えがあるって言ったろ！なあ……黒乃、セシリア！」

(おうよイツチー！)

「仰る通りですわ！」

イツチーはカウンターを喰らわされそうになっているが、俺達を信じて動かないのだろう。結果的に、無人機を引きつける事になっているのだから。そしてセシリーは、B T4基による同時射撃を仕掛ける。言うまでもないが……射出されたレーザーは全て命中！

さて、最後は俺だ！セシリーに言われた通り、
クイック・イクニッションブリスト
 Q I Bで一気に無人機との距離を詰める。そして今回俺が攻撃用に選んだのは、腰に装着してある叢雨、驟雨だ。俺はそれらを引き抜くと、身体を丸めて縦回転。そのまま無人機を飛び越えつつ、頭部を切り裂く。

飛び越えると、すぐさま振り返って背中を攻撃。斜め下から切り上げる逆袈裟斬りで、叢雨と驟雨を交互に振る。それを連続して、6ヒット分くらい喰らわせ……お次は、そうだなあ。最後の攻撃を再現するには、少し距離が短い。よって俺は、無人機を後ろ回し蹴りで吹き飛ばす。よしっ、この距離なら……いける！

(天・地・空、こじと悉くを制す！しんれっせんこうざん神裂閃光斬！)

距離の空いた無人機目掛けて、錐揉み回転しながら突っ込む。もちろん叢雨、驟雨の2本は両手を前に突き出す事で攻撃に用いている。まあ驟雨は脇差くらいの長さだか

ら、ほとんど当たってないんですけどねー。だが、手ごたえは十分……このままいっけー！

(だっしや、貫通！)

「すげえ……なんかワチャワチャして良く解んないけど、とにかくすげえ！」

「ど、どうやったたらI Sであんな動きが出来んのよ……。」

「まあ……黒乃さんですし？」

身体ごと突き抜けるのは無理だったが、ガリガリと叢雨、驟雨を押し当てていると、無人機の胴体を刃が貫通した。一連の動きを見て、皆は様々なリアクションをくれる。そしてセシリー……その言葉は正解だよ、俺だからこそできたんだ。

今の連続攻撃は、とある名作RPGシリーズに登場するキャラが使用する技で、神裂閃光斬という。もちろん刹那自体は操縦してるけど、技のイメージがしっかり頭の中にあるからね……。ほとんどは、イメージインターフェースの補助で動かしただ。

原作の流れからして、ここで無人機が瀕死なのは解っていたからさあ。こういう時でもない、アニメやゲームの技を再現するのは適当じゃない。とにかく、綺麗に決まったな！ やっぱり技を再現すると、なんだか気分が良いや。今度はいつチャンスがあるやら。

それにしても……本当に決着はついたんだろうね？ というのも、原作じゃあ終わった

と思つたらまた動き出して、それでイツチーが危ない目にあつちやうんだよ……。俺は高度を下げ着地すると、地に落ちた無人機を観察してみる。うくん……。心配し過ぎかなあ？

「ま、何はともあれ……。なんとかなつたわね！」

「そうですわね、皆さんご無事なようで何よりです。」

「ああ、本当に。んじや、戻ろうぜ。黒乃、そいつはほつといたら先生が何とかするだろ。」

うん、まあそれはイツチーの言う通りなんだろう。これを研究室かなんかに運んで、鷹兄あたりがバラす事になるはず。だつたら……。もう少し運搬し易いようにしておいた方が良い気がしてきた。うんうん、このままだと大人数を駆り出す事になつちやうもんね。

(そんじやあ早速……。つと！)

「く、黒乃……。う？ねえ……。もう完全に止まつてる……。わよ……。？」

「……………黒乃さん。」

「黒乃、お前は……。」

俺は左腰から神立を抜いて、無人機の左腕を削ぎ落とそうと肩関節あたりに刃を叩きつける。鈴ちゃんや、それは言われんでも解るけどさあ……。説明できないから黙つて見

てなつて。……それにしても、案外硬いな。さつきは胸部に穴開けたのに……ふんぬっ
!

ありや……? マジで切れないな、しつこいくらいに神立で斬り込んで……。
むう……いつそ、疾雷か迅雷で……いやいや、ダメだな。あの2本はレーザーブレード
なんだし、焼き切つたらそれこそ鷹兄の作業を増やしちゃうかもだ。

ならば、引き続き神立でゴーか……。そら、いい加減に斬れなさい。少しばかりヤケ
クソ気味に、頭上から神立を振り下ろす。しかし、それは無人機へと届く事は無かつた。
俺と無人機の間、雪片が割り込んできたから……つて、雪片?

「黒乃、今回はもう終わったんだ。黒乃がそこまでする事は無い……だろ? だから、皆で
一緒に戻ろう。……な?」

(おおっ……ちよちよつ、ちよつとちよつと……抱き着く必要はなくないかねイツチー
?)

そんな事を言いながら、イツチーは俺を抱きとめる。いや、言いたい事は解るよ……。
それはもう俺の仕事じゃないから、もう気にしないで帰ろうぜつて話でしょ?……いや、
解らんよ……なんで俺はこの流れで抱きしめられる必要があるのさ。

解つた……解つたから、そうだね……イツチーの言葉も一理ある。後は鷹兄が好きに
するだろうし、少し余計なお世話だったかも。ようし、それならイツチーの言う通りに

帰ろうか。そう思つて、イツチーの腕から離脱するが……誰一人として一向に動こうとはしない。

え？ いや……帰るんじやなかつたの？……先に帰つちやうよ？ 俺は左腰の鞘に神立を仕舞うと、フワリと地面から足を離して飛行を開始する。しかし、イツチーも鈴ちやんも俺を追つて来ない。……なんで？ どうして？ 俺、露骨にハブられてる……？

そ、そんな事はない……はず。大丈夫、大丈夫……他はともかく、イツチー達は俺の友達……俺の友達……。ま、友達ほど安っぽい言葉も無いですけどね……ハハッ。……ダメだ、一人で勝手に拗ねてどうするよ。んじやまあ、気にせず帰る事にしようか……。

第34話

「か、カイリセイドウイツセイシヨウガイ……?」

「……いわゆる多重人格って奴だ。」

「し、知ってるわよそれくらい!」

無人機騒動冷めやらぬが、日の変わらぬ内に鈴には黒乃の事情を話しておく事に。人が全く居ない放課後の1組にて、鈴の金きり声は良く反響する。というか、絶対に知らなかったリアクションだったろ。でもこれ以上の追及をしようものならば、手とか足が出てくるから黙っておく。

「……あれ?それ、マジ……?」

「いや、あくまで暫定的な話ではあるんだけどな。でも、黒乃を知ってる鈴なら……納得いく部分もあるだろ。」

「そうね……。今日の黒乃つてばなんか変だったし。何より機械相手だからつて、あんな事する子じゃないもの。」

もしかしたら俺達の思い違いなのかも知れない。だけど変な話で、俺はそうであつて欲しいと思つている。だつてそうじゃないと、今までIS操縦者を潰して来たのも……

全て黒乃の意志だったという事になってしまふ。もう一人の黒乃が黒乃にさせているのだと考えれば、俺としては救われる気分だ。

「いつ頃からそんな事になってたのよ。」

「正確には解からない……。けど、あるとすればISに乗り始めてから……。らしいんだ。」

「そっか……。なら、もしかするとアタシが居た時には既にそうだった可能性もあるのね。」

一応は多重人格に関して色々調べてみた。どうにも、本人にすら自覚症状がないパターンもあるようだ……。セシリアの証言からして、多分黒乃は知っている。だとしたら、本当にいつなんだ……。？黒乃との日々を隅から隅まで思い出してみるのが、それらしい記憶は蘇らない。

……。いったい何が、違う黒乃を生み出してしまったのだろうか。どうしていつもいつも……黒乃ばかりが苦しまないといけないんだ。俺達が傍に居るだけでは、黒乃には何も響かないのだろうか……。？今までやってきた事が無駄だったと言いたいのではないが、それは寂しいというか……。辛いな。

「ところでだが、中国ではどうなんだよ。……。八咫鳥の知名度は。」

「へ？ああ……。うん。それは凄いもんよ……。勿論、悪い意味の方で。」

「……そうか。」

「断つとくけど、アタシは本当に違うからね？むしろ日本で言うところの小烏党寄りよ！」

「小烏党……なんだそれ？」

ふと気になって鈴に問いかけてみたが、やはり中国でもそうらしい。落胆する俺だったが、鈴が小烏党なる発言をしたのが引つかかる。今度は俺が質問する番で、小烏党についての解説を目で訴えた。すると鈴は、何か藪から蛇を出したような……そんな顔をしてから語り出す。

なんとというか、想像をはるかに超えた集団だった事には違いない。小烏党とは、黒乃を女神と崇拝しているネット団体だそうだ。黒乃を崇める理由としては、黒乃がIS操縦者を潰してきたから。つまるところ、自分達に代わって女尊男卑に染まった輩を成敗して貰っている気分なのか？

なんなんだそれは……なんて無責任な連中なんだ。自分達はネットで匿名の書き込みをしているだけの癖に、勝手に黒乃を祀り上げる。黒乃の気も知らないで、黒乃が自分と闘っている事も知らないで……何が女神だよ。その小烏党って奴らは、間違いなく黒乃に迷惑をかけるだけの存在だ。

「……黒乃は、そいつらの事を知ってんのか？」

「さあ……？アタシにはなんとも言えないけど、黒乃つて自分の事に疎い部分はあるわよね。あの子、下手すると自分が美人な自覚すらなさそうだわ……。」

それは確かに、思い当たる節はいくつもある。スカート穿いてるのに腰から屈んでパンツ丸見えとか、割とよくある話だ。指摘すると隠すから、一応の恥じらいはあるって事だろう。まあ別に、黒乃の下着なんて洗濯してたわけだし……騒ぐことも慌てる事もないが。

「とにかく！アタシは黒乃支援派つて事よ。小烏党つてのはまあ……言い過ぎかしらね。」

「そうか、解った。けど鈴……中国で知り合いとかが潰されたりは……。」

「ああ、良いの良いのあんな連中。この際だから言つとくけど、アタシにとって黒乃に勝る大事な人なんてほとんどいないから。」

ほとんど……な。そのほとんどには、親とか俺や弾あたりも含まれてるからこそだろう。しかし、随分と鈴らしい言葉ではある。まあ……1年で代表候補生になったらしいし、頭角を現した鈴にはいろいろとあつたに違いない。

「黒乃が多重人格かあ……。なんとか力になつてあげられないかしら。」

「状況は最悪だよな。黒乃は自分から助けを求められない……。そのうえ、黒乃が俺達に知られる事を拒んでる。」

「……………」

失語症さえなければ、父さんと母さんが居てくれさえすれば……こんな事態にはならなかったのだろうか。黒乃の置かれている状況をよほど悲痛に感じているのか、ついに鈴は黙ってしまふ。俺達に出来る事は、何も知らないフリしていつも通りに過ごさしかないのか……？

「でも、黒乃がアタシらにどうにかして……助けてつて、そう言ってくれた時は……。」

「ああ、それは勿論……俺達のやれる事を全力でしてやろう。」

そのどうにかしてが、黒乃にとっては難しい。だけど、それさえクリアしてしまえば……俺達はいっただつてお前の味方だからな。何か解決策が浮かぶまでは、やはり待ち続けるしかないか……。とにかく、黒乃の事情は鈴に受け入れてもらえたようだな。後は……。

「鈴。」

「な、何よ……急に改まっちゃつて。」

「この間の事、悪かつた。」

「アンタが折れるなんて珍しいじゃない……。どういう心境？」

「いや、賭けはお流れになつちまつたし……。俺も悪い事言つたのは確かだしさ。」

「わ、解れば……。じゃないわよね……。アタシの方こそ、ゴメン。」

負けた方が先に謝るって事だったが、無人機のせいではなかった事も同然だ。かといって、そのままなあなあにするのもいただけくない。鈴は多分だけど、そんなのは忘れていたようだ。それでも、俺が謝れば向こうも謝ってくれた。うん、これで丸く収まったんじゃないか？

「それじゃ、俺は行くぞ。」

「なんか用事でもあんの？」

「ああ、少し……黒乃の様子が気になってな。そうだ、後で黒乃と食堂に向かうから、皆で食べようぜ。」

「あ、それ良いわね。解ったわ、なるべく早く来てよね！」

あの時は落ち着いてくれたが、まだ情緒が不安定かも知れない。とりあえず鈴と話をするのを最優先にしたが、やっぱり黒乃の様子をもう一度確認しておくべきだ。去り際に飯時の事を思いついたが、鈴は快く乗ってくれて、元気に教室を去って行った。

さて、俺も黒乃を探そう。この時間なら……部屋にいる確率が高いよな。寮の方まで歩を進めると、寮と教室棟の渡り廊下に差し掛かる。そこには想像通り黒乃の姿が見えた。しかし、それとは別で余計な奴の姿も……。いつものニヤけた面が癩に触る……近江 鷹丸だ。

やはり俺は、黒乃とあいつが一緒にいると……冷静ではいられない。それは多分、奴

が黒乃に変な事をするであろうという危機感からだ。早いところ、黒乃から近江を引っぱがしてしまおう。俺は少しだけ音量を大きめにして、黒乃の名を呼んだ。



(はあ……なんだか今日は疲れたなあ……)

無人機の乱入があつたのだけれど、学園の運行は平常通り……。と言つても、ほとんど自習だったんだけれど。つてか、それならいつそ閉校で良い気がする。だけどこれがまだまだ序盤と思えば気が重いや。これだから代表候補生にはなりたくなかつたんだけど……。

今日はアニメ観たりゲームせずにボタンキューしとこう。なんかもう……ご飯もいかな、面倒だし。面倒臭くて飯抜きとか、そんなん前世では良くあつた事だもの。フカフカのベッドが俺を呼んでるぞくつと。……の前に、俺を呼ぶ超えが聞こえた。

「藤堂さん、少し良いかな。」

「……………」

「うん、時間とかは大丈夫かい？」

「……………」

俺に声をかけたのは、鷹兄だった。ずっと姿が見えなかったけど、やっぱり無人機の調査でもしてたのかな。別に用事はないし、むしろ暇なくらいだよ。鷹兄の俺に対してある用事は、無視する訳にはいかん。俺はこの人の部下みたいなものだしね……。

「刹那の事で幾つか質問させて欲しいんだけど……。」

「……………」

「今日やってたあの動き、即興かい？それとも、技のイメージは前からあった？あくと、後者の質問にイエスカノーで。」

今日……？ああ、はいはい神裂閃光斬の事ね。イツチーがワチャワチャしてるって評してたけど、鷹兄が何か気にするような事でもあったのかな。あく……無茶な動きは止めてくれとかかも……。で、質問に答えるとすれば……イエスだ。俺は首を縦に振った。

「んく……そつか。じゃあ、他にも隠してる……ってどうか、今日みたいな技ってまだあるかい？」

お、次もまた良く解らない質問がきたぞ。鷹兄の言う通りに、隠してるってほどじゃないんだよね。でも……本当に使うタイミングなんてほとんど無いからさ。ただ、試してみたいな、再現してみたいな……って技は山ほどあるよ。だからこれも、イエスカな。

「へえ、そうかい。」

「……………?」

「ああ、ごめんね。何のための質問か解らないよね。もし決まった動作のある技なんだったら、刹那にインストールさせておいた方が良いんじゃないかと思ってさ。」

なるほど、鷹兄の質問にはそんな意図があったのか。確かにゲーマー仕込みの指捌きと、妄想癖ありきのイメージインターフェースでなんとか形にしたけど、あらかじめ刹那に覚えさせておいた方が操作に補正がかかって安定するはず。で、その相談に来たって事ね。

「もし藤堂さんが構わないなら、全部記録させてもらって良いかな? データ化とかインストールは勿論僕の仕事として……………」

「……………」

「ありがとう、助かるよ。じゃあ……………今週の土曜日は開けておいてくれるかい? 君も日曜日を潰されるよりは良いだろうし。」

鷹兄の頼みは、むしろ大歓迎なくらいだ。すぐさま首を縦に振ると、鷹兄は予定の話を切り出した。まあ……………土曜日もI S学園は半ドンだもんね。それを言うと、鷹兄の言う通りに日曜日がフルで休みの方が俺としては良いかな。これにも首を縦に振って肯定……………つと。

「うん、了解。場所は研究棟の第13区画になるかな。……………解るかい?」

「……………」

「そつか、まあ君らは用事はないもんねえ。それなら、放課後になつたら一緒に向かおうか。」

研究棟とか、足を踏み入れた事すらない。鷹兄の質問で、初めて首を横へと振つた。しかし鷹兄の言い方……何か引つかかるなあ。もしかして、近江重工が1区画丸々使つちやつてるとかないよね？……流石にそんな我儘が通るはずもないかあ……ハハハ。

「じゃあ……話はこれくらいかな。引き留めちやつてごめんね、今日は君もゆつくり休んで——」

「黒乃！」

「やあ、織斑くん……こんにちは。」

「……………」 黒乃、鈴が先に食堂で待つてんだ。あいつ1人は可哀想だからさ、先に行つててくれないか？」

鷹兄の言葉を、まるで遮るかのようにイツチーが割つて入つて来た。まあ……話は済んでるみたいだから良いけども。んでもつて、鈴ちゃんが食堂で待つてるって？あ……飯は抜こうと思つてたけど、そういう事なら話は別だな……。任せろイツチー、鈴ちゃんの面倒はちゃんと見といてやるからよへへッ。

「……………」

「うん、明日も遅刻の無いようにね。」

「また後でな、黒乃。」

鷹兄に深々と頭を下げてから、食堂目指してズンズンと歩を進めて行く。……あれ？ イッチーはどうして俺と一緒に居かないんだろ。あれか、鷹兄に用事でもあったのかもな。気になつて振り返ると、イッチーと鷹兄は何か話してる。やっぱそうか、ま……そんな事より鈴ちゃん鈴ちゃん……。やっぱ女の子が待つてるつて思うとテンション上がる。そのまま俺は上機嫌で食堂へと急いだ。



「えっと、君は何か僕に用事だったのかな？」

「ああ、あるぜ。……黒乃について話がある。」

去る黒乃の背中を見守っていた2人だったが、ある程度の距離が開くと鷹丸がチラリと一夏を見ながらそう聞いた。今は人気は自分達意外に見当たらないため、常々質問がしたかった一夏にとつてはまたとないチャンス。一夏が鷹丸に向きなおると、それに倣つて鷹丸も一夏を正面で捉える。

「アンタ、黒乃をいつたいたいどうしたい？」

「質問の意図が見えないねえ。それを聞いて、君はどうするつもりなのかな。」

「……それは、俺が判断する事だ。」

「そう？じや、単刀直入に言おうか……。藤堂さんは、僕のお嫁さんにしたい……。つてところだね。」

「っ!？」

どうしたいのかと問われれば、鷹丸からすればこう答えるしかない。何故なら鷹丸は、心の底から黒乃の事を好いているから。それは純度100%混じり気の無い恋慕なのだ、日ごろの言動より鷹丸を良しとしない一夏にとっては……。聞き捨てならない言葉だった。

「そんな事……。認めてたまるかよ！アンタみたいにヘラヘラした奴に、黒乃を守れるはずがない！」

「うん、そうだね。でも君が言っているソレは、力ありきの話でしょう？」

「……………」

「彼女は、僕に守られる必要がないほどに強い。そんな事はとつくの昔に解つてる。だから僕は、僕だからこそ出来るやり方で彼女を守っていくつもりだよ。」

鷹丸が言いたいのは、力でなく立場で黒乃を守るといふ事。近江重工を抜きにしたつて、鷹丸は科学者として確実な名声を物にしている。鷹丸個人の立場に近江重工という

立場が加わり、ほぼ隙は無いと言って良い。鷹丸は、覚悟なんてとつくに出来ていたのだ。

「彼女を守るためになら、なんだってやってみせるさ……。彼女さえ幸せであつてくれるなら、僕に何があろうと痛くも痒くもない。それより、僕の方からも質問いいかな？」

「……なんだよ。」

「君は、何をそんなに怖がつているんだい？」

一夏は鷹丸の言葉に思い当たる節は無かった。それなのに、何故か凶星を突かれるような感覚が胸を過る。鷹丸の言葉に対して、どうしようもなく焦りや不安が滲み出てきてしまう。しばらくの間に一夏が出来た事と言えば、とにかく鷹丸を睨むくらいだった。

「何が言いたいんだよ……！」

「だってそうでしょう？君、僕が藤堂さんと話しているのを見て……。それで慌てて話しかけてきたよね。僕はもう用事は済んだし、あのまま立ち去るつもりだったんだけどなあ。」

「……………」

「フツ、そんなに僕と藤堂さんが仲良くしてるのが嫌かな？」

そう言われると、またしても一夏の胸に見破られたかのような感覚が。一夏は、まる

で……悪戯したのがばれた子供のような様子だった。嫌かどうかで聞かれれば、それは確かに嫌なのだろう。だが、鷹丸の言いたいソレではないと、一夏は自分に言い聞かせた。

「アンタが、もう少しまともな態度さえとってくれば……。」

「言っておくけど、僕は校内で藤堂さんを口説く気なんてないよ。これでも今は教職だからねえ。」

「……………」

「ま、プライベートでも許されないって言われちゃうとそれまでだけ……。これらの材料から推測するに、君は僕に……いや、まだ止めておこうか。」

ああ言えばこう言う、鷹丸はそれを体現したかのような存在だ。よほどの事では折れないし、反論に反論を重ねる気概がそんじよそこの人間とはわけが違う。一夏のまるで苦し紛れの言葉にも、しっかりと結論を出そうとして……止めた。

「なんだよ、言いたい事があるならハッキリ言え！」

「いやあ、ゴメンね。もう少し君の様子を見てからにしようかなと思つてさ。決着をつけるのは……ね。」

「……………」

「まあとにかく、君はもつと自分と藤堂さんに向き合う事をオススメするよ。」

鷹丸はそう言うと、白衣を翻して何処かへと向かおうとする。話はまだ済んでいない。一夏はそう思っているが、何故か……鷹丸を止める事が出来なかった。それは、鷹丸の言葉が脳内で渦を巻いているから。自分と黒乃と向き合え……意味は解るようでは解らない。

「クソツッ！」

歯痒い。一夏の悪態には、それしか込められていなかった。飄々とした鷹丸に、のりくらりと躲され……。しかし、一夏は単に鷹丸だけに苛立っているのではなく、何か自分にも同じ感覚を抱く。だが、考えても考えても……答えらしい答えが浮かばない。(いや……考えるだけで無駄か。アイツに踊らされちまうのがオチだろ。)

それまで難しい顔をしていた一夏だったが、大きく息を吸って吐くと潜めていた眉は元の位置へと戻った。そうすると、いつまでこうしても仕方がない。一夏は、頬を叩いてから食堂を指して歩き出す。それこそが鷹丸の指摘したかった事なのだが、一夏はそれに気づかない。

いや、気づかないのではなく……一夏は、無意識のうちに見て見ぬふりをしているだけなのだ。黒乃に関わるあらゆる物事から、一夏は目を逸らしている。一夏自身がそれに気がつかない限りは、鷹丸に一生敵う事はないだろう……。

第35話

IS学園に入学して早くも2か月。6月に入ったという事で、季節は徐々に夏へと移り変わろうとしている。6月ねえ……嫌いな時期だよ、梅雨があるから。何が大変つて、髪の毛の手入れだ。梅雨時期は髪が広がるわ、はねるわで面倒極まりない。だから短髪が良いのに、イッチーとちー姉が長い方が良いつて言うからさあ……。

そんな嫌いな季節ではありながらも、今日は外出中である。目的地は五反田食堂。別に弾くんと遊ぶ約束をしてるでもなく、じっちゃんのご飯が食べたくなっちゃつて。いや……美味しくてさあ、じっちゃんの出す手料理。個人的には、もう少し愛想よくしてくれれば満足だ。

さて……見えて来たぞ。うーん……この外観は、いつ見てもTHE・食堂つて感じで落ち着く。店には準備中の看板が立ててあるが、俺、イッチー、鈴ちゃんはいつでもウエルカムとの有難い言葉をいただいている。という訳でして、お邪魔します。

「あ、ごめんささい。今準備中……つてあーっ！お姉……久しぶりー！元気だった？」

五反田食堂の戸を開けてみると、ラフな格好、赤髪が特徴的な少女が俺を出迎えた。この子はご存知？弾くんの妹の……五反田 蘭ちゃん。俺の何処を気に入ってくれた

かは知らないけど、知り合った当初からお姉と呼ばれて慕われている。蘭ちゃんは客が俺だと解るや否や、まるで猫のようにじやれついてきた。

ふむふむ……やっぱり少しずつながらも、しつかりと育ってるねえ蘭ちゃん。むふ、少女の発育途中の胸板……むふふふ……！おっと、いかんいかん……いつもの悪癖が出てきたな。え、ゴホン！しばらくはされるがままの俺だったが、蘭ちゃんをやりわりと引き剥がす。

「お姉、代表候補生になってから来てくれないんだもん……寂しかったよー。」
「……………」

「そんな頭下げなくたっていいけど……。あ、そうだ……お姉はIS学園に通ってるんでしょ。どんな感じなの？」

いや、落ち着きなよ蘭ちゃん……。その手の質問は俺にしたところで答えてあげられないよ。まあ……女の子の憧れの的みたいなもんだし、気になるのが当たり前か。そうなる印象くらいは解からせてあげたいな。ん……刹那に記録映像とか無かったっけ。俺が首元のチョーカーを弄ろうとすれば……。

「おう蘭、そのへんにしときな。嬢ちゃんが困つてら。」

「へ……？わ、ゴメンお姉……。つい興奮しちゃって。」

「わりいな嬢ちゃん。なにぶんお転婆なお年頃だよ。」

厨房の奥から現れたのは、筋骨隆々なナイスミドル……ってかシニア？で五反田食堂の店主……五反田 厳さんである。俺はじつちゃんって心の中で呼ばせてもらってるが、喋れたら面と向かって言えた気がしない。……だって怖いもん。いや、厳しいながらも良い人だつてのは知ってつけどき……怖いんだもん！

「私も子供じゃないよー！」

「うるせえ、俺からすりゃいつまでもガキだ孫娘。んで嬢ちゃん、あのバカに用事か？」
(いいえ、全然。)

蘭ちゃんは可愛らしくじつちゃんに抗議するが、そんなのは全く通じないらしい。適当にあしらって俺の相手をするもんだから、蘭ちゃんは不服そうにむくつと唸っていた。それで、あのバカ……ってのは十中八九で弾くんの事だろう。別に弾くんに用事じゃないですけど。俺が首を横に振ると、2人は微妙な顔つきになった。

「お兄……ドンマイ。」

「先が思いやられるぜ……つたく……。」

え、何？俺なんか悪い事言ったかな。別にこんな嘘つくまでも無いし、用事が無くてもご飯食べに来たら自然に会ったりするだろうし……。蘭ちゃんはともかく、じつちゃんまでこんな感じになるのは珍しいな。いや、天地がひっくり返っても見られない……つてくらいには貴重かも。

「じゃあ何か、単に飯を食いに来てくれたのかい。」

(まあ……はい、そうですね。)

「おつ、美人に言われりや冥利に尽きるってモンよ。いつもの良いんだろ？ちよつと待つてな。おい蘭、あのバカも呼んでやれ。」

「は〜い。」

俺が単に食事に来たつてだけでも、じつちゃんはなんだか嬉しそうだ。その点……この身体つて男に対しては便利だなあつて思い知らされる。じつちゃんにも逐一美人つて呼ばれるもんなあ……。うん、ポテンシャル高くてありがとう黒乃ちゃん。さて、蘭ちゃんは階段の下から弾くん呼びかけて……。

あ、反応が無いから登つてつたぞ。……つてあれ？これつてもしかして、今日が原作におけるあの日？しばらく耳を澄ませていると、何やら蘭ちゃんの驚いたような声が……。ああ、コレ確定だ……。ITCHーが遊びに来てるみたい。やがて、ドタバタと騒がしい足音と声が近づいて来る。

「飯の後どうするよ？」

「ん、適当に街の方でもブラブラ……つて黒乃!？」

ハハッ、やつぱり兄と妹だねえ弾くん。本人達に言えば否定されそうだけど、やつぱり良く似た2人だ。弾くんは俺を見つけるなり、蘭ちゃんとそつくりなりアクションを

見せてくれる。イツチーの方もサプライズでもあったような表情……ってか、俺が居るんだからある意味サプライズか。

「もしかして……俺に会いに来てくれたか？」

「んなわけないでしょ、お爺ちゃんのご飯を食べに来たんだった。」

「聞いたか一夏。いや〜お互い冗談の通じない姉ないし妹を持つと苦労——」

「なんか言った？」

「何でも無いです。」

「仲良いな、お前ら。」

ほんとそれな。もうあれだ、2人で漫才師でも目指しちやいな。冗談抜きで良い線行くとと思うんだよね……オジサンは。でもやっぱり本人達は不服みたいで、声をそろえてイツチーの言葉に反応を示した。ほらさ、そういうところが仲良い証拠だよ。いやはや、微笑ましいねえ。

後はまあ……原作通りの流れかな。蘭ちゃんが勝負服に着替えてんだけど、イツチーが持ち前の鈍感で自分の為だとは思わず……。ああ……蘭ちゃん可愛いなあもう。道半ばだったが、原作でイツチー達が進級したら下級生組って事でキチンとヒロイン入りしたんだろうなあ……。

「ま、立ち話もなんだし座らないか？」

「……俺んちな。全面的に賛成だけど。」

「……………」

あ、いかな……急いで弾くんの隣に座らないと。そうすれば、必然的に蘭ちゃんはイツチーの隣だ。弾くんが席に着いたのを見計らって、滑り込むようにその隣を確保。蘭ちゃんは俺の意図を察したらしく、パアツと嬉しそうな表情を見せる。

「出来たぞガキども。食え。」

「で、出たっ!? 業火野菜炒め……大紅蓮!」

「黒乃……。極度に辛いのは止めとけて、いつも言ってるだろ?」

「は、ははは……。」

俺以外の3人のメニューは、どれも同じで日替わりランチだ。だけど俺が注文つか、じつちゃんがいっつも言ってるのがコレである。好きな食べ物と聞かれれば、俺は間違いなく激辛料理だと答える。いつも業火野菜炒めばかり食ってるもので、もしかして辛い物が好きなのではと察してもらえたんだよね。

でも、残念な事に通常バージョンでは全然辛さが足りてない。どうにかこうにかその事を報告出来たので、俺用に業火野菜炒め・大紅蓮を作成してもらうに至る。もはや真つ赤な野菜炒めを目の当たりにした弾くんは驚き、イツチーは爺臭く俺を注意し、蘭ちゃんは乾いた笑みを浮かべた。

「じゃ、じゃあ……食うか？」

「おう、いただきます。」

「冷めねえうちにな。」

イツチーの音頭と共に、俺達は一齐に両手を合わせていただきますを言う。さて、俺も真つ赤に染まったキャベツを口に頬張り咀嚼する。おおふ、そうそう……これこれ！なんかもう……一口食べた瞬間から汗が噴き出てくるこの感じだ。実際に体温は上がらないが、カプサイシンの効果で灼熱感が……。耐えられなくなった俺は、Tシャツの胸元を掴んでパタパタさせながら食べ進める。

「……………」

「顔にハエが止まってるよお兄。」

「いつてえ！おい、いくらなんでもそれはやり過ぎだろ!？」

突然というか、蘭ちゃんはおもむろにメニュー票を引つ掴みそれで弾くんの頬を殴打する。パアン！と気持ちいい音が鳴るこの感じ、ちー姉の出席簿アタックに良く似てるな。だけど、じつちゃんの前でそんな騒ぐとさ……。イツチーも関わらない方が良くないかと思ってるのか無言だ。

しかし、ハエね……食堂に入つて来るとはなんと不届きか。……むっ、ホントにいたな。メチャクチャ小さいが、蘭ちゃんはこれを瞬時に視認したのか……？潰せるかどうか

か一応は試してみようかな。不規則に動くハエを片手で小さく狙いを定め……そこだ！

「「?」」

「……やるな、嬢ちゃん。」

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！『ハエを掴んだかとおもったら、そいつはオタマだった』な……何を言ってるのかわからねーと思うが（ry……これはアレだ、ハエを掴もうとしたら、オタマの方から俺の手の中に飛び込んで来た感じだな。我ながら神がかったている。

それにしてもじつちゃん……ばつちし弾くんの頭を狙ってるな。それならまあ……弾くんも守れて一石二鳥かもね。えーつと、このオタマをとつとじつちゃんにこのオタマを返す事にしよう。箸を置いて立ち上がった俺は、オタマの肢をしつかりと握って、厨房のじつちゃんへ近づくと、

「へへッ、代表なんちゃらってのは伊達じゃねえな。」

「違います。」

おろ、声出た……本当に最近はず調子がいいな。言葉通りに違うんだよ、じつちゃん。代表候補生とか関係なしに、単なる偶然だから。だけど、残念ながらその説明はできそうにもない。俺は小さく会釈をすると、元の席へと戻った。俺の中途半端な言葉が気に

なるのか、じつちゃんは終始不思議そうな様子だった。

「黒乃、ありがとな。それとその……悪かった……。」

席に戻るなり、弾くんにそんな事を言われた。感謝の方は解るけど、なんで弾くんは俺に謝ってんのかな。まあ……何やら知らんが、どっちも気にしなくていいって。俺は優しくゆつくりという事を意識して、首を横へと振った。それを期に、再び業火野菜炒め・大紅蓮に手をつけ始める。うんうん……これだけで満足な休日になったな。

1つ気になるとすれば、イツチーと弾くんがじつちゃんに呼ばれた事かな……。イツチーはすぐに戻って来たけど、弾くんはしばらくじつちゃんに拘束されっぱなしだ。何の相談かは知らないけど、やっぱりそれも俺が気にする事じゃ無いんだろう。さーて、次はいつ足を運ぼうかな……。。



「まったく蘭の奴、年々俺の扱いが雑になってくぜ。」

「弾も余計な事を言うからだろ？」

日曜日といえば、多くの人にとつて天国のような響きだろう。俺の家は食堂経営という事で手伝われることも多いが、今日は一夏が遊びに来ているので免除だ。爺ちゃん

は理不尽な事も多いが、キチンと筋は通してくれる。久しぶりに一夏がウチを尋ねるというのも大きいのかも……。

で、俺が何をブツブツ言ってるのかと聞かれれば、妹の蘭が年を追うごとに狂暴化してるって話だ。今さっきだって、一夏が遊びに来るのを言っただけで怒られた。蘭が一夏を好きなのは知ってたけど、別に言う必要もないし……ラフな格好してたのはお前の責任だろ。

「……って言えばどれだけ楽か……。」

「どうかしたか？」

「……何でもねえ。」

「そうか、なら別に構わないけど。早いとこ降りないと厳さんが怖いぞ。」

本当、微塵の反論も許されない俺の立場とはいったい……ウゴゴゴゴ……。はあ……一夏の言う通り、蘭の上をいって爺ちゃんが恐ろしいから溜息が止まらねえ。鉄拳制裁が下される前にさっさと下へ向かおう。割と築年が長い家なため、ギシギシと階段を軋ませながら歩を進める。

「飯の後どうするよっ……」

「ん、適当に街の方でもブラブラ……って黒乃!？」

「……………」

階段を降りながら今後の予定を相談しようとしていると、いつ見ても変わらぬ黒髪美少女がそこに居た。会うのは久しぶりになるが、相変わらず綺麗な事だ。IS学園でもやっぱり黒乃と身近な一夏が羨ましいぜ……。しかし、あまりにもいきなりの登場に一夏も面喰つてる。

「もしかして……俺に会いに来てくれたか？」

「んなわけないでしょ、お爺ちゃんのご飯を食べに来たんだって。」

「聞いたか一夏。いや〜お互い冗談の通じない姉ないし妹を持つと苦労——」

「何か言った？」

「何でも無いです。」

「仲良いな、お前ら。」

一夏のツツコミ待ちだったのだが、ちゃっかり勝負服へ着替えよった妹からキツイお言葉が飛んで来た。それに対して更に冗談を重ねてみるが、やっぱり一睨みされておじやんだ。一夏が目の前でもお構いなしなのを見ると、蘭を選べば力カア天下一直線だな……。あれ？鈴を選んでも同じような気がするが。

「ま、立ち話もなんだし座らないか？」

「……俺ちな。全面的に賛成だけど。」

「……………」

一夏が着席を促すと、4人掛けのテーブルへと腰を掛けた。するとどうした事だろうか、黒乃が少し急いだ様子で俺の隣の席を確保するではないか。くつ、黒乃……もしかして、俺の隣が良かったのか?……なんて淡い期待を寄せたのも束の間……俺の正面に居る蘭が嬉しそうな顔をしている。

ああ……そうか、黒乃は蘭に美味しい思いをさせようとしてくれたのかな……。ハハッ、解つてた解つてた……期待した俺が馬鹿だった。いや、それよりも前に……黒乃と隣だからつて何が起きるといふ事も無いだろう。数馬じやあるまいし、調子に乗るのは止めとかねーと。

「出来たぞガキども。食え。」

「で、出たっ!?業火野菜炒め……大紅蓮!」

「黒乃……。極度に辛いのは止めとけて、いつも言ってるだろう!」

「は、ははは……。」

爺ちゃんがぶつきらぼうにテーブルへ並べたのは、3つの平凡な日替わりランチと……地獄のように真つ赤な野菜炒めだった。爺ちゃんは、様々な要因から黒乃の事を大層気に入っている。それで黒乃の為に開発されたと言つて良いこのメニューは、業火野菜炒め・大紅蓮。香辛料マシマシ、辛いと言う概念を超越した新たな扉が開かれる一品だ。

見るのが久しぶりなせい、少しオーバーなりアクションをとつてしまう。一口食べさせてもらった事もあるが、それはもう悶絶必至だった……つてかもう、ゴツホゴツホ！蒸気が目と喉に沁みる……。これ食べても黒乃は動じないからすげえ。

「じゃ、じゃあ……食うか？」

「おう、いただきます。」

「冷めねえうちにな。」

動揺はまだ冷めないが、とにかく食事にしよう……。うん。爺ちゃんが傍にいる故、しっかりといただきませすしてから箸を取った。……。黒乃がとんでもないペースで食べ進めてるが、特に気にしないでおく……。事は出来なかった！辛さのせい、か熱いようで、黒乃はシャツの胸元をパタパタさせていたのが目につく。

黒乃も女の子にしては身長がある方だが、それでも俺の方が高い。つまり上から見下ろすような形になる俺には、必然的にブラが見えてしまうのである。悪い事だとは思っていても、視線が釘付けになってしまう。その豊満なバストは微妙ながら汗ばんでいて、とてもじゃないが官能的で……。

「……………」

「顔にハエが止まつてるよお兄。」

「いつてえ！おい、いくらなんでもそれはやり過ぎだろ!？」

無言で手も止まっていたせいだ、蘭には普通バレてしまったらしい。だが……メニユーで顔面をひっぱたくのは絶対により過ぎだ。しかもつまらねえ嘘つきながら……！なんだその目は、まるで俺こそがハエとでも言いたそうじゃねえか！俺が悪いのは認めるが、流石に俺だって黙ってるわけにも――

「「!？」」

「……やるな、嬢ちゃん。」

黒乃が瞬時に身を乗り出したかと思つたら、その手に握られているのはオタマだ。しかもそのオタマは、黒乃がキャッチしなければ完全に俺の頭へと当たっていた事だろう。オタマを投げた張本人である爺ちゃんは、感心した様子だ。黒乃はオタマを返すつもりなのか、立ち上がって爺ちゃんへと近づいて行く。

「へへッ、代表なんちゃらつてのは伊達じゃねえな。」

「違います。」

しつかり柄の部分の爺ちゃんの方に向けるあたり、黒乃の細かな気遣いが窺える。しかし……オタマを返す際の違いますってのは、どうにも会話が噛み合つてねえような気がすんな。爺ちゃんもそれが気になるのか、ちよつとこつち来いなんて言つて俺を呼びつける。

「さっきの言葉、聞いてたか？」

「ああ、聞いてたけど……。」

「どういう意味だと思うよ。」

「いやあ……俺に聞かれても。こういう時は、素直に一夏を頼った方がいいと思うぜ。」

残念ながら、断片的な黒乃の言葉を全ては理解してやれない。せつかく喋ってくれたのに、大変申し訳なくはあるんだけど。生後0歳からの付き合いらしい一夏を頼るのが得策だと判断した俺は、爺ちゃんと同じように一夏を呼ぶ。……睨むな妹よ、文句なら俺じゃなくて爺ちゃんにだ。

「あの……どうかしました？」

「嬢ちゃんが、俺にオタマを返す時によ……違いますつつつたんだ。」

「それがどういう意味なのか、解説してくれねえかな。」

爺ちゃんが一夏にそう質問すると、小さく唸って考え込む。いろいろと候補があるのか、あーでもないこーでもないと思ってる様子だ。何もそんなに真剣に考えることあねえと思うんだけどな。まあ……何気に黒乃の事を理解してやるのがポリシーなのかも知れん。

「オタマは人を傷つける為の物じゃないって、そう……言いたかつたんだと思います。」
「……………」
「そうか、それで違いますか……」。わりいな、手間あ取らせた。」

なるほど、いかにも黒乃らしい。オタマは料理器具……それを人を攻撃する用途で

使つてほしくないってこつたな。この店を気に入つてくれている黒乃にとつて、それは前々から気がかりだったのかも知れねえ。席へと戻つた一夏を追おうとするが、どうにも爺ちゃんの様子も気になった。

「爺ちゃん、さつきからどうかしたのかよ。」

「……弾。嬢ちゃんは好きか?」

「は、はあ!? な……なんだよ、いきなり意味解かんねえ事言つて。」

「いいから答えやがれ。」

黒乃は常に自分の事より他人を優先するような奴で、人の為に頑張れる子で……見ると応援したくなるっつーか。しつかりしてると思えば割と天然で、無表情でワタワタしてる姿がまた可愛いつつーか……。おまけに見た目も綺麗で家事等はそつなくこなすで……。完璧美少女だ。まあ有体に言えば……。好きです……。だけど、俺が黒乃にアタックする事はないだろう。なんてつたつて黒乃の瞳には、一夏しか映つてねえから。

「……仮に好きだとして、結局は何が言いてえんだ。」

「必ずモノにしやがれ。嬢ちゃんなら店の看板も安心して預けられらあ。」

「いや……。黒乃は代表候補生で、夢を追つてIS学園に通つてるんだぞ?」

「店やりながらも選手はやれなくもねえだろ。」

「この爺さんは……。正気か? つまるところ、藤堂 黒乃から五反田 黒乃にしろつて言

いたいらしい。……それはとてつもなく良い響だが、黒乃が何の為に代表候補生まで上り詰めたと……。はあ……前々から気に入ってたのは、食いつぶりだけじゃなかったらしいな……。

黒乃には数回だけ厨房に立つてもらった事がある。その時の手際と料理の上手さ及び美味さといったらなかった。あの頃から爺ちゃんは黒乃に目をつけて、さっきの言葉が決定打になったんだろう。だけど俺は、やっぱり黒乃を応援してやりたい旨を伝える。

「男らしくねえ……。それでも俺の孫かバカタレ。」

「ぐっ……。……女々しいのは解ってつけど、俺が決めた事だからよ。」

「そうかい。後……食事中に騒ぐんじやねえ。」

「うぐっ！いつつ……。……！じ、時間差かよ……。……。……。……。……。」

「嬢ちゃんに料理人の基本を思い出させてもらったんだ。これからは料理器具では殴らねえ。」

俺が心に決めた事だと言えば、爺ちゃんは口出しする事ではないと解ってくれたらしい。それで完全に用事は済んだと思つて振り返ると、頭上から鉄塊が降つて来たかの如き衝撃が走る。再度爺ちゃんの方に向き直ると、青筋の入りそうな力で拳を握っているではないか。

……これは、何か厄介な事態になってしまったかもな。後はさっさと食えなんて言うて、爺ちゃんはまだで野良犬でも追ひ払うかのようにシツシツと手を動かした。呼んだの爺ちゃんだろうに……。まあいいや、確かに爺ちゃんの言う通りではある。俺は涙目になりながら、ノロノロと自分の席へ戻った。

第36話

「今日はですね、新しいお友達を紹介しますよ！しかも2人！」

ちー姉が訓練やらISスーツに関した連絡事項を述べると、交代した山田先生が意気揚々とそう告げた。何故か鼻息荒いその姿は、どうにも子供っぽさを増長させるな。そんなでもって、少し離れた両サイドにちー姉と鷹兄が構えてるからかもね……。何と云うか、子供を見守る両親の図みたいに見えなくもない。

それにしても、新しいお友達……それすなわち転入生、それすなわち……彼女らの事を指し示しているという事だ。長かった……IS学園に通うと決意してから数年……ただこの日だけを待ちわびていたぞ。山田先生が入室へ促すと、1組の扉からそれぞれ金と銀が特徴的な髪色の2人が現れる。

「失礼します。」

「……………」

「では、簡単に自己紹介をお願いします。」

「はい。皆さん初めまして、シャルル・デュノアです。此処に僕と同じ境遇の男子が居るという事で、フランスからやって来ました。」

待ってたよ……待っていたよマイエンジェル・シャルロットオオオっ！うはははは……嬉しすぎて狂いそうだ！前世じゃ生粋のシャルロット党の俺氏を通りますよおおおおっ！ああ、マイエンジェル可愛いよ……マイエンジェル。何するにしても全部が全部あざと可愛い！んは……男装姿もまた可愛い！

2人目の男子○ っで事でワーキヤーと女子達が騒いでいるが、喋れたらきつと俺もその中に混じってたと思う。いや、でも……今回ばかりは喋れなくて良かったのかも。何故かって、テンション上がった勢いでマイエンジェルの正体をばらしかねない。うん、そういうのはイッチーに任せないとだから……。

「貴様ら、すぐに黙れ。……お前も何か言え。」

「はっ、了解しました。」

フハハハ！勿論キミの事も待っていたよ、ラウラたん。色々属性を詰め込みすぎて良く解らん事になってるラウラたんだが、やっぱり仲良くなれるのは学年別トーナメント後かな？ううむ、いずれはラウラたんの綺麗な銀髪に顔を埋めてクンカクンカさせてほしいところだ。……出来ればの話だけど。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「……あ、あの……以上ですか？」

「以上だ。」

自己紹介とはよく言ったもので、名前だけ言ってしまえば確かに言葉としては成立しているかもね。山田先生は涙目になってるけど、今のラウラたんはしやーなし。気にしたら負け、逆にこちらもラウラたんの態度を気にしないくらいにしとかんと。」

「貴様が——！」

おお、ラウラたんの引き起こすファーストインパクトが発生しようとしているぞ。前々から迷ってたんだけど、コレって防いだ方が良いのかなあ……？ラウラたんからすれば俺もターゲットなんだろうけど、だからって実の肉親なイツチーが最たる標的で——
——ありがとうございます！

「私は認めない。貴様があの人の愛弟子などと。」

「お前……黒乃に何しやがる！」

か、考え事してて気が付かなかった……。反射的にありがとうございますと言ってしまったが、それすなわち俺がビンタされたって事。そ、そっか……ラウラたんはイツチーよりも俺の方が気に食わないか……。ま、ますます状況が悪いぞお……。んく……。どうすんべ。

「フンツ、貴様も同じだ。貴様があの人の弟など認めない。」

「そんなん知るか、お前に許可される筋合いはねえ！とにかく黒乃に——」

「……………」

「黒乃……。」

とにかくイツチーを落ち着けさせるのが先決だと思つた俺は、イツチーの腕を掴んで首を左右へ振つた。するとイツチーは、悔しそうな顔で止めてくれるなどでも言いたそうだ。いや、解かるよ……言いたかないけどラウラたんが悪いもん。けどさ、やつぱそこは広い心でさ……。

「……くだらん。」

「……………。あゝホームルームはこれで終わる。今すぐ着替えて第2グラウンドへ迎え。今日は2組と合同だ。」

「お、近江先生。訓練機の調子はどうでした?」

「えつとですね……。機だけ駆動系に少し問題がありましたけど、キチンと処置しておきましたよ。」

俺がイツチーを止めている間に、ラウラたんは自分の席へと向かつてしまった。するとちー姉は、少し苦い顔をしながら強引に話を変えつつ1組から出て行く。まるでそれに協力するかのようには、鷹兄と山田先生も会話をしながらちー姉に続く。ほらイツチー、キミはマイエンジェルの世話をしたげなさい。

「……解つた、納得は絶対しないけど……今は気にしないでおく。」

「えつと、キミが織斑くん?僕は——」

「待った。そういうのは後で良いから急ぐぞ。」

う〜ん……良くない傾向だなあ。どうやらイツチーとしては、俺がしばかれたつて事でラウラさんの印象は原作よりも悪いようだ。でもとにかく、マイエンジェルの事は頼んだよ。イツチーは渋々ながらも俺の行動に肯定の意志を示し、マイエンジェルを連れて1組から出て行つた。

「黒乃っ！大丈夫か？ああ……少し腫れているではないか……。」

「まったく、なんですのあの野蛮人は……。わたくし、怒りを通り越して呆れています。」

……良くない傾向だぞお……。どうするよコレ……。有難い事に、モツピーやセシリーは俺を信頼してくれている。俺に対しての平手打ちのせいで、やはり原作よりもヘイトがラウラさんに向いてるらしい。流星に俺のせいでラウラさんが嫌われるのは忍びないよ……。

「黒乃さん、保健室に寄つて湿布を貰つてはいかがかしら？」

「それは良い案だ。黒乃、ここはセシリアの言う通りにしよう。」

それは少し過保護すぎるつてか……。あれ？うわ、ほんとに結構腫れちゃってるな。あ、でもこれ面白いかも……。頬触つても少し感覚が麻痺して触ってるの解んないや、ハハ。……笑い事じゃないよね。はあ……。ここはセシリーの仰る通り、アリーナの前に保健室だな……。……うん？なんか廊下の方が騒がしい……。つてああああ!?

(アレを忘れてた！今助けるからねマイエンジェルううう！)

「く、黒乃!? 待て、そんなに急がなくても……。」

「……行つてしまわれましたね。」

突然に教室を飛び出すもんだから、2人を大層驚かせてしまった。だが、しかし、まるで全然！ 俺の優先事項からは程遠いんだよねえ！ このままでは、男子が来たと聞きつけた女子達に追われてしまう。確か原作のイッチーは、大したことをマイエンジェルにしてやれなかったと思うんだ。

「ん……あれつて、もしかしなくても……。」

「と、藤堂 黒乃!?!」

「く、黒乃!?! お前、何しに……へ……。」

俺が本気で走れば、すぐに女子の群れは発見できた。現状としては、イッチー&マイエンジェル、それを追う女子達、俺の順番で縦一列……それなら、飛び越える必要があるな。俺は全力疾走の勢いを利用して、思い切り高くジャンプした。当然これじゃ飛び越えられないので、ほんの一瞬だけ雷火を部分展開し、弱々しくクイック・イクニッションブーストQ I B !

(はい、ちよつと失礼マイエンジェル！ それにイッチー！)

「へ……? うわつ、うわわわ!?!」

「うおおおおつ!?!」

Q I B を弱々しくかつ一瞬だけ吹かしても、その推進力たるや凄まじい。俺は生身ながらもスイーツと空中でスライドしているような状態になった。その状態を維持しつつ、2人を両腕でガツチリと小脇に抱える。そのまま一瞬だけ着地すると、またジャンプして後は同じ事をしばらく繰り返す。

しばらく繰り返し返しただけでも、女子達はもはや姿すら見えなくなる。ここまで来たならば、もはやどう足掻いたって追いつける距離では無い。よしつ、じゃあ2人を降ろそうか……。俺はその場でキュツ！とブレーキをかけると、小脇に抱えた2人を離す。

「な、何かと思つたら……助けてくれたのか？でもな黒乃、ある意味助かってねえ……。」
「こ、怖かったよお……。」

はっ!?し、しまった……逆効果だったか!?2人を降ろすなり、イツチーは疲れ果てた顔でそう言い。マイエンジェルはその場にへたりと座り込んだ。ああ、でも怖がつてるマイエンジェルもやっぱり可愛いっていうかなんというか……。す、済まぬマイエンジェル！俺は深々と頭を下げた。

「い、良いよ良いよ！助けようとしてくれたんでしょ？ありがとうね、藤堂さん。」
「サンキュー黒乃。助かった。」

ああ……怖がらせたのは俺なのに、天使の微笑みで許してくれた。流石はマイエンジェル……こんな無表情で良く解らん奴にも対応は分け隔てない。何気にこんな子は

初めてかもな。いや、大人だつて何処か俺とは距離を置きたがる。それでも初見でここまで友好的だなんて……目頭が熱くなりそうだ。

「というか、姿が見えなくなつたからつていつまでもこうしてられねえぞ。」

「そ、それが織斑くん……。ゴメン、僕腰が抜けちゃつて。」

（なぬう!!それは一大事だ!俺に任せときんさい。）

「ひやつ!?!と、藤堂さん……?」

マイエンジェルの腰が抜けたと聞いて、俺は華奢なその体を姫抱きで持ち上げた。おつふ……ここまで顔が近づくと、少し照れるなあ……へへつ。よし、イツチーがそれなら俺が代わるとか言つてるけど無視してゴー!えつと確か、イツチー達が目指したのは第2アリーナの更衣室だっけ?

えつさほいさとマイエンジェルを運ぶと、ようやく目的地へと辿り着いた。更衣室入口の前でマイエンジェルを降ろすと、腰が抜けたのはもう治つたみたい。よしよし、それなら俺も満足だよ。なんとかマイエンジェルの役にも立てたし、警戒はされないんじゃないかな。んじゃ、俺も急いで着替えないと。

「あつ、あの……藤堂さん!本当にありがとう。」

「……………」

「と、藤堂さん?」

「いつでも見てる。」

「っ!？」

その場を立ち去ろうとしたが、マイエンジェルの言葉に足を止める。はあく……たまらん、ちよつと上目づかいで言ってるからホントにたまらん。マイエンジェルに見とれていたせいか、数テンポの間が開いてしまう。喋られるかは賭けだったが、言いたい事を耳元で呟くと声が出た。いやね、イッチーに聞かれると流石に恥ずかしいじゃん。

なんか豪い驚かせたようだったが、まあ色々と解釈のしようがある言葉になっちゃったもんな。どう取られたかは解からないが、初対面で半ば告白みたいな事を言われた……とか大体そんな感じだろ。それよりも、本当に俺も急がないとちー姉に殺される。もう一度マイエンジェルを見てから、俺は使える女子更衣室を目指した。



「……………」

「どうかしたのか？」

「あ、うん……何でも無いよ。それより、さっきの続きにしようか？」

「そうだな。俺は織斑 一夏。一夏って呼んでくれ。」

「僕はシャルル・デュノア。僕の事もシャルルで良いから。」

IS学園にやってきて初日なのに、目まぐるしいくらいに様々な事が起きた。とにかく僕は、今すぐにでも落ち着きたい。その一心で自己紹介にしたけど、不自然に思われてないかな……？いろいろなと頭の中を整理しないと、特に……藤堂さんの事とか。

「それより、時間が無いから急ごう。黒乃のおかげでいつもより余裕があるけどな。」

「？ いつも助けてくれてるとかじゃ……。」

「いや、今日が初めてだ。まるで……。……。まるで、シャルルを助けたかったみたいにさ。」

更衣室に入りながら、一夏がそんな事を呟いた。だけど、様子が少し変……。？。まるで、言いたくない事を必死で口にしてるみたい……。そんな感じ。一夏が背中だけ見せてそう言うから、表情を悟る事ができない。気にするほどの事でもないのかな。

「さて……。つと。」

「うわあ!？」

「シャルル?」

「ご、ごめん……。何でも無いから。」

し、しまった……。一夏がいきなり裸になる物だから、普通に素のリアクションが出ちゃったよ……。変には思われるだろうけど、今ので女の子だつてばれてないよね……

？だ、大丈夫……僕は男の子、僕は男の子……。そうやって自分に言い聞かせて、ようやく気分は落ち着いた。

それじゃ、僕も着替えないと……。僕はコソコソとロッカーの影に隠れると、急いで男子用の制服を脱いだ。その下には、既にISスーツを着込んでいる。こうすると手間が省けるしね……。というか、一夏もそうすれば良いんじゃないかな？今度勧めてみよう。

「い、一夏……まだ着替えてる？」

「ん、おう……。つてか、隠れてどうしたんだ？」

「僕の事は気にしないで。それより、着替えながら少し聞いてもいいかな……。」

「ああ、俺に答えられる範囲なら。」

「そっか、それじゃ……。藤堂さんって、どんな人なの？」

これはぜひ……というか、何が何でも聞いておかないとならない。情報によると、一夏と藤堂さんは幼馴染。誰よりも藤堂さんを知っているであろう一夏に、ストレートな質問を投げかけた。でも、やってきたのは沈黙……。おかしいな、どうして答えてくれないんだろ。

「……なんだよ、黒乃の何が気になるんだ。」

「え？ほら、助けてはもらったけど……あまりどんな人なのか解からなくて。」

一夏は少しムスツと不機嫌そうな声色で返してきた。その様は、割れ物注意……僕は必死に言葉を選んで、更に一夏へ返す。もちろん藤堂さんの事は知ってる。長いから割愛するけど、黒き翼の八咫鳥……だからね。IS学園に来る前に、一夏と接触する際の要注意人物だとしつこく言われたから。

「どんなって、まんまだよ。俺達を助けてくれるような優しい奴。」

「……そっか、そうだよ。」

そう……聞いていた話と、随分と違う印象を受けた。でもだからこそ、最後の言葉の意味を解釈しかねている。それによつては、一夏の言った通り本当に僕を助けたかったかどうかは怪しくなってくる。それはつまり、僕が来る事によつて騒ぎになつて……それに巻き込まれた一夏を助けたかったんじゃないかなつて……僕はそう思う。

最後の言葉さえなければ、僕はそのまま藤堂さんを警戒する必要がないほどに優しい人だつて解釈していたはず。あの言葉……いつも見ている……つて。私が見ている限りは、好きにはさせないつて……そういう意味なんじゃないかな。一夏に聞こえないように、わざわざ僕の耳元で囁いたくらいだし。

一夏と僕を無理矢理でも引き剥がそうとしないのは、僕が特に何かをしない限りは……自分含めて友好にやつていこうつて事……だろうね。つまり彼女は、僕の正体に気付いている可能性が大きい。……やつぱり、僕はあくまでおまけだったんだ。だつて、

こう考える方が流れが自然だよ……。

流石に織斑先生の後継者有力候補……八咫鳥の黒乃は伊達じや無かつたつて事みたい。割と男装も完璧だったつもりんだけど、こうもあつさり見破られるのはショックだなあ……。……それでも僕はやらなきやダメなんだ。確か、仇なす者には災いもたらず……。だったよね。どんな災いだとしても、僕は――

「……ルル。シャルル！」

「うわあ!?ど、どうかしたの?」

「さつきから何回か呼んだんだぞ?返事が無いから心配したぜ。」

「ゴメン……。ちよつと考え事をさ、ハハハ……。」

少し自分の世界に入り込みすぎたみたいで、すぐ近くで一夏が呼んでいるのにも気がつかなかつた。どうやら一夏はISスーツに着替え終わつたらしく、それで僕に声をかけたようだ。……なんて言うか、男の子が着るとこんな感じなんだ……。ISスーツつて。

「……なあ、俺からも1つ聞きたいんだけど。」

「うん、何でも聞いてよ。」

「さつき……。黒乃になんて言われたんだ?」

一夏は何か、気まずいというか悶々としたというか、そんな表情で僕に問いかける。

その様子には、どうにも不安が見え隠れしているような……。一夏は、藤堂さんの事が好きなのかな。彼女が僕を助けたって思ってるみたいだし、もしかすると藤堂さんが僕に気があるかも……。そう考えているみたい。

「だけど困ったな……。それだと、ストリートにいつも見ていると言われたなんて答えられないよ。だって言葉だけ聞いたら、絶対に色恋沙汰な台詞だもん。どうしようかな……。無駄に一夏を落胆させるのもなんだし、かといってどう言い訳すれば……。あつ、そううだ。」

「……キミと仲良くしてあげてって、そんな感じのニュアンスの事を言われたんだよ。」
「へ〜そうか……。そうか……。」

「一夏に聞かれるのが恥ずかしかったんじゃないかな。」
「ハハッ、まるで母親だな。ったく、黒乃に言われなくたって大丈夫だって。」

僕がそう言えば、一夏はさっきまでの表情が嘘のように笑みを浮かべる。口では何か心配し過ぎだとも言いたそうなのに、安心しきっているのか伝わった。……2人つて、両想いなんじゃないのかな？でも付き合ってる風には見えないって事は、随分とままならない恋なのかも。

というか、邪魔しちやってるのは僕なんだろう。はあ……。会社の件だけでも心苦しいのに、余計な荷が増えてしまった感じ。なるべく藤堂さんのアシストを優先に動こう

……。それに、彼女の信頼を得られれば少しは油断してくれるかも知れないし。

「ごめんな、変な事聞いて。じゃ、行くか。」

「うん、そうだね。」

一夏はこの通り、僕と普通に接してくれてる。でも藤堂さんが関わるとその限りじゃない……。逆に一夏に接しようとする、藤堂さんが黙ってない。……あれ？は、八方塞がりなような気がするの、気のせいかな？う、うん……とりあえず、藤堂さんに接するときは一夏に見られないようにしないとダメみたいだ。

まあ……あまり考え過ぎも良くないかな。とにかく仲良く出来れば僕も満足だし。打算ありきだって、単にそれだけじゃないよりはずつとましに決まってる。とにかく、早くこの学園にも慣れないと。しつかり道順を覚えながら、一夏の後を着いて歩いた。

第37話

「……………どういう事だ。」

「ん？」

午前の実践授業を終えた俺達は、揃って屋上に来ていた。とはいえ、モツピーからすれば2人きりのつもりだったんだろうけど……。昨日の内に屋上集合とのメールが届いていたから、あつこれはあのイベントやなどは思ったんだ。けど済まぬモツピー！マ イエンジェルが来ると解って、来ないわけにもいかんのだ。

見事に俺を筆頭としたいわゆる邪魔が居る訳で、モツピーは不満げな表情をイツチーに向ける。それでもイツチーは、何か問題でもあるか……。と言いたげな生返事で反応した。いや、キミの食事は大勢でつて意見は真つ当だと思うんだよ。だけど最悪モツピーに確認を取るべきじゃないだろうか。……。イツチーがそんなの気にしてたら、皆苦労しないよなあ。

「……………いや、私の誘い方が悪かった。」

「何か失敗したのかよ。」

「ああ、大失敗だ。だがお前は気にしなくて良い。」

おや、何やらモツピーは自分に非があると認識した様子。なんと言うか、原作のモツピーよりマイルドな気がする。でも……悟っているっていう表現の方が近いのかもね。モツピーは気分を皆でワイワイというものに切り替えたように、自ら皆に席へ着くように促した。

「あの、僕も混ざって良かったのかな。」

「アンタ随分寂しい事言うわね。」

「そうですね、あまり遠慮なさらずに」

「……セシリアに言えた事ではないと思うが。」

「ほ、箒さん……昔の事は蒸し返さないでいただけます!？」

うん、まあ……セシリーの言葉は男子として此処に居るマイエンジェルへ放ったわけで、あまり説得力は無いのかも知れない……。だけどセシリーの言う通り、もうそれは過去の事なのだから水に流そう。モツピーもスマンスマンなんて言ってるし、思わず口から出ちゃったのかも。

「ほら一夏、酔豚。」

「おつ、鈴の酔豚か……サンキュー。」

「んんっ！一夏さん、わたくしのサンドウィッチもよろしければ。」

「お、おお……おう。」

鈴ちゃんの酢豚はマジで美味いぞ。だけど不思議なのが、なんで酢豚以外は良くて普通の味になるかだよ。セシリーのサンドウィッチ……というか、セシリーの料理は……ええと、まあ……はい……はい。はあ……喋れさえすれば教えるんだけどな。

おっと、それはそれとして……俺も弁当を作つて来ておいたんだつた。イッチーのメールが届いた時点で此処なのは解つてたし、皆で分けられるように少し多め……つて、頑張り過ぎたかも。まあ……主にマイエンジェルの為つてのはあるんだけどね。1人だけ購買のパンつてののも味気ないでしょ。

「というか黒乃、お前のはまた随分と大きいが……。」

（たたりらつたらしく。たつばあく！）

「そんな無表情でタツパー掲げられても何言いたいかわ解んないわよ。」

モツピーは俺の大きな弁当箱を見て、イッチーにあげる物だとも思っているのか不安そうだ。いやいや、モツピー達の邪魔はしないし、イッチーに作つたところで俺に得なんかないじゃん。俺がイッチーに料理を作るのは、織斑家内だけの話だよ。俺は鈴ちゃんに見事なツツコミを入れられたタツパーに、マイエンジェルの分を取り分ける。

（ヘーイ、マイエンジェル。）

「何かな、藤堂さん。」

（ほら、キミの取り分だ。）

「え、これ……もしかして僕に？わあ……嬉しいな、ありがとう！」

フウウウツツ！満面の笑みいただきました！頑張った甲斐あるよマイエンジェル！いやホント、キミの為に早起きしたようなモンだから……キミの為に！俺がタツパーをマイエンジェルに差し出すと、何か不思議そうな視線が3つ……機嫌が悪そうな視線が1つ集まった。

「あつ、でも困ったな……。お箸とかフォークとかあると助かるんだけど……。」

（んっ、あゝ……それ普通に失念してたな。じゃあアレだ、役得ですし……。）

「!?!」

「え、えつと……食べさせてくれるのかな？あ、あくん……。」

俺とした事が、真面目にマイエンジェル用のフォークを持ってき忘れ……て正解か。だって変でしょ、今日来たばっかのマイエンジェル用のがあらかじめあったら。危ない危ない……妙な事が起きるところだった。とにかく俺は、自信作の餃子を撮んでマイエンジェルの口元へ運ぶ。

「……………。お、美味しい！これ、チーズが入ってるんだ。餃子の皮のモチモチと、チーズのトロトロ触感が絶妙にマッチしてるね！」

フツフツ……しかも中は豚ひき肉をちよつぴり使って、後は水煮大豆と木綿豆腐を潰したのが主だからローカロリーなんだぜ。その上豚肉の臭み消しにはナツメグを

使ったから、口臭も気にしなくて良いって代物よ。いや〜……気に入ってくれて良かったよ……って、女子3人は円陣組んで何してんの。アレか、これから試合か何かで？

(おい、お前達……黒乃の気心は知っているな?)

(勿論よ、一夏が好き……って話でしょ?)

(わたくしもその認識ですが、でしたらこの光景はいつたい……。)

(……思わせぶりの態度でもとってんじゃないの。)

(押しダメなら引いてみる……という奴ですわね。)

(く、黒乃……何と言う策士!その発想は無かった……。)

何か話してるのは解るけど、わざわざ遠くでやってるから声は聞こえないな。まあ……だいたいはイッチー関連だろうね。ほらほら、マイエンジェルは俺が引き付けておくからさ。その間に皆はイッチーを!……ってなんだこれ、なんか死亡フラグっぽくなっちゃった。

「藤堂さん、料理上手なんだね。良いお嫁さんになるんじゃないかな……ね?一夏。」

「……………あ、ああ……そうだな。」

「一夏って、藤堂さんの手料理とか食べたことある?藤堂さんの得意料理ってどんなのか聞かせてよ。」

「まあ……一緒に住んでるし一応な。そうだなあ……黒乃が得意なのは解からんが、

肉じゃがは美味しいぞ。しかもアレンジの幅が広い。」

「へえ、それはまたジャパニーズ家庭料理だね。それなら、ますますお嫁さん向きだと思
うよ。」

むしろキミが俺の嫁になってくれマイエンジェル。しかし得意料理なあ……イッ
チーの言う通り、肉じゃがは得意かもしれない。というのも、ちー姉が妙に肉じゃが肉
じゃが言うんだよ。とにかく肉じゃがだけは完璧にしろって言うもんだから、おかげで
肉じゃがは極めてしまった。今思えば、アレってなんだったのかな……？

「デュノア、良ければ私の弁当にも手を付けて良いぞ。」

「アタシの酢豚もね、これだけなら黒乃にも負けないわよ！」

「以下同文、ですわ。」

「へ？ええと、うん……皆ありがとう。」

な、何で俺の邪魔するの……いつも手助けしてるんですけど!?!?どういうわけか、3人
はこぞってマイエンジェルに自身の手料理を勧める。ぐぬぬ……おかしいぞ、何がどう
してこうなった。俺の目の前には、女子4人が戯れている光景にしか見えんが、マイエ
ンジェル取られた……泣きそう。

「……なあ黒乃、俺も貰って良いか？」

（ああ、うんうん……お好きにどうぞ。そもそも皆に少しずつ作って来たんだし。）

「いや、そうじゃなくて……。……なんでもない。」

「ITCHーが欲しいっつーから弁当箱を差し出したというのに、何か落胆されたような表情を見せられた。なんですか、文句があるならハッキリ言っつてほしいんですけど。しかしITCHーは、俺の弁当箱からオカズをチョイスして掻っ攫っつていった。そいつは、割と定番のつもりで作っつた奴だ。」

「人参入りの出汁巻き卵か。……。もしかして、納豆か何かのタレを使っつてるか?」

「おお、流石ITCHー……。それを言い当てられるとは思っつてなかつた。そう、みじん切りした人参と一緒に納豆のタレを入れてるんだよね。というのも、食堂で出しても醤油派の子達とかが居て結構余るらしいんだよ……。まあ……。かくいう俺も醤油派だけだよ。」

「勿体無いと思っつた俺は、余つたそれを拝借して入れてみたつて事。出汁の分量とか考へなくても良いからさ、スピーディに作れるつてわけよ。あれさ、今流行りの時短つてやつ。……。なんとというか、やつぱり乙女化が進行してるなと感じる瞬間だ。前世でもたまく料理はしてたけど、アイデア料理なんて手の込んだのはスルーだったし。」

「黒乃の手料理、なんだか久々だな。……。なあ黒乃。」

「……………」

「本当に、時々で良いんだ。出来れば、たまにこうやつて手料理が食いたいな……。なん

て。」

うくん、まあ俺の手料理は、イツチーからすれば慣れ親しんだ味だろう。確かに、なかなか寂しいところはあるかも。実際のところ、俺もイツチーの手料理が恋しかったりする。うん、そういう事なら全然良いよ。俺は首を縦に振った。逆にイツチーの料理を食べたいとお願いできれば最高だったんだけど。

「本当か!? ありがとうな、黒乃。」

「つて、これでは黒乃さんの思う壺ですわ!?!」

「た、確かに……。何処の誰だ、黒乃の策に便乗しようとか言ったのは!」

「いの一番に動いたのアンタでしょうが! 一夏、アタシの酢豚もとつとと食べなさい!」
「のわっ! わ、解った……。解ったから落ち着けて!」

「ア、アハハハ……。」

イツチーの嬉しそうな声に反応するかのようには、それまでマイエンジェルと和やかにしていた3人はいきなり慌て初めた。モツピー、鈴ちゃん、セシリー、策とか思う壺つて何の話してんの? まあ良いか、これでまたマイエンジェルがフリーなんだから。鬼の居ぬ間に……。つてのは皆に失礼か。

(マイエンジェル、続き続き。)

「ありがとう、藤堂さん。あくん……。」

我関せずといった具合で、マイエンジェルとの食事を続ける。フフフ……これも含めて、楽しい食事になったな。皆と賑やかにするのは良い。今回の場合はモツピーに悪かったから、時と場合は考えつつ騒ぎに混じれるようなら積極的に参加しようかな。

◇

「はい、それじゃ……確かに渡したわ。」

「どうもありがとうございます。」

放課後になって、僕は職員室に寄っていた。とは言っても、入り口で済むような用事なんだけど。僕が感謝をしながら受け取ったのは、大きめのダンボール箱。これは僕の生活必需品で、職員室に預かってもらっていた。それで、これから一夏の部屋で荷解きになるかな。

「はあ……。」

何も一夏と同室なのが憂鬱って事ではないんだけど、僕は思わず溜息を吐かざるを得ない。それもこれも、藤堂さんが原因だ。もう……わけが解らないよ……。朝の事があつたから警戒してたのに、昼に起きた一連の流れはなんだったのさ。これじゃ僕が馬鹿みたいだ。

自然なのは、僕を男子として扱ったとか……？いや、待つてよ……自然じゃないでしよそれは……。会つて間もない男子生徒に、あくんをするほど藤堂さんは軽い女性に見える。つまりそういうふりでも無かつたという事になる。……単に僕を利用して、一夏にアプローチを？いや……藤堂さんだつたらストレートに動くはずだし。

あつても……本当に美味しかったな、藤堂さんの手料理。嬉しいつてリアクションも、偽りなく心からの言葉だつた。ただ……一夏の視線が痛かつたなあ……。あんなにジツと見てこなくても良いのに。一夏つて、奥手なのかもね。周囲から見るとじれつたい2人なのかな。

「おーい、デュノアくん。」

「……近江先生。……僕に何か用事ですか？」

何処かネットリと耳に残るような声が聞こえて、僕は自然に身体が強ばるのが解つた。職員室を出てしばらくのところ、僕を呼び止めたのは、近江重工の御曹司である近江 鷹丸さん……。この人が1番の不確定要素だよ……。朝職員室に挨拶しに来た時は自分の目を疑つた。

この人が利那を設計・開発したのだから、社長代理なのだから知つてる。けど……！ S 学園で教師をやつてるなんて聞いてない。紛い成りにも社長なわけで、デュノア社の事情が当然のように耳に入るのであろうこの人が居るのは不味すぎる。ううん……多分

だけど、この人も僕の事は知っているに違いない。

「訓練機のラファールについて相談事があつて。」

「ラファール?」

「うん、再起不能なのが長い事格納庫に放置されてるんだ。僕も弄つてみたんだけど、あれはもう本当にダメな奴でさ。それで一つ提案があるんだけど。」

近江先生が言うには、バラせるところまでバラして、まだ使えそうな部分はデユノア社に還元したいつて事みたい。それで相談つていうのは、手続きをスムーズにしたいから窓口の役目を僕に買つてくれないかと言われた。……どうやら、少しでもデユノア社の利益に繋がるよう気を遣つてくれているみたいだ。

「……解かりました。それでお願ひします。」

「うん、了解。じゃあ……明日までにはバラしておくよ。それじゃ、僕はこれで——」

「……その……近江先生!少しお時間良いですか?……話したい事があるんです。」

「僕とかい?解つたよ。それなら……場所を変えようか。」

僕が了承の言葉を述べると、近江先生はアツサリと背を向けて何処かへ消えようとしてしまう。凄く……拍子抜けしてしまう……。けれど、この人はきつと解つていて誰にも何も話していない……。もしそうだとするなら、僕がするべき事はその真意を聞く事。この人の身の振り方次第では、デユノア社なんて明日にでも倒産に追い込まれかね

ない。

近江先生が自ら場所を変えようと提案したなら、これから僕が話そうとしている事も理解している……って事だと思う。でも、それこそ誰かに聞かれても困るしね。僕達は連れ立って歩くと、人気の全く感じられない廊下まで辿り着く。先生は右見て左見て、ようやく立ち止まった。

「……このへんで大丈夫かな。じゃ、遠慮なくどうぞ。」

「はい……。あの、僕の事……。どこまで気付いてますか？」

「うくん……。そうだね。デュノア社が経営不振、フランスがイグニッション・プランから除名をされている事を鑑みるに……。広告塔として転入。および織斑くんに接触してデータの無断採取つてところかな。」

「……………」

……思っていた通り。でも、ここまで清々しく言い当てられると少し怖いなあ。直接は言わなかったけど、僕が女の子だって事も割れてるか……。まあそれは良いとして、問題はここから。どうして近江先生は、知っていて何も行動を起こさないか……。という事。

「……告発しようとは思わないんですか？」

「うん、全然。だって、そんな事したって僕に何の損得も無いし。いや、むしろ損するか

もね。」

「損……?」

「キミを告発したらデュノア社製の第3世代機は幻になっちゃうも同然じゃない。だから僕はイグニッション・プランって嫌なんだよねえ……それだけ世界の技術進歩が遅れるって事になる。」

絶句した。それはもう、絶句という言葉しか当てはまらないくらいに。つまりは、デュノア社製の第3世代機を見たいが為に黙っている……そう言っているようなものじゃないか。この人にあるのは、自分の知的好奇心を満たすという欲求だけの……? 「あ、別にやり方が正しいとは思わないし……勧めるのはもつての外。キミが無理矢理やらされてるって事も理解が出来るさ。」

「は、はあ……?」

「だからと言って、密告はしないよ。誰に実害があるわけでもないしね。それ言ったらボーデヴィツヒさんの方がよほど物騒じゃない?」

ま、まあ……それは言ってる……のかな?別に僕は、一夏達を物理的に傷つけようとは思っていないし。……藤堂さんは今朝実害を受けてたわけだし。まあ……つまり、近江先生の心情は難しいところって事かな。データ盗難は良くないけど、それを止めると自分の見たい物が見れなくなっちゃうと……。

「あの、それともう一つ。近江先生から見て、藤堂さんってどんな人ですか？」

「どんな……ね。何を思つてそんな事を聞くんだい。」

「なんと言うか、思つてたのと違ふと言いますか……つかみどころが無くて酷く困惑していると言いますか……。」

藤堂さんにも正体がばれているとして、真意が聞けないから困つたものだよ。あんな見張つているみたいな台詞を言われるくらいなら、無言で排除してくれたらどれだけ楽だったろう。それなのに藤堂さんは、自ら脅したのに友好に接してくるっていう意味不明な行動をしてくるから……。

「ははっ、確かに……。彼女は不思議な女性としか言いようがないかなあ。やっぱり何を考へてるか解からないし。」

「そう……ですか。」

「それでも彼女は優しい女性さ、それだけは自信を持つて言える。……織斑くん達と一緒に緒の時には特に……ね。」

……それは確かに。例の……八咫鳥の噂なんて消し飛ばしてしまうほどだ。だけでも、だからこそその八咫鳥だとも思つてしまふ。与する者には幸を運び、仇なす者には災いもたらす。今の僕は、どちらにもなりえるから……。藤堂さんは、暫定的に僕を前者だとして接してくれているのかも。

「そっか……だからお昼は……。近江先生、なんか少しスッキリすっきりしました。あの……話を聞いてくれてどうも——」

「あ、行く前に1つだけ。くれぐれも……織斑くんには気を付けて。」

「え、ええ？なんか人畜無害って感じが滲み出てますけど……。」

「いや……僕が言ってるのはそういうのじゃなくて。まあとにかく、お風呂とかは特に用心した方が良いと思う。……用心したって、どうしようもない場合もあるだろうけど。」

「な、なんなんだろう……。いつも笑顔の崩れない近江先生が、ちよつぴりゲンナリとしながらそう言う。もつと詳しく聞きたい……。けど、先生は意識して遠まわしに言っているように感じた。それなら……。聞くだけ野暮って奴なのかな？うくん……。少しモヤモヤするけど、それなら仕方がないか。」

「わ、解りました……。御忠告どうもです。」

「うん、まあ……。それじゃあね。キミが良い学園生活を送れるように祈ってるよ。」

「っ!?ありがとうございます!」

去り際の近江先生は、そんな言葉を送ってくれた。僕にそんな資格がないなんて解ってる。けれど、こんな状況に居る僕を励ましてくれるなんて思ってもみなかったから。思わず僕は、去って行く先生の背中に深く頭を下げた。先生は、背を向けたままヒラヒ

ラと片手を振って消えていく。

なんとというか、あの人も不思議な人……というよりは変人？ 黙ってもらっている状況で、そんなの失礼だとは解ってるけど……。それはそれとして、一夏には気を付けて……か。せつかく近江先生がしてくれた忠告だし、用心しておこうかな。気を取り直した僕は、一夏の部屋を目指して歩を進めた。

第38話

「まったく、教えろと言うからそうしたらろうに……。」

「あれ以上解りやすく教えれるわけないでしょ。」

「わたくしが詳しく説明して差し上げたのではだめだったのかしら。」

(ダメだこりや……。)

イツチーがマイエンジェルから射撃武装についてのレクチャーを受けている最中、そこから少し離れた場所にいるモツピーを筆頭にした3人は、ぶつくさと文句を零していた。というのも、イツチーは前々から射撃武装について詳しく教えて貰おうと励んでいた……んだけど、聞く相手が悪かったとしか言いようがない。

モツピーは説明が擬音だらけ、鈴ちゃんは感覚でやれと言い張って聞かない。頼みの綱であるセシリーは、理論的かつ細かすぎる故……常人には理解できない代物とだけ言っておく。ちなみに俺は、聞かれ掛けたけど止めた。ま、俺に至っては喋れないですし、武装も刀7本という謎構成ですし……。

いやね、投げナイフなら教えたげるよ。紅雨と翠雨を扱って長いからさ、的が人間サイズなら百発百中な自信がある。……動いていない場合に限定されるけど。うーん

……投擲だけど、偏差射撃？とかそこらはちゃんと習った方が良いのかな。俺もそこだけマイエンジェルに教えを乞いたいかも。

それにしても、マイエンジェルの事とか……もうちよつと真面目に考えといた方が良いのかな。IS学園は外界からの干渉を一切断つ……。正体がばれたマイエンジェルに対して、イッチーがじっくり考えろという事でこの提案を出すわけだが、それは事実の先延ばしでしかない。

ぶつちやけ一個人である人間には、マイエンジェルの抱えている問題を解決する事は出来ないだろう。だからこそ、俺には頼れる人が1人だけ居る。近江重工の御曹司にして現社長代理……そう、近江 鷹丸さんだ。でもなあ……そんな事で鷹兄を頼るのはお門違いな気もするんだよねえ。

「へえへえ……。珍しいじゃん……やっぱ黒乃も少しはジェラシー感じてる？」
(ほえ？何の事やら。)

「しらばつくれなくても良いじゃない。ほら、一夏とデユノア……最近仲良いし。」

無意識の内に視線がマイエンジェルへと集中してしまっていたらしい。そんな俺の事が気になったのか、鈴ちゃんが肘で突きながらそんな事を言う。ジェラシーねえ……それはもうちよつとどころじやないんだよなあ。今後マイエンジェルにフラグを建てるイッチーが、羨ましくて仕方ない。

今の身体は女の子だし……とうにそんな感情は消え失せていたと思っただけだ。それがそうでもないと言うのは、やっぱり俺が前世でシャルロット党であった事が太いに関係していそう。俺は思わず、鈴ちゃんの言葉に肯定を示してしまおう。

「うっそ……マジ？アタシ、冗談半分のもりだったんだけど……。ちよつ、聞いてよ2人とも！」

「騒がしいぞ鈴、いったい何だと言うのだ……。」

「わたくし、今はあまり戯れる気分では……。」

「良いから聞きなさいって！黒乃がね……。」

俺が首を縦に振ったのが、鈴ちゃんからすればよほど意外だったらしい。すると鈴ちゃんは、からかうような笑みを終始浮かべつつ、モツピーとセシリーに集合をかけた。ま、まずったな……もしかしてこれは、茶化されるパターンなのではないだろうか。そう思っていると、茶化するような笑みが3つに増殖してしまう。

「ほうほう、そうかそうか。黒乃、お前もなかなか可愛い奴だな。」

「フフツ、黒乃さんだからこそ……微笑ましいお言葉ですわね。」

「アタシらなんていつも嫉妬全開だしね……。うん、逆にアタシ達は黒乃を見習わな」と。

くつ……！なんというか、こんな話題で茶化される時が来るとは思ってもみなかった

……。いや、俺の場合は茶化されるという行為自体がレアケースだな。これはこれで悪くない気がするけど、どうしても恥ずかしさの方が勝っちゃうや……。それ言うと、皆が照れ隠しに手が出ちゃうのが解るかも。今だって、俺の恥ずかしさを受け止めてくれる何かを求めてしまっている。

羨ましさついでに、イツチーを攻撃してやろうかしら？ いや、この距離でいきなり刹那を展開して襲いかかるとか、流星にご乱心と思われる。殿中、殿中でござるう！ 藤堂どの、気が狂いおったか！ ……なんて言われて。もし言われるとしたら、モツピーが似合いそう（小並感）

「ねえあれ……。」

「もしかして、ドイツの第3世代機？」

そうこうしていると、周囲の女子達が声を潜ませコソコソやつてる。あく……ラウラたんの仕掛けるセカンドインパクトな。まあ……傍観、だよな。ラウラたんの事はマイエンジェルが止めてくれるわけで、それに割って入るとそれでなくても低いラウラたんの好感度がダダ下がり——

「おい。」

（あるえ……ここでもやつぱり俺つすか？）

なんとラウラたんが話しかけたのは、イツチーではなく俺の方だった。ラウラたんは

シヴアルツェア・レーゲンを展開して、俺の前に立ち塞がる。対して俺は刹那すら展開してないんですがそれは。あ、これヤバイかも……ロリっ娘とは言え、軍人特有……かも知れない迫力が凄くて動けない。

「貴様も専用機を持つているだろう。ならば私と戦え。」

(いやゴメン、それ今は無理っばい……。)

「何をしている。そのチョーカーは飾りか？」

なんとかラウラさんの正面に立つくらいはできたけど、まともに刹那を展開できる精神状態ではない。だが、これで良い……はず。だって、ラウラさんの目的はあくまで俺やイツチーを倒す事で、決して殺したいわけじゃない。実際は殺したいくらいなのかもだけど……。

とにかく、俺が戦う意識を見せなければ……寸止めくらいで済むんじゃないの？半分賭けみたいなものではあるが、俺は刹那は展開せずにラウラさんをただ見据える。解っていた事ではあるけれどラウラさんはだんだんと機嫌が悪くなってきたみたいで、眉間には似合いもしない皺が寄る。

「貴様、嘗めているのか……!?それとも、私程度は相手にするまでもないとも言いたいかか！」

「アンタ、さつきから聞いてれば……！」

(はくい落ち着こうか鈴ちゃん。それはキミの悪い癖だよ。)

「黒乃……。」

まあまあ落ち着きなつて鈴ちゃん。心配してくれるのは嬉しいけど、鈴ちゃんが割つて入る事じゃないよ。そう……これは、俺とイツチー……そしてラウラたんの問題だ。……俺がもう少ししっかりしてれば、防げない事件ではなかった。俺がこんな事を思うのは筋違いだつて解る……けど、責任は感じてる。

「よかろう……ならば、相手をせざるを得ん状況にしてやる！」

(へあ……？ちよつ、ちよつ……プラズマ手刀を振り上げちやつて……。ハ、ハハハハ……寸止めしてくれるよね、ラウラたん。)

「黒乃……何故避けん!？」

「黒乃おとおつ！」

ずああああ!あつぶ……危ない!し、しっしし……死ぬかと思つたあ!何、なんだよラウラたん……今のはマジだったの……?イツチーが後ろから猛スピードで迫つてプラズマ手刀を弾いてくれてなかつたら……首チョンパになるところだった。ふいー……ありがと、イツチー。

「お前……いったい何のつもりだよ！」

「黙れ!貴様らさえないなければ、教官は今でも頂きへ立っていた……間違いなくな！」

「……もしかして、あの事件の事を言ってるのか!? ふざけんな、アレは俺達も被害者だ！」

『その生徒、何をしている!?! 所属と氏名を述べよ!』

模擬戦でもなく試合でもなく、ましてや付近に生身の俺氏が居れば嫌でも異常事態だと悟られる。スピーカーから大音量で監督官の声が響くと、ラウラたんは自ら雪片との競り合いを止めた。そうして吐き捨てるように興が冷めたと呟けば、俺達の前から姿を消していく。

「クソツ、なんなんだよ……! 黒乃、怪我はないか!？」

(こ、怖かった事を除けばオールオーケーかな……。)

「藤堂さん……どうして無抵抗だったの?」

「そうですね、黒乃さん。ああいった場合、多少の反撃ならば許されていいはずですよ。」

マイエンジェルが怪訝な表情を見せ、セシリーはまるで俺を怒るみたいにそう言った。いや……普通に怖くて身体が動かなかったただけなだけどね。って言ったら、皆はどんな反応をするだろう。呆れられるだろうか、それとも更に叱られるのだろうか。でも、事情を知らない面子は困惑してるでしょうね。

「私には何がなんだかサツパリだぞ。数日前にも黒乃が叩かれたが、アレと何か関係し

てるのか？」

「……無闇に話すような事じゃない。どうしても気になるんなら、鈴にでも聞いてくれ。」

「二夏さん、いずこへ!？」

「……悪い、しばらく放っておいてくれると助かる。」

……イッチーはイッチーで、俺やちー姉に申し訳ないって思っているみたいだからね。イッチーは必死に感情を抑えるようにして、足早にアリーナから出て行く。まあ……得策か、俺達事件の当事者が居るだけ、この場の雰囲気が悪くするだけだ。じゃあ……俺も今日のところは帰ろうかな。

「黒乃さん、貴女まで……。」

「鳳さん、平気なら話してもらえないかな？」

「ゴメン、少し待って……。じゃないと、今にも爆発しちやいそうだから。」

俺が遠ざかる前に、そんな会話が背後から聞こえた。鈴ちゃん、俺達の為に相当怒ってくれてるんだな……。嬉しい反面、やつぱりラウラたんへのヘイトが半端じゃない。出来れば、そっちの問題も解決したいんだけど。流石の俺も、知らんぷりってわけにもいかなそうだし。……部屋に戻って、ゆっくり考える事にしよう。



「……………」

部屋に戻ってしばらく経つが、シャルルが顔を見せる気配は無い。俺に気を遣ってくれているのか、はたまた他に用事があるのか。それは知るところじゃないが、現状……俺の気分はあまり晴れはしていないと言う事だ。考えれば考えるほどに、様々な苛立ちが募ってくる。

「……………少し出かけるか。」

行く当てがあるわけではない。それでも部屋に閉じこもっているよりはマシだと、そんな考えが浮かぶ程度には落ち着けてはいるみたいだ。俺はハンガーに引っかけてあった制服の上着を引っ掴むと、袖を通しながら部屋を後にする。……今ごろ黒乃はどうしているのだろうか。

強く気高い黒乃の事だ、俺ほど気にはしていないと願いたい。だが、黒乃はボーデーヴィツヒに対して何の抵抗も見せなかった。……単なる暴力を嫌う黒乃なら、防ぐないし避けるくらいするはず。それをしないととなると黒乃は、全てを受け入れるつもりなのだろうか。

「……………」

キリリと胸の奥に痛みが走った。痛い……黒乃がそうやっているところを見ると、俺はとてども痛いんだ……。どうして黒乃は、俺を頼ってくれないのだろう。確かに頼りはないのかも知れない。それでも俺は、お前がそうしてくれたように……お前の隣に居たいんだ……。

「どうしてこんな場所で教師などを！」

意識を深くまで潜らせていたせいとか、突然の大声にいくらか驚いてしまう。声の主は、廊下の曲がり角……ボーデヴィツヒだ。悪いとは思ったが、こっそりと様子を窺う事に。話し相手はどうやら……千冬姉みたいだ。千冬姉は俺と黒乃の誘拐事件の際、情報提供の見返りにドイツに居た時期がある。思えば2人はその縁なのかも知れない。

「しつこいぞ、今の私は教師……それだけだ。私は自分の道は自分で選ぶ。私の道に立札を建てる権利は誰にもない。」

「……………」

「なんだその目は？言いたい事があるならハッキリ言え。」

「……………それでは僭越ながら。教官、貴女は……織斑 一夏と藤堂 黒乃に拘っていらつしやる。」

「それがどうした？拘るのは当然だろう……家族だからな。」

「っ!？」

……どういふつもりなんだよ千冬姉。仮にそう思ってくれているとして、わざわざそんな事を言う人では無いんだが。千冬姉のそれはまるで、ボーデヴィツヒを挑発するかのようにも聞こえた。そしてそう言われた当の本人は、全身という全身に力を籠めて、悔しがっているのが見て取れた。

「貴女の栄光を台無しにして、何が家族です！特にあの八咫鳥……私の行動に何もやり返して来ない臆病者に！貴女の愛弟子を名乗る権利などあるはずが——」

「ハッ、見当違いも甚だしい。数日前の平手打ち……あの程度の速度、本気で藤堂が避けられなかったとでも？」

「……………」

それは絶対にノーだ。黒乃を知っている人物ならば、避けられなかったわけがないと答えるはず。だからこそ、あの平手打ちをわざと受けたという事の裏付けだ。ボーデヴィツヒもきつと冷静では無かったのだろう。千冬姉にそう返されて、反論の余地を見いだせないらしい。

「ならば何故、あの女は私に何もしてこないのですか。」

「さあな、自分の頭で考えろ。……と言うよりは、そこが解からん時点でお前は藤堂に勝てんさ。何回やってもな。」

「……………」私とあの女の………いったい何が違うのです！同じなはずだ………ただ純粹に

力を求め、高みを目指して覇道を進む……。私とあの女は同じなのに、どうして貴女は

千冬姉は、ボーデヴィツヒに足りていない根本的な何かを指摘しているように見える。それを踏まえて、黒乃と何度戦おうが勝てない……。そう言いたいには違いない。しかしボーデヴィツヒは、納得がいかないのかあくまで食い下がる。その様はどこかまっで欲しい子供みたいだ。

「違うな、お前と藤堂は全く違う。ついでに言えば、私と藤堂も違えば……。お前と私も違う。」

「……………」

「はあ……。ではこうしよう。私からの宿題だ……。お前に足りない何かを見つけてこい。それが出来れば、まあ一歩前進といったところだろ。」

「宿……題……。」

「ああ、そうだ。解つたらもう行け。私もそれなりに忙しいんだ。」

その物言いは教師そのものだが、やっぱり相手が小学生とかそこの対応に聞こえて仕方がない。一応は千冬姉からの命令だと捉えたのか、敬礼を見せた後に何処かへと消えて行く。……。？どうして千冬姉は、その場にとどまったままなのだろうか。その答えはすぐに解つた。

「……で、いつまで覗き見をしているつもりだ？」

「あ、バレたか……流石はちふゆね——」

「……ここでは織斑先生だ。」

授業は終わったうえに人影も無いんだが、それは許されなかったようだ。千冬姉は俺の頭を出席簿で叩くと、何回言わせるんだこの馬鹿が……とでも言いたそうな視線を送る。これでもな、ちゃんと気をつけてはいるつもりなんだぜ？意識してなかったらもつと叩かれていそいだ。

「……ボーデヴィツヒともめたらしいな。」

「……ああ。昔の事を言われて、ちよつと冷静じゃいられなかつた。」

良く……解かつてるつもりなんだ。俺と黒乃が、千冬姉の連覇をなかつた事にしてるなんて。解っているからこそ、人に指摘をされると反発してしまう。それに俺も黒乃も被害者……という事を盾にするつもりはないが、それもまた間違つてはいない。俺はどうするのが正しかったんだろうな……。

人間対話する事を忘れてはいけない……が、ボーデヴィツヒが聞く耳を持つてくれるとも思えない。どうすれば、黒乃の荷と一緒に背負えるのだろう。ずつと一緒だった、ずつと痛みもわけあつてきた。だから今回も、1番の被害者だろう黒乃の手助けになつてやりたいのに。

「黒乃の様子は？」

「……ボーデヴィツヒが何して来ても、それを全部受け止める気なんだと思う。俺や皆を巻き込まないように……。」

「はあ……アイツは、相変わらず人に気を遣い過ぎる奴だ。」

「でも織斑先生……。だから黒乃は——」

「ああ、強い。だからアイツは強いんだ。……あの顔は抜きにしてな。」

ボーデヴィツヒの足りないところって、きつとそれだ。アイツはきつと、人の為の何かをした事がないんじゃないかな。それが悪い事だとは言わないが、少し考えれば見えてくるはず。いや、見て見ぬふりをしているのかも知れない。アイツのあこがれが千冬姉なら、一見そんな部分は想像しがたいだろう。

「ボーデヴィツヒは、単に藤堂へ嫉妬しているだけだ。」

「俺達への反感と、嫉妬と五分五分ってところか……。」

黒乃の八咫鳥というあだ名は、畏怖と嫉妬の入り混じったものだ。ボーデヴィツヒは千冬姉に格別な憧れを抱いている。更にはその嫉妬の対象が千冬姉の栄光を邪魔したとなれば、黙っていられるはずもない……という事なのだろうか。きつと黒乃もそれを解つたうえで、ボーデヴィツヒの仕打ちを甘んじて受け入れると……？

「ホントにそれで良いのかよ……黒乃……。」

「……悩むな馬鹿。所詮お前は馬鹿なんだ……馬鹿は馬鹿なりに、己の信じる道を往け。」

なんて事だ、ほんの数秒に4回も馬鹿と言われた。これはもしや、ギネスワールドレコードなんじゃないだろうか。だが……悲しいかな、千冬姉の言葉は否定できない。だからこそ千冬姉は、悩む暇があるのなら動けつて、そう言いたいんだと思う。この時俺は、小さな頃に言われた言葉を思い出す。

「俺の出来る事を精一杯やる……だったよな。」

「……………」

「千冬姉、俺……とにかく頑張ってみるよ。精一杯……黒乃の為に。」

「ああ、たまには男らしいところでも見せてやれ。そうすれば黒乃もお前を……。」

「俺を、どうした?」

「……いや、なんでもない。」

俺が千冬姉と呼んでも怒られなかったところをみるに、途中から姉としての言葉だったのだろう。そして千冬姉は、何か言いかけて……止めた。黒乃が俺になんなんだろう? 凄く気になるが、追求するとまた厄介な事になりそうだ。じゃあとりあえずは、前半の部分だけ有難く受け取っておこう。

「ではな、励めよ劣等生。」

「お、おっすー！」

激励の言葉なのだろうが、少しは言い方を考えてほしいものだ。だけど、千冬姉なりというやつだろう。俺は元気な返事をする、千冬姉はよろしいとでも言いたげに去って行く。……出かけてみてよかった。おかげで、なんとかモヤモヤはもうない。ありがとう千冬姉。俺は去り行く姉の背に、眩くようにそう告げる。

第39話

「ただいま……つてあれ？俺、鍵は締めたはずだよな……。」

千冬姉と遭遇して、トンボ返りで自室に戻った。ナチュラルに部屋へと入れたわけだが、俺の記憶では確かに鍵は締めたはず。となれば……シャルルが帰って来たんだろうな。姿が見えないとなると、今はシャワーでも浴びてんのかも。うん……水音が聞こえるし間違いない。

……そう言えば、ボディーソープが切れていなかっただろうか。いくら男と言えど、何も使わず水だけつてご時世じゃないよな。特にシャルルは気を遣ってそうだし、届けてやる事にしよう。所定の位置から詰め替え用ボディーソープを取り出すと、洗面所兼脱衣所になっているスペースへと足を運んだ。

「ん、調度良かった。これ、替えのボディーソープ……？」

「い、一夏……？」

「……………ん？」

洗面所からシャワールームに声をかけようと思ったらタイミングよくドアが開いたわけで、俺はボディーソープを捜しているものだと思った。そうやってシャルルの姿が

あるであろうドアの方へと目を向けると、どういいうわけか女子がそこから出ようとしている謎の状況だ。

しかもいわゆる生まれのままの姿という奴で、率直に言ってしまうえば全裸である。あ、シャワールームに居たんだから当然か……ハハッ。いや、待て……ハハッじゃないだろう。本当にこれはどういう事で……あれ？なんかこの女子、何処かで見覚えがあるような……。

「キャッ!？」

お互いに情報の処理が追いつかなくてフリーズ状態だった。だが、謎の女子は俺よりも早く復活して急いでシャワールームに戻って行く。……それはそうか、男にマジマジと見られて平気なはずがない。まあ……その見ていた奴とは間違いなく俺の事だが。

「……詰め替え用、ここに置いてくから。」

「うん……ありがとう……。」

かくいう俺は、未だに頭の整理が追いついていない。そのせいか、恐らく後回しにすべき事を行いつつ脱衣所を後にしてしまう。……とりあえず、あの子が出てくるまで待っているか。あ……そう言えば、シャルルは何処に……っておい、もしかしなくても……あの子ってシャルルなんじゃ……？

「上がったよ……。」

「……………」

シャルルっぽい女子（仮）は、思ったよりも早く出てきた。きつと俺に気を遣ったんだろう。さて、今はジャージを着ている事だし……少しばかり観察させて貰う事にしよう。黄金と呼ぶにふさわしいブロンドの髪に、アメジストのような瞳。いや、ここだけとつてもどうやったってシャルルだろ。

「その、シャルル……だよな。」

「うん……………」

「…………話、聞かせて貰っても大丈夫か？」

「もちろん。こうなったからには、僕はキミの質問に答える義務があるもん。」

「まあその前に、見て悪かった。」

「アハハ、仕方ないよ……キミは僕を男だつて思つてたんだし。」

本人に確認を取ると、肯定の反応が示された。つまりは、シャルルは男のふりをして学園へやって来た事になる。なにやら事情があるのは明白で、責めるつもりはないが聞くべきではあると俺は思った。だが事情聴取の前に、うら若き乙女の裸体を見てしまった事をキチンと謝罪しておかなければならない。

「じゃあ、何処から話そうかな……………」

俺とシャルルは並んでベッドに腰掛けると、それぞれ聞き手と話し手の役割をこな

す。シャルルは俯き加減だったが、確かに自分の素性を語ってくれた。自身が愛人の子である事、突然父親に引き取られテストパイロットになった事、父親の会社経営が危うい事、広告塔として注目を浴びるために男装をしていた事、そして――

「それと僕は、白式のデータを盗ってくるよう命じられたんだ。」

「……………」

何処か悲しそうにそう語るシャルルに対して、俺には返す言葉がすぐには見つからなかった。いや……………きつと何を言っても気休めにしかならないはず。数回しか会った事が無いと言っていたが、実の親にそんな命令をされたのだから。俺の胸にあるのは、確かな憤りだ。……………だが、それをシャルルに露呈しても何の意味もなさない。

……………自分に出来る事を、精一杯してやれ。幼き日の俺に千冬姉が送ってくれた言葉だ。考えろ、意味のある行動をしろ、シャルルに今何をしてやれるかを考えるんだ。だが、さつき千冬姉に言われた通り……………俺は馬鹿だ。だから俺に出来る事って言ったら……………

「シャルル、少し俺の話をしていいか？」

「え？ うん……………それは構わないけど。」

「そうか、ありがとう。……………俺の両親な、俺と千冬姉を捨てて蒸発したんだ。」

「っ!？」

いきなりな俺の告白に、シャルルは大層驚いているようだ。それと、いきなり何を言
い出してるんだコイツは……みたいな反応でもある。そりやそうだ、親の話ではあつた
とはいえ……いきなりこんな事を言われても困るだろ。だけど、俺はシャルルに伝えた
い事がある。

「でも、そんな事はどうでも良いんだ。そんな薄情な奴ら親だなんて思った事は無い。
だって俺には、血の繋がりはなくても……本当の両親が居てくれたから。」

「もしかして、藤堂さんのご両親？」

「ああ、そうだ。物心ついた頃には世話になっててさ、あの人達が俺の両親なんだって疑
いもしなかった。」

それこそ、血の繋がりが無い事を知った時は……子供ながらにショックを受けた覚え
がある。泣いて、喚いて……父さんと母さんをかかなり困らせたり。だけど、あの時に
父さんに言われた言葉は……しっかりと胸に刻み込まれている。

『血の繋がりがだけが家族じゃない。だってそれなら、僕と母さんは家族じゃないってこ
とになる。大切なのは、一夏くんがどう思ってるか……じゃないかな。』

『……おれが……?』

『うん、そうだよ。僕はね、一夏ちゃんと千冬ちゃんとは本当の息子と娘だって思ってる。だ
から家族だ。違うかい?』

『ちがわない……とおもう。』

『自分がこの人が家族だつて思つていたら……その人は家族つて事で良いんだよ。じゃあ一夏くん、1つ聞かせてくれないか？一夏くんにとって、いったい僕はどう映つてるかな。』

『とう……さん……。とうさんは、おれのとうさん！』

……いかな、思い出しただけで目頭が熱くなつてきた。とにかく、あの言葉があつたからこそ……俺は家族とはなんたるかという観点がある。黒乃の両親は、俺にとつて父さんと母さん。千冬姉はもちろんだが、黒乃だつて俺の家族。それをあの^{父さん}の人から教えて貰つた……。

「……良い……人達なんだね。」

「ああ……。だけど、俺の父さんと母さんも……もう遠くへ逝つちまつてな。……交通事故だつた。」

「そ、そんな……!?!」

「……その交通事故がきっかけで、黒乃もあんな事に……。……いや、それはまた今度で良いな。」

父さん達の事故は、黒乃の現在に大きく影響しているが……今はそちに話を移すときではない。つまり、俺は亡くなった父さんの言葉を借りたいつて事だ。重要なのは、

シャルルがこれからどうしたいか。ただ命令通りに動くんじゃないか。シャルルが父をどう認識するかだ。

「それは……解らないよ。あの人が、僕……ううん、お母さんの事をどう思っていたのか……それを知らない限りは。」

「……解った。それなら今はそつちはなしだ。じゃあシャルルはこれからどうしたい？」

「僕は……。僕はここに居て、皆ともつと一緒に笑いたいな。」

「そうか。だったらそれで良い。決心がつくまで、シャルルはずっとここに居て良いんだ。俺も……シャルルと一緒に笑ってたい。」

俺がそう言うと、シャルルは両手で顔面を隠した。……そうか、辛かったよな……。精神的には成長したとはいえ、俺達なんてまだまだ子供だ。それで良い……泣きたいときには泣いて良いんだ。悲しい涙も嬉しい涙も、それを止める権利なんて誰にもない。俺は耳まで赤いシャルルの頭を撫でて慰める。

「無理しなくたって良いんだぞ。」

「な、泣いてないよ……照れてるの！」

「そうか？」

「そうだよ、一夏があんな事サラツと言うから……。それより、僕がここにいつまでも居

るのは無理なんじゃないかな。本国に呼び戻されたりしたら……。」「ああ、その事だったら——」

　I S 学園特記事項第 21、I S 学園に所属する者は外部からのあらゆる干渉を受け付けない。……という裏技があるから、卒業ギリギリまでは悩んでいられる……。……という事だ。それを説明しようとする、バアン！と凄まじい音を響せ自室のドアが開く。……あ、鍵かけんの忘れてた。そしてそこに立っていたのは……。

「く、黒乃……。」

「あ、あわわわわ……！ー」

「……………」

俺の姉兼、妹兼、幼馴染の……藤堂　黒乃だった。



（ん……もうこんな時間か。）

ふと PC の端にある時計に目をやると、かなりの時間が経過していた。部屋に戻ってからずっとアニメを見ていたが、少し疲れてきたかな……。無表情ながらも欠伸は出るもので、俺の静かな声でふわあ……と息を吐く音が室内に響く。ん……飯時かな、そ

ろそろお腹減ってきたや。

というか、イツチーは大丈夫だろうか……。考え過ぎ等々のせいで、しょぼくされてなければ良いけど。うん……。少し様子を見て、ついにご飯に誘ってみよう。そしたらマイエンジェルも一緒に……。って、マイエンジェル？ちよつと待とうか、俺は……。マイエンジェル関連で何か忘れているような……。

(マイエンジェルが来て5日……。それでラウラたんが絡んできたのなら、マイエンジェルの正体バレイベントの発生タイミング！)

ああ、なんて事だ！よりによって、このイベントを忘れるなんて！場合によっては、マイエンジェルの全裸を見るチャンス……。こうしちゃられない！制服のままにくつろいでいたため、急いで自室を飛び出た。そしてお隣である1025室の扉を確認……。 おっ開いてんじゃくん！

失礼だとかは百も承知。それだけ俺にとっては一大事なのである。そういうわけで、1025室の扉を開帳。すると俺の目に飛び込んできたのは、ベッドに座るイツチーと……。ジャージ姿のマイエンジェルだった。つまるところ……。遅かったという事になる。ああ……。見逃してしまったかあ……。

「く、黒乃……。」

「あ、あわわわわ……！」

「……………」

「その、これはほら……違うくてな。シャルルって美少年だろ？だからちよつと服に丸めた新聞紙詰めて女装ごっここというか……。」

2人の様子をじつと見てみると、なんだかイッチーが苦しい言い訳をし始める。まあ……そうだよな。原作でもマイエンジェルが自ら正体を明かすまでは、誰にも言わずに隠し通していたんだから。うゝむ、どうにかして2人……というか主にイッチーを落ち着けさせた方が良さそうだな。

「良いよ、一夏。藤堂さん、最初から気づいてたみたいだから。」

「そ、そうなのか黒乃?!」

「……………」

マイエンジェルの半ば諦めたような言葉に、イッチーは驚いた様子で俺に問いかける。それに対していつも通りの無言で頷ぐが、内心は動揺しまくりだ。ま、まさか……女子だと知っているとこのを見破られていたとは。でも……あくんとかやつてたし、流石に露骨過ぎたのだろうか。

俺が肯定の意思を見せるや否や、イッチーはマイエンジェルにいかような事情があつたかを力説してくる。それも知ってるんだけど、これこそ悟られると面倒だ。俺はいかにも初耳ですよというような雰囲気醸し出しつつ、イッチーの弁論に耳を傾ける。そ

の間のマイエンジェルは、庇われる事が嬉しそう。……畜生め。

「……つて事なんだ。だから頼む、シャルルを責めないでやってくれ！」

「一夏……。」

(んく……そつか、原作と違って父親との蟠わだかまりに決着をつけたいって言葉は引き出したんだ。)

「藤堂さん、それ僕の制服とコルセット……。え、何？何？着がえろつて言いたいの？わ、解ったよ……。」

マイエンジェルがそう決めたんだつたら、俺も全力でキミを手伝うよ。だから……やはり鷹兄を頼る。本当だったら、おいそれと……ド○えもん感覚でそんな話を持ちかけられる人じゃないつてのは理解が及ぶ。だから断られたらそれまで。ただし、力を貸して貰えるんだつたら鷹兄になんだつてしてみせる。

そういうわけで善は急げ。早速鷹兄の元へと向かいたのだが、それにはマイエンジェルが男装をする必要がある。俺が男装セットをグイグイと押し付けると、着替えてほしいという意図は伝わった。しかし、波々といった様子でマイエンジェルは脱衣所に入って行く。

「……黒乃、シャルルをどうするつもりなんだ？」

(大丈夫、悪いようにはしない。だからイッチー……俺を信じて。)

「解った。黒乃がそう言うんだったら、俺は黒乃を信じる。」

イツチーは、訝しむ様子で俺へそう告げる。それに対して俺は、目で信じてくれと訴えた。するとどうだ、一言も発してないのに言いたい事が伝わった。うん、伝わるって素敵だね。俺は、俺とイツチーの間に確かな家族の絆を感じた。いや、より一層深まった気さえするよ。

「えと、着替えただけ……これから何処かへ向かうのかな？」

（よくし、すぐ行こう。鷹兄も待つてはくれないし。）

「わっ!?ひっ、引つ張らなくても逃げないよ……?」

「まあシャルル、今は黒乃を信じてやってくれ。」

着替え終わったマイエンジェルに歩み寄り、その手を掴んでさっさと1025室を出た。強引で悪いけど、あまり時間をかけるのはまずいからさ。俺がズンズンと突き進むのに合わせて、マイエンジェルは慌てて着いてくる。イツチーは、その様子を何処か微笑ましげに少し後ろを歩いた。

はてさて、鷹兄の部屋は寮の職員用のフロアと。近江重工関連で何回か訪ねたが、今もタイムング良く居てくれるといいけど……。しかし、マイエンジェルの表情が曇ってくるな。きつと、職員のフロアに向かっていると解ったからだろう。だけど大丈夫、鷹兄だったらきつと力になってくれるさ。

「はい、到着！ すんまつせくん、鷹兄いらつしやいますかー！」

「あれ、ここ……？ ここ……？」

「はいはい、今出まく……って、藤堂さん。それに織斑くんにデユノアくん。3人揃って、いったいどうしたんだい？」

「黒乃……どうして近江先生のところに来て来たんだ。」

鷹兄の部屋の扉を叩くと、しばらくして家主が顔を覗かせた。俺達の姿を確認した鷹兄は、珍しい組み合わせだねとでも言いたげだ。そして、さっきまでの穏やかさはどこへやら……イッチーは凄く機嫌が悪そうだ。嫌いなのかも知れんけど、今はこの人が一番頼りになる人だと忘れないように。

「もしかして藤堂さん、近江先生に力になってもらおうと？」

「ちよつと待った待った。僕を置いてきぼりにしてほしくないなあ。とりあえず3人も入ってよ。話は中でゆっくり聞くから。」

話が呑み込めないから困っているんじゃないかと、鷹兄は仲間外れにしてほしくない感じだ。どちらにしたって、隔離空間でなければ話は進められない。俺が容赦なく鷹兄の部屋に侵入すると、後ろの2人は顔を見合わせてから恐る恐る入室した。

部屋の様子は、学生寮の部屋と変わりはない。ただ、鷹兄の部屋には資料が多いのだ。仕事用であろうデスクの上にも山積みだったけど、幾分か量が減っている。鷹兄が適当

に腰掛けてくれと言うと、イッチーとマイエンジェルはベッドに腰掛けた。俺は……立ちっぱなしで良いや。

「……さて、これでもう白々しいマネをしなくて良いかな。まあ誰が聞いてるか解からないし、警戒は怠らないようにね。っていうかデュノアくん、だから気を付けてって言ったのに。」

「ア、アハハ……近江先生の言う通り、気を付けててもどうしようもない事態が起きちゃいまして。」

「ちよつと待て、アンタ……知ってたのか!？」

「うん、そりゃね。というか、僕が知らないはずないじゃない。」

鷹兄とマイエンジェルのやり取りは、なんだか意思の疎通が取れていて……俺は思った、鷹兄が知らないはずないと。い、今更かよ……マヌケもいい加減にしようぜ俺。そっか……マイエンジェルは、独自に鷹兄へと接触してたか。それでこの様子を見るに、鷹兄はマイエンジェルを応援してたくらいみたい。

「まあ……理由は知ってても、デュノアくんの事情は知らないけどね。その辺り、詳しく聞かせてくれると嬉しいな。」

「は、はい……。実は——」

鷹兄は、マイエンジェルの目的までしか知らないらしい。それはそうか、身の上話ま

で知ってたら流石に背筋が凍る。マイエンジェルの話を書く鷹兄の顔は、いつも通りで締まりがない。けれど、相槌を打つ声色は真剣そのものだった。やがてマイエンジェルが話しを終えると鷹兄は、安っぽい回転椅子に深く座り直す。

「……なるほどね。そっか、お父さんの……。……デュノアくん、キミはお父さんの真意を知りたいって事で良いのかな。」

「……はい。僕は、お父さんと話してみたいです。」

「そうかい。で、藤堂さん。デュノアくんを僕の所に連れてきたって事は、僕の力で2人をなんとか引き合わせろって事で良いかい？」

(そういう事になりますね。)

おや、なんだか鷹兄の様子が……。なんだろ、元気が無いつてか……。思うところでもあるのかな。非常に覇気のない様子で、鷹兄は俺とマイエンジェルに質問を投げかけた。それに対して、俺もマイエンジェルもどちらも肯定。すると鷹兄は、またしばらく考え込んだ様子を見せてから口を開いた。

「……うん、解った。なんとかやってみるよ。」

「!？」

「あ、あ……。あの！それこそ、近江先生に損得はないですよ!？」

「……俺は単純にアンタを信用できない。」

「そうかい？僕は純粹に手伝いたって思ってるんだけどなあ。」

いや、ゴメン鷹兄……こればかりは俺もフォローできないや。きっきの間がさ、どーしても……悪巧みでもしてんのかって思っちゃった。あまり良いとは言えない俺達のリアクションを前に、鷹兄はうむむと唸ってどうするべきかを思案する。

「織斑くん。信用に足る言葉があれば……どうだい？」

「それは、まあ……内容にもよるが。」

「……あまり人に話すような事じゃ無いんだけどね。少しだけ聞いて欲しい。」

「……………」

「僕とデュノアくんの事情は、ある意味で似てるのかも知れないね。」

……あの鷹兄が、何か物寂しげな表情を浮かべている。キャラじゃないだけに、よほどの事情がある事を俺達は察した。鷹兄はマイエンジェルと自身の状況が似ていると前置きすると、ゆっくりと口を開く。次いで紡がれる言葉は、俺としては想定してなかった内容だ。

「僕の母は、それはそれは自慢の母だった。気品に溢れて、慈愛に満ちていた。父さんもそこに惚れたって言ってたっけ。でも、そんな母は……もう居ない。」

「……………亡くなったのか？」

「いや、生きてるよ。だけど僕は、あんな人……あんな物を母さんだって認められないん

だ。」

「それって、どういう意味ですか……?」

「……母さんは、ある日を境に徐々に別人になつていったよ。……僕の母さんは……過激な女尊男卑主義者だ。」

辛そうにそう語る鷹兄の言葉に、純粹な衝撃を覚えた。ある日を境つてのは、つまるところ白騎士事件か……。鷹兄は取り繕つたような笑顔を見せ、たば姉に恨みはないしむしろ科学者として尊敬していると語つた。それに関して嘘ではなさそうだけど、でも……やっぱり辛そうに見える。

「……僕と父さんには普通に接してくるんだけどね。それ以外つてなると……酷いもんさ。」

「アンタが説得したらどうにかならないのかよ?」

「ならないね。……いや、そう断言して良い資格は僕にないか……。だからこそ僕は、デユノアくんを助けたいって思うんだ。」

「僕を……。」

今日の鷹兄はどこか百面相というか、今度は自嘲するような笑みを浮かべる。そうして話をどうして得するわけでも損するわけでもないのに、マイエンジェルを助けてくれるかという方向へもつていく。引き合いに出されたマイエンジェルは、まだまだ関連性

が見えないらしい。

「僕と父さんは、母さんから逃げています。もう手遅れだって、そう認めたくないんだ。だから母さんにハッキリと何も言えない。」

「それは……仕方がない事だと思います！だって——」

「デュノアくん。キミはまだどうにかできる余地がある。そして、どうにかしようって勇気がある。だから僕は、自分にはできない事の……その手伝いをしたいって思うんだ。……嘘っぽく聞こえたらゴメンね。それはきつと、僕の日頃の言動があつてだろうから。」

「っ!?……悪かった。まさか、アンタにそんな事情があるなんて思いもしなくて……。」

鷹兄は、マイエンジェルの言葉を遮つて皆まで言わせない。……そうだね、何言われたって……そんなの慰めにならないだろうから。鷹兄が呟くように謝ると、イツチーは思わず謝罪を述べる。それに対して鷹兄は、キミが気にする事じやないと優しい言葉で返した。

……何と言うか、空気が重い。こんな空気感になるのは解つてたけど、流石に胃が痛くなつてきた。ふと視線を泳がすと、台所の方にお茶類が見えた。……前来た時に、自分の部屋だと思つて好きにしていからね……なんて言われたし、少し茶でも飲んで落ち着こう……。

そう思つて歩き出そうとすると、俺の改造制服として自作したスリット付きロングスカートを踏んづけてしまう。当然ながら俺はよろける訳で、ほぼ真正面にいた鷹兄に抱き着く様な形になってしまった。鷹兄は椅子に座っているので、俺の肩に顔を埋める感じの状態だ。

「……ゴメン、ありがとう黒乃ちゃん。ありがとう……。」

「藤堂さん……。」

「……………」

おおつ、ちよつと鷹兄……なんで腰に腕を回して……もしかしてこれはアレか、鷹兄に胸を貸すみたいに思われた？ いや、別に……慰めようと思つたわけじゃ……え、ええい……ヤケクソだ。俺は鷹兄の後頭部に手を添えるようにすると、更に肩の方へと押し込む。ああ……なんで男慰めんとアカンの……死にたい……。

「……ありがとう。もう落ち着いたから……。さて、話を戻そう。2人共、これで僕は信用してもらえたかな？」

「もちろんです。」

「ああ、俺もだ。」

「そうかい、ありがとう。じゃ……僕がデユノア社に商談を持ちかけるよ。デユノア社長は必ずそれに乗る。」

鷹兄の腕に込められた力が弱まったので、すかさず俺は離れた。いつもの調子に戻った鷹兄は、2人に確認をとる。で……商談か、今のデユノア社は藁をも掴む思いだろうからね。近江重工に何の利益もなさない商談だから、怪しんできても必ず乗る。向こうも話を聞く価値くらいはあるはず。

「えっと、僕がそれに着いて行く……って事ですか？」

「平たく言えばそうだけど、藤堂さんと織斑くんにも手伝ってもらいたいんだよねえ。」

「俺と黒乃に？あまり役にはたてないと思うが……。」

「いや、頭数は多い方が良い。とはいえ、大人数つてわけにもいかないから……僕ら4人で当たるべき事案さ。」

まあ……鷹兄の言葉の裏には、これ以上の人間を巻き込むわけにはいかないってのもあるだろう。かといって、俺とイッチーが参加しないと頭数が足りないって話だな。俺はマイエンジェルのためなら努力は惜しまない所存。イッチーも、言われなくても力になる気が満々らしい。

「とにかく、あらゆる手を尽くす事を約束するよ。絶対にキミとお父さんを会わせてみせる。」

「は、はい！ありがとうございます！」

「とはいえ、色々と準備しなきゃだし……決行は早くて夏休み中になるかな。」

夏休み……か、まあ軽いフランス旅行とでも思っておこう。パスポートは、ドイツに行つたときのがまだ有効期限内だったかな。さて、これで後戻りはできなくなつた。気合い入れて、いっちょ原作改変といきますか。それもこれも、マイエンジェルが安心して暮らしていけるために。

「それじゃ、今日のところは解散しよう。また何かあつたら声をかけるから。」

「解つた。黒乃、シャルル、帰ろうぜ。」

「あ、うん。失礼しました。」

(鷹兄まつたね〜)

鷹兄は、パンツと手を叩いてからそう言う。解散になると同時に、イツチーとマイエンジェルはベッドから立ち上がった。俺も2人の後に続くと、鷹兄のヒラヒラと手を振る姿が見える。……いつも通りに戻つたみたいで安心したよ。俺は鷹兄に会釈すると、再び2人を追いかけ始めた。



「……………」

回転椅子の背もたれに、思い切り体重を預ける。ああ……熱い。まるで病魔にでも侵

されたかのような感覚だ。体温の上昇と激しい動悸、その感覚が……堪らなく心地いい。その心地よさこそ、僕の黒乃ちゃんに対する想いの現れ。でも解ってる……キミが、そんなつもりで僕を抱きとめたんじゃないって。

さつきまでの僕はきつと、子供そのものだった。甘える場所を探して、構ってほしい盛りの小さな子……。だからこそ黒乃ちゃんは、僕を慰めた……。子供としてね。だけどキミがどう思つてようと、キミに惚れてる僕からすれば……。それはますますキミに惹かれる要因にしかならないよ。

……人に甘えさせてもらったのは、いったいいつ以来だろう。優しかったころの母さんだって、面と向かつてはされなかつた気がする。……天才だともてはやされ、神童だとかまをすられる人生だった。僕としては、少し違う視点で物事をこなしているつもりでも、周囲の人から見れば特別な事で……。

いつしか僕は、悟ってしまったのかも知れない。僕の生き方に甘えは許されないと、何処か壁を作つていたのかも知れない。でもキミは、そんなのおかまいなしだね。それが、僕にとってどれだけ喜ばしい事か……。キミは自覚がないだろう。黒乃ちゃん、キミは……僕を僕として見てくれる数少ない人だ。

……考えれば考えるほど、想えば想うほど……。キミが好きで好きで堪らなくなる。天才でも神童でもない。意地悪で捻くれ者で機械好き。そんなただの近江 鷹丸として

の僕をずっとキミに見ていてほしい。そうすれば、僕は僕でいられるんだ……さつきみ
たいに。キミの温もりを一番近くで感じていたい。

「キミが……欲しい。」

そう、欲しい。黒乃ちゃんの全てが欲しい。前々からあつた確かなその想いは、僕の中でもっと大きな感情へと昇華してしまつたようだ。絶対にキミを手に入れてみせる。僕が僕らしくある人生を、キミと共に歩んでいきたいから。まあ……とりあえずは、デュノアくんの件をどうにかしないと……。

「もしもし、鵜さん？ うん……ちよつと調べておいてほしい事があつて。」

僕はポケットから携帯を取り出すと、頼れる社長秘書へと連絡をとつた。さて、夏休みまで忙しくなるぞ。社長業、教職、デュノアくんの件を同時にこなさないとだから。まあ……どうにかしてみせよう。なんとつて僕は、天才なんだから……ね。

第40話

シャルルに関しての今後が話し合われてから、数日が経過した。多くの者にとって、いつもと変わらぬ日常が刻々と過ぎていく。……が、日に日にその様相は変わりつつあった。主にピリピリした方向へと……だ。要因としては、とある侍ガールと鈍感王のやり取り故なのだが……尾ひれが2枚も3枚も着くのは周囲の人間のせいには無い。

「あ。」

「……………」

放課後の第3アリーナにて、英国と中国の代表候補生がバツタリと顔を合わせた。とりわけ、この2人もとある噂話に踊らされている。そのためにこうして誰にも悟られぬよう特訓をしようと思っていたセシリアと鈴音なのだが、所詮は同じ穴のムジナという奴だろう。

「奇遇じゃん。アタシは学年別トーナメントに向けて特訓しようかと思っただけだよ。」

「ええええ、それは奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ。」

場とタイミングが一緒というだけで、互いの腹の中は丸見えだった。そう……キー

ワードは、学年別トーナメントである。その名の通り各学年ごとに行われるトーナメント方式の大会なのだが、どういうわけか優勝すると織斑 一夏との交際権を得られるという話になっている。

この噂が広まった事に、侍ガールはどうしてこうなったと頭を抱え込むばかり。鈍感王に至っては、そんな噂が広まっている事すら知らなかったり。とにかく、その噂が嘘でも真でも……セシリアと鈴音が黙っていられるはずもなかったという事だ。笑顔を浮かべて相対する2人は、水面下で火花をスパークさせた。

「なら調度いいわ。……前哨戦といこうじゃないの。」

「フフツ、良いでしょう。返り討ちにして差し上げます。」

特訓といっても、相手が居る居ないのでは成果に雲泥の差がある。口では前哨戦がどうのと言っている2人だが、実のところ本音半分。残りは、単に一緒に訓練でもしないかと提案するのが癪なのだろう。鈴音の言葉にセシリアは乗った……となると、候補生同士の戦いの幕開け……とはならなかった。

「!?!」

セシリアと鈴音が、専用機の主兵装を構えた瞬間ほどの事だ。両者の機体には、対峙しているのとは別の者からの攻撃が警告される。しかし、そこは腐っても代表候補生。瞬時に攻撃を察知すると、慌てず騒がずその場を飛び退く。セシリアと鈴音の合間を縫

うかのように、砲弾が過ぎ去っていった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……！」

「……………」

2人を攻撃したのは、ドイツの最新鋭第3世代型IS『シュヴァルツエア・レーゲン』を纏ったラウラだった。その証拠と言わんばかりに、リボルバーカノンの砲口からは白煙が立ち込める。セシリアも鈴音も、忌々しそうな表情でラウラを睨みつける。

鈴音に至っては、闘争本能を駆り立てられた野生動物さながらな風体だ。彼女のトリードマークたるツインテールが、まるで逆立つて見えてしまう。それは……自身の親友と想い人が逆恨みされているからだだろう。特に前者、ピンタされたのは知っているし、生身で攻撃され掛ける姿も見た。親友に対してそんな仕打ちをしたラウラは、鈴音にとつてただ敵でしかない。

「アンタ本当……いい加減にしないとブツ飛ばすわよ？この際だからアタシは良いわ……。けどね！アンタが今まで黒乃にしてきた事……忘れたとは言わせない！」

「落ち着いて下さい鈴さん。たかだか戦う事しか能のない野蛮人ですわ。わたくし達と同等の言語が通じるかどうかとも怪しい物です。」

「……イギリスのブルー・ティアーズに中国の甲龍か。ハッ、データで見た時の方がまだ強そうだ。」

鈴音は自分が攻撃された事よりも、黒乃の事に対しての怒りをこの場でぶつけた。セシリアはかなりの毒舌をかましながら鈴音に落ち着くように促す。で、ラウラはそれら一切無視して更に挑発的な言葉で反撃してきた。あからさまな挑発なため、まだ2人が釣られる事は無い。

「データでしか物を語れないとは、流石は石頭ドイッの国出身ですわね。」

「つてか、アンタが最新鋭の恩恵受けてるからそう見えてるだけじゃない？新しけりや良いつてもんじゃないわよ。」

「何を勘違いしている。私は乗り手の問題だと言っているんだぞ。」

機体のスペックデータならば、乗り手の影響は受けていないだろうからな。ラウラはそう付け加えて、何処かやれやれとでも言いたげに肩をすくめて見せる。まだ2人とも平気そうだが、セシリアは僅かながらに片眉をひくつかせた。もちろんラウラは、その一挙一動を見逃さない。

「気に障ったなら試してみると良い。私は逃げも隠れもせんぞ？臆病者の八咫鳥とは違つてな。」

「……………今……………なんつった……………」

「臆病者の八咫鳥と言ったのだ。失望したよ、多少なりとは見どころのある女だと思つていたが……………私の行動に何もやり返して来ない。挙句の果てには、織斑織一夏馬に縋りつ

いて生きているような醜い売女——」

「オーケー……もう良いわよ、よく解ったから……。アンタは……アンタだけは殺さなきゃ気が済まないってね！」

ラウラが黒乃を引き合いに出したのは、もちろんの事わざとだ。今までの煽りはいわゆる下準備で、こちらが本命であった。黒乃を侮辱する言葉を並べれば、セシリアはともかく鈴音は確実に交戦してくる。ラウラの読みは大正解で、激昂した鈴音は双天牙目を振り回しながら突進していく……が、1本の短刀がそれを止めた。

「っ……今度は何!?!……っ、黒乃……!?!」

「ようやく出て来たか……藤堂 黒乃!」

短刀はまるで鈴音とラウラの間割って入るように、両者の調度中間あたりの地面へ突き刺さる。その短刀が飛んで来た方向を見れば、刹那を纏った黒乃がそこに居た。黒乃は悠然と歩いて行き、地面に突き刺さった紅雨を引き抜いて太もも部に収納した。すると、刹那の左腰にぶら下がっている大太刀……神立を抜けば、ラウラにその切っ先を向けた。

「ちよつと待つてよ、黒乃がそんな事する必要ない!アイツの馬鹿みたいな逆恨み、アンタが気にする事じゃ——」

「……………」

「鈴さん、ここは大人しく下がりましょう。だって、逆ですもの……。」

「……解かったわよ。」

セシリアが言った逆という言葉の意味は、黒乃だからこそやらねばならない……だ。鈴音はその言葉の意味を十分に理解したうえで、それでも悔しそうに黒乃とラウラから距離を置いた。黒乃は、下がる2人に対して……それで良いとでも言いたげに首を頷かせる。

「解りやすい女だ……周囲の人間を襲撃すれば、こうもアツサリ出てくるとは。」

「……………」

「奴らがそんなに大事ならかかってこい！さもなければ、私は決して止まらんぞー！」

「……………」

ラウラにとって、初めからセシリアと鈴音なんて眼中にはなかった。誰だろうと黒乃の周囲の人間が傷つけば、流石の黒乃も黙ってはいない。何故襲撃が読まれたかなど疑問が残るが、それももはやどうだっていい。こうして目標は出てきたのだから。ラウラは、嬉々として黒乃に襲いかかった。



放課後の俺氏は、こここのところ第3アリーナに通うのが日課になっていた。だけど、何も訓練が目的ってことではない。俺の真の目的は、ラウラさんに襲われるセシリーと鈴ちゃんを守る事だ。いろいろと考えたけど、やっぱり俺が関わっているラウラさんに関しての事は……見て見ぬふりをしていられない。

戦いは嫌だ。なるべくなら平和的に行きたいし、襲ってくるから仕返しするのは絶対にありえない。だって、ラウラさんにとってそういう方法しか思いつかなかつたなら……それは仕方がないって俺は思う。ただ、それにセシリーと鈴ちゃんが巻き込まれるのも違うんだ。

何か起きるんだったら、俺1人が被害を蒙こうむればいい。だって、俺が居なくなつて原作は廻つてく。怖くて今すぐ逃げ出したい……けど、友達が傷つくのはもつと嫌だ。……なんて、ただの綺麗事だよな。それでも、今回に限って俺は本気で臨む。せめてあの2人だけは無事で乗り切ってみせよう。

さて、毎日コソコソとアリーナ内に隠れてたわけだが……それも今日で最後になりそう。このギャーギャーと言い争うような声は、間違いなく2人がラウラさんの挑発に引つかかっているのだろう。ハイパーセンサーで確認すると、鈴ちゃんがえらいご立腹である。

(ほい、鈴ちゃんストップ！)

「っ……………今度は何!?……………つて、黒乃……………!?」

「ようやく出て来たか……………藤堂 黒乃!」

鈴ちやんとラウラたんの中間に、紅雨をヒュツと投げつける。もちろんどちらにも当てる気はないので、紅雨は真つ直ぐ地面へと突き刺さった。ラウラたんはお待ちかねだったようで……………。やっぱり、俺もしくはイツチーをその気にさせるためにセシリーと鈴ちやんを……………。

まあなんというか、まんまと釣られちやつてるんだろなあ。でもでも、これが一番最良……………だろ?頭の悪い俺じゃ、単純にこんな方法しか思いつかないけど……………とりあえず、ラウラたんの注意を引こう。俺は鞘から神立をゆつくり引き抜くと、ラウラたんへと突きつけた。

「ちよつと待つてよ、黒乃がそんな事する必要ない!アイツの馬鹿みたいな逆恨み、アンタが気にする事じゃ——」

「……………。」

「鈴さん、ここは大人しく下がりましょう。だって、逆ですもの……………」

「……………解かったわよ。」

俺がラウラたんと交戦の意志を示すと、鈴ちやんがすかさず止めに入ってくれる。それはとても嬉しいけど、俺に関連してるから……………2人には怒ってほしくないんだよ。セ

シリーは俺の想いをくんでくれたのが、鈴ちゃんへと俺の好きにするように説得してくれた。あんがと、セシリー……。

「解りやすい女だ……周囲の人間を襲撃すれば、こうもアツサリ出てくるとは。」
（おろ、俺つてばそう言う評価なんだ……。）

「奴らがそんなに大事ならかかってこい！さもなければ、私は決して止まらんどー！」
（ありやく……ラウラたんつてば良い顔しちゃつて。）

大人しく下がってくれた2人を見守ると、振り返つてラウラたんを見据える。するとラウラたんは、だいたい俺の想像通りの事を言ってきた。……そっか、止まつてくれないか。じゃ、望み通り俺が相手になるよ。そしたら……全部丸く収まるもんね。俺は覚悟を決めると共に、今1度神立を構え直した。

「さあ……これ以上私を失望させてくれるなよ！」

（これは……避けだ。）

ラウラたんは、シュヴァルツエア・レーゲンを低空飛行させつつこちらへ向かつてくる。そしてそのまま右手を突き入れるようにしながら、プラズマ手刀を伸ばす。いわゆるステインガーみたいな攻撃だけに、直線的で避けやすい。俺は身体を捻るようにして、プラズマ手刀は難なく回避。

とはいえ、ラウラたんは一筋縄じゃいかんからね。俺はすぐさま次の行動へと移す。

避けたと同時に、前方へとQ クイック・イクニッションブースト I Bで距離を開ける。そこから上空へと飛び上がると、広い空域を確保する事に成功だ。さくて、こつからが本番！存分に飛び回らせてもらうよ。とはいえ、雷火の出力は抑えとかないとね。

「貴様の土俵だろうがなんだろうが！」

ラウラたんも地上から高度を上げて、だいたい俺と同じくらいの標高だろう。喋ると同時にリボルバーカノンを乱射するもんだから気が抜けない。まあでも、リボルバーなだけに連射力はさほど高くはない。俺は雷火を通常運行で、砲弾を全て避け切ってみせる。ラウラたんの小さな舌打ちが聞こえた。

「チツ………ならば！」

うおつ、来たか!?それまでノンストップで飛行を続けていた俺だが、スピードを落とすと同時に真下へQ クイック・イクニッションブースト I Bで緊急回避。危ない危ない………これがあるから、ラウラたんは温存気味に戦わないと。何が起きたかと聞かれますと、ISきつてのチート武装を使う兆候が見えたんだ。

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー………通称AIC。指定した一定の範囲内に、慣性を全て無力化する結果を張るといってあげつない特殊武装である。ラウラたんが左腕を上げるのが、発動の合図と思ってい。本当は腕を上げなくても発動自体は可能なんだろうけど、ラウラたん的にはその方がやり易いでしょう。

とにかく、クイック・イグニッションブースト Q I B を使うのはなるべくA I Cを回避する用途に絞らないと。

後心配する事は、自分から停止結界に突っ込まないようにする事……かな。よし、そんなじゃ……いつも通りの戦法で行くぞ。動き回って翻弄し、隙があれば接近して叩き斬る。これぞ俺と刹那の黄金パターンさ。

「貴様……この期に及んでまだ逃げるか！」

（まあ落ち着きなつてラウラたん。俺は期を窺つてるだけだからさ、今にこつちからも攻撃を——）

……攻撃、できなくねえ？いつも相手してる人達つて、多少なりの隙があるから
クイック・イグニッションブースト Q I B ないし O I B で接近してズバツと斬れちゃうわけよ。接近の

タイミングは、ゲームで鍛えてきた判断能力に任せてるんだけど……ラウラたんには隙が全く見当たらない。厳密に言えば近づけはするだろうけど、多分離脱が間に合わなくてA I Cに捕まるね。

（……攻撃、できなくねえ？）

「クソツ、クソツ、クソツ、クソツ！なんなんだ貴様は……つくづく癩に障る奴め！」
 （いやいやいや、違うんだって！）

何そのさ、俺が舐めプで避けるしかしてないみたいない方は！俺だって一生懸命やってるよ、それこそ射撃武器があれば攻撃してます！だからそんな怒り方せんとい

てえ……。う……。無理にでも攻撃を仕掛ける？ いや、でも喰らうと解つてて前に出たくも無いし……。

そうやって悩みながら回避を続ける。しかしだ、刹那は短期決戦型のISで燃費は白式並に最悪だ。エネルギーは雷火にも個別に詰まれているとはいえ、クイック・イグニッションブースト Q I B を多用しているせいでもうすぐすつからかんだ。雷火のエネルギーが尽きれば、残りは刹那本体のエネルギーを削らないとならないとだから……。

(すくまずい……。)

「貴様が戦う意思を見せないのならば——」

「そこまでだ、ボーデヴィツヒ！」

「ほう？ 調度いいところに来たな。これならどうだ、藤堂 黒乃！」

けたたましい音が聞こえ、青白い光が背後で起きた。何かと思えば、イツチーが零落白夜でアリーナのシールドを破壊したらしい。それをつまみ、零落白夜の特性を知ってるな!?

きっと今のは最大出力……そうなると、今の白式に絶対防御用へ回せるエネルギーはほとんど残っていない！ クイック・イグニッションブースト Q I B を多用したせいで、刹那だつてほとんど同じ状態だ。刹那の残りエネルギーで身代りになつてあげられるか？ だけでもバリア貫通

したらひとたまりも……。

（ああ……もう！イッチー守るのが先決！後は野となれ山となれ！）

「……黒乃ならそうするって思ってた。だけど——」

（え……ちよつ、何して……!?!）

「それは男の役目だって、相場が決まってるんだよ。」

「喰らえ！」

俺は自分に対するダメージを覚悟で、イッチーへ向かって突っ込む。そのまま体当たりでも何でもして、イッチーをリボルバーカノンの射線上からはずらす……つもりだったのに。イッチーは雪片を投げ捨て、しっかりと俺を抱き留める。そのまま俺と前後ろが入れ替わるように反転すると……その背でリボルバーカノンの砲弾を受けた。

「ぐああああっ！」

（あ……う？え……う？嘘……嘘っ……!?!）

イッチーの叫び声が耳に届いた瞬間、頭が真っ白になった。刹那の制御なんて保つてはいられず、イッチーの腕に抱かれたまま一緒に墜落してしまう。地面に着いて状態が安定すると、俺は理解の及ばない頭のままでイッチーの背をまさぐるように触る。

（イ、イッチー……背中……撃たれて!?!）

「だ、大丈夫だ黒乃……心配するな。1撃は貰っても良いようにエネルギーの調整はしておいたから。」

(でも……！)

「……黒乃が無事で良かった。」

つゝ……!? あ、あれ……何だコレ、すつごい今……胸がキュンつてなった……いや、いやいや……今のは違う。だって私がイツチーにときめく訳が……つてえ! なんかなチュラルに私つて言つちやつた! だ、だって……イツチーガ私の頬を撫でながらそんな事言うから……!

「貴様らのその傷の舐めあいがつ! 見ている一番腹が立つ!」

「一夏が入つちやつた時点で、もう約束も意味ないわよね……黒乃!」

「デユノアさん、お2人を頼みます!」

「任せてよ! ほら一夏、黒乃、掴まつて!」

「ああ、サンキュー! ほら、黒乃……。」

うっさい……うっさい! 今は自己嫌悪中でそれどころじゃないの! ああもう……な
んでさ、イツチーつてそんなキラじゃないじゃん……怒りのままにラウラたんへ突つ
込むタイプのはずじゃん。それが、私を守るのを最優先して、無事で……無事で良かつ
たつてあんな……慈しむみたいな顔して! ああ、畜生……なんでドキドキしてるの私は
!

つて、また私つつて……! オ、オーライ……少し落ち着こうか私……じゃなくて俺。

とにかくシールドエネルギーの切れたに等しい俺とイチチーを援護するかのように、セシリーと鈴ちゃんがラウラたんへ攻撃開始した。そして、俺達の回収役はマイエンジェル。俺もイチチーも専用機を解除して、ラファールの腕に掴まれ運ばれる。

「貴様ら、私の邪魔をするな！これは私と藤堂 黒乃の戦いだ！」

「それなら……もう終わりだ。どう見たって黒乃の負け、お前の勝ちじゃねえか。黒乃、お前もそれで良いだろ？」

（ああ、はい……もうなんでも良いです……。）

俺達が離脱したと同時に、セシリーと鈴ちゃんも攻撃の手を止めた。きつと2人は、なるべく穏便に済ませようとした俺の気持ちを尊重してくれたんだろう。それはイチチーも同じなようで、とにかくこの場合は丸く収まるように話を進めようとしてくれる。ただ、今は絶賛自己嫌悪中なので……上の空気味に首を頷かせた。

「なっ……ふざけろ！そんなのが認められるはずが——」

「だったら、別のところで雌雄を決しろ……ガキども。」

当然ラウラたんからすれば納得のいかない話であって、おかまいなしに攻撃を再開しようとしたところで……空気を氷つかせるような声が響いた。そこに現れたのは、言わずと知れた鬼教官……ちー姉だ。そう言えば、模擬戦するのは勝手だけど、バリア破壊する事態は見逃せないとかだっけ。

「教官!？」

「織斑先生だ。近々学年別トーナメントがある……それまで全員大人しくしていて貰おうか。藤堂、学年行事ならば……お前も手加減はせんだろう?」

いや、別に今回だって手加減してたわけじゃないんですけどね。まあ良いよ、今は面倒なだけだからとにかく肯定しておこう。俺が首を縦に振ると、ちー姉はよろしいと答える。そしてすぐさま、ラウラたんにも同意を求めた。ラウラたんは渋々つぽく従うと、ちー姉はこう締めくくる。

「それでは、これ大会本番まで一切の私闘を禁ずる。解散!……それと織斑。」

「は、はい!」

「上出来だ。良くやった。」

「つ……!……ああ!」

なんだろう、最後の2人のやりとりは……。あれかな、姉弟だから解るって奴? 何だそれ、少しさびしいぞ。俺だって家族なんだから仲間外れにしないでいいのに。とにかくちー姉は、意味深な言葉と共に姿を消す。ラウラたんも……もう居ないや。早業だねえ。

「で、結局何がしたかったわけ?」

「ま、まあまあ嵐さん……。黒乃は、無益な戦いは嫌だったんだよね。」

(ヒュウ！よく解つてるじゃん、マイエンジェル。ご褒美にナデナデしてやろう。)
「わっ、や……止めてよ黒乃、くすぐったいってば。」

鈴ちゃんは、俺が反撃すらできなかつた事に關して物申したいらしく、かなり不機嫌ですよって感じて話しかけられた。するとすかさずマイエンジェルが俺をフオローしてくれる。早くいつもの調子を取り戻したかつた俺は、マイエンジェルの頭を撫でた。口では止めてと言われたが、本気でそう思っているようすじゃない。

「シャルルの言う通り、皆が無事で済んだんだ。だから言いつこなしだよな、黒乃。」
(~~~~~っ!?)

一応イツチーには実害があつたわけだが、そんなの気にしない様子で朗らかに笑う……俺の頭を撫でながら。これは……もしかしてもう手遅れか!? イツチーに惚れたつてのでは無さそうだけど、凄く恥ずかしいしドキドキする……。俺の……俺のアイデンティティが崩壊してしまう。俺が俺で無くなって……。

「……黒乃が襲われたと聞いて来てみれば、なんだこの微笑ましい一家のような様は。」
「あら箒さん……。雨降つて地固まるという感じでしょか。」

「心配して損した……とは言わんが、来ない方が良かったのかも知れんな。敗北感が……凄まじい……。」

「ま、まだまだここからよ！一夏がそんな気で頭撫でてるはずが……ないと思いたい

……かなあつて……。」

おお、モツピーも心配で様子を見に来てくれたみたいだ。っていうか、なんで皆は原作っぽく行動してくれないの？それだったら俺も、皆に責められるとかでイツチーの事とか気にしてる暇なんてなかったと思うんだけど……。って、ていうかイツチー！いつまで撫でてんの。俺は優しくだが、イツチーの手を取り払う。

「ん、そうだな……ずっとこうしても仕方がないし。せつかく皆揃ってるんだ、飯にしようぜ。」

「そうだな……安心したせいか腹が空いた。」

「じゃ、3人は後から合流だね。」

「そうですね。すぐに追いつきますわ。」

「その代わり、席の確保を任せたわよ！」

鈴ちゃんは、言葉と同時に元気な様子で走り去る。セシリーは俺の顔を見ると優雅に笑って、ゆつくりと鈴ちゃんを追いかけ始めた。はあ……本当、いつまでも自己嫌悪してられないか。俺はイツチー、モツピー、マイエンジェルに向かって小さく手を振ると、小走りで2人の後を追う。

第41話

「なあ黒乃、少し話が——」

「黒乃、頼みがあるのだが——」

「黒乃さん、お時間よろしくて？」

「黒乃！アンタにお願いがあつて——」

「ねえ黒乃、僕と——」

「「「「……………」」」」」

ラウラたん襲撃事件の翌朝、ホームルームが終わると同時に一齐に詰め寄られた。メンバーはだいたいいつもの5人で、その手にはそれぞれA4サイズの紙を携えていた。というか、本当に同時に喋るもんだから……黒乃つて名前だけしつかり聞き取れた感じだ。まあ……だいたい何を言いたいかは解つてるけど。

「……ボーデヴィツヒと決着をつけるなら、俺と黒乃がベストだ。」

「同じく剣の道を往く者として、私こそパートナーに相応しい。」

「わたくしの専用機の特性からして、わたくしと黒乃さんが組むべきですわ。」

「アタシ、やっぱ黒乃と一緒にボーデヴィツヒをぶっ飛ばさないと気がすまなさそうな

のよね。」

「僕、黒乃と一緒に戦いたいな。」

「……これはアレですか？モテ期って奴でしょうか。やっぱり皆は、俺と学年別トーナメントのタッグを組みたいらしい。と言うのも……もともとは1on1の方式だったんだが、急に2on2にルール変更がなされた。今回のトーナメントに参加予定だった人達は、こぞってパートナーを探るって事なんだけど……。」

どうして俺にその話を持ちかけて来るのか、コレガワカラナイ。確かに俺は勝率は高い……ってか、負けた覚えはない。けれど、それはやっぱりあの笑みで動揺を誘っちゃってる訳で。まあ……単純に、俺を誘ってくれるのは嬉しいんだけどね。しかし、いい加減に反応を示さない……今にも5人は激しい言い争いを始めそうだ。

そう考えた俺は、イツチー、モツピー、鈴ちゃんから参加申請書を奪った。イツチーの紙には、マイエンジェルの名を。原作がずれちゃったら困るからね。鈴ちゃんの紙には、セシリーの名前を。遠距離武器を1つも持たない俺よりか、セシリーは鈴ちゃんの方が相性いいよ。つまり、残り1枚の紙には――

「く、黒乃……私はお前を信じていたぞ！」

「……なんでよりによって箒よ。」

「よりによってとは何だ失礼な！」

モツピーから奪った紙に書かれた藤堂 黒乃と篠ノ之 箒という文字を見て、モツピーは心から嬉しそうな表情を見せた。それに対して皆は残念そうな感じだが、特に鈴ちゃんは不満そうだ。きつとだけど、同じ幼馴染組として思うところがあるんだろう。ヤバイね、死ぬほど嬉しい。俺は思わず鈴ちゃんの頭を撫でた。

「わ、解ったわよ……。今回は我慢するから、子ども扱いは止めて。」

「まあとにかく、黒乃がそう言うんじゃないよな。」

「そうだね。黒乃が考えたチームバランスも良いと思うし。」

「どうせならわたくしが一夏さんと……。いえ、黒乃さんは男性同士という部分も配慮なされたのですね。」

うん、まあ……。そうだった……。マイエンジェルが男として此処に居るの忘れてた。危ない危ない……。ラッキーパンチだったな。まさか原作遵守で行動しようとしたのが、納得してもらえる材料になるなんて思いもしなかった。ケンカも無しで、完璧に丸く収める事が出来たら俺も満足だ。

しかし、チームバランスか……。それを言うのと、俺とモツピーの組み合わせはあまりよろしくは無いんだが。後に登場するモツピーの専用機ならまだしも、今のモツピーは打鉄ユーザーだからなあ。打鉄にもれつきとした射撃武器はあるが、モツピーが使つてるところを見た事が無い。

ん〜……まあ、俺がビュンビュン飛び回って場を荒らせば何とかかな。どちらに
したって、このタッグ決めなんて意味がなくなるんだし……深く考えるべきじゃない
か。とにかく、この場はこれで解散の流れになった。で、時間は流れて昼休みに。俺と
モツピーは、揃って申請書を提出に職員室へ向かっているといるところだ。

「黒乃、私は嬉しいぞ……。まさか専用機持ちでない私を選んでくれるとは。」

「……………」

「ああ、嬉しいと言えば……未だに篠ノ之流を使ってくれているな。父さんもきつと喜
ぶと思う。」

あ、解るんだ……流石はモツピー。半ば我流剣術になりつつあるが、しつかり篠ノ之
流剣術をベースとしている。なんて言うのかな、地が出来ている？だからこそ俺は、今
まで7本の刀でやってこれた。嫌々ではあったけど、やっぱり剣道やってて良かったな
と思えましたまる

「おい。」

「貴様……！まだ何か黒乃に仕掛けるつもりか!？」

「煩いぞ。腰ぎんちゃくに興味は無い。」

「な、何だと!？」

（ど、どうどう……。とりあえず落ち着こうかモツピー。）

そんな感じで朗らかに職員室を目指していると、俺達を呼び止める声が。振り返ってみると、そこにはラウラたんが居た。ラウラたんの姿を確認した途端に、モツピーの顔付はまるで親の仇を見るようなものになる。どうやらラウラたんは俺に用事があるみたいで、キツイ物言いでもツッピーにそう言う。

「手短に言うぞ。今回のタッグトーナメント……私と組め、藤堂 黒乃。」

「ふざけるな！今まで黒乃に攻撃を仕掛けておいて……そんな虫のいい話があつてたまるか！」

「私は貴様に興味は無いと言つたが？で、どうだ……藤堂 黒乃。」

「残念だったな、黒乃は既に私とタッグで……つて、聞いているのか貴様!？」

ラウラたんは、名前の欄が空白の申請書を俺に見せながらそう言う。まあ……当然モツピーは嘸み付くよね。なんだろうか、これこそ俺の知つてるモツピーな気がする。それにしても、モツピーの言い分は一理ある。いやいや、今更何言つてんだふざけんなつて事では無いよ？

あれだけ俺と戦いたがつていたラウラたんが、俺と組んで出場しようつてのが不自然というか……。ラウラたんは逃げも隠れもしない性格だし、そこを踏まえるとまだ俺やイツチーを認めたつて事では無いだろう。……駄目だ、それらしい理由が思いつかない。一か八か、質問を投げかけてみよう。

「意図を知りたい。」

「……説明をする必要はない。とは言わせんぞ。」

「……良いだろう。私は、とある課題を教官から出されている。その答えを探る為には、貴様と戦う事こそが近道だと私は考えた。」

なんとか考えを口に出す事が出来て、モッピーが俺の言葉に補足のような物を入れてくれた。ラウラたんには悪いけど、どういうつもりなのか知れないとウンともスンとも言えないし。ラウラたんもあまり建設的ではないと思つてくれたのか、俺にこの話を持ちかけたわけを語る。

「が……貴様は逃げ回つてばかりで、文字通り勝負にもならん。そんな折だ、学年別トーナメントがタッグ方式に変わったと言うではないか。」

「つまり、何が言いたい……？」

「日本風に言わせれば、渡りに船か？つまり、貴様が私と戦おうとしないのならば、近くで貴様を観察する方が効率的だと考えたまで。決着は課題が済んでからでも遅くはない。」

なるほど、ちー姉から出された課題つてのは、別に俺を倒して見せろつて事では無いんだな。最悪俺を見てればクリアできる課題なら、主人公たるイツチーを観察した方が良い気がしなくもないけど……。でも、これで一応の理由は聞けたな。さて、これから

どうしようか……。

「さあ、理由は話したぞ。解つたらさっさと貴様の名前を書け。」

「ちよつと待った！黒乃は理由を話せば組むとは言っていないぞ！」

「貴様もいい加減にしつこいぞ、篠ノ之 箒。専用機持ちでもない者は下がっている。」

「お、お前！人が気にしている事を抜け抜けと……！」

これからどうしようかって、タッグの件以外にはない。うくん……出来ればモツピーと組みたいってか、なるべくならラウラたんとは組みたくない……。でも、そんな風に思ってくれているのなら……無下に扱うのも何か忍びない。そうだなあ……こういう時は、やっぱりちー姉を頼ってみるべきかな。

「ん……うわっ!?く、黒乃……何処へ連れて行くつもりだ！」

「貴様、この……離せ！」

モツピーとラウラたんの手をギュツと握ると、職員室向けてズンズンと進みだした。俺が強引に連行しようとするもんだから、2人は若干の抵抗を見せる。だが、先制攻撃を仕掛けたのは俺だ。2人の抵抗は虚しいだけで、最終的に大人しくなってくれた。

そして職員室に着くと同時に、昼休みにも関わらずデスクワークへ勤しんでいるちー姉へと近づく。何と言うか、俺がモツピーとラウラたんを引き連れている時点で嫌な予感しかしないらしい。眉間に皺を寄せて溜息を吐いて見せてから、ちー姉の方から俺に

話しかけてきた。

「なんだ……何の用件だ？」

「……………」

「学年別トーナメントの出場申請書？これがいったい何——」

「織斑先生。私が黒乃と組むというのに、ボーデヴィツヒが横入りを——」

「黙れ、貴様の事情など私の知った事では——」

「職員室で騒ぐな、この馬鹿共が。」

俺がラウラさんの持ってた空欄の方の申請書を見せるが、ちー姉は俺の意図が解からなかつたみたい。そもそも俺がここへ来たのは、どうするべきかを相談したかつただけだ。それを何とか解ってもらおうと考えるが、モツピーとラウラさんがそれぞれの主張を繰り返す。

「だけど、ちー姉の前では自殺行為だった。バシン！バシン！と、2人の小気味よく叩かれる音が耳に心地よい。しかし、ちー姉は出席簿を肌身離さず持つてる気がするが……。いや、そんな事よりも……2人がずっとこんな調子で困っているんだよ。だからヘルプミー……ちー姉。」

「はあ……なるほどな、藤堂の言いたい事は解った。だがその前に……近江先生。」

「ん……？珍しいですね、織斑先生が僕に用事なんて。」

「少し刹那の事で質問が。刹那のエネルギー補給は、どのくらいの時間で可能ですか？」
「燃費の悪い機体ですからね、そのぶん補給に関しては拘ってますよ。エネルギーの減り方にもよりますが、ほとんど一瞬で済みますね。」

意図は解った。そう言いつつちー姉は、何故か鷹兄を呼んで刹那の事に関して質問した。そうなんだよね、恐ろしい事にエネルギー補給が一瞬なんだよね、刹那って。なんか、雷火に残ってるエネルギーを本体に回してうんたらかんたら……。一応説明はされただけど、全く理解が出来なかった愚かな私でございます。

「ならば問題は無いか……。どうもありがとうございます。」

「いえいえ、今後何かあったら気軽にどうぞ。」

「あの、織斑先生……。いったい、黒乃の考えとは？」

「藤堂、つまりお前が言いたいの——」

質問の回答を終えた鷹兄は、俺達3人に手を振りながら自分のデスクへと戻った。するとちー姉は、俺の持ってた申請書を奪って何か名前を書き始めた。今朝は俺が全く逆の事をしたと思うと、なんだかどんな事が起きるのかドキドキしてしまうな……。

「こういう事だな？」

「なっ、黒乃とボーデヴィツヒの名前……!?!」

「流星は教官、私の考えを推して下さるとは——」

「早まるなガキが。篠ノ之、お前の申請書も寄せせ。」

「あ、は……はい。」

「……良しつ。確かに申請は通した。これで文句は無いな、藤堂?」

うん……うん……?つまり……?どういふ事だつてばよ。ちー姉は、モツピーの方……つまり俺とモツピーの名が書かれた申請書に認可の判を押す。かと思いきや、ラウラたんの方にも同じく認可の判を押した。俺含めて、モツピーもラウラたんも意味を良く解つてないみたいだ。

「藤堂の望みは、篠ノ之ともボーデヴィツヒとも組む……だろう?かなり異例の事態だが、まあ藤堂なら問題ないだろう。」

「黒乃、お前と言う奴は……優しいにも程があるぞ。」

「……まあ、そう言う事ならば妥協してやろう。」

違あああう!違う、違うよちー姉!?誰もそんな事の望んじやいない!なんでさ、よりによつて2回も出なきやなくなるよ。でもなんだこの……今朝みたいな丸く収まった感。おかしい……こんなの絶対おかしいよ!つーか何、藤堂なら問題ないだろうって!?俺の何処にそう思わせる要素があるんです!

「ですが織斑先生。私と藤堂 黒乃、そして藤堂 黒乃と篠ノ之 箒のタッグが当たつてしまった際はどのような処置を?」

「その時は篠ノ之とボーデヴィツヒが1対1で戦え。勝った方のタッグが勝ち進む方式だ。」

ラウラたんが至極真つ当な意見を述べるも、ちー姉はもはや俺が2人とタッグを組む形で播るがならないらしい。ああ、逃れられない！（カルマ）……なんて思わず叫びたくなつてしまいそうだ。く、くそ……！ラウラたん、勝ち上がる条件が自分に利があるからつて納得しないで！ほら、モツピーも何か反論してよ！

「……大会の運営目的に反していませんか？」

「数あるタッグの中で、1つくらい特例があつても文句は言われんさ。」

「そうですか。なら、私はもう何も言いません。」

「これで全員用は済んだな？ならばとつと戻れ。」

良いぞモツピー！なんて思ったのは束の間。この大会はタッグ戦に重きを置いていると言うのに、ちー姉は1つくらいの特例なら気にすんなと返す。それにモツピーはすぐさま納得してしまつて、この場がこれでお開きになつてしまった。……解かりました……もう諦めます……。

く、くそう……最近どうしたよ、俺の望む日常とはかけ離れている気がするぞ……。いやね、イツチーの幼馴染、IS学園に入学してる、代表候補生つて3要素のせいでそれは難しいって解つてはいるよ。けどもつとこう……せめてどちらか1人と組む形

で済ませたかったと言うか……。

まあ、発言が出来ない俺がこれ以上考えてもどうしようもない。俺はちー姉に頭を下げると、踵を返して職員室を後にした。後ろを確認してないから解からないが、どうやら2人もしつかりついて来ているみたいだ。しかし、職員室から遠くなると、すぐにラウラたんは輪を外れてしまう。

「貴様と組む事にはなつたが、決して認めたくはない。それをゆめゆめ忘れない事だ。」

「大丈夫。」

「……………。ならば良い。せいぜい私の足を引っ張つてくれるなよ。」

俺がたまに喋れる事は知つてたみたいだけど、こう短い間に2回も返事が返つてくるのは意外だったみたいだ。ラウラたんは少し面食らつた表情を見せてから、更にそう続けて去っていく。まあ喋れた時つて、多分だけど俺が1番驚いてるんだろうけどね。

「黒乃、何やら済まない事をした。私が感情的になつたばっかりに、黒乃に負担をかけてしまつて…………。」

いやいや良いよ別に、そんなつちやつたもんは仕方がないし。それで良かったかどうか聞かれれば、まあ…………絶対になーなんだけど。どのみちラウラたんが折れる事は無かつたらうし、どう足掻いたつてこうなつたかも知れない。とにかく、理由がどうあれ

モツピーが謝るのは筋違いって事だよ。

なんとか気を取り戻してほしかった俺は、モツピーの肩をポンポンと叩く。本当は頭撫でようかと思つたけど、鈴ちゃんはとにかくモツピーにそれはなんか合わない気がした。するとモツピーは、無理矢理にでも納得しようとしているように見える。

「黒乃、お前と言う奴は……昔から変わらんぬ。」

(アツハツハ……。変わらないうただ一つのアホンダラだからぬ。)

「変わらず優しい……。どうしてお前は、そこまで人に優しく出来る？」

なんでって、なるべく波風立てずに生きて行くには他人に優しく……。って思つてるだけけど？ 打算ありありだからそんな言い方されると良心がズキズキしてしまう。あゝ……。だけど、黒乃ちゃんの身体を使わせてもらつて生きてきて、多少はその考えにも変化はあつたかな。

何と言うか、この身体は俺に悪気があるとなかろうと……。他人に迷惑をかけてしまふ。それはきつと、俺が罪に思ふ事ではないはず。だけどさ、イチーやちー姉を始めとした皆は……。俺に優しくしてくれる。俺とは違つて打算なんかなしに、心から俺の事をサポートしてくれる。

俺が罪悪感を感じるの、皆がそうやって優しくしてくれるから……。きつとその裏返しだ。そんな裏返ししの感情を抱いた俺は、本気で皆に恩返ししたいって思つてる……

んじゃないかな。だから……多分だけど、もし俺が打算なしで皆に優しくしてるのなら……俺は、皆の事が大切で仕方がないんだって、そう思いたい。

まあ……今回の件に関しては打算ありだし、何とも言えないかな。それでもだ、モツピーが俺を優しいって感じてくれてるなら言う事無しだ。でもこんな複雑な感情、俺に表現できるはずもない。ずっと俺が黙っていたせいかな、モツピーは申し訳なさそうに言った。

「済まない、聞くまでもない事だったか。人が人に優しくする事に、理由なんか必要ではない……だろう？ 黒乃。」

「……………」

おお、モツピー……アンタ良い事言うね。アレだ、ファイナ○ファ○タジの主人公が言ってたつけ。誰かを助けるのに、理由がいるかい？……つてさ。うん……俺もそう生きられれば良いんだけどね、やっぱ臆病者だからさ……。いや、前世では薄情だつて良く言われて——

……あれ？ そうだった……け？ 自然とそんな気がしたから呟いたけど、なんかイマイチしつくりこない。いや、どちらかと言えば……思い出せない？ そんな感覚に近い気がする。まあ……数十年も昔の事だしな、忘れてても仕方がないような気もする。

その割には、ISに関しては良く覚えてるって？ ハハッ、だから薄情だつて言われて

たのかもね。趣味に関しては覚えられるって、それ1番言われたるから。と・に・か・く・だ、なんかもうモツピーもラウラたんも満足そうだしやっぱりこれで良いやく。

「それでは、せっかくだからコンビネーションについて意見でも交わしてみるか？ なら、私達2人ならではの必殺技を考えてみるのも面白いかも知れんぞ。」

（おつ、それ良いね！ ロマンってか、そんな感覚がウズウズするよ。）

「ん、肯定か。それでは場所を変えるところ。……普通に教室で構わんな。」

モツピーの提案は、本当に大事な事だ。タッグ戦に置いては、相手との意思の疎通が大事になるが……それと同じくらいに、あらかじめ作戦を立てておくのも大事だ。後者は……あ、あくまでオマケ程度にしか考えてないから。ほ、本当だからね。

そういうわけで、俺とモツピーは連れ立って教室を目指した。……が、自分の前世がイマイチ思い出せないでいる。この事態に、もつと深く考えておけばと後悔するのは……かなり先の話だ。何も考えていない能天気な俺は、今日も元気に……そこにある日常を謳歌する。それが、とてつもなく愚かである事も知らずに。

第4 2 話

(おかしい……絶対におかしい……。)

タッグ結成騒動から時は流れ、学年別トーナメント本番の日となった。俺はピットで腕組みしながら仁王立ち……俺流の集中の儀式である。つまるところ……今から試合だった。だからこそ俺は、心の中でおかしいと呟くんだ。原作ではイツチー&マイエーンジェル組VSモツピー&ラウラたん組がトツプバターなはずなのに……。

イツチー組VSラウラたん組の試合は、Aブロックの最終戦に回されていた。俺が2人とタッグを組んでるからかも知れないが、余計なお世話なんですけどね……。日に2試合する事が確定してしまったわけで、かなり憂鬱だ。何か見えない力が働いている気しかしい。

「黒乃、試合の前はやはり緊張するか?」

(ああ………するする。いつまで経ってもこの感じは慣れないと思うよ。)

「そうか……。だが、良い意味での緊張だろう? 私もそれを実感しているよ。」

俺が仁王立ちを解除すると、後ろに控えていたモツピーが話しかけてきた。モツピーの質問に緊張すると肯定するが、妙に意識の違いがある気が……。つまるところ武者震

いだろと聞かれたんだろうけど、そんな事は全然ない。何と言うか……子供が歯医者とか注射する際の待ち時間みたいな？死刑執行を待つかのようなあの感じと一緒だ。

「準備は良いかしら？篠ノ之さんは打鉄に乗ってね。」

「解りました。黒乃、私達の力を見せつけてやろうじゃないか。」

「……………」

そろそろ試合の時間らしく、ピットに居た教師が確認を取る。そしてモツピーは、俺とハイタッチを交わすと打鉄に乗り込む。よしっ、さすれば俺も刹那を展開……っつと。で、出撃の順番はまず俺からだ。打鉄が先に出ちやうと、追いついて激突しかねないからね……。俺は刹那を浮かすと、しっかりカタパルトの上に乗った。

(オーケー、行きますか！)

ゲートが出撃可能な状態になったのと同時に、レースゲームよろしくロケットスタートをかける。相も変わらずな速度な刹那を華麗に制御して競技場まで飛び出ると、凄まじい数の観客が俺を出迎えた。……思えば、大勢の前で戦うのってこれが初めてだったか。の、ののの……飲まれないようにしないと……(震え声)

「…………打鉄、ラフアールか。妥当な組み合わせだな。」

続けて競技場に飛び込んで来たモツピーは、口で会話が可能な位置に浮いている。そう言われてアチラさんの様子を窺うと、確かに1人が打鉄で、もう1人がラフアールを

纏っていた。前衛後衛……確かに理想的な組み合わせだね。えっと、打鉄の方が紳さんで……ラファールは結城さんな。2人とも見た事が無いとなると……3組か4組所属だと思う。

「しょ、初戦からついてないわ……。」

「だ、大丈夫！死にはしないって……多分……。」

「かなり萎縮しているな。」

（モツピーは平気かい？）

「私か？私は問題ないぞ。気持ちとしては剣道の試合等とあまり変わらん。」

向こうを見ると、何やら励まし合ってるご様子。まあ、専用機持ちと当たつたらほぼ負け確定だからな……とにかく全力で頑張ろうって感じか。で、モツピーは特に問題なしなのね……流石は武士っ娘。……俺もモツピーを見習わんとな。ってか、代表候補生なんだから俺がリードするくらいの気持ちじゃないと！

『それでは、開始位置に着いて下さい。』

「黒乃、勝つぞ。私達2人でな。」

（おうよモツピー！）

試合会場にアナウンスが流れると、俺&モツピーは今度は拳と拳をぶつけ合う。そしてフワフワ浮きながら開始位置まで移動すると、俺は神立の鞘に手を添え……いつでも

抜刀できるような気持ちを切り替える。まあ言っちゃ悪いけどさ、経験がものを言う世界だよ。流石の俺も初心者同然の相手に――

『試合開始。』

（負けるわけにはいかないんだよなあ！）

「うわわっ、速――キヤア!?!」

「ちよおっ……!?!マジ洒落になんな――」

「お前の相手は、この私だ!」

試合開始のブザーと同時に、前方へ大きくクイック・イグニッションブーストQ I B これで前進速度に加速を

着けると、一目散へラフアールの結城さん向け舵をとる。そのままトップスピードに乗ると、抜刀した神立ですれ違いざまに腹部を斬り裂いた。やはりまともな反応は出来ないか……だったらこの勝負、その時点で決まったのと変わらない。

「へ、下手な鉄砲数うちや……当たらない!?!」

（無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア!）

明らかな格下相手は久々……というかほぼ初めてな為に、俺のテンションはどこか迷子になりはじめていた。結城さんはアサルトライフルを連射するが、縦横無尽に飛び回ってそれを難なく回避する。というか、NDK? NDK?みたいな感じで、結城さんの周囲360度を纏わりつくみたいに避けてるんだけどね。

(……うん、止めよう！流石に性格悪いぞ、俺。それより、モツピーは……。)

「そこだあ！」

「近接戦は不利ね……。それなら！」

む、マズイな……。葵同士の斬り合いになっている以上は当然モツピーに形勢が傾く。しかし、榊さんはモツピーと距離を置いて射撃戦を仕掛けるつもりらしい。これは……。いったん結城さんは放置して、モツピーが榊さんへ追いつく隙を作った方が良い。俺はそう思つて行動を開始したんだが……。

「うひい!?こつち来ないで……。つて、あいた！」

「結城!?なんで私の真後ろに……。！」

「流石だな、黒乃。」

結城さんを通り越して、榊さんへ接近しようと思つたのに……。結城さんは自分が標的にされていると思つたみたいだ。ろくにハイパーセンサーも確認せず後ろへ下がったように、同じく後退していた榊さんと背中がぶつかってしまった。……。何だか知らんが、この機を逃す手は無い。

距離が近い割に人数が密集しているから、神立では思うような戦いが出来ない。俺は神立を鞘へ戻すと、両肩の疾雷、迅雷を引き抜いた。さて、あまり距離を詰めてる時間オーバー・イグニッションブーストも無さそうだ……。さすればこれしかあるまい。出力を抑えつつO I Bで

……寄って斬る！

「カ、カウンター！」

(遅い！)

「ひゃあ!?ア、アサルトライフルが斬れ……キャツ!?」

「隙あり！」

「くうっ……!?」

至近距離、もつと言えば紛い成りにも真つ直ぐ突つ込んでくる俺はカモだとも思つたんだらう。だけど残念、まず最初の目標は結城さん本体じゃない。俺は疾雷と迅雷を交差させるようにして、アサルトライフルの銃身を挟み込む。そのまま外へ手を広げるようにすれば、アツサリと銃身は焼き切れてしまう。

そして銃身が切断されて衝撃を受けている間に、今度はしつかり結城さんへ疾雷と迅雷の2連撃を浴びせた。モツピーもしつかりと榊さんへと一太刀を斬りこんで、圧倒的に俺達が有利な状況だらう。よしっ、このまま押し切る!……と思つたが、どうやら簡単にはいかないらしい。

「ゆ、結城……スイツチ！」

「うん、榊さん！」

「こっとなつたらヤケクソ!覚悟、藤堂……さん！」

(くっ……ちよつとまずいかあ……?)

背中合わせだった2人は、それぞれ逆方向へ回転し、標的を変更してきた。ラファール相手はモツピーにやり辛かろうと思っただが、なんか榊さんが凄い勢いで斬りかかって来るもんで……。葵による連続攻撃を防いでいる間に、モツピーとの距離を開けられてしまった。

「遠距離戦……くっ！避けるのならばなんとか……！」

「真剣勝負だから……恨みつこなしだよ！」

モツピーは中距離からチマチマとショットガンを撃たれてやり辛そうだ……。散弾銃って言うくらいだし、前方広範囲に弾丸が散らばり、地味ながらも着実にモツピーが削られていく。一方の俺は、未だ防戦一方……というか、考える時間が欲しいからあえて防御に徹してるんだけどね。

うくん……そうだな、シンプルに離脱してから結城さんを攻撃でも良いけど。それだとまたしても榊さんがフリーになって、今度こそモツピーが焔備の射撃を浴びさせられてしまうだろう。結城さんを攻撃して、急いで榊さんのとこまで戻る？いや、それだと仕留めきらなきや結局は同じ事だろうし……。

(よしっ、それなら……。)

俺が選択したのは、この場で榊さんの相手をしつつモツピーを援護する事だ。まあ

……2回までしか出来ないけど、このまま指咥えて見てるってのもなんでしょ。俺は疾雷と迅雷にて、榊さんの振っている葵を大きく弾いた。そのまま少しばかりの距離を開けつつ、疾雷と迅雷を仕舞う。取り出したるは、紅雨と翠雨。しかし、翠雨の方はすぐさま結城さんへ投げつける。

「っ!?!結城、気を付けて!」

「へ?……しまっ……!あ、わわっ……ちよ!?!ス、スラストーに突き刺さってるよお!」
「助かったぞ黒乃!」

「あ、貴女……こんな距離から狙って……!?!」

なんだか知らんが、俺が投げた翠雨はラフアールのスラストーへと突き刺さったらしい。それは当然ながら飛行能力に障害は出るだろうし、結城さんが慌てる理由も解る。だけど聞いて欲しい……俺は狙ってやった訳じゃないんだ。隙が生じれば万歳と思っただけで、あれなら結城さんは大丈夫かな……。

「だけど、そんな短いの一本でどうしようっての。今度は武装を変える暇もあげないわ!」

そう言うや否や、榊さんは再び俺への攻撃を仕掛けてきた。た、確かに……葵相手に紅雨一本だとやり辛いかもね……。今も紅雨の峰に手を添えて、葵と鏢迫り合いをしているが……突破されるのも時間の問題かも知れない。いやね、刹那の特性殺しちやって

るのは解ってるよ。けれど……近接戦で張りつかれると離脱もけっこう難しいんだって。

「せいっ！はあっ！」

「わっ！うわわわっ！」

むう……結城さんが逃げ回っているせいで、エネルギーをゼロにするまではもう少し時間がかかりそうか。それすなわち、援護は期待できないと言う事を意味する。ん……モツピーのパパンなら、罅迫り合いの状態からでも軽〜く受け流せるんだろうな。こー……手首をこーやってクリン！って回してさ。

「キヤア！」

（はい……？）

「見事な受け流しだ、黒乃！」

おお、なんてこつたい……イメージインターフェイスに引つかかったか何かで、達人ばりの受け流しが発動したではないか。急に紅雨の刃が力を失ったために、榊さんはずっこけるようにバランスを崩す。それならば、そろそろ榊さんにはとどめを刺させてもらおうか。

（閃け、鮮烈なる刃！）

紅雨は締まって、右手に叢雨を握った。そして Q

クイック・イグニッションブースト

I

Bで大きく前へ移動し、

すれちがうと同時に榊さんに一太刀浴びせる。まだまだ!
クイック・イグニッションブースト Q I Bで接近して
 斬るこの工程を連続で繰り返す。

「キヤアアア!?!こ、この……これ以上は好きに——」

(無辺の闇を鋭く斬り裂き!)

「ヒツ……!キヤツ!」

(仇為す者を微塵に砕く!)

「な、ど、どれだけ続いて……!?!)

(決まった!漸毅狼影陣!)

やたらめつたらとにかく斬る斬る斬る斬る斬る!だって、原作だったらこの辺で消えてくるくらいの速度だからね……。流石にそこまではいかないだろうが、榊さんの目にはそれに近い風に見えるかも知れない。刹那も実際に加速の一端を辿り……
オーバード・イグニッションブースト最後に O I Bを使いながらすれ違い、とどめの一太刀を浴びせる。

「キヤアアア!?!」

(くうく………良い感じいい!)

うん………やつぱり鷹兄がインストールしてくれたおかげで動かしやすいや。まあ
クイック・イグニッションブースト O I Bを連続させないとだから、相当に燃費が悪いん
 …… Q I Bと O I Bを連続させないとだから、相当に燃費が悪いん
 だけどね。とはいえ、榊さんを再起不能にするには事足りた。絶対防御が発動するうち

に墜落したみたいだし大丈夫そうだな。

「す、すごい……!」

「チャンス……よそ見してる場合じゃないよ!」

(ぬうん、モツピー!?)

確かに漸毅狼影陣は凄かったかも知れないけど、結城さんの言う通り感心してる場合じゃないよ!?!ええい、ここまで来たのならば……モツピーも無事に勝ちたい!俺は自然と、全力の O オーバード・イグニッションブースト I B を発動して結城さんに迫る。その間に俺は、叢雨を仕舞って神立を握る。

とは言っても、まだ抜刀はしない。アタツチメントから神立の鞘を左腰から外すと、右手は柄を、左手は鞘をしつかりと握る。結城さんとの距離はグングンと詰まり、既に神立の射程距離。ここで俺は O オーバード・イグニッションブースト I B を止めて、残った距離を Q クイック・イグニッションブースト I B で詰めながら……神立を思い切り抜刀!

(次・元・斬!)

「ひゃあああああ!」

「な、なんと……!?!」

『試合終了。勝者、藤堂 篠ノ之ペア』

鬼いちゃんこと、スタイリッシュな青コートさんの技である。とは言っても、単にす

れ違いざまの居合もどきだけどね。本当は、こう……ズバババツ！嵐のような斬撃が敵を襲う技なんだけど、そんなの物理的に再現不可だし仕方ない。なににせよ、今のが決定打になったみたいで……俺達の勝利がアウンスされた。

次の試合があるからとの事で、勝利の喜びを分かち合う暇もなくアリーナから撤収させられた。榎さんと結城さんも、教師たちが回収したみたいだね。だったら……俺らも急いでピットへ戻ろう。そうしてモツピーと共にピットへ戻るが、何かモツピーは消沈しているように見える。

「……凄いな、黒乃は。ほとんどお前一人で勝ってしまったではないか。」

（むっ、そんな言い方は好きじゃないぞモツピー。モツピーも頑張ってたし、俺一人だと危なかったと思うよ？）

「黒乃……。そうか、ありがとう。」

何かモツピーは、自分が役立たずだったとでも言いたげだ。そんな様子にちよつとばつかしムカつと来た俺は、ペチリと優しくモツピーの頬を叩く。そんな事は無い、モツピーが居てくれたから勝てたんだ。俺のそんな意味を込めた優しいビンタの意図を、モツピーはしっかりと察してくれたらしい。

「……………」。黒乃は刹那のエネルギーを補充しないとだな。私の事は気にせずに、近江先生の元へ向かってくれ。」

(ん、それじゃあお言葉に甘えて。)

「黒乃……次も、いや……その次も次も……勝とう、私達2人で。」

勿論だよモツピー！まあ……次は無いかも知れないけど、そんなのは言いつこなしで。俺はまたしてもモツピーにハイタッチを求めると、フツとクールな笑みを浮かべてからパシンと掌と掌がかち合う。その反響が終わると同時に、俺はモツピーの言う通りに鷹兄の元を目指した。



「……………」

黒乃の背が見えなくなると、私はいつの間にかカタパルト付近の壁にもたれかかっていた。何と言うか、黒乃の隣で戦えた高揚が……グワツと一気に失せてしまった気分だ。私の頭の中には、黒乃は凄い奴だという考えしか浮かばない。私と言う足枷があったらうに、見事完璧な勝利をものにしたのだから。

まずあの投擲……あんな距離から、的確にラファールのスラストを狙った。櫛の陰に隠れて、結城は狙いにくかったはずだ。にも関わらず、ど真ん中としか言いようがない的確な投擲。まさか結城もそんな箇所を狙われるとは思っていなかったらしく、絵に

描いたよう動揺っぷりだった。

次いでは短刀による受け流し……あれも見事な物だった。戦闘中だと言うのに、思わず賞賛の言葉を送ってしまったぞ。大型物理ブレードの葵と、短刀型物理ブレードの紅雨……どちらが有利かは明白だ。しかし黒乃は、その不利を物ともせず……いや、むしろ短刀の小ささを利用したかのような感じに見えた。

そして、その後櫛に放った連撃……。何と言うか、美しかった。見目麗しい黒乃だったからかも知れないが、れっきとした攻撃だと言うのに……まるで舞を見ているかのような……。だからこそ黒乃に見とれてしまい、隙を作ってしまう大失態を犯してしまったのだが。

しかし、やはり黒乃にとつては私の失態など大きな問題では無かったらしい。最後に見せたあの居合……。そもそもどうして、神立のような大太刀で居合が可能なのだ……。しかも、あの居合は……決して1回で終わる斬撃ではなかった。何と言うか、吹き荒れた突風と共に確かに刃を振るった残光が見えたんだ。

少なくとも3……いや、4……？残念な事に、途中から目で追えなくなってしまったから……。それはあの連撃の方にも言えた事だが、途中から何撃目かを数えられない速度だ。少なくとも、一瞬で6撃以上は浴びせていたぞ……。黒乃が刃を振る速度、随分と速くなったものだ。

(だからこそ、私は……。)

黒乃に対して、あんな事を言ってしまったんだろう。解っている。専用機と量産機の時点で差が現れるのは仕方がない事だと。しかし私は、黒乃に何かをしてもらうばかりで……黒乃に何もしてあげられない。この試合、私は完全に足手まといだったろう。

その証拠に、黒乃は刹那であまり飛び回ってはいない。どちらかと言えば足を止めている事が多く、自らの手で一方の足止めをするような……そんな戦い方だった。……黒乃は私がそんな事を言うのを良しとせず、叱ってくれたようだが……。駄目だ、やはりこんなのでは全然駄目だ。

黒乃と刹那は、飛び回ってこそその物だろう。その翼を筆つたのは、間違いなく私……。済まない黒乃、私はもう大丈夫だ。次こそは、お前の大空を翔る姿を見せてくれ。いや、見させてみせる……。私がしゃんとせねば、黒乃はいつまでも飛び立てない。

そう、例えるならば……。黒乃は親鳥で、私は雛鳥。なんとも……。もつともらしい表現だ。つまり、私はいつまでも甘えてはいられんという事。心の何処かで私は、黒乃が居るからなんとかなる……と思っていたのかも知れない。……墮落だ。もし黒乃が倒れば、そんな気で戦えるはずもない。

(黒乃、次だ……。次こそ私は！)

「箒さん、見事な勝利でした。」

「アンタ、けっこういい仕事してたわね。美味しいところは黒乃が持つてっちゃった……みたいな試合運びかしら。」

「セシリア、鈴……。そうか、次の試合は2人だったのか。」

決意を新たにピットを出ようとしていると、ISスーツ姿のセシリア・鈴組に話しかけられる。黒乃はこの場に居ないが、セシリアの見事な勝利とは……間違いなく私達2人へ送られた言葉だろう。だとすると気になるのは、鈴の私が良い仕事をした……という言葉だった。

「ところで鈴、私が良い仕事をしたとは……う？」

「アンタ自覚なかったの？だって、黒乃が作った隙はキッチンと利用できてたじゃん。黒乃があんな長い連続斬りを使ったのも、アンタがキッチンと結城を抑え込んでたからだろうし。」

「箒さんならば、安心して背中を預けられる……という奴ですわね。ギブアンドテイク、タッグマッチとはそういう物ですわ。」

私が鈴にそう尋ねれば、まるで呆れたように返された。……あの時は、とにかく足手まといにはなるまいと必死だったせいかな、ガムシヤラだった覚えしかない。しかし、そういう考えも出来るのか……。ほんの些細な事だろうと、確かに相手の為になる。そうか、タッグマッチとは……奥が深いのだな。

そして何より、私としてはセシリアの言葉が嬉しくて堪らなかつた。安心して背中を預けられるなど、これ以上の賞賛の言葉は無かるう。黒乃が本当にそう思ってくれていゝるかは甚だ疑問だが、きつと……そうだと信じたい。私は、口元を釣り上げながら小さく拳を握つた。

「ま、箒よりアタシのが上手くやるだろうけどね！ なんとって、黒乃の1番の親友はアタシなんだもん。」

「抜かせ。やはり私だからこそ——」

「はいはい、そこまでにして下さいませ。これ以上は大会運営の邪魔になりますわ。」

鈴が無い胸を張りながらそう言うせいで、私は思わず噛み付いてしまった。売り言葉に買い言葉となる寸前に、邪魔になるからとセシリアが待つたをかける。……まあ、そこはセシリアの言う通りだろう。私と鈴は、顔を数秒見合わせると、フン！と鼻を鳴らしながらそっぽを向く。

「わたくし達は当然勝ちますので、次は当たるといふ事になりますわね。」

「……大した自身だな。恐らくはそうなるだろうが、勝つのは私と黒乃だ。」

「言つてなさい、返り討ちにしてやるんだから！」

鈴は私にズビシ！と指を差しながらそう言うのと、意気揚々といった様子でカタパルトの方へ向かつて行く。それでは、そう一言告げるとセシリアもカタパルトへ移動した。

た。……本当にこれ以上は邪魔でしかないな。そう思った私は、ようやくピットを後にし

第43話

「……………」

「……………」

無言。俺は喋れない訳だが、何も発声しない事を苦痛に感じるのは久しぶりだ。俺の隣に並び立つラウラたんは、無駄なお喋りをせずにとだ悠然と構えている。はあ……これからAブロックの最終戦なわけで。組み合わせとしては、俺&ラウラたんVSイチー&マイエンジェルといった具合だ。

やはり、1回戦の内にイチー達とは当たる運命か……。まあ、1回戦の内でも助かったつてのはあるんだけどね。これからとあるトラブルが起き、学年別トーナメントは中止になるだろうから。本当に良かった……。あのまま行くと、モッピーと共に挑む2回戦はセシリー&鈴ちゃん組みになるところだったぞ。

「……………先の試合。」

(ほえ?)

「やはり貴様が実力者である事は解った。だが……他人に合わせているようでは困る。言っておくが、私に余計な気遣いは不要だ……良いな?」

ようやくラウラさんが話しかけてくれたかと思つたら、内容としてはあまり良い物ではなかった。何と言うか、忠告？ みたいな感じに聞こえる。ラウラさんの様はまさに、臨戦態勢に入っている獣が如く。……触れれば噛みつかれる気しかない。要するに、行動次第ではラウラさんに攻撃されるのも有りうるといふ事か。

「あ、あの……そろそろ出番なので……。」

「了解した。ほら、解つていてもいなくても早く飛べ。」

俺が否定も肯定も出来ないでいると、ピットの教師が大変に恐縮した様子で出番であると伝えた。いやあ……スミマセン。俺が喋られないわラウラたん軍人オーラ全開で、かなり殺伐とした雰囲気の流れていたらしい。とにかく、俺が先に行かんとラウラたんが出れない。俺は少し慌てつつ、カタパルトから即出撃した。

「ボーデヴィツヒと組んでくるって、なんか黒乃らしいって思うぜ。」

「流石に2人と同時にタッグなのは予想外だけどね……。」

試合開始になるまで心に余裕を持つと努めるが、そんな最中にイツチーが話しかけてきた。いや、別に俺が提案した事じゃ無いんだよ？ マイエンジェルも、そんな苦笑いを浮かべられても困るって。少しばかり和やかな感じとなつたが、イツチーは急に顔つきを引き締める。

「ボーデヴィツヒ、今日は良い試合にしような。」

「貴様……随分と余裕だな？ 貴様程度が、この私に善戦できるかも怪しい物だ。」

「いいや、勝つき。黒乃や千冬姉の強さが見えないんなら……ボーデヴィツヒに負ける訳にはいかないんだ。」

「イ、イツチー……キミに悪気は無からうし、挑発で言ってるつもりじゃないのは解るよ。でもさ、でもさ、それって煽りにしかなってないからね？ だって、俺の隣のラウラたん……顔には出てないが、あからさまに不機嫌オーラが噴き出てるんだもの。俺くらの小心者になるとね、気配でそういうのは解っちゃうんです。」

「……良いだろう。そこまで言うのならば——」

『試合開始。』

「どれほどやれるか見てやろう！」

「くっ！」

ラウラたんは試合開始の合図と同時に、レールカノンをイツチーへ向けて発射した。とんでもない速度で発射されるわけだが、直線的攻撃ならイツチーは何とか避けられてしまいうらしい。そう……何とかね。ラウラたんは間髪入れずに、プラズマ手刀を展開……と同時にイツチーへ斬りこむ。

「喰らえ！」

「させないよ。」

(させないよ返し！)

「えっ!?うわあ!」

まあ逸る気持ちも解りますよ。けどね、これはタッグマッチなわけだね……マイエンジェルからすれば、ラウラたんがイツチー狙いななんてお見通しだったみたいだ。イツチーの前に滑り込むようにして、アサルトカノンのガラムを構える。そこですかさずオイラも クイック・イグニッションブースト Q I B ドーン!

同じくラウラたんの前に割り込むようにして、下からガラム目がけて驟雨を振り上げる。俺の割り込みが急すぎたせいかな、マイエンジェルは対応しきれない。結果、マイエンジェルは万歳するような感じとなり……ガラムは明後日の方向へ火を噴いた。

「貴様……助けはいらんと言ったろうが!」

(ふおおおおお!?あ、危ないい!)

「ああっ!」

「シャルル!この、滅茶苦茶な奴……!」

まさかのタッグマッチで、味方からのロックオン警報である。ラウラたんがそう叫びながらレールカノンを撃つもんだから、慌てて宙返りするようにラウラたんの背後に回る。すると俺のハイパーセンサーに映ったのは、砲弾が直撃したマイエンジェルだった。なるほど、俺が目くらましみたいになった効果だな……。

「これが私の戦いだ！文句があるなら力で示せ！」

「ああ良いさ、見せてやるぜ……俺の強さ！」

（おお……盛り上がってるう。）

「アハハ……お互い大変だね、黒乃。」

盛り上がっている2人を差し置いて、俺もマイエンジェルも冷静なものだ。自然に戦いの手は止まり、互いの苦労を分かち合う。しかし、マイエンジェルはだげどと前置きをする、ラファール・リヴアイヴ・カスタムツアのショットガン、レイン・オブ・サタデイを構えた。

「一応は試合なんだから、僕とキミも傍観ってわけにはいかない。」

（まあ……足止めてたらヤジが来そうだし。）

「僕の全力、キミにぶつけさせてもらうから！」

そう言うマイエンジェルの表情は、何処か楽し気に見えた。しかし、マイエンジェルが無策にショットガンで攻めにくるとは思えない。なんて考えている間に、すぐそこまでオレンジ色が迫っているわけだが。よしっ、それならば……ギリギリまで引きつけるぞ。マイエンジェルが引き金をひくタイミングを狙って……。

「速い……！ううっ!?ま、まだまだ！」

俺は極々出力の低いQ

クイック・イグニッションブースト

I

B

を2〜3回連続で使う。それを利用して、マイエ

ンジエルの背後をとった。ま、要するに裏周りだな。すかさず俺は叢雨も抜刀！あえて驟雨をラファールの盾に防がせ、がら空きとなった胴体へ叢雨で斬りこむ。が、カウンター狙いかシヨットガンを無理矢理にでも放つ。

(問題ない………クイック・イグニッションブースト Q I Bで十分躲せる。)

「予想通り………。一夏！」

「任せろ！」

(ほわあ!?!ゆ、誘導されたか！)

俺が Q

クイック・イグニッションブースト I

Bで離脱を図った方向には、既にイツチーが回り込んでいた。ラウ

ラたんを無視して、それでも俺を狙ってきましたか……。とにかくイツチーは、雪片を俺目掛けて振り上げている。俺は咄嗟に驟雨を逆手に持ち替え、ほぼノールックの状態
で雪片の刃を受け止める。

「流石だな、黒乃！」

(いやいや……ラツキーだったただけだよ……どへえ!?)

「邪魔だ、藤堂 黒乃！」

ギチギチと驟雨を震わせつつ、雪片の刃を受け止めていた。さて……ここからどうしようかと思案していると、横入りして来たラウラたん蹴つ飛ばされる。じゃ、邪魔だっって言われましても！ああ……まずいよ！こんな吹っ飛ばされた状態……マイエン

ジェルにとっては格好の的じゃん！

「一夏！」

「ああ！」

（何い!?!）

「ぐうっ!?!小癩なハエが……!」

吹っ飛ばされた俺は総スルーして、マイエンジェルはラウラたんへと突っ込んでいく。ある程度の距離へ寄ると、ショットガンを乱射。あの距離感なら大したダメージにはなっていないだろうけど、ラウラたんは鬱陶しそうにマイエンジェルをA I Cで捕らえた。

（ラウラたん、それ悪手！悪手！）

「今だ！」

「何だと……!?!」

（お、俺かい!?!このっ……!）

マイエンジェルは動きを封じられたが、今度はイッチーがフリーだ。急いで救援に向かおうとすると、予想に反してイッチーは俺へ斬りかかってくる。雪片相手に叢雨、驟雨は心許ない……。2本は鞘に納めて、急ぎ神立を抜刀。コンパクトに神立を振りかぶり、しっかりと雪片に勝ち合わせた……は良いけど。

「それは私の獲物だ！」

「よそ見しても良いのかな？」

これはもしかして、常に攻撃できる方を2人で同時に攻める作戦か!? きつとイッチー達は、俺とラウラさんの足並みが揃わない事を予想していたんだろう。そのため、こうやって入れ代わり立ち代わりで細かいスイッチを繰り返して……。現にイッチーも、マイエンジェルがA I Cから脱出したと同時にターゲットをラウラさんへ変えた。

「またな、黒乃！」

(な、なんつう潔の良い引きっぷり……。)

爽やかな様子でそう言うもんだから、思わず知らず取り逃がしてしまった。ああもう！ またラウラさんが囲まれてるじゃないか！ クソツ……。どうする、どう動くべきなんだ……。と、ここまで考えて思いついた。俺は、いったい何を必死こいて勝とうとしているのだろうか。

(結局のところ、アレが発動しないと困るってのもあるし……。)

物事には順序つてもんがある。今までだって、決まり通りに進めて……。決まり通りに生きてきた。今回の場合は、ラウラさんは倒され、アレが発動し、イッチーとの対話が代わるきつかけになる。それが正しい流れなのであって、俺が変に頑張っちゃったら余

計な事態を――

「教官から与えられた課題を、この私が……こなせない訳にはいかなのだあああつ！」
 「っ!? 流石はボーデヴィツヒさん……一筋縄じゃいかないね。」

「ああ。だけど、俺達が押ししてるのは間違いない! このまま押し切るぞ、シャルル!」

——いや、今の前言撤回。違う……全くもってそうじゃない。だって俺が言った事は、流れ通りじゃないとラウラたんが変われないと……そう言ってるようなもんじゃないか。ラウラたんがイッチー達に負けて、イッチーに答えを与えられる事では……変わる事が出来ないって決めつけたりなんかしちゃダメだ!

変わる。ラウラたんはきつと、自分の頭で考えて答えを見いだせる。流れに沿って負けにいくなんて言語道断! だから勝とう……イッチーとマイエンジェルに。勝って課題とやらをこなしてくれ。それがきつと、キミの次なる一歩に繋がるだろうから。

(恐れるな、考えるな、でもイメージは止めるな……常に強い自分を想像して——) 翔^とぶ!

「一夏、危な——」

「なっ……ぐ……ふっ!」

「藤堂 黒乃……!」

全力。ああ、なんだろうか……その言葉を念じて飛ぶだけで——こうも身体は軽く感じる物なのか! 俺は100%の0 オーバー・イグニッションブレスト I Bでイッチーに接近すると、そのまま

ドロップキックの要領で右足をその腹部へと見舞う。当然ながらイツチーは軽々と吹っ飛ぶ。だが、まだ終わっちゃいないよ！

「早く体勢を——」

（間に合わせなんかしない！）

「ぐああああっ！」

吹き飛ばした端からすぐに追いつき、神立の刃でイツチーの胴体を斜めに斬りこんだ。そのまま勢いに乗せて空中で逆さまになると、イツチーの露出している腕目がけて足を延ばす。鳥類の構造をした刹那の足で捕まえると、グルグルと回転して——

「う……うおわああああ!!」

（すまんね、マイエンジェル！）

「へ………？い、一夏!?!ひやつ！」

「っ!?!そこだ！」

「ぐっ………っ………!」

遠心力をつけ、マイエンジェルにイツチーを投げつける。空中で姿勢の制御が効かなかったのか、イツチーは見事にマイエンジェルへ激突した。それまでマイエンジェルと交戦中だったラウラたんだが、これは好機と言わんばかりにレールカノンを発射する。その砲弾は、吸い込まれるようにイツチーへと命中した。

(まだ終わらん!)

「……まだ来るの!？」

「ろくに体勢も整わせてもらえな——」

(ふんぬ!)

「キヤアツ!？」

「ぐわっ!」

神立を鞘に戻せば、続けて疾雷と迅雷を抜く。そのまま オーバーボード・イグニッションブリスト O I B を継続させ

つつ、一瞬で2人の前まで迫れば……固まった状態の2人に対して、一太刀ずつしつかりと浴びせた。だが……継続して飛ぶのは無理だな。 オーバーボード・イグニッションブリスト O I B の連続使用に

は暴発しないためのセーフティがある。悔しいながらも、再起動可能になるまで黒い羽は仕舞っておかなければ。

「藤堂 黒乃……。貴様、まだ出し惜しみをしていたのか!？先ほどとはまるで動きが違うではないか!」

「違うよボーデヴィツヒさん!黒乃の動きが良くなったのは……絶対に出し惜しみなんかじゃない!」

「シャルルの言う通りだ……。それこそが、千冬姉にも通じる強さなんだ!本当はお前にももう……見えてるはずだぞ!？」

「教官の強さ……藤堂 黒乃にも通じる……？ 解らない、私には……。」

なんというか、ラウラたんの言葉も正解だし……イッチー達の言葉も正解に近い気がする。でもまあ、俺の強さがちー姉に通じる……つてのだけは否定しておくよ。俺はそこまで気高くも誇り高くもない……汚い人間だもん。だけど今はせめて、どんな形だつて良いんだ……一つの答えをラウラたんに見せてあげたい。

「シャルル……決着をつけよう！」

「……うん！」

（ラウラたん、ポーツとすんな！ 試合はまだ終わっちゃいな——）

「黒乃おとおおっ！」

ええい、なんでこつちに來るんだい!? イッチーは解りやすい事に、俺の名を呼びながら突っ込んで來た。さつきと似たような状況だが、レーザーブレードの疾雷と迅雷なら問題ないだろう。俺は疾雷、迅雷を交差させるようにして、正面から受け止めた。

「……ありがとうな黒乃。お前のおかげで、大事なものは伝えれた。後はボーデヴィツヒ次第だ……だから！」

（くおっ!? まずい……ラウラたんから引き離されてしまう!）

イッチーは随分と押せ押せで、白式のスラストを全力で吹かしちからづくにも俺を後退させる。

オーバード・イグニッションブースト

I

B の使用は……まだ不可能か……! そうこうしている間

に、俺は地表近くまで後退させられてしまった。こうなったら、まだ地に足が着いていた方が踏ん張れる。俺は慎重に機体制御をしながら、刹那の脚部を接地させる。

(ラウラたん……ラウラたんは!?)

「クソツ！解からない……！解からない……！」

「これで……とどめ！」

ラウラたんは迫るマイエンジェルにレールカノンを放って応戦してる……が、その表情は不安でいっぱいの子供のようだ。きつとだけど、イツチーの言葉に思うところがあるんだろう。答えを見いだせてはいるが、それを認められない……と。オーケー………だったら、あともう少しじゃないか。怖がることなんてない……胸を張って、その答えに自信を持ってくれ。

(ただそれは……勝った後だって出来るさ！)

「しまった!？」

オーバード・イクニツションブリスト

O I B ……よし、クールタイムは終わった！それを確認すると同時に、俺は

雪片を横方向へと弾く。そのまま雷火から黒い翼を吹き出すと、一目散へマイエンジェルとラウラたんの元へ飛ぶ。マイエンジェルが構えているのは、盾殺しの異名を誇るパールバンカー……灰色の鱗殻。

俺はこの時にはもう悟っていた。マイエンジェルの攻撃を止めるには、もう手遅れだ

と。だが、ラウラたん……まだキミの盾になるって選択肢は残されてるからね！本気になった俺の想いつて名の盾……貫けるもんなら貫いてみな！俺はオーバード・イグニッションブースト O I B の勢いそのままに、ラウラたんへ抱き着いた。

「!?」

「で、でも……そのままー！」

（がっ……かはっ……!?）

ズガン！と爆薬が炸裂する音と同時に、俺の左わき腹へととんでもない衝撃が走る。オーバード・イグニッションブースト

O I B を使ったが、なんとかエネルギー残量はあるし、今のだって絶対防御は発動してる。だけど……絶対防御アリで、こんなにも痛いのか……!?俺はそのまま、ラウラたんを抱きしめたまま墜落してしまう。

「このっ……何故、何故なんだ！どうして貴様は、そう頑なに私を庇う!?」

「みい……出して……答えを……。」

「!?」

「手を伸ばせば……きつと……きつと……届くから……！」

ラウラたんは、俺の腕から簡単に抜け出す。それもそうだ……俺の腕には、ろくに力なんて籠つてないもの。まだ戦えない事も無い……けど、もうリタイヤも同然だ。だからせめて伝えたい事があった。俺はラウラたんへと手を伸ばすと、シュヴァルツエア・

レーゲンに包まれた手を握る。

「だから……戦って……!」

「戦……う?」

この時の俺は、それがラウラたんにとって最良だっと思ったんだ。だからこそ、俺がラウラたんを追い詰めた。自分に……酔ってしまったていたのかも知れない。だって俺の言葉が、アレの引き金になってしまったから……。俺は、とんでもない過ちを犯してしまっただ……。。



「……………っつ!」

(なんだと……いうんだ……!)

度重なる私を庇うという行為……今までののだっただけでまだ理解が及ぶ。しかし、藤堂黒乃は……絶対防衛に回せるエネルギーもほとんどない状態で、パイルバンカーを私の代わりに受けたのだ。バリア貫通の衝撃が凄まじかったのか、藤堂はまるで立ち上がる事が出来ない。それどころか、左脇腹を押さえて小刻みに震えている。

「このっ……何故、何故なんだ! どうして貴様は、そう頑なに私を庇う!」

「みい……出して……答えを……。」

「!?」

「手を伸ばせば……きつと……きつと……届くから……!」

私が憤りと不満をぶつけると、藤堂は無表情ながらも……必死な様子で私にそう伝える。答えを見いだせ……? そんなもの、とつくの昔に見えている。私に足りん物とは、教官のように絶対的な力……。そのはず……。なのに……! どうして私は、藤堂や織斑一夏やシャルル・デュノアの言葉に……恐怖を覚えてるんだ!?

知るのが怖い? 理解するのが怖い? ……そんなはずはない! 教官の力の出所が、そんな甘つちよろい要因なはずもない! だからもう止める……。私は藤堂に、教官と同じものを感じ始めていた。それどころか、教官と藤堂が重なって見える幻影すら浮かぶ。

(違う……違う違う違う! そんなはずはない! 認めてたまるか、そんな事! そうだ……力だ……私にもつと力さえあれば、こんなまやかし……すぐに消え失せるはずなんだ!)

「だから……戦って……!」

「戦……う?」

『力が欲しいか?』

藤堂の戦えという言葉の後に、然りと私は聞いた。力……? そう、力があれば、力が

あれば、力があれば……！戦わねば、戦わねば……教官を穢す全てと、教官の栄光を蔑にする全てと。教官のように絶対的で、唯一無二で、比類なき力で戦わねばならぬのだ。

そう……私が示す、私が教官と同じに、私が教官、私が織斑 千冬。私が私、絶対的で唯一無二で比類のない私。私にならねば、戦わねば、力があれば、私にならねば……！私は……私になるんだ！……瞬間、意識がどす黒い何かに飲まれるような感覚を覚える。

「あつ……ああ……あああああつ！」

藤堂が私を掴んでいた手離ると、私の意識はますます深い黒へと沈んでいく。その様相は、まるで底なし沼を呈していた。何処か、身を委ねてしまいたくなるような……しかし、それは甘い罠。深い黒のそこには……何も無い。そう……空っぽな私が墜ちるには、ふさわしい場所であった……。

第44話

(なんで…………どうしてこうなる…………?)

本気で頑張ろうって、ラウラさんの為になる事をしようって…………そう思ってたのに、結局はこの体たらくなのか…………?目の前で叫び散らすラウラさんを見てみると、とんでもない虚無感と絶望感が身体にのしかかる。俺が…………余計な事を言ったから…………。戦えなんて、ラウラさんに言ったから…………!

「何やってんだ黒乃!今のボーデヴィツヒは明らかに普通じゃない!」

(あ…………イツチー…………。)

悔しさのあまりに動けないでいると、慌てた様子でイツチーが俺を持ちあげ後退する。確かに…………普通じゃないよねえ。ラウラさんのシュヴァルツエア・レーゲンは、まるでスライムのように流動しているのだから。そしてどす黒い色のスライムは、ラウラさんを包み…………やがて何かの形を象る。

「あ、あれってもしかして…………!?!」

「雪片…………!」

ISに関わっている以上は、マイエンジェルも見覚えがあったらしい。そう…………まる

で第1世代型のISかのような形状に収まったソレは、その手に雪片そのものでしかないブレードを握っていた。それを見たイツチーは、まるで親の仇を前にしたかのような顔つきに変わる。

ヴァルキリー・トレース・システム、通称はVTシステム。モンド・グロツソにおける部門受賞者の動きをトレースさせるといふ代物だ。どういった形状になるかは、操縦者の意思……願望と言いかえた方が良くのかも知れない。つまり、ラウラたんがそうある事を望んだが故の……雪片だ。

「……………フーツ！オーケー……………落ち着いた。シャルル、黒乃の事を頼む。」

「まさか、アレと戦う気!?確かに白式のエネルギーには余裕があるけど——」

「シャルル、頼む。」

「……………解かった。黒乃、立てそう?」

原作では、姉のオンリーワンを模倣したアレに激昂していたイツチーだった。が、イツチーは歯を食いしばって何かを堪える様子を見せると、次の瞬間にはキリリと男らしい顔つきになっていた。そしてマイエンジェルに俺の事を頼むと、悠然と雪片式型を構えて見せる。

「黒乃。」

「……………?」

「力つてき、何が正しいとか間違つてるとか、そんなのは存在しないと思うんだ。……頭の悪い俺にはよく解からないけど。ただ、黒乃や千冬姉を見ると……思うんだ。力つて、強いって、こういう事なんだろうなって。馬鹿な俺でもなんとなく……それだけは解る。俺に解るんだから、ボーデヴィツヒに解らないはずないよな？」

「……………」

マイエンジェルの手を借りながら立ち上がっていると、イツチーが俺に対してそう語りかけてきた。まあ……俺に関しては的外れも良いとこだけど、確かに……ちー姉は背中語ってくれる。俺もイツチーと同じで、ちー姉の強さの源流つてのは理解してるつもりだ。ラウラたんに関する問いにも同意しておく。

「だからさ、見ててくれ。俺は俺をアイツにぶつける。それがきつと——」

『』

「アイツに俺が言いたい事を伝える事になると思うから！」

「二夏……。……さ、黒乃……。僕は離れてよう。」

イツチーはその言葉を最後に、暴走中のラウラたんへと突っ込んで行つた。2本の雪片がぶつかり火花を散らすよりも前に、マイエンジェルは俺を後方へと下げてくれた。ぐっ……。でもやつぱり、灰色の鱗殻グレイスケールの打撲痕が痛む……。マイエンジェルが少しでも力を緩めると、思わず片膝を着いてしまった。

「ああつ!?ご、ごめんね黒乃……。その、僕のせいでこんな。」

「それは違う。」

「え?あ、ああ……。うん、ありがとう。」

それは試合だから仕方のない事だし、何より俺がやりたくてやった事だ。マイエンジェルが罪悪感を感じるのは、筋違いでしかない。……という意味を込めての違いました。だったが、どうやらマイエンジェルには通じたらしい。しかし、イツチー……。大丈夫かな。

いや、俺に出来る事は……。イツチーの邪魔にならない事だ。疾雷と迅雷……。は、ラウラたんを庇う前に仕舞ってたか。肩まで手を伸ばすのも億劫なので、俺は神立を引き抜いて杖替わりに立つ。刹那のエネルギー残量からしても、ピットへ戻る余裕くらいはあるな。

「黒乃……。そっか、そうだよね。黒乃にとつても織斑先生はお姉さんだもん。一夏と一緒に戦いたいよね。僕のリヴァイヴ、コアバイパスでエネルギーを送れるから……。それで少しは足しになると思う。」

(は……。?いやいや、違う……。違うから。マイエンジェル、れれれ冷静になれ……。)
「キャッ!?お、落ち着いてよ……。すぐに済むから。」

コア……。バイパス……。?ハアッ!?わ、忘れてたああああ!そうか、そうだった……。

原作と違って、イッチーは相当な余力を残して暴走ラウラたと戦っている。そうなる
と、今俺の状態が原作のイッチーに近いんだ。俺が立ったのを戦闘継続の証だと思った
マイエンジェルは、着々とエネルギーを刹那へと移し替える。

「……はい、これで大丈夫なはずだよ。黒乃、頑張つて！キミと一夏が揃えば絶対に大丈
夫だから！」

(チツキショー！またこのパターンかよおおお！)

エネルギー転換を終えたマイエンジェルは、凜々しいかつ可愛らしい表情でそう言
う。前のモツピーの時と同じく、こんな事言われたら俺には断れない！マイエンジェル
に向かって頷くと、グングンと刹那を加速させ暴走ラウラたんへと迫った。

(エネルギー……使えてQ クイック・イグニッションブーストオーバード・イグニッションブースト I BかO I Bのどつちかくらいだな……)

ま、残りはイッチーに任せるとして……)

「黒乃!？」

(俺は俺のやれる事を……死なない程度に頑張ろう！うん、死なない程度に！)

ラウラたんがこうなったのも俺の責任だし、自分の尻は自分で拭おう……死なない程
度に。未だ地表近くで斬り合いをしていた2人に接近すると、一撃離脱するつもりでラ
ウラたんの真横から神立を振るう。しかし、それは不発に終わった。なんとラウラたん
は雪片を豪快に振り回すと、俺と一緒にイッチーまで吹き飛ばしてみせる。

「ぐっ……………！黒乃、お前……………。いや、やっぱなんでもない。」

「……………」

「俺と一緒に戦ってくれ。黒乃が隣に居てくれるんだっただけ……………俺は、なおさら頑張れるから。」

イツチーは、数瞬だけ俺の身を案じるかのような顔つきになった。だが、途中でそんな事言うのは無粋か……………みたいな笑顔を浮かべやがる。言つてよ、今すぐ下がつてくれつて……………。まあ良いか、確かにイツチーと一緒に戦うつてのは……………最高のシチュエーションなんだろうからさ。

「行くぞ、黒乃！」

（あいよ、イツチー！）

『……………』

イツチーが右方向へ大きく旋回するように飛び出したのを見て、すかさず俺は左方向から大きく旋回するようにラウラたんへ迫る。……………初動でイツチーの考えてる事が理解できるつて、俺も相当……………いい、いや……………この考えは後にしよう！さて、左右からの同時攻撃だ。さつきみたいに油断はしないぞ……………。

『……………』

「なつ、クソつ！こんなのもやっぱり千冬姉なのか……………!?!」

(そう言いたくなるのも解るよ……！)

ラウラたんは、神立を雪片で受け……雪片式型をガツチリと手で掴んでいた。そしてそのままイッチーを俺へと放り投げて来るが、それは跳び箱が如く回避。しかしだ、上を越えてくるのは予想通りだったらしく……その先にはラウラたんが待ち構えていた。い、いやああああ！

(あ、あつぶねえ……！)

『』

剣道の面みたいに頭上へ雪片を構えているのが見えたから、俺はとつさに神立を真横にして防御の体勢をとる。俺の方が速かったようで、雪片はギリギリとところで防ぐことに成功だ。だけど、この目の前に雪片が迫ってる状況をどうにかしたいよお！

「黒乃！」

(おうよ、イッチー！)

……なんだろうか、イッチーが俺の名前を呼んだだけで……何が言いたいか解ってしまつた。……イッチーがどういうつもりで俺の名を呼んだかというと、今のは急いでそこから退いてくれて事。なんとか勢いよく神立を前に押し出すと、雪片の刃が離れた。その隙を突いて離脱すると、響いたのは発砲音だ。

「よ、よし……当たった！」

(銃……原作では落ちたの拾ってたけど……。まあ良いか、細かい事は何だつて！)

どうして発砲音?と思っていると、ハイパーセンサーにはハンドガンっぽい武装を構えたイツチーが。その弾丸は、見事にラウラたんへと命中した。遠方からの攻撃は予想外だったのか、ほんの数瞬だけたじろぐような仕草を見せる。……来た……一瞬の隙！それを理解するよりも早く、俺は本能的にクイツク・イグニッションフースト Q I B を使っていた。

開いていた間を一瞬で詰め……神立の刃をラウラたんの腹部へ押し当て……斬る！……斬る！……あり？刃が滑らせない……。御存じの通り、刀つてのは叩きつけただけではあまり効果を生まない。相手に押し当て、そこから刃を滑らせ致命傷を浴びせるのだが……。こういう事が、神立がこれ以上動かさな……つて、ああ!?

『』
(神立思いつきり握られとるううう!?)

神立の鏢付近……刃の根元にあたる部分を推し当てていたわけだが、先の方をガツチリと掴まれているではないか。く、くつ……神立の長さが仇になつてるな。……ふお!?

ラ、ラウラたんが雪片振り上げて……!さつきも言ったが、クイツク・イグニッションフースト Q I B か

オールド・イグニッションフースト
O I B どちらか1回使えて限界……今の刹那はそんな状態だ。つまり――

「一夏あ!」

「つ?!黒乃……!ああ、任せろ……黒乃お!」

死ぬ……！撃喰らったら死ぬう！かなり慌てた俺は、イツチーを一夏と呼んで意思伝えた。要約すると……はよ！零落白夜はよ……という事。俺はより早く零落白夜をラウラたんへ当てるために、雷火を通常運行で限界まで速度を上げる。……ハッ!?神立から手を離せば早かったじゃん！ま、まあ良いや……このままいっけー！

「おおおつ！せええええええい！」

(ぬどらあああああつ！)

『』

俺とイツチーは、お互いの位置が入れ替わるようにすれ違いざまに刃を振るう。零落白夜が当たった為かは知らないが、神立はラウラたんの手から離れて刃を滑らせる事に成功した。なんかこう……自然にコンビネーション必殺にたいになったな。お互い背中だけ見せて動じない俺達……なかなか絵になっている気がするぜ。

「おっと、危ない……。」

ハイパーセンサーに敵対反応はなし……勝ったんだ。その証拠に、ラウラたんを包んでいたスライム状の物体は飛散していった。そこから倒れ込むように出てきたラウラたんを、イツチーはしっかりと受け止める。ラウラたんは……子供のよう寝息をたてている。

「……………」

(どつたのイッチー?)

「ああ、いや……なんか変な空間? みたいなどこでさ……ボーデヴィツヒと話したような気がして……。」

へえ……決着の前の一瞬で、原作におけるあの現象は起きてたのか。原作でも詳しく言及されていないため、IS操縦者同士が心を通わせた……程度の事しか解んないけどね。しかし、やっぱり俺じゃダメなんだな……。主人公様様だよ、イッチー。……かつこよかつた。

「一夏ー! 黒乃ー! やつたね〜!」

「ああ、シャルルもお疲れ! 黒乃、お前もな。さあ、皆のところへ帰ろう!」

イッチーはそう言いながら、俺の頭を優しく撫でた。む、むむむむ……も、もう取り乱しはしないぞー! ……やっぱり照れはしてるけど……。まあ……たまにはこういうのも悪くない……ああ、悪くない。さて、それはさておき……遠くで手を振ってる天使の元へ急ぎましようかね。



『(ぎ)弟妹……ですか?』

『ああ。あの2人を見ていれば、なんとなくそういう事を考えさせられる。強さとはなんたるか、とな。』

『……理解が及びません。』

『今はそれで良いさ、ハッキリと答えがあつていいはずもない。まあ、日本に来る事があれば会つてみる。ただ、弟の方には注意しろよ。隙を見せれば惚れさせられるぞ。』

暗い意識の最中、教官と話した事を思い出していた。何故今になつてこんな事が思い浮かぶのかは解からないが、ただ……私は羨ましかつたのだ。弟と妹を語る教官の顔は、間違いなく姉そのもので……。私には向けられた事のない一面だった。

そんな弟と妹の持つ強さとは……。私はその答えを知りたくて、知れば知るほど……理解はしたくなくなつた。だつてそれは、私の中にある教官を否定するものだったから。ただ、哲学的な概念だ……明確な答えなんてある事がまず可笑しな話ではある。だが、その中の1つ……織斑 一夏と藤堂 黒乃の持つ答えは、随分前から見えていた。『考え過ぎ、前から思つてたけど……お前ホント石頭だよな。』

(何だと貴様……。)

『理解したくないつてお前の気持ちは解る。けど、二の足踏んでて前に進めるか？進めないだろ。』

暗い空間に小さな光が瞬く。すると何処かからか、織斑 一夏の声が響いた。優しげ

な声色のその声は、聞いていると酷く安心するような気がした。諭すような口調でそう語りかける織斑の言葉に対して、真剣に考えを巡らせる。とりあえず進めるか否かは、ノーに決まっている。

だから私は歩みを止めなかった……ふりをしていたんだ。実際は、見えた答えを恐れて……八つ当たりをしていたに過ぎない。その被害にあったのは、間違いなく教官の弟と妹……。さつきもそうだ。認めたくないからと逃げて、私が教官になつてしまえばと……力に振り回された。

『……大丈夫だ。俺も黒乃もそんなに気にしちやいない。だから……怖がらなくつたつて良いさ。』

(己の弱さを認める事……貴様は怖くないのか……?)

『いや、怖い。そんなの誰だつて怖いに決まつてる。だけど、俺に歩みを止めてる暇はないんだ。』

(強いな……お前は……)

私に出来なかつた事を平然とやってのけるならば、やはりそれは私の上をいつているという証拠……。そうか、私はこの強さに負けたのだな。自分の弱さを認めて、向き合つて、少しだろうと前に進む。こんな簡単な事も出来んとは、教官もさぞ私に失望して……。

『ちよつと待て、勝手に一人で自己完結すんな。俺は弱いよ。弱いから、少しでも前に進みたいってただけだ。』

(それならば私は……いったいどうすればいい……?)

『……俺の隣には、全力疾走して前に進んでる大事な人が2人も居る。並走するのがやつとくらいなんだけどな、いつか絶対追い抜くんだって思ってたら……怖いなんて思つてられない。……それだけの事だ。』

……何処か自嘲するかのようには、織斑の声はそう言う。あまり自信はなさそうだが、私にとっては……ますます強い奴だと思ひ知らされる。やはり私には、追いかける事しか出来なかつた。追い抜こうなどと、考えすらしていなかつた……。そうだ……。いつまでも背中ばかり追いかけていたって何も始まらないではないか。

『そう、その意気だ!もし……それでも前に進むのが怖いつてんなら……俺が着いてる!俺達が側に居る!ここは……そういう場所だからな!』

(……今更私が、のうのうとお前達に……。)

『何言つてんだ、スタートラインなんて勝手に自分で作り直せば良いだろ。だからほら……一緒に走ろうぜ!』

(ああ……なるほど、これは……)

確かに惚れてしまいそうだ。瞬くような弱い光は私に向かって手を差し伸べている

ような気がした。私も、その光を掴むように手を伸ばす。するとどうだ……弱い光は徐々に大きくなっていき、一面に広がる暗闇を照らした。やがて光は私を包み、そして

「んっ……っ？」

目映い光に思わず目を閉じていたが、薄く目を開けば……そこはどうやら保健室のようだ。夢……だったのか？ いや、あれは確かに私の意識で……織斑との対話。わけが解らんなりに、状況を整理しようと上半身を起こす。しかし……頭がボーツとしてまともな考えが浮かばん。

「目が覚めたか？」

「織斑先生!？」

タイムミングの良い事で、保健室に寝かされた私の様子を教官が見に来た。教官を目の前にしたせいとか、私の頭は一気に冴えた。それと同時に、私に何が起きたのかも思い出す……。少し目を伏せた私に対して、教官はいつも通りの堂々とした態度で、私へと向けて告げる。

「VTシステムを知っているか？」

「ヴァルキリー・トレース・システム……ですね？」

教官曰く、我がシユヴァルツェア・レーゲンへと巧妙にVTシステムが組み込まれて

いたそうだ。本来はエネルギー切れがトリガーになるよう設定されていたようだが、操縦者の願望に依存するところも大きいとか。……それは、私が余程教官になりたかった……という事か。

「VTシステムは知つての通り条約違反だ……。お前に身に覚えが無かろうと、委員会からの取り調べを受ける事になるだろう。」

「……はっ、了解しました。」

「だからここは学校だと言っているだろうに。まあ良い……確かに伝えたぞ。」

「あの、織斑先生。貴女からの宿題……今この場で解答させていただいてもよろしいでしょうか？」

要件を伝えると、手早く去ろうとする教官を引き止める。教官は振り向きすらしなないが、一応は立ち止まってくれた。その背中が、とつと話せと語っているように思える。私はこれまでの事と、先ほどの事を思い出し……自分なりに得た解答を、自信を持って教官へ語る。

「力とは、強さとは……前に進もうとする意志なのではないでしょうか。そして私に足りなかったのは、何の為に力を振るうか理解しようとしなかった事です。」

「私は確かに前には進んでいた。ただ……それは教官の虚像をただただ無意味に追い続けていただけだった。だからこそ今までの私の力は、暴力の域を出なかったのだろ

う。それも一つの力の形なのかも知れんが、今ならハッキリと解る。私の進むべき道には、単なる暴力など必要ではない。

「私は……貴女になる為に力を振るいません。私は私……貴女にはなれない。私はラウラ・ボーデヴィツヒ。私は私のままで、貴女を超える為に強くなってみせます。」

「なるほどな……悪くない答えだ。……励めよ。」

「はっ……はい！」

私の言葉を聞いた教官が、少し笑った……気がした。すると予想外な事に、激励の言葉をいただける。ここは学園で、そういうのは必要ないと言われてはいるが……私は思わず敬礼して返事をしてしまう。私の返事を聞くと、教官はまるで満足したかのように保健室を出て行った。

『ああ……妹の事で一つ思い出したんだが。そちらにも気を付ける事をオススメしよう。』

『それは何故です。妹であるならば、私と同姓なはずでは……。』

『アイツは男タラシ女タラシと言うよりは……人タラシだ。弟の方は気をつけていされば大丈夫だろうが、アレの人タラシっぷりには参るぞ。恐らくお前も、いつの間にやら』

ふと、あの時の会話の続きを思い出した。ハハッ……どちらも教官の言った通りに

なってしまうとは、私の道もまだまだ解った物ではない……という事か。……八咫鳥と畏れられながらも、藤堂があんなにも慕われているのは……私が、今まさに抱いている感情があればこそなのだな。私は自分自身に呆れるような……それでいて確かな満足感を胸に、バタリとベッドに倒れ込み天井を仰いだ。

第45話

「え〜……皆さん。今日はですね転校生?の紹介をしたいと思います……。」

暴走ラウラたんととの激闘を繰り広げた翌日、山田先生が混乱した様子でホームルームを始めた。そして初めにそんな事を言うので、また転校生かと女子達は騒ぎ出す。しかし、ちらりとマイエンジエルの席に目をやると……そこは空席。これが何を意味しているか、俺にはすぐに察しがついた。

「それでは、入って下さい。」

「はい。」

返事と共に教室へ入って来たのは、長い金髪を束ね紫色の瞳をした美少女である。というかもう、マイエンジェルな。マイエンジェルを中性的な美少年だと思い込んでいた女子達は、ポカンとした表情を浮かべる事しか出来ない。そんな空気感を物ともせず、釈然とした態度でマイエンジェルは告げる。

「改めまして、シャルロット・デュノアです。皆さん、よろしくお願いします。」

「と、いうわけでして……デュノアくんはデュノアさんだったそうです。」

山田先生がマイエンジェルは男じゃなくて女ですよとご丁寧に説明するが、もはや一

組の女子は聞いちやいない。事情を知っていたイッチーと鷹兄は、どこか嬉しそうな表情でマイエンジェルを眺めている。でもイッチー……キミはそんな表情してられなくなると思うんですけど（名推理）

「あれ……？昨日って確か、男子が大浴場つかってなかった!？」

ほうら来た。ザワザワと喧騒の最中というにも関わらず、大浴場を男子が使ったという発言は良く通る。それを機に、ザワつきは徐々にボルテージを上げて行く。あれ、それにしてはイッチー……まだ余裕のありそうな表情だな。死にゆく定めだと悟ったか？

「一夏あ！死——」

「うおおおおつ!?!鈴……待て、落ち着け!風呂の件なら俺は無実だ!」

「……は?どういう事か説明しなさいよ。」

なんと、なんと……!イッチーはマイエンジェルとの混浴を回避したとの事!馬鹿な……自分からそんなイベント回避していくスタイルって、イッチー……キミはやつぱりホモなんじゃないだろうね。確かに学生の身分でKENZENじゃないのは解るけど……。

「俺はシャルロットの事情は知ってた。けど、風呂は一緒に入ってない。怪しまれるとまずいから、脱衣所までは一緒にいたけどな。」

「……………」

「ほ、本当の事だよ……。……僕は一緒に良かったけど。」

ふむ、だからこそイッチーは余裕そうな表情だったんか。鈴ちゃんに無言で睨まれたマイエンジェルもそれを肯定したが……。呟いた言葉は聞き逃さなかったぞ。ああ、羨ましい……。まあ良いや、騒ぎにならない方が俺としては良いしね。でも、鈴ちゃんは疑り深い目でイッチーとマイエンジェルを何度も交互に見つめる。

「アンタ、本当にやましい事してないんでしょね?」

「ああ、勿論……。………あつ!」

「あ?今あつて言ったわよねえ。」

「い、いやーだろうな、微妙なところだと思う……。…」

「微妙!?それは流石に聞き逃せないよ!女の子の裸見て微妙だなんて——」

「アウトオオオオつ!」

鈴ちゃんとの会話中に、どうやらイッチーはマイエンジェルの全裸を目撃したのを思い出したらしい。素直なイッチーは、何か思い出し事を一瞬で露呈した。で、それをやましい事かどうか判断しかねる発言をしてしまい……。結局のところ全裸を見たのは鈴ちゃんにばれてしまう。

鈴ちゃんは展開状態の甲龍から衝撃砲をぶっぱすが、それに対して微動だに動かな

い俺氏。だって、展開的に変に動く逆に危ないんだろうし……。衝撃砲が放たれると共に爆裂音が響くが、特にこれといった被害はない。何故なら……ラウラたんがA I Cで衝撃砲を相殺してくれたからだ。

「……おお、ボーデヴィツヒか。助かった……つてか、シユヴァルツエア・レーゲン……もう治ったんだな。」

「ああ、近江先生が半日でやってくれた。それよりも……。」

は、半日……？あ、ほんとだ……レールカノンがちゃんといてる。原作では予備パーツで無理矢理組んだみたいな事を言っていたけど、鷹兄もたいがい常人離れしてるんだなあ……。それはさておき、此処からはどう動くかキチンと考えないと。ラウラたんはイッチーの胸ぐらを掴むと、自らの方へ引き寄せその唇を……。

「へ？あつ……な、なんでだよ!?フンヌツ！」

「んっ……。何故避ける？私では不服か……？」

「な、なんでつて……それは……。」

イッチーは必死な様子で体をねじらせ、ラウラたんのキスは頬に着弾する。何故避けたのか、その理由をラウラたんが問い掛けてもどもるばかり。……しきりに俺へと視線を送るのはどうしてだい？イッチー。いやね、オジサン羨ましいとは思うけどさ……別に怒ったりはしないけど。

「……まあ良い、インパクトが大事だと言われただけだしな……。あーゴホン！お前は私の嫁にする、異論は認めん！」

「嫁……？婿じゃなくてか？」

「日本では気に入った者を嫁にするのが一般的習わしだと聞いた。それ故、貴様は嫁だ。」

あのねラウラたん……確かに俺にも嫁はいっぱい居るよ？けどね、それはあくまで二次元限定であつて……。昔からそんな習わしがあつたとすれば、今ごろの日本はどうなつていた事やら。……いや、多分ダメだ。喋れたとしても、ラウラたんには聞き入れてもらえなかつたらう。

「一夏く？今のに関しては言い訳あるかしら〜？」

「ちよつと待て、俺は被害者だろ!？」

「そして藤堂、これはお前次第だが……。」

「……………」

あれ、俺もか？確かに二次創作に置いては、ラウラたんなんて呼ばれるかも醍醐味つてかそんな感じの物だけど。現実にも目の前で起こると、何だか恐縮してしまう。というか、ラウラたんが俺に話しかけてる背後で……イツチーは大変な事になつてるんだが良いのかな？主に、4人の修羅に囲まれて……。

「良ければ、姉様と呼ばせてもらえないだろうか!? 姉様と嫁は家族同然というわけで、その婿たる私にとつてもつまるところ姉様で……その……。」

(かつ、かつ……可愛い! 勿論、そんなの良いに決まつてるじゃん!)

姉様とはオーソドックスなどこ突いて来たとは思つたが、ストリートな分破壊力は絶大だった。それも頬を紅くしながら、更にはモジモジしながらそう言うもんで……そんな可愛いお願いのされ方をして、この俺が断れるはずもない。俺は即答で、首を縦に振る。

「ほ、本当か!? ありがとう……姉様!」

(グツハア!? も、悶え死ぬ……可愛さ余つて悶え死ぬ……い、今はそれよりもだね……。)

とにかくイツチーを助けてやらんと……つてか、むしろヒロインズ……キミたちの為だ。何度も言うがね、イツチーに対して暴力を振るうのはますますキミ達の想いを遠ざける。ジャンプしつつ刹那を展開した俺は、モツピー、セシリー、鈴ちゃんの足元に神立、疾雷、迅雷以外の刀を投げつけた。

叢雨、驟雨、紅雨、翠雨は、モツピー達の足元へサクサクツと突き刺さる。俺はその間に神立を抜刀。イツチーとマイエンジェルの間に割り込むと、既に構えの体勢をとっていたグレースケールを弾く。そのまま神立の刃を、マイエンジェルの首元へそつと置

いた。

「藤堂、良くやった。床の傷以外は完璧だ。」

「お、織斑先生!？」

「さて、朝から騒ぎ立てる愚か者は何処のどいつだ……うん？」

えへへ……ちー姉に褒められちった。……ってあれ？ちー姉……？褒められはしたが、ISの展開してる俺もまずいような気が……。俺を除いた6人に関しては、絶望を絵に現したような表情を浮かべている。とにかく、ちー姉の登場により……その場はなんとか収まった。

しかし、6人に関しては……何か酷い目にあつたらしく、放課後に揃ってアリーナでぐったりしてる所が目撃されたとか。俺はどうやら、一応ながら騒ぎを止めようとしたのが評価されたみたい。ただ、やはり無許可のIS展開は容認できないと……外周5キロのグラウンドを走りまわされる羽目となった。



「つ・ま・ん・な・い……の〜!」

薄暗いラボのような場所で、1人の女性が椅子から転げ落ち……ジタバタと床で転

がつてみせた。不思議の国のアリスに登場する主人公、アリスのようなエプロンドレスを身に纏い、その頭には思わず目を引くウサ耳カチューシャを装着している。その特徴で容易に想像が着くだろうが、この女性は天災……もとい天才科学者の篠ノ之 東。

何がつまらなかったのか、その答えは彼女が先ほどまで見ていた映像が起因する。椅子から落ちる寸前まで見ていたモニターには、黒乃の姿が映し出されていた。同じ画面に一夏やラウラが映っている事から、映像はどうやら先のタッグマッチの場面らしい。「く〜ろ〜ちゃ〜ん……有象無象なんか庇っちゃって……。思いつきり暴れてくれたら東さんは満足なのにさ〜。」

床をゴロゴロ……ゴロゴロ……まるで子供が遊んでいる様に転がる。そうして東は、まるで本人を目の前にしているかのようには不満を口にした。東はどうやら、黒乃がラウラを庇った事に関して良く思っている居ないようだ。それもそのはず、東が期待しているのは……思うがままに暴れる黒乃なのだから。

「なんの為のISなんだか……。もお……。IS学園てくろちゃんの枷だらけじゃん。いつそどうにかこうにか学園を——」

ピリリリリ……

「この着信音は!?!とぅー!」

東はさつきまでの不機嫌そうな表情は何処へやら、ヘッドスライディングの要領で携

携帯電話へ文字通り飛び付いた。その際に様々な物品を蹴散らしているのだが、そんな事を気にする概念を束に求めるのが間違いだらう。束は手に収めた携帯電話を、即時通話可能な状態へと切り替えた。

「もすもす終日?」

『……………』

ハイテンションな声色で通話機に言えば、帰って来たのは通話が切れたツ…………ツ…………という虚しい音のみ。これには束もギョツとした様子を見せると、わたわたと慌てながら携帯電話を操作する。しかし、そんな事をしている間に、向こうの方から再び電話がかかった。

「はいはい！皆のアイドル束さんだよーっ！」

『……………』

「ちよつ、ちーちゃんちーちゃん…………無言芸は止めようよ。束さんのピュアハートがメソメソしちゃう。」

『その名で呼ぶな。』

「おっけえいちーちゃん！」

懲りないのも束の性分だろう。2度目も冗談めかした様子で電話に出ると、帰って来るのは無言のみ。ただ、さつきと違って切られないだけ交渉の余地はある。そう考えた

東は、すかさず会話を継続させるために適当な言葉を紡いでいく。その思惑を知ってか知らずか、電話の相手である千冬は見事に釣られてしまう。

『もう良い……。手短に言うぞ。お前……。今回の件に関与していないだろうな?』

「今回……。ああ、あのブツサイクなアレの事? やだなく止めてよちーちゃん。この束さんが、あんな不完全な代物を造るわけないじゃん!」

東の言う不細工なアレとは、シユヴァルツエア・レーゲンに仕組まれていたVTシステムの事だ。作る物は完璧で十全でなければ意味は無い。……。というのが束のモットーである。つまり、束が仕組んだ事ならば……。そう簡単に済む話では無かった。聞いている千冬からすれば、遠まわしながらもそう言っているように聞こえた。

「あーそうそう、今思い出したんだけど……。アレ造った研究所なら地図から消えちゃったよ。もちろん犠牲者はゼーロー!」

いくら秘匿の存在であろうと、研究所ならば規模はそれなりだったはずだ。それを地図上から消し去って置いて、束はいけしゃあしやあとと思ひ出したと語る。それすなわち、忘れていたという事。束にしてみれば、本当にその程度の事としかカウントされないらしい。

『……。そうか、解った。邪魔をした——』

「ああ、ゴメンゴメン。ついでにこつちから質問したいんだけど……。だいじょぶ?」

『何……? お前が私に質問だと……。まあ、構わんぞ。何が聞きたい。』

「くろちゃんにベタベタしてる虫けら居るでしょ? あれ……何かな。」

束から黒乃に質問という時点で、千冬からすれば嫌な予感しかしなかった。しかし、こちらから質問しておいて断るのもなんだ。訝しみながらも束の質問とやりに耳を傾けると……思わず千冬はゾツとした。必死に取り繕っているのかも知れないが、冷えっ切った冷気を束の声から確かに察したから。

『……聞かずともお前なら解るはずだろう。』

「ん……固有名詞が近江 鷹丸で、天才だか神童だかのボンボン野郎。……くらいは知ってるよ。1人で社の功績を格段に上げた実績は認めてあげても良いかな。……けどね、ちーちゃん……束さんが聞きたいのはそんな事じゃないの。どーゆーつもりで、くろちゃんに擦り寄ってるのかなって話。」

まずい事になった。千冬の脳内には、そんな思考しか思い浮かばない。どうやら束が聞きたいのは、鷹丸の名前や出自といった概念の事でなく……何故黒乃を落そうとしてるかという話だった。黒乃を同種の存在として大切に思う束としては、そんなのを見過ごすわけにもいかないのだろう。

『……人が人に惹かれるのは仕方がない事だ。私も奴は気に入らんが、口を挟むべき問題では無い。……もちろんだが、お前もな。』

「へえく……ふうくん……あ、そー。あいつくろちゃん殺せる相手探してるんでしょ？
それでもちーちゃん仕方がない、口を挟めないで済ましちゃう感じ？」

『……それこそ奴は……真意が読めん。あくまで比喩表現に過ぎんのか、それとも……。
ただ、見ていて1つだけ解る事はある。奴は……近江 鷹丸は、心から黒乃の事を愛し
ている。……そこだけは、間違いないはずだ。』

千冬は焦った。まさか自分や昂しか知らないであろう……鷹丸の語った目的を束が
知つていようとは露ほども思わなかったからだ。だからこそ束の返しには、細心の注意
を払つて会話を続ける。千冬は口にしなだけでこう考えていた。束と鷹丸の本質は
似ているのだと……。

「そつかそつか、愛さええさればそんなのは問題でも無いか。愛は地球を救う？ラブアン
ドピース？」

『そこまで大それた事は言わん。とにかく、奴の事はあまり気にかけるな。』

「はいはい了解！それじゃ、また何かあつたら連絡ちようだいね！」
『ああ、またな。』

千冬はなんとか鷹丸から興味を反らそうと、らしくもなく愛などと語つた。うわべだ
けの確かでないもの……その筆頭的存在である愛という感情。そんなものは束にとつ
て取るに足りない。千冬の狙い通りに一気に興味を失つたのか、束は随分とテキトーな

返事で返した。

千冬の会話に区切りをつける言葉を聞くと、東は数拍おいてから携帯電話の通話を切った。そうして、通話の終わった携帯電話など東からすれば小石以下の存在と化す。うつ伏せの状態のままポイーと携帯を後方へと放り投げると、東はノソノソと立ちあがり……そして――

「フフフ……そつかー……やっぱくろちゃん殺せる相手を探してたかー……。」

東が千冬との会話で紡いだ言葉は、実のところほとんどがブラフだった。鷹丸が黒乃に擦り寄ろうが何だろうが、愛していようがまいが……どうでも良い事だ。東が千冬との会話で得たかった情報は、鷹丸が黒乃を殺せる相手を探しているか否か。

知っている風な口調で自らが問い掛けた東だったが、千冬は完璧に否定をしなかった事でようやくくの確信を得たのだった。それを理解した東は、おもむろに自身の親指先端付近へと嘯み付く。どこか濁った瞳でブツブツと何かを呟き、その様子を見ていただけでも気が触れてしまいそうな迫力を醸し出す。

「有象無象の分際で人間の域を出ない分際で天災の域に入らない分際で……！くろちゃんを殺せる相手を探す……？ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな……！それは――」

ギリギリギリギリ……！呟きの速度が増していくと共に、東の顎に込められる力は増

していく。やがて束の指はその力に耐えきれず、皮が裂け肉が裂け……床へは鮮血が滴った。それでも束は自傷行為を止める事なく、ギリギリギリギリと更なる力を顎に込めた。

「私の役目だ……くろちゃんを殺すのは私の……。くろちゃんを愛してる？ 私以上にくろちゃんを愛してる存在なんてあるわけない。だって束さんとくろちゃんはおんなじなんでもん。くろちゃんが求めているのは私。だってくろちゃんの本質を暴き出したのは私。あいつじゃない私、私、私、私……！」

千冬は……根本的な間違いを起こしていたのだ。束が鷹丸の事を訊ねたのは、黒乃の心配をしているからだ。実際は逆……180度違う。束にとって黒乃は唯一の同族。さすれば束は、黒乃の求める物全てを与える所存だった。思い切り戦える場も整えた……だからこそISを世界に送り出した。

だから黒乃が死に場所を求め、自身を殺せるほどの相手を求めているのなら……それを自分以外が実行させる事など、束からすれば万死に値する。平たく言ってしまう、とんでもなく歪んだ独占欲が束を駆り立てているのだ。逆を言えば、自身を本当の意味で理解できるのは黒乃のみとも思っている……つまり――

「フフツ、アハハ……関係ないよね……有象無象がどう動こうと。だって、キミと通じ合ってるのは私だけなんだよ……くろちゃん！ 殺されたいんだったら、私が愛してあげ

る！だからくろちゃん、キミも私を殺すつもりで……ううん！愛しに来てよ！私かくろちゃんのだっちかが死んじやって完成する愛情表現……素敵だよね！ねえ、くろちゃん！」

束は両手を広げて天を仰ぐと、またしてもそこに黒乃が居るかのように話し始めた。そうして愛を語る束の表情は……恍惚そのもの。狂った笑い声を上げ、自分の身を抱きしめるようにして……官能的に身をよじらせてみせる。男だつたら一瞬で発情してしまいそうな、そんな色気が今の束にはあつた。

「金鳥玉兎……良い響だよね、キミが太陽で私が月。キミと私は表裏一体。ああ……くろちゃん……愛してるよ！この上なく！だから……だから思いつきり束さんと殺し合おうよ！」

クルリラクルリラ……まるで演劇かのように大げさな回転をしつつ……束はそう叫んだ。まるでスポットライトでも当たっているかのような錯覚さえおぼえるその様は、まさにそこらを跳ね廻る兎そのものだった。天災が同族を見つけて知ったその愛は、果たして成就するのか否か……それは神のみぞ知るといったところだろう。

第46話・表

「黒乃。」

「……………?」

「あの、少し頼みがあるんだけどな——付き合ってくれ。」

「……………」

放課後、フラツといなくなる黒乃を捜していた。寮の方へ足を運んでみると、シンプルだが目立つ長い黒髪の少女を見つける。俺が黒乃を呼び止めると、その長い黒髪を翻しながらこちらへ振り向く。それに伴い、黒乃の方から鼻孔をくすぐる芳香が漂うものだから……。ぐつ、すげえいい匂い……。

なんて考えてるのを悟られるわけにもいかず、俺は手短かに用件を伝えた。付き合つて欲しいというのは、臨海学校が近々あるから買い物に行かないかって事。誰を誘うか迷ったが、やっぱり初めに頭へ浮かんだのは黒乃の姿だった。かの有名なアクション俳優も『考えるな、感じろ』……と言つてしたし。

「……………」

「そうか、解つた。じゃ、今度の日曜日な。調度いい時間に俺が迎えに行く。」

黒乃はしばらく考え込むような仕草を見せると、首を縦に頷かせて肯定の反応を示した。……肯定したんなら、先約は無かったって解釈で良いんだよな。だったらどうして、黒乃はあんなにも迷ったみたいなのを……？そんな事を考えていると、酷く不安な気持ちになる俺が居た。

『キミはもつと自分と藤堂さんに向き合う事をオススメするよ。』

ふと、頭の中で大嫌いなアイツの声が響く。……前も結論を着けた。踊らされるな、俺と黒乃はずつとこのままでいらればそれで良い。悟られないようにしないと……黒乃に余計な心配をかけたくないから。貼り付けたような笑顔かも知れないが、いつも俺のまま黒乃と寮室へと歩いて行く。

そうして黒乃を誘った日から数日経過し、やつとこさ日曜日が訪れた。本日の天気は快晴で、絶好の外出日和といったところか。日差しは若干キツくなりつつはあるが、やはり太陽が出ていると自然に気分も晴れやかになる。それで、黒乃とやって来たのは『レゾナンス』と言う名の駅前ショッピングモールだ。

その規模は都内でも有数で、此処に目的の品が無ければ諦める……と言えば、此処の規模が解つて貰えるだろうか。中学時代も良く遊びに来たものだ。俺、黒乃、鈴、弾、蘭……あと時々数馬で。数馬は何と言うか、珍しい事に黒乃が怖がつてるみたいだし……。

「……………」

「黒乃？急に立ち止まってキヨロキヨロして……知り合いで居たか？」

そんな事を考えながら歩いていると、黒乃が立ち止まった事に気が付いた。視界に入れていると周囲を見渡している物だから、てつきり誰か捜しているのだと思つたが……どうやら違うらしい。俺も做つて周りを見ていたが、黒乃がピツと指2本を出したのが気になった。

「……………」

「……………ピース？じゃないよな。……もしかして、俺達2人だけかつて聞きたいのか？……………」

キヨロキヨロ周囲を見て、そんでもってピースとか意味解からんだろうが俺のアホ。ピースでないのなら、それは数を差していると気が付いた。2……つまり、2人……？そうか、黒乃がキヨロキヨロしたのは……他に待ち合わせしてる奴が居ないか確認してただな。……何故だろうか、少しだけ……嫌な気分になつてしまう。

「ほら……家族水入らず。黒乃と2人で買物なんて久しぶりだろ？だから……」

「……………」
俺は黒乃と2人で構わない。いや、むしろ2人が良かったくらいだ。でも、黒乃は違うのかつて思つたら何か……変な気分が胸の中に渦巻く。俺が何とか絞りだしたのは

そんな答え。嘘は言っていない……なのに、心苦しいのは何故なんだ。すると黒乃は、優しく俺の頭を撫ではじめた。

「……とにかく、今日は黒乃と俺の2人だ。さあ行こうぜ、時は金なりつてな。」

「……………!?!」

気恥ずかしいという理由が強かったが、黒乃の頭を撫でていた手を掴んで握る。けど、俺は少しでも黒乃に苛立ちを覚えた事を認めたくなくて……それで強引に黒乃の手を握ったというのもある。しかし、手を握ったのと同時に黒乃が少しビクツとなった気がするが……気のせいだろうか？まあ良いや、はぐれたら大変だしな……。

「……………」

俺は黒乃に気を遣わせたくないから、どんな下らない事だろうと話を振るように努めている。だけど、さっきの変な感情のせいか……何を話しかけて良いかがまともに考えられない。あく……変だぞ俺、どうした俺。ただ単に黒乃と2人きりつてだけじゃないか。別に珍しい事でも何でもないだろ。

「おい、見ろよあれ……………」

「うおっ……………すっげースタイル……………」

「これだから夏はたまんねえよなあ。」

その時、数人の男たちの会話が耳に入った。もしかしなくても……黒乃の事を言って

いるんだろう。黒乃はショートシャツにデニムのショートパンツ……胸元は見えてるわへそは見えてるわで……男が騒ぐのも良く解る。黒乃はきつと、自分のスタイルに自信をもっているんだろう。

……俺としては、もう少し露出は控えて欲しいんだが。黒乃を俺以外の男にじろじろ見られるのは嫌だ、なんか嫌だ。もはや小規模な野次馬が出来そうだ。黒乃は有名人では……あつたか、代表候補生だもんな。……ダメだ、もうこれ以上は耐えられない。

「黒乃、立ち位置交代しないか？なんか、俺の歩いてる道の方が日陰だし。」

「……………」

きつと黒乃は、どうして俺がこんな提案をしたのかは解からないだろう。もし聞かれたとして、答える事が出来ただろうか。……黒乃のその恰好、あんまり見られたくなかったから……と。いや、無理だろ。なんだそれ、意味解からんわ。なんか俺も良く解らん。

「よし、それじゃ……気を取り直して行くか。」

「……………」

気を取り直して行くかというのは、相当に自分へ言い聞かせている。だってあれだ、本当に今日の俺は何処かおかしい。いつもの事だろとか言われたらそれまでだが。いやいやそんな事は無い。俺の友人関係を見れば、俺が1番まともなはずだろ。とに

かく、今日は黒乃と楽しめればそれで良い。

まずは……忘れない内に目的をクリアしておいた方が良いか。俺は黒乃を連れて、レジャー用品を諸々購入した。圧縮袋つて、アレ便利だよな。かさばる服が一気にペしやんこだ。その分お土産を入れるスペースを確保……まあ今回は課外授業なんだから関係ないか。

「えっと、これで大体の物は大丈夫……。黒乃は、忘れ物とかないか？」
「……………」

「そっか、なら問題ないな。それじゃ次は……水着を見に行こうぜ。」

黒乃と一緒に買い物袋の中身を確認して、忘れ物は無いか尋ねてみる。すると黒乃は、コクリと首を頷かせる。それならばと俺は意気込んで、次は娯楽関係を攻めていく事に。自由時間には泳げるみたいだし、黒乃も女の子なんだから新しい水着くらいほしいだろ。俺もついでに新調してみるか。

「ん……あそこなんか良さそうだな。大は小を兼ねるって言うし。」
「……………」

水着の売り出しをしているフロアに行ってみると、不必要にすら感じられるほど大きな店舗があった。デカイ、とにかくデカイ。コンビニなんかよりは確実にでかい。いや、コンビニと比べたら大概の店が勝つか。とにかく黒乃に同意を求めてみるが、首を

縦に振ったって事は賛成らしい。

「それじゃあ、俺は男性用の売り場に……ってそうだ。黒乃、調子はどんな感じだ？自分で好きな選べそうか？」

「……………」

「……ダメそう……か。それなら、俺が選ぶよ。先に黒乃のから決めようぜ。」

店に入ってから思ったが、黒乃って好きに買物出来ない時があつたよな……？自分で選べそうならそうしてほしいところだが、黒乃からは何の返事も無い。どうやら、一人で選ぶのは難しいようだ。勢いで俺が選ぶなんて言ってしまったが、かなり無理はしてる。

だって、女性用コーナーに入るのは精神衛生上よろしくないだろ。面と向かつて入るのは、何か憚られるような秘密の花園ってかさ。……俺はその秘密の花園で高校生活を送ってるんだった。ええい、そうなれば後は度胸だ。俺は黒乃の肩に後ろから手を添えると、優しく黒乃を押して女性用水着コーナーまで全身する。

「そのの貴方。この水着、片づけておいて。」

「断る。見ての通り俺は忙しいんだ。」

全く自分の事も自分で出来ないとは、最近の若いもんはどうなつとるんだ。俺には黒乃の水着を選ぶという使命がある為、生憎ながらあんなのを相手にしている暇はない。

俺は構わず無視しようとしたが、向こうとしては俺の事を見過ごすわけにもいかないらしい。

「ふうん、そういう事言うんだ。それならこっちにも考えが——」

「その綺麗なお姉さん。代わりに僕が承りますよ。」

「お前っ……!?!」

「あら、良く解つてるじゃない。そっちのキミも見習う事ね。」

なるべく視界に入れないようにしていたが、何処かで聞き覚えのある声が。……近江鷹丸がそこには居た。近江はまるでこれがお手本だとも言いたげに、女から水着を奪って自分が片づけると買つて出た。近江にそんな態度をとられて嬉しいのか、女は上機嫌で水着売り場を後にする。

「やあ、災難だったねキミ達。」

「アンタ、どうしてここに居る?」

「たまたまこの店で水着を選んでただけど、そしたら女性向けのコーナーにキミ達を見つけてさ。声をかけようと思つたら、キミ達がトラブルに巻き込まれてた……つてわけ。」

「……それで良いのかよ、アンタは!」

「だって、あの手合いは相手するだけ労力の無駄でしょ?確かに、女尊男卑に抗おうつて

織斑くんの姿勢は素晴らしいし、心から尊敬に値すると思うよ。ただね、時と場合は選ぶべきなんじゃないかな。」

「くっ……………」

偶然なのは解った。黒乃の後を着けて来たとかじゃないならなんだって良い。けど、さっきの女に対しての態度はおかしいだろ。近江の母親が女尊男卑主義者なのは知ってる……………けど……………！俺の言葉に対して、近江は真つ当な正論で返してきた。……………頭では解ってる、けど俺はやっぱり……………そんなの認めたくはない。

「鷹丸さん、何か大きな声が……………。わあ、織斑くんに藤堂さん！奇遇ですなあ。」

「お前達、というか一夏。店内で騒ぐな。」

「山田先生……………それに千冬姉も。」

「2人……………というか、真耶さんに誘われてねー。せつかくだから一緒にどうだって。」

まだ頭は冷えないままだったが、そんな折に山田先生と千冬姉が現れた。まさかこの2人も居ると思わず、あつけにとられた勢いで怒りなんて消え失せてしまう。……………何気に自然な千冬姉が出たが、向こうが一夏って呼んでるから構わない……………よな？

「で、お前達もいい加減に出てきたらどうだ？」

「……………!……………」

「皆!?なんだよ、声をかけてくれれば良かったのに。」

千冬姉が少し奥の水着コーナーへ目をやると、まるでそれを盾にするかのように5人の友人が隠れていた。皆は何処か観念したような表情を浮かべている。確かに黒乃と2人とは言ったが、別に後から合流する分には構わないんだけどな。

「いや、何……声がかけづらくてな。」

「おしどり夫婦の様相を呈していらっしやいましたわ……。」

「何よ、黒乃のおへそに鼻伸ばしちゃって。」

「……………黒乃に勝てる気がしない…………。」

「姉様、それは私の嫁です。」

すると皆は、三者三様、十人十色と言った感じで、それぞれ良く聞こえない声で何かを言った。箒のは聞き取れたが、やっぱり声はかけ辛かったのか。だからって、何でコソコソと着いて来たのだろう。普通はそつとしておくかしつかり声をかけるかの2択な気がするぞ。

「あく……皆さん、私忘れ物しちゃってました。少し探すのを手伝ってくれないでしょうか？ほらほら、こつちですよ。」

「……………なんだったんだ？」

「さてな。」

2人が一気に10人になったわけだが、その内の7人を山田先生が見事なOSHID

ASHIで店から外へ出した。忘れ物なら俺達だって探すのにな。どうにも自分含めた7人を外に出すのが目的みたいにも見えませんが……。まあ大人の事情という事にしておくか。

「一夏、せつかくだから意見を寄越せ。……そうだな、これとこれならばどちらだ。」

「……白の方。」

「よし、ならば黒だな。」

千冬姉が俺に水着を選べと言うので、手に取った2種類のタイプに目を配らせる。白と黒……。白はどちらかと言えば機能性重視。黒はスポーティながらもセクシーさを前面に押し出していた。個人的には間違いなく黒だが、千冬姉に変な虫が寄っても困る。そう思っただと云ったんだけど、俺は姉にはまだまだ敵わないらしい。

「では、次は黒乃のだな。黒乃、お前も当然黒だろう?」

「ちよつと待った。黒乃は白だろ。」

「何を言う、名前に黒と着いているのだから黒の方が自然だ。」

「解かんねえかな。黒乃の黒髪とのコントラストが良いんだよ。」

次は黒乃をと言ったが、千冬姉の中ではもう色は黒だと決めつけているらしい。俺には解る……。この姉は、黒乃とお揃いの色が良いと考えている。だがそこは自分の意見を通す。黒乃は白だ、異論は認めん。始めに言った理由も大事だが、清楚な黒乃の魅力を

引き出すには白……白しかない。

「ん……折衷案つて事で、モノトーンにすれば良いんじゃないんですか?」

「なんでお前がここに居る!」

「なんでつて、こつそり抜け出して来たからですけど。だって、そのうち僕も家族の一員
——」

「本当いい加減にしないと本気で殴るぞ!」

「お、落ち着け千冬姉! 気持ちは解るけど、千冬姉の本気はマズイから!」

お互いの主張を通すために議論を続ける俺と千冬姉。すると俺達の間を割つて入るように、ヌルツと生えてきたかのように近江が現れた。さつき山田先生に排除されたせいか急に現れたせいか……。俺と千冬姉は、声を揃えて近江へと怒鳴り付ける。その後いらん事を言う近江に千冬姉が殴りかかろうとするもんだから、羽交い絞めして何とか食い止める。

「はあ……はあ……。だが、近江……お前の言葉にも一理ある。」

「でしょ? だからついでに僕が選んで——」

「一夏、見張つてろ。」

「了解。」

確かに、いつまで言い争つても埒が明かないし……何より困るのは黒乃だろう。と

りあえず色は白黒として、残りの事は本人と千冬姉に委ねる。見張つてろとの命令、不肖織斑一夏……確実に遂行させていただきます。俺は千冬姉に対して敬礼で返すと、近江の背中をグイグイ押し外へと連れ出す。

「う〜ん……千冬さんともかく、キミは相変わらずだね……織斑くん。」
「……どういふ意味だよ。」

「そのまんまの意味。キミ、僕の言う事全然聞いてないでしょ。黒乃ちゃんの事、しっかり考えてみた？」

「アンタにそんな事をとやかく言われる筋はねえ。」

店の外まで出てしまうと、近江は自らの意志で店を離れて行く。そうしてスタイリツシユな感じでキュツと踵を返せば、俺の事を正面で捉えた。近江のその目は、鋭く見開かれているのではないか。でも口元はニヤケたままだ……。コイツはいつたい俺に何を言いたい……。

「はあ……キミには失望したよ。」

「なんだと!?!」

「キミが真剣になつてくれれば僕だつてまだ待てたろうけど……。織斑くん……。決着をつけよう、今日……。ここぞ。」

近江の顔からニヤケた成分が完全に消え失せた……。その時の事だ。蛇に睨まれた蛙

……?何かとんでもない威圧感を近江から感じる。それに今の声色……怒って……るのか……?くそ、いったい俺が何をしたってんだよ。意味の解からないまま、近江は冷酷な語り口で始めた。

「キミのそういう考え……逃げ、だよな?だって考えれば怖くなっちゃうもんねえ……黒乃ちゃんが、自分の隣から居なくなっちゃうんじゃないか……ってさ。」

「……………!?!」

「ほら、凶星だ。ズルズルズル引きずってたら……優しい黒乃ちゃんはキミを見放さないからね。キミはそれをすつごく良く解ってる。だからキミは、黒乃ちゃんと血のつながりのない家族って関係を保っていたんだよ。」

ち、違う……凶星なんかじゃない!そんな、黒乃の優しさにつけこむような事……俺がしているはずがないだろ!……って、なんで言えないんだよ……どうして声が出ないんだよ!俺は呼吸を乱して、額に脂汗を浮かべるばかりだ。そんな俺を見て、近江は滑稽だと言わんばかりに鼻を鳴らす。

「今の関係が壊れるのが怖いかい?そうだよねえ、楽だもんねえ。だってキミは黒乃ちゃんと今の関係を保っていられば、労せず恋人みたいでいられるもんね。」

「ち、違う……俺と黒乃はそんなんじゃない。」

「僕は黒乃ちゃんの事が好きだ。いや……愛してると言い換えても良い。僕は黒乃ちゃ

んを好きになるなって言いたいんじゃないんだよ？好きなら好きで、逃げるなって言いたいんだ。キミは多分……黒乃ちゃんを苦しめてるだろうからね。だから僕は、キミが許せない。」

俺が黒乃の事を苦しめる……？なんで？どうしてだ？俺の何が黒乃を苦しめてるって言うんだ！？俺は物心ついた時から今までを、物の数秒でフラッシュバックさせる。だが……それらしい原因は思いつかない。嫌だ……俺が黒乃を苦しめてるなんて、そんなの……絶対……！

「とにかく、今のキミには黒乃ちゃんを渡せない。これを勝ち負けに例えるのなら、むしろ勝ってるのは間違いなく僕の方だ。」

「そんな事、どうやって証明するっていうんだよ！」

「簡単さ、凄くね。今からそれを証明してあげるよ、黒乃ちゃんは必ず僕を選ぶってね。」近江が提案した方法はこうだった。適当な理由を着けて、黒乃に俺か近江かを選ばせろとの事。ハンデとして、近江は一切喋らないとまで言ってみせた。……黒乃は今日ここに、俺と約束して遊びに来てるんだ。黒乃が俺との約束を反故にしてまで、近江を選ぶはずがない。

準備が整ったと近江に告げると、ガラスの向こうに居る黒乃を手招きして呼んだ。すると黒乃は、ゆつくりとこちらへ歩いて来て、かなり俺達との距離を置いた位置で止

まった。並びとしては、近江、少し離れて俺、結構離れて黒乃……と言った風に縦一列。黒乃。近江先生がな……人数増えちゃったから黒乃はやり辛いだろうって。良かったら2人で出かけないかつてるんだけど……。」

「〜♪」

「そんな事無いよな。黒乃も皆と一緒にの楽しいだろう？だからこのまま俺達と行こう。」
 そうだ……いくら黒乃が喋れなくなつて、絶対に俺達と一緒にの方が楽しいに決まつてる。すると黒乃は、迷いない歩みでまっすぐ歩く。……ハハッ、何が僕を選ぶだよ……やっぱり黒乃の事を一番知つてるのは俺なんだ。スツと黒乃が腕を振りあげる。俺はその手を逃がす事無く捕まえ——

「え……？」

「そうかい、ありがとう黒乃ちゃん。」

え……？は……？あれ……？ハ、ハハハ……冗談止せよ黒乃……。なんでお前、俺の横を通り過ぎて……ソイツの手なんか握つてんだよ。嘘だ、おかしい、絶対にありえない。黒乃が……黒乃がそんな……俺と一緒に出掛けようって約束した黒乃が、どうしてそんな奴なんか選んで……！

「じゃ、行こうか。此処に洒落たカフェを知ってるんだ。そこで少しゆっくりしようよ。」

違う……違う！今のはナシだ。絶対に何かが変なのだから。黒乃を連れて行くとうしないでくれ。黒乃を遠くにやらないでくれ。俺は黒乃の隣に居て、黒乃は俺の隣じゃないと……。ずっとそうやって生きてきたら……？そうじゃ無いのか、黒乃！

「くろ——」

「待て。今の貴様に……黒乃を呼び止める資格は無い。」

「千冬姉……！何悠長な事を言ってるんだ！あんな奴に黒乃を任せられないって、千冬姉も前言って——」

「っ……！今の貴様は！お前の言うあんな奴以下だという事が解らんか……愚か者がっっっ！」

黒乃を呼び止めようとすると、俺を呼び止める者がいた。こんな時に何の用かと背後を睨めば、そこに居たのは我が実姉の千冬姉だった。何故俺を止めたのか。そう聞くと返ってきた答えは……俺に資格が無いから。前にアイツにも言われたそのキーワードは、より俺を苛立たせるだけだった。

そうしてその苛立ちをぶつけると、千冬姉の怒号がレゾナンスを揺らした。千冬姉は基本的に怒ってばかりだが、これは数少ない……マジギレの方の奴だった。俺の中では幾分かトラウマな千冬姉のマジギレは、俺の頭を冷やさせるにはお釣りが出る。

「アイツ以下って……何でだよ……！黒乃を家族として大事にしたいって思うのが、そ

んなに悪い事なのか!？」

「貴様が……そうやって偽るから、黒乃が苦しむ事になる!」

「偽り……? 俺は何も、嘘なんかついちゃ——」

「まだ自覚すらないのか貴様は……! はあ……もう良い。それならば怒るだけ無駄だ。黒乃は近江にくれてやろう。その方が黒乃も幸せになる。」

またそれだ……。千冬姉と近江の言葉は良く似ている。姉の言葉と嫌いな奴の言葉……どちらに重みがあるかと聞かれればそれは前者だ。同じ言葉でも幾分か真剣に考えられるが、いったい俺の何が黒乃を苦しめてるんだ? 俺はいったい何に嘘をついてるってんだよ!？」

「俺は……!」

「はあ……ヒントをやろう。黒乃は女だ。」

「は、は……? ヒントって、それか……?」

「……それが解っていないから、お前も黒乃も苦しむんだろうが馬鹿者。」

怒ってはいないのだろうが、千冬姉はもの凄く苛立った様子で俺に拳骨を見舞う。ど、どういう事だよ……? 黒乃は女。そんな事は一目瞭然だし何より……それをしっかりと理解したところで、何の解決になるとも思わない。そうなると、千冬姉は本気で黒乃を近江に渡すつもりなのか?

「ほら、これを渡しておいてやれ」

「これ、黒乃の水着……?」

「お前らが勝手に盛り上がったせいで、黒乃が行ってしまったからだろうが。お前も自分の水着を選んで、後は……小娘どもの相手をしてやれ。」

確かに、黒乃は近江が連れて行ってしまった。そうなると、この場は俺に預けるのが最善。……でも後で俺も箒に預けよう。女物の水着を手渡され少し戸惑っている間に、千冬姉は背中を見せて行ってしまふ。……なんでこうなるんだよ。久々の黒乃と過ぐすゆつくりとした休日になるはずだったのに。

(くそっ！)

心の中で留めたが、本日何度目かも解らない悪態をついた。……水着……選ばないと。凄まじい虚無感、脱力感に襲われつつも……俺は自分の水着を買うために店へと戻る。その後は、同じく戻って来た箒ら5人と合流して終日過ごしたが……俺の中に満足という言葉が生まれる事はなかった……

第46話・裏

「黒乃。」

（ういつすイッチー。どうしたん？）

「あの、少し頼みがあるんだけどな——付き合ってくれ。」

（はい……？）

ラウラたんが俗にいう一夏ラバーズへと加入してしばらく、騒がしいながらも平和な日常が続いていた。そんな変わらぬ日常の放課後、寮に向かう道すがらイッチーに呼び止められ……そんな事を言われた。突然で脈絡もなかった為か、一瞬何の事か解からなかったが……全て謎は解けた！

これはあれだ、臨海学校の前に買い出しするから付き合ってくれ……の意だろう。臨海学校つつつても、特別校外学習って言う名目の小旅行みたいなもんさ。でも3日間は向こうへ拘束されるから、足りない日用品なんかもある訳で……。イッチーは主夫故、そういう準備は欠かさない。

（う〜ん……しかし、あ〜……どないしようかなあ。）

イッチーが俺を誘ったのは、きっと大勢の方が良いからとかならう。となれば、俺よ

りも前にマイエンジェルにも声をかけている可能性が大きい。う、うむむ……迷う。マイエンジェルの邪魔になるだろうし、そしたら俺も胃が痛いわけで……うくむ……。(すまんマイエンジェル……。)

「そうか、解った。じゃ、今度の日曜日な。調度いい時間に俺が迎えに行く。」

それでもなるべくマイエンジェルに着いて回りたい俺は、迷いながらもイツチーの誘いに乗る事に。とんでもない罪悪感に襲われてるけど……。とにかく、これで出かける算段はついた。晩御飯の時間にはまだ早いため、俺達は連れ立って寮の自室まで歩いた。

……で、時は過ぎて件の日曜日……。俺の予想に反して、マイエンジェルの姿が見当たらない。後で合流かなとかも思ったりしたんだが、イツチーは駅前大型複合ショッピングモールの『レゾナンス』までグングンと進んで行く。それも……待ち合わせに使えそうな場所をことごとくスルーして。

(あれ……ホントおかしくねえ?)

「黒乃?急に立ち止まってキョロキョロして……知り合いでも居たか?」

(いや、むしろ知り合いを捜してるんすけど……。)

俺の少し前を歩いていたイツチーは、俺の足音が止まった事に反応を示した。そうして振り返って俺の近くまで戻って来ると、何処か楽しそうな様子でイツチーも周囲を見

渡す。俺は間違い捜しゲームをしてるつもりはないよ。ええい、苦肉の策だ……動け、俺の指よ！

（今日って、俺ら2人だけなん？）

「……ピース？じゃないよな。……もしかして、俺達2人だけかって聞きたいのか？」

（そうそう、そうゆう事さイッチー。）

「……………」

俺がピツと指2本を出すと、なんとかその意図を察してくれた。……のは良いんだけど、イッチーはまるで何も答えようとしな。その表情は若干不機嫌っぽく見えて、何か失言？というか、気に障る事をしただろうかと焦ってしまう。やがてイッチーは、静かに口を開く。

「ほら……家族水入らず。黒乃と2人で買い物なんて久しぶりだろう？だから……。」

（ああ、なるほど……つたくこのシスコンは……。はいはい解ったから……お姉ちゃんが悪かったって。）

イッチーは考え抜いた末に呟くが、どうにも俺から視線を逸らしてるわ不安そうだわ……見ていられなかった。俺は自分はイッチーの姉だと言い聞かせながら、まるで子供をあやすかのようにその頭を撫でてやる。はあ……ちー姉の言う通り、少し甘やかし過

きたかな。

「……………とにかく、今日は黒乃と俺の2人だ。さあ行こうぜ、時は金なりつてな。」

(わっ、イツチー!?)

イツチーは俺が頭を撫でている腕を掴むと、どかすと同時に俺の手を取った。それも、ご丁寧に恋人つなぎ……。く、くそ……。あの1件以来、妙に男性を意識してしまう俺がいる。凄まじくナチュラルに俺の手を取ったイツチーは、何処か男らしくて……。ああ……。イカン、俺の手……。汗ばんだりしてないかな……？

「……………」

いつもだったら話しかけてくれるのに、こんな時に限ってイツチーは無言だ。チラツ……。チラツ……。つと俺の姿を眺めるだけで、全く口を開こうとしない。何、何なの？……。…と思つたが、何かイツチー以外からも視線を感じる。それは……。…周囲に居る男達からだった。

「おい、見ろよあれ……………」

「うおっ……………すっげースタイル……………」

「これだから夏はたまんねえよなあ。」

聞こえてるっつーの！噂話は音量落して、どうぞ。はあ……。今の俺の格好は、ショートシャツにデニムのショートパンツ。つまるところ、へそだしルックって奴。いや違う

んだよ、ちー姉が買ってくる服ってこんなんばっかりなんだもん。うう……昔は気にならなかったのに、やっぱり男を意識しちやってる証拠かなあ。

でも、隠したりしたらダメだよねえ。元男だから解るけど、こういう時に隠されると……ついつい隠すくらいならそんなコーデ止めとけよーって思っちゃったり。あれって、今思えばとてつもなく失礼な事だったんだな……。変に意識するな……今まではキチンと着れてたんだから。

「黒乃、立ち位置交代しないか？なんか、俺の歩いてる道の方が日陰だし。」

(イ、イッチー……。)

イッチーは、俺がジロジロ見られてるのを防ごうとしてくれる。そうなんだよ、こういうさりげない気遣いがねえ……この男の危険な所と言いますか。とにかく、イッチーの厚意はありがたく受け取っておこう。俺達はいったん手を離すと、立ち位置を入れ替えてまた互いの手を握った。

(あれ……?)

「よし、それじゃ……気を取り直して行くか。」

(な、何やってんだ俺……手え離すチャンスだったじゃん。)

立ち位置が変わったことにより、男達の視線は大半が緩和される。やっとこさこれで落ち着ける……と思つたら、何故かイッチーの手を取っている俺が。ほ、本当何やって

んだろ……俺の方こそすっぱーナチュラルだった。イツチーはニカツと笑うと、俺の手を少し強めに握り返してきた。……まあ良いか、気にするだけ無駄なんだろうし。

◇

「手……繋いでるわよね。」

「そうですわね……。」

「そうだな……。」

「よし、殺そう。」

一夏達の遙か後方ではあるが、そこには確かに箒、セシリア、鈴音の姿があった。仲睦まじい様子の一夏と黒乃を目撃し、思わず尾行を開始したのだが……どうにも鈴音は黙って見ていられないらしい。物騒な言葉と共に甲龍を展開しようとする物だから、慌てて2人に止められる。

「じゃあ何よ……このまま指咥えて見てろっての!？」

「そうは言いません。自然に加われるタイミングを慎重に——」

「……永遠に訪れる気はしなないがな。」

ならば代案をと鈴音は叫ぶ。セシリアは少し動揺しながらも、まだ慌てる時間じゃな

いと鈴音を宥める。しかしだ、箒は少し意見が違うらしい。あの2人の間に、つけ入る隙など生まれないと言いたいのだろう。そう言われて再度2人に目をやると、やはり仲睦まじい。

「ねえ、こんな所で何やってるの？」

「その声は……シャルロットさん。奇遇ですわ……って!？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ! アンタ、なんでソイツ連れてんの!」

「な、なんでって……同室の縁かな。あつ、それより聞いてよ! ラウラってば、水着は学
校指定ので構わないなんて言うんだよ!」

「……私はシャルロットに連行されただけだ。」

箒達に声をかけたのは、シャルロットだった。それに、傍らには制服姿のラウラを連
れている。まだラウラの件を水に流せてはいないのか、セシリアと鈴音は警戒心ありあ
りの表情でラウラを見つめる。本人は……どうやら特に気にした様子は見られない。

「まあ、せっかくなのだから洒落た物を着てみてはどうだ？」

「箒、アンタすんなり——」

「器が小さいぞ、昔の事をいつまで言っている。私も納得のいかん部分はあるが、何より
襲われた本人がさほど気にしていないのだから……私が騒ぐことでは無い。」

「まあなんだ、許せ。済まなかった。」

普通にラウラと接している筈に対して、鈴音は驚くような表情を見せた。それに対しては随分と男前な言葉で返す。ラウラもすっかりセシリアと鈴音に対して頭を下げながら謝罪した。若干軽すぎるような気もしたが……確かにらしくないと気持ちを切り替える。

「解ったわよ！これじゃアタシが悪者みたいじゃん……。」

「それで、皆はコソコソと何をしてたのかな？」

「ええ、少しその……お2人を……。」

「あれ……一夏と黒乃？……良いなあ……いつも仲良さそうで。」

「尾行でもしていたのか？」

鈴音がラウラを許した事でこの場合は丸く収まり、話は筈達が何をしてたかという事に戻る。なんとなく尾行していたと自分達の口では言い辛く、ラウラがハッキリ告げると……3人は顔を見合わせ、苦笑いしながら首を頷かせてみせた。

「なるほど、面白そうだ。どれ、私も混ぜろ。」

「それは構わんが、シャルロット……。」

「ううん、僕も混ぜてよ。ラウラの言う通り面白そうだしね。」

「5人か……随分と大所帯になっちゃったわね。」

「ですので、細心の注意を払って追跡を継続しましょう。」

原作ではいつもいがみ合っただけのメンバーだが、どうにも結束が強いのは……黒乃と言う名のラスボスを目の前にしているからだろう。そんなこんなでチーム一夏ラバーズ5人娘は、軍人であるラウラを筆頭に尾行を開始した。しかしそれは、結局のところ敗北感を味わうのみの不毛なもので終わる事だろう……。

◇

「えっと、これで大体の物は大丈夫……。黒乃は、忘れ物とかないか？」
(オツケー、多分だけど。)

「そっか、なら問題ないな。それじゃ次は……水着を見に行こうぜ。」

日用品等の買い物を終えた俺達は、買い物袋の中身を適当に確認する。どうやら買い忘れも無いようで、イツチーは水着を見に行こうと提案を出した。マズイ、凄くマズイ……この時の俺はこう思うしかない。いや、だって……水着だよ？水着。今まで通りだったら着ようと思ってたけど、最近の精神状態だとちよつと……。

もちろん、臨海学校は存分に楽しむつもりだよ。でも今回は、浜辺で涼しい格好して遊ぼうかななんて思っていただけに……水着の事なんてまるで想定していなかった。この場でイツチーを踏みとどまらせるのは簡単だ。しかし、それだとイツチーは俺を説

得しにかかるだろう。

『黒乃、せつかくの海なんだし——』

(なぐんて言われる未来が見えてるよ……。正直めんどいし、なら買うだけ買つとけばいつか……。)

まあ……。イッチーに下心は無いって解つてるからこそだけど。これがもしカズくんなら、もうとつとと回れ右して家路に着くよ俺は。いやね、良い子だつてのは解つてるつもりだよ……。でも目がマジだから少し怖くつてさあ。それはほつとくか、仕方がないから大人しく連行されておこうかな。

「んく……。あそこなんか良さそうだな。大は小を兼ねるつて言うし。」

(薪は楊枝の代わりにならぬ……。とも言うけどね。)

水着を売っているフロアに行くと、やはりシーズンという事もあつてか、どこもかしこも大々的に売り出しをかけている。そんな中でイッチーが指差したのは、最大規模と看板が掲げられた店だ。確かに、外観だけ見ても他のところよりだいぶ大きい。イッチーが使った諺の対義語っぽい意味の諺を呟いたが……。やつぱり品ぞろえが豊富な方が良いに決まつてる。

イッチーとその店に足を踏み入れると、なんとというか……。最大規模つてのは誇大広告ではないらしい。男性用から女性用、子供向けからシニア向けなど……。様々な年代の

ニーズに合わせたラインナップだ。この中から好みの物を見つけるとなれば、本気度のレベルでかかる時間が増大するだろうな。

「それじゃあ、俺は男性用の売り場に……つてそうだ。黒乃、調子はどんな感じだ？ 自分で好きなの選べそうか？」

（うん、今日は割と調子の良い方で……。つておい！ なんでいきなり否定も肯定も——）

「……ダメそう……か。それなら、俺が選ぶよ。先に黒乃のから決めようぜ。」

今日は割に自分の意志を示せていたというのに、なんでかいきなり否定も肯定もできやらねえ。イツチーは照れてる様子というか、苦肉の策ってか……複雑そうな様子で俺と共に女性用の販売ゾーンへ足を踏み入れた。あれ、少し違うけどこのパターンって……。

「そのの貴方。この水着、片づけておいて。」

「断る。見ての通り俺は忙しいんだ。」

おおふ、やつぱりこのパターンですかい！ 原作よりも物言いは柔らかい……気がしなくもないが、イツチーは明らかに女尊男卑主義者の命令をバツサリ断った。そうなんだよねえ……お願いじゃなくて、命令なんだよねえ。しかし、どうするか……あれはマイエンジェルだから丸く収められたようなもんで……つてアレ？

「ふうん、そういう事言うんだ。それならこつちにも考えが——」

「その綺麗なお姉さん。代わりに僕が承りますよ。」

「お前っ……!?!」

「あら、良く解つてるじゃない。そつちのキミも見習う事ね。」

女性の背後に現れたのは、いつも変わらぬニヤニヤスマイルの鷹兄だった。鷹兄は女性の手からサツと水着を奪うと、まるで執事のみたいなお辞儀を見せる。イケメンな鷹兄に下手に出られて、女性は露骨に上機嫌な様子へと変わった。そして鷹兄に水着を手渡すと、鼻歌交じりに店を後にする。

「やあ、災難だったねキミ達。」

「アンタ、どうしてここに居る?」

「たまたまこの店で水着を選んでただけど、そしたら女性向けのコーナーにキミ達を見つけてさ。声をかけようと思ったたら、キミ達がトラブルに巻き込まれてた……つてわけ。」

「……それで良いのかよ、アンタは!」

「だって、あの手合いは相手するだけ労力の無駄でしょ?確かに、女尊男卑に抗おうって織斑くんの姿勢は素晴らしいし、心から尊敬に値すると思うよ。ただね、時と場合は選ぶべきなんじゃないかな。」

「くっ……い！」

「イチターの放ったそれで良いのかって言葉は、きつとあんな女にペコペコしてるだけで良いのかって事。だけど、今回は全面的に鷹兄に同意だ。丸く収まるんなら、多少のプライドなんてクソ喰らえだよ。時と場合……つてのは、同行者……この場合は俺にも迷惑がかかると鷹兄は言いたいらしい。」

「鷹丸さん、何か大きな声が……。わあ、織斑くん！藤堂さん！奇遇ですなあ。」

「お前達、というか一夏。店内で騒ぐな。」

「山田先生……それに千冬姉も。」

「2人……というか真耶さんに誘われてねー。せつかくだから一緒にどうだつて。」

奥の方からヒョコツと顔を出したのは、山田先生とちー姉だった。まああの女の人が見れたんだし……どうせ居るんだろうとは思ってたけど。というか、山田先生が誘ったんだ……。山田先生、男性全般は苦手なんだろうと思ってたけど……やっぱ鷹兄に気があつたり？

「で、お前達もいい加減に出てきたらどうだ？」

「「「「!?」」」」

「皆?!なんだよ、声をかけてくれれば良かったのに。」

並べられている水着の陰から観念した様子で出て来たのは、一夏ラバーズ5人娘……

5人!?やだ、凄く目立つ……。おかしいな、この場にモツピーやラウラたんは居なかったはずだけど……。マイエンジェルの関しては、本来この場に居るべきなんだろうけどね……。

「いや、何……声がかけづらくてな。」

「おしどり夫婦の様相を呈していらっしやいましたわ……。」

「何よ、黒乃のおへそに鼻伸ばしちゃって。」

「……黒乃に勝てる気がしない……。」

「姉様、それは私の嫁です。」

な、なんだよ皆して……。俺だつてつきりマイエンジェルと一緒にかと思つてたんだから仕方がないじゃん。それよりもセシリー、キミの言葉だけは聞き捨てならんぞ。お、おしどり夫婦とか……。単に仲のいい姉弟の間違いだろ。べつ、べべべ……別に俺とイチーはそんなんじゃない……。

「あく……皆さん、私忘れ物しちゃってました。少し探すのを手伝つてくれないでしようか? ほらほら、こっちですよ。」

「……なんだつたんだ?」

「さしてな。」

ここの時々の山田先生は押しが強いもんで、俺、イチー、ちー姉を残して6人をグ

イグイと店から追い出した。織斑姉弟十藤堂 黒乃。これぞ完璧な家族水入らずだ。イツチー皆を退場させた山田先生の背中を不思議そうに見つめ、ちー姉はなんだか複雑そうな溜息を吐く。

「二夏、せっかくだから意見を寄越せ。……そうだな、これとこれならばどちらだ。」

「……白の方。」

「よし、ならば黒だな。」

ちー姉は白と黒、2種類の水着を手を取った。どちらも露出度は高めだが、どちらかと言えば黒の方は意識してセクシーなデザインになっていようだ。ちー姉は黒が似合う。そこを考慮するとイツチーは素直に黒と言いたかつたんだろうが、変なのが寄りつくだかなんだかであえて白と宣言。

しかし、イツチーの葛藤などお見通しなようで……ちー姉は白の水着は戻してしまふ。まあ……どちらにしたって構わないと思うけどね。ちー姉にナンパな男が近づいたとして、イツチーが心配してるような事なんて起きるハズもない。

「では、次は黒乃のだな。黒乃、お前も当然黒だろう？」

「ちよつと待った。黒乃は白だろ。」

「何を言うか、名前に黒と着いているのだから黒の方が自然だ。」

「解かんねえかな。黒乃の黒髪とのコントラストが良いんだよ。」

あんたら、自分のパーソナルカラーを俺に着て欲しいだけだろ。それ言うと、あまり他の子とは被らせたくないんだけどな。白はモツピーが着るし、黒はラウラたんが着るしで……それだとどっちもなあ。っていうか、俺の目の前で白黒はつきりつけようとしてなくて良いから（ダジャレ）

「ん〜……折衷案つて事で、モノトーンにすれば良いんじゃないんですか?」

「なんでお前がここに居る!?!」

「なんでつて、こつそり抜け出して来たからですけど。だって、そのうち僕も家族の一員
——」

「本当、いい加減にしないと本気で殴るぞ!?!」

「お、落ち着け千冬姉! 気持ちちは解るけど、千冬姉の本気はマズイから!」

突然に俺の後ろからヌツと鷹兄が現れた。抜け出してきた、なんて言うけど……さては鷹兄、隠密の心得があるね? で、鷹兄が何か言おうとするが……怒り心頭な様子のちー姉に殴りかかられそうになる。イッチーが何とか落ち着けさせると、ちー姉は肩で息をしてみせた。

「はあ……はあ……。だが、近江……お前の言葉にも一理ある。」

「でしよ? だからついでに僕を選んで——」

「一夏、見張つてろ。」

「了解。」

あまり見られないが、イツチーとちー姉のコンビプレーが発揮された。イツチーは鷹兄を店の外まで連行し、俺の水着を選び終えるまで見張る気らしい。ちー姉は俺とお買いのものと……。なんなんだろ、鷹兄の嫌われっぷりは。確かに何考えてるか解からないけど、別に悪い人ではないと思うんだけどなあ。

それでしばらくあーでもないこーでもない言いながら、ちー姉と白黒の水着を物色する。とりあえずは、シンプルにボーダーパターンの白黒三角ビキニという事で落ち着く。まあ……着るか着ないかは向こうに行つて次第かな。さて、会計会計……つと。

「待て黒乃。それは私が買ってやる。」

(へ? いや、悪いよちー姉……。)

「遠慮するな。思えば……代表候補生になった祝いもろくにしてやれなかったからな。埋め合わせになるとは思っていないが、なんだ……たまには姉らしい事もさせろ。」

ちー姉はそう言うのと、俺の手から水着を奪つて会計の方へと消えて行く。会計は……少し込んでるな。それなら、邪魔にならない場所で待っていてよう。俺は出入り口から少し外れた場所、ショーウィンドウにも似たガラス張りになっているところ立つ。……あ、イツチーと鷹兄が見える。

あの2人、何かと言い争つてるような気がする。いいや、どつちかというところ……イツ

チーが一方的に嘯み付いてるだけか。でも、そうなる……毎回何を話しているのかは気になるかも。この位置からは何を話しているかは聞き取り辛い、俺は耳を澄ましてみる。すると――

『――の事が好きだ。いや……愛してると言い換えても良い。』

……はい？ちよつと待て、ちよつと待とうか……。肝心な部分は聞こえなかったけど、イツチーを目の前にして言ったんだよね？だとすると、僕はキミの事が……しか無くない？……。お前ホモかよお!?(困惑) いや、いやいやいや！ウツソだろお前wwww……とか言つてられねえ！

た、鷹兄……アンタつてばそうだったの!?もしかして、イツチーまでそうだなんて言わんよね。ほ、ほら……ネタじゃん……?イツチーがホモどうのつて。いやいやそんなまさか……。チラリ。鷹兄達の様子をチラ見すると……見事に鷹兄と目が合った。あ、あはは……手招きしていらっしやる。俺は大人しく鷹兄の方へと近づいた。

「黒乃。近江先生がな……人数増えちゃったから黒乃はやり辛いだろうつて。だから良かったら2人で出かけないかつてるんだけど……。」

「〜♪」

「そんな事無いよな。黒乃も皆と一緒にのが楽しいだろう?だからこのまま俺達と行こう。」
鷹兄達とは少し距離を置いて、俺は立ち止まった。すると何か、イツチーが必死な様

子で俺にそう語りかける。その様は、何か……物を取られたくなくて必死な子供のようだ。それすなわち……鷹兄を取られたくない……う？ イッチーもやつぱりホモじゃないか！（混乱）ば、馬鹿なあああ！ 何処で道を踏み違えたんだい……イッチー！

いや、何もそういうのが間違つてるとか悪いって言ってるんじゃないんだよ。ただ……キミは物語の主人公ですぜ。いつかは女子と幸せなキスをして終了しなきゃならないんだよ！？ それがどうしてこんな……。お、おし……落ち着こう……とりあえず落ち着こうか……。

アレだよ、鷹兄がどうして俺を誘うのかを考えると……。いろいろ候補はあるが、恐らくそれはノンケアピール……のはず。けどイッチーは、俺と鷹兄が2人で行動するのは度し難いと。そ、そんなに好きなの……？ まあつまり、今まで口喧嘩に見えてたのは痴話喧嘩だつたって話ね。さすれば、俺のとるべき行動は——

「え……う？」

「そうかい、ありがとう黒乃ちゃん。」

俺はイッチーの隣を通り過ぎて、鷹兄の手を取った。すると耳元には、イッチーの絶望したみたいな『え？』って声が聞こえる。す、すまんイッチー……やつぱりさ、キミには何が何でもノンケに戻つてもらわんと困るんよ。俺は俺で、何とか鷹兄をノンケに出来るよう努力しなくては。イッチーの事は頼んだぞ、一夏ラバーズ！

「じゃ、行こうか。此処に洒落たカフェを知ってるんだ。そこで少しゆっくりしようよ。」

(むう……これは、何が何でも鷹兄をノンケにして見せないと。)

だって勿体ないよ鷹兄……イッチーもだけどさ。こんなイケメン金持ちさんで、引く手数多なはず……って、思い……出した……！鷹兄って御曹司じゃん！どうするよ、このままじゃ跡継ぎ問題になる！が、頑張れ俺……近江重工の未来がかかってるぞ……！
1人意気込む俺を見て、何だか鷹兄は楽しそうにしていた。結果はまあ……不発だったって言っとく。何したかは聞かんといて……！

第47話

「あーっ、海が見えたよー」

揺れるバスの中、クラスの誰かがそう叫んだ。そんな声につられた俺は、ふと窓の外を眺める。すると俺の目に飛び込んで来たのは、何処までも続く水平線、さざめく白波、そして青い海……。うん、やはり夏の海は何か特別に感じられるな。しかし、だからと言って俺はそんなにはしゃぐわけにもいかない。なぜなら——

「すう……すう……」

静かな寝息をたてながら、黒乃が俺の肩に頭を預けているからだ。最初は俺やシャルとかが話しかけてたんだが、次第にウトウトし始め……。今に至る。ぷっ、なんというか……黒乃の寝顔は少し微笑ましい。いつも無表情なせいかな、普段は隙がないように感じられる……。けど、今はこうして安心して感じる感じがなんとも。

おっと、黒乃の髪の毛が乱れてる。黒乃を起さないように、大胆かつ繊細に事を進める。サササツと指先で黒乃の前髪を整えると、少し隠れていた美貌は露わになった。……今は黒乃が寝ているから、こういった事も可能だ。前までは面と向かって出来ていたのに、近頃は黒乃との関係がギクシャクとしてしまっている。

なんとというか、黒乃に避けられているように感じてしまう。バスの席が隣なのだった、俺が呼びかけても躊躇いが見えた。だからこそ俺も……少しばかり黒乃を避けてしまつて。簡単に言えば、悪循環に囚われているんだらう。なんとか、前みたいに戻さないとな……。

「……か。一夏……。」

「ん……あつ、ああ……。どうしたシャル？」

「もうすぐ目的地だから、寝てる人がいたら起こしてやれつて。」

上の空になっていたみたいで、シャルの呼ぶ声がイマイチ耳に届かなかつた。というか千冬姉、ピンポイントで黒乃の事を指摘しているような気もする。それは良いとして、千冬姉の命令に従わなければ。俺は、優しく黒乃の肩を揺さぶつてみる。

「黒乃、起きろつてさ。」

「……………」

「ああ、ほら……その癖は止めろつて言つたら？しやんとしろつて。」

黒乃は意外と寝起きが悪い。多分だけ……所定の時間に起きなくてはならない場合を除き、人に起こされるのは嫌っている。そうした場合は、たいがいガシガシと頭を乱暴に掻きながら目覚めるんだよ……。そんな事をする、黒乃の綺麗な髪が傷んでしまう。

俺は黒乃が頭を掻き始める前にその手を止めると、まるで子供に言つて聞かせるようにしてみせる。聞いてんだか聞いてないんだか、黒乃は目元を擦りながら不必要はほどコクコクと頷いた。ま、とりあえず任務完了か……。後は大人しく目的地への到着を待った。

本当に目と鼻の先だったようで、思つたよりも早くバスは停車した。1組やその他の組の生徒は、各々の乗車していたバスから次々と降りてゆく。俺も流れに沿つてバスから降りたが、どうにも世話になるであろう旅館が目に入った。旅のしおりみたいなので確認は出来ていたけど、やはり学生が使うには不相応な気がしてならない。

花月壮。そんな看板が、旅館の入り口に掲げてある。いかにも老舗な雰囲気だ。何かこう……やはりIS学園の優遇っぷりを思い知らされるな。だつて毎年ここで臨海学校だろ？毎年この人数でつて、予算はいかほど……。止めた……考えるほど空しくなるだけだ。大人しく整列しとかないと……。

「ここが今日から3日間世話になる花月壮だ。各々、従業員に迷惑をかけないように。」
「「よろしくお願ひします！」」

「はい、こちらこそ。皆さん元気で素晴らしいですね。」

整列した俺達の前には、花月壮の女将さんらしき人が。俺達はすっかり女将さんへ挨拶すると、何処かはんなりとした様子を醸し出しながら女将さんは返した。うむ、和

服が良く似合う。年齢を感じさせないというか、良い感じの年齢のとり方をしてる印象……かな。

「……あら？そちらの白衣の方……もしや近江 藤九郎さんのご子息の……。」

「はい、近江 鷹丸です。あの、僕が小さな頃とかに利用してました？」

「ええ、まだ朱鷺子さんに抱えられてる頃でしたわ。私もその頃はまだ女将修行をしてたの。」

解散になって各部屋へと移動を開始し始めると、女将さんが近江に話しかけているのが気になった。というか、アイツはこのクソ暑いのに何で白衣なんだ……。……そう言えば、近江って金持ちだっけ？それなら、花月壮に来たのだから何ら不思議な事では無いのかもな。

「ああ……そうそう。織斑くん、まだ居るかなー。」

「……なんすか？」

「いや、僕らのせいで迷惑かけただろうから……部屋割りとかで。」

「あ、そうか……。あの、織斑 一夏です。この度はご迷惑を……。」

「いえいえ、あまりお気にならないで。お2人ともお客様なんですから。」

喧騒の中で近江に呼ばれるが、流石に聞こえなかったじやまずいよな……。俺は渋々ながらも近江に近づくと、どうやら一言挨拶と詫びを入れておいた方が良いという事ら

しい。確かに、悔しいがそれは近江の言う通りだ。俺が斜め45度の会釈をして挨拶と詫びを入れれば、とてもありがたい言葉かがえつて来た。そして――

スパアン！

「必要最低限の礼儀はわきまえろ。その程度は他人に言われずともやれ。」
「……すみませんでした。」

居なくなつていたと思つたのに、背後から千冬姉に出席簿で叩かれた。しかし、ぐうの音も出ないから謝るしかない。そんな俺を哀れに思つたのか、女将と近江は口をそろえて「まあまあ」なんて言う。2人のおかげでこれ以上の難は逃れたらしく、千冬姉は鼻をフンと鳴らして出席簿を収めた。

「そう言えば織斑先生、俺の部屋っていつたい……。」

「近江先生に着いて行けば解る。」

「まあ、その時点でお察しだよね♪じゃあ行こう、案内するよ。」

かねてからの疑問と言うか、件の旅のしおりには部屋割りの名簿もあつたのだが……何度捜しても俺の名が見当たらなかつた。別の場所が用意されてるつてのは聞いていたが、近江が案内……？その時点でお察し……？なるほど、理解した。これは……近江の奴と同じ部屋だと。

何が悲しくて近江と2人で1部屋を使わないといけないんだ。いやでも……俺1人

に対して一部屋つてのも流石に気が退ける。仕方がない……自然な流れだと思つて諦めるしかないか。俺はまるで死地へと向かう戦士にでもなつたつもりで、離れて行く近江の背中を早足で追いかけた。



(ウエミダー！)

つて思わず叫びたくなつちやうね、この光景を見ているとき。旅館の部屋から広がるパノラマは、絶景としか言いようがない。太陽の光が海に反射して、白銀と紺碧のコントラストを生み出している。……あ、携帯で写真撮つて昴姐さんに送つとこ。パシヤリ……これでよし……つと。

「気に入つたようだな。」

(おー、ちー姉。そりやもちろん。人並みに綺麗なもんは好きだよ。)

振り返つてみると、そこにはちー姉が腕組みしながら立っていた。まあ俺と同じ部屋です。教師陣が俺の事情を考慮してくれたのか、ちー姉と同室にしてくれたようだ。ちなみにイツチーは鷹兄と予想。同性の教師が居るんだから当たり前だよなあ？あれ……いや、ちよつと待とうか。

……イツチーと鷹兄を同室にするの……まずくない？いや、確実にまずい。だってホモだよ？ホモなのに多分だけど相思相愛だよ？まずまず2人が戻って来れなくなっちゃうじゃない！く、水着を着る気はなかったが……こうなりやヤケだ。俺の魅力的なダイナマイトバディで誘惑してやらあ！

「海へ行くのか？私達はこれから会議だ。後で見かけたら気軽に声でもかけてくれ。」

俺に対して声をかけろという表現は微妙だが、まあちー姉から遊ぼうつつーのはプライド的な何かが邪魔をするんだろう。するとちー姉は、乱雑に荷物をポイすると、俺よりも先に部屋から出て行く。……そういうところさえなければ完璧なんだろうね、ちー姉って。

それは良いとして、俺も早く海へ向かうとしよう。えつと、日焼け止めに……髪を結うヘアゴム……必要なのはこれくらいかな？それで、着替える場所は別館だったよな。それじゃあ別館へと向かう前に、ちよつと寄り道して行こうかな。俺は生徒達の寝泊まりする一室を目指した。

(モーツピーー！あーそーぼー！)

「うわああああ！な、なんだ黒乃か……脅かしてくれる。」

モツピーの割り当てられた部屋へ立ち寄ると、勢い良く襖をスライドさせた。襖の開くスパーンという音に驚いたのか、モツピーは大声を出ながらこちらへ振り向く。しか

し、驚いたのはどうやら音だけのせいではないらしい。モツピーはその手に赤い水着を手にしていた。あれ？赤か……原作だと白だったけど。

「はっ!?!いい、いや……これは違うんだ!その……似合うとよいしよされてつい……つい……!」

あく……大勢での買い物になってたしな。セシリー達に勧められるまま思わず買っちゃったと。まあ……どちらにせよ連行しようとしてたから同じ事だよ。ほらモツピー……キミもイッチーをノンケに戻すの手伝って。どうせ男なんてほとんどおっぱい星人なんだから。俺は女性の胸ならなんでも好きだけど。

「ちよつ、ちよつと待て黒乃!ま、まだ……心の準備が出来てはいないんだ!」
(済まぬがモツピー、そんな事を言っている場合ではない故。)

モツピーを無理矢理立たせると、無理矢理引っ張って連れて行く。その間モツピーはずつと騒いでいたけど、それは総スルーさせていただきズンズンと別館を目指した。何気に俺も覚悟ができてなかったりするが、旅は道連れ世は情けつて言うしね。同じようなスタイルをしてるモツピーが居ると心強い。



「……別に大きくてもあまり良い事は……むぐう!」

(それダメ……発育で悩んでる子に言ったらダメなやつ!)

いきなり何を言い出すかと思えば、巨乳大和撫子コンビの水着姿に果てしない嫉妬を覚えたらしい。確かに千冬しかり真耶しかり……日本人の巨乳率が高めかもだ。しかし、箒はさほど自分の胸が大きくて良い思いをした気がしないので、危うく鈴音に聞かれるとまずい言葉を発しそうになる。

すかさず背後から口元を抑えて防いだが、ここからどう鈴音をフオローすべきか迷う。誰に何を言われようと気休めにしかならないし、何より本人も惨めだろう。3人はシンク口してそんな考えが浮かんでいたため、自然に話を別の方向へ持っていく事で一致したようだ。

「と、ところで一夏……さつきは何と言いかけたんだ?」

「ああ、その水着……似合ってるなつて。箒は落ち着いた色が似合うと思ってたけど、案外そうでもないんだな。」

「そ、そそそ……そうか? あ、あり……ありが……とう。」

「おう。黒乃も……その……似合ってる。」

(なんで目え反らすんすかねえ……?)

なんとなく2人が良い雰囲気になっていた。もちろん一夏も黒乃の事を忘れていた

わけではない。ただ……あの一件以来の気まずさがまだ残っているのか、視線を外しながら黒乃を褒める。別に男に褒められても嬉しくないが、割に無理をしてこんな格好をしているせいかなそれはそれで不服らしい。

「だーっ！胸ある癖に一夏と良い感じになつてんじゃないわよ！どっちかその脂肪を寄越しなさい！」

「ま、待て……言つてる事が無茶苦茶……む、胸を揉むな！」

（おっふ!?この感じはやっぱり慣れない!あんっ……!だ、だがいい傾向だ鈴ちゃん。ほれイッチー、見とけよ見とけよ……目の前で巨乳2つが揉みしだかれて反応しない男なんて——）

「……………」

（ガツデエム!ノーリアクション!）

かなり取り乱しているらしい鈴音は、戻つて来るなり両手で片方づつ……黒乃と箒の胸をガシツと掴んだ。一夏をノンケに戻そうと画策している黒乃にとつてはフライングプレーだった訳だが、ノーリアクションである事に対して盛大なスラングを吐いた。

だがそれは黒乃の思い違いで、表情に出さないよう努めているだけであった。後で鈴音に何をいやらしい目で見ているんだ……と怒られるのを見越しての事だろう。それに気が付かない黒乃の中では、ますます一夏のホモ疑惑が膨らんでいく。

「はいストップ。目の毒だからそこまでね。」

「何よ……つて、近江先生？今ごろ会議とかじやなかったっけ。」

「ああ……何か僕つて居ない方が良いんだって。女の人だけじやないと話し辛い事でもあつたんじやないの？」

「ふくん……そんなもんかしら。」

相変わらず気配を消すのが上手な事だ。フラツと現れた鷹丸は、背後から鈴音の腕を掴んでバンザイさせるように2人の胸から引つpegした。教師陣が会議中である事を知っていた鈴音が不思議そうな顔で質問すると、当人は会議室から追い出されたのだと笑い飛ばす。

「た、助かりました……近江先生。」

「アハハ、あのまま続けさせるのは男として教師としてちよつとねえ。」

「それにしても、良く女子に捕まらずにここまで来れたな？」

「んく……お互い牽制でもしあつてるんだと思うよ。キミも話しかけられなかったでしよ。」

「ああ……それは確かに。」

胸を隠しながら箒が感謝すると、少しばかり苦笑いを浮かべながら大した事をしたわけではないと伝える。すると一夏には、素朴な疑問が浮かんだ。いくら鷹丸が隠密の心

得があるとは言え、この人数の女子の間を縫つて来たのは不可解に思えたからだ。

鷹丸が思っている事を伝えると、なんとなくだが一夏にも言いたい事は伝わった。証拠に遠巻きにいる女子達にチラリと視線を向けると、キャツキャとはしやぎながら、もしくはそそくさと一夏の視界から外れる。男2人は何処か困つた様子だ。

「せつかくだし、先生も一緒に遊びましょうよ。」

「本当かい？それじゃあお言葉に甘えて……うん？藤堂さん、どうして僕の腕を引つ張つて——」

（イツチーの事は任せた。俺の担当は鷹丸だからさ。）

鈴音が鷹丸を誘つたタイミングで、その手を引つ張る者が1人。そう……鷹丸の事もホモと思つている黒乃だ。どういふつもりなのかは知らないが、どうやら2人きりのシチュエーションを作りたいらしい。そしてちよつとした岩陰に辿り着くと、砂浜にザツと腰を下ろした。

「えと、藤堂さん？」

（ホラ鷹兄、コレ塗るらせたげるからさ……どうか戻つておいで。）

「日焼け止めクリーム？あゝ……それを僕に塗れつて事かな。あゝ……。あゝ……。……」

（黙つちやつた!?!何でだよ！喜んでよ！ちよつとシヨックなんですけど!?!）

黒乃に心底から惚れている鷹丸にとっては役得だが、少々困っているらしい。というのも、最近の黒乃がどうも自分にアプローチをかけているように思えてしまうからだ。つまるところ……想い人に攻めるのは良いが、逆になったとなればイマイチどうして良いのか解からないらしい。

「解つたよ、キミがそうご所望ならお安い御用さ。……少し水着を外してくれないかな？」

（オ、オーケー……は、外すよ？外すからね!?変なことしちやだよ!?）

「……………」

（だから何で黙るの!?う、う……恥ずかしいの我慢してるの……）

さきほどから鷹丸が黙るのを、黒乃は興味も無いからノーリアクションと解釈しているらしい。しかしその実態は、声が出せないほどに見惚れているのだ。前はしっかり押さえつつ、ビキニの紐を緩めて曝け出されている黒乃の背中……まるで白磁のような無垢。その無垢なる美しさは、全てを魅了するに違いない。

「藤堂さん、色白だもんね。これは確かに……焼けたら大変かも。じゃあ……塗るからね。」

（ど、どんと……いい!?ちよつと鷹兄……手つきやらしくないか?）

黒乃が男性を意識し始めたせい、やけに鷹丸の手つきがやらしく感じてしまうよう

だ。実際はそんな事は無く、単にぎこちなくなってしまうだけである。鷹丸は自身の煩惱と戦うかのように、勤めて無心でいるよう意識を集中。やがて黒乃の背中には、まんべんなく日焼け止めが広がった。

「……………うん、こんな感じで良いかな？」

（く、黒乃ちゃん……………キミの身体どうなってるの……………？せ、背中でも若干……………か、かか……………感じちやつてるんですけど……………？）

本人が気づいているかいないかは不明だが、鷹丸の掌が背中を這うたび微妙ながらも身を振らせてしまっていた。その事が更に鷹丸の動きをぎこちなくしていたのだが、どうにもそれどころではないらしい。しかしだ、いまいち手応えを感じられない黒乃は、続行の意思を示した。

（ホラ、腕とかふともも……………前意外は触らしてあげるから続けなさい！）

「え、ええ？手が届かないから僕に背中をやらせてたんじゃ……………」

（四の五の言わない！女の子の柔肌に触れるチャンスなんだから……………俺のを堪能してノーマルに戻ってちょうだい！）

鷹丸が無反応気味だった事が、黒乃のプライドを傷つけたのだろう。若干暴走しつつヤケクソのようで、自分の手の届く範囲も鷹丸にやらせる。しようがないからというか、そう言われてしまえば断れない。謎の申し訳なきを感じながらも、自分にとっては

好都合だと決意を固める。

(鶉さん……こういう場合は、何て発言するのが正しいんだい？……肌がスベスベ……いや、これはセクハラかな……。)

(た、鷹兄また黙っちゃった……。何？女の子に触るのがそんな嫌かな……？てか……んっ！ふ、ふともも……！)

気の利いた言葉が1つも出てこない鷹丸は、やはり黒乃からすると嫌々している風に見えるらしい。基本的にはアドリブの得意な鷹丸だが、こんな特殊なシチュエーションではなかなかそれが難しいらしく……。結局は、全身くまなく塗り終わるまで終始無言な2人であった。

第48話

「や〜……なんだか思わぬ時間を喰っちゃったねえ。」

（おう……それは本当に申し訳。）

「いや、何もそんなつもりで言ったわけじゃ……。あ、ほらあそこ……ビーチバレーで盛り上がってるみたいだよ。」

先ほどまであまり人目につかない場所に居た俺と鷹兄だったが、本格的に遊びに入ろうと辺りを散策していた。思い出すだけで顔が熱くなるが……本当に日焼け止めクリームを塗って貰うだけで時間を取らせてしまったな。思わずペコリと頭を垂れると、気にするなど言いながら話題を反らしてくれる。

鷹兄のそういう気遣いのできるところは好きだよ……。む、本当に盛り上がってるなあ……ちー姉が参加してるんだっけ？俺と鷹兄の足は、自然とそちらの方へと向かって行った。しかし、近づいてみて解った……実際のところは、楽しむ余裕があるのは観客だけだと。

「アハハ、完全に理不尽なパワーバランスだね。」

「そう思うんなら助けてくれ……。」

「お、近江先生……代わって差し上げてもよろしくてよ?」

「良ければ黒乃もお願いでできるかな……? 僕、運動は出来る方だけど……流石にアレはちよつと怖いというか……。」

どうやら3対3でビーチバレーをやっているようで、こちらのチームはイツチー、セシリー、マイエンジェル。チラリ、向こう側のコートを眺めてみると……。ちー姉、モツピー、ラウラたんという……。嫌がらせとも取れる組み合わせでさあ。まあ……スポーツに関するは任せときんさい。

「ハハハ……。じゃあオルコツトさん、僕と変わってくれと嬉しいな。」

(マイエンジェル、下がってて。)

「お、近江先生がそう仰るのなら……しつ、仕方ありませんわね。」

「えつと、黒乃……死なないで。」

そんな大げさな……と思つて再度向こう側を眺めてみるが、とんでもなく良い笑顔でちー姉が笑っておられる。あ、これは……本気出しておかないとダメな奴だ。うっし、さすれば胸の谷間につつこんでおいたヘアゴムを取り出してだね。唇で挟むようにして啜え、その間に髪を束ねてオーソドックスなポニーテールへ。それをヘアゴムで結んじやえば完成……つと。

「……………」

え、何……？やっぱり俺ってお呼びじゃないのかい。俺が髪を結いながらコートに入った途端に周囲がザワついたというかなんというか……。何かと思つて男性陣2人に視線を向けてみるが、イツチーには視線を反らされ鷹兄にはニヤニヤとした笑みを返される。……なんだこれ？

「か、髪を結う……たつたそれだけの行為であの色気……！姉様、貴女という人は……！」

「そうなのだ、黒乃の髪に関わる行為はいちいち色気がだな……。」

「何、それだけ藤堂も本気モードというわけだ。」

うん……？イツチー達や観客だけじゃなくて、ちー姉達もなんか言ってるな。ちー姉以外の2人は心なしか頬が紅いような気が……つて、よく見たら観客の皆さんも。日焼け……かなあ？でもこんな短時間でそんな……。まあ良いか、気にしないで始めようぜ。

「さて……現状考えうる最大戦力が揃ったわけだけど。藤堂さん、織斑くん、準備は良いかな？」

「アンタの実力が未知数だが、自信の現れで良いんだろ？だとすりや、俺はいつでも構わないぜ！」

（こつちもオーケーだよ鷹兄！）

「うん、その意気でないか。それじゃあお待たせしました織斑先生。ここから奇跡の逆転劇……お見せしますよ。」

「ハッ、言うじゃないか……お前の実力のほどは常々確かめようと思っていたし調度いい。」

え〜……10点先取で1セット。2先取で勝ちみたいだけ……現在は向こうが1セット取っててこちらが0……。2セット目進行中って事なだけで得点が……。8対3?ダブルスコアじゃないか。いや、むしろどうやって3点取った……。?まあ良いや、鷹兄の言う通り俺とイッチーが揃ってる時点で——最強の布陣だろうから。

「では行くぞ……。ハアッ!」

「おっと危ない。」

「!? 黒乃!」

（おしきた……。どっせい!）

ちー姉のとんでもない威力であろうサーブを、鷹兄は軽々レシーブして見せた。しかも……しつかりとイッチーがトスしやすい場所に計算して……。だ。その事に驚いて数瞬反応が遅れたイッチーだったが、危なげないトスでビーチボールをフワリと打ち上げる。それよりも前に俺はネット付近まで接近しているため、後は身体を反らして……。スパイク!

「なっ!?!は、速い……。」

「くっ、姉様……一筋縄ではいかんか。」

「焦るなお前達。急いては事をし損じる。」

ボールを思い切りスパイクすると、モッピーやラウラさんの合間を縫うように砂浜へ着弾した。俺の速攻が効いたのか、2人は反応にかなり遅れてしまったように見える。しかし、ちー姉が良い薬になってるな。今の一撃で動揺を誘えると思ったんだが。

「サーブだけど、誰が撃とうか?」

「俺はもう手の内読まれた感があるんだよ。というか千冬姉と箒が向こうだし……。」

「じゃあ、同じ理由で藤堂さんののも有効的じゃないね。それなら始めは僕が。」

「おい、遅滞行為は感心せんぞ。」

「はいはくい、なら今すぐにも。よつと!」

まあ即席で組んだチームだから作戦会議は多少必要なわけで……。それを解ってちー姉は煽る感じで言ったんだらうなあ。心理戦とかちー姉も得意そうだし。とにかく、ボールは鷹兄の手に渡った。そうしてそのまま豪快なサーブ……に見えたが、なんと鷹兄のサーブはかなり手前で落ちた。

「し、しまった!?!」

「体格的に不利なラウラを露骨に狙って……!」

「やるな……って素直に思うんだけど、この場合褒めて良いんだか……。」
「ハハハ、ヤだなあ。見事なトリックプレーって褒めるところじゃない。」

そう……思いきり撃つたはずなのに、どういうわけか手前にポスリと落ちるような軌道を描いたのだ。音が音だっただけに、ラウラたんは身構えてしまったのだろう。しかし……相当な手前で落ちるために拍子抜け。ちー姉かモツピーならリーチ的に届いたかも知れないが……148cmしかないラウラたんは無理を言っただけじゃない。

えげつないなあ……鷹兄。卑怯……とか言うつもりはないんだけど、どうにもモツピーは鷹兄の戦術を良しとしていないらしい。でもね、そう言う視線……ますますこの人にエンジンかけちゃうだけだよ。ほら……ニヤニヤし始めた。ま、俺は子供みたいで可愛いなく……なんて思いながら見てるけどね。

「フフ、そう来なくては面白くない。篠ノ之、ボーデヴィツヒ。」

「は、はいっ！」

「アレの捻くれた性格から弾き出される戦術は、お前ら石頭2人には厄介だろう。油断せずに臨め。その上で騙されたとしても気にする事は無い。たかだかお遊びだ。」

カ、カリスマエ……。腕組みしながらそう言うちー姉に対して、圧倒的な人格者ぶりを感じた。……こう言っちゃなんだけど、原作じゃただただ理不尽な人ってイメージで描写されがちだからねえ。これで2人も更に気合が入った事だろう。俺も油断のない

よういかないと。

その後は向こうに1点与えてしまったが、破竹の勢いで俺達の反撃は進む。1点も取られてはいけないという緊張感が、俺達の結束を高めたのだろう。そしてやがて……9対9のイーブンまで追いついた。先に10点目を制した方が、このセットも制する。サーブはこちらから……と言う事は、半分先行は向こうチームと言う事だ。

「近江先生、最後のサーブ……小細工抜きにしようぜ。」

「うん？……うん、そうだね。やっぱり同性だからかな、キミの言いたい事は良く解るよ。」

「じゃ……頼んだぞ。」

「オーライ。頼まりました……つと♪」

（おおく……誰か忘れちゃいないかい？）

鷹兄とイツチーは何か、男同士の友情を感じさせる会話を繰り広げた。いや、ホモホモしい内情かも知れんけど。どちらにしたって俺を仲間外れとか、良くないなあそういうのは……。混ざろうとしたのだが、その前に鷹兄はサーブを打ってしまった。……はっ!? す、すごい威力! 鷹兄……全力を隠してたな!

「お前達、なんとかして私にスパイクさせろ。」

「了解! しくじるな、箒! フツ!」

「いいぞラウラ！織斑先生！」

「よろしい、上出来だ。はああああっ！」

きた……ちー姉のスパイク！今まで俺達が追いつけたのは、ちー姉が本気を出していなかったから。その証拠に、俺達が加わってから……ちー姉は1度もスパイクを打っていないかった。まるで何か……追い詰められるのを楽しんでいるかのような、そんな感じだ。

恐らくこのスパイクは本気も本気。着弾点は俺の近くか！ザツと砂浜を蹴り上げ着弾点まで移動すると、手を組み腕を突き出し……しつかりとレシーブの構えを取る。そうしてスパイクが俺の腕に……着弾！う、うぐう……凄く痛い！だが……この痛みこそが俺の生きがい故！フハハハッ！

(……ほわあ!?)

足に浮遊感を察知して、ふと足元へと目をやってみた。するとどうだ……足が本当に少し浮いている。ち、ちー姉！人吹き飛ばす威力のでるスパイクって何よ!?こ、このままではレシーブが乱れる……。一か八か、俺は少し足の浮いた状態から上体を反らす。……ダジャレじゃないかね！

(おお……らあっ！)

「すげえ……流石は黒乃！」

「感心してる場合じゃないよ織斑くん！」

「ああ、解ってる！」

俺のとっさの行動が功を奏したのか、ぶつかったボールの威力を利用し、その場で後方に宙返りするような形でレシーブに成功した。多少乱れたが、ボールはきちんと空中へ打ち上がっている。さて、後は任せたよ男衆く……。あたしや今ので気力ごともつてかれたからさ。

「近江先生！」

「でやあああああ！」

「!?!」

あゝ……鷹兄の目が見開かれてるって事は、本気も本気って事だな。イツチーの上げたトスから速攻で打ち出された鷹兄のスパイクは、モツピーとラウラたんを棒立ちにさせるほどの威力があった。ボールが砂浜を叩いてしばらく、シンとした空気が流れるが……一斉に黄色い声が響く。

「キヤーツ！近江先生かつこいいー！」

「本当に逆転されるとはな……。」

「後もうーセット残ってますし、決着をつけましょうか。」

「そうしたいのは山々だが、生憎時間がない。お前達！昼を食う時間を見失っても知ら

んぞ！」

それまでイケメン2人への歓声がわいていたが、ちー姉の言葉で蜘蛛の子を散らすように解散していく女子達。俺もイッチーを筆頭としたいつもの皆に引き連れられ、砂浜を駆けていく。結局のとこ海に入れてないが、昼を食べたらまた出直そうかな。じゃあ今は、何も考えずに走れ！

◇

「まったくとんでもないですね。」

「ああ、インパクトの瞬間に後方へ跳び……衝撃を柔らげつつ宙返りしてレシーブとは。」

皆が一斉に散ってしまっただけで、僕は思わず千冬さんに話しかけていた。ちなみに僕は黒乃ちゃんを凄いと云ったのではなく、衝撃を柔らげないと返せないスパイクを打った千冬さんをとんでもないって云っただけだな。まあ……どちらにしたってアレを返しちゃう黒乃ちゃんも黒乃ちゃんだけど。

「……………」

「どうかしました?」

「……研究室へ籠ってばかりのモヤシではないようだな。」

「その事ですか。ええ、まあ……それなりに命を狙われた経験もありますし。」

僕がいつもの様子でそう言うと、千冬さんは悲痛……とも違うし、同情……とも違う。そんな微妙な表情をほんの数瞬だけ見せた。なんとというか、僕の頭が邪魔だったのか欲しかったのか。まあ……これもある意味では企業戦略だよな。僕が近江重工を更に大きくしたのもまた確かだし。調子に乗ってるつもりはないけど……。

どちらにせよ、僕の存在が社に、皆に迷惑をかけているのは確かだろう。だから僕は護身術とかで身体は鍛えてる。後は……セルフセキュリティというか。僕の周囲に対する警備は嚴重だ。プログラムとかも全部自分で組んだから大変だったのを良く覚えてる。

「動けるに越した事はないだろう。……良い心構えだ。」

「ハハハ……それでも織斑先生や藤堂さんには足元も及ばないでしょうけどね。」

逆を言えば、規格外の人達以外とはそれなりに戦えるって事だけど。最近で言うところ……うくん、ボーデヴィツヒさんあたり？にはなんとか勝てるんじゃないだろうか。勿論ISじゃなくて生身の話。見かけに騙されての発言ではないが、どうにも彼女と戦うってのはまず気が引ける。

「近江……Iつだけ聞かせろ。お前の黒乃を殺せる相手を探すという発言……あの真意

は何だ？」

「藪から棒ですね。言葉通りの意味と取って貰って結構ですけど。」

「今は誤魔化すな。私はお前と黒乃の話をしている。」

僕と黒乃ちゃん……ね。それはつまるところ、将来にも関わる話と言いたいのだろう。あまり腹の中を見せるのは好きじゃないんだけどねえ……。だけどこの場合は話しておかないと。なんとたつて、僕だけじゃない……僕と黒乃ちゃんの未来を決定づけてしまうかも知れない質問だから。

「……あくまで比喩ですよ。本当に死なれても困りますし。」

「だろうな。お前が黒乃との未来をどこまで想定しているのかは知らんが……というより知りたくもない。」

うわあ、ストリートな言い方。別に聞かれたって言わなかったろうし……問題ないけどね、うん。とにかく黒乃ちゃんの夢は僕の夢な訳で……刹那を乗りこなしてくれた時点でベタ惚れなわけですよ。だから黒乃ちゃんの目標は、僕がサポートしたい……けど、まあ死なない範囲でね。

「だが近江……その黒乃は——」

「あれ？意外ですね……。弟さんは話さないんじゃないかと思ってましたけど。」

「……お前の耳にも入っていたか。確かに私は一夏には話して貰っていない。一夏が私

に話さんだろう……そう思ったらしい篠ノ之が伝えに来た。」

僕は直接口には出さないが、黒乃ちゃんの中に潜むもう1人の黒乃ちゃんに関して話題をもつていった。死に場所を求めているのは、当然ながらも1人の方だろう。その意見は千冬さんと合致していたようだけど、そもそも彼女が黒乃ちゃんの多重人格について知っている事が意外だった。

じゃあ僕がどうやって知ったかって？……まあそれは置いておこうよ。一夏くんの性格上、千冬さんには話さないだろうと思つてたからねえ。それを知れば、千冬さんはきつと責任を感じてしまうだろうから。だけど篠ノ之さん経由かあ……あの子としては、千冬さんに隠すべきでは無いと思つたんだろう。

「その黒乃ちゃんは、黒乃ちゃんじゃない……とでも言いたいんですか？」
「……………」

「無理に回答は強要しませんよ。僕が貴女の立場なら同じく複雑な心境になるでしょう。ただ……僕にはあまり関係ない話です。僕は……彼女の全てを愛します。例えばそれが、残忍で冷酷な人格だろうとね。」

もう1人の黒乃ちゃん……と言う事は、彼女……いや、多重人格は性別も違う場合があるらしいから彼かも知れない。とにかく、もう1人のと言うくらいならば……僕にとつてそれは間違いなく黒乃ちゃんだ。文字通りに彼女の全てを愛するのならば、ある

意味で当然の事と言える。

「……お前が羨ましいよ。私は、出来れば黒乃の中から居なくなつてほしいと思つてゐるのにな。」

「それは悪い事じゃありませんよ。むしろそう思つて当然です。」

「その当然でない事を易々としてゐるのだから、お前が羨ましいと言つたんだ。近江……もし黒乃にその気があるのなら、あいつはお前に任せよう。」

さつきから続いていた質問みたいなものは、僕に対する試験みたいなものだったみたいだ。生身でそれなりに戦える事、そして……黒乃ちゃんの抱えた問題に対する回答。それがどちらも千冬さんには好感触だったのかも。嬉しさのあまりに飛び跳ねてしまふそうだが、そこは堪えて感謝の言葉を述べる。

「だが勘違いするなよ。黒乃はあくまで——」

「一夏くんを……ですよね？大丈夫、そんなの僕が一番良く解つてますよ。」

「……それを解つていながら、愚弟にヒントを与えるようなマネをしたのか？」
「アレ……聞いてました？ハハハ、参つたな……。まあ……はい、そうですね。」

一夏くんにはかなり厳しい事を言つただろう。だけどそれは、いわゆる愛の鞭みたいなものさ。IS学園に来て、2人を観察して解つた事がある。あの2人は、非の打ちどころのない相思相愛だつてね。でも一夏くんは……黒乃ちゃんと1歩踏み込んだ関係

になろうとしているようには見えない。

この間の反応を見る限りでは、自覚すらあまりなさそうだ。だからこそ……ズルズルと関係を引きずったままでいようって、無意識にそう思っているんじゃないかな。でも黒乃ちゃんは、最近それでも無いみたい。だから僕に思わせぶりの態度を取っているのだろう……それはきつと——

「黒乃ちゃんは、一夏くんに引き留めて貰いたかつたんだと思います。そいつは俺の女だつて、そう言つて欲しかたんだと思います。一夏くんの……特別になりたいんだと思います。」

「あの馬鹿にその資格は無い。」

「ハハハ……今の時点ではそうみたいです。僕は黒乃ちゃんが幸せになれるなら、噛ませ犬になる覚悟は出来てますよ。でも、僕の彼女に対する愛は本物だ。とりあえず今は……僕のターンつて事で。」

「その許可をやると今言つたんだ。ただ近江……ウサギには気をつけろ。」

黒乃ちゃんを悪女……なんて言う気はないけど、きつと最近の僕に対するアプローチは……あの子なりの最終手段なんだろう。僕に気があるような態度を取つて、一夏くんを不安にさせると……。……あんまり効果は無いみたいだね。前も言つけど……やっぱりそこに關しては許せない。黒乃ちゃんがそんなにも苦しんでるっていうのに

……彼ときたら。

まあ覚悟はできてるけど、嘸ませ犬になる気なんて毛頭ないけどね。彼女が苦しまなように、絶対に振り向かせてみせる。だって僕は、惜しみない愛をキミへ送るつもりだよ……黒乃ちゃん。なんて考えてたら、いつの間にやら千冬さんに置いてきぼりを喰らっちゃってるよ。

それにしても最後の忠告……やっぱり僕はマークされちゃってるかあ。多分だけど、今ごろも何処かで監視していたりするんだろう。ま、僕には関係ないけどね……ご自由にどうぞ。貴女がどう動いたって、僕は死んでも黒乃ちゃんに喰らいついて見せますから。

……さて、動いたらお腹が空いたし……僕もお昼にしようかな。結構な時間が開いちやっただけど、多分まだまだ間に合うだろう。後はどうにかして黒乃ちゃんと一緒に食事を……。そう考えながら花月壮へ戻ろうとすると、なんとなく視線を感じた。僕はいったん足を止め、視線を感じた方へ満面の笑みを浮かべ……再度歩を進め始める。